

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第138集

# 源道遺跡発掘調査報告書

国道45号久慈バイパス関連遺跡発掘調査

(財) 岩手県文化振興事業団  
埋蔵文化財センター

## 源道遺跡発掘調査報告書 正誤表

頁	行	誤	正
16	18	N - 66° - W	N - 66° - E
31	下10	炭化材の配列	炭化材の配列
45	下5	炭火材	炭化材
63	5	口縁部はヨコナデ内面は	口縁部はヨコナデ体部は
137	4	両側	西側
	下5	3.6cm	3.6m
160	下8	可憳性	可能性
200	1	F 13 - 2 住	N 13 - 2 住
212	11	後半期を	後半期と
	14	i類	i類
	17	i類	i類
236	表1 の10	0767	0.767

# 源道遺跡発掘調査報告書

国道45号久慈バイパス関連遺跡発掘調査

## 序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,300カ所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にともなう社会資本の充実も重要な一施策であります。特にも幹線道路網の整備は、産業経済開発の大動脈として、多方面から期待されるところであります。

このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告の久慈市源道遺跡は、久慈川左岸の丘陵斜面に立地し、昭和62・63年の発掘調査によって縄文時代の狩り場跡や奈良・平安時代の集落跡であることが明らかになりました。特に奈良・平安時代の住居跡は、沿岸部の古代の集落変遷を解明するうえで貴重な資料になるものであります。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご協力、ご援助を賜りました建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所、久慈市教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より謝意を表します。

平成元年5月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 中 村 直

## 例　　言

1. 本報告書は、岩手県久慈市源道第13地割11—2 ほかに所在する源道遺跡の調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、国道45号久慈バイパス建設に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会文化課と建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所の協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。
3. 岩手県遺跡台帳に登載されている遺跡番号はJ G20—1131、調査略号はGD—87、GD—88である。
4. 調査期間・調査面積・調査担当者は、次のとおりである。  
第1次：昭和62年7月1日～10月30日、5,219m<sup>2</sup>、佐々木嘉直、酒井宗孝  
第2次：昭和63年7月2日～10月12日、3,000m<sup>2</sup>、佐々木嘉直、高橋義介

5. 整理期間と整理担当者は、次のとおりである。

第1次：昭和62年11月1日～63年3月31日、佐々木嘉直

第2次：昭和63年11月1日～平成元年3月31日、佐々木嘉直

6. 下記の項目の分析・鑑定は、次の方々・機関に依頼した。(敬称略)

- |                 |                                   |
|-----------------|-----------------------------------|
| (1) 火山灰・土器の胎土分析 | 三辻利一 (奈良教育大学)                     |
| (2) 種子同定        | パリノ・サーヴェイ株式会社                     |
| (3) 貝類同定        | 佐藤正彦 (陸前高田市立博物館)<br>熊谷 賢 (東北学院大学) |
| (4) 石質鑑定        | 佐藤二郎 (地質コンサルタント)                  |
| (5) 樹種鑑定        | 早坂松次郎 (岩手県木炭協会)                   |

8. 野外調査・室内整理に際して、以下の方々から御教示・御協力をいただいた(敬称略)。  
宇部保則 (八戸市教育委員会)、面代民義・千葉啓蔵 (久慈市教育委員会)、佐々木和久 (株式会社久慈琥珀)、中野 保 (野田村教育委員会)、関 豊 (二戸市教育委員会)、高田和徳 (一戸町教育委員会)

9. 野外調査では、佐々木仁太氏をはじめとする久慈市の方々に従事していただいた。

10. 調査にかかる諸記録、遺物等の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

# 本文目次

序	
例 言	
I . 調査に至る経過	1
II . 遺跡の位置と環境	2
1 . 遺跡の位置	2
2 . 地形概観	2
3 . 遺跡付近の地形	2
4 . 基本土層	7
5 . 周辺の遺跡	8
III . 調査と室内整理の方法	11
1 . 調査方法	11
2 . 室内整理方法	11
IV . 調査の結果	15
1 . 概要	15
2 . 遺構と伴出遺物	15
(1) 陷し穴状遺構	15
(2) 壴穴住居跡	24
(3) 焼土遺構	171
(4) 円形周溝	174
(5) 土坑	175
(6) 炭窯	186
3 . 遺構外の出土遺物	189
V . まとめ	194
1 . 陷し穴状遺構	194
2 . 古代の竪穴住居跡	195
3 . 土坑	204
4 . 出土遺物	205
5 . 源道遺跡のあゆみと集落の変遷	221
付編 1 源道遺跡出土火山灰の蛍光X線分析	234
2 源道遺跡出土土器の蛍光X線分析	237
3 源道遺跡K47住居跡出土の動物遺存体について	241
4 源道遺跡出土資料種子同定報告	242
5 源道遺跡M25土坑出土の灰層の植物珪酸体・灰像分析	243

## 図版目次

第1図	D 9 陥し穴状遺構	16	第35図	L 17住居跡（遺物 1）	50
第2図	D 10 陥し穴状遺構	16	第36図	L 17住居跡（遺物 2）	51
第3図	G 10 陥し穴状遺構	17	第37図	M 17住居跡（遺構）	53
第4図	F 11 陥し穴状遺構	17	第38図	M 17住居跡（遺物）	55
第5図	E 12 陥し穴状遺構	18	第39図	I 19住居跡（遺構・遺物）	57
第6図	F 12 陥し穴状遺構	18	第40図	K 22住居跡（遺構・遺物）	58
第7図	L 26 陥し穴状遺構	19	第41図	K 22住居跡（遺物）	59
第8図	I 40 陥し穴状遺構	19	第42図	J 24住居跡（遺構）	61
第9図	K 40 陥し穴状遺構	20	第43図	J 24住居跡（遺物 1）	62
第10図	H 41 陥し穴状遺構	20	第44図	J 24住居跡（遺物 2）	63
第11図	K 43 陥し穴状遺構	21	第45図	L 25住居跡（遺構）	65
第12図	N 9 陥し穴状遺構	21	第46図	L 25住居跡（遺物）	66
第13図	L 11 陥し穴状遺構	22	第47図	N 26住居跡（遺構・遺物）	69
第14図	M 11 陥し穴状遺構	22	第48図	I 27住居跡（遺構・遺物）	71
第15図	N 13 陥し穴状遺構	23	第49図	K 27住居跡（遺構・遺物）	73
第16図	P 13 陥し穴状遺構	23	第50図	K 27住居跡（遺物）	74
第17図	M 24 陥し穴状遺構	24	第51図	J 28住居跡（遺構）	75
第18図	D 9 住居跡（遺構・遺物）	25	第52図	J 28住居跡（遺物）	76
第19図	E 9・E 10 住居跡（遺構 1）	27	第53図	L 28住居跡（遺構）	79
第20図	E 9・E 10 住居跡（遺構 2）	28	第54図	L 28住居跡（遺物 1）	80
第21図	E 9・E 10 住居跡（遺物）	30	第55図	L 28住居跡（遺物 2）	81
第22図	G 12 住居跡（遺構 1）	32	第56図	J 37住居跡（遺構・遺物）	83
第23図	G 12 住居跡（遺構 2）	33	第57図	I 41住居跡（遺構・遺物）	84
第24図	G 12 住居跡（遺物 1）	35	第58図	I 43住居跡（遺構）	86
第25図	G 12 住居跡（遺物 2）	36	第59図	I 43住居跡（遺物）	87
第26図	E 13 住居跡（遺構）	39	第60図	I 45住居跡（遺構・遺物）	89
第27図	E 13 住居跡（遺物 1）	40	第61図	G 47住居跡（遺構）	91
第28図	E 13 住居跡（遺物 2）	41	第62図	G 47住居跡（遺物）	93
第29図	J 13 住居跡（遺構・遺物）	43	第63図	H 47住居跡（遺構・遺物）	95
第30図	J 13 住居跡（遺物 1）	44	第64図	K 47住居跡（遺構・遺物）	96
第31図	J 13 住居跡（遺物 2）	45	第65図	O 5 住居跡（遺構・遺物）	98
第32図	G 15 住居跡（遺構・遺物）	46	第66図	N 7 住居跡（遺構）	100
第33図	G 15 住居跡（遺物）	47	第67図	N 7 住居跡（遺物）	101
第34図	L 17 住居跡（遺構）	49	第68図	H 9 住居跡（遺構）	103

第69図	H 9 住居跡（遺物）	105
第70図	J 9 住居跡（遺構 1）	107
第71図	J 9 住居跡（遺物 1）	109
第72図	J 9 住居跡（遺構 2・遺物 2）	111
第73図	J 9 住居跡（遺物 3）	112
第74図	L 9 住居跡（遺構）	114
第75図	L 9 住居跡（遺物）	115
第76図	M10 住居跡（遺構）	117
第77図	M10 住居跡（遺物 1）	119
第78図	M10 住居跡（遺物 2）	120
第79図	N10 住居跡（遺構）	122
第80図	N10 住居跡（遺物）	123
第81図	Q11 住居跡（遺構 1）	125
第82図	Q11 住居跡（遺構 2）	126
第83図	Q11 住居跡（遺物）	127
第84図	J 12 住居跡（遺構・遺物）	130
第85図	J 12 住居跡（遺物）	132
第86図	P 12 住居跡（遺構）	134
第87図	P 12 住居跡（遺物）	136
第88図	M13 住居跡（遺構 1）	138
第89図	M13 住居跡（遺構 2）	139
第90図	M13 住居跡（遺物）	141
第91図	N13-1 住居跡（遺構 1）	143
第92図	N13-1 住居跡（遺構 2）	144
第93図	N13-2 住居跡（遺構 1）	146
第94図	N13-2 住居跡（遺構 2）	147
第95図	N13 住居跡（遺物 1）	149
第96図	N13 住居跡（遺物 2）	151
第97図	N13 住居跡（遺物 3）	153
第98図	N13 住居跡（遺物 4）	154
第99図	P 14 住居跡（遺構・遺物）	156
第100図	Q 14 住居跡（遺構）	158
第101図	Q 14 住居跡（遺物）	159
第102図	N22 住居跡（遺構・遺物）	161
第103図	M23 住居跡（遺構）	163
第104図	M23 住居跡（遺物 1）	165
第105図	M23 住居跡（遺物 2）	166
第106図	M23 住居跡（遺物 3）	167
第107図	M23 住居跡（遺物 4）	168
第108図	M24 住居跡（遺構・遺物）	170
第109図	焼土遺構（遺構・遺物）	172
第110図	円形周溝（遺構・遺物）	174
第111図	E 10 土坑	175
第112図	F 10-1 土坑	175
第113図	F 10-2 土坑	176
第114図	F 11 土坑	177
第115図	F 13 土坑	177
第116図	H 13 土坑	178
第117図	M26 土坑	178
第118図	L 28 土坑	179
第119図	N 6 土坑	179
第120図	N 7 土坑	180
第121図	O 7 土坑	180
第122図	M 9 土坑	180
第123図	N 10 土坑	181
第124図	N 11 土坑	181
第125図	N 12 土坑	181
第126図	P 13 土坑	182
第127図	Q 13-1 土坑	183
第128図	Q 13-2 土坑	183
第129図	Q 13-3 土坑	183
第130図	Q 13-4 土坑	184
第131図	P 14 土坑	184
第132図	Q 14-1 土坑	185
第133図	Q 14-2 土坑	185
第134図	M25 土坑	186
第135図	土坑（遺物）	187
第136図	F 36 炭窯	188
第137図	遺構外出土遺物(1)	190
第138図	遺構外出土遺物(2)	192
第139図	遺構外出土遺物(3)	193

図 1 遺跡位置図	3
図 2 遺跡地形図及び縦断面	5
図 3 土層柱状図	7
図 4 遺構・土器実測図凡例	12
図 5 遺構配置図	13
図 6 陥し穴状遺構の長軸径・短軸径・深さの分布	194
図 7 陥し穴状遺構概念図	194
図 8 住居跡床面積分布	196
図 9 住居跡の柱穴配置	201
図10 カマド方位分布	202
図11 カマド位置分布	203
図12 煙道部縦断面模式図	203
図13 土坑の長軸径・短軸径・深さの分布	204
図14 長方形土坑の分布	204
図15 ロクロ不使用土師器口径・器高分布と分類	206
図16 奈良時代土師器集成図(1)	209
図17 奈良時代土師器集成図(2)	210
図18 奈良時代土師器集成図(3)	211
図19 器高・底径の指數	213
図20 平安時代土器集成図(1)	215
図21 平安時代土器集成図(2)	216
図22 平安時代土器集成図(3)	217
図23 平安時代土器集成図(4)	218
図24 種子痕の付着する土師器	220
図25 奈良時代の集落の変遷	222
図26 平安時代の集落の変遷	223

## 表 目 次

表 1 発掘調査遺跡一覧表	9
表 2 奈良・平安時代住居跡 一覧表(1)(2)	197・198
表 3 奈良時代住居跡土師器 器種別分類表	208
表 4 平安時代住居跡土器器種別分類表	214
表 5 数字・大きさを表わす墨書き器	219
表 6 掲載遺物一覧表	226～233

## 写真図版目次

写真図版 1 遺跡遠景ほか	247
写真図版 2 遺跡遠景（第1次）ほか	248
写真図版 3 遺跡遠景（第2次）ほか	249
写真図版 4 陥し穴状遺構(1)	250
写真図版 5 陥し穴状遺構(2)	251
写真図版 6 陥し穴状遺構(3)	252
写真図版 7 D 9・E 9住居跡	253
写真図版 8 E 10住居跡	254
写真図版 9 G 12住居跡	255
写真図版10 G 12・E 13住居跡	256
写真図版11 E 13・J 13住居跡	257
写真図版12 G 15・L 17住居跡	258
写真図版13 M 17住居跡	259
写真図版14 I 19・K 22住居跡	260
写真図版15 J 24住居跡	261
写真図版16 L 25住居跡	262
写真図版17 N 26・K 27住居跡	263
写真図版18 I 27住居跡	264
写真図版19 J 28住居跡	265
写真図版20 L 28住居跡	266
写真図版21 J 37・I 41住居跡	267
写真図版22 I 43住居跡	268
写真図版23 I 45住居跡	269
写真図版24 G 47住居跡	270
写真図版25 G 47・H 47住居跡	271
写真図版26 K 47住居跡・焼土遺構	272

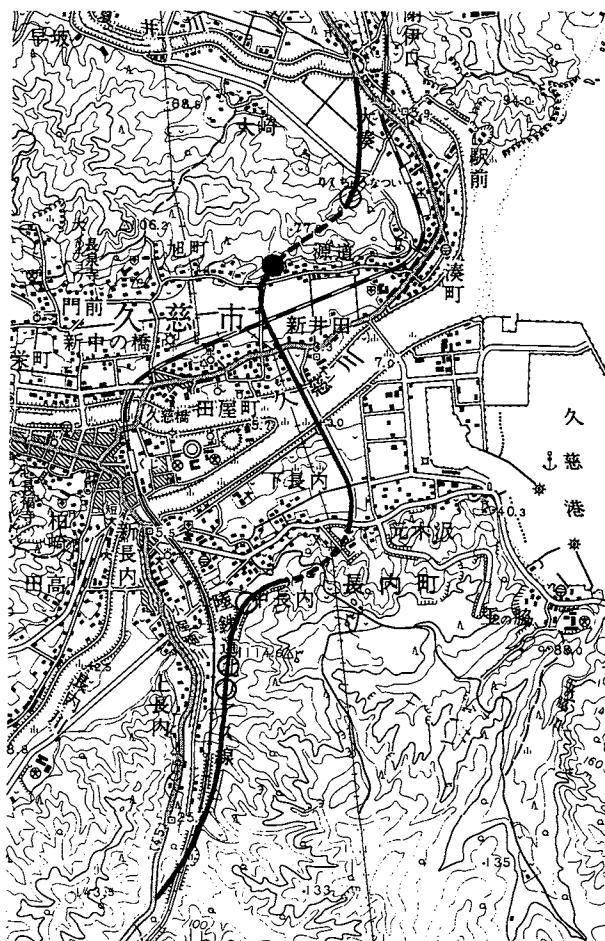
写真図版27	O 5 住居跡	273	(遺物)	306
写真図版28	N 7 住居跡	274	写真図版61	J 24・L 25住居跡 (遺物) 307
写真図版29	H 9 住居跡	275	写真図版62	N 26・I 27住居跡 (遺物) 308
写真図版30	J 9 住居跡	276	写真図版63	K 27・J 28住居跡 (遺物) 309
写真図版31	L 9 住居跡	277	写真図版64	L 28住居跡 (遺物) 310
写真図版32	M10住居跡	278	写真図版65	J 37・I 41・I 43住居跡 (遺物) 311
写真図版33	M10・N 10住居跡	279	写真図版66	I 45・G 47住居跡 (遺物) 312
写真図版34	Q11住居跡	280	写真図版67	G 47・H 47・K 47住居跡他 (遺物) 313
写真図版35	J 12住居跡	281	写真図版68	N 7・H 9 住居跡 (遺物) 314
写真図版36	P 12住居跡	282	写真図版69	H 9・J 9 住居跡 (遺物) 315
写真図版37	M13住居跡(1)	283	写真図版70	J 9 住居跡 (遺物) 316
写真図版38	M13住居跡(2)	284	写真図版71	J 9 住居跡 (遺物) 317
写真図版39	N 13住居跡(1)	285	写真図版72	L 9・M 10住居跡 (遺物) 318
写真図版40	N 13住居跡(2)	286	写真図版73	M 10住居跡 (遺物) 319
写真図版41	Q 14住居跡	287	写真図版74	N 10住居跡 (遺物) 320
写真図版42	P 14・焼土遺構	288	写真図版75	Q 11住居跡 (遺物) 321
写真図版43	N 22住居跡	289	写真図版76	J 12住居跡 (遺物) 322
写真図版44	M 23住居跡	290	写真図版77	J 12・P 12住居跡 (遺物) 323
写真図版45	M 23・M 24住居跡	291	写真図版78	P 12・M 13住居跡 (遺物) 324
写真図版46	O 11円形周溝	292	写真図版79	M 13・N 13住居跡 (遺物) 325
写真図版47	土坑(1)	293	写真図版80	N 13住居跡 (遺物) 326
写真図版48	土坑(2)	294	写真図版81	N 13住居跡 (遺物) 327
写真図版49	土坑(3)	295	写真図版82	N 13住居跡 (遺物) 328
写真図版50	土坑(4)	296	写真図版83	N 13住居跡 (遺物) 329
写真図版51	土坑(5)	297	写真図版84	P 14・Q 14・N 22・M 23住 居跡 (遺物) 330
写真図版52	F 36炭窯	298	写真図版85	M 23住居跡 (遺物) 331
写真図版53	D 9・E 9・E 10住居跡 (遺物)	299	写真図版86	M 23住居跡 (遺物) 332
写真図版54	G 12住居跡 (遺物)	300	写真図版87	M 23・M 24住居跡等 (遺物) 333
写真図版55	G 12住居跡 (遺物)	301	写真図版88	土坑・円形周溝 (遺物) 334
写真図版56	E 13住居跡 (遺物)	302	写真図版89	遺構外出土遺物 335
写真図版57	J 13住居跡 (遺物)	303	写真図版90	遺構外出土遺物 336
写真図版58	G 15・L 17住居跡 (遺物)	304	写真図版91	土師器の種子痕(1) 337
写真図版59	L 17・M 17住居跡 (遺物)	305	写真図版92	土師器の種子痕(2) 338
写真図版60	I 19・K 22・J 24住居跡			

## I. 調査に至る経過

一般国道45号は、仙台市から陸中海岸沿いを北上して青森市に至る総延長509.8kmの路線である。久慈市においては主要幹線道路であるが、近年の交通量の増大に伴う機能低下のため、昭和46年に久慈バイパスの建設が検討され、昭和48年に路線が決定された。バイパスの起点となる久慈市長内町17地割から終点の久慈市夏井町大崎まで総延長7.8km、幅員12~16mであり、昭和56年から事業に着手された。

これに関連する埋蔵文化財の取扱いについては、工事着手後に新たに発見された上野山遺跡、小屋畠遺跡、中長内遺跡について建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所と岩手県教育委員会との間で協議され、昭和57年に上野山遺跡、昭和58年に小屋畠遺跡、昭和59年に中長内遺跡の調査を実施した。調査主体は前二者が岩手県埋蔵文化財センター、後者は久慈市教育委員会である。

その後、県教育委員会は三陸国道工事事務所長あての昭和61年8月20日付け「教文第291号」により、昭和62年度における開発事業に伴う発掘調査について照会し、該当する源道遺跡と明神遺跡について現地確認を行った。これにより県教育委員会文化課は、源道遺跡の調査を昭和62年度における岩手県文化振興事業団の委託事業として昭和62年7月1日付けの委託契約により当埋蔵文化財センターは調査に着手することとなった。しかし、用地内の買収未了に伴い、さらに昭和63年度までの継続調査となり、昭和63年7月1日付け契約により未了区域の調査に着手した。



久慈バイパス路線と遺跡位置図(1:50,000)

## II. 遺跡の位置と環境

### 1. 遺跡の位置

源道遺跡は、岩手県久慈市源道第13地割11—2 ほかに所在し、東日本旅客鉄道八戸線久慈駅から北東約1.6km地点に位置する。国土地理院発行の5万分の1地形図「久慈」図幅中では、北緯40度12分、東経141度47分付近に位置する。

遺跡は源道と旭町の界付近にあり、調査範囲の南縁は市道の北側の崖付近までである。遺跡に至る経路は国道45号から新井田付近で北進する経路が最も近く、ほかに湊町付近で西進する経路などがある。

### 2. 地形概観

久慈市は岩手県の北東部に位置し、北上山地北東縁辺部にあたる。東は太平洋に面し、北は種市町、大野村、西は山形村、南は岩泉町、野田村に接している。

久慈市から八戸市に至る北部陸中海岸には九戸高原とも呼ばれる古い海岸段丘が発達し、洪積世高位から低位までの段丘が太平洋に向かってゆるく傾斜している。段丘面は、内陸ほど開析をうけて丘陵化し、原面の残りが悪く特に夏井川以南ではその傾向が強い。海岸段丘面の細分については米倉伸之（1966）の研究があり、九戸段丘に相当する上位段丘面は、標高の高い方から水無面、広野面、三崎面、侍浜面に分けられている。これらの丘陵地は鳥谷川、夏井川、久慈川、長内川、宇部川などによって開析され、流域に低地が形成されている。その中でも夏井川、久慈川、長内川によって形成された低地は主要な水田地帯である。遺跡の大半は、海を望む丘陵地や段丘上に位置し、その中でも種市、有家、麦生の各段丘面（照井一明・1982）に載るもののが比較的多い。特に久慈バイパス関連の小屋畠、上野山、中長内の各遺跡は種市段丘面に載る。

### 3. 遺跡付近の地形

源道遺跡は、夏井川と久慈川の間に形成された丘陵地の南斜面に載る。この丘陵地は最も古い段丘面の1つであり、広野付近の標高200m位の所に平坦面が残る以外は開析が進み尾根状を呈し、西から東に標高が低くなり、東端は源道付近で舌状に張り出す。この丘陵地の南下位斜面では標高15～40m付近に小規模な緩斜面が発達している。本遺跡もこの緩斜面に載る。調査区は東西45m、南北170mの範囲であるが、地形上3区分される。

A区は調査区の北東部を占める標高30～40mの緩斜面である。現況は山林と桑畠である。かつて一部は果樹園として利用されたこともあり、遺構が最も多く検出された地形面である。遺

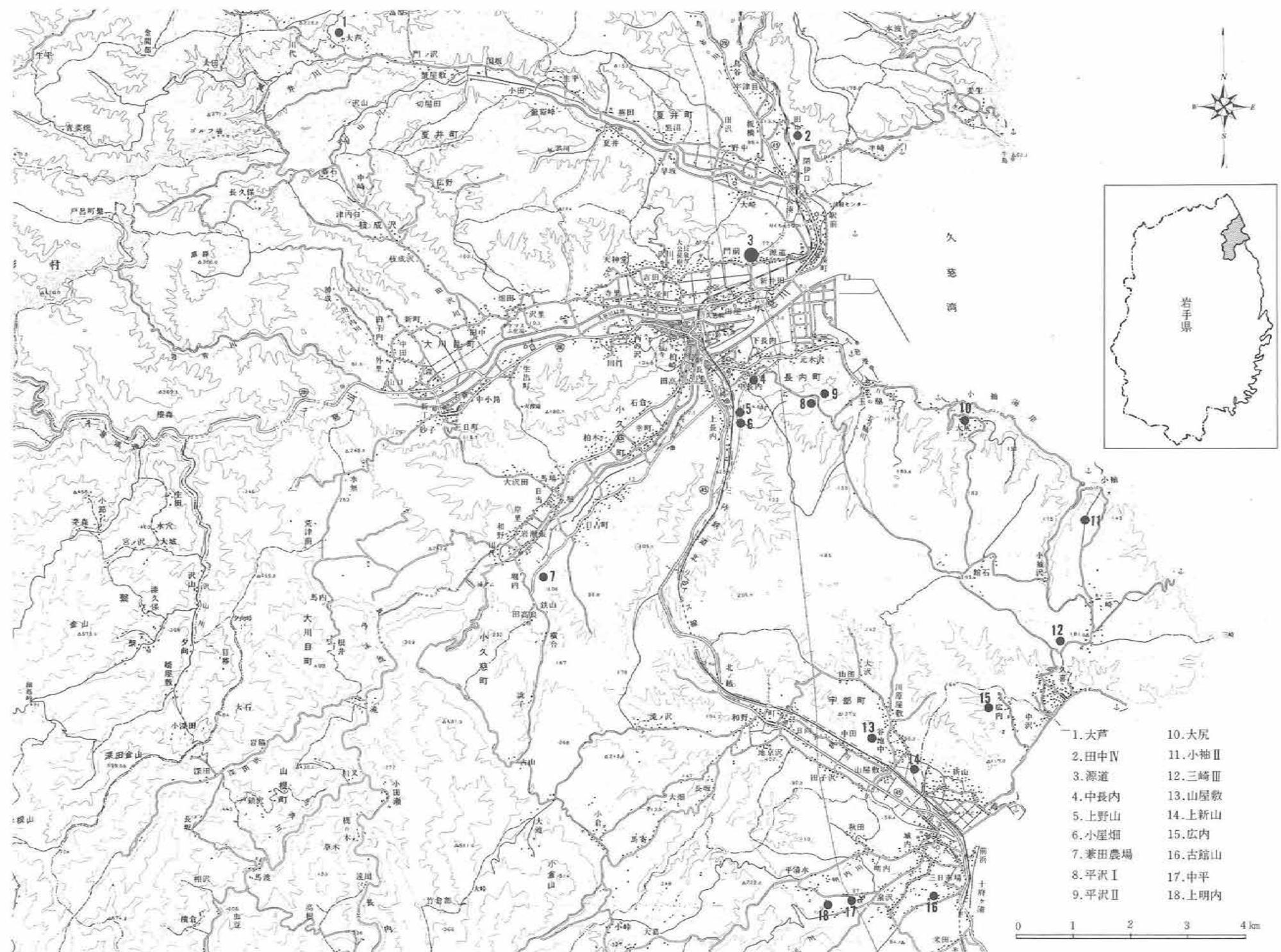


図1 遺跡位置図

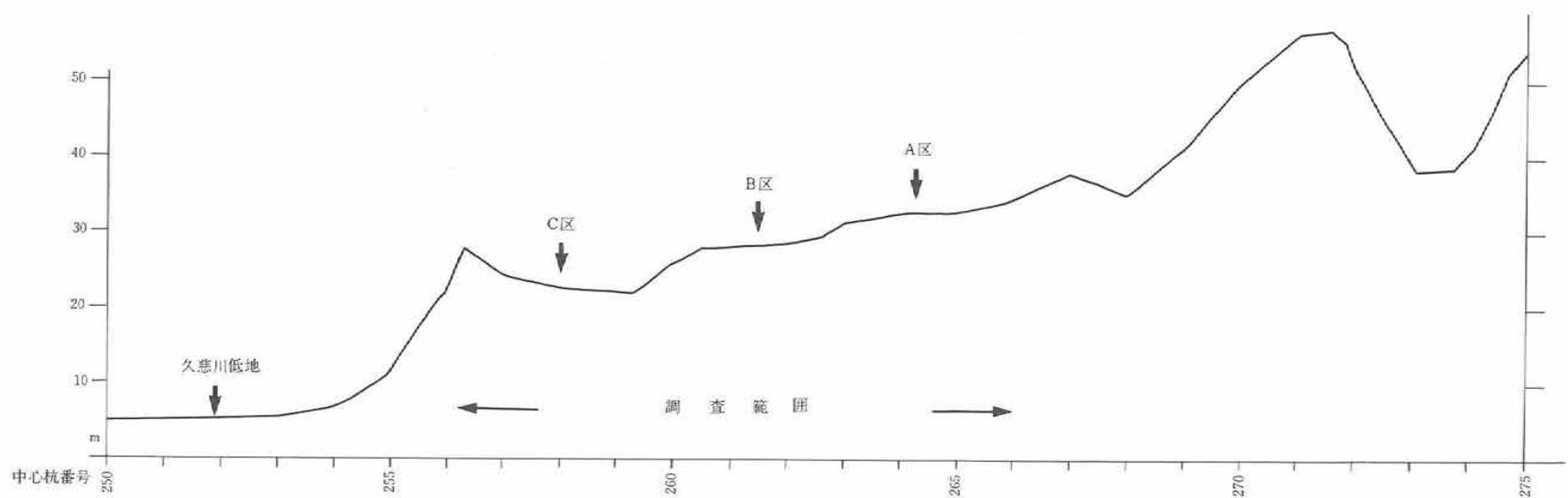
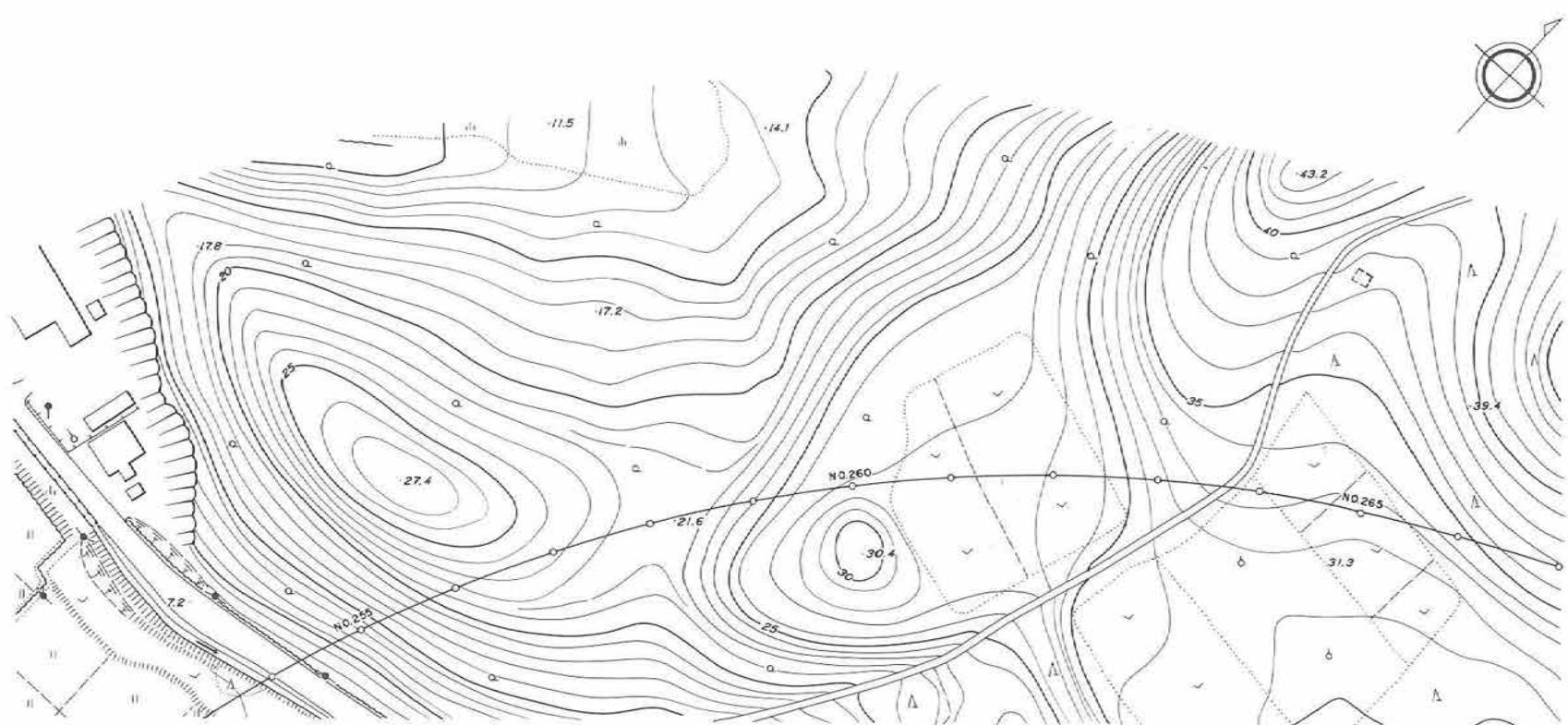


図2 地形図及び縦断図

構は、D 9 区を頂点とし、O 5 区、Q 14 区、I 19 区を結ぶ扇形の範囲に分布しており、5 ~ 8 度の傾斜面に占地している住居跡が多い。

B 区は調査区の中央部を占める標高 27 ~ 29 m の平坦面であり、現況は畠地で一部に植林されている。遺構は A 区に次いで多く検出された地形面である。遺構はやや標高の高い南東部に集中している。

C 区は調査区の南西部を占める標高 22 ~ 27 m の尾根状の地形面であり、現況は山林である。B 区との間には比高差 7 ~ 8 m の急斜面がある。また、南側の久慈川低地との比高差は最大 20 m である。

本遺跡が載る地形面は種市段丘に区分されるが、地形は、地すべり地形のため複雑で変化に富んでいる。

#### 4. 基本土層

源道遺跡付近の基本層序は、岩手県北部に分布する第 4 系の層序とほぼ同じと思われるが、基本層序を特徴づける各種火山灰の堆積状況ははっきりしない。全体的に褐色森林土壤が卓越するが、地形面の変化が大きいこともあり、基本土層も調査区ごとに異なる。概略は以下のとおりである。

I 層 表土は全体的に薄く、地形区 A 区の東半は黒色土、西半は褐色土が多い。B 区では南半は褐色土、北半は暗褐色土が多い。C 区では暗褐色土である。

II 層 白頭山火山灰 (2.5 Y R 6/6 明黄褐色) や十和田 a 降下火山灰 (5 Y R 6/3 オリーブ黄色) を含む暗褐色～黒色土層である。主として奈良時代の住居跡の埋土上位にレンズ状に堆積しているが、厚さは 2 ~ 3 cm と薄く、不連続な場合が多い。白頭山火山灰と十和田 a 降下火山灰の間は 1 ~ 2 cm であり、両火山灰の降下の時間差は少ないものと思われる。本遺跡では火山灰が散見される場合は住居跡である確率が高く、検出の手掛かりとなった。

III 層 黒色土 (10 Y R 1.7/1 ~ 2/1) 地形区 A 区の東端の下位斜面でみられる。住居跡の埋土中～下位にみられる。

IV 層 暗褐色～黒褐色のシルト質土である。地形区 B 区や A 区の一部にみられる再堆積層であり、中摺浮石に類似している。

V 層 褐色浮石 (粒径 2 ~ 5 mm) を含む暗褐色～黒色土層である。浮石は南部浮石に類似し、5 ~ 15 % の比率で含まれる。比較的かたくしまつ

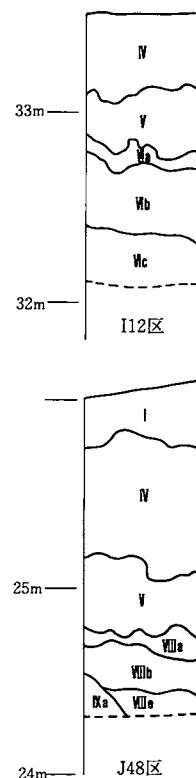


図 3 土層柱状図

ている。地形区A区やC区の傾斜地で部分的に見られる。

VII層 褐色～明褐色の粘土質土である。色調、粘性、しまりなどで細分される。遺跡では最も広く分布しており、地形区A区、B区の遺構はこの層まで掘り込まれている場合が多い。

VIII層 碾層 褐色土のまじる碾層は斜度の大きい地形面などに散見されるほか、波状の地すべり地形面を埋めるように不連続に堆積している。一部の住居跡では床面となっている。

IX層 灰白色浮石質火山灰 シラス状の厚い堆積層である。堅くしまるが水を含むと崩れやすく、粘性もある。地形区C区では露出している所もある。

## 5. 周辺の遺跡

発掘調査された遺跡に限定し、本遺跡を含めて周辺の遺跡について概観する。遺跡について位置を図1に示すとともにその内容を一覧表にした(表1)。遺跡番号は図と表が照合しており、1～14は久慈市、15～18は南に隣接する九戸郡野田村に所在する。資料は平沢I遺跡(三浦謙一・1988)のものを一部修正したものである。

### (1) 繩文時代

早期：本遺跡から貝殻文系土器片が2点出土している。平沢I遺跡では早稻田4類と推定される破片が1点表採されている。

前期：平沢I遺跡で前葉の住居跡6棟とピット13基が検出されている。

土器は、纖維を含むと報告されている上野山II遺跡を含めて8遺跡から出土している。包含層を調査した大尻遺跡では、円筒下層b式～同d式の土器が多く出土している。また、同遺跡ではそれらに伴い琥珀が出土している。野田村の上明内遺跡では円筒下層a式、広内遺跡では円筒下層d式の土器が出土している。

中期：土器を出土するのは2遺跡だけであり、分布は希薄である。遺構も検出されていない。大尻遺跡では円筒上層a式と同b式、三崎I遺跡では円筒上層b式～同e式、大木7式、同8式の土器が出土している。

後期：前葉に分類されている住居跡が上野山遺跡で3棟、平沢I遺跡で2棟検出されている。図示していないが野田村の根井貝塚遺跡では後葉の住居跡が2棟検出されている。

土器は7遺跡から出土している。初頭～前葉の土器は平沢I・中長内・小屋畠・上野山・上野山II・三崎IIIの各遺跡、中葉の土器は中長内・三崎IIIの各遺跡、末葉の土器は大芦遺跡から出土している。

晩期：住居跡は中葉～後葉に位置づけられる1棟が上野山II遺跡で検出されている。土器は6遺跡から出土している。大芦遺跡は大洞B-C式とC<sub>1</sub>式の土器が主体を占める。小屋畠遺跡では大洞C<sub>1</sub>式、上野山II遺跡では大洞C<sub>2</sub>式と同A式、源道遺跡では大洞A式、上野山遺跡で

表1 発掘調査遺跡一覧表

(番号は遺跡位置図と同じ)

No.	遺跡名		縄文時代				弥生	古墳	奈良	平安		中・近世		周溝	備考		
			住居跡		ピット	陥し穴				ピット	住居	ピット	掘立				
			早期	前期		後期	晩期	不明									
1	大芦	遺構													三崎段丘？		
		遺物			○	○									標高160m		
2	田中Ⅳ	遺構					14								山麓地及び他の緩斜面		
		遺物				○				土師器甕破片6点					標高35~50m		
3	源道	遺構					17			22	○	21	○		1	種市段丘	
		遺物	○			○				琥珀・鉄製品		琥珀・鉄製品			標高21~40m		
4	中長内	遺構			8	29	37			23	(33)	29	不明住居4	1	2	種市段丘	
		遺物	○	○				○							標高31~42m		
5	上野山	遺構		3	1	5			4						種市段丘 標高21~28m		
		遺物		○	○				琥珀					○			
5	上野山 (II)	遺構		1						2					同一遺跡尾根 標高15~40m		
		遺物	○	○	○			○	鉄製品								
6	小屋畑	遺構				○			2		(推9)				種市段丘		
		遺物	○	○	○			○		鉄製品					標高30~38m		
7	兼田農場	遺構			7	51				8	5±				種市(二子)段丘及び有家段丘		
		遺物		○	○			○							標高50~70m前後か		
8	平沢Ⅰ	遺構	6	2		25	38		2	1	14	8			麦生段丘		
		遺物	○	○				○	琥珀		琥珀・鉄製品				標高98~108m		
9	平沢Ⅱ	遺構					5								平沢Ⅰに隣接		
		遺物															
10	大尻	遺構													有家段丘及び麦生段丘		
		遺物	○	琥珀	○										標高60~110m内		
11	小袖Ⅱ	遺構				6	6								三崎段丘		
		遺物	○						土師器片1点						標高157~163m内		
12	三崎Ⅲ	遺構				4	7								三崎段丘		
		遺物	○	○				○							標高175~182m		
13	山屋敷	遺構							1						河岸段丘		
		遺物							○						標高42m		
14	上新山	遺構					1		2						河岸段丘		
		遺物			○				鉄製品		○				標高42m		
15	広内	遺構															
		遺物	○														
16	古館山	遺構							8						種市段丘		
		遺物						○	○						標高26~38m		
17	中平	遺構							1?		14				海岸段丘		
		遺物						○			琥珀・鉄製品				標高40~70m		
18	上明内	遺構							1		1						
		遺物	○						○		○						
遺構合計			6	5	1	9	76	176	古墳~奈良5 奈良63 平安96 不明4				1	3			

※ 中長内遺跡の住居跡不明の8棟は縄文時代前期か後期である。

は大洞A'式の土器が出土している。

その他：中長内遺跡では前期あるいは後期と推定される住居跡8棟、上野山遺跡では時期不明の住居跡1棟が検出されている。

以上のほかに縄文時代に属することが考えられる遺構に陥し穴状遺構がある。9遺跡から176基検出されている。形態は本遺跡と同様の溝状のものが優占するが、円筒形のものが兼田農場遺跡に16基、中長内遺跡に4基、田中IV遺跡に1基ある。

### (2) 弥生時代

遺構は検出されていない。土器は8遺跡から出土している。中長内遺跡から前半期の土器が少量出土しているほかは、末葉の天王山式（系土器）や赤穴式とされている土器である。また北海道系の土器である後北式土器が2遺跡から出土している。中長内遺跡の土器は後北C式、古館山遺跡は後北C<sub>2</sub>式と同D式である。

### (3) 古代

遺構が所属する時代に不明な点があるため、ここでは古墳時代～平安時代を一括して古代として扱い、必要に応じて時代別に取り上げる。

古代の遺構や遺物が発見されているのは13遺跡である。田中IV・小袖IIの2遺跡は土師器の破片が若干出土しているだけである。住居跡は11遺跡から168棟（推定を含む）検出されている。その内訳は、古墳～奈良時代に属するのが上野山遺跡4棟、平沢I遺跡が1棟である。奈良時代に属するのが中長内遺跡が23棟、源道遺跡が22棟、古館山遺跡が8棟、小屋畠・上野山II・上新山の3遺跡が各2棟ずつ、平沢I・山屋敷・上明内・中平の4遺跡が1棟ずつであり、合計10遺跡で63棟である。平安時代に属するのは中長内遺跡が29棟、源道遺跡が21棟、平沢I・中平の2遺跡が14棟ずつ、小屋畠遺跡が9棟（推定含む）、兼田農場遺跡が8棟、上明内遺跡が1棟であり、合計7遺跡で96棟である。また、時期不明の住居跡が中長内遺跡で4棟ある。

住居跡が検出された以上の遺跡は所属のちがいから三大別される。①は平安時代以前の住居跡だけしか検出されない遺跡で上野山・上野山II・山屋敷・上新山・古館山の各遺跡である。このうち、山屋敷・上新山の2遺跡は多くの住居跡が確認されており、時期の異なる住居跡が含まれている可能性がある。②は平安時代にも引き続き集落として利用される遺跡であり、平沢I・中長内・源道・小屋畠・中平・上明内の各遺跡である。③は平安時代に新たに集落が営まれる遺跡であり、兼田農場遺跡がある。

この時代の特徴的な遺物に琥珀がある。琥珀が出土する住居跡は、中長内遺跡は29棟、平沢I遺跡は12棟、源道遺跡は11棟である。

### III. 調査と室内整理の方法

#### 1. 調査方法

##### (1) 地区割

調査対象区域内の三陸国道工事事務所の設定した中心杭No257（基準点1）とNo263を結ぶ線を基準線とし、No257から120mの地点に基準点2を設定した。基準点の平面直角座標は、

基準点1 X = 22511.021, Y = 80955.794, H = 24.649m

基準点2 X = 22612.333, Y = 81020.092, H = 31.975m である。基準点1を中心に基準線に直交する4m間隔の区画を設定し、北端から東へアルファベット、南へ算用数字を用い、それを組み合わせて地区の呼称とした。遺構の名称は検出された地区名を頭にし、例えばG12住居跡、L28土坑、E13陥し穴状遺構のように表した。

##### (2) 粗掘・精査

調査区の現況は山林や桑畠であるため雑木の撤去や焼却作業からはじめ、地区割と併行して幅4mの試掘トレンチを入れながら遺構検出を進めた。変化に富む地形に加え大きな木根が多いため人力で表土除去作業を行い、バックホーは土山の移動に使用した。

検出された遺構には、遺構名を付し検出作業終了後一斉に精査を行った。精査にあたっては住居跡は4分法、土坑、陥し穴状遺構などは2分法を原則としたが、残存状況の不良な住居跡の場合は2分法で行った。出土遺物は、遺構名、地区名、層位等を記入して取り上げた。

##### (3) 実測・写真撮影

実測は簡易遺り方測量を行った。実測図は縮尺20分の1を基本としたが、焼土やカマド断面は10分の1で行った。遺構のレベルは1m間隔を原則とし必要に応じて計測箇所を設けている。

写真撮影は、埋土断面・全景・遺物出土状況等を撮影した。6×7cm版1台（白黒）と35mm版2台（白黒、カラーリバーサル）の3台を1セットとして使用しているが、6×7cm版については省略している場合もある。

#### 2 室内整理方法

##### (1) 作業手順

室内整理は、現場で残してきた遺物の注記から始め、次いで接合・復元、石膏入れの順に進めた。これらの作業が終った段階で遺物の仕分・登録を行い、報告書掲載分について写真撮影を行った。その後、遺物実測、土器拓本、遺物・遺構トレースの順に作業を進め、最後に図版や写真図版を作成した。以上の作業と併行して計測、諸鑑定、原稿作成を行い、報告書に掲載した。

## (2) 図版・写真図版

遺構図版の縮尺は、焼土遺構と住居跡のカマド断面は30分の1、その他は60分の1である。

遺物図版の縮尺は、須恵器、土師器の甕類は4分の1、土師器の壺類は3分の1、鉄器・剝片石器・琥珀は現寸、礫石器は2分の1を原則としている。個々の縮尺については遺物一覧表に記している。また、炭化材の断面は10分の1である。

挿図における表現方法は、焼土は■■■■、炭化材は□□□□、礫は○○○○、土器は△△△△、攪乱は△△△△、掘り過ぎや重複は▨▨▨▨、白頭山火山灰は■■■■、十和田a降下火山灰は■■■■■■、カマド構成土は▨▨▨▨で表現した。柱穴は PP<sub>1</sub>……PP<sub>4</sub> のように表現した。以下凡例を図4に示している。

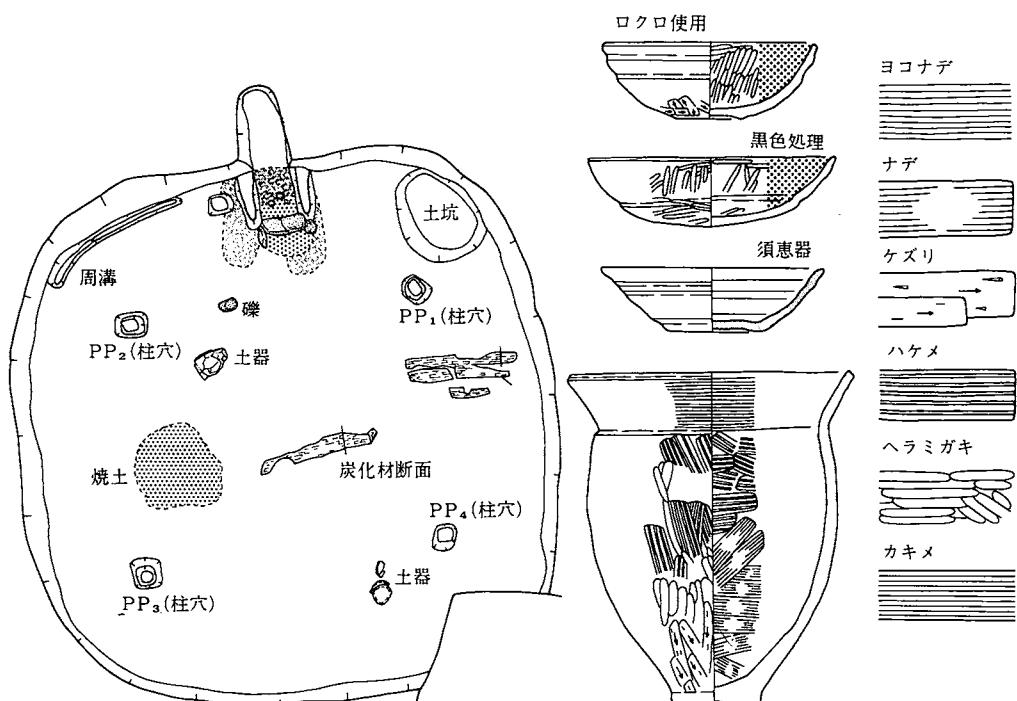
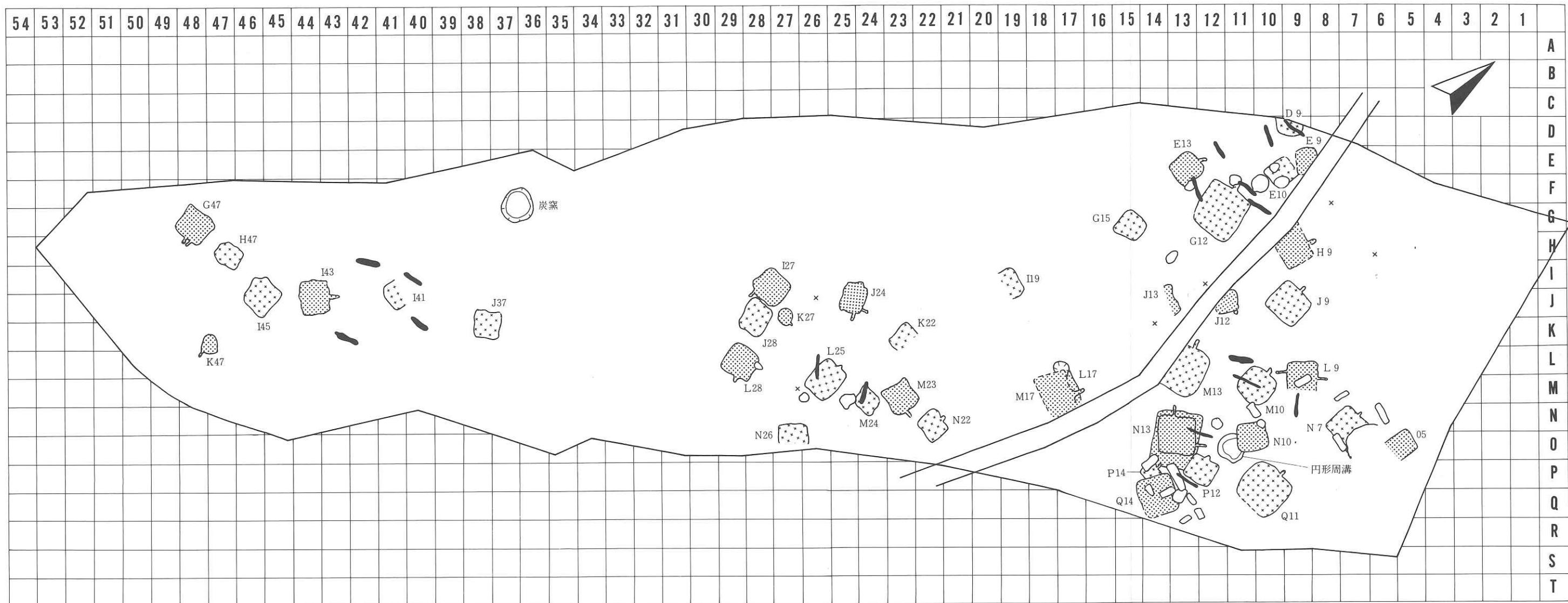
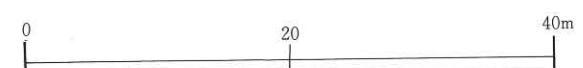


図4 遺構・土器実測図凡例



奈良時代住居跡 平安時代住居跡 X 土坑 圖示 陷し穴

図5 原道遺跡遺構配置図



## IV. 調査の結果

### 1. 概要

調査対象区域のうち、62年度は買収の遅れた北東部の桑畠と調査事務所用地を除く5,219m<sup>2</sup>を調査し、63年度に残りの3,000m<sup>2</sup>を調査した。

調査の結果、縄文時代の陥し穴状遺構17基、古代（奈良・平安時代）の竪穴住居跡43棟、焼土遺構6箇所、円形周溝1基、土坑24基、現代の炭窯1基が検出された。

陥し穴状遺構は、平面形が細長く溝状を呈するものであり、2基～数基単位で並ぶように分布している。時期は、出土遺物はないが古代の住居跡や土坑の下位から検出されたものが9基あることから、縄文時代のものと思われる。

古代の竪穴住居跡は、奈良時代22棟、平安時代21棟である。奈良時代の住居跡は、急斜面を除き調査区全体に分布し、埋土に白頭山火山灰や十和田a降下火山灰を伴って検出された例が多い。一方、平安時代の住居跡は、奈良時代の住居跡の周囲に重複をさけながら分布しており、埋土に前述の火山灰が伴う例はN13-1住居跡だけである。

焼土遺構は住居跡と同じ面で検出されている。このうち2箇所の焼土は厚さが薄く、断面の実測と写真撮影を省略している。

円形周溝は1基だけである。時期は、平安時代の住居跡に切られていることから奈良時代と思われる。土坑は、平面形が円形、橢円形、長方形を呈するものである。このうち長方形の土坑は住居跡を切っている例が多い。

出土遺物の総量は40箱余である。奈良、平安時代の土師器が90%以上を占める。器種は、甕、壺が多い。復元できた甕は7点あり、いずれも無底のものである。須恵器は、長頸壺2点、甕と壺が各1点であり、平安時代の住居跡3棟から出土している。琥珀は11棟の住居跡から20点余り出土しているが、加工品は1点だけである。鉄製品は20点出土しており、刀子が多い。このほかの遺物は少量であるが、縄文土器、石器がある。縄文土器片の中に早期の貝殻文土器が2点ある。石器は、砥石4点、石斧1点、磨石2点、石鎌12点、石匙1点がある。

なお、記述にあたり器種のみ記しているものは土師器である。

### 2. 遺構と伴出遺物

#### (1) 陥し穴状遺構

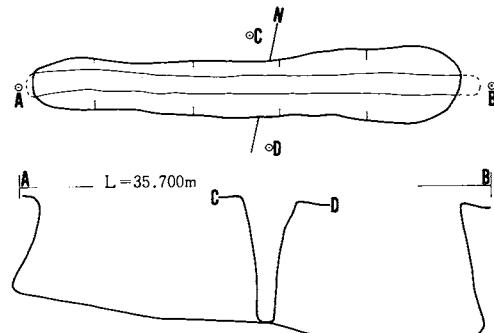
地形区別にみると、A区で11基、B区で2基、C区で4基、合計17基検出された。いずれも平面形が細長い溝形のタイプである。検出状況をみると、C区の4基は表土を除去した段階で黒色の輪郭が現われたが、A・B区の場合は検出面では地山との区別がつきにくく、13基のう

ち9基までが住居跡や土坑の精査の過程で検出された。出土遺物はないが遺構との切り合い関係から、時期は縄文時代と思われる。

#### D 9 陥し穴状遺構（第1図、写真図版4）

調査区の北東部に位置し、地形区A区のD 9住居跡の床面を掘り下げた段階で検出された。平面形は細長い溝形であり、長軸はN—79°—Eである。規模は、開口部径346×46cm、底部径364×14cm、深さは中心部で98cmである。短軸の断面形は開口部の狭いV字形である。長軸の断面形は両端とも内傾し、台形である。底部は地山に沿って西から東に6°ほど傾き、凹凸が若干ある。底部に杭跡はない。

埋土は、VI層起源の褐色土の単層である。出土遺物はなく時期は特定できないが、奈良時代の住居跡の床面を30cmほど掘りさげた段階で検出されていることから、縄文時代と推定される。

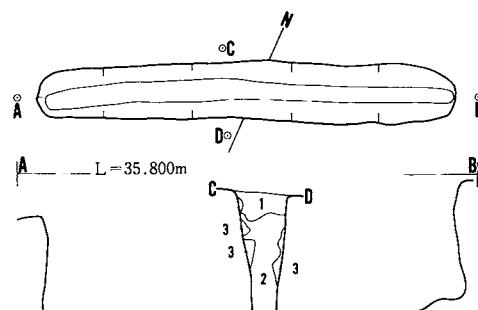


第1図 D 9 陥し穴状遺構

#### D 10 陥し穴状遺構（第2図、写真図版4）

調査区の北東部に位置し、D 9 陥し穴状遺構の南2.6mの地点で検出された。平面形は細長い溝形であり、長軸はN—66°—Wである。規模は、開口部径336×46cm、底部径326×16cm、深さは中心部で104cmである。短軸の断面形は、上半は逆台形、下半は長方形であり、全体的にやや漏斗状である。長軸の断面形は、開口部付近が外傾するほかは内傾気味でフラスコ状である。底面は中央部で最も深く両端が若干浅い。底部に杭跡はない。

埋土は3層に細分され、上位、下位とも粘性のない暗褐色土であり、上位には黄褐色浮石が極少量まじる。壁際にはややしまった褐色の壁崩落土が少量みられる。出土遺物はなく時期の特定はできないが、D 9、E 12、F 12の3基の陥し穴状遺構と同時期に存在していたものと推定される。



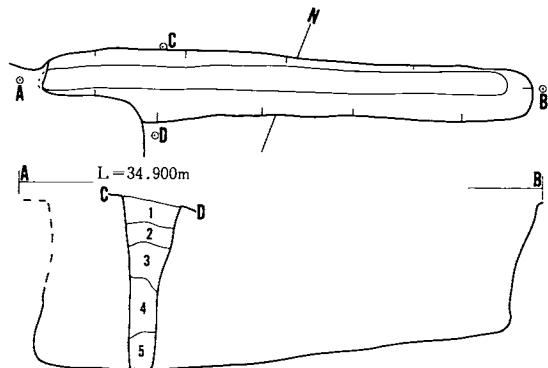
1. 10YR 3/3 暗褐色 黄褐色浮石1%以下、ややしまる。
2. 10YR 3/4 暗褐色 粘性しまりともなくもろい。
3. 10YR 4/4 褐色 壁崩落土でややしまる。

第2図 D 10 陥し穴状遺構

### G 10陥し穴状遺構（第3図、写真図版4）

調査区の北東部に位置し、G 12住居跡の北東隅の壁面で検出された。1m北にはF 11陥し穴状遺構がある。平面形は細長い溝形であり、長軸はN—70°—Eである。南西端は、壁上半がG 12住居跡によって切られている。規模は開口部径(394)×48cm、底部径372×20cm、深さは中心部で136cmである。短軸の断面形は、上半は幅の狭い逆台形、下半は長方形であり、全体的に漏斗状気味である。長軸の断面形では、北東端は外傾気味、南西端は直立気味である。底面は北東から南西に12°ほど傾く。底部に杭跡はない。

埋土は5層に細分され、上位から褐色、暗褐色、黒褐色の順であり、VI層起源の暗褐色土が多い。出土遺物はなく時期の特定はできないが奈良時代の住居跡に切られていることなどから縄文時代と推定される。



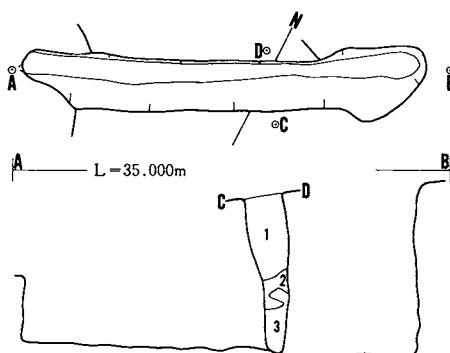
1. 7.5YR 4/4 褐色 粘性しまりともなくもろい。
2. 10YR 3/4 暗褐色 1よりもしまり暗褐色ブロックまじる。
3. 10YR 3/3 暗褐色 黄褐色土まじる、ややしまる。
4. 7.5YR 3/4 暗褐色 黄褐色土まじる、しまりない。
5. 10YR 3/2 黒褐色 黑褐色土ブロックまじる、しまりない。

第3図 G 10陥し穴状遺構

### F 11陥し穴状遺構（第4図、写真図版4）

調査区の北東部に位置し、F 10—1土坑とF 11土坑の精査中に下位壁面付近で遺構の両端が検出された。1m南にはG 10陥し穴状遺構がある。平面形は細長い溝形であり、長軸はN—63°—Eである。2つの土坑に切られているが、規模は、開口部径322×40cm、底部径314×14cm、深さは中心部で124cmである。短軸の断面形は、開口部が極めて狭いV字形、長軸の断面形は長方形である。底面はほぼ水平であり、杭跡はない。

埋土は上位、下位とも暗褐色土であり、上位はややしまり、下位はしまりがない。出土遺物はなく時期の特定はできないが、奈良時代の土坑に切られていることから、G 10陥し穴遺構と同様縄文時代と推定される。



1. 10YR 3/4 暗褐色 黄褐色浮石微量、ややしまる。
2. 10YR 3/4 暗褐色 壁崩落土の黄褐色ブロックまじる。
3. 10YR 3/4 暗褐色 粘性しまりともなくもろい。

第4図 F 11陥し穴状遺構

### E 12陥し穴状遺構 (第5図、写真図版4)

調査区の北東部に位置し、D 10陥し穴状遺構とF 12陥し穴状遺構のほぼ中間で検出された。

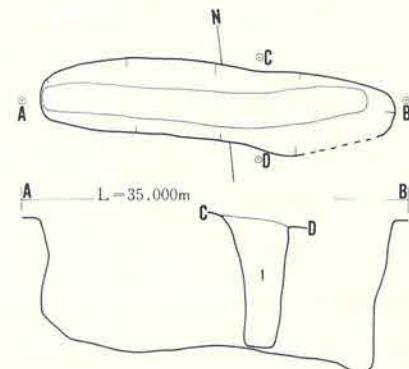
D 10とは6.6m、F 12とは4.8m離れている。平面形は細長い溝形であり、長軸はN—84°—Wである。規模は、開口部径284×60cm、底部径256×26cm、深さは中心部で102cmである。短軸の断面形は縦長の逆台形である。長軸断面形の両端は下半が直立～やや内傾し、上半は外傾し、ややフ拉斯コ状である。底面はやや凹凸があり、東半分が10～20cmほど深い。底部に杭跡はない。

埋土は褐色土の单層である。出土遺物はなく時期の特定はできないが、他の陥し穴状遺構と同様縄文時代と推定される。

### F 12陥し穴状遺構 (第6図、写真図版4)

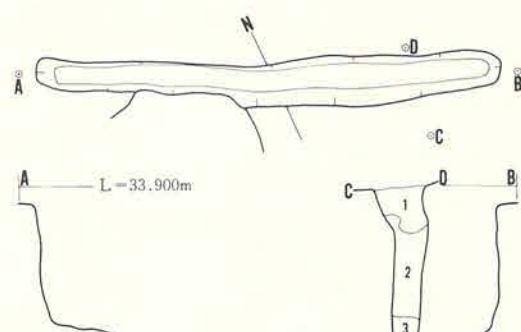
調査区の北東部に位置し、G 12住居跡とE 13住居跡の間にあり、両住居跡とF 13土坑の精査中に検出された。両住居跡の壁面付近から精査したところ、両者はつながり一つの遺構となつた。遺構の両端付近の上位は住居跡や土坑で切られているが、平面形は細長い溝形であり、長軸はN—65°—Wである。規模は、開口部径(372)×54cm、底部径348×18cm、深さは中心部で106cmである。短軸の断面形は上半は逆台形気味、下半は長方形であり、全体として漏斗状である。長軸の断面形は両端が直立気味であり、長方形である。底面は若干凹凸があるがほぼ水平である。底部に杭跡はない。

埋土は3層に細分され、上位、下位とも褐色土であり、上位には黄褐色浮石がみられる。下位ほどしまりがない。出土遺物はなく時期の特定はできないが、G 12住居跡、E 13住居跡、F 13土坑よりは古く、同一地形面に並んでいるD 9、D 10、E 12の各陥し穴状遺構とともに、縄文時代と推定される。



1. 10YR 4/6 褐色 VI層起源の混土。

第5図 E 12陥し穴状遺構



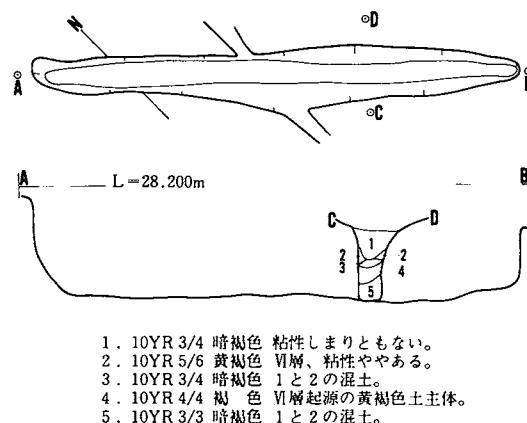
1. 7.5YR 4/4 褐色 粘性しまりともない。  
2. 7.5YR 3/4 暗褐色 黄褐色浮石 1%以下。  
3. 7.5YR 4/6 褐色 しまりなくもろい。

第6図 F 12陥し穴状遺構

### L 26陥し穴状遺構（第7図、写真図版5）

調査区の中央部に位置し、地形区B区のL 25住居跡の床面を掘り下げた時点で検出された。遺構の上位2分の1は住居跡に切られているが、平面形は細長い溝形であり、長軸はN—49°—Wである。規模は、開口部径(392)×48cm、底部径378×18cm、深さは北西側で80cmである。短軸の断面形は、上半は再堆積層に覆われており明瞭ではないが逆台形と思われる。下半は長方形であり、全体として漏斗状である。長軸の断面形では両端とも僅かに外傾気味である。底面は、南東側で10cmほど緩く下方に彎曲するほかはほぼ水平である。底部に杭跡はない。

埋土は5層に細分され、暗褐色土と褐色土の互層からなる自然堆積層である。出土遺物はなく時期は特定できない。

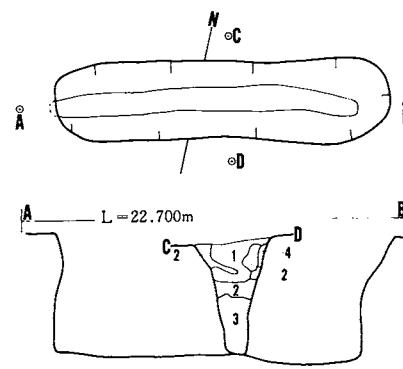


第7図 L 26陥し穴状遺構

### I 40陥し穴状遺構（第8図、写真図版5）

調査区の南西部に位置し、I 41住居跡から北へ僅かに下る緩斜面で検出された。A区、B区と異なり検出面は浅く、表土を除去した段階で黒色の輪郭として検出された。平面形は溝形であり、長軸はN—76°—Eである。規模は、開口部径268×62cm、底部径246×18cm、深さは中心部で98cmである。短軸の断面形は、上半、下半とも逆台形であり、全体として漏斗状である。長軸の断面形では、両端とも下半は直立気味、上半は外傾する。底面はVIII層のシラス状灰白色土に達し、東半分は10cmほど底い。底面の杭跡はない。

埋土は4層に細分され、上位は黒色土、下位は灰白色～浅黄色土であり、中位は両者のブロックからなる黒褐色土である。出土遺物はなく時期の特定はできないが、同一地形面にある陥し穴状遺構と推定される。



第8図 I 40陥し穴状遺構

### K 40陥し穴状遺構(第9図、写真図版5)

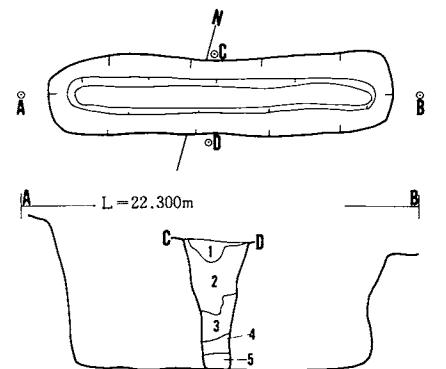
調査区の南西部に位置し、I 40陥し穴状遺構の南東5.2m地点の東に下る緩斜面で検出された。平面形は溝形であり、長軸はN—76°—Eである。規模は、開口部径276×58cm、底部径244×16cm、深さは中心部で104cmである。短軸の断面形は、上半は逆台形、下半は長方形であり、全体として漏斗状である。長軸の断面形では、東端は下半は直立し上半は外傾しており、西端は外傾する。底部はVII層の砂礫層に達しほぼ水平である。底部に杭跡はない。

埋土は5層に細分され、上位は黒色土、中位は暗褐色土、下位は浅黄色～にぶい黄褐色土であり、上位では礫がまじり、下位では砂がまじる。出土遺物はなく、時期の特定はできないが、同一地形面にある陥し穴状遺構と同時期と推定される。

### H41陥し穴状遺構(第10図、写真図版5)

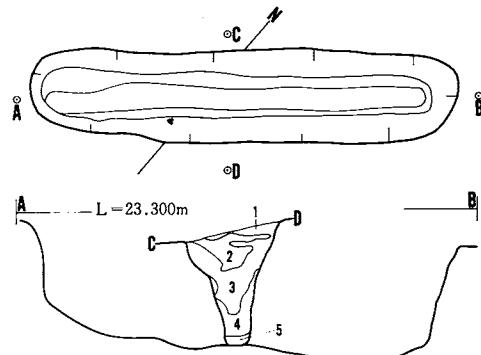
調査区の南西部に位置し、I 40陥し穴状遺構の西3.7m地点で表土を除去した際に検出された。平面形は溝形であり、長軸はN—49°—Eである。規模は、開口部径342×74cm、底部径306×18cm、深さは中心部で90cmである。短軸の断面形は、上半、下半とも逆台形であり、全体として漏斗状である。長軸の断面形は両端とも外傾し、逆台形である。底面には凹凸があり、南東部で浅く、北西部は20～30cmほど深い。底部に杭跡はない。

埋土は5層に細分されるが、上位は黒褐色～黒色土、下位は黄褐色～灰黄色土の割合が高く、いずれもVIII層起源の自然堆積層である。出土遺物はなく時期の特定はできない。



1. 10YR 1,7/1 黒 色 かたくしまり小礫まじる。
2. 10YR 2/1 黒 色 1よりしまりなく小礫まじる。
3. 10YR 3/3 暗褐色 黒褐色土と4の混土、礫まじる。
4. 2.5Y 7/4 浅黄色 砂質で礫まじる。
5. 10YR 5/3 にぶい黄褐色 4に黒褐色土少量まじる。

第9図 K40陥し穴状遺構



1. 10YR 3/2 黒褐色 磨屑最上部。
2. 10YR 1,7/1 黒 色 かたくしまる。
3. 10YR 4/3～3/4 にぶい黄褐色～暗褐色、磨屑起源。
4. 2.5Y 7/2 灰黄色 磨屑起源、かたくしまり粘性ややある。
5. 10YR 3/1～4/2 黒褐色～灰黄褐色 粘性あるがしまりない。

第10図 H41陥し穴状遺構

### K 43陥し穴状遺構(第11図、写真図版5)

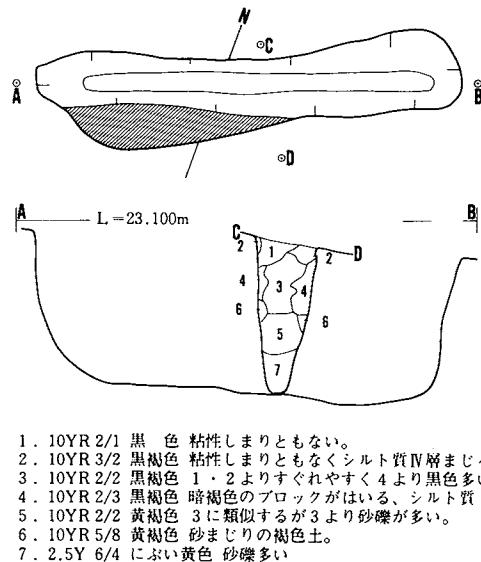
調査区の南西部に位置し、I 43住居跡の東3m地点の南に下る緩斜面で検出された。平面形は細長い溝形であり、長軸はN-70°-Eである。規模は、開口部径342×(46)cm、底部径282×16cm、深さは中心部で102cmである。短軸の断面形はV字形に近く、長軸の断面形は、両端が外傾気味であり、逆台形気味である。底面はVII層の砂礫層に達し凹凸があり、北東部が10cmほど低い。底部に杭跡はない。

埋土は7層に細分され、上位～中位では黒褐色土が多く、下位はにぶい黄色土で砂礫を多く含む。出土遺物はなく時期の特定はできないが、同一地形面にあるほかの3基の陥し穴状遺構と同時期と推定される。

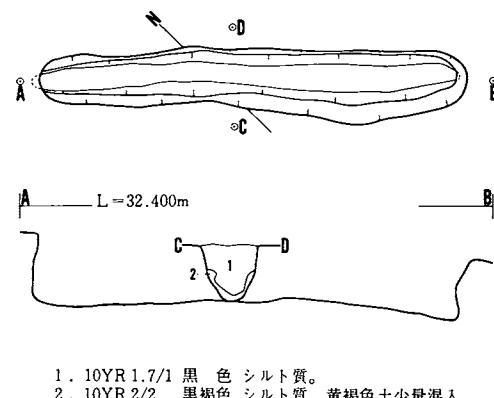
### N 9陥し穴状遺構(第12図、写真図版6)

調査区の東部に位置し、N 7とM10住居跡の間で検出された。平面形は細長い溝形であり、長軸はN-45°-Wである。規模は、開口部径344×48cm、底部径344×15cm、深さは中心部で45cmである。短軸の断面形は逆台形である。長軸の断面形は下半は両端とも内傾気味である。底面はVI層下位に達し、斜面下位の方がやや深い。底部に杭跡はない。

埋土は2層に分かれる。全体的に黒色土主体であり、下位ではIV層起源の黄褐色シルトが混じる。出土遺物はなく時期の特定はできない。



第11図 K43陥し穴状遺構



第12図 N 9陥し穴状遺構

### L 11陥し穴状遺構（第13図、写真図版6）

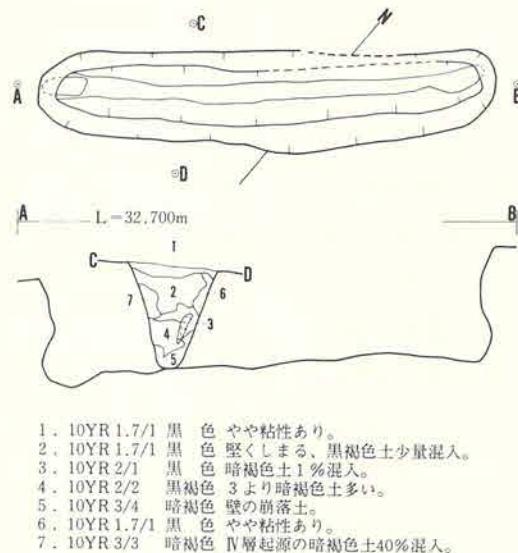
調査区東部に位置し、M10とM13住居跡の間で検出された。2m東にはM11陥し穴状遺構がある。北壁の一部が攪乱されているが、平面形は溝形であり、長軸はN—49°—Eである。規模は、開口部径364×82cm、底部径354×15cm、深さは中心部で82cmである。短軸の断面形は逆台形であり、両壁は外傾する。長軸の断面形では、下半は両端ともオーバーハンプグし、上半は外傾する。底面はVII層に達し凹凸があり、北東から南西に4°ほど傾く。底部に杭跡はない。

埋土は7層に細分され、上位は黒色土、下位は黒褐色～暗褐色のシルト質土である。出土遺物はなく時期の特定はできない。

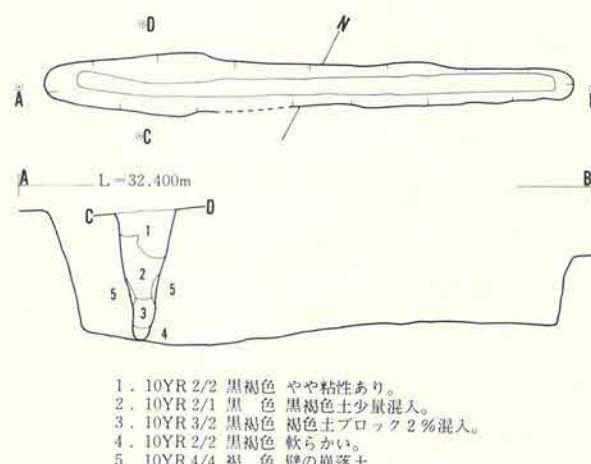
### M11陥し穴状遺構（第14図、写真図版6）

調査区の東部に位置し、M10住居跡の西壁面で検出され、大半は住居床面下にある。平面形は細長い溝形であり、長軸はN—63°—Eである。規模は、開口部径424×35cm、底部径382×12cm、深さは西壁寄りで102cmである。短軸の断面形は上半は逆台形、下半は長方形に近いが若干崩落しており不整形である。長軸の断面形では両端とも外傾する。底面の比高は東西で20cmほど異なり、東半が高い。底部に杭跡はない。

埋土は5層に細分される。上位と下位は黒褐色土、中位は黒色土である。出土遺物はなく時期の特定はできない。



第13図 L11陥し穴状遺構



第14図 M11陥し穴状遺構

### N13陥し穴状遺構（第15図、写真図版6）

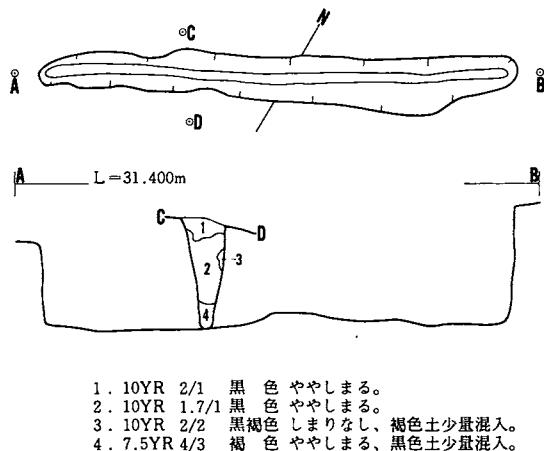
調査区の東部に位置し、N13住居跡の床面で検出された。平面形は細長い溝形であり、長軸はN-69°-Eである。西側の壁上半は住居跡に切られている。規模は、開口部径384×35cm、底部径369×7cm、深さは中心部で88cmである。短軸の断面形は開口部の狭い逆台形である。長軸の断面形では、両端とも直立する。底面は西半分は水平であるが東半分は凹凸がある。底部に杭跡はない。

埋土は4層に細分される。上位～中位は黒色土、下位は褐色土の混じる黒褐色土である。出土遺物はない。

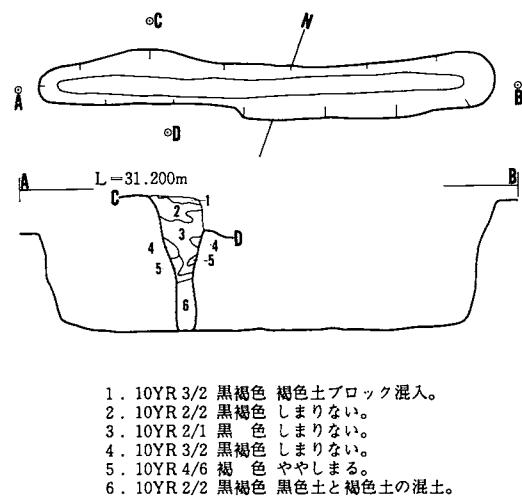
### P13陥し穴状遺構（第16図、写真図版6）

調査区の東部に位置し、P12住居跡の西壁に沿って20～30cm間隔で並んでいる。P13土坑の底面で検出され、西壁上位を切られている。平面形は細長い溝形であり、長軸はN-59°-Eである。規模は、開口部径365×43cm、底部径326×13cm、深さは中心部で110cmである。短軸の断面形は、上半は逆台形、下半は長方形である。長軸の断面形は両端とも外傾する。底面はほぼ水平である。底部に杭跡はない。

埋土は6層に細分される。上位と下位は黒褐色土、中位は黒色土であり、褐色の壁崩落土が混じる。出土遺物はない。



第15図 N13陥し穴状遺構



第16図 P13陥し穴状遺構

### M24陥し穴状遺構（第17図、写真図版6）

調査区の中央部に位置し、地形区B区のM24住居跡の床面下で検出された。7m西にはL26陥し穴状遺構がある。平面形は溝形であり、長軸はN-42°-Wである。規模は、開口部径316×62cm、底部径300×15cm、深さは中心部で100cmである。短軸の断面形は逆台形で壁は外傾する。長軸の断面形では両端とも直立する。底面は中央部が僅かに低くなっている。底部に杭跡はない。

埋土は3層に細分され、上位は暗褐色土、中位～下位は黄褐色土であり、全体的に堅くしまっている。出土遺物はなく時期は特定できない。

### (2) 壓穴住居跡

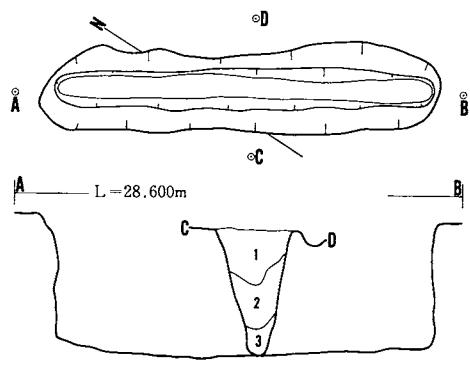
古代の壓穴住居跡は43棟検出された。全体を調査できたのは27棟である。時期は奈良時代22棟、平安時代21棟である。地形区別の分布はA区25棟、B区11棟、C区7棟である。

A区は本遺跡で最も標高の高い地形面であり、住居跡検出面の標高は30～37mである。住居跡は南東にのびる緩斜面を占地し、D9住居跡を頂点とする半径46～58m、中心角70°の扇形の範囲に分布している。奈良時代12棟、平安時代13棟である。

B区は中央部を占める平坦な地形面であり、住居跡検出面の標高は28～29mである。住居跡はやや標高の高い南東部を占地し、東西方向33m、南北方向25mの範囲に分布している。奈良時代6棟、平安時代5棟である。

C区は南西から西方向にのびる尾根であり、B区との間には比高差7～8mの急斜面がある。住居跡検出面の標高は22～25mである。住居跡は尾根筋を占地し、50mの範囲にほぼ一列に並んでいる。奈良時代4棟、平安時代3棟である。

地形や土壤が変化に富んでいたため検出状況も様々である。地表面から窪地が確認できたものが5棟(E13、G15、I43、I45、G47)、検出時に黒褐色～暗褐色土の輪郭が現れたものが7棟(L9、N10、L25、N26、I27、J28、L28)、白頭山火山灰や十和田a降下火山灰の分布を手掛かりとしたもの9棟(N7、D9、J9、M10、Q11、G12、I19、N22、H47)、土色の輪郭と出土遺物から確認できたもの5棟(P12、L17、J24、J37、I41)、焼土や炭化材



1. 10YR 3/3 暗褐色 黄褐色土ブロック少量混入。  
2. 10YR 5/8 黄褐色  
3. 10YR 5/6 黄褐色 暗褐色土少量混入。

第17図 M24陥し穴状遺構

の分布を手掛けりとしたもの9棟(O5、E9、E10、H9、M13、N13、Q14、M17、M24)、カマドを手掛けりにしたもの3棟(J13、K22、M23)、はじめ土坑として調査したもの2棟(K27、K47)、その他2棟である。

このうち、D9、E9、E10、G12、E13、J13、G15、L17、M17、I19、K22、J24、L25、N26、I27、K27、J28、L28、J37、I41、I43、I45、G47、H47、K47は第一次調査、O5、N7、H9、J9、M10、N10、Q11、J12、P12、M13、N13、Q14、P14、N22、M23、M24は第2次調査分である。

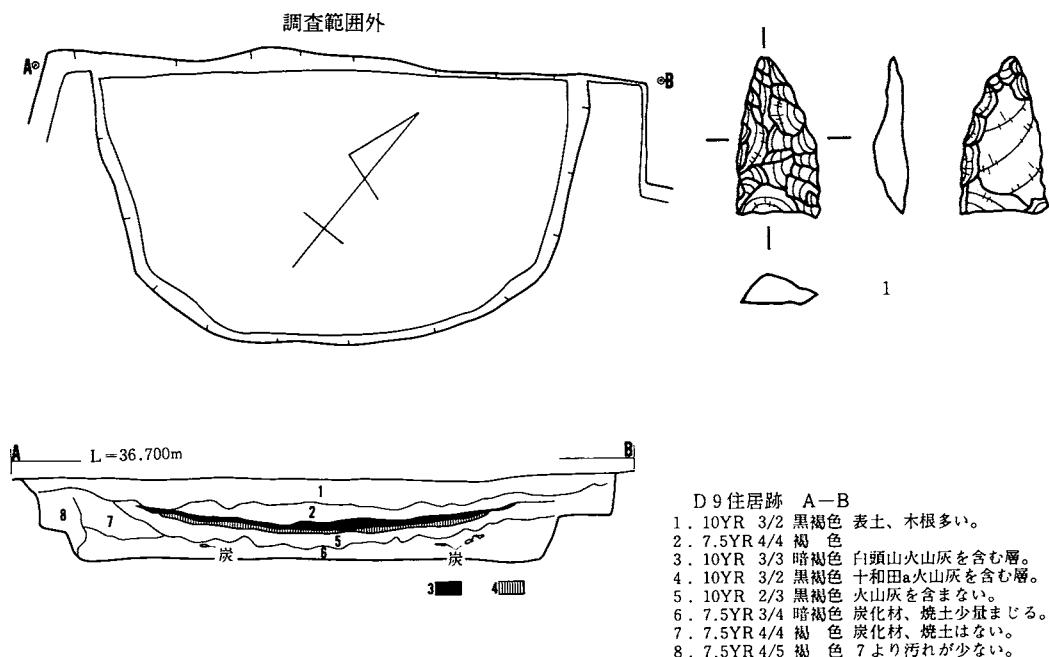
#### D9住居跡（第18図、写真図版7）

調査区の北東部の北端に位置し、表土を除去した段階で白頭山火山灰や十和田a降下火山灰が環状に分布しており、周溝を想定して調査を進めた結果住居跡となった。遺構は調査範囲外に広がっており調査したのは南半分である。床面の下からD9陥し穴状遺構が発見されている。

〈占地〉 南に僅かに下る稜線部のほぼ平坦な地形面を占地している。

〈平面形・規模〉 遺構は調査範囲外に広がるため全体の形状は不明であるが、平面形は隅丸方形に近いであろう。規模は東西方向で3.98mであり、調査範囲内の床面積は6.2m<sup>2</sup>である。

〈埋土〉 埋土は8層に細分され、表土層を除くと上位は褐色、中位は黒褐色、下位は褐色で



第18図 D9住居跡（遺構・遺物）

ある。中位の黒褐色土の中に、白頭山火山灰と十和田a降下火山灰が厚さ2~3cmで不連続に入る。両火山灰の間は1~2cmであり堆積の年代差は小さいものと思われる。下位の褐色土の中には炭化材や焼土が少量含まれている。

〈壁〉全体的に壁の立ち上がりは明瞭ではないが外傾する所が多い。壁高は20~30cmである。

〈床〉床は全体的に平坦である。床面はVI層起源の混土であり堅くない。周溝や柱穴などは検出されていない。

〈カマド〉カマドは検出されていない。北カマドが多いことから範囲外にあるものと思われる。

〈時期〉時期決定資料となる遺物は出土していないが、埋土の特徴から奈良時代と推定される。

#### 遺物（第18図、写真図版53）

1は平基無茎の石鎌である。表面からの調整が主体で裏面には第一次剝離面が残る。長さは21.7mm、重量は1.26gである。石質は流紋岩である。埋土から出土している。

#### E 9 住居跡（第19・20図、写真図版7）

調査区の北東部に位置しD 9 住居跡の東1.7m地点にある。この遺構はE 10 住居跡の埋土断面を精査した際に、北壁が分からなかったので断面を延長したところ、断面付近に崩壊したカマドがあり、住居跡として確認したものである。この住居跡はE 10 住居跡と僅かに重複しており、E 10 住居跡より新しい。北東側は林道であるため調査したのは南西側半分である。

〈占地〉南に僅かに下る稜線部の東斜面を占地している。

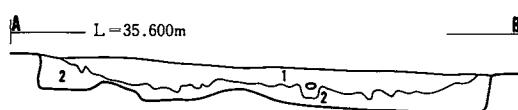
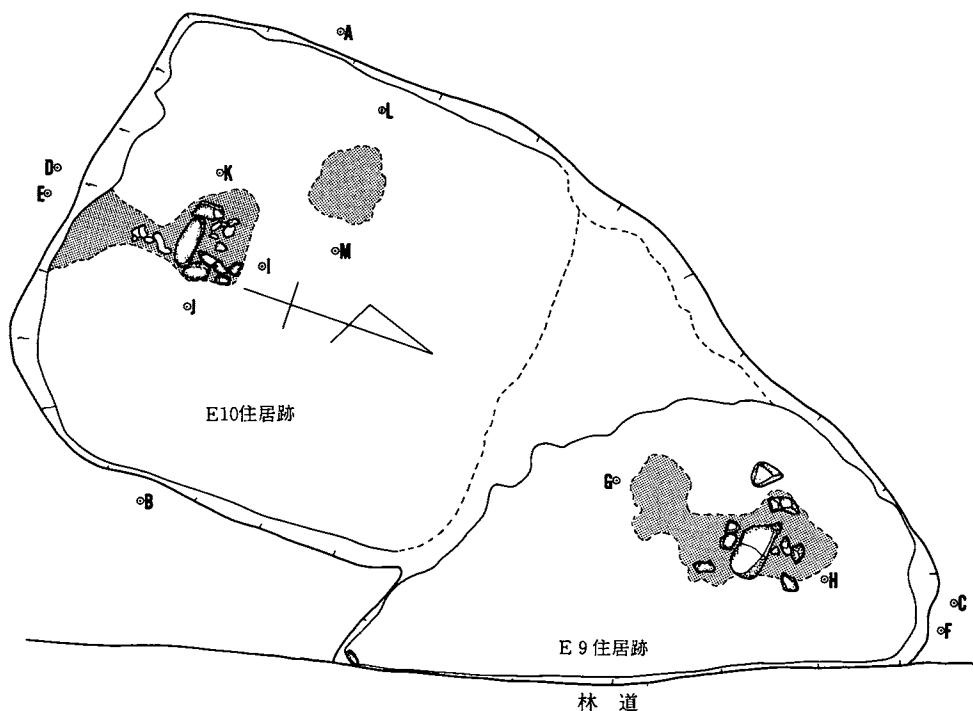
〈平面形・規模〉完掘していないので全体の形状は不明であるが、平面形は隅丸長方形に近いものと思われる。調査範囲内の床面積は6.8m<sup>2</sup>である。

〈埋土〉埋土は3層に細分され、上位から褐色、黒褐色、暗褐色の順である。上位の褐色土の上面は砂質で堅くしまる。下位では炭化物や焼土が混じる。

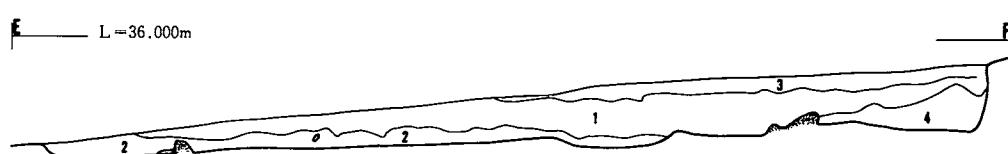
〈壁〉再堆積層を掘り込んでおり壁の立ち上がりは分かりにくいが、西壁は直に近い。南壁付近はE 10 住居跡の北壁と重複していたと思われるが、輪郭は分からない。壁高は北壁付近で最大60cmである。

〈床〉床には全体的に小さな凹凸がある。床面は北西から南東に傾き比高差は25cmある。VI層起源の混土のため堅い床面はない。E 10 住居跡の北壁より床面は5~10cmほど低い。周溝や柱穴は検出されていない。

〈カマド〉西壁中央付近から1mほど内側に構築されているが、本体は残存せず使用したと思われる礫が散在しており廃棄時に破壊されたものと思われる。煙道は分からない。カマドの



- E 9・10住居跡 A—B C—D E—F
- 1. 10YR 3/2 黒褐色 ややかたくしまる、木根多い。
  - 2. 10YR 4/5 褐色 粘性しまりともなくもろい。
  - 3. 10YR 4/4 褐色 かたくしまる、砂がまじる。
  - 4. 10YR 3/4 暗褐色 粘性しまりともまく炭化物まじる。
  - 5. 10YR 2/3 黒褐色 2よりしまりなく焼土まじる。
  - 6. 7.5YR 3/4 暗褐色 焼土の細粒がまじる。



第19図 E 9・E10住居跡（遺構 1）

長軸方向はN—70°—Wと思われる。西カマドをもつ住居跡はこの1棟だけである。袖部の芯材として使用された楕円形の礫が1個だけ残っており、礫の北と南側に焼土が形成されているが北側で厚く最大6cmである。また、袖石の南40cm付近には、径40cm余の円形で厚さ最大7cmの焼土があり、浅皿状の凹地に形成され良く焼けている。この焼土は別のカマドに伴うものか地床炉的に使用されたものと思われる。

〈時期〉 奈良時代の住居跡を切っていることや埋土の特徴から、平安時代である。

#### 遺物（第21図、写真図版53）

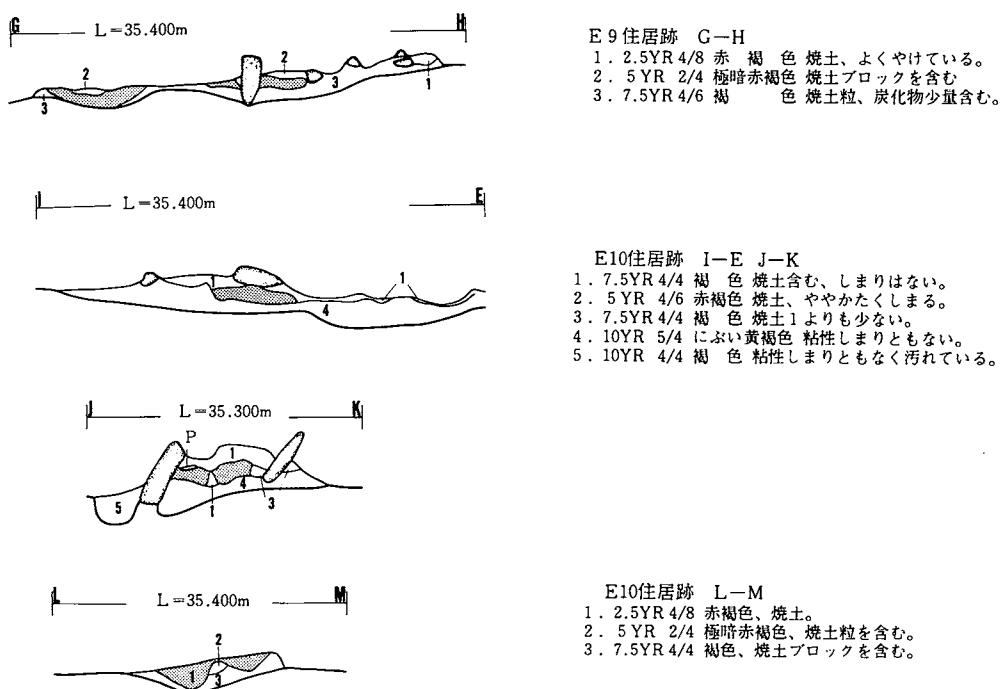
2は須恵器の甕の体部破片である。外面は凝格子状の平行たたき目文であり、内面の調整はヘラミガキ様の難な調整である。カマド付近の埋土中位から2片出土し接合したものである。

#### E 10住居跡（第19・20図、写真図版8）

調査区の北東部に位置しD9住居跡の南東2.5m付近にあり、北壁の一部はE9住居跡に切られている。床面の下でE10土坑とF10—2土坑が検出されている。

〈占地〉 僅かに南東に下る緩斜面を占地している。

〈平面形・規模〉 平面形は隅丸正方形に近く、規模は東西方向が3.78m、南北方向が3.90m



第20図 E 9・E10住居跡（遺構 2）

である。床面積は12.0m<sup>2</sup>である。

〈埋土〉埋土は2層に分けられる。上位は黒褐色、下位は褐色であり、上位ほど汚れている。

〈壁〉再堆積層を掘り込んでいるため壁の立ち上がりは分かりにくい。特に南壁と北壁は僅かに立ち上がりが認められる。壁高は東西で30cm前後である。

〈床〉堅い床面ではなく地山の傾斜に沿って北西から南東に傾き、比高差は30cmである。焼土分布の比高に比べて床面が低いことから掘り過ぎも考えられる。周溝や柱穴は検出されていない。

〈カマド〉南壁中央付近から1.1mほど内側に構築されている。煙道は分からぬ。カマドの長軸方向はS—8°—Wである。

袖部は楕円形(24×19×5cm)と四辺形(26×17×4cm)の板状の凝灰岩を芯材としている。近くには長楕円形(45×16×7cm)の天井に使用した礫がある。袖部の幅は芯材の外側で104cmである。燃焼部の焼土はやや堅くしまるが、カマドの北西にある焼土よりも焼けていない。カマドの北西にみられる焼土は、径50cm前後の円形で厚さは最大10cmであり、良く焼けている。この焼土は別のカマドに伴うものか地床炉的に使用されたものと思われる。また、カマド付近から南壁にかけて薄い焼土がみられることから焼失住居跡と思われる。

〈時期〉出土する土師器から奈良時代である。

#### 遺物（第21図、写真図版53）

3はロクロ不使用の壺の口縁部である。器面調整は内外面ともヘラミガキ主体であり、内面には黒色処理が加えられている。

4は体部下半を欠くが甕と思われる。肩部に軽い段を持ち口縁部は僅かに外傾する。器面調整は内外面とも口縁部はヨコナデ後ヘラミガキ、体部はヘラミガキである。

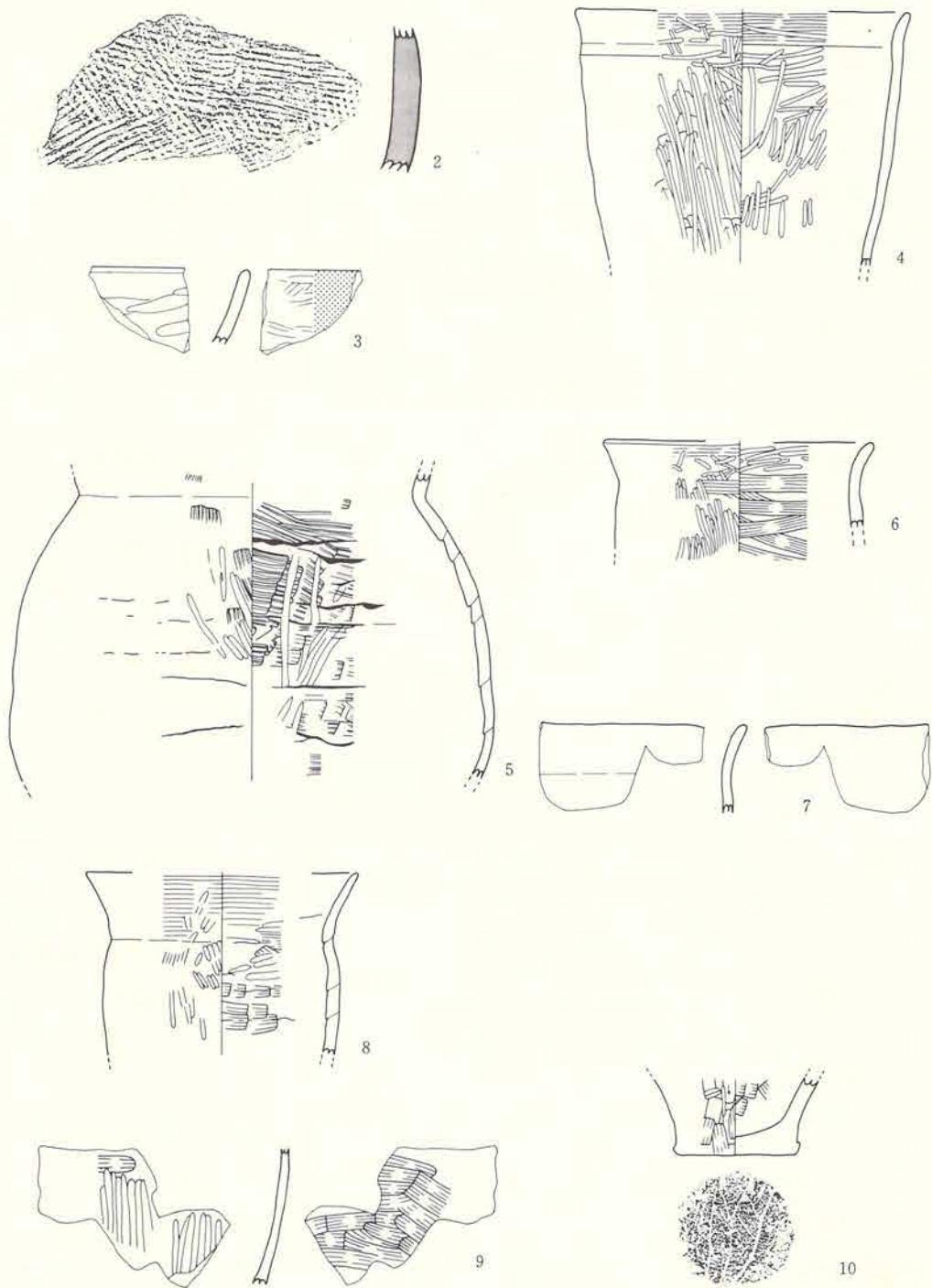
5は甕である。口縁部と体部下半を欠く。体部最大径をほぼ中央に持っている。器面調整は内外面とも刷毛目後ヘラミガキであるが全体に雑である。特に内面には輪積の跡が階段状に残っている。

6は甕の口縁部付近である。肩部に軽い段を持ち口縁部は外反する。器面調整は外面はヘラミガキ、内面はヘラナデ主体で口縁部にヘラミガキがみられる。

7は甕の口縁部付近である。頸部に軽い括れを持ち口縁部は外反する。器面は内外とも摩滅しており調整は分からぬが、内面はヘラナデのようである。

8は甕である。頸部に軽い括れを持ち口縁部は外反する。器面調整は、外面はヘラミガキ主体、内面はヘラナデである。内面には輪積の跡が残っている。

9は甕の体部上半である。口縁部を欠くが頸部に軽い括れを持つ。器面調整は、外面は雑なヘラミガキ、内面はヘラナデである。内外面には煤が付着している。



第21図 E9・E10住居跡（遺物）

10は甕の底部である。底部下端は外側に張り出し底部には木葉痕がある。底部内面は丸底氣味である。

以上の遺物はロクロ不使用の土師器であり、カマド付近で出土したものである。

#### G 12住居跡（第22・23図、写真図版9・10）

調査区の北東部に位置しE 10住居跡の南東4.2m付近にある。また、西1.7mにはE 13住居跡がある。この住居跡は、表土を除去した段階で白頭山火山灰を僅かに含むブロックが点在する方形に近い輪郭として検出されたが、調査結果は当初より北側に大幅に拡大している。

北東隅の壁面でG 10陥し穴状遺構が、西壁中央付近でF 12陥し穴状遺構が検出されている。

〈占地〉僅かに南々東に下る緩斜面を占地している。

〈平面形・規模〉平面形は隅丸正方形に近く、規模は東西方向が6.50m、南北方向が6.84mである。床面積は38.7m<sup>2</sup>であり、奈良時代では最も大きい住居跡である。

〈埋土〉埋土は13層に細分される。中央部付近では白頭山火山灰や十和田a降下火山灰を少量含む黒褐色～暗褐色のシルト質土が多く、壁際は暗褐色土である。床面近くの褐色の部分は地山に近く掘り過ぎもある。北壁近くの上位にみられる褐色土は、VI層起源の人為的廃棄層と思われる。

〈壁〉斜面下位の南壁を除き壁の崩落は少なく、壁の立ち上がりは全体的に僅かに外傾する。壁高は北壁で最大70cm、南壁で最小10cmである。

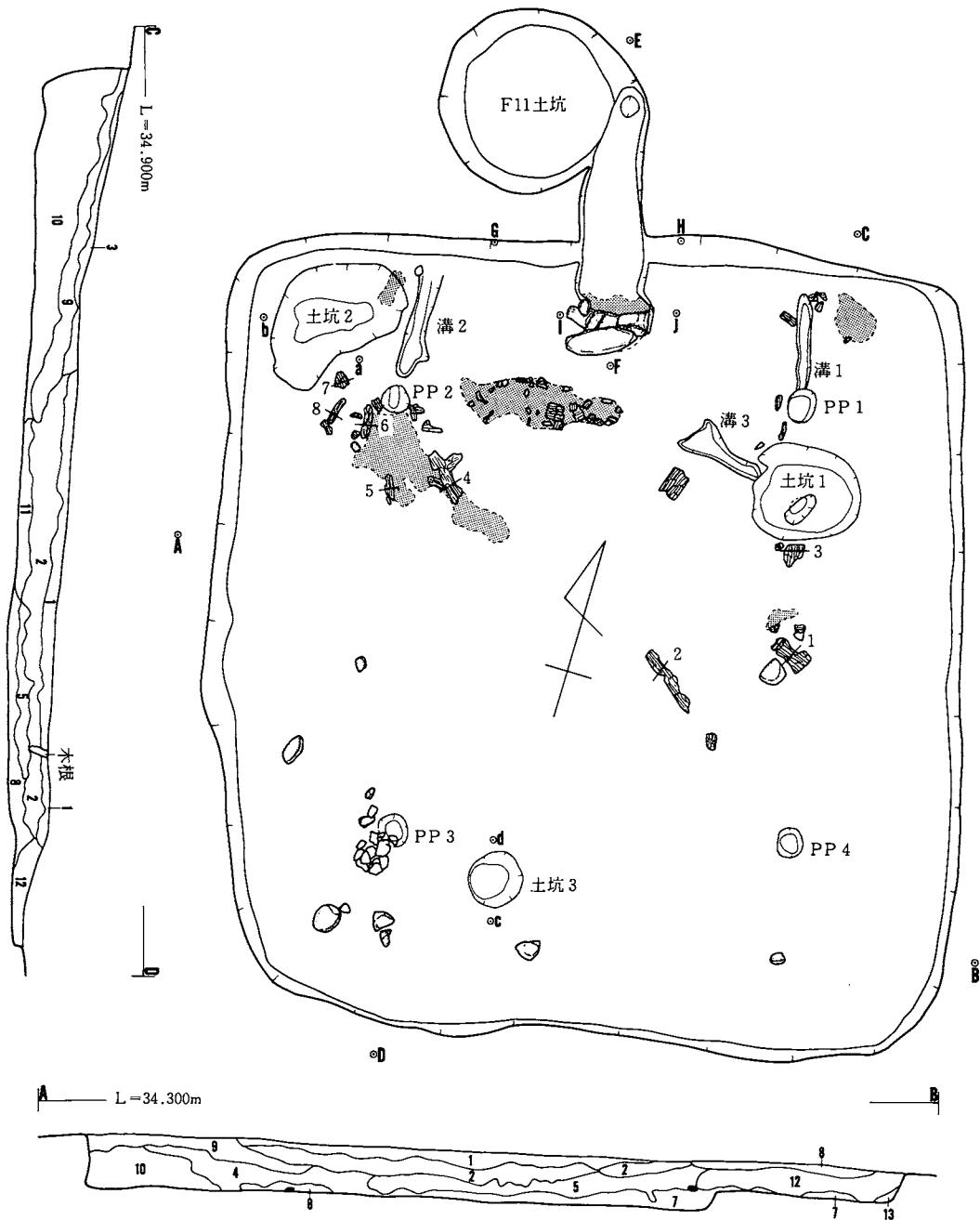
〈炭化材・焼土〉住居跡の北半に分布しており、特に北西部に多い。炭化材と焼土は重なっている。北西部の焼土は炭化材を被っている部分が多く厚さ3cm前後で良く焼けている。この住居跡は焼失住居跡と思われる。

炭化材は床面から1～2cmほど浮くものが多いが、10cmほど浮いて焼土の上に残っているものもみられる。炭化材の配列は壁面と平行するものが多く、放射状のものは少ない。炭化材の断面は、1・2・7は薄い板状を呈し、5・6は角材状である。4は割材と思われる。丸太材はみられない。樹種鑑定の結果は、全部栗である。

〈床〉北半の床面は平坦で比較的堅くしまっている。南半は掘り過ぎた部分があるが出土遺物面や南壁際の比高を考慮すれば北半と大差がないものと思われる。貼り床はみられない。

〈柱穴〉柱穴は4個検出されており、柱穴配置は四角形である。柱穴の平面形は隅丸方形に近いものが主体であり、規模はPP<sub>1</sub>が28×24cmで深さは69cm、PP<sub>2</sub>が24×24cmで深さは74cm、PP<sub>3</sub>が28×24cmで深さは62cm、PP<sub>4</sub>が25×21cmで深さは64cmである。柱穴の芯芯間距離はPP<sub>1</sub>—PP<sub>2</sub>が3.45m、PP<sub>3</sub>—PP<sub>4</sub>が3.42m、PP<sub>1</sub>—PP<sub>4</sub>とPP<sub>2</sub>—PP<sub>3</sub>が3.74mである。

〈溝〉カマドの東西と南東で小さい溝が3本検出された。溝1は北壁際から柱穴PP<sub>1</sub>まで延



- G12住居跡 A-B C-D
- 10YR 3/2~3/4 黒褐色~暗褐色 暗褐色シルト主体。
  - 10YR 2/2~3/4 黒褐色~暗褐色 火山灰を含む褐色主体。
  - 10YR 3/4 暗褐色 火山灰ブロックは2より少ない。
  - 10YR 2/3~3/3 黒褐色~暗褐色 ブロック状にはいる。
  - 10YR 2/2 黒褐色 暗褐色との混土、炭少量はいる。
  - 10YR 3/2 黒褐色 5より暗褐色多い、炭少量はいる。
  - 10YR 4/5 褐色 ややしまる、床面? (ホリスギ?)
  - 10YR 4/5 褐色 暗褐色まじりしまりはない。
  - 10YR 4/6 褐色 VI層起源の人為的投げ込み層?
  - 10YR 3/3 黒褐色 下位に炭がはいる、粘性しまりともなし。
  - 10YR 3/3 暗褐色 10cに黒褐色が少量まじる。
  - 10YR 3/4 暗褐色 ややしまる、木根による搅乱
  - 10YR 3/2~3/3 黒褐色と暗褐色の混土、かたくしまる。

第22図 G12住居跡 (遺構 1)

び長さ80cm、最大幅10cm、深さ最大15cmである。溝2は北壁際から柱穴PP<sub>2</sub>まで延び長さ90cm、最大幅16cm、深さ最大13cmである。溝3は土坑1の西壁付近からカマド方向へ延び長さ70cm、中央部の幅12cm、深さ最大12cmである。この溝は間仕切りに伴う可能性がある。

〈土坑〉 土坑は3基検出された。

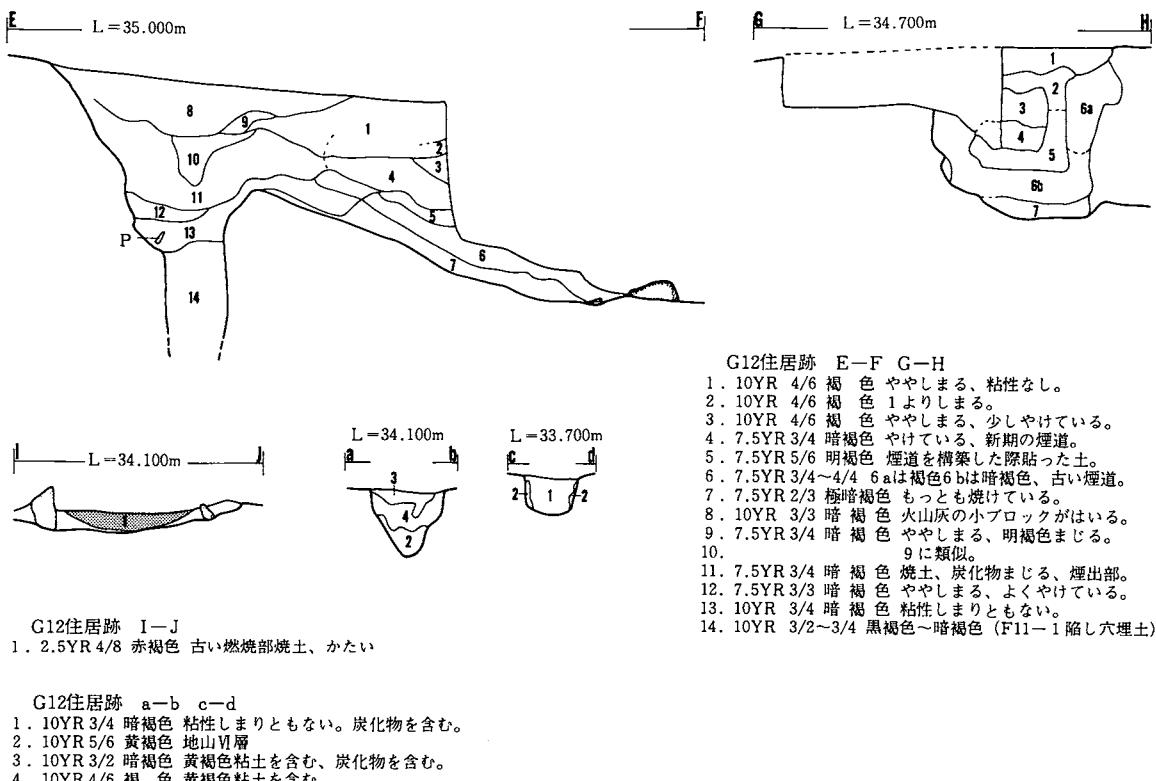
土坑1は北東部に位置し柱穴PP<sub>1</sub>の南にある。平面形は橢円形であり、規模は開口部径90×80cm、底部径76×66cm、深さ25cmである。底部には深さ30cmの副穴がある。

土坑2は北西隅に位置し東側は溝2によって床面と区別される。平面形は不整な隅丸三角形であり、規模は開口部が北東一南西方向130cm、北西一南東方向80cmである。底部は丸底で深さは中心部で52cmである。

土坑3は柱穴PP<sub>3</sub>の東側にある。平面形は円形であり、規模は開口部径50×48cm、深さ30cmである。この土坑から壺が2点(12・13)、甕が2点(20・23)出土し住居跡埋土のものと接合している。

これらの土坑は埋土が住居跡下位と同じであることから、住居跡に付属するものであろう。

〈カマド〉 北壁中央付近に構築されており、総長約2.3m、壁外約1.3mである。カマドの長



第23図 G12住居跡（遺構2）

軸方向はN—12°—Wである。

本体部は崩落しているが使用した板状の礫などが残っている。袖部の幅は芯材の外側で144cmある。また近くには長楕円形(62×21×8cm)の天井に使用した礫がある。

燃焼部の焼土は、径50cm余の隅丸方形で厚さは最大8cmほどあり、良く焼けている。

煙道は同一場所で作り直されており、上段が新しく、下段が古い煙道である。新しい煙道は床面から30cmほど高い壁面で検出され、横断面形は楕円形である。煙道の周囲はVI層下位起源の明褐色の堅い土である。煙道の入口付近は古い煙道の崩落した上に明褐色土を埋め固めた後に削り貫いて作られている。古い煙道は下位にあり、壁近くから22～23°位の上り勾配となり、煙出口近くで下った後に垂直に近く立ち立がっている。煙出口付近はF11土坑によって切られている。また、下部にF11陥し穴状遺構がある。煙道の埋土には焼土が全体的にみられる。

〈時期〉埋土の特徴や出土遺物から奈良時代である。

遺物(第24・25図、写真図版54・55)

11はロクロ不使用の壺である。内外面には識別できる段はなく口縁部は外傾する。器面調整は、外面はヘラケズリ主体で口縁部にはヘラミガキがみられる。内面はヘラミガキであり、更に黒色処理が施されている。底部は丸底である。

12はロクロ不使用の壺である。内外面には識別できる段はなく口縁部は外傾する。器面調整は、外面はヘラケズリ後ヘラミガキ、内面はヘラミガキで更に黒色処理が施されている。底部は平底風丸底である。

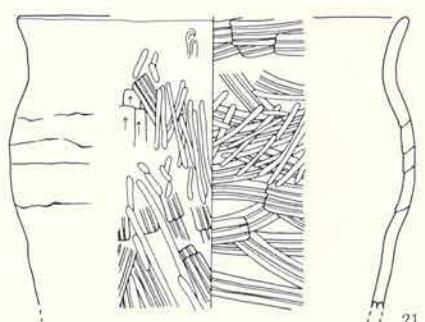
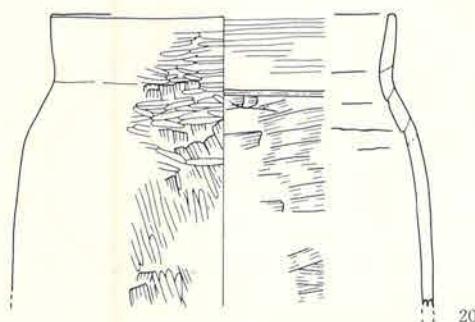
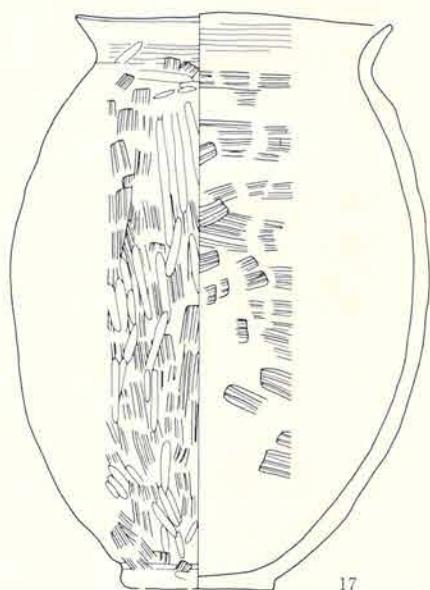
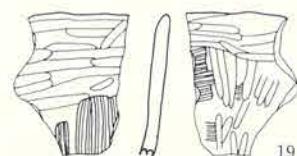
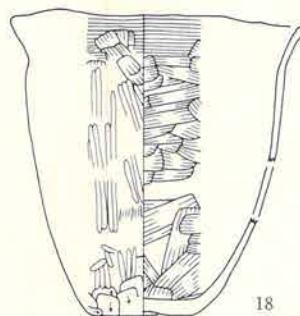
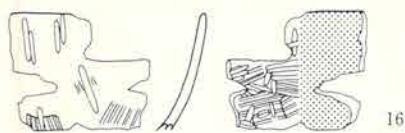
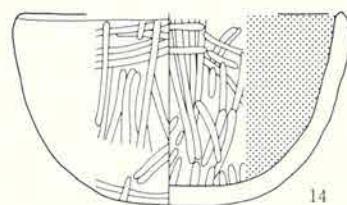
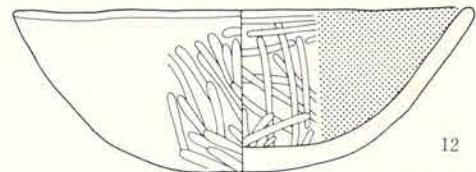
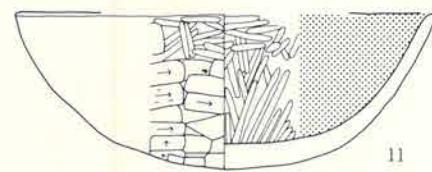
13はロクロ不使用の壺である。内面体部中央に段を持ち口縁部は僅かに外反する。器面調整は、外面は口縁部がヘラミガキのほかはヘラケズリ、内面はヘラミガキで黒色処理が施されていたものと思われる。底部は粗いケズリであるが全体として丸底である。

14はロクロ不使用の壺である。内外面とも段はなく口縁部は直立気味に内彎する。器面調整は内外面ともヘラミガキである。内面には黒色処理が施されていたものと思われる。底部は平底風丸底である。

15はロクロ不使用の壺である。内外面とも段はなく口縁部は内彎気味に外傾する。器面調整は外面はヘラケズリ主体で口縁部にヘラナデがみられる。内面はヘラミガキで黒色処理が施されている。底部は丸底である。

16はロクロ不使用の壺の破片である。口縁部は内彎気味に外傾する。器面調整は内外面とも刷毛目後ヘラミガキであり、内面には黒色処理が施されている。底部は欠損し不明である。

17はロクロ不使用の甕である。頸部に僅かに段がみられる所もあり、口縁部は外反する。体部最大径を中央部に持つ。底部下端は外側に張り出す所が多く、内面は丸底である。器面調整は、口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は外面が刷毛目後ヘラミガキ、内面は刷毛目である。



第24図 G12住居跡（遺物 1）

底部外面には木葉痕がみられるが剥落している所が多い。

18はロクロ不使用の甕である。頸部に括れを持ち、口縁部は外反気味である。体部最大径を肩部付近に持ち、底部下端にかけて窄む。体部上半では歪みが大きく口縁部は橢円形である。器面調整は、口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は外面は難なヘラミガキ主体、内面はヘラナデである。底部下端は窄まり内面は平底風である。

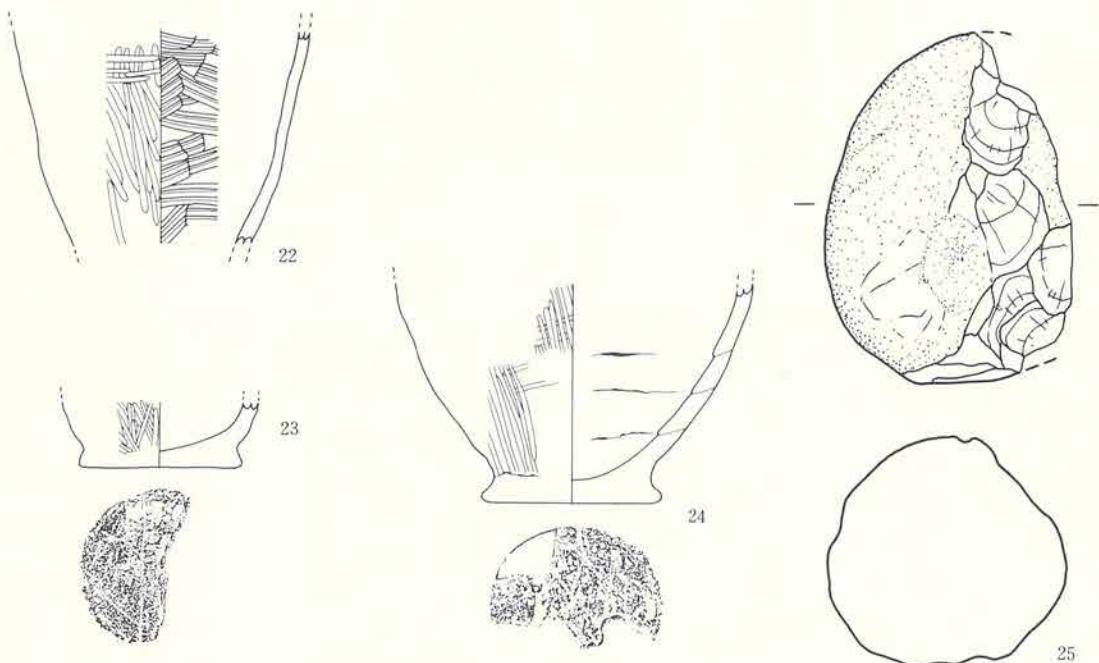
19はロクロ不使用の甕の口縁部である。口縁部は特に変化を持たず外傾する。器面調整は内外面とも刷毛目後ヘラミガキであるがミガキは難である。

20はロクロ不使用の甕で体部下半を欠く。頸部に括れを持ち、口縁部は直立気味である。体部最大径を肩部付近に持つ。器面調整は、外面は口縁部はヘラミガキ、体部はヘラナデ後ヘラミガキ、内面は口縁部はヨコナデ、体部はヘラナデである。内面には煤の付着している所がある。

21はロクロ不使用の甕で体部下半を欠く。頸部に括れを持ち、口縁部は外反する。体部最大径を肩部付近に持つ。器面調整は、外面は体部は刷毛目後難なヘラミガキ、内面は口縁部は刷毛目、体部は刷毛目後ヘラミガキである。内面には煤の付着している所がある。

22はロクロ不使用の甕の体部である。器面調整は、外面はヘラミガキ、内面は刷毛目である。

23はロクロ不使用の甕の底部である。下端は外側に張り出し、内面は丸底である。外面には



第25図 G12住居跡（遺物2）

木葉痕がみられる。

24はロクロ不使用の甕で体部上半を欠く。底部下端は外側に張り出し、内面は丸底である。体部外面の器面調整はヘラミガキである。内面は輪積痕に沿って割れている。底部外面中央には×印のヘラガキがみられる。

25は琥珀の原石である。カマド付近の埋土下位～床面で出土している。2個体分と思われるがこわれており正確には分からぬ。最大のものを実測図に示した。大きさは $46.9 \times 32.8 \times 34.0$ mm、重量は23.88gである。全出土量の合計は45.36gである。

土師器の出土状況は、12・13・20・23が土坑3から、17・18・21は南西床近くから、15は北西床面から、24は煙道から、その他は埋土から出土している。

#### E 13住居跡（第26図、写真図版10・11）

調査区の北東部に位置しG 12住居跡の西1.7mに隣接している。この住居跡は、雑木を撤去した段階で窪地があることから存在が予想されたものである。東壁付近ではF 13土坑とF 12陥し穴状遺構と重複している。新旧関係は、古い方から陥し穴状遺構→土坑→住居跡の順である。

〈占地〉僅かに南に下る緩斜面を占地している。

〈平面形・規模〉平面形は隅丸正方形に近く、規模は東西方向が3.80m、南北方向が4.14mである。床面積は11.1m<sup>2</sup>である。

〈埋土〉埋土は7層に細分される。全体的に褐色のシルト質土が支配的であり、暗褐色～黒褐色土は少なく東側の中位付近で最も黒味が強い。

〈壁〉検出段階で遺構の輪郭が分かりにくく30cmほど掘り下げているが、残存する壁の立ち上がりは外傾する。壁高は北壁で50cm、その他は30cm位である。

〈床〉床面は平坦であり、比高差は5cm前後である。特に東半分は非常に堅い。東壁中央附近から1mほど内側には焼土が分布している。この焼土は、厚さは2～4cmと薄いが、良く焼けており堅くしまっている。古いカマドに伴う焼土の可能性もある。柱穴や周溝は検出されていない。

〈土坑〉土坑は2基検出された。

土坑1はカマド脇の北壁際に位置する。平面形は円形に近く、開口部径54×52cm、深さは45cmである。断面実測は省略したが断面形はビーカー状を呈し、壁の立ち上がりは直に近い。埋土上位～中位から甕が3点（26・31・32）出土している。

土坑2は南東隅に位置する。平面形は不整ながら隅丸台形である。規模は、開口部は東西方向が100cm、南北方向が最大146cm、底部は東西方向が74cm、南北方向が最大128cmである。

底面は凹凸があり中央部や南壁際が少し深い。深さは25cm前後である。埋土は褐色土主体で

住居跡埋土と同じである。埋土から壺の高台部（34）が出土している。

〈カマド〉北壁中央やや東寄りに構築されており、総長2.26m、壁外約1.3mである。カマドの長軸方向はN-10°-Eである。

本体部は比較的良く残っており、径10~40cmの亜角礫9個を芯材や天井石に使用している。また付近にはカマドの構成礫の一部と思われる亜角礫が散在している。袖部の幅は芯材の外側で70cmある。燃焼部の焼土は、直径40cmの円形で厚さは最大10cmほどあり、浅皿状の凹地に形成され良く焼けている。

割り貫き式の煙道は、壁に向かって10°位の上り勾配となり、その後緩く下った後に煙出口へ垂直に立ち上がる。煙出口は円形で深さは50cm以上ある。埋土には焼土が混じる。

〈時期〉床面と土坑からロクロ使用の壺や甕が出土していることから平安時代である。

#### 遺物（第27・28図、写真図版56）

26はロクロ使用の甕である。頸部に括れを持つ。口縁部は短く外傾し、口唇部が上につまみ出されている。最大径を肩部付近に持つ。体部外面には丁寧なミガキ調整がみられる。

27はロクロ不使用の甕である。頸部に段を持ち、口縁部は外傾する。口縁部に最大径があり底部下端にかけて全体的に窄む。器面調整は、外面は口縁部がヨコナデ、体部がヘラケズリ後ヘラミガキ、内面は刷毛目主体でヘラミガキが部分的に加わる。底部外面には木葉痕がみられる。内外面の一部に煤が付着している。

28はロクロ不使用の甕である。頸部に僅かに段を持ち、口縁部は内彎気味に外傾する。最大径は口縁部と体部上半にあり、底部にかけて緩やかに窄む。底部下端は外側に張り出し端部は削り取られている所がある。器面調整は、外面は口縁部がヨコナデ、体部は刷毛目後ヘラミガキ、内面は口縁部がヨコナデ、体部は刷毛目である。底部外面には木葉痕がある。外面には煤が付着している。

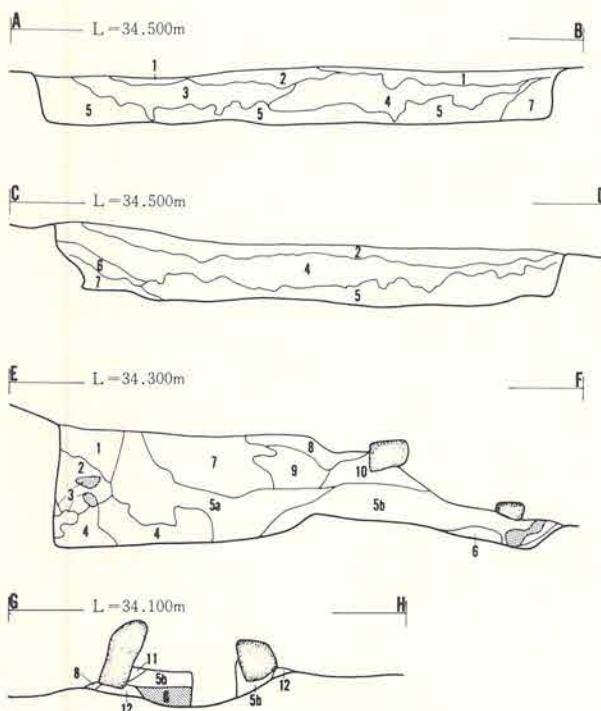
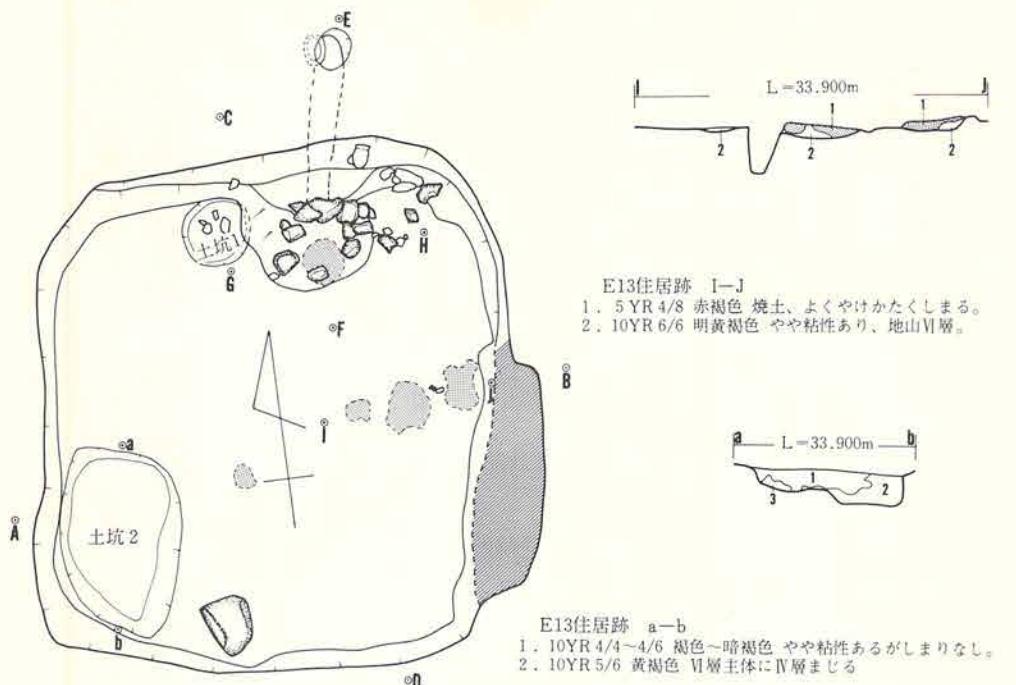
29はロクロ不使用の甕であり体部下半を欠く。頸部にヘラによる不規則な沈線がある。口縁部は短く外反し、口唇部は角張り外側に張り出している。最大径を体部中央に持つ。器面調整は、外面はヘラケズリ、内面はヘラナデである。

30はロクロ不使用の甕の口縁部破片である。口縁部は外反し、内外面ともヘラナデ主体で外面にはヘラミガキが加わる。

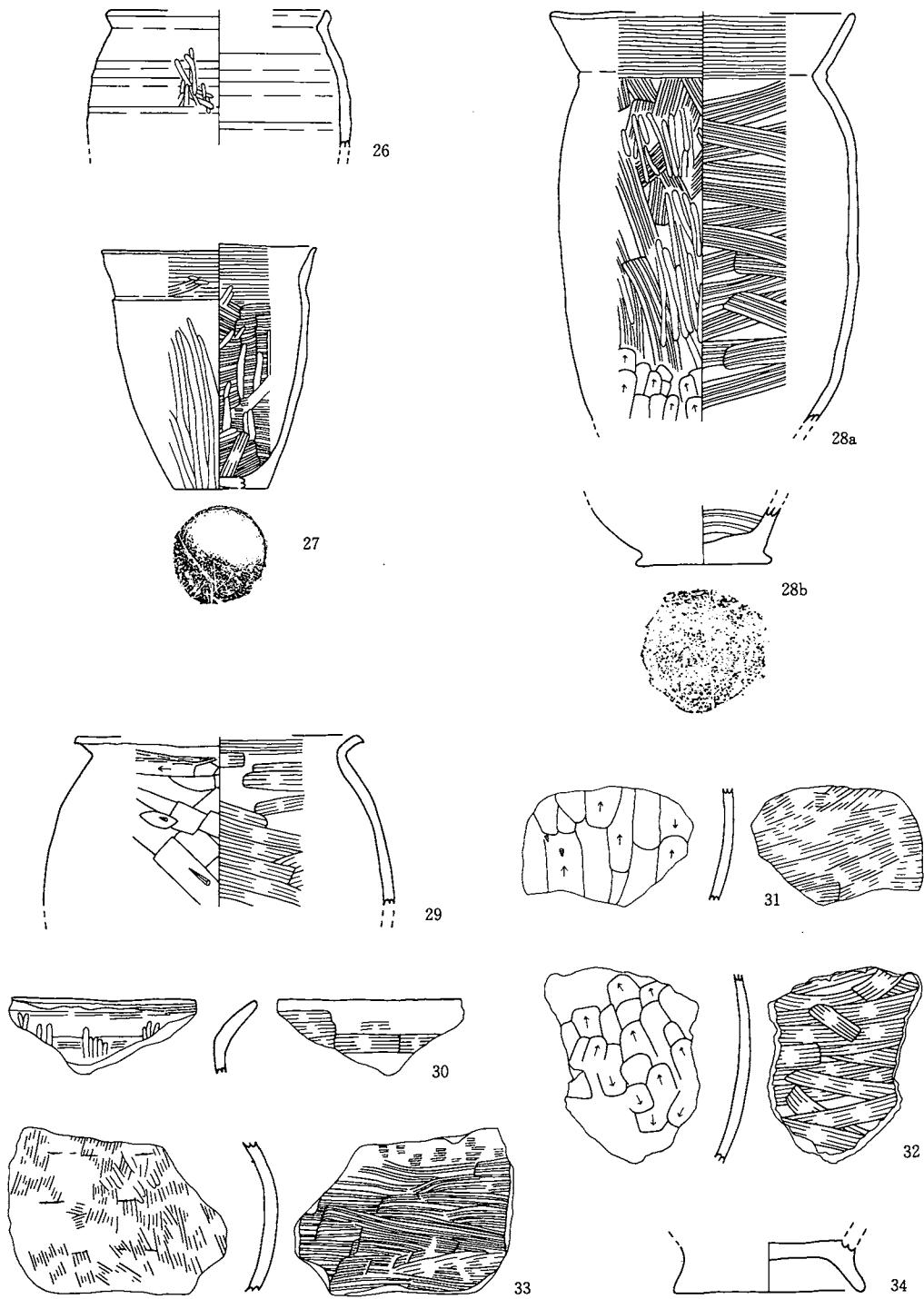
31・32はロクロ不使用の甕の体部破片である。器面調整は、外面はヘラケズリ、内面はヘラナデである。

33はロクロ不使用の甕の体部破片である。器面調整は、外面は刷毛目後部分的にヘラミガキ、内面は刷毛目である。外面には輪積痕がみられる。

34はロクロ使用の壺の高台部である。接合部の径は7.4cm、下端の径は8.3cm、高台の高さは



第26図 E13住居跡（遺構）



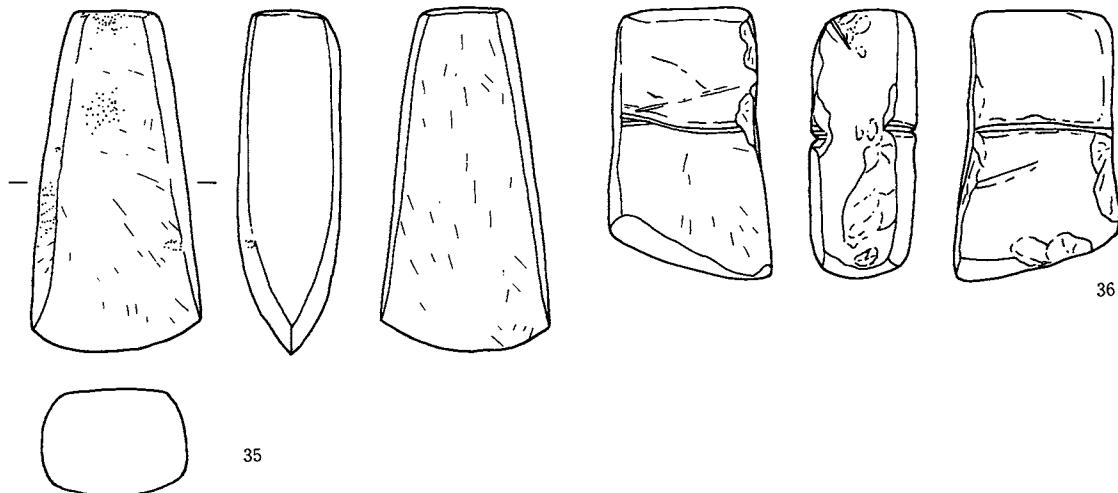
第27図 E13住居跡（遺物 1）

2 cmである。

35は定角式磨製石斧であるが頭部だけは研磨されていない。最大幅を刃部付近に持ち、頭部は隅丸正方形、横断面形は隅丸長方形である。刃部は弱い円刃の蛤刃である。長さは9.15cm、最大幅は4.5cm、厚さは2.9cm、重量は218gである。石質はチャート質淡緑色凝灰岩である。

36は砥石である。両面には幅最大5mm、深さ最大5mmの溝があり、有溝砥石であるが、両面や側面も平砥として使用されている。砥面の砥粒は細かく仕上砥である。長さは7.1cm、幅は4.3cm、厚さは2.6cm、重量は142gである。石質は流紋岩である。

出土状況は、27・33は北壁最上位付近から、28はカマド付近の埋土上位から、29・30は埋土から、35は埋土下位から、36は床面から、31・32は土坑1の埋土から、34は土坑2の埋土から出土している。26は土坑1と床面から出土し接合したものである。



第28図 E13住居跡（遺物2）

#### J 13住居跡（第29図、写真図版11）

調査区の北東部に位置しG12住居跡の南9.2m付近にある。西7.4mにはG15住居跡がある。この住居跡は、表土を除去した段階で大きな礫があり土師器を伴うことからカマドを想定して調査したものである。斜面下位は殆ど流出しており北壁近くが残っているだけである。

〈占地〉 南に下る緩斜面を占地している。

〈平面形・規模〉 遺構の大半が流出しているため全体形状は不明であるが、平面形は隅丸方形と思われる。規模は東西方向で4.4mである。

〈埋土〉 埋土は暗褐色土の単層に近い。床面近くは浮石まじりの黒褐色土となる。

〈壁〉 再堆積層を掘り込んでいるため埋土と壁の区別がつきにくく、所々で僅かに壁の立ち上がりが認められた。壁高は北壁で10cm前後である。

〈床〉 黄褐色浮石を含む再堆積（V層）を床面としている。床面は地山に沿って南に傾いているが、床面として確認できるのは北壁際の1m前後である。柱穴や周溝は検出されていない。

〈土坑〉 土坑は北西隅で壁を確認していた際に検出された。平面形は梢円形である。規模は、開口部径90×62cm、底部径65×37cm、深さは45cmである。埋土は暗褐色土の単層で住居跡と同じである。この土坑から多くの土師器が出土している。

〈カマド〉 北壁中央やや東寄りに構築されている。煙道は分からず、カマドの長軸方向はN-23°-Eである。

カマドは径10~40cmの亜角礫12個をコの字状に埋置し土師器の甕を併用している。袖部の幅は芯材の外側で75cmある。燃焼部の焼土は、直径36cmの円形で厚さは3cm前後であり、浅皿状の凹地に形成されているがあまり焼けていない。

カマドの奥には大きな円礫があり、煙道の入口を塞ぐような位置にあることから、このカマドは煙道を持たない可能性がある。

〈時期〉 出土遺物から平安時代である。

#### 遺物（第29~31図、写真図版57）

37は壺と思われるが別の器種の可能性がある。内外面とも丸底気味であり、器面調整は、外面はロクロ調整、内面は丁寧なヘラミガキである。回転ヘラゲズリによる底部再調整がある。

38はロクロ使用の壺の口縁部破片である。器面調整は内外面ともヘラミガキが加わり、内面には黒色処理が施されている。

39はロクロ使用の壺の口縁部破片である。内面には黒色処理が施されている。

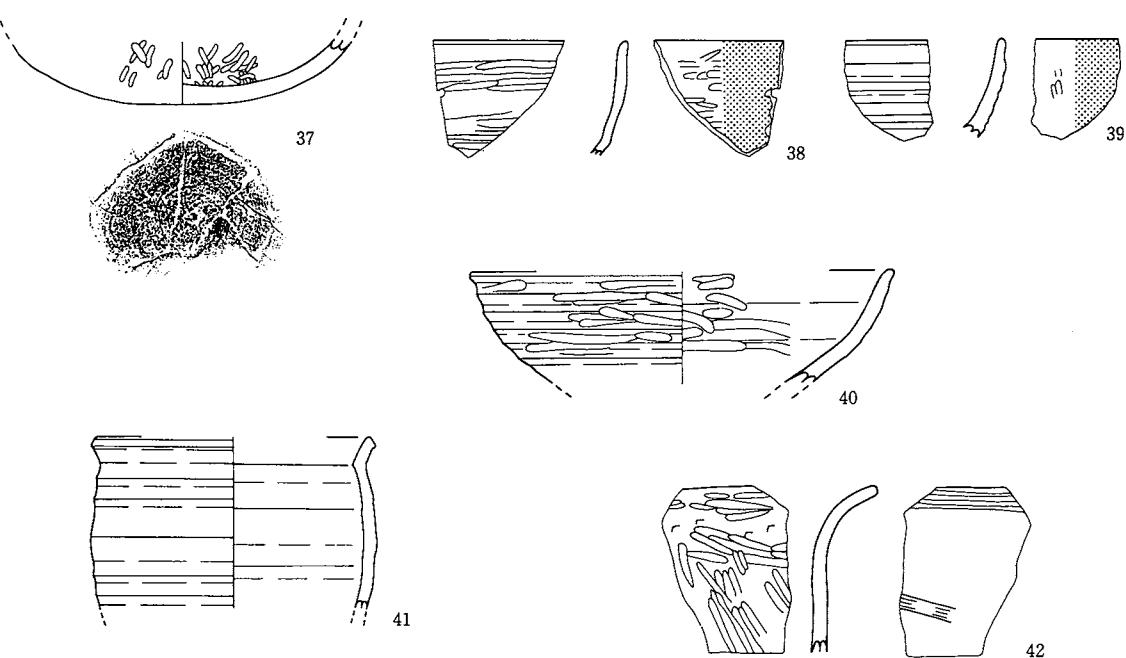
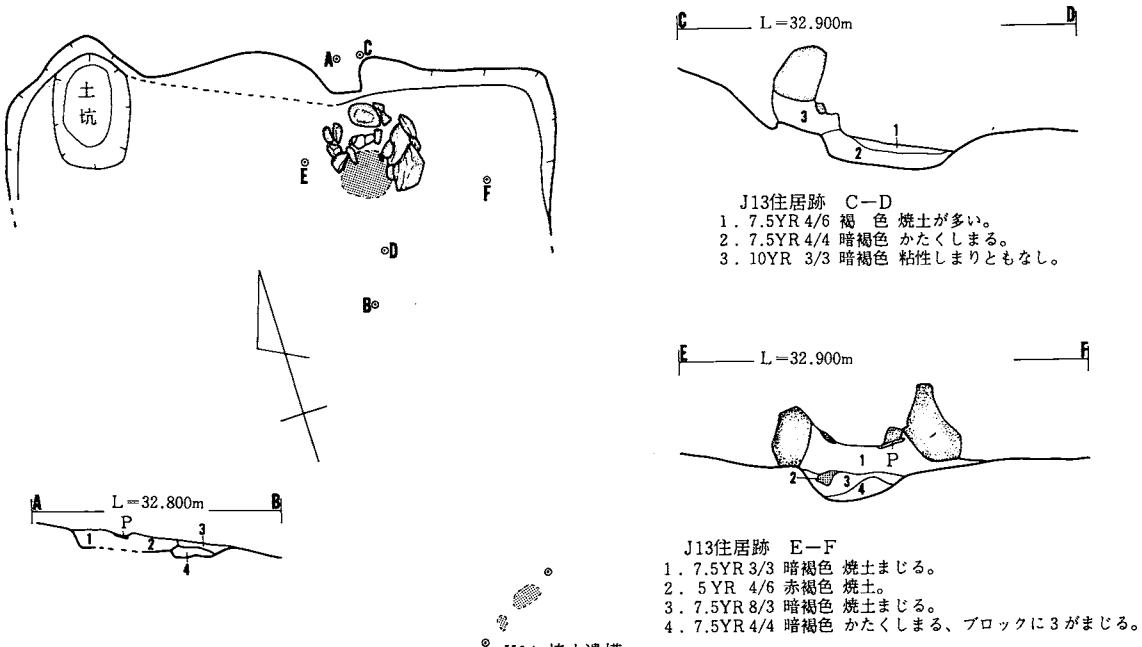
40はロクロ使用の壺の口縁部破片である。口縁部は内彎気味に外傾する。器面調整は内外面ともヘラミガキが加わる。

41はロクロ使用の甕で体部下半を欠く。頸部が僅かに括れ、口縁部は短く外傾する。口唇部はやや角張る。器面調整はロクロナデだけである。胎土に粒径3~5mmの小石が含まれる。

42はロクロ不使用の甕の口縁部破片である。口縁部は長く大きく外反する。器面調整は、外面はヘラミガキ、内面は口縁部はヨコナデ、体部はヘラナデである。

43はロクロ使用の甕である。破片の状態で出土しており復元できなかったので口縁部と底部を実測図に示した。口縁部は短く外反する。底部切り離しは回転糸切りである。下端はヘラゲズリによって再調整されている。胎土には粒径3~5mmの小石が多く含まれる。

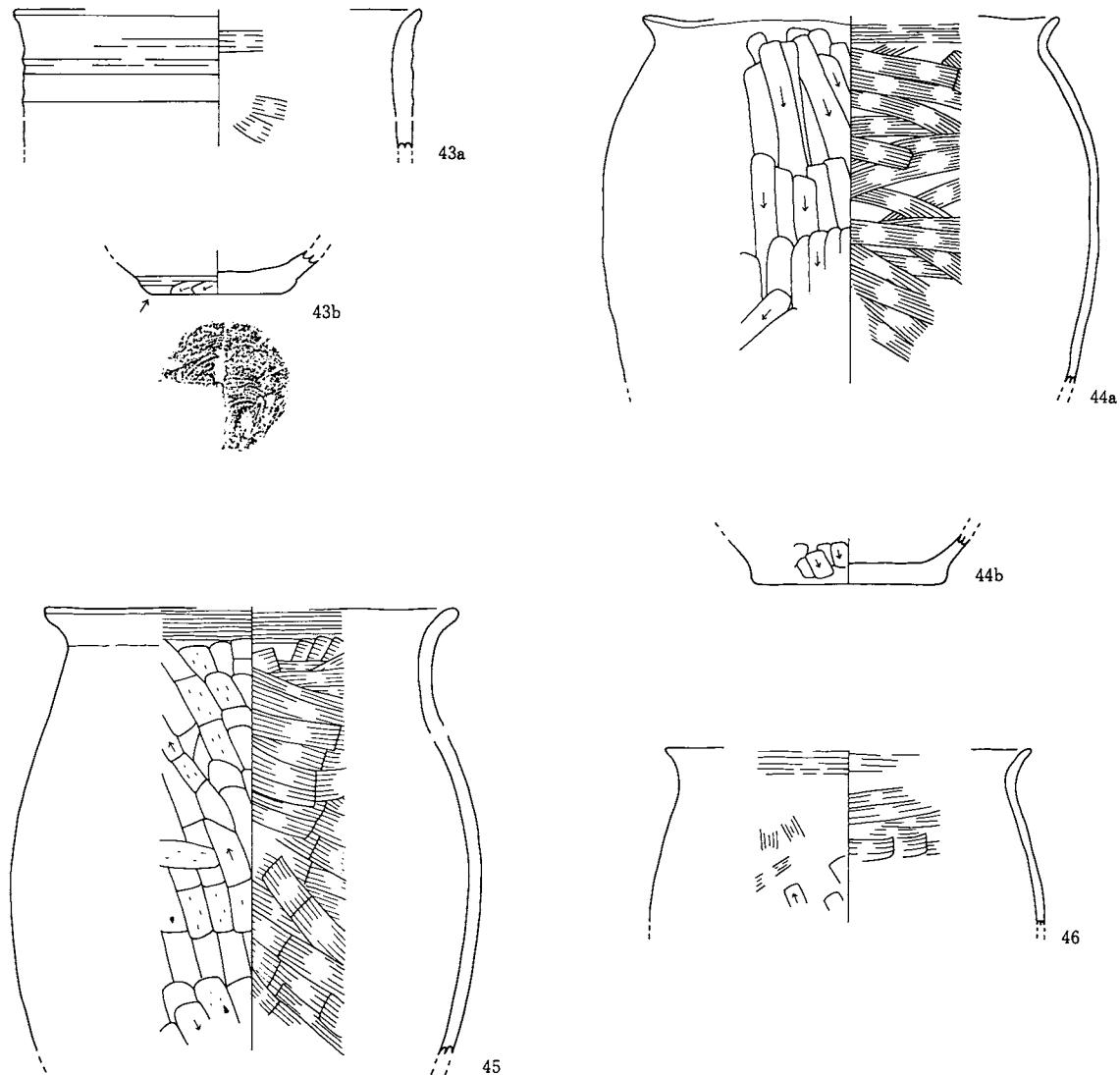
44はロクロ不使用の甕である。頸部に括れを持ち、口縁部は短く外反する。体部最大径を体



第29図 J13住居跡（遺構・遺物）

部上半に持ち体部は脹らむ。底部は下端が外側に僅かに張り出しへラケズリによる調整が加わる所がある。器面調整は、体部外面はヘラケズリ、内面は口縁部はヨコナデ、体部はヘラナデである。胎土に粒径3～5mmの小石を多く含む。内外面には煤が付着している。

45はロクロ不使用の甕で体部下半を欠く。頸部に括れを持ち、口縁部は短く外反する。口唇部はやや肥厚し、丸味を持つ。体部最大径を中央付近に持つ。器面調整は、外面は口縁部はヨコナデ体部はナタ状のヘラケズリ、内面は口縁部はヨコナデ体部はヘラナデである。少量で



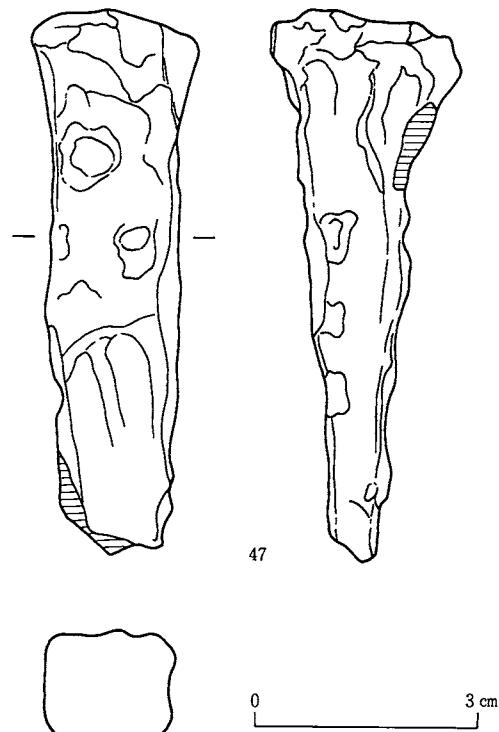
第30図 J13住居跡（遺物1）

あるが胎土に粒径5mm前後の小石を含む。外面には煤が多く付着している。

46はロクロ不使用の甕の口縁部付近である。頸部に括れを持ち、口縁部は短く外反する。体部は脹らむ。器面調整は、口縁部は内外とも弱いヨコナデ、体部は外面は部分的にヘラナデとヘラケズリ、内面はヘラナデである。

47は鉄製品で楔である。長さは7.4cm、最大幅2.6cm、中心部の厚さ1.3cmである。

鉄製品以外は、カマドと土坑から出土し接合したものが多い。



第31図 J13住居跡（遺物2）

#### G 15住居跡（第32図、写真図版12）

調査区の北東部に位置しE 13住居跡の南7.4m付近にある。雑木を撤去した段階で窪地があることから存在が予想されたものである。

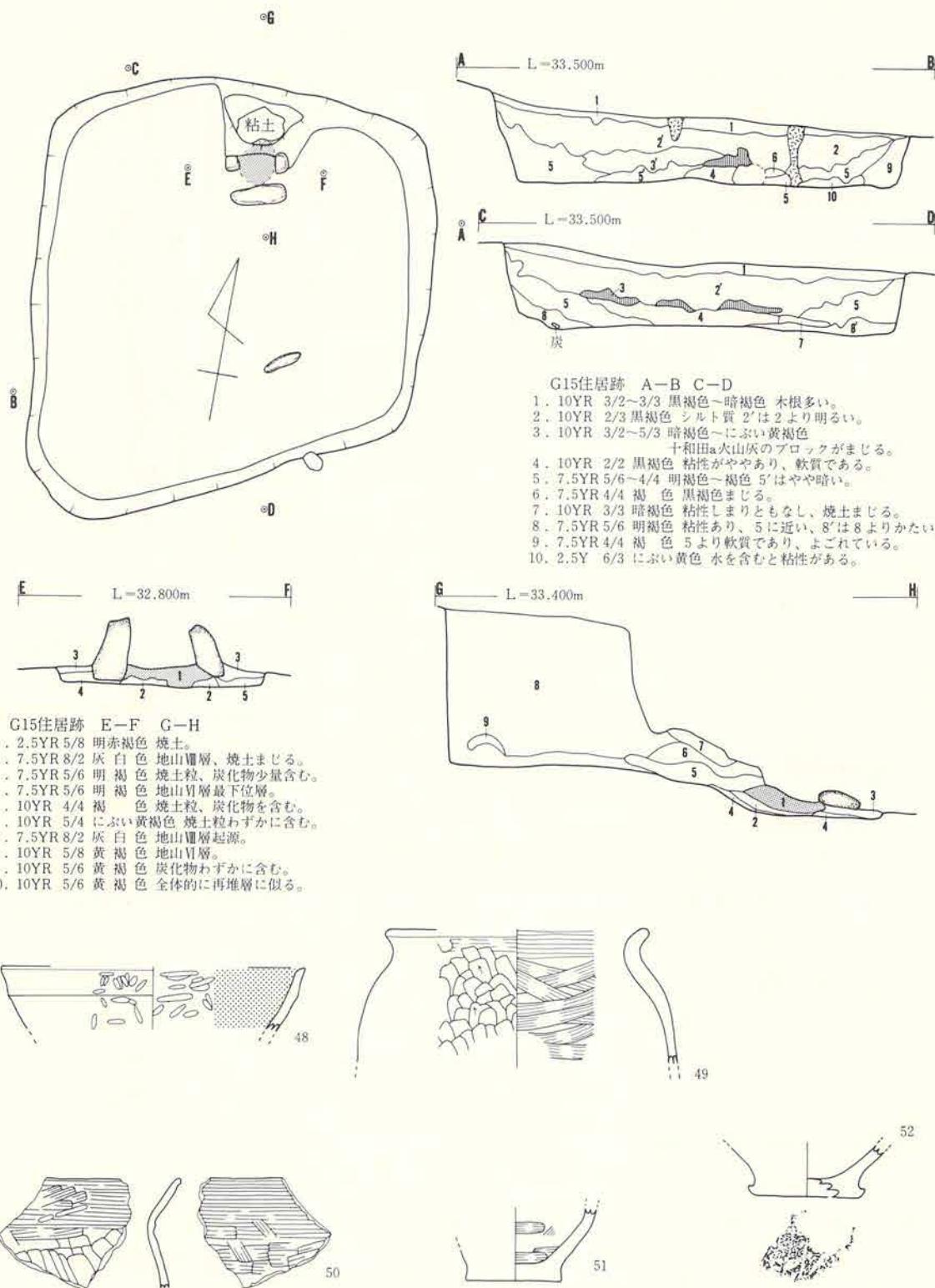
〈占地〉 南に下る稜線部の先端部を占地しており、遺構の南2m付近からやや急な斜面となる。

〈平面形・規模〉 平面形は隅丸台形に近い。規模は、南辺と北辺が3.5m、東辺が2.7m、西辺が3.6mである。底面積は11.0m<sup>2</sup>である。

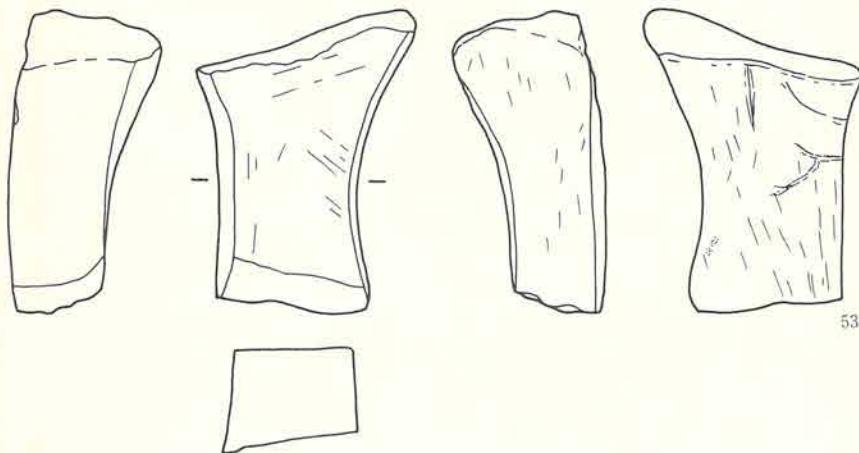
〈埋土〉 埋土は10層に細分される。全体的に上位は暗褐色土、中位は黒褐色土、壁際と下位は褐色土が多く、中央部では床面から20cmぐらいの所に十和田a降下火山灰が断続的に見られる。埋土下位には焼土や炭火材が少量含まれているが焼失住居跡と断定するほどではない。

〈壁〉 VI層を掘り込んでいるが壁際では埋土と地山の区別はしにくい。壁の立ち上がりは外傾する所が多い。壁高は北東部で最大90cm、南西部で最小50cmである。

〈床〉 床は全体に平坦であり比高差は5cm前後である。床面はVI層最下位面であるが北西部ではVIII層最上面の所もある。水を含むと粘性がある。柱穴や周溝は検出されていない。



第32図 G15住居跡（遺構・遺物）



53

第33図 G15住居跡（遺物）

〈カマド〉北壁中央付近に構築されている。カマドの長軸方向はN—9°—Wである。

袖部には長方形（ $28 \times 16 \times 9\text{ cm}$ ）と楕円形（ $30 \times 20 \times 7\text{ cm}$ ）の2個の礫を使用しており、壁際にはカマドに使用された灰白色の粘土質土（VIII層起源）が残っている。また床面には天井に使用された隅丸長方形（ $53 \times 19 \times 6\text{ cm}$ ）の焼けた凝灰岩がある。袖部の幅は芯材の外側で62cmある。

燃焼部の焼土は、直径40cmほどの円形で厚さは最大10cmほどあり、ほぼ水平に形成され良く焼けている。カマド縦断面では壁際まで立ち上がりが認められたが、煙道や煙出部は分からなかった。

〈時期〉埋土上位から出土した土師器の破片はロクロ使用と不使用のものがあるが、埋土の特徴から奈良時代である。

#### 遺物（第32・33図、写真図版58）

48はロクロ使用の壺の口縁部である。内外面ともロクロナデにヘラミガキが加わり、内面と口縁部外面は黒色処理されている。

49はロクロ不使用の甕の体部上半である。頸部に括れを持ち、短い口縁部は外反する。体部は脹らむ。器面調整は、外面は口縁部はヨコナデ体部はヘラケズリ、内面は口縁部はヨコナデ体部はヘラナデである。外面に煤が付着している。

50はロクロ不使用の甕の口縁部付近である。頸部に僅かに段を持ち、口縁部は長く外傾する。器面調整は、口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は外面はヘラケズリ内面はヘラナデである。頸部に煤が付着している。

51はロクロ不使用の甕の底部である。底部下端は外側に少し張り出している。底部外面の調

整は丁寧である。内面は丸底である。

52はロクロ不使用の甕の底部で欠けている。底部外面には木葉痕があり、下端は外側に張り出している。内面は丸底である。

53は平砥石である。表面と両側面が使用されており、砥面は中央が弓状に凹む。砥粒は細かく仕上げ砥である。長さは8cm、幅は5.9cm、厚さは2.7cm、重量は170gである。石質は流紋岩である。

砥石はカマド付近の床面から、その他は検出面や埋土上位からの出土である。

#### L 17住居跡（第34図、写真図版12）

調査区の北東部に位置しJ 13住居跡の南15m付近にある。M17住居跡を調査した際に北西部にあった栗の木を切ったところ、根の搅乱部分からロクロ成形の土師器の壊が多く出土し、さらに近くで壊9個が伏せた状態で重なって出土したことから、住居跡としたものである。

検出された床面は北壁近くの一部であり、東西方向2～3m、南北方向60～90cmである。床面はM17住居跡の床面より5cmほど高くなっている。北西部は栗の木で搅乱され、北東部は馬の遺体を埋めた際に搅乱されている。また、床面の大部分はM17住居跡の上に構築されていたものと思われるが、M17住居跡の調査の際に分からず掘り過ぎてしまった。

平面形・規模・カマドなどは不明である。埋土は暗褐色土の単層であり、再堆積層である地山との区別はしにくい。遺構の時期は出土遺物から平安時代である。

#### 遺物（第35・36図、写真図版58・59）

54～62はロクロ使用の内面黒色処理された壊である。

54～58は58を最上位として伏せた状態で出土している。また59～62も同じ地点で62を最上位として同様の状態で出土している。

54は、体部は内彎して立ち上がり、外面は口縁部～体部上半までヘラミガキ、内面は丁寧なヘラミガキで底部内面は放射状に磨かれている。底部切り離しは回転糸切りであり、下端にヘラケズリが部分的にみられる。

55は、体部は内彎して立ち上がり、外面は口縁部～体部上半までヘラミガキ、内面は丁寧なヘラミガキで底部内面は放射状に磨かれている。底部切り離しは回転糸切りであり、再調整は部分的にみられる。

56は、体部は内彎して立ち上がり、外面は全面ヘラミガキ、内面はヘラミガキである。底部切り離しは回転糸切りであり、ミガキは底面の外縁に及ぶ。

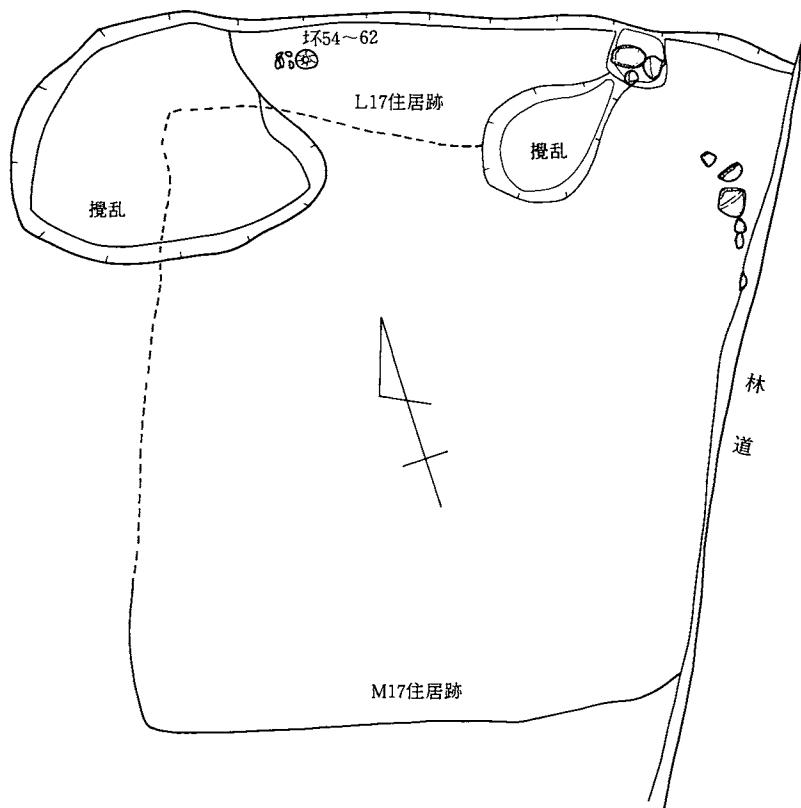
57は、体部は外傾して立ち上がり、外面にミガキはなく、内面はヘラミガキで底部内面は放射状に磨かれている。底部切り離しは回転糸切りで下端はヘラケズリで光沢を持つ。

58は高台を持つ壺である。体部は緩く内弯して立ち上がり、口縁部は外反する。外面にミガキはなく、内面はヘラミガキで底部内面は放射状に磨かれている。壺部の切り離しは回転糸切りである。モミ痕が内面に2個、高台部外面に1個、計3個（鑑定結果は大麦類似種）ある。

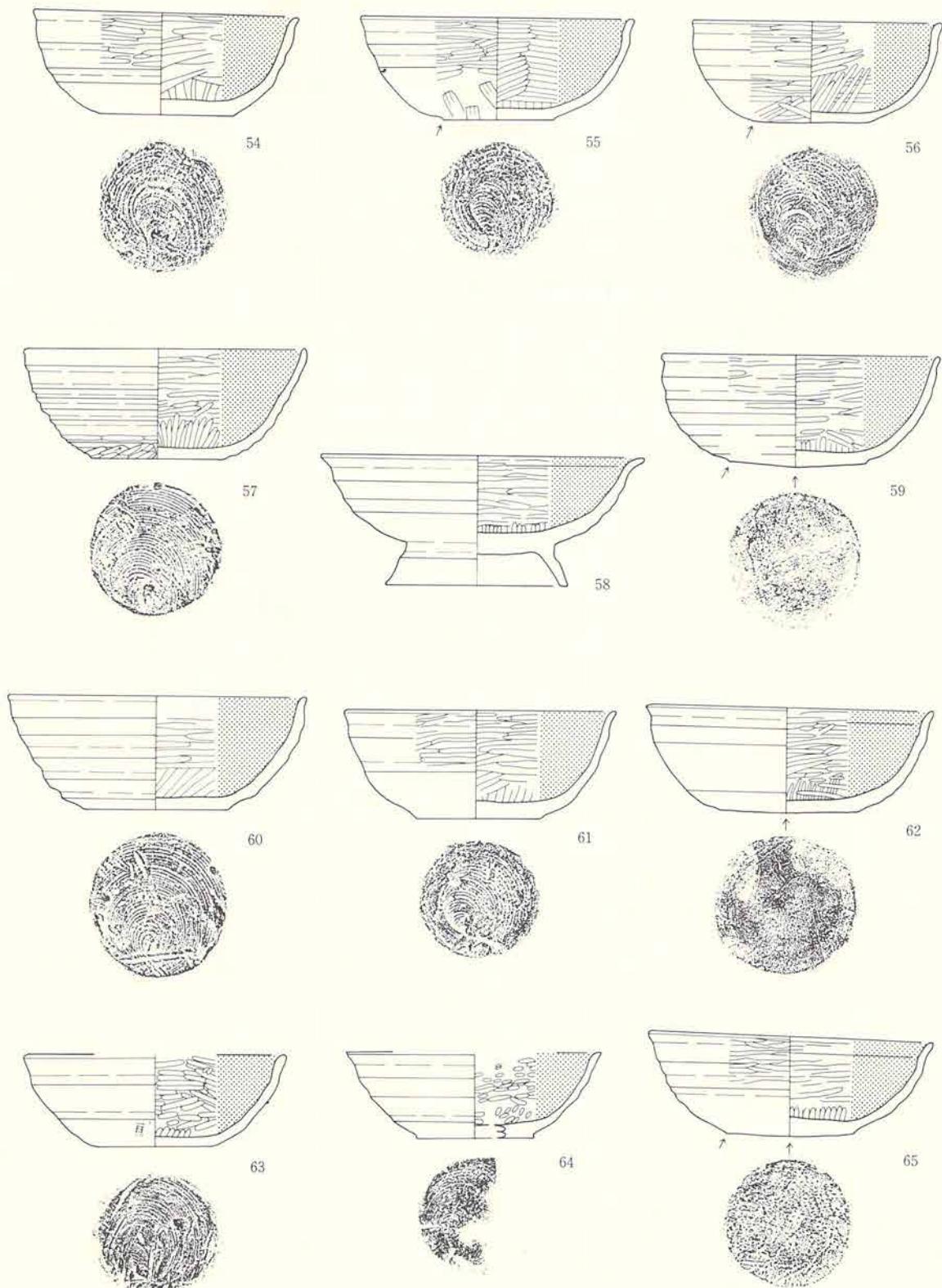
59は、体部は内弯して立ち上がり、外面は口縁部～体部上半までヘラミガキ、内面はヘラミガキで底部内面は放射状に磨かれている。底部は手持ちヘラケズリによる再調整である。体部外面にモミ痕が1個（鑑定結果は大麦類似種）ある。

60は、体部は内弯して立ち上がり、外面にミガキはなく、内面はヘラミガキである。内面の黒色処理は底部を中心に消失している。底部切り離しは回転糸切りで一本のヘラガキがある。

61は、体部は内弯して立ち上がり、外面は口縁部～体部上半までヘラミガキ、内面はヘラミガキで底部内面は放射状に磨かれている。黒色処理は部分的に消失している。底部切り離しは



第34図 L17住居跡（遺構）



第35図 L17住居跡（遺物 1）

回転糸切りで下端は部分的に再調整されている。

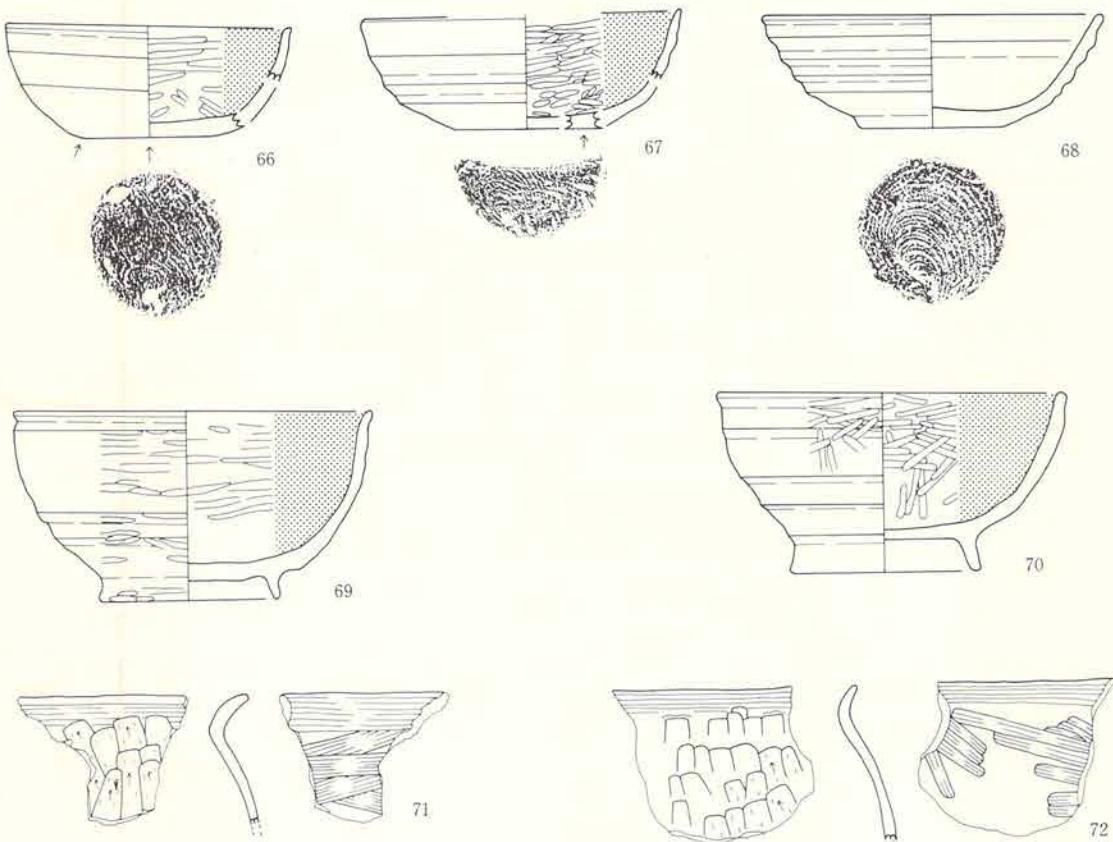
62は、体部は内弯して立ち上がり、外面にミガキはなく、内面はヘラミガキで底部内面は放射状に磨かれている。底部は手持ちヘラケズリによる再調整である。モミ痕が内外面に8個(鑑定結果は6個が大麦類似種であり、2個は同定不能であった。)ある。

63は、体部は内弯して立ち上がり、外面にミガキはなく、内面は強いヘラミガキである。底部切り離しは回転糸切りである。

64~70は北西部の攪乱部から一括出土したものである。すべてロクロ使用の坏であり、68以外は内面黒色処理されている。

64は、体部は内弯して立ち上がり、外面にミガキはなく、内面はヘラミガキで底部内面は放射状に磨かれている。底部切り離しは回転糸切りで部分的に再調整がある。

65は、体部はやや内弯して立ち上がり、外面は口縁部~体部上半までヘラミガキ、内面はヘ



第36図 L17住居跡(遺物2)

ラミガキで底部内面は放射状に磨かれている。内面の黒色処理は一部消失している。底部は手持ちヘラケズリによる再調整である。

66は、体部は内彎して立ち上がり、外面にミガキはなく、内面はヘラミガキである。内面の黒色処理やミガキは一部消失している。底部切り離しは回転糸切りで再調整されている。

67は、体部は内彎して立ち上がり、外面にミガキはなく、内面はヘラミガキである。底部切り離しは回転糸切りである。

68は赤焼き土器である。内外面ともミガキがなく、黒色処理も施されていない。底部切り離しは回転糸切りである。

69は高台を持つ壺である。高台部は低く、下端から壺接合部までは直立し、壺部は内彎して立ち上がる。内外面ともヘラミガキ後黒色処理が施されている。

70は高台を持つ壺である。高台部は下端が開きハの字状を呈し、壺部は内彎して立ち上がる。外面の口縁部と内面はヘラミガキであり、黒色処理されている。

71はロクロ不使用の甕の口縁部の破片である。頸部に括れを持ち、口縁部は外反し、口唇部は角張る。体部中央の脹らむ球胴甕と思われる。器面調整は、外面は口縁部はヨコナデ体部はヘラケズリ、内面は口縁部はヨコナデ体部はヘラナデである。

72はロクロ不使用の甕の口縁部の破片である。頸部に括れを持ち、口縁部は短く外反する。器面調整は、外面は口縁部はヨコナデ体部はヘラケズリ、内面は口縁部はヨコナデ体部はヘラナデである。

#### M17住居跡（第37図、写真図版13）

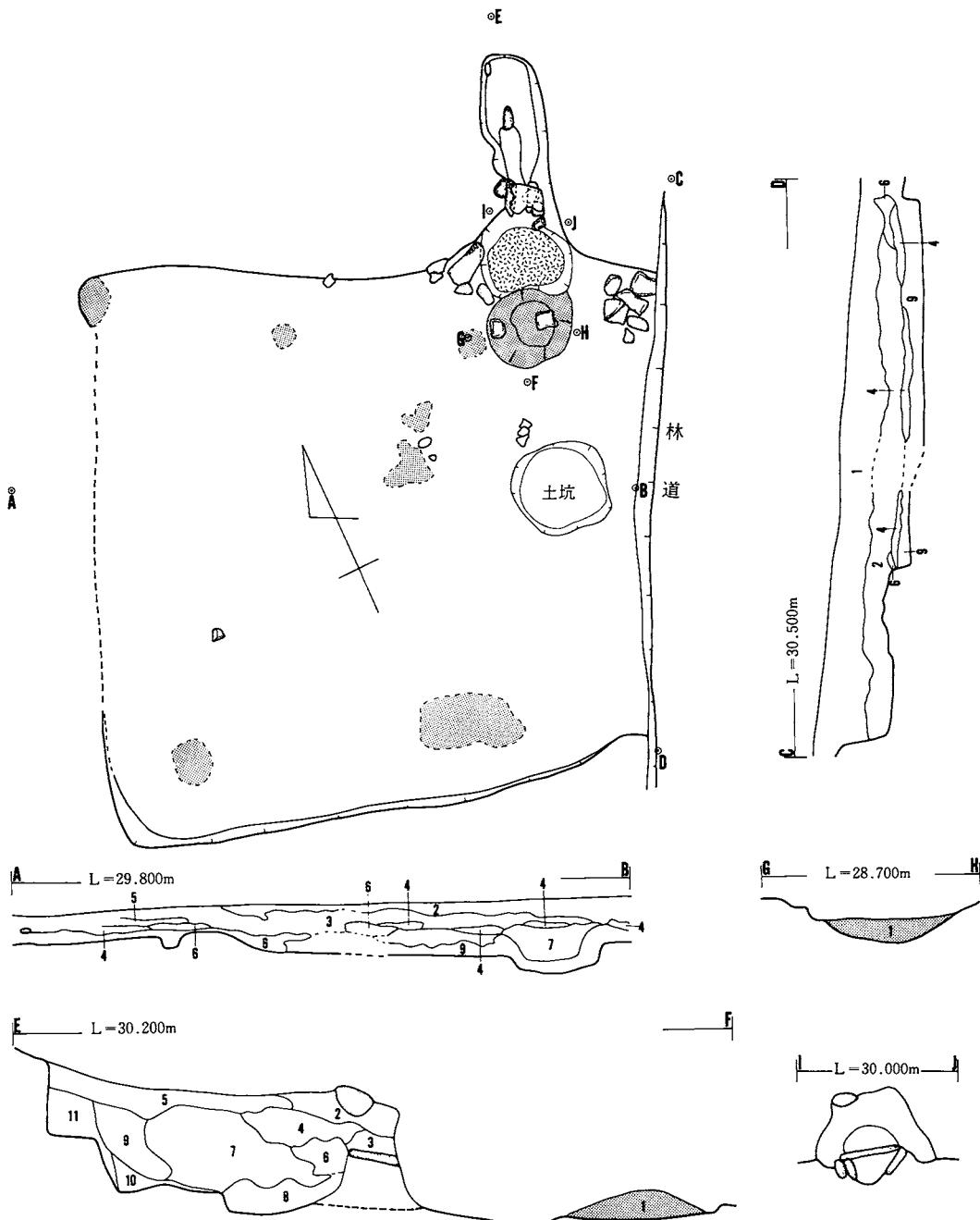
調査区の北東部に位置しJ13住居跡の南15m付近にある。遺構の北半は山林、南半は畠地の部分にあり、南半の耕作土を除去した際焼土があることから住居跡の可能性を考えて調査を進めた。東側は林道であるため一部調査していない。北壁付近の上位面でL17住居跡が検出されている。

〈占地〉 南に下る緩斜面の裾部を占地しており、地形区のA区とB区の境界付近にある。

〈平面形・規模〉 遺構は東側の林道部分まで拡大するものと思われるが、平面形は隅丸長方形と推定される。規模は調査範囲内で、東西方向が4.80m、南北方向が4.60mである。床面積は21.1m<sup>2</sup>である。

〈埋土〉 埋土は9層に細分されるが、全体的に黒褐色～黒色の混土である。遺構がIV～VI層起源の再堆積層を掘って構築されており、埋土と地山の判別はしにくい。

〈壁〉 南半は畠地として削平されており、北半はL17住居跡と重複している。さらに木根による搅乱もあり、壁の立ち上がりは殆どない。



M17住居跡 A-B C-D

1. 10YR 3/2 黒褐色 粘性しまりともなし、暗褐色まじる。
2. 10YR 2/2 黒褐色 1より粘性しまりともあり、炭化物少量含む。
3. 10YR 2/1 黒 色 2よりしまりなし。
4. 10YR 2/2 黒褐色 かたくしまる、貼り床。
5. 10YR 3/2 黒褐色 1に類似。
6. 10YR 2/2 黒褐色 焼土ブロックが多くはいる。
7. 10YR 2/2 黒褐色 非常にしまりなくもろい、焼土・炭まじる。
8. 10YR 2/1 黑 色 全体的にかたい。
9. 10YR 2/1 黑 色 褐色のブロックがはいる。

M17住居跡 E-F G-H

1. 5 YR 5/8 明赤褐色 焼土、よくやけている。
2. 10YR 4/3 黄 色 煙道上部に貼りつけたもの。
3. 7.5YR 3/3 暗 褐 色 2がやけたもの。
4. 10YR 2/2 黑 褐 色 粘性しまりともなし、極暗褐色焼土含む。
5. 10YR 3/2 黑 褐 色 シルト質。
6. 7.5YR 3/3 暗 褐 色 烧土ブロック多い。
7. 10YR 2/3 黑 褐 色 粘性しまりともなし、少しやけている。
8. 7.5YR 2/2 黑 褐 色 烧土ブロック含む、7よりやけている。
9. 10YR 3/2 黑 褐 色 やけた黒褐色含む、煙出し部。
10. 10YR 3/3 暗 褐 色 上部がやけている。
11. 10YR 3/2 黑 褐 色 粘性なくかたくしまる。

第37図 M17住居跡（遺構）

〈焼土〉薄くしまりのない焼土が所々に分布している。南半を調査した時点では堅い床面もないことから投げ込まれた可能性を考えていたが、北半では焼土の下に堅い床面があることから現地性焼土であることが判明した。焼土分布が遺構の広がりを決める手掛かりになった。この住居跡は焼失住居と思われるが炭化材はない。

〈床〉北半では焼土の下に比較的堅い床面がある。床面には緩い凹凸があり、比高差は5～10cmである。南半では床面をとらえることはできなかったが、埋土断面には厚さ3～10cmの堅い貼り床に相当する部分がある。柱穴や周溝は検出されていない。

〈土坑〉燃焼部焼土の南70cm付近にあり、東西の埋土断面で検出された。平面形は円形である。規模は、開口部径83×78cm、底部径72×68cm、深さは30cmである。埋土は、黒褐色～黒色でしまりはなく、焼土や炭化物が混じる。最上位には黒褐色土の貼り床状の部分があることから住居跡に先行するものと思われる。

〈カマド〉北壁中央やや東寄りに構築されており、総長約2.7m、壁外約1.7mである。カマドの長軸方向はN-19°-Eである。

本体部は崩壊しており、使用された礫は燃焼部焼土の東西に散在している。煙道入口付近には豚の遺体を埋めた穴があり、その際にカマドが破壊された可能性がある。

燃焼部の焼土は、直径70cmの円形で厚さは最大11cmであり、浅皿状の凹地に形成され、良く焼けて堅くしまる。

煙道は掘り込み式と思われる。入口付近は板状の礫を両脇と天井に使用し粘性土を貼り付けて作られている。煙道は僅かに上り勾配であり、煙出口付近では外傾して立ち上がり煙出口は分からぬ。

〈時期〉遺構の時期は出土遺物から平安時代である。

#### 遺物（第38図、写真図版59）

73はロクロ使用の壺の高台部である。高台部は低く、下端から壺接合部までは直立する。

74はロクロ不使用の甕の口縁部付近である。頸部に括れを持ち、口縁部は直立した後外反する体部の脹らむ球胴甕である。器面調整は口縁部は内外面ともヘラミガキである。

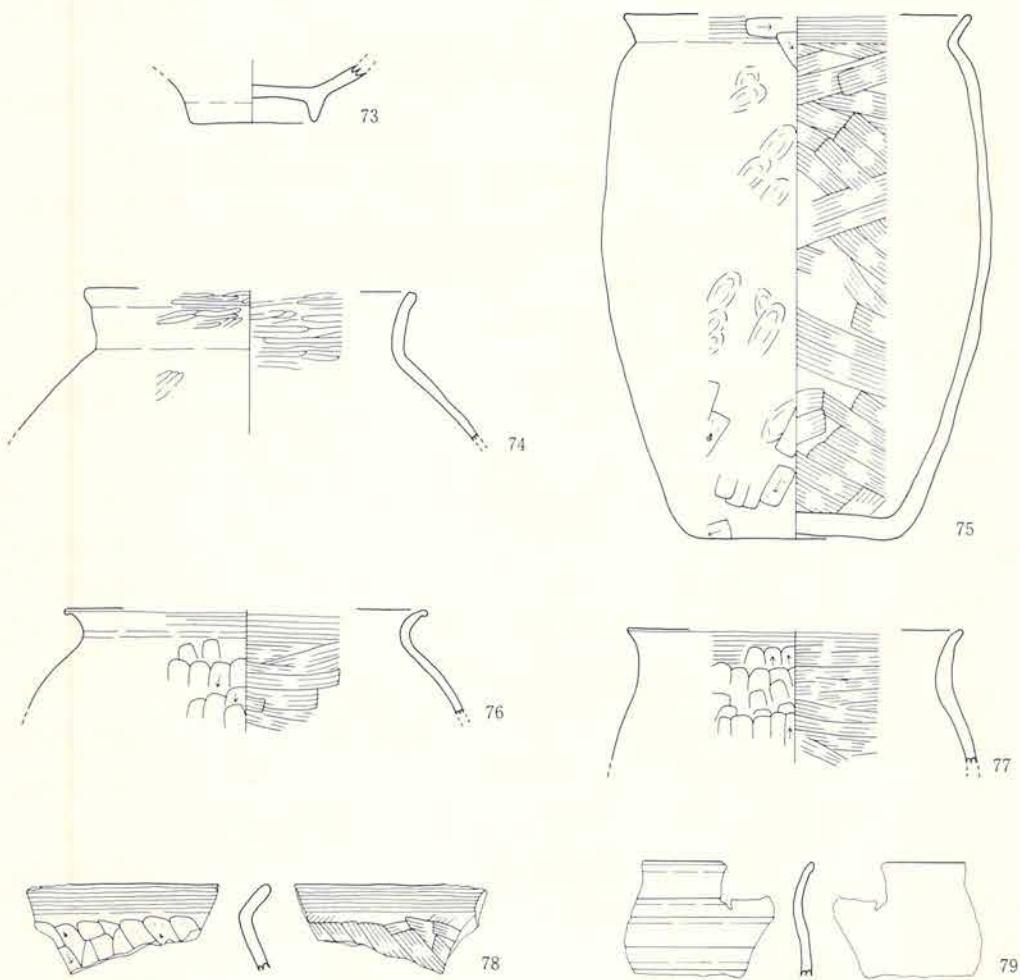
75はロクロ不使用の甕である。頸部に括れを持ち、口縁部は短く外反する。体部最大径は中央付近にあり、底部下端にかけて緩く窄む。器面調整は、口縁部は内外ともヨコナデ、体部は外面は指頭による押圧、内面は粗いヘラナデである。底部は平底で外面には撫糸の圧痕がある。胎土に粒径5～10mmの小石が少量混じる。

76はロクロ不使用の甕の口縁部付近である。頸部に括れを持ち、口縁部は短く外反し、口唇部は丸い。体部の脹らむ球胴甕である。器面調整は、口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は内面はヘラナデであるが外面は極めて弱いヘラケズリである。

77はロクロ不使用の甕の口縁部付近である。頸部は緩く括れ、口縁部は短く外反し、口唇部は丸い。器面調整は、外面は口縁部がヨコナデ体部はヘラケズリ、内面は口縁部はヨコナデ体部はヘラナデである。

78はロクロ不使用の甕の口縁部の破片である。頸部に括れを持ち、口縁部は外傾する。器面調整は、口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は外面はヘラケズリ、内面はヘラナデである。

79はロクロ使用の甕で体部下半を欠く。頸部は緩く括れ、口縁部は短く外傾する。



第38図 M17住居跡（遺物）

出土状況は、73は床面から、74・77・78はカマド脇から、75・76・79は埋土から出土している。埋土から出土しているものは、L17住居跡埋土と共に可能性がある。

#### | 19住居跡（第39図、写真図版14）

調査区の北東部に位置しG15住居跡の南14.7m付近にある。表土を除去した段階で十和田a降下火山灰が堆積する円形に近い輪郭として検出された。M17住居跡と同様の地形面を占地しており、遺構の南半は畠地として削平されている。

〈占地〉 南に下る緩斜面の裾部を占地しており、地形区のA区とB区の境界付近にある。

〈平面形・規模〉 南半を欠くが平面形は隅丸方形と推定される。規模は東西方向が4.26mあり、調査範囲内の床面積は10.0m<sup>2</sup>である。

〈埋土〉 5層に細分され、上位は黒褐色～黒色土、下位は暗褐色土、壁近くは褐色土である。上位には十和田a降下火山灰が、下位には焼土が混じる。全体に木根による攢乱がある。

〈壁〉 IV～VI層起源の再堆積層を掘って作られている。壁は崩壊している所が多く、外傾して立ち上がる。壁高は北壁で最大40cmである。

〈焼土〉 中央付近では径100×66cmの範囲に焼土が形成されている。厚さは最大6cmあり、燃焼部の焼土よりも厚く良く焼けている。炭化材はみられない。

〈床〉 床面はVI層上面であり、全体的にしまりなく軟質である。床面は東で高く西で低い。比高差は最大20cmである。貼り床はみられない。柱穴や周溝はない。

〈カマド〉 北壁中央付近から60cmほど内側に構築されていたものと推定される。カマドの長軸方向はN-約20°-Eである。本体部は崩壊しており、径15～29cmの板状の礫が多くみられる。カマドの構造は分らない。燃焼部には僅かに焼土がみられる。煙道は検出されていない。

〈時期〉 遺構の時期は、出土遺物や埋土の特徴から奈良時代である。

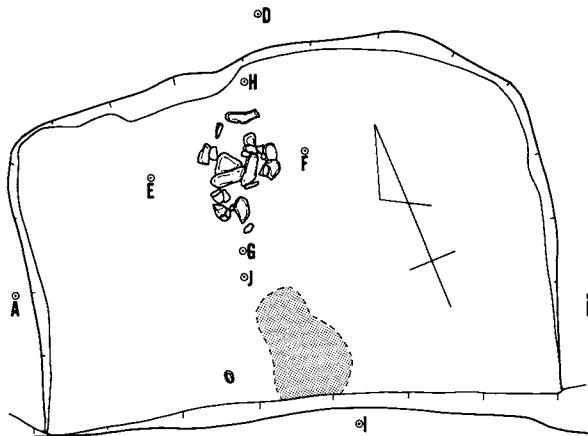
#### 遺物（第39図、写真図版60）

80はロクロ不使用の壺である。内外面とも体部中央よりやや上に段を持ち、口縁部は外傾する。底部は丸底である。器面調整は、外面は口縁部がヘラミガキのほかはヘラケズリ、内面はヘラミガキである。さらに内外面とも黒色処理されている。

81はロクロ不使用の壺である。内外面とも体部中央よりやや上に段を持ち、口縁部は外傾する。底部は丸底である。器面調整は、外面は口縁部がヨコナデのほかはヘラケズリで光沢があり、内面はヘラミガキである。内面には黒色処理が施されているが消失している所が多い。

82はロクロ不使用の壺である。内外面とも段ではなく、丸底である。口唇部は厚く丸いが、剝落している所が多い。内外面ともヘラミガキによる調整が所々に残っている。

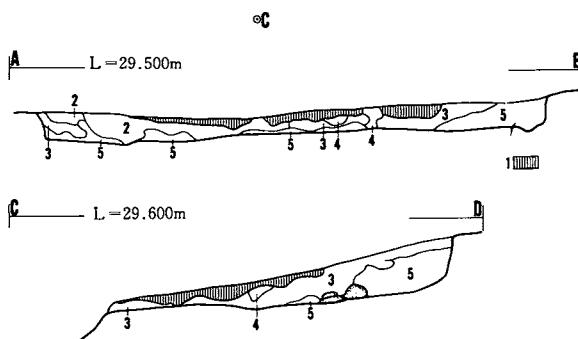
3点ともカマド付近の埋土から出土している。



E — L = 29.100m — F

G — L = 29.100m — H

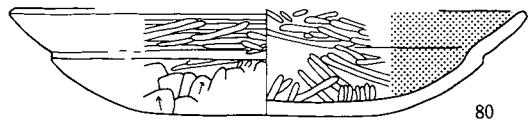
- I19住居跡 E—F G—H  
 1. 10YR 3/2 黒褐色 ややしまる。  
 2. 7.5YR 3/3 暗褐色 粘性しまりともなし、焼土・炭化物含む。  
 3. 5 YR 4/6 赤褐色 焼土、少しやけているだけである。  
 4. 10YR 4/6 褐色  
 5. 7.5YR 4/4 褐色



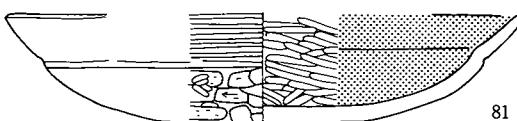
I — L = 28.900m — J

- I19住居跡 I～J  
 1. 5 YR 3/6 暗赤褐色 よくやけている。  
 2. 7.5YR 4/4 褐色 焼土少量含む。

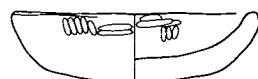
- I19住居跡 A—B C—D  
 1. 10YR 3/2 黒褐色 十和田火山灰のブロック含む、木根あり。  
 2. 10YR 2/1 黒 色 黒褐色～暗褐色のブロック含む。  
 3. 10YR 3/3 暗褐色 シルト質、南側の床面には焼土が多い。  
 4. 10YR 3/2 黒褐色 十和田火山灰が細粒状にはいる擾乱層。  
 5. 10YR 4/5 褐 色 シルト質。



80



81



82

第39図 I19住居跡（遺構・遺物）

#### K 22住居跡（第40図、写真図版14）

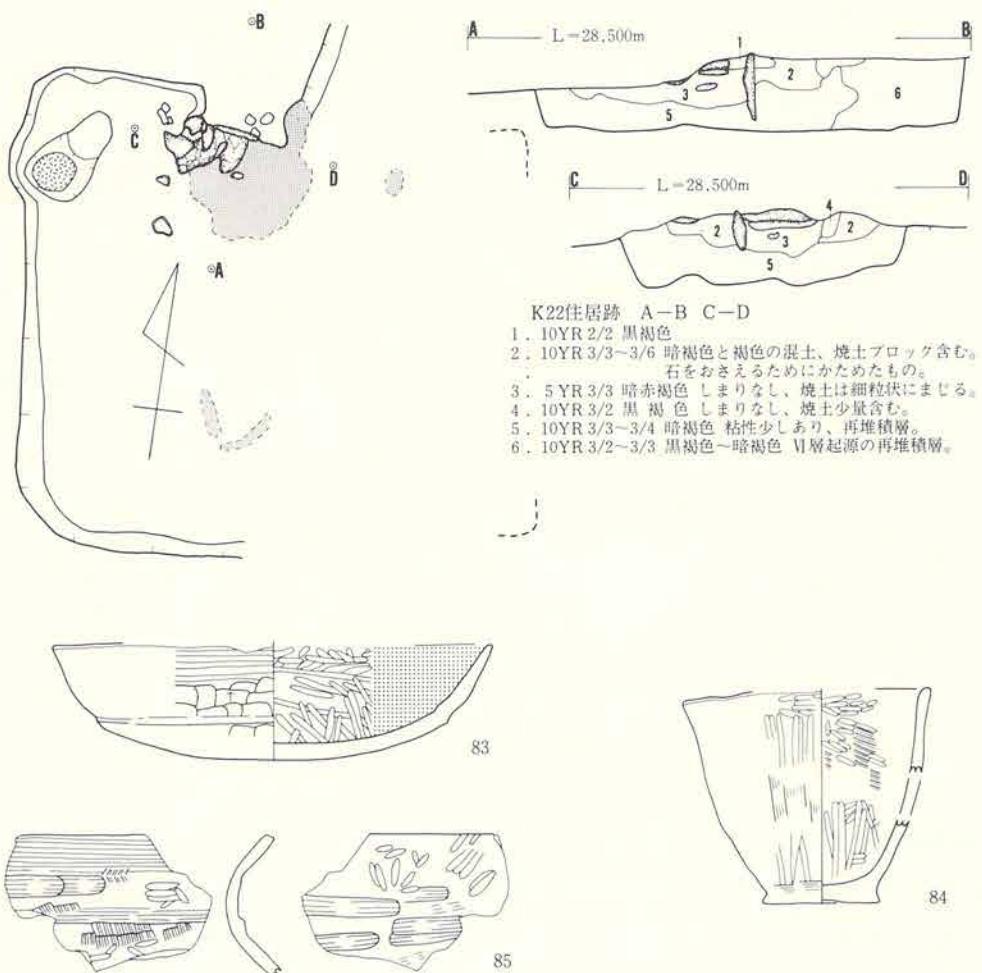
調査区の中央部に位置し I 19住居跡の南14m付近にある。西5.6m付近には J 24住居跡がある。表土を除去した段階では検出されず、更に、検出面を15cmほど下げたところ、潰れたカマドや焼土が検出され住居跡であることが判明した。したがって、遺構の東半は掘り過ぎている。

〈占地〉 平坦面を占地しているが、北側は僅かに低く雨後には地表水は西流する。

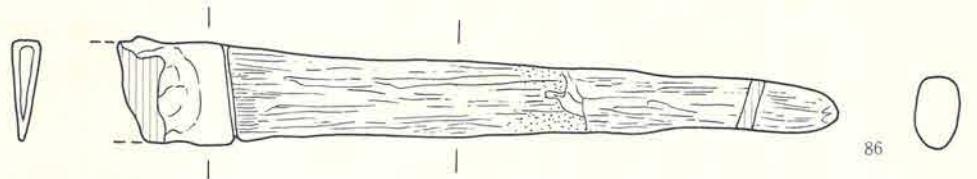
〈平面形・規模〉 耕作による攪乱が著しく、形状をとらえることは困難であったが、僅かにみられる焼土を手掛かりに調査した。平面形は隅丸方形と推定される。規模は南北方向が3.74mである。調査範囲の床面積は6.9m<sup>2</sup>であるが、本来の規模は13m<sup>2</sup>前後と推定される。

〈埋土〉 VI層起源のやや粘性のある黒褐色土層を掘り込んでいるが、埋土と地山の区別がつきにくく実測していない。埋土に十和田a降下火山灰のブロックが少量みられる。

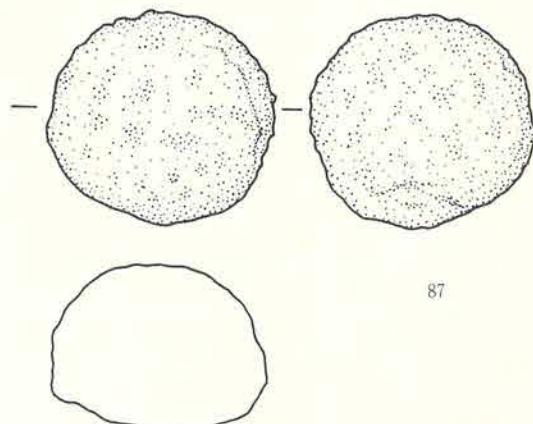
〈壁〉 西壁～南壁にかけて不連続ではあるが、壁の立ち上がりが認められた。壁高は20cm前



第40図 K22住居跡（遺構・遺物）



86



87

後である。東壁は分からぬ。

〈床〉 耕作による攪乱は床面まで及んでいるが、堅い床面ではなく、所々に焼けた床面がみられる。柱穴や周溝は検出されていない。

〈カマド〉 北壁のほぼ中央付近に構築されている。煙道は検出されていないが長軸方向はN-1°-Eである。

本体部は潰れているが使用した板状の礫が残っている。カマドは両袖に板状の礫を埋置し、天井に板状の礫を重ねて作られているが、右袖の芯材は風化して痕跡だけがある。袖部の幅は芯材の外側で約50cmである。更にカマドの奥には長方形(50×23cm)の凝灰岩が煙道の入口を塞ぐような位置に埋められている。燃焼部の焼土形成は不良であり、埋土に細粒のブロックが混じる。カマド縦断面では煙道は分からなかった。

〈時期〉 遺構の時期は出土遺物から奈良時代である。

#### 遺物 (第40・41図、写真図版60)

83はロクロ不使用の壺である。外面の体部中央より下位に段を持ち、口縁部はやや内彎気味に外傾する。底部は丸底である。器面調整は、外面は口縁部は主にヨコナデ体部はヘラケズリ、内面はヘラミガキ後黒色処理されている。

84はロクロ不使用の小型の甕である。頸部は僅かに括れ、口縁部は外傾する。口縁部に最大径を持ち、全体的に窄まるように底部に続く。底部下端は外側に張り出し、底部内面は丸底気味である。器面調整は、外面は粗いヘラミガキ、内面は刷毛目後ヘラミガキである。

第41図 K22住居跡 (遺物)

85はロクロ不使用の甕と思われる口縁部の破片である。頸部外面に段を持ち口縁部は外反し、口唇部は角張る。口縁部の調整は、外面はヨコナデ、内面はヘラミガキであり煤の付着がみられる。口縁部に一部刷毛目が残る。

86は鉄製品で刀子の柄部である。関付近で欠損しており、現存長は9.5cmである。茎部全体が木質部に被われている。

87は磨石である。風化が著しく磨面は残っていない。石質は極粗粒砂岩である。計測値は長さ5.76cm、厚さ4.42cm、重量161gである。

出土状況は、83・84はカマド付近から、85・87は検出面から、86は南西壁付近から出土している。

#### J 24住居跡（第42図、写真図版15）

調査区の中央部に位置しK 22住居跡の西5.7m付近にある。また、南東7.4mにはL 25住居跡、南西7.3mにはI 27住居跡がある。表土を除去した時点では輪郭が分からなかったが、トレーナーで20cmほど下げたところ、土師器や琥珀、カマドの構成礫などが出土したことから住居跡であることが判明した。

〈占地〉 ほぼ平坦面を占地している。地山は緩やかな波状地形を示し、北側一帯は僅かに低くなり、雨後に地表水は西流するため占地条件は良い。

〈平面形・規模〉 北西壁付近は木根によって大きく攪乱されているが、平面形は隅丸長方形に近い。規模は、北西—南東方向が3.60m、北東—南西方向が3.10mである。床面積は9.0m<sup>2</sup>である。

〈埋土〉 埋土は暗褐色～褐色土の単層に近いが、全体的に南側が汚れている。

〈壁〉 壁の上位は耕作によって攪乱されており、残存する壁高は5～10cmである。

〈床〉 床面はVI層下位面と礫の混じるVII層の上面であり、堅くしまる。床面には小さな凹凸があるが、全体的には平坦で比高差は5cm前後である。カマドと土坑の間は新しい攪乱があり低くなっている。柱穴や周溝は検出されていない。

〈土坑〉 北西隅にあり、平面形は隅丸方形である。規模は、開口部径110×96cm、底部径83×75cm、深さは中心部で30cmである。底面は南側が浅くなっている。埋土は住居跡と同じであり、住居跡に付属するものである。

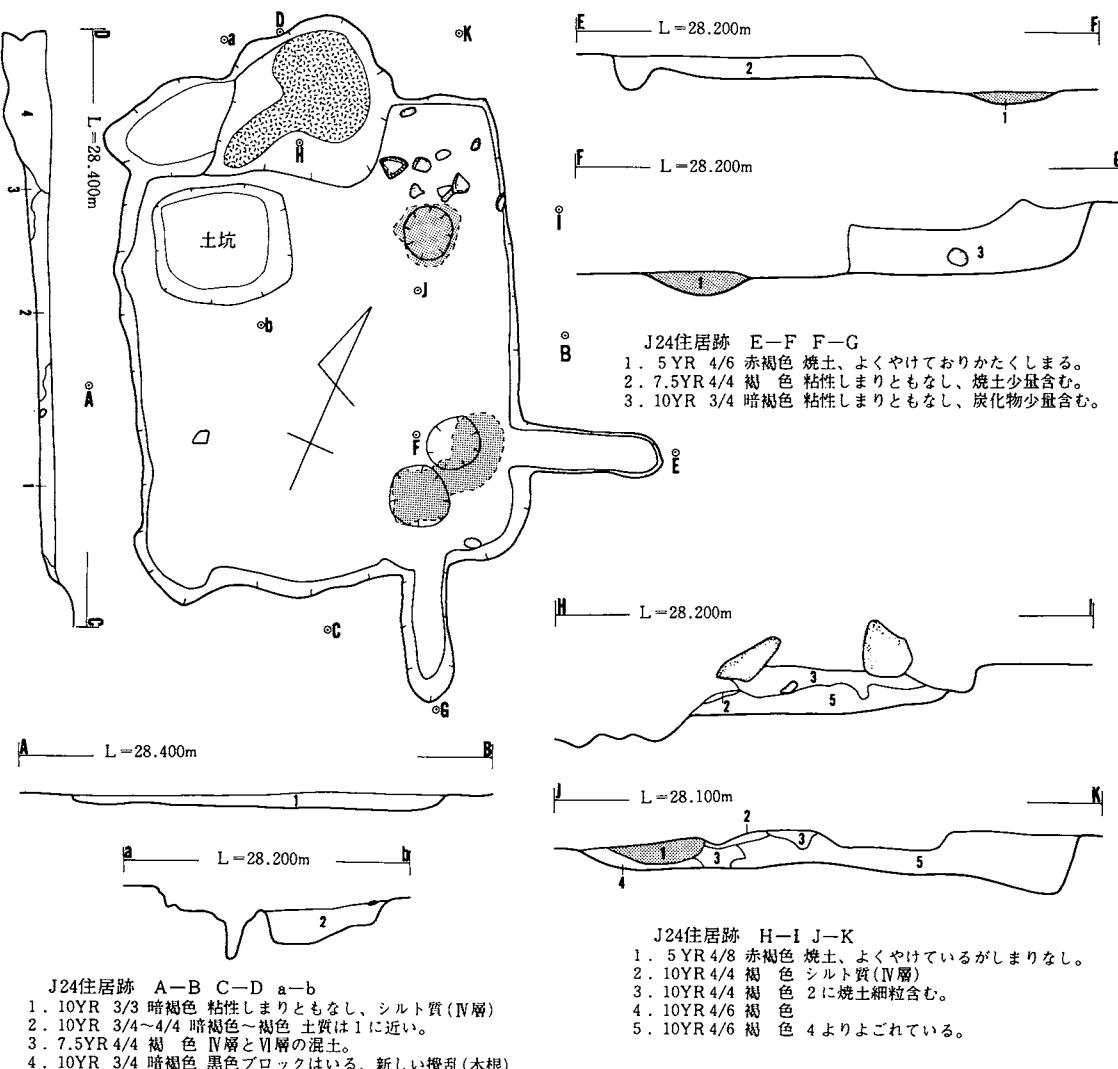
〈カマド〉 カマドは3基検出された。北壁の3号カマドが最も新しい。東隅にある1号と2号カマドの新旧関係は不明である。

1号カマドは、北東壁の東隅寄りに構築されており、総長1.88m、壁外1.22mである。長軸方向はN-70°-Eである。燃焼部の焼土は、厚さ最大5cmで良く焼けている。煙道は壁際からほ

ほぼ水平である。煙出部は上位を欠くため不明である。

2号カマドは、南東壁の東隅寄りに構築されており、総長1.92m、壁外1.12mである。長軸方向はS-26°-Eである。燃焼部の焼土は厚さ最大9cmで良く焼けている。煙道は水平である。煙出部は上位を欠くため不明である。1号・2号カマドとも煙道は割り貫き式と思われる。

3号カマドは、北隅に構築されているが、煙道は検出されていない。長軸方向はN-6°-Wである。袖部には亜角礫2個を芯材として使用している。左袖の礫は26×18×8cm、右袖の礫



第42図 J24住居跡（遺構）

は26×18×17cmであり、2個とも床面より浮いた位置にある。袖部の幅は芯材の外側で75cmである。燃焼部の焼土は、直径40cm余りの円形で厚さは最大10cmほどあり、浅皿状の凹地に形成されている。

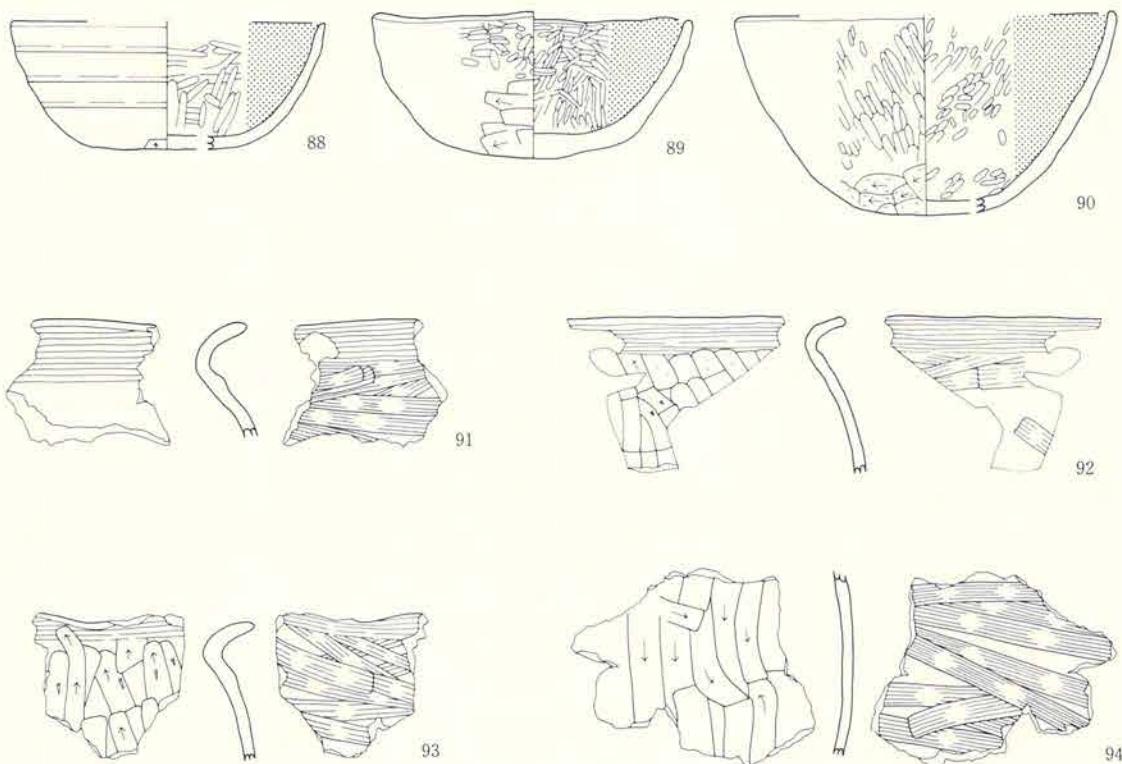
〈時期〉 出土遺物にはロクロ使用のものと不使用のものがあるが、遺構の時期は平安時代である。

#### 遺物（第43・44図、写真図版60・61）

88はロクロ使用の壺である。口縁部は内彎して立ち上がる。器面調整は内面はヘラミガキ後黒色処理されている。底部再調整は手持ちヘラケズリである。

89はロクロ不使用の壺である。内外面に段ではなく口縁部は内彎して立ち上がる。底部は、外面は丸底、内面は平底風である。器面調整は、外面は体部上半はヘラミガキ下半はヘラケズリ、内面はヘラミガキ後黒色処理されている。

90はロクロ不使用の壺で底部を欠く。内外面に段ではなく口縁部は内彎気味に外傾する。器面調整は、外面は体部下位がヘラケズリであるほかはヘラミガキ、内面はヘラミガキ後黒色処理



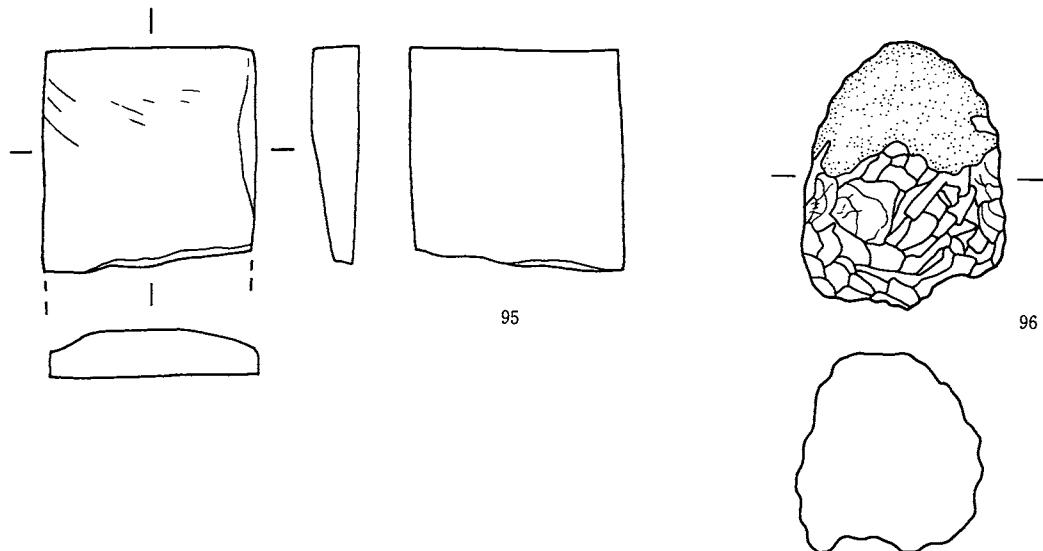
第43図 J24住居跡（遺物1）

されている。

91はロクロ不使用の甕と思われる口縁部の破片である。頸部に括れを持ち、口縁部は短く外反する。口縁部は内外面ともヨコナデによる調整であり、体部は内面はヘラナデである。

92はロクロ不使用の甕の口縁部付近の破片である。頸部に括れを持ち、口縁部は短く外反する。器面調整は、外面は口縁部はヨコナデ体部はヘラケズリ、内面は口縁部はヨコナデ内面はヘラナデである。

93はロクロ不使用の甕の口縁部付近の破片である。頸部に括れを持ち、口縁部は短く外反する。器面調整は、外面は口縁部はヨコナデ体部は粗いヘラケズリ、内面は口縁部はヨコナデ体



第44図 J24住居跡（遺物2）

部はヘラナデである。

94はロクロ不使用の甕の体部の破片であり、91・92と同一個体と思われる。器面調整は、外面はヘラケズリ、内面はヘラナデである。

土師器の出土状況は、89は南西床面から、それ以外はカマド付近の埋土下位～床面から出土している。

95は砥石である。使用面は片面だけであり凹面をなす。石質は凝灰質砂岩である。計測値は、長さ3.0cm、幅2.8cm、厚さ7mm、重量6.77gである。検出面から出土している。

96は琥珀の原石である。カマド付近の埋土下位～床面で出土している。2個体分と思われるがこわれており正確には分からず。最大のものを実測図に示した。大きさは35.3×26.4×26.8

mm、重量は15.97gである。全出土量の合計は37.18gである。

#### L 25住居跡（第45図、写真図版16）

調査区の中央部に位置する。周囲には4～10mの距離で住居跡が7棟同心円状に分布している。表土を除去した時点では黒褐色土の隅丸方形に近い輪郭として検出された。床面の下からL 28陥し穴状遺構が検出されている。

〈占地〉 地形区B区の中央付近にあり、平坦な地形面を占地している

〈平面形・規模〉 平面形は隅丸長方形に近く、規模は、東西方向が4.56m、南北方向が5.20mである。床面積は17.6m<sup>2</sup>である。

〈埋土〉 埋土は5層に細分される。上位は黒褐色土、中位は黒色土、下位や壁際は暗褐色土である。中位の黒色土の上部には、白頭山火山灰と十和田a降下火山灰が不連続ながら全体的に落ち込むように堆積している。厚さは1～2cmと薄く、白頭山火山灰が十和田a降下火山灰の上に堆積し、上下関係の逆転はない。床面近くでは焼土が混じる。

〈壁〉 北壁から東壁はIV層～VI層を掘り込んでおり、立ち上がりは明瞭である。南壁から西壁は再堆積層（IV層）であり、壁の立ち上がりは分かりにくく少し掘り過ぎも考えられる。壁高は35～45cmであり、北壁で最大である。

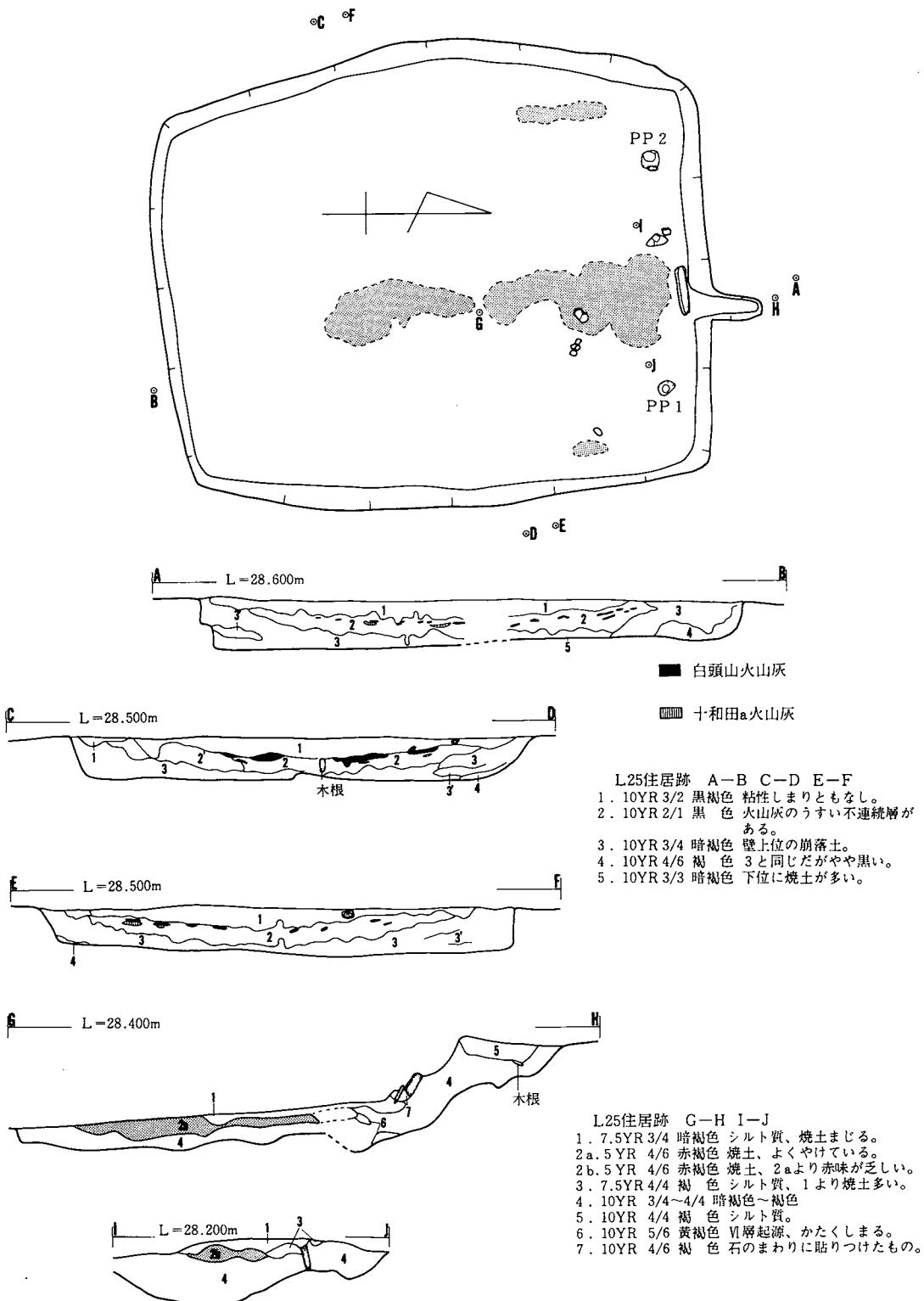
〈焼土〉 カマド付近から床面中央付近にかけて現地性焼土がみられる。この焼土は厚さが3～10cmあり、良く焼けて堅くしまる。特に床面中央のやや南寄りの焼土は、直径50～60cmの円形で床面から浅皿状に焼けており、地床炉的使用も考えられる。また、西壁際も焼土がみられるが、厚さは2～3cmと薄く床面より10cm余浮いている。焼失住居跡の可能性があるが炭化材はない。

〈床〉 床面は東壁近くがVI層であるほかは、IV層の下位面が多い。IV層起源の床面はしまりがなく、床面は東から西に低くなり比高差は10cmある。カマド付近を中心に掘り方が認められる。床面から西壁にかけて溝状の陥し穴状遺構がある。周溝は検出されていない。

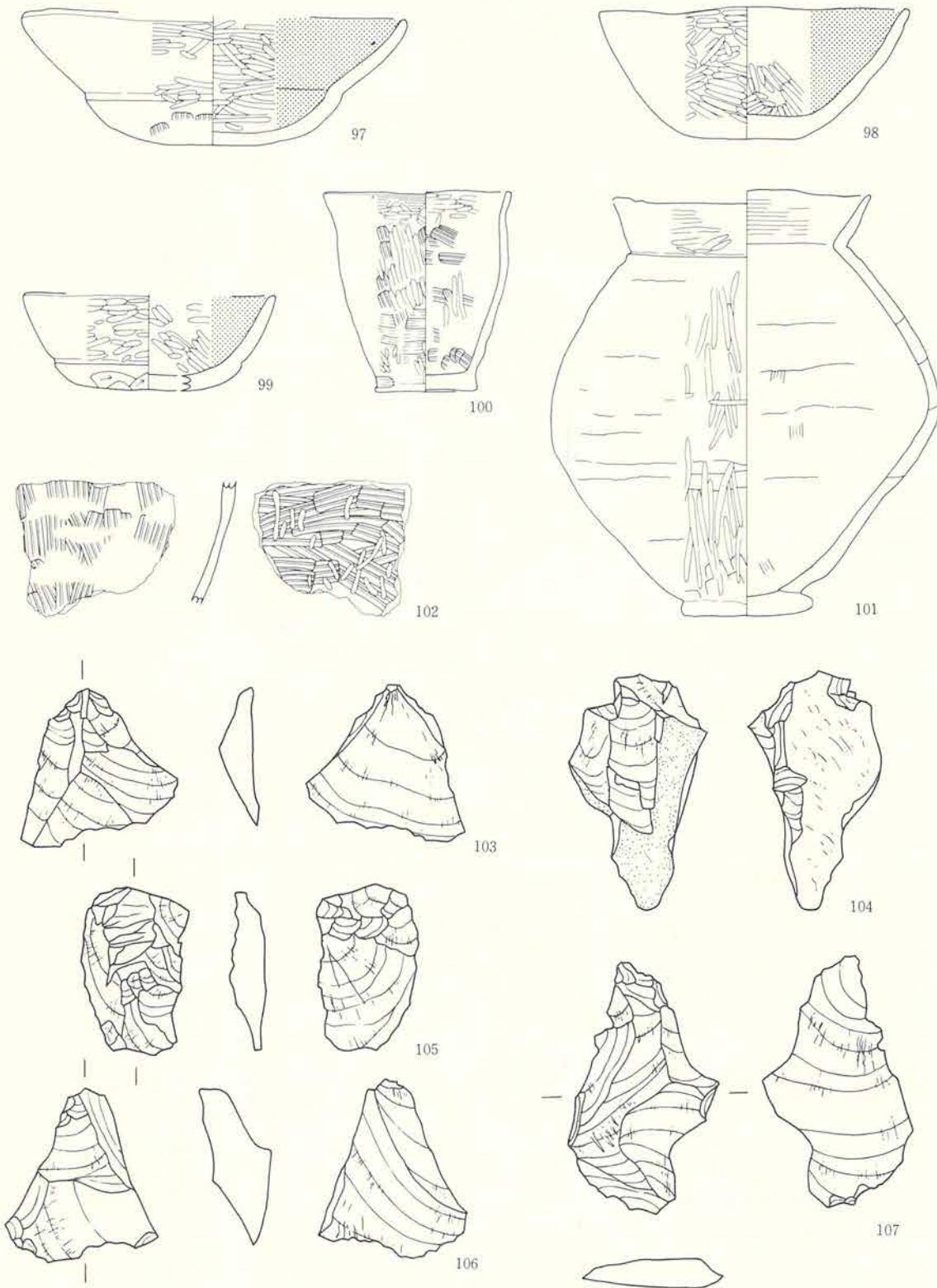
〈柱穴〉 柱穴は北壁際で2個検出されている。平面形は隅丸方形であり、規模はPP<sub>1</sub>が15×11cmで深さは30cm、PP<sub>2</sub>が16×15cmで深さは30cmである。柱穴の間は2.2mである。

〈カマド〉 北壁中央やや東寄りに構築されている。カマドの長軸方向はN-1°-Eである。本体部は崩壊しているが、右袖には長方形（10×10×3cm）の凝灰岩が残っている。袖部の幅は60cm前後である。壁際には長方形（45×14×4cm）の焼けた凝灰岩があり、周囲をVI層起源の褐色土と薄い板状の礫で固められている。

燃焼部の焼土は、直径60cm余りの円形で厚さは最大8cmであり、ほぼ水平に形成されている。断面図をみると燃焼部よりも中央寄りの方が良く焼けている。



第45図 L25住居跡（遺構）



第46図 L25住居跡（遺物）

短い煙道は、壁際から約20°の勾配でのぼる。煙道部の埋土はあまり焼けていない。

〈時期〉 遺構の時期は出土遺物の埋土の特徴から奈良時代である。

#### 遺物（第46図、写真図版61）

97はロクロ不使用の壺である。内外面とも体部下位に段を持ち、口縁部は外傾する。底部は丸底である。器面調整は、外面は底部に刷毛目を一部残すほかはヘラミガキ、内面はヘラミガキ後黒色処理されている。

98はロクロ不使用の壺である。内外面に段はなく体部～口縁部は外傾する。底部は径の小さい平底である。器面調整は、底部以外はヘラミガキである。

99はロクロ不使用の壺で3分の2を欠く。外面の体部やや下位付近に一部沈線を残し、僅かに段を持ち、口縁部は内彎して立ち上がる。底部はヘラケズリによる調整のため平底風の丸底である。器面調整は、外面は体部上半はヘラミガキ下半はヘラケズリ、内面はヘラミガキ後黒色処理されている。

100はロクロ不使用の小型の甕である。頸部は緩い括れを持ち、口縁部は外傾し、口唇部は角張る。口縁部に最大径を持ち、体部から底部にかけ窄む。底部下端は外側に張り出す。器面調整は、口縁部は内外面ともヨコナデ後部分的ヘラミガキ、体部は内外面とも刷毛目後部分的ヘラミガキである。

101はロクロ不使用の甕である。外面の頸部に僅かに段を持ち、口縁部は外傾する。体部最大径を中央付近に持つ。底部は円盤状につくられ体部に接合している。底部内面は丸底である。器面調整は、口縁部はヨコナデで外面にヘラミガキが加わる。体部は外面はヘラミガキ内面は部分的にヘラナデである。内面には煤が付着している。輪積痕に沿って壊れている。

102はロクロ不使用の甕の体部破片である。器面調整は内外面とも刷毛目後ヘラミガキが部分的に加わる。

土師器の出土状況は、97・98・99は床面から、100・101・102は主に埋土から出土している。

103～107は剝片である。石質は、103・106・107はチャート質粘板岩、104はチャート、105は粘板岩である。埋土から出土している。

#### N26住居跡（第47図、写真図版17）

調査区の中央部に位置しL25住居跡の南4m付近にあり、南東側は調査範囲外に広がる。表土を除去した時点で黒褐色の隅丸方形に近い輪郭として検出された。

〈占地〉地形区B区の平坦面の東縁部にあり、西から東に僅かに下る地形面を占地している。

〈平面形・規模〉 遺構は一部調査範囲外に広がるため全体の形状は不明であるが、隅丸方形に近いものと推定される。規模は北東～南西方向が4.30mである。調査範囲内の床面積は10.5

m<sup>2</sup>である。

〈埋土〉 埋土は6層に細分されるが、上位～中位は黒褐色土、床面近くは暗褐色～褐色土である。全体的にしまりのない自然堆積層である。

〈壁〉 北東壁付近は削平されており壁の立ち上がりは不明瞭であるが、それ以外では壁は外傾する。壁高は、南西壁で最大30cm、北東壁で最小15cmである。

〈炭化材〉 この住居跡は焼失住居跡である。床面中央付近で放射状に分布する炭化材がみられる。これらの炭化材は床面直上にある。断面形をみると、3・6は角材状を呈し、1・4・5は厚い板状である。2は割材と思われる。樹種の鑑定結果は総て栗である。

〈床〉 床面は、礫混じりの褐色土（VII層）であり、堅くしまるが小凹凸がある。全体的に南西から北東に傾き比高差は最大25cmある。柱穴や周溝は検出されていない。

〈カマド〉 北東壁中央付近に構築されているが、煙道は検出されなかった。長軸方向はN—32°—Eである。

本体部は潰れている。袖部の左右には板状の凝灰岩を使用している。右袖の礫は四辺形（20×17×3cm）であり直立している。左袖の礫は五角形（18×14×2cm）であり潰れている。近くには天井に使用された長方形（26×16×2cm）の薄い凝灰岩があり、右袖の礫の内側から天井石の近くにかけてロクロ不使用の丸底の壺（遺物番号108・109）を併用している。また、甕の底部（遺物番号110）を倒立させて支脚にしている。袖部の幅は約70cmである。燃焼部の焼土形成は不良で埋土に焼土が少し混じる程度である。煙道は断面からは確認されなかった。

〈時期〉 遺構の時期は出土遺物から奈良時代である。

#### 遺物（第47図、写真図版62）

108はロクロ不使用の壺である。内外面に段はなく口縁部は内彎気味に立ち上がる。底部は丸底である。器面調整は、外面は体部はヘラミガキ底部はヘラケズリ、内面はヘラミガキである。

109はロクロ不使用の壺である。外面の体部下位に沈線が巡り段を持つ。口縁部は内彎する。底部は丸底である。器面調整は、外面は体部はヘラミガキ底部はヘラケズリ、内面はヘラミガキである。

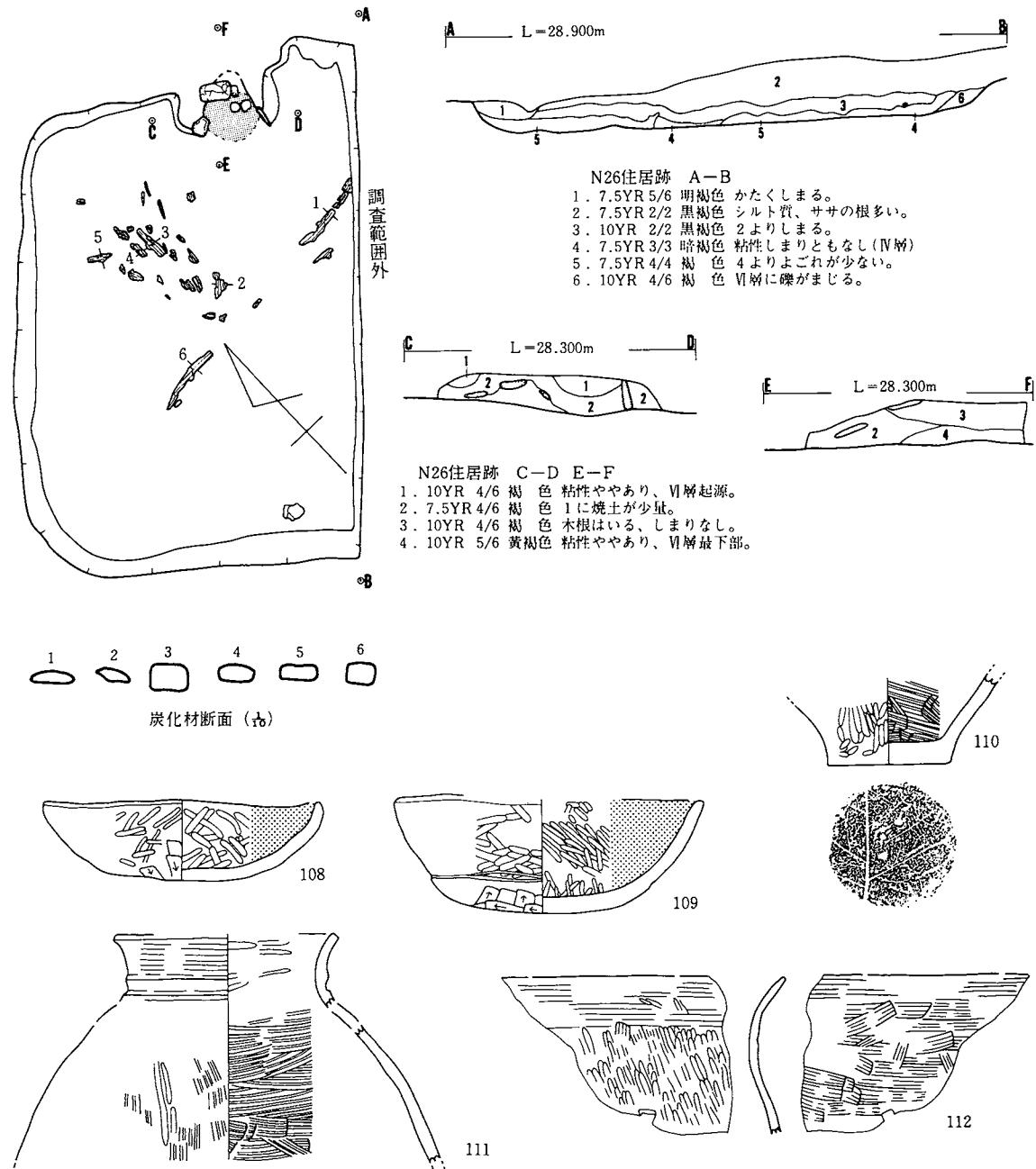
110は底部である。底部下端は直立気味である。器面調整は、外面はヘラミガキ、内面は刷毛目であり、底部外面に木葉痕がある。

111はロクロ不使用の壺で体部下半を欠く。頸部外面に段を持ち、口縁部は外反し、口唇部は角張る。器面調整は、外面は口縁部はヨコナデ体部は刷毛目後ヘラミガキ、内面は口縁部はヘラミガキ体部は刷毛目である。内面には煤が多く付着している。

112はロクロ不使用の甕で口縁部付近である。頸部に括れを持ち、口縁部は外反し、口唇部は角張る。器面調整は、外面は口縁部はヨコナデ後ヘラミガキ体部はヘラミガキ、内面は口縁部

はヨコナデ体部はヘラナデである。

出土状況は、108～110はカマド内から、111は床面南から、112はカマド付近から出土している。



第47図 N26住居跡（遺構・遺物）

#### I 27住居跡（第48図、写真図版18）

調査区の中央部に位置しJ 24住居跡の南西7.5m付近にある。南30cmにはJ 28住居跡があるが重複しない。表土を30cmほど下げた時点で隅丸方形に近い黒褐色の輪郭として検出された。

〈占地〉地形区B区の平坦面の西縁部にあり、西側2～3m付近からは斜度30°近くの南西斜面となる。

〈平面形・規模〉平面形は隅丸台形気味である。規模は、北辺は3.5m、南辺は4.5m、南北方向が4.44mである。床面積は14.1m<sup>2</sup>である。

〈埋土〉埋土は5層に細分される。上位は黒褐色土、中位は黑色土、下位は暗褐色土が多い。

〈壁〉上位はIV層、下位は礫混じりのVII層であり直壁に近く、崩落は少ない。壁面には径10～20cmの亜角礫が所々みられる。壁高は全体的に45～50cmである。

〈焼土〉東壁際に径170×36cmの範囲で焼土がみられる。床面から3～5cm浮き、厚さは2～3cmである。炭化材はみられない。

〈床〉床面には径10～20cmの角礫や亜角礫が多く、凹凸のある床面である。比高差は10cm前後である。東壁～南壁にかけて貼り床がみられるが、あまり堅くない。柱穴や周溝はない。

〈カマド〉南壁中央よりやや西寄りに構築されており、総長2.13m、壁外1.28mである。長軸方向はS-7°-Wである。

本体部は破壊されている。燃焼部の焼土は、直径40cmの円形で厚さ3cmあり、ほぼ水平に形成されている。

割り貫き式の煙道は、壁際からほぼ水平に掘られた後次第に煙出口へ立ち上がる。煙出口の形状は不明であるが使用された礫が1個残っている。煙道の埋土は良く焼けている。

〈時期〉遺構の時期は出土遺物から平安時代である。

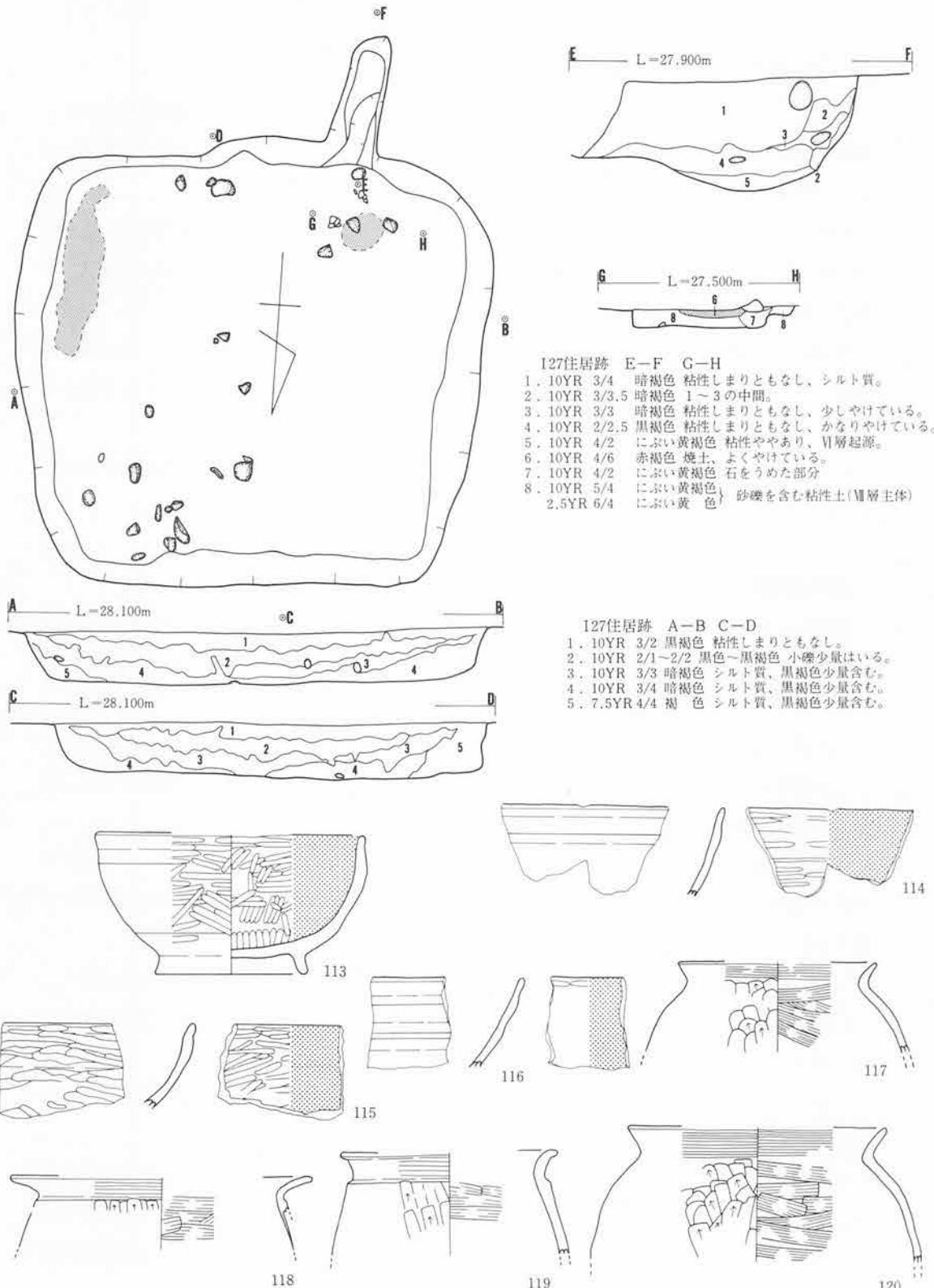
#### 遺物（第48図、写真図版62）

113はロクロ使用の高台を持つ壺である。壺部は内彎して立ち上がり口縁部は直立気味である。高台部は短く僅かに下端が開く。器面調整は内外面ともヘラミガキであり、内面から口縁部外面まで黒色処理されている。体部下半は床面北東から出土し、K27住居跡埋土中位から出土した体部上半と接合している。

114・116はロクロ使用の壺の口縁部破片である。内面はヘラミガキ後黒色処理されているものと思われる。

115はロクロ使用の壺の口縁部破片である。内外面ともヘラミガキ調整が加わり、内面は黒色処理されている。

117はロクロ不使用の甕の口縁部付近である。頸部に括れを持ち、口縁部は短く外反する。器面調整は、外面は口縁部はヨコナデ体部はナデ状のヘラケズリ、内面は口縁部はヨコナデ体部



第48図 I-27住居跡（遺構・遺物）

はヘラナデである。胎土に小石が混じる。

118はロクロ不使用の甕の口縁部付近である。頸部外面に段を持ち、口縁部は強く外反する。器面調整は、外面は口縁部はヨコナデ体部はヘラケズリ、内面は口縁部はヨコナデ体部はヘラナデである。胎土に小石が混じる。

119はロクロ不使用の甕の口縁部付近である。頸部外面に段を持ち、口縁部は外反し、口唇部は外側に丸く張り出す。器面調整は、外面は口縁部はヨコナデ体部はナデ状のヘラケズリ、内面は口縁部はヨコナデ体部はヘラナデである。胎土に小石が混じる。

120はロクロ不使用の甕の口縁部付近である。頸部に括れを持ち、口縁部は外傾する。器面調整は、外面は口縁部はヨコナデ体部はナデ状のヘラケズリ、内面は口縁部はヨコナデ体部はヘラナデである。胎土に小石が混じる。

出土状況は、114・116・117は埋土から、118～120はカマド付近から、115は床面から出土している。

#### K 27住居跡（第49図、写真図版17）

調査区の中央部に位置し、I 27住居跡とJ 28住居跡の東90cm付近にある。表土を30cmほど下げた時点で土坑として検出されたが、埋土断面実測後に東側でカマドが検出されたことから住居跡であることが判明した。

〈占地〉平坦な地形面を占地している。

〈平面形・規模〉平面形は南西隅が角張る不整な円形である。規模は東西方向が2.10m、南北方向が1.98mである。床面積は2.2m<sup>2</sup>であり、本遺跡では最小の住居跡である。

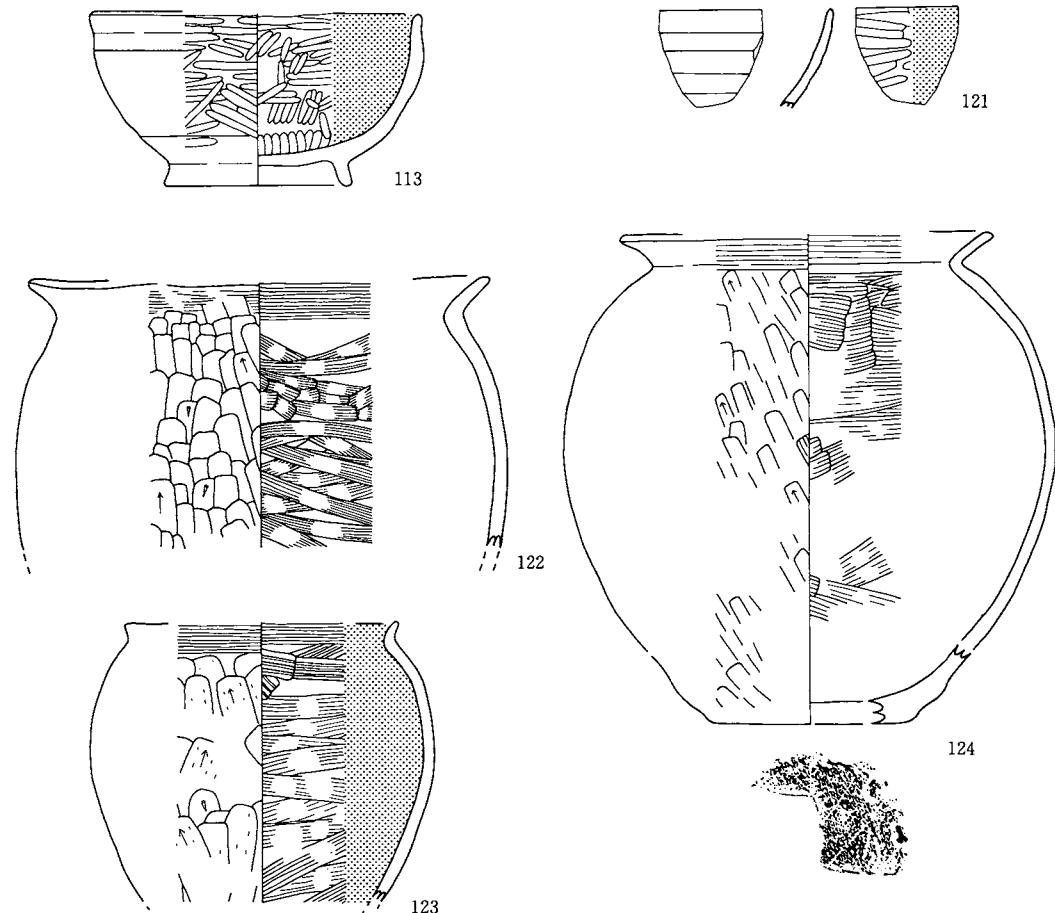
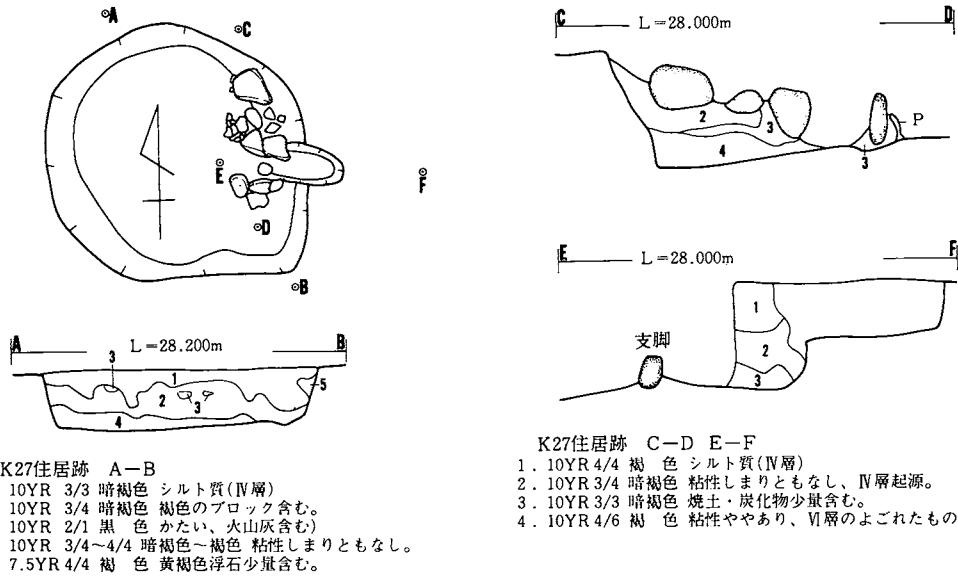
〈埋土〉埋土は5層に細分される。全体的にシルト質の暗褐色土(IV層)が多く、中位では黒色や褐色のブロックが混じる。黒色のブロックには十和田a降下火山灰や白頭山火山灰が少量含まれている。下位では黄褐色浮石混じりの褐色土が多くなる。

〈壁〉東壁は直壁に近く、その他は外傾して立ち上がる。壁高は全体的に45～50cmである。

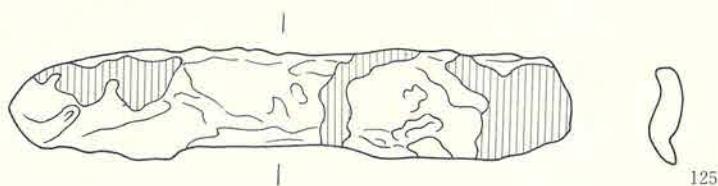
〈床〉全体的に凹凸のある床面であり、特に西壁際が低くなっている。比高差は15cmである。堅い床面はなく、柱穴や周溝は検出されていない。

〈カマド〉東壁中央に構築されており、総長94cm、壁外約45cmである。長軸方向はS—83°—Eである。付近にはカマドに使用した礫と甕の破片が多い。

袖部には大きい亜角礫を使用している。右袖は楕円形(25×116cm)の礫を中心に甕と礫を併用している。左袖は径37×20cmの円礫を芯材に用いている。天井は潰れている。燃焼部では焼土と炭化物が少量検出されたが、焼土層は形成されていない。中央部には径13×8cmの円柱状の支脚石がある。煙道は短く、壁際近くから煙出部へ直立する。



第49図 K27住居跡（遺構・遺物）



第50図 K27住居跡（遺物）

〈時期〉 遺構の時期は出土遺物から平安時代である。

遺物（第49・50図、写真図版63）

113はロクロ使用の高台を持つ壺である。壺部がカマド付近の礫の上面埋土から出土し、I 27住居跡から出土した高台部と接合している。器面調整などは前述している。

121はロクロ使用の壺の口縁部破片である。内面はヘラミガキ調整である。

122はロクロ不使用の甕で体部下半を欠く。頸部に括れを持ち、口縁部は外反し、口唇部は丸い。最大径を体部中央付近に持つ。器面調整は、外面は口縁部はヨコナデ体部はヘラケズリ、内面は口縁部はヨコナデ体部はヘラナデである。内面に煤が付着している。胎土に小石を含む。

123はロクロ不使用の甕で底部付近を欠く。頸部に括れを持つ。短い口縁部は外傾する。最大径を体部中央やや上に持つ。器面調整は、外面は口縁部はヨコナデ体部はヘラケズリ、内面は口縁部はヨコナデ体部はヘラナデである。内面は黒色である。胎土に粗い砂や小石を含む。

124はロクロ不使用の甕である。頸部に括れを持ち、口縁部は外傾～外反する。最大径を体部中央付近に持つ。底部下端はヘラケズリ調整により窄む。器面調整は、外面は口縁部はヨコナデ体部はヘラケズリ、内面は口縁部はヨコナデ体部はヘラナデである。内面に煤が付着している。底部外面に木葉痕がある。胎土に粗い砂や小石を含む。

出土状況は、121は埋土から、122・123はカマド付近の埋土から、124はカマドの礫の脇から出土している。

125は器種不明の鉄製品である。現存長は7.4cmで、幅は1.2～1.4cmである。厚さは一定せず、刃部はない。埋土から出土してある。

### J 28住居跡（第51図、写真図版19）

調査区の中央部に位置し、I 27住居跡とL 28住居跡の間にある。表土を除去した時点で隅丸方形に近い黒色～暗褐色の輪郭として検出され、上面に白頭山火山灰のブロックがみられた。

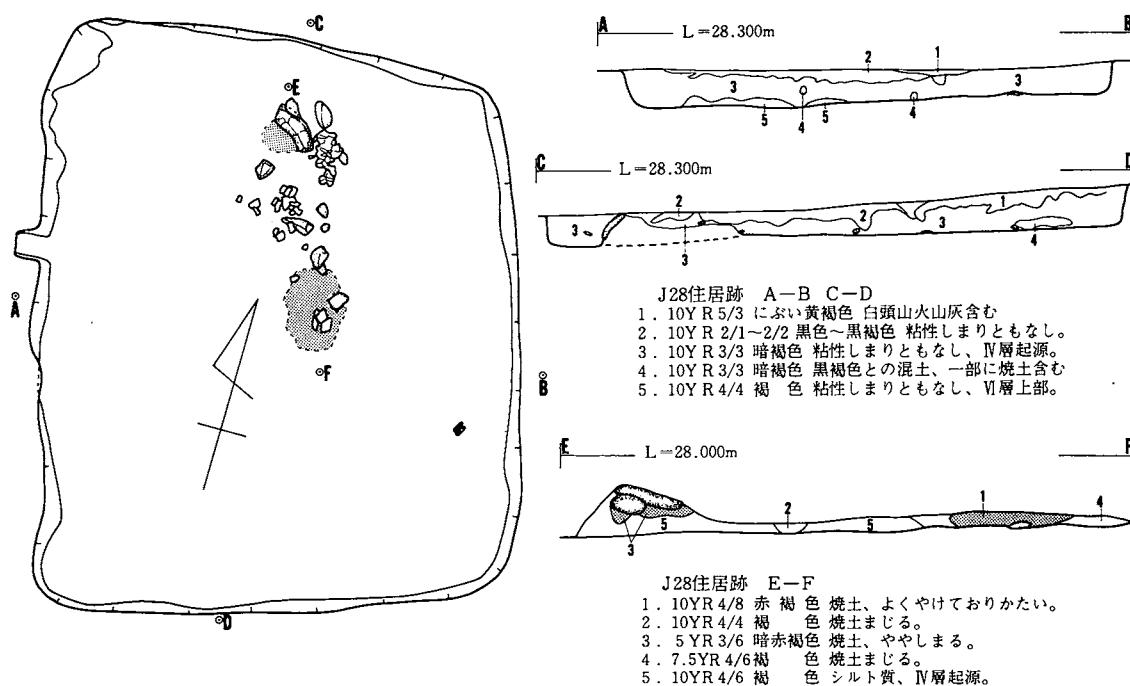
〈占地〉地形区B区の平坦面の西縁部にあり、西側2～3m付近からは斜度30°近くの南西斜面となる。

〈平面形・規模〉平面形は隅丸台形気味である。規模は、東辺が4m、西辺が4.64m、東西方向が3.86mである。床面積は15.1m<sup>2</sup>である。

〈埋土〉埋土は5層に細分される。上位は黒色～黒褐色の土層で上面に白頭山火山灰のブロックがみられる。下位は再堆積層（IV層）起源のシルト質土である。

〈壁〉東壁から南壁は褐色土（VI層）を掘り込んでおり、壁の立ち上がりは明瞭で直立に近い。北壁から西壁付近は再堆積層であり、埋土と地山の区別がしにくく壁がわかりにくい。壁高は20～30cmである。

〈焼土〉中央付近からカマド付近にかけて焼土が分布している。中央部の焼土は径66×42cmの範囲で厚さは5cmである。また、カマド付近にかけて焼土ブロックが多くみられる。東壁や南壁付近でも少量の焼土と炭化材がみられた。



第51図 J28住居跡（遺構）

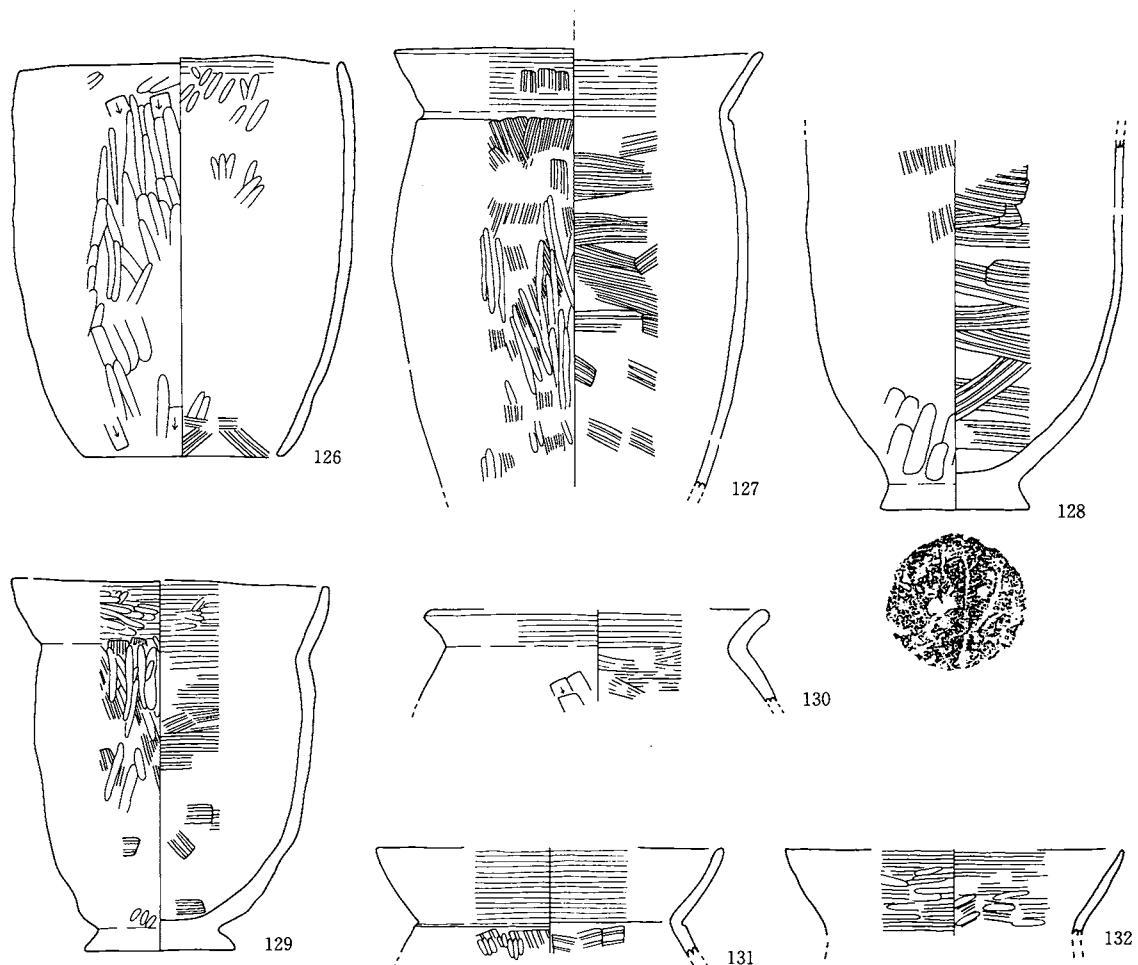
〈床〉 床面には径 5～15cm の礫が多く、凹凸のある床面である。比高差は最大 15cm である。堅い床面ではなく、貼り床もみられない。柱穴や周溝は検出されていない。

〈カマド〉 北壁中央付近の内側 50～90cm の地点がカマドと思われる。本体部に使用された焼けた長方形 (45×17×4 cm) と楕円形 (23×14×5 cm) の凝灰岩があり、下には厚さ 3～5 cm の焼土がある。煙道は検出されていないがカマドの方位は N—18°—W ぐらいと推定される。

〈時期〉 遺構の時期は、出土遺物と埋土の特徴から奈良時代である。

#### 遺物（第52図、写真図版63）

126 はロクロ不使用の無底式の甌である。最大径を体部中央付近に持ち、体部上半は直立し、口縁部がやや内彎する。器面調整は、外面は刷毛目後粗いヘラミガキ、内面はヘラミガキである。



第52図 J28住居跡（遺物）

127はロクロ不使用の甕で底部を欠く。頸部外面に段を持ち、口縁部は外傾する。体部最大径を体部上半に持ち下半は窄む。器面調整は、外面は口縁部はヨコナデ体部は刷毛目後ヘラミガキ、内面は口縁部はヨコナデ体部は刷毛目である。外面に煤が付着する。

128はロクロ不使用の甕で口縁部付近を欠く。体部中央付近は直立し、下半は底部付近で窄む。底部は内面は丸底で下端は外側に強く張り出し、外面には木葉痕がみられる。器面調整は内外面とも刷毛目であるが、外面にはヘラミガキが施されていたものと思われるが殆ど剥落している。

129はロクロ不使用の甕である。頸部に括れを持ち、口縁部は内彎気味に開く。体部最大径を中心よりやや上に持ち、下半が窄む。底部は比較的薄く下端が外側に強く張り出す。器面調整は、内外面とも刷毛目後ヘラミガキであるが。ミガキは雑である。

130はロクロ不使用の甕の口縁部付近である。頸部に括れを持ち、口縁部は短く外傾し、口唇部は丸い。器面調整は、外面は口縁部はヨコナデ体部は殆ど調整がなく一部ナデ状ヘラケズリ、内面は口縁部はヨコナデ体部はヘラナデである。胎土に粗い砂と小石を含む。

131はロクロ不使用の甕の口縁部付近である。頸部に括れを持ち、口縁部は内彎して開く。内外面とも表面は磨滅しているが、頸部付近の内外面には刷毛目が残る。

132はロクロ不使用の甕の口縁部付近であり、内外面にヘラミガキの調整痕が残る。131と同一個体と思われる。これらの遺物は総てカマド付近から一括して出土している。

133は琥珀の原石の細片である。総重量は1gである。

#### L 28住居跡（第53図、写真図版20）

調査区の中央部に位置しJ 28住居跡の南1.7m付近にある。表土を30cmほど下げた時点で隅丸方形に近い黒褐色の輪郭として検出された。東壁中央付近で焼土の下位から土坑が検出されている。

〈占地〉地形区B区の平坦面の西縁部にあり、西壁から2～3m付近からは斜度30°近くの南西斜面となる。また、南側3m付近からは比高差2mほどの丘状地形となる。

〈平面形・規模〉平面形は隅丸方形である。規模は、東西方向が4.74m、南北方向が4.20mである。床面積は16m<sup>2</sup>である。

〈埋土〉埋土は6層に细分されるが、上位は黒褐色土、中位は黒色土、下位や壁際は暗褐色土である。埋土に火山灰はみられない。

〈壁〉東壁付近は再堆積層(IV層)が多く壁は崩落しており、壁の立ち上がりは不明瞭である。それ以外は残存状況が良く、壁は外傾して立ち上がる。壁高は35～40cmである。

〈焼土〉北壁際と東壁際に分布している。北壁際の焼土は、径44×36cmの範囲に分布し、床

面より10cm浮いている。東壁際の焼土は、径75×56cmの範囲に分布し、床面から5cmほど浮いている。ともに厚さは2～3cmである。炭化材はみられない。

〈床面〉床面はVI層～VII層付近であり、礫混じりの堅い床面である。小さな凹凸のある床面は全体的に北西から南東に傾き、比高差は10cmである。東壁際はIV～V層が多くやや低くなっている。壁高は30～40cmである。柱穴や周溝は検出されていない。

〈カマド〉南壁中央やや東寄りに構築されており、総長1.86m、壁外1.1mである。長軸方向はS-19°-Eである。

本体部は崩壊しており、燃焼部焼土の左右には焼けた大きな長方形に近い凝灰岩が残っている。これらの礫は、厚さは4～8cm、最大長は33～55cmである。燃焼部の焼土は、径55×40cmの楕円形で厚さは最大11cmあり、皿状の凹地に形成され良く焼けている。

煙道は壁際の一部を除き割り貫き式と思われる。煙道は壁際から煙出部の下底まで僅かに下った後煙出口へ外傾して立ち上がる。煙道の埋土は良く焼けている。煙出口は直径28cmの隅丸長方形であり、付近には煙出口に使用された亜円礫が4個残っている。

〈時期〉遺構の時期は出土遺物から平安時代である。

#### 遺物（第54・55図、写真図版64）

134～140はロクロ使用の壺であり、134以外は内面は黒色処理されている。

134は赤焼き土器である。内外面ともミガキがなく、黒色処理は施されていない。体部は内弯し、口縁部はやや外傾する。底部切り離しは回転糸切りである。外面には煤が付着している。

135は高台を持つ壺で高台部を欠く。体部は内弯し、口縁部は直立気味である。外面の口縁部と内面全体がヘラミガキである。高台部を欠くが接合部の径は6.5cmである。壺部の底面は再調整されており、切り離しは不明である。

136は体部は内弯し、口唇部は丸味をおびやや外側に張り出す。外面にミガキはなく、内面はヘラミガキである。内面の黒色処理やミガキは一部消失している。底部を欠くため切り離し等は不明である。

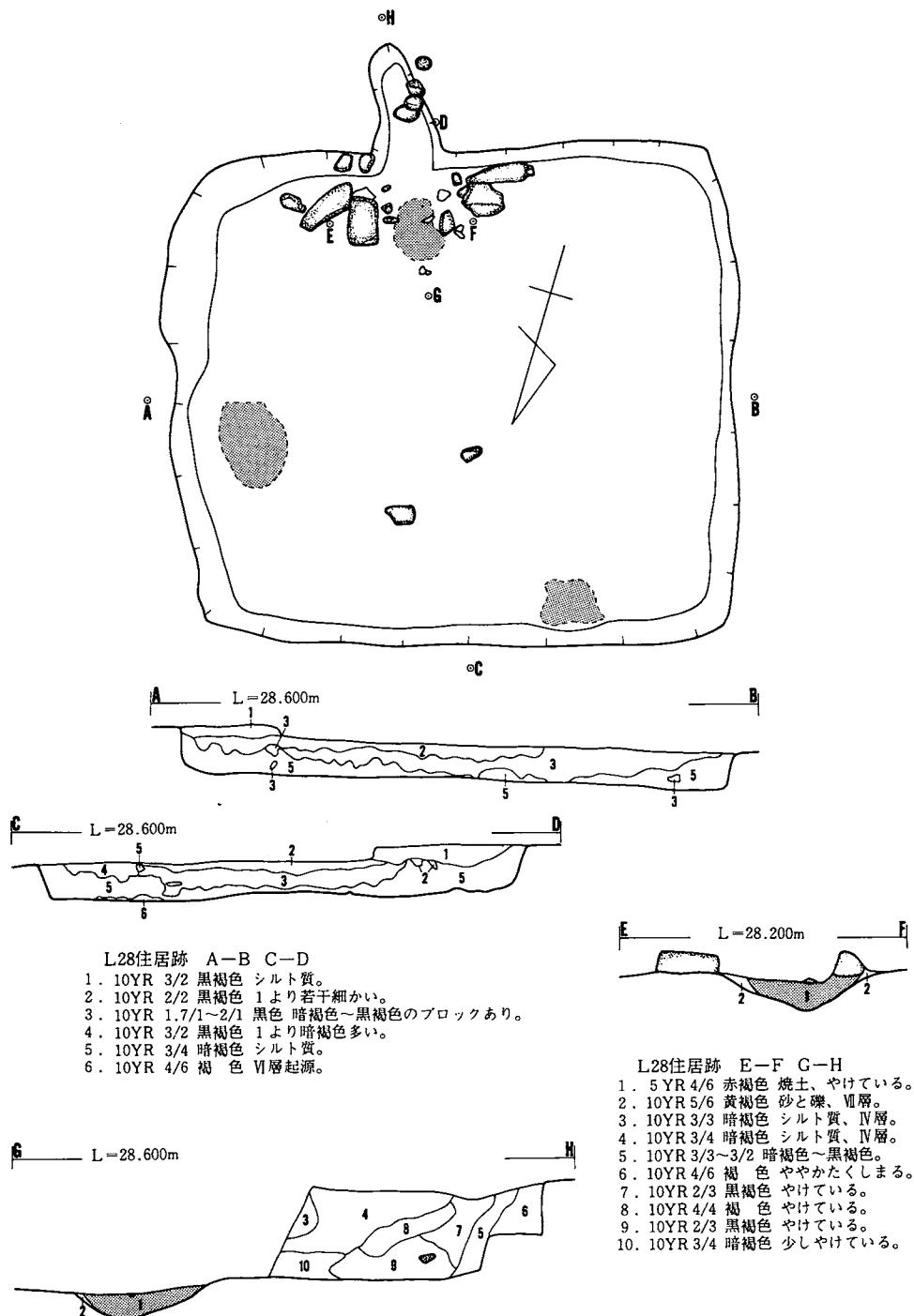
137は高台を持つ壺である。高台部は下端が開きハの字状を呈し、体部は緩く内弯し、口縁部は外反する。内面はヘラミガキによって調整されているが、黒色処理とともに消失している所が多い。壺部の切り離しは回転糸切りであり、高台部外面に種子痕が1個ある。

138は破片である。内外面ともヘラミガキ調整が加わるが、外面のロクロ調整は雑で粘土塊が残っている。

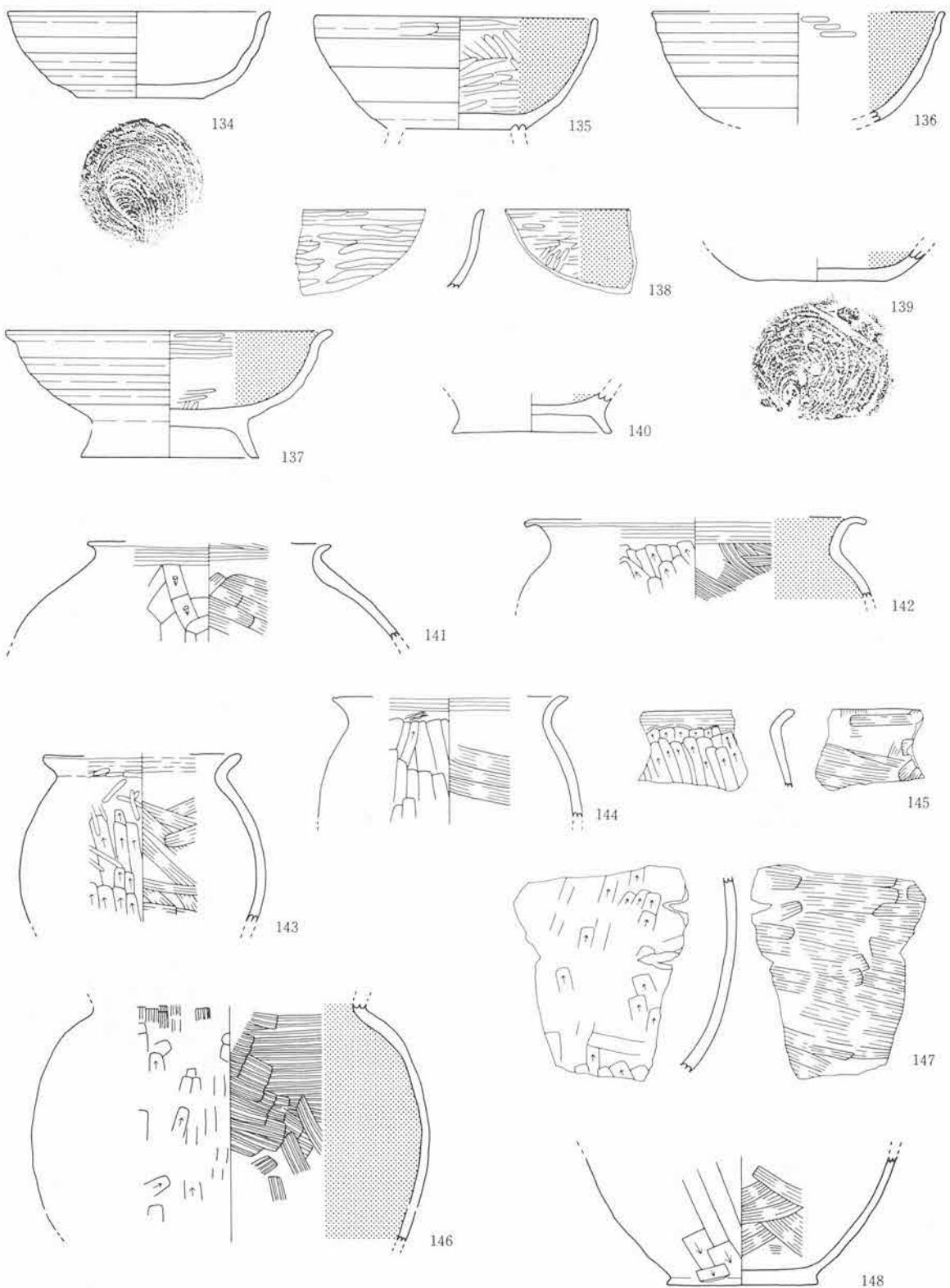
139は底部である。底部の切り離しは回転糸切りである。

140は高台部の破片である。高台部は低く、下端が開きハの字状である。

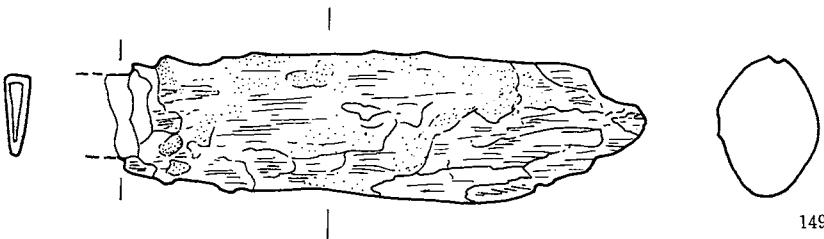
141はロクロ不使用の甕の口縁部付近である。頸部に括れを持ち短い口縁部は強く外反する。



第53図 L28住居跡（遺構）



第54図 L28住居跡 (遺物 1)



第55図 L28住居跡（遺物2）

器面調整は、外面は口縁部はヨコナデ体部はヘラケズリ、内面は口縁部はヨコナデ体部はヘラナデである。

142はロクロ不使用の甕の口縁部付近である。頸部に括れを持ち、口縁部は強く外反し外側に張り出す。口唇部は角張る。器面調整は、外面は口縁部はヨコナデ体部はナデ状のヘラケズリ、内面は口縁部はヨコナデ体部は刷毛目である。内面には黒色処理が施されている。

143はロクロ不使用の甕で体部下半を欠く。頸部に括れを持ち、短い口縁部は外傾する。体部最大径を中央付近に持ち、体部は球状に脹らむ。器面調整は、外面は口縁部は弱いヨコナデ体部はヘラケズリ、内面は口縁部はヨコナデ体部はヘラナデである。

144はロクロ不使用の甕の口縁部付近である。頸部に括れを持ち、口縁部は外反し、口唇部は僅かに凹状を呈する。器面調整は、外面は口縁部はヨコナデ体部はナデ状のヘラケズリ、内面は口縁部はヨコナデ体部はヘラナデである。

145はロクロ不使用の甕の口縁部破片である。頸部に括れを持ち、短い口縁部は外傾する。器面調整は、外面は口縁部はヨコナデ体部はヘラケズリ、内面はヘラナデである。

146はロクロ不使用の甕の体部であり、142と同一個体と思われる。体部中央付近が球状に脹らむ。器面調整は、外面はナデ状のヘラケズリ、内面は刷毛目で黒色処理されている。

147はロクロ不使用の甕の体部破片であり、141と同一個体と思われる。器面調整は、外面はヘラケズリ、内面はヘラナデである。

148はロクロ不使用の甕の底部である。下端は外側に張り出しが、ケズリにより再調整されくの字状を呈する所が多い。器面調整は、外面はヘラケズリ、内面はヘラナデである。底部外面の木葉痕はヘラケズリ調整で殆ど消失している。胎土には小石が含まれる。

出土状況は、134は検出面から、135～140・143・144は埋土～床面から、141・142・145・146はカマド付近から、147・148は床面から出土している。

149は鉄製品で刀子の柄部である。関付近で欠け現存長は7.1cmである。全体が木質部で被われている。埋土から出土している。

#### J 37住居跡（第56図、写真図版21）

調査区の南西部に位置し地形区C区の北東端にある。西南西10m付近にはI 41住居跡があり、地形区B区のJ 28住居跡からは約34m離れている。K 37~40のトレンチで黒褐色～暗褐色の輪郭として検出された。

〈占地〉 地形区C区は遺跡内で最も低い舌状に張り出す段丘面であり、侵食されたやや起伏のある地形面が比高を高めながら南西から西にのびている。この住居跡は段丘面内縁の鞍部状の地形面を占地している。

〈平面形・規模〉 平面形は隅丸正方形に近い。規模は、南西一北東方向が3.66m、北西一南東方向が3.68mである。床面積は12.1m<sup>2</sup>である。

〈埋土〉 埋土は5層に細分される。全体的に上位と下位は黒褐色土、中位は黑色土が多い。下位の黑色土中には十和田a降下火山灰のブロックが混じる。

〈壁〉 以前畠地として利用されたことや現況が山林であるため、遺構の上位面は、殆ど削平し攪乱されている。残存する壁高は南東壁で最大15cmであり、北西壁は数cmである。

〈床〉 床面は、礫混じりの褐色土であり、全体的に凹凸がある。比高差は10cm前後である。貼り床はなく、柱穴や周溝は検出されていない。

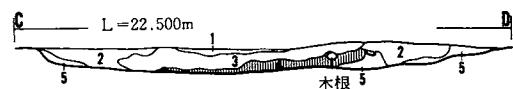
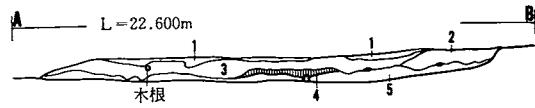
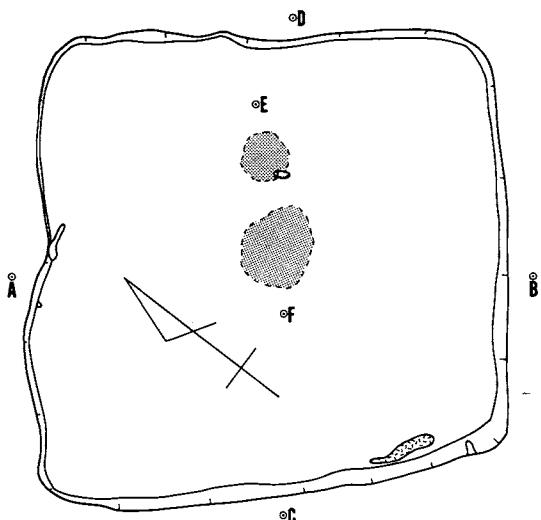
〈カマド〉 カマドの位置は特定できないが、床面中央から北東にかけて焼土が径72×56cm、径38×36cmの範囲に分布している。これらの焼土は、浅皿状の小凹地に形成されており、中央の方が良く焼けている。なお、焼土から北隅にかけての壁寄りで3個体の土師器が出土している。

〈時期〉 遺構の時期は出土遺物から奈良時代である。

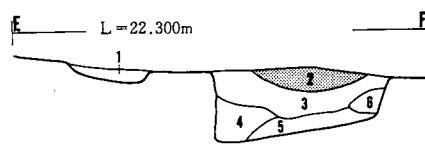
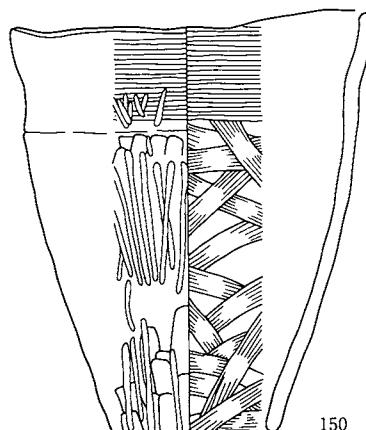
#### 遺物（第56図、写真図版65）

150はロクロ不使用の無底式の甌である。頸部が僅かに括れるが、体部から口縁部は外傾する。器面調整は、外面は口縁部はヨコナデ体部はヘラミガキ、内面は口縁部はヨコナデ体部はヘラナデである。外面には煤が付着し、調整痕は剥落している。

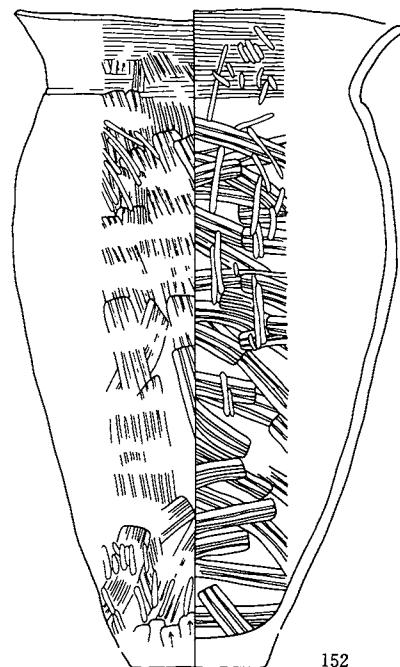
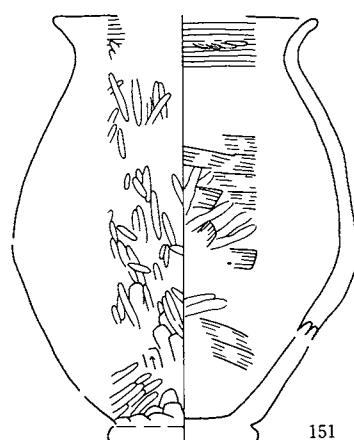
151はロクロ不使用の小型の甌で底部を殆ど欠く。頸部に緩やかな括れを持ち、口縁部は外反し、口唇部は丸く厚い。体部最大径を中央やや下に持つ。底部は殆ど欠損しているが、残存部から下端は丸味を帯びて外側に張り出しているものと推定される。器面調整は、外面は口縁部はヨコナデ体部はヘラミガキ、内面は口縁部はヨコナデ後ヘラミガキ体部はヘラナデ後ヘラミガキである。全体的に作りは粗雑で輪積痕に沿って破損している。3点とも北隅付近で一括出



J37住居跡 A-B C-D  
 1. 10YR 3/2 黒褐色 粘性しまりともない。  
 2. 10YR 2/2 黒褐色 褐色土起源の土。  
 3. 7.5YR 2/1 黒 褐色土起源のブロックがはいる。  
 4. 10YR 3/2 黒褐色 十和田a火山灰少量含む。  
 5. 10YR 4/4 褐 色 暗褐色まじる。



J37住居跡 E-F  
 1. 7.5YR 3/4暗 褐色 シルト質、焼土少量まじる。  
 2. 5YR 3/6 暗赤褐色 烧土、粘性しまりなし。  
 3. 10YR 3/3 暗 褐色 粘性しまりともない。  
 4. 10YR 3/2 黒 褐色 かたくしまる、V層?  
 5. 10YR 4/4 褐 色 磕まじる、VI+VII層  
 6. 10YR 4/6 褐 色 磕まじる、VI+VII層。



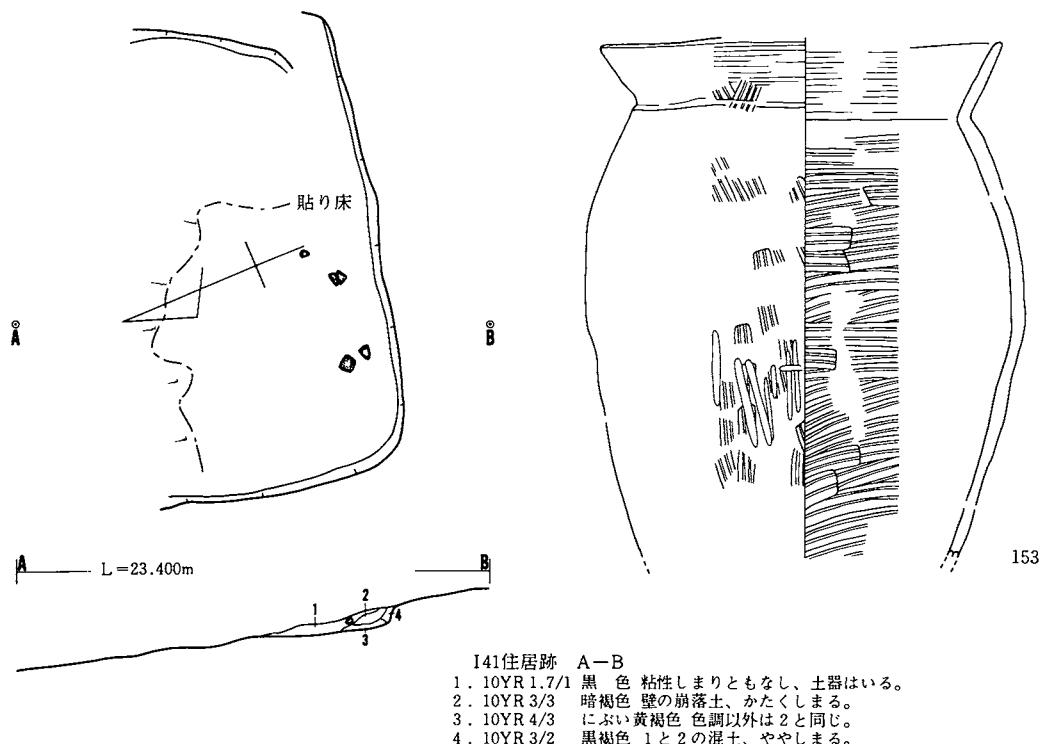
第56図 J37住居跡（遺構・遺物）

土している。

I 152はロクロ不使用の甕で底部を欠く。頸部の外面に僅かに段を持ち、口縁部は外反し、口唇部は凹状を呈する。体部最大径を肩部付近に持ち、底部にかけて次第に窄む。器面調整は、外面は口縁部は刷毛目後ヨコナデ体部は刷毛目後ヘラミガキ、内面は口縁部はヨコナデ後ヘラミガキ体部は刷毛目後ヘラミガキである。内外面とも刷毛目が強く残る。

#### I 41住居跡（第57図、写真図版21）

調査区の南西部に位置し、J 37住居跡の西南西約10m付近にある。南西7.6mにはI 43住居跡がある。I・J 39～47のトレンチで遺物を含む黒色土があることから遺構の存在が確認された。北側は殆ど削平または流出しており、残っているのは南壁付近の床面だけである。



第57図 I 41住居跡（遺構・遺物）

〈占地〉 I 43住居跡との間にあるマウンド状の微地形の北東側を占地している。この地形面の表土は礫混りの灰白色土（VIII層）である。

〈平面形・規模〉 平面形は不明であるが、残存部から隅丸方形で規模は3.7m前後と推定される。

〈埋土〉 埋土は4層に細分されるが黒色土が多く、壁際や床面近くでは暗褐色～黄褐色のブロックが混じる。埋土には十和田a降下火山灰のブロックが少量まじる。

〈壁〉 残存する壁の長さは、西壁2m、南壁3.4mであり、東壁は不明瞭である。壁高は南西隅で最大18cmである。

〈床〉 床面はVIII層上面にあり、灰白色土とシルト質の褐色土からなる貼り床が南西側で1.7×2.3mの範囲でみられる。貼り床面は堅くしまり、南から北に傾き比高差は10～15cmである。柱穴や周溝・カマドなどは検出されていない。

〈時期〉 遺構の時期は出土遺物から奈良時代である。

#### 遺物（第57図、写真図版65）

153はロクロ不使用の甕で底部を欠く。頸部に括れを持ち、口縁部は外傾する。体部最大径を中央より上に持つ。器面調整は、外面は口縁部はヨコナデ体部は刷毛目後ヘラミガキ、内面は口縁部はヨコナデ体部は刷毛目である。内外面とも風化が進み、内面には煤が付着している。黒色土の埋土下位から一括出土したものである。

#### I 43住居跡（第58図、写真図版22）

調査区の南西部に位置し I 41住居跡の南西7.6m付近にある。南西2.4mには I 45住居跡がある。地表面が窪んでおり、表土を除去した時点で黒褐色の円形に近い輪郭として検出された。

〈占地〉 I 41住居跡と I 45住居跡の間にある鞍部状の微地形を占地している。遺構の北西側と東側は急斜面である。

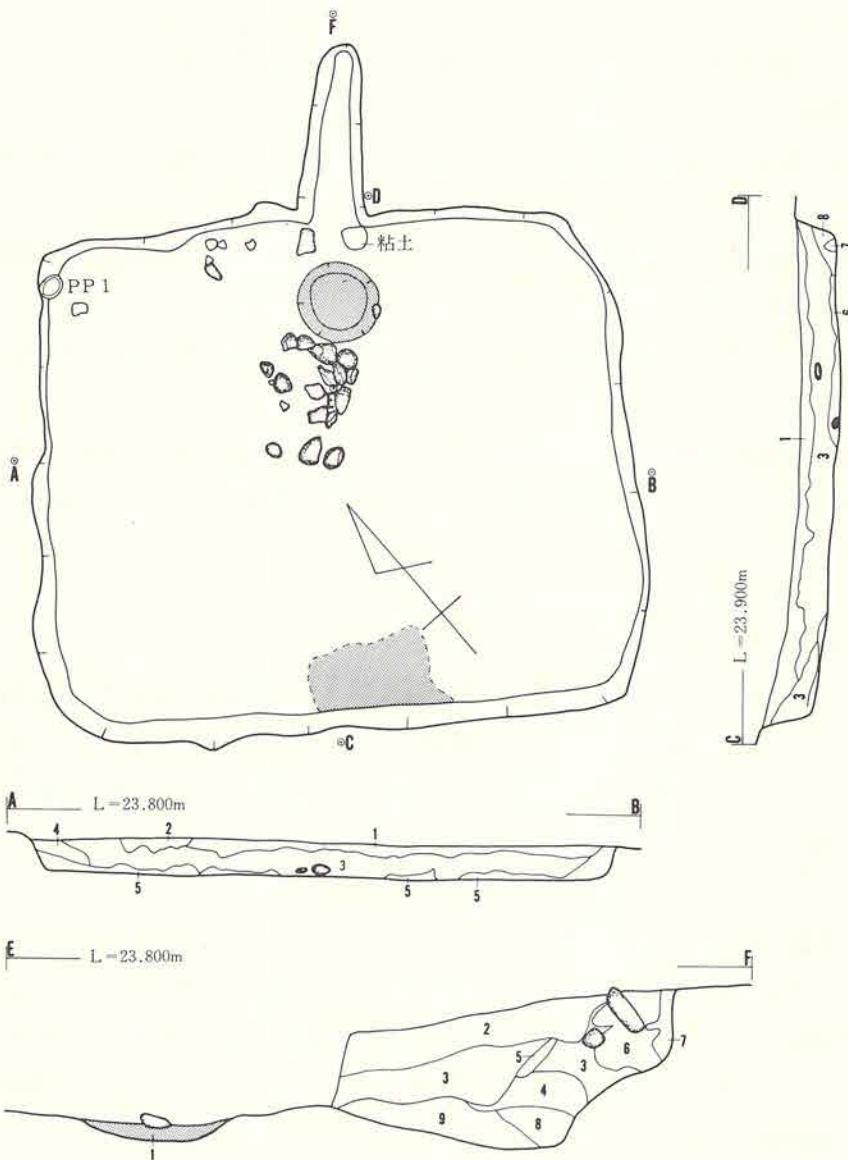
〈平面形・規模〉 平面形は隅丸長方形である。規模は、北西一南東方向が4.7m、北東一南北方向が4.1mである。床面積は16.8m<sup>2</sup>である。

〈埋土〉 埋土は8層に細分されるが、上位は黒褐色土、下位は黒色土、壁際や床面近くは褐色～暗褐色土が多い。

〈壁〉 北東壁がVIII層であるほかは上位はIV層、下位はV～VII層であり、壁は崩れやすい。壁の立ち上がりは全体的に外傾する。壁高は南西で最大50cm、北東で最小20cmである。

〈焼土〉 北西壁から南西壁にかけて検出された。特に南西壁際では厚さ5cmあり、50×100cmの範囲にみられ、床面から5～10cm浮いている。炭化材はない。

〈床〉 床面は礫混りの褐色土（VII層上面）であり、小さな凹凸がある。比高差は5cm前後で



I43住居跡 A-B C-D

1. 10YR3/2 黒褐色 粘性しまりともない。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト質。
3. 10YR2/1 黒 色 黒褐色～暗褐色含む、 粘性しまりともない。
4. 10YR4/4 暗褐色 シルト質。
5. 10YR3/4 暗褐色 シルト質。
6. 10YR3/2 黒褐色 粘性しまりともない、 やけている。
7. 10YR5/4 にぶい黄褐色 粘土質、 かたくしまる。
8. 10YR4/3 にぶい黄褐色 壁崩落土、 壁屑起源。

I43住居跡 E-F

1. 5 YR 4/8 赤褐色 焼土、 よくやけている。
2. 10YR 3/2 黒褐色 かたくしまる、 壁屑のよごれたもの。
3. 10YR 2/1 黑 色 粘性しまりともない、 よくやけている、 壁道。
4. 10YR 2/1 黑 色 黒褐色・にぶい黄橙色(7)ブロック含む。
5. 10YR 3/2 黒褐色 2に類似。
6. 10YR 3/2 黒褐色 にぶい黄橙色含む。
7. 10YR 6/3 にぶい黄橙色 壁屑(灰白色)のよごれたもの。
8. 2.5Y 7/3 浅黄色 黒褐色まじる。
9. 10YR 3/2 黑褐色 浅黄色まじる。

第58図 I43住居跡 (遺構)

ある。貼り床や周溝はない。

〈柱穴〉 北隅で1個検出された。平面形は径18×15cmの楕円形、深さは44cmである。

〈カマド〉 北東壁中央に構築されており、総長2.38m、壁外1.48mである。長軸方向はN—44°—Eである。

本体部は破壊されており、付近には構成礫と思われる径10～20cmの円礫が15個ある。燃焼部の焼土は、直径60cm余の円形で厚さは最大7cmあり、浅皿状の小凹地に形成され焼成は良い。

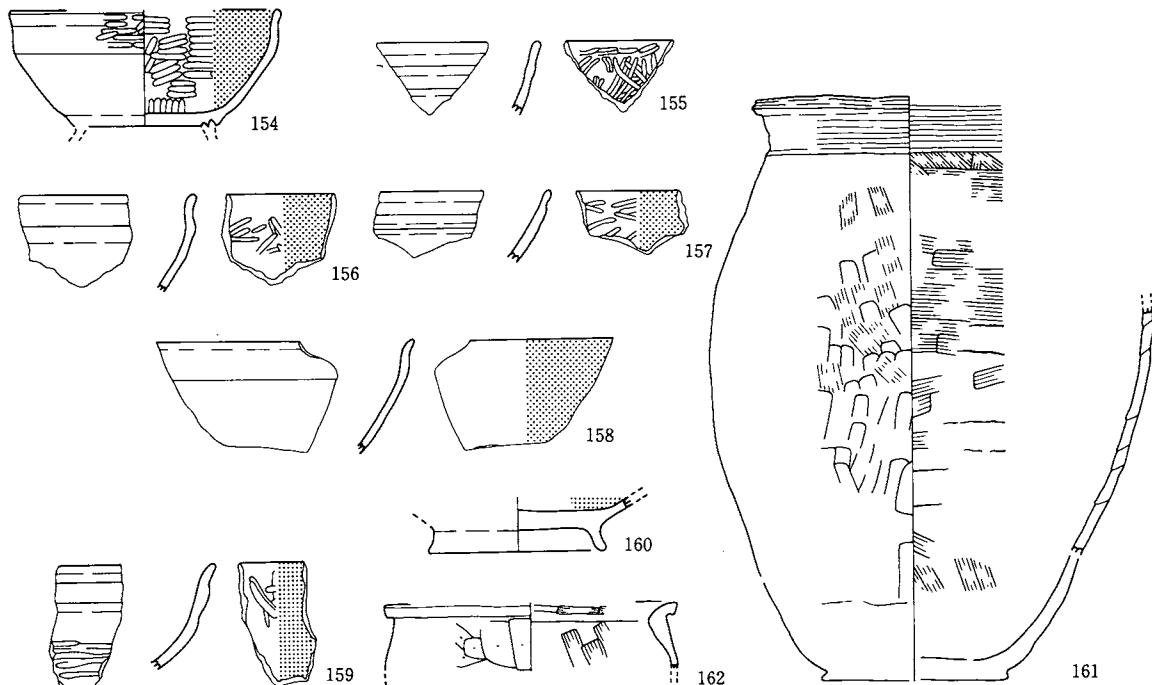
煙道は崩落しているが割り貫き式と思われる。煙道は壁際から12°の下り勾配となり、更に40°ぐらいの勾配で上った後煙出口へ垂直に近く立ち上がる。煙出口の形状は不明であるが一部に礫を使用している。煙道の壁面は良く焼けている。

〈時期〉 遺構の時期は出土遺物から平安時代である。

#### 遺物（第59図、写真図版65）

154～160はロクロ使用の坏であり、155以外は黒色処理が施されている。

154は高台を持つ坏で高台部を欠く。体部は内彎しながら口縁部直下で直立気味となり、口唇部付近は丸味を持ちながら僅かに外側に開く。器面調整は、口縁部外面と内面全体がヘラミガ



第59図 I-43住居跡（遺物）

キであり、内面の黒色処理は消失している所が多い。坏部の切り離しは不明である。

155は口縁部の破片である。内面にヘラミガキ調整が加わる。黒色処理は施されていない。

156～159は口縁部の破片である。156・158は口唇部付近がやや外側に開く。158は内外面とも風化が著しい。

160は坏の高台部である。高台部は低く、下端はハの字状に開く。内面は黒色処理されている。坏部の切り離しは不明である。

161はロクロ不使用の甕である。頸部の外面に僅かに段を持ち、口縁部は外傾する。口唇部は外に張り出し凹状を呈し、下端は厚く丸味を持つ。体部最大径を中央より上に持つ。底部は薄く、下端は外側に張り出す。器面調整は、外面は口縁部はヨコナデ体部はヘラケズリとヘラナデ、内面はヘラナデである。胎土に粒径3～5mmの小石を多く含み、輪積痕が多くみられる。

162はロクロ不使用の甕の口縁部付近である。口縁部は短く、体部は粗いヘラケズリである。これらの遺物は埋土下位～床面から出土している。

#### I 45住居跡（第60図、写真図版23）

調査区の南西部に位置し I 43住居跡の南西2.4m付近にある。地表面が窪んでおり、表土を除去した時点で黒褐色の不整な円形の輪郭として検出された。

〈占地〉 北東に下る幅の狭い緩斜面を占地している。この地形面はこの住居跡付近から北東と西にのびており、他の住居跡もこの地形面上にある。

〈平面形・規模〉 西壁は崩落しているが、平面形は隅丸長方形と推定される。規模は、東西方向が(3.8m)、南北方向が4.7mである。床面積は17.1m<sup>2</sup>である。

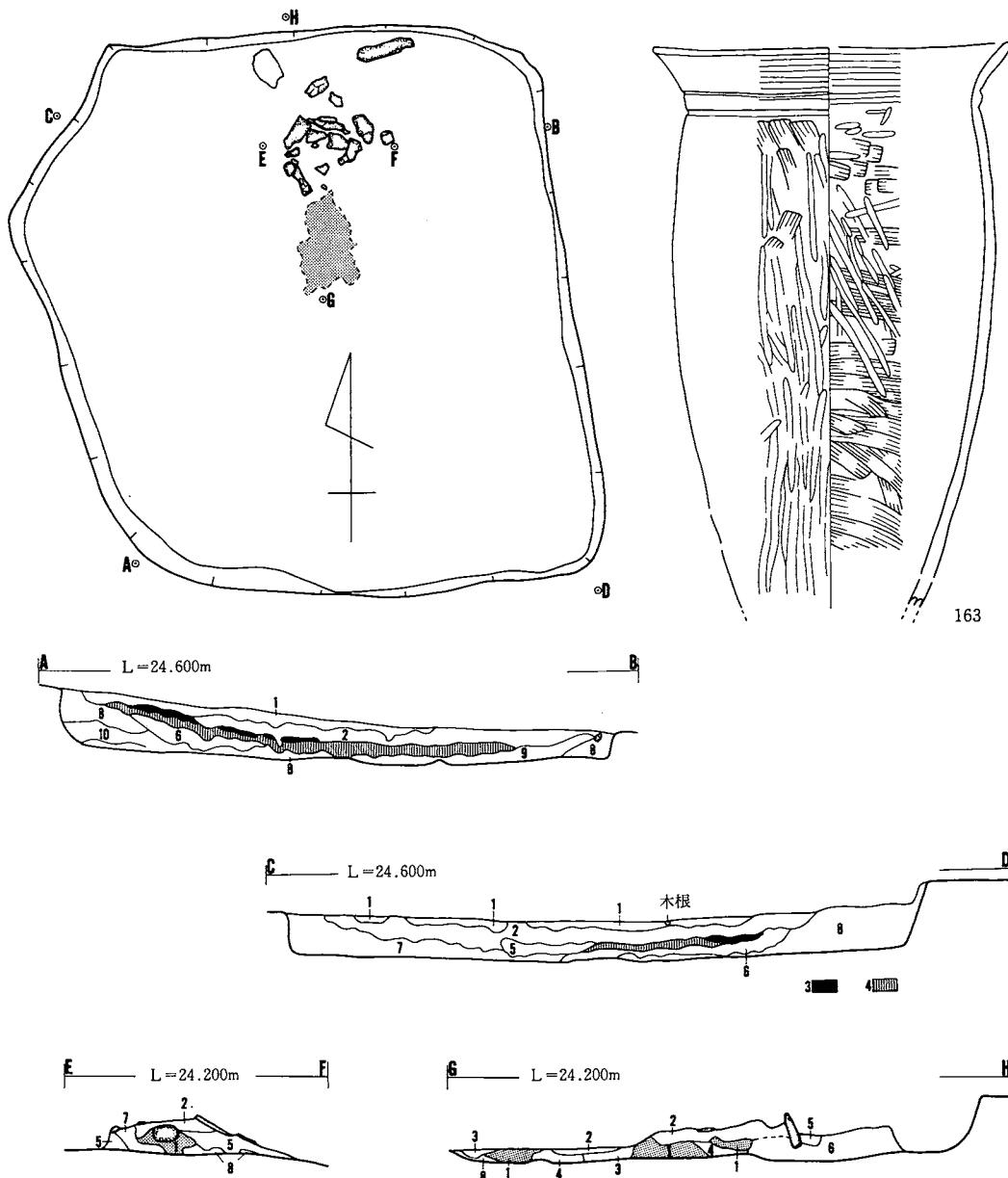
〈埋土〉 埋土は11層に細分される。全体的に黒褐色～黒色土が多く、壁付近では暗褐色～褐色土が多くなる。中位には白頭山火山灰と十和田a降下火山灰が2～4cmの厚さで入る。

〈壁〉 西壁～南壁付近は再堆積層であたるめ崩れやすく、壁の立ち上がりは分かりにくい。北壁～東壁はVI層越源の褐色土であるが木根による攪乱もあり、壁面は堅くない。壁の立ち上がりは全体的に外傾する。壁高は、北壁30cm、東壁20cm、南壁35cm、西壁45cmである。

〈床〉 床面は礫混じりの褐色土(VII層)であり、比較的堅くしまる。床面は比較的平坦で西から東に傾き、比高差は8cmである。柱穴や周溝は検出されていない。

〈カマド〉 北壁中央の内側70～130cm付近に構築されていたものと推定される。煙道は検出されていないが、長軸方向はN—7°—Wである。

本体部は潰れているが、袖部や天井に使用された板状の薄い凝灰岩が残っている。これらの凝灰岩の下に焼土が形成されており、カマド南の焼土より焼成は良くないが、燃焼部の焼土と推定される。



#### I45住居跡 A-B C-D

1. 10YR 2/2 黒褐色 暗褐色のブロック含む。
2. 7.5YR 1.7/1 黒 色 1より黒味をおびる。
3. 10YR 6/4 にぶい黄橙色 白頭山火山灰。
4. 5 Y 6/3 オリーブ黄色 十和田a火山灰。
5. 10YR 1.7/1 黒 色 粘性しまりともない。
6. 10YR 2/1 黒 色 粘性しまりともない。
7. 10YR 3/3 暗褐色 にぶい黄褐色含む、くずれやすくシルト質。
8. 10YR 3/2 黒褐色 上位は暗褐色多い、シルト質。
9. 10YR 4/4 褐 色 やや粘性がある。
10. 10YR 3/2 黒褐色 黒色と褐色の混土、シルト質。
11. 10YR 3/2 黒褐色 黒色と褐色の混土、やや粘性ある。

- #### I45住居跡 E-F G-H
1. 5 YR 4/6 赤褐色 焼土、やわらかい。
  2. 10YR 2/2 黒褐色 軟質で粘性ややある。
  3. 10YR 3/3 暗褐色 黒色土、焼土少暈含む。
  4. 10YR 3/3 暗褐色 烧土多く含む。
  5. 10YR 3/2 黒褐色 シルト質。IV層。
  6. 10YR 4/4 褐 色 シルト質。IV層。
  7. 10YR 1.7/1 黒 色 粘性しまりともない。
  8. 10YR 5/6 黄褐色 粘性ある。VI層起源。

第60図 I45住居跡（遺構・遺物）

〈時期〉 遺構の時期は埋土や出土遺物から奈良時代である。

遺物（第60図、写真図版66）

163はロクロ不使用の甕で底部を欠く。頸部外面に段を持ち、口縁部は外傾する。体部最大径を中央より上に持ち、体部下半は緩く窄む。器面調整は、外面は口縁部はヨコナデ体部はヘラケズリ後ヘラミガキ、内面は口縁部はヨコナデ体部はヘラナデ後部分的ヘラミガキである。

北壁際の埋土下位から出土している。

G47住居跡（第61図、写真図版24・25）

調査区の南西部に位置し I 45住居跡の西8.8m付近にあり、間にはH47住居跡がある。地表面で直径4mの凹地があり、検土杖で調べると黒色の埋土があり、深さも一定であることから住居跡として調査を進めた。

〈占地〉 地形区C区の西端に位置し北に下る狭い緩斜面を占地している。遺構の北3m付近から急斜面となり、南は2mほどから比高2~3mの丘状の地形面となる。

〈平面形・規模〉 平面形は隅丸台形である。規模は、南辺が4.3m、北辺が4.8m、南北方向が4.4mである。床面積は15.8m<sup>2</sup>である。

〈埋土〉 埋土は6層に細分される。全体的に上位と下位は黒褐色土、中位は黒色土が多く、粘性のないシルト質土壤である。

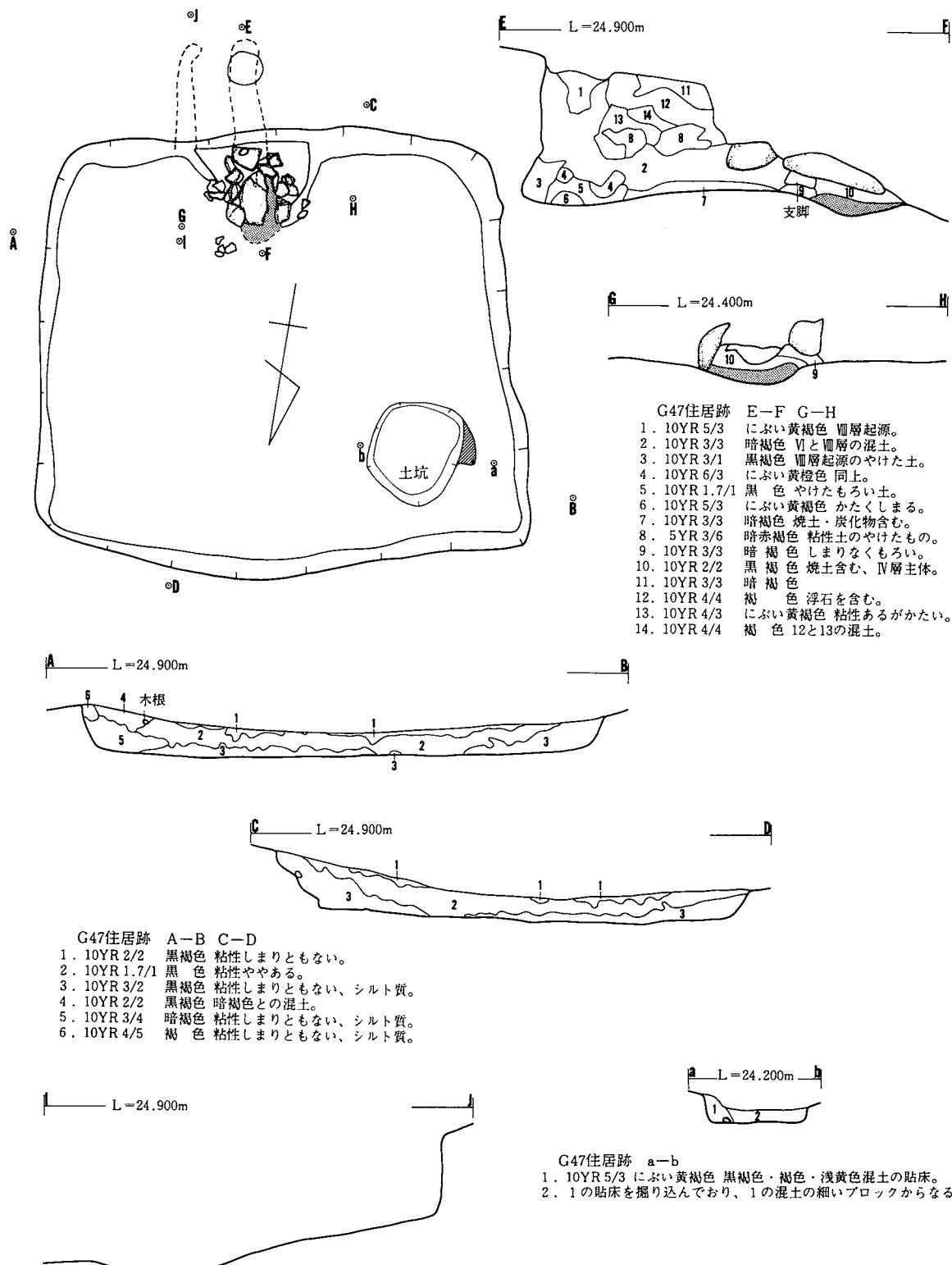
〈壁〉 壁の上位はIV層、下位はVI層であるが南壁では灰白色土（VIII層）もみられる。壁の立ち上がりは全体的に外傾する。壁高は南壁で最大58cm、北壁で最小27cmである。

〈床〉 床面は北側の一部がVI層であるほかはVIII層上面まで掘り込まれている。床面は地山に沿って南から北に緩く傾き、比高差は最大20cmである。北側を中心に、褐色・黒褐色・浅黄色のブロックからなる貼り床がみられる。柱穴や周溝は検出されていない。

〈土坑〉 北西隅に位置し、平面形は隅丸台形である。規模は、開口部径97×86cm、底部径84×72cm、深さは15~27cmである。埋土はにぶい黄褐色土主体であるが貼り床に使用された土のブロックが混じっている。したがって、この土坑は住居跡に付属するものの、住居構築後に新しく掘られたものと推定される。

〈カマド〉 カマドは南壁中央東寄りで2基検出された。1号カマドは新期の2号カマドの煙道を調査した際に煙道だけが検出されたものである。煙道の長さは1.1mあり、長軸方向はS-8°-Eである。割り貫き式の煙道は壁際からは15°の上り勾配となり、煙出部で直立する。埋土の実測は省略した。

2号カマドは新期のものであり、総長1.97m、壁外約1.1mである。長軸方向はS-14°-Eである。本体部の残存状況は良く、袖部の両脇には径13~33cmの亜角礫14個と壊れた甕を使用し



第61図 G47住居跡（遺構）

ている。天井部には、長方形（ $52 \times 27 \times 10$ cm）と五角形（ $30 \times 20 \times 13$ cm）の凝灰岩を使用している。これらの礫の周りはIV層とVII層の混土で固められている。天井石の下には土製の支脚（第62図-173）がある。

燃焼部の焼土は、厚さは最大9cmあり、浅皿状の凹地に形成され良く焼けている。

割り貫き式の煙道は壁際から僅かに下り、煙出部で直立する。煙出口の平面形は直径25cmの円形、断面形は円筒状であるが底部が少し脹らむ。煙道の埋土には焼土と炭化物が混じる。特に、煙道の上壁が焼けている。煙出口の埋土上位にはVII層起源の浅黄色土が多く人為的に塞いだ可能性がある。

〈時期〉 遺構の時期は出土遺物から平安時代である。

遺物（第62図、写真図版66・67）

164はロクロ不使用の壺である。外面とも段はなく、体部から口縁部はやや内彎気味に外傾する。底部は平底気味である。器面調整は、外面ともヘラミガキであり、内面は黒色処理されている。

165～172はロクロ不使用の甕であり、いずれも完形品ではない。

165は口縁部付近である。頸部に括れを持ち、短い口縁部は外傾し、体部は脹らむ。器面調整は、外面は口縁部はヨコナデ体部はヘラケズリ、内面は口縁部はヨコナデ体部はヘラナデである。胎土に粗い砂を含む。

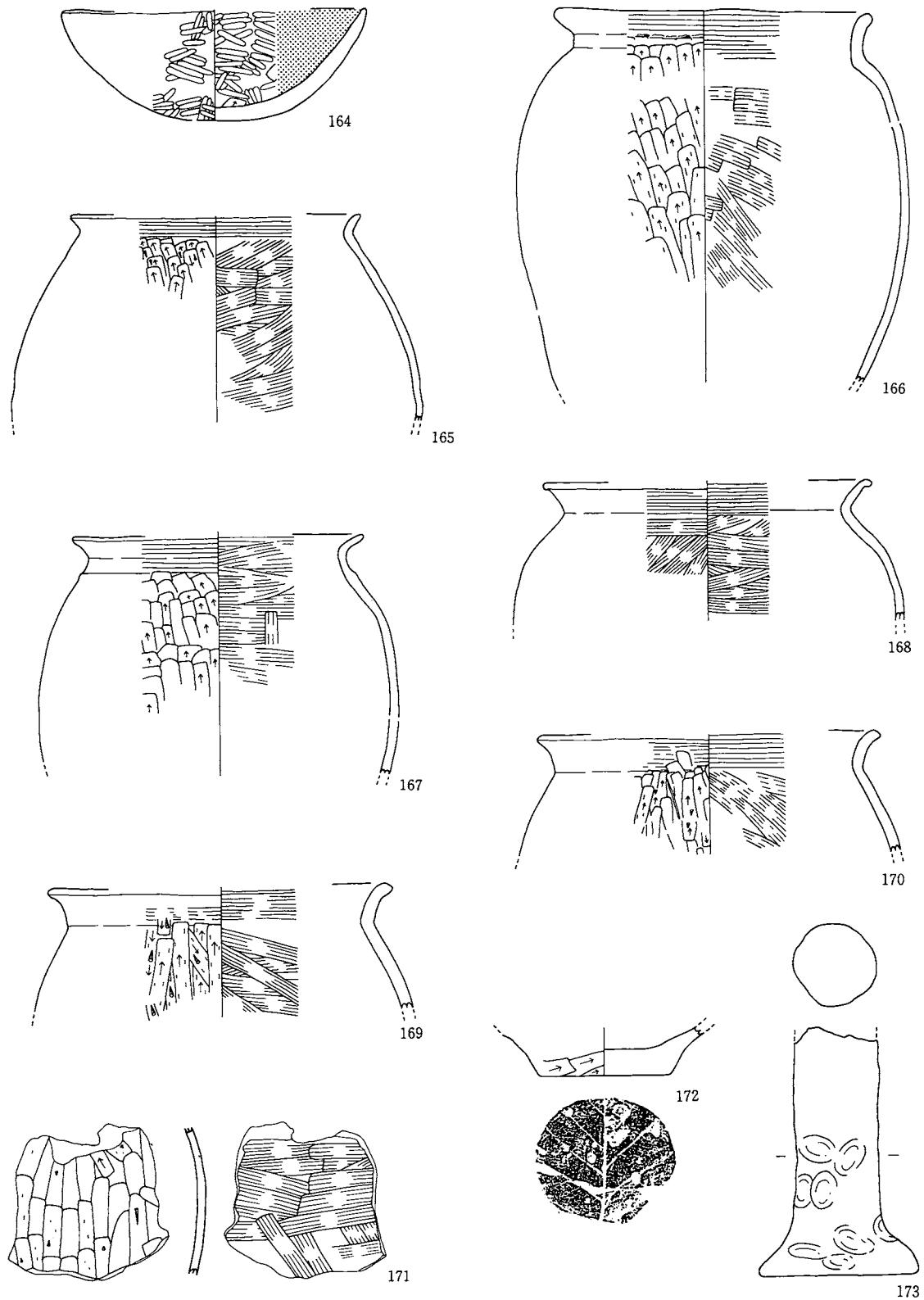
166は甕で体部下半を欠く。全体的に歪みが大きく口径は橢円形気味である。頸部は直立し外面に僅かに段を持ち、口縁部は外傾し、口唇部は厚く丸味を持つ。体部最大径を中央より上に持つ。器面調整は、外面は口縁部はヨコナデ体部はヘラケズリ、内面は口縁部はヨコナデ体部はヘラナデである。内面には僅かに煤が付着する。胎土に小石を少量含む。

167は甕で体部下半を欠く。頸部に括れを持ち、短い口縁部は外反気味である。体部最大径を中心付近に持つ。器面調整は、外面は口縁部はヨコナデ体部はヘラケズリで光沢があり、内面は口縁部はヨコナデ後ヘラナデ体部はヘラナデである。内外面には煤が少量付着し、胎土に砂や小石を含む。

168は甕の口縁部付近である。頸部に括れを持ち、口縁部は外傾し、口唇部は丸味を持ち外側に張り出す。器面調整は、外面は口縁部はヨコナデ体部は一部ヘラナデ、内面は口縁部はヨコナデ体部はヘラナデである。胎土に砂や小石を含む。

169は甕の口縁部付近である。頸部に括れを持ち、口縁部は外傾し、口唇部は肥厚し外側に張り出す。器面調整は、外面は口縁部はヨコナデ体部はナデ状のヘラケズリ、内面は口縁部はヨコナデ体部はヘラナデである。胎土に小石を含む。

170は甕の口縁部付近であり、169と同一個体と思われる。器形や器面調整は同じである。



第62図 G47住居跡（遺物）

171は甕の体部破片であり、165と同一個体と思われる。

172は甕の底部である。下端はヘラケズリで調整されている。外面には木葉痕がある。

173は土製の支脚で上部を欠く。直径4cmの円柱状であり、底部が広がり底径は7.5cm、高さの現存値は12.3cmである。指頭押圧痕が残る。

出土状況は、164は検出面と床面から、165・172は床面から、166～169はカマド脇から、170・171・173はカマド内から出土している。

#### H47住居跡（第63図、写真図版25）

調査区の南西部に位置し、I 45住居跡とG 47住居跡の間にあり、両住居跡との距離は2～3mである。両住居跡の調査終了後周辺の検出面を下げたところ、輪郭は分からなかったが、火山灰や遺物がみられるようになり、精査の結果住居跡であることが判明した。

〈占地〉 I 45住居跡付近から西にのびる幅の狭い平坦面を占地しており、北側2m付近から下り斜面である。

〈平面形・規模〉 平面形は隅丸長方形である。規模は、東西方向が3.68m、南北方向が3mである。床面積は9m<sup>2</sup>である。

〈埋土〉 埋土は8層に細分される。全体的に木根による攪乱があるが、上位は火山灰を含む黒褐色～暗褐色の混土、中位は十和田a降下火山灰、下位は黒褐色土、壁付近は褐色土が多くなる。

〈壁〉 壁の立ち上がりは全体的に不明瞭である。特に、南壁は再堆積層であるため分かりにくい。壁高は南壁で最大38cm、北壁で最小7cmである。

〈床〉 床面はVII層の上部で汚れているが、比較的堅くしまり、平坦で比高差は5cmである。

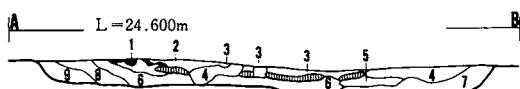
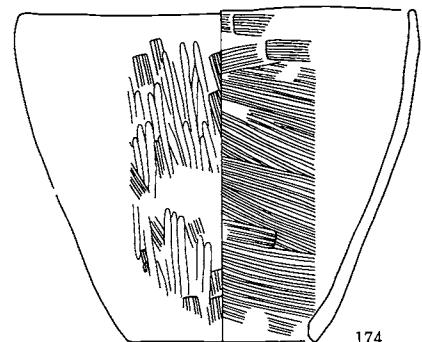
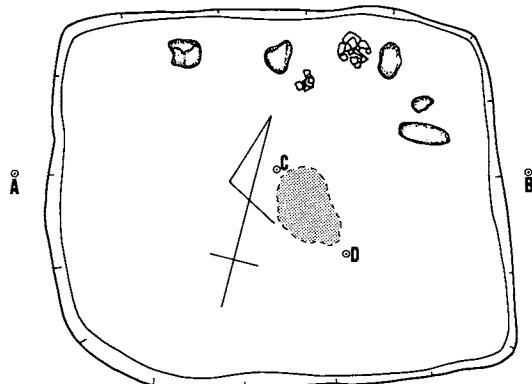
〈カマド〉 カマドは破壊されており、構築場所などは不明であるが、北壁付近には風化した板状の凝灰岩がある。この凝灰岩は、長さは18～36cm、幅は10～20cm、厚さは1.5～3cmあり、焼けていることからカマドの構成礫と思われる。また、床面中央付近は径66×44cmの範囲で焼けているが、燃焼部の埋土かどうかは不明である。

〈時期〉 遺構の時期は、埋土や出土遺物から奈良時代である。

#### 遺物（第63図、写真図版67）

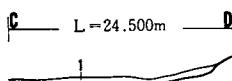
174は無底式の甕である。口径部が開き、体部下半は外傾し、口縁部付近は内彎気味に直立する。器面調整は、外面は刷毛目後ヘラミガキ、内面は刷毛目である。

175はロクロ不使用の甕で体部下半を欠く。頸部外面に僅かに段を持ち、口縁部は外傾する。体部最大径を中央付近に持つ。器面調整は、内外面とも口縁部はヘラミガキ、体部は刷毛目である。外面のミガキは磨滅しているため不明である。とともに北壁近くの床面から出土している。

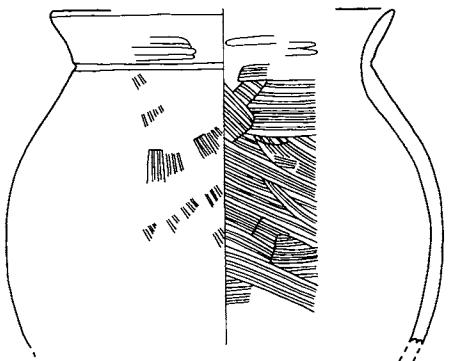


H47住居跡 A-B

1. 10YR 6/8 明黄褐色 白頭山火山灰、木根の搅乱がある。
2. 2.5Y 6/4 にぼい黄色 十和田a火山灰。
3. 10YR 2/3 黒褐色 炭化物を僅かに含む。
4. 10YR 3/3 暗褐色 十和田aのブロック含む、炭化物含む。
5. 10YR 2/1 黒褐色 十和田aのブロックを僅かに含む。
6. 10YR 3/2 黒褐色 白頭山火山灰・焼土・炭化物含む。
7. 10YR 4/4 褐色 シルト質、IV層。
8. 10YR 3/4 暗褐色 酱層のブロック含む。
9. 10YR 4/4 褐色 酱層のブロック含む。



H47住居跡 C-D  
1. 5YR 4/4 にぼい赤褐色 かたくしまる 焼きは弱い。



第63図 H47住居跡 (遺構・遺物)

#### K 47住居跡 (第64図、写真図版26)

調査区の南西縁の土層断面で土坑として検出したものであり、調査の結果煙道などが検出され住居跡と判明した。

〈占地〉 東西にのびる丘状の微地形の北側を占地している。遺構の北側は平坦に近く、南側は上り斜面、東側は下り斜面である。

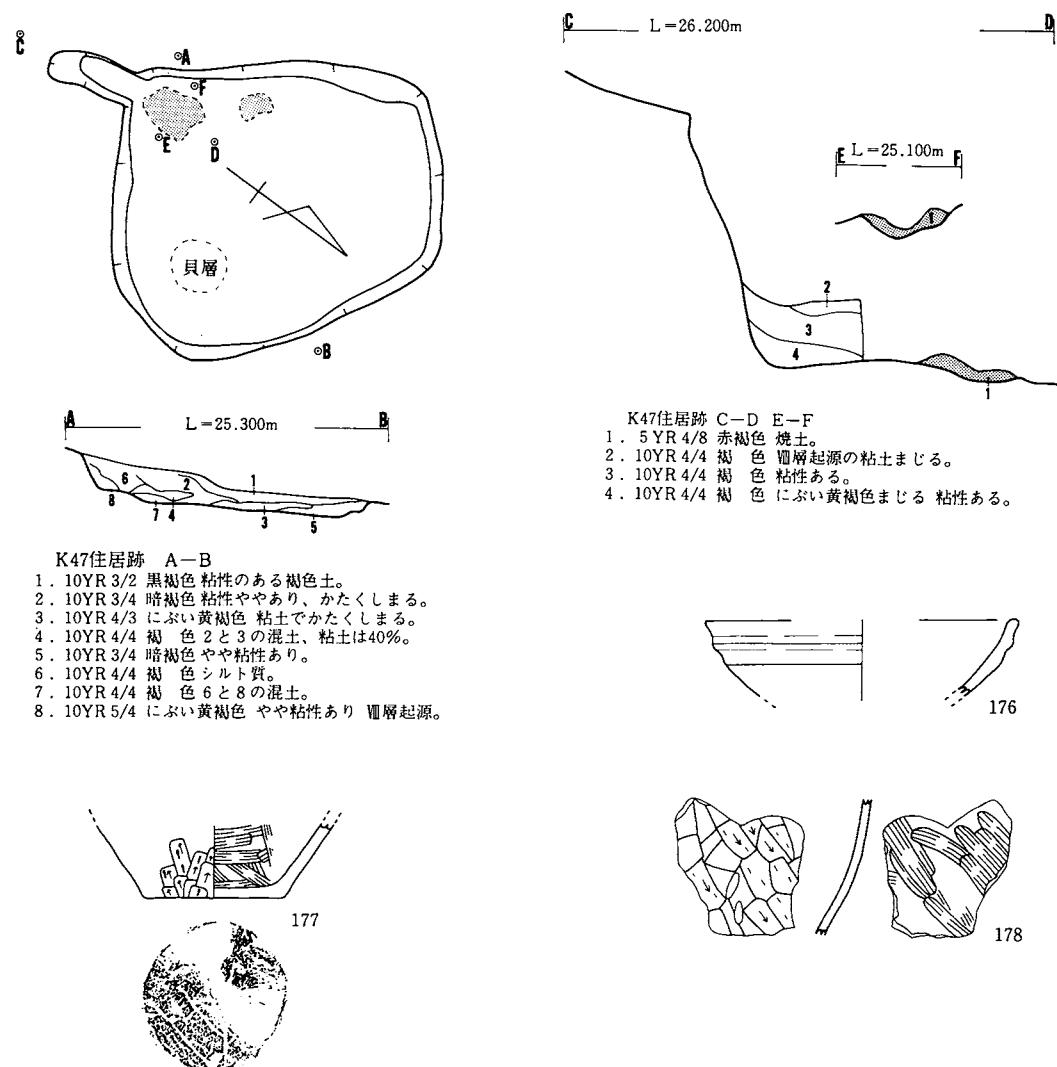
〈平面形・規模〉 平面形は不整な隅丸台形である。規模は北西辺が1.46m、南東辺が2.3m、北西—南東方向が2.64mである。床面積は4.2m<sup>2</sup>である。

〈埋土〉 当初の検出面を70cmほど下げて住居跡を検出している。埋土は8層に細分される。

上位は第一次検出面から続く黒褐色土であり、中～下位では暗褐色～褐色土が多くなる。

〈壁〉 壁層上面まで掘り込んでおり、壁の立ち上がりは全体的に外傾する。壁高は南西壁で最大28cm、北東壁で最小8cmである。

〈床〉 床面はVII層であるが所々に堅い粘土（IX層起源）がみられる。地山に沿って西から東に傾き、比高差は最大16cmである。東壁寄りには薄い具層が直径45cmの円形の範囲に分布して



第64図 K47住居跡（遺構・遺物）

いる。また、西壁際では焼土が僅かに見られる。柱穴や周溝は検出されていない。

〈カマド〉南隅に構築されている。長軸方向はS—7°—Eである。本体部は破壊されており、構成礫は残っていない。燃焼部の焼土は、径40×34cmの範囲で厚さは4～9cmあり、凹地に形成され上部が攪乱されている。

割り貫き式の煙道は、僅かな下り勾配で壁際から50cmほど下った後煙出口へ75°前後の傾きで1m近く立ち上がる。

〈時期〉 遺構の時期は出土遺物から平安時代である。

#### 遺物（第64図、写真図版67）

176は赤焼き土器の壺の口縁部付近である。内外面ともロクロナデ以外の調整はなく、黒色処理もみられない。

177はロクロ不使用の甕の底部付近である。外面の器面調整はヘラケズリで底部下端に及び、体部下位から底部下端まで連続して窄む。底部外面には木葉痕がある。内面調整はヘラナデである。胎土に砂や小石を含む。

178はロクロ不使用の甕の体部破片である。器面調整は、外面はヘラケズリ、内面はヘラナデである。胎土に砂を含む。いずれも埋土から出土している。

貝類は破碎が著しく実測図と写真を省略したが、分類結果は、エゾアワビ5点、チヂミボラ1点、エゾバイ科の一種1点、ムラサキインコガイの右殻1点、イガイの右殻6点、左殻5点、エゾイガイの右殻1点、左殻3点、チシマフジツボの殻板41点が出土している。

#### O 5 住居跡（第65図、写真図版27）

調査区の北東部に位置し最も東にある。西3.4mにはN 7 住居跡がある。この住居跡は試掘トレンチで炭化材と焼土が出土し、住居跡であることが判明した。

〈占地〉 僅かに南東に下る緩斜面を占地しており、北側3m付近からは20°位の上り斜面である。遺構は黒色土中にあり条件は良くない。

〈平面形・規模〉 南壁は削平され不詳であるが、平面形は隅丸長方形と推定される。規模は東西方向が3.4m、南北方向は推定3.9mである。床面積は推定12.2m<sup>2</sup>である。

〈埋土〉 埋土は試掘トレンチ断面での実測であり、4層に細分される。大半は黒色土であるが、壁際や床面付近では炭や焼土粒を含む黄褐色土が混入している。

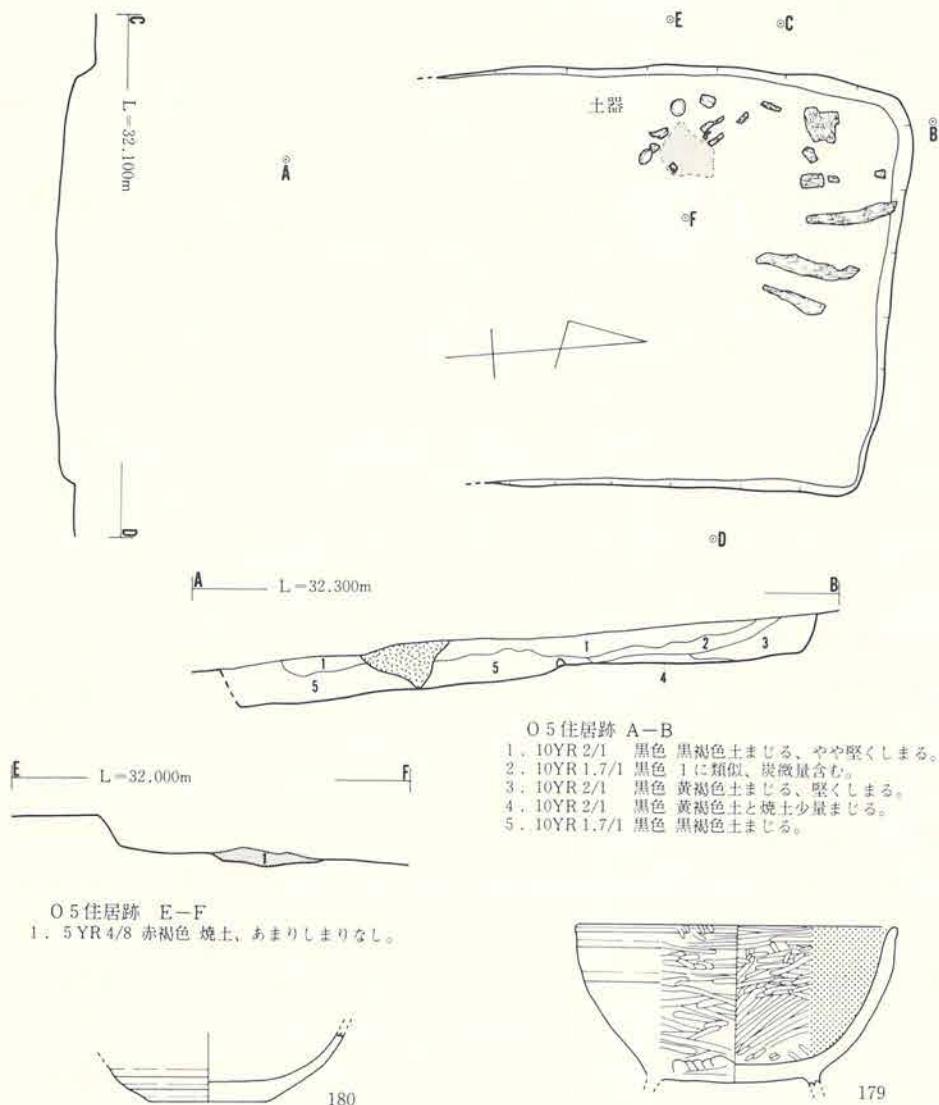
〈壁〉 東壁と西壁は黒色～黒褐色土中にあるため不詳な箇所もある。北壁はVI層を掘り込んでおり、壁の立ち上がりは外傾する所が多く、壁高は最大30cmである。南壁は削平されており不明である。

〈炭化材・焼土〉 住居跡の北西側に多く分布しており焼失住居跡と思われる。炭化材は床直

～3cm位に散布し、壁面と直交するものが多い。板状を呈し、厚さ2～3cm、幅10～15cmであり、一部カヤ状の炭化物もみられる。焼土はカマド付近を除くと少ない。

〈床〉 北半は地山面（VI層）であり比較的平坦で堅くしまっているが、南半は黒色土中にあらため軟質で床面は不詳である。柱穴や周溝は検出されていない。

〈カマド〉 西壁中央やや北寄りに構築されており、燃焼部焼土と構成礫の一部が残っている



第65図 O 5 住居跡（遺構・遺物）

だけである。焼土は径44×36cmの範囲に形成され、厚さは最大4cmである。

〈時期〉 埋土の特徴や出土遺物から平安時代である。

#### 遺物（第65図、写真図版67）

179はロクロ使用の高台付壺である。高台部を欠くが、壺部は内彎して立ち上がり、器面調整は内外面ともヘラミガキで黒色処理されている。壺部の切り離しは再調整のため不明である。

180はロクロ使用の壺の下半である。内外面ともミガキはなく、黒色処理も施されていない。底部切り離しは回転糸切りである。2点ともカマド付近から出土している。

#### N 7 住居跡（第66図、写真図版28）

調査区の北東部に位置しO 5 住居跡の西3.2m付近にある。また、西5.5mにはL 9 住居跡がある。この住居跡は、表土を除去した段階で十和田a降下火山灰のブロックや貼り床と思われるVI層起源の褐色土がみられることから、住居跡としたものである。調査の結果、褐色土は風倒木に伴うものであった。南壁の大半はO 7 土坑に切られている。

〈占地〉 僅かに南東に下る緩斜面を占地しているが、遺構は黒色土中にあり、条件は良くない。

〈平面形・規模〉 東壁一帯は風倒木で攪乱され、南壁はO 7 土坑に切られているが、平面形は正方形に近いものと推定される。規模は南北方向が推定4.5m、北辺は4.2m残っている。床面積は推定18.9m<sup>2</sup>である。

〈埋土〉 土坑部分を除くと6層に細分される。全体的に堅く締まった黒色土で構成される。東壁付近は攪乱されており軟らかい。中央部の埋土上位を中心に十和田a降下火山灰が小ブロック状に堆積し、さらに上位に白頭山火山灰が微量に散布する。

〈壁〉 黒色土中にあるため壁の立ち上がりはわかりにくい。壁高は北壁・西壁は最大30cmである。南壁は5～8cmである。

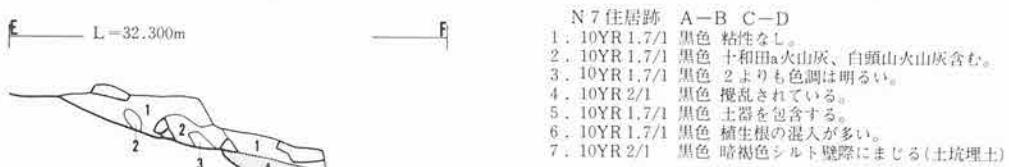
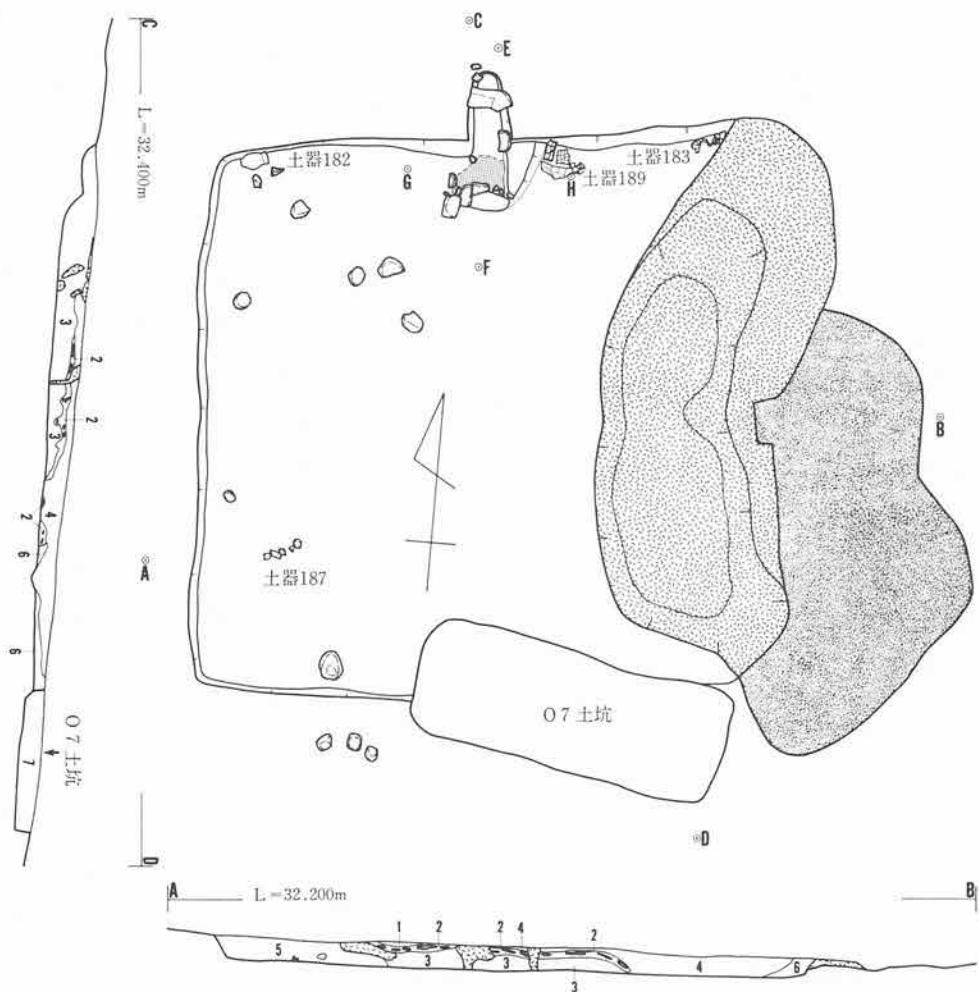
〈炭化材・焼土〉 炭化材はみられないが、焼土は西壁付近の埋土上位に少量分布しており、遺構検出の手掛かりとなった。

〈床〉 床面は、黒色土とVI層上位のにぶい赤褐色土からなり比較的堅くしまり、地山面に沿って南東に僅かに傾き、比高差は最大25cmある。貼り床はみられない。

〈カマド〉 北壁中央に構築されており、総長1.1m、壁外約0.6mである。カマドの長軸方向はN—4°—Wである。

本体部は崩落しているが天井に使用した板状の凝灰岩が残っている。袖部の幅は推定60cmである。燃焼部の焼土は径40×40cmの範囲に形成され、厚さは最大8cmあり良く焼けている。

掘り込み式の煙道は15°位の上り勾配であり、煙出口付近にも板状の凝灰岩が天井に使用さ



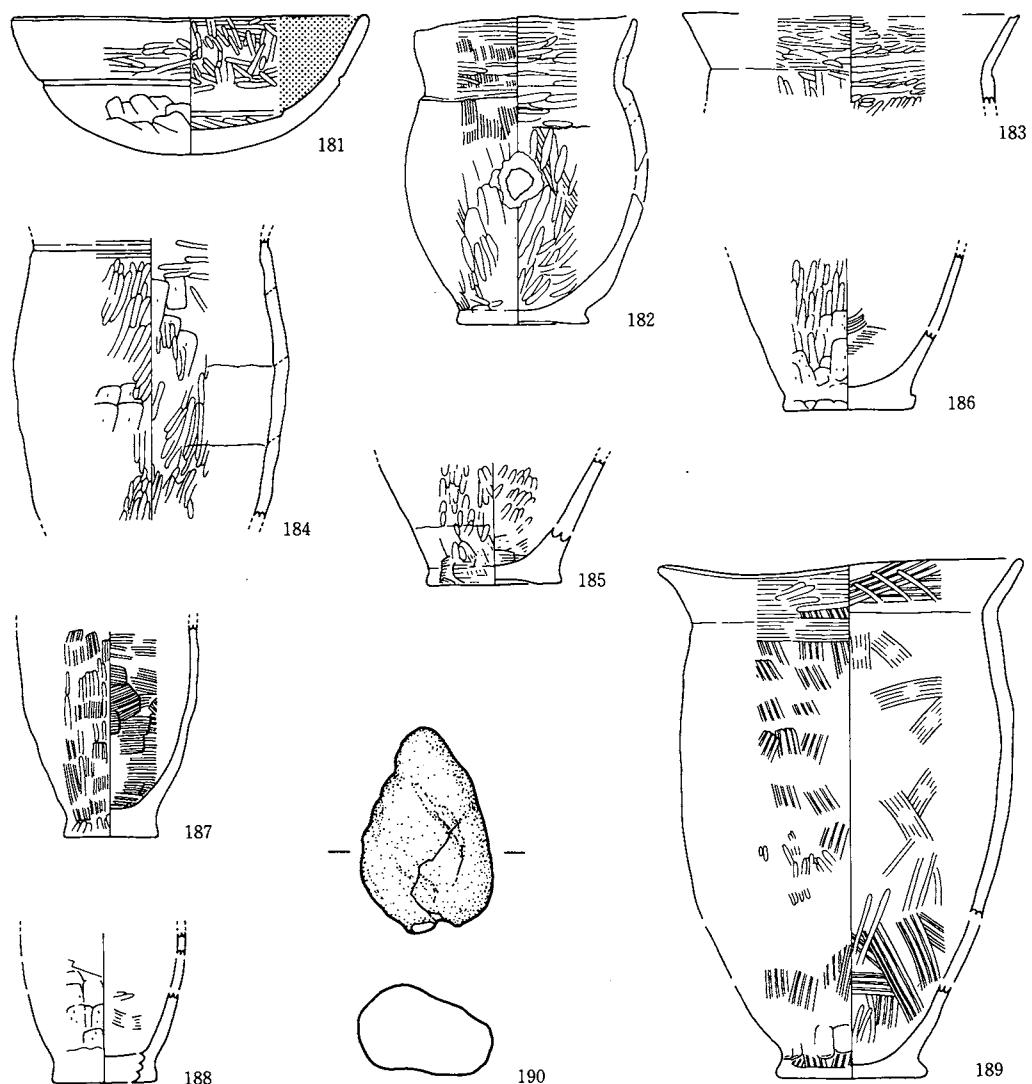
第66図 N 7 住居跡 (遺構)

れている。埋土には煙道に使用された黄褐色土や凝灰岩の破片が混じる。

〈時期〉 埋土の特徴や出土遺物から奈良時代である。

遺物（第67図、写真図版68）

181はロクロ不使用の壺である。外面は体部中央に内面は体部下位に段を持ち、体部は内彎気味に外傾する。器面調整は外面は上半がヘラミガキ下半はヘラケズリ、内面はヘラミガキ後黒色処理されている。底部は丸底である。



第67図 N7住居跡（遺物）

182はロクロ不使用の甕である。頸部に僅かに段を持ち、口縁部は内彎気味に外傾する。体部最大径を中央部に持ち、球胴である。底部下端は外側に張り出し一部削られている。内面は丸底である。器面調整は、外面は刷毛目後一部ヘラミガキであり口縁部ではヨコナデ主体である。内面は口縁部はヨコナデ後一部ヘラミガキ、体部はヘラミガキである。体部中央やや上には直径13~15mmの小円孔がある。この小円孔は焼成後外面からあけられており、二次的に貼付された粘土の一部が残っていることから、注口部を作り出して使用していたことが考えられる。

183はロクロ不使用の甕の口縁部である。頸部に括れを持ち、口縁部は外反し、口唇部は凹む。器面調整は内外面ともヘラミガキである。

184はロクロ不使用の甕の体部破片である。頸部に僅かに段を持ち、体部が脹らむ。器面調整は内外面ともヘラミガキ主体であり、外面に黒斑がある。

185はロクロ不使用の甕の底部付近である。底部下端は外側に張り出し、内面は丸底である。体部下位の器面調整は内外面ともヘラミガキである。

186はロクロ不使用の甕の底部付近である。底部下端は外側に張り出し、内面は丸底気味である。体部下位の器面調整は、外面はヘラミガキ、内面は刷毛目である。内面には炭化物が付着している。

187はロクロ不使用の小型の甕で口縁部を欠く。体部は底部にかけて窄む。底部下端は外側にやや張り出し、内面は丸底である。器面調整は、外面は刷毛目後部分的にヘラミガキ、内面は刷毛目である。

188ロクロ不使用の小型の甕の体部で底部が僅かに残っている。体部は底部にかけて僅かに窄まり、底部下端は外側に張り出す。内面の調整はヘラミガキであるが、外面は剥落しているため不明である。

189はロクロ不使用の甕で一部欠損している。頸部に括れを持ち、口縁部は外傾する。体部最大径を肩部付近に持ち、底部にかけて緩やかに窄む。底部下端は外側に張り出し、内面は丸底である。器面調整は内外面とも刷毛目後ヘラミガキ主体であるが剥落著しく不詳の所が多い。

土師器の出土状況は182は北西隅から、181・183~185・189は北壁際から、186はQ<sub>4</sub>埋土から、187はQ<sub>4</sub>床面から188はQ<sub>3</sub>埋土から出土している。

190は琥珀の原石である。Q<sub>3</sub>埋土下位から出土している。実測図に示したものは、大きさは26.6×17.4×13.8mm、重量は2.97gである。全出土量の合計は3.59gである。

#### H 9 住居跡（第68図、写真図版29）

調査区の北東部に位置し第2次調査分では最も北にある。南東1.6mにはJ 9 住居跡がある。この住居跡は、試掘トレンチや表土を除去した段階では検出できなかつたので順次掘り下げた

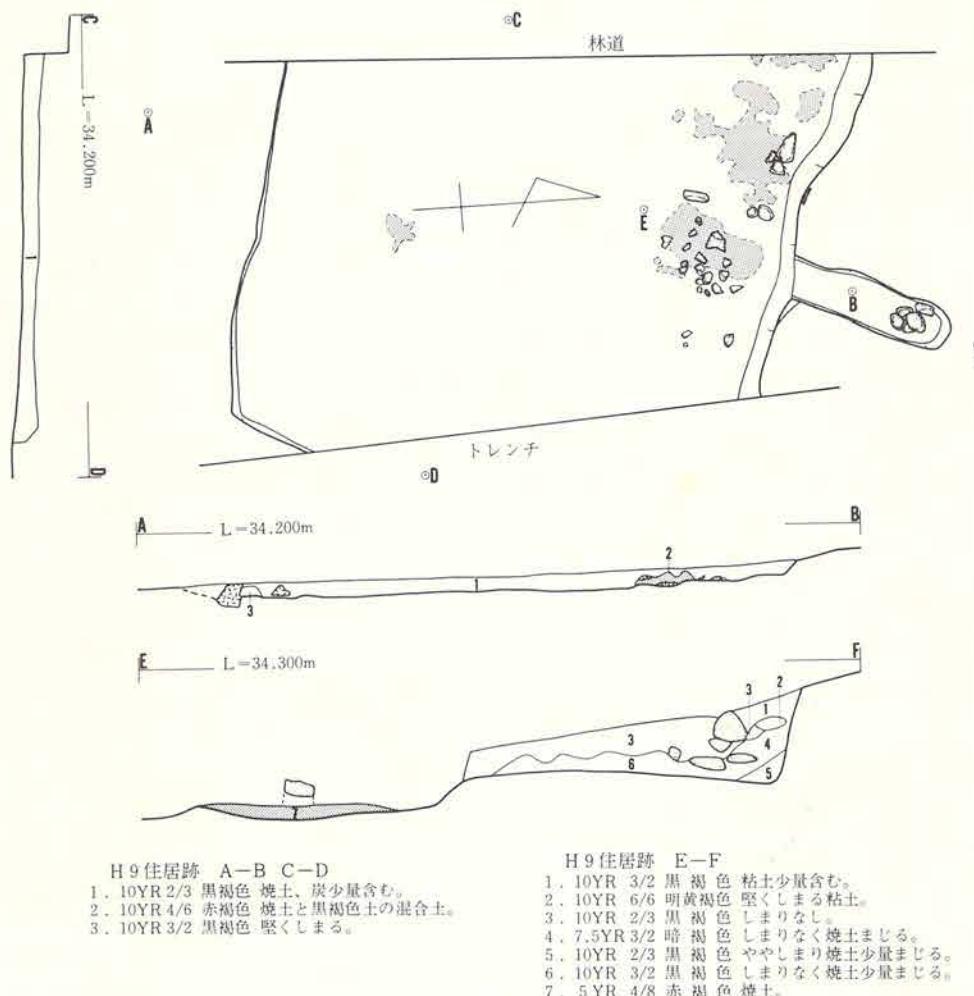
ところ、焼土や遺物が多く出土し住居跡であることが判明した。西側は林道のため調査していない。

〈占地〉僅かに南々東に下る緩斜面を占地しているが、遺構付近はほぼ平坦に近く、北壁付近からやや高くなる。

〈平面形・規模〉東壁を試掘トレンチで削平しており、西側は未調査であるため、形状等は不明である。規模は南北方向が4.32mである。床面積の残存値は12.5m<sup>2</sup>である。

〈埋土〉埋土は黒褐色土の単層であるが、北壁付近では下位に焼土が多くみられる。

〈壁〉遺構はIV層を掘り込んでいるため、全体的に壁の立ち上がりはわかりにくい。壁高は北壁で最大15cm、南壁は2~3cmである。



第68図 H9 住居跡（遺構）

〈炭化材・焼土〉 炭化材はみられないが、焼土は北壁付近に散布している。これらの焼土は現地性のものであり、厚さは2～6cmで床面から10cm位の所に形成されており、焼失住居跡と思われる。また、南壁の外側でも焼土がみられた。

〈床〉 床面はIV～V層起源の再堆積層面にあるため堅さは一様ではなく、一部掘り過ぎもある。結果的にはやや凹凸のある床面である。比高差は10cm位である。貼り床はみられない。柱穴や周溝は検出されていない。

〈カマド〉 北壁に構築されており、総長約2.5m、壁外約1.4mである。カマドの長軸方向はN-22°-Eである。

本体部は削平されて残っていないが、左袖の芯材と思われる長方形の角礫が20cmほど埋設されている。燃焼部の焼土は径82×42cmの隅丸長方形で厚さは最大6cmであり、中央に支脚と思われる粒径9cmの角礫が2個ある。煙道は、壁外ではほぼ水平で煙出口へ約75°の傾きで立ち上がる。煙出口には粒径13～16cmの亜円礫を6個使用しているが、石組みは崩れている。煙道の埋土には焼土がみられる。

〈時期〉 出土遺物から平安時代である。

#### 遺物（第69図、写真図版68・69）

出土遺物は土師器と琥珀である。土師器はロクロ使用の壺とロクロ不使用の甕である。

191は壺である。体部は内彎して立ち上がり、外面にミガキはなく、内面はヘラミガキ後黒色処理されている。底部切り離しは回転糸切りであり、下端が一部再調整されている。

192は壺の口縁部破片である。内面はヘラミガキ後黒色処理されており、外面の再調整は雑である。

193は壺の口縁部破片である。内面は黒色処理されているが剥落している所が多い。

194は壺の底部で欠損している。底部内面は放射状のヘラミガキで黒色処理されている。外面は再調整されており、切り離し技法は不明である。

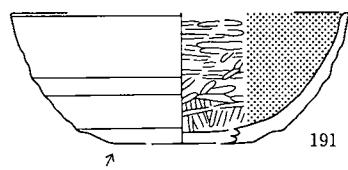
195は甕の口縁部破片である。短い口縁部は外反し、口唇部は薄く角張る。体部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ調整である。胎土に小礫を含む。

196は甕の口縁部破片である。口縁部は短く外反する。体部外面の調整はヘラケズリ、内面はヘラナデである。

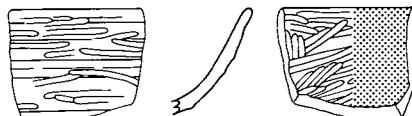
197は甕の口縁部破片である。口縁部は短く外反する。胎土に小礫を含む。

198は甕の口縁部付近である。頸部に括れを持ち口縁は短く外反し、体部は脹らむ。口縁部は内外ともヨコナデ、体部は外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ調整である。

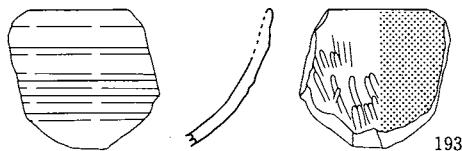
199は甕の口縁部付近である。口縁部は短く外反し、体部は脹らむ。口縁部は内外ともヨコナデ調整である。胎土に砂や小礫を含む。



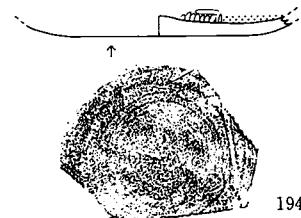
191



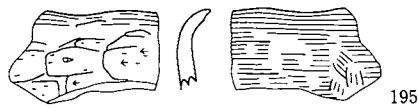
192



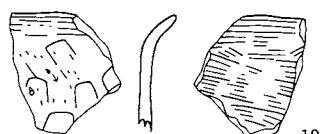
193



194



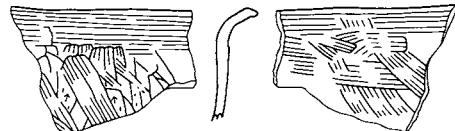
195



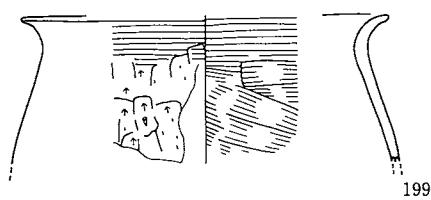
196



197



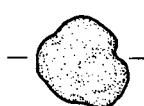
198



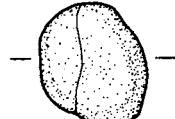
199



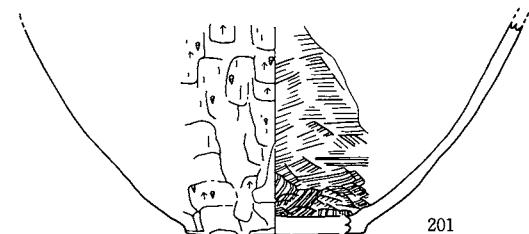
200



202



203



201

第69図 H 9 住居跡（遺物）

200は甕の底部付近である。底部下端に張り出しあらず窄む。器面調整は外面はヘラケズリ、内面はヘラナデである。胎土に小礫を多く含む。

201は甕の体部下半で欠損している。底部下端に張り出しあらず窄む。器面調整は外面はヘラケズリ、内面はヘラナデである。胎土に小礫を含む。

以上の土師器は床面や焼土上から出土している。

202・203は琥珀である。202は平面形は不整六角形に近い未整品で、部分的に粗削りされている。大きさは $12.0 \times 11.5 \times 7.3$ mm、重量は0.63gである。カマド付近の埋土から出土している。203は成形面を持つ未整品である。大きさは $16.7 \times 13.6 \times 10.6$ mm、全重量は1.4gである。埋土下位から出土している。

#### J 9住居跡（第70図、写真図版30）

調査区の北東部に位置しH 9住居跡の南東1.6m付近にある。この住居跡は、西側と南東側の2本の試掘トレンチでは分からなかったが、全体をやや掘り下げた時点で火山灰を含む隅丸方形に近い輪郭として検出された。

〈占地〉僅かに南東に下る緩斜面を占地している。

〈平面形・規模〉平面形は隅丸正方形に近く、規模は東西方向が5.28m、南北方向が5.1mである。床面積は22.5m<sup>2</sup>である。

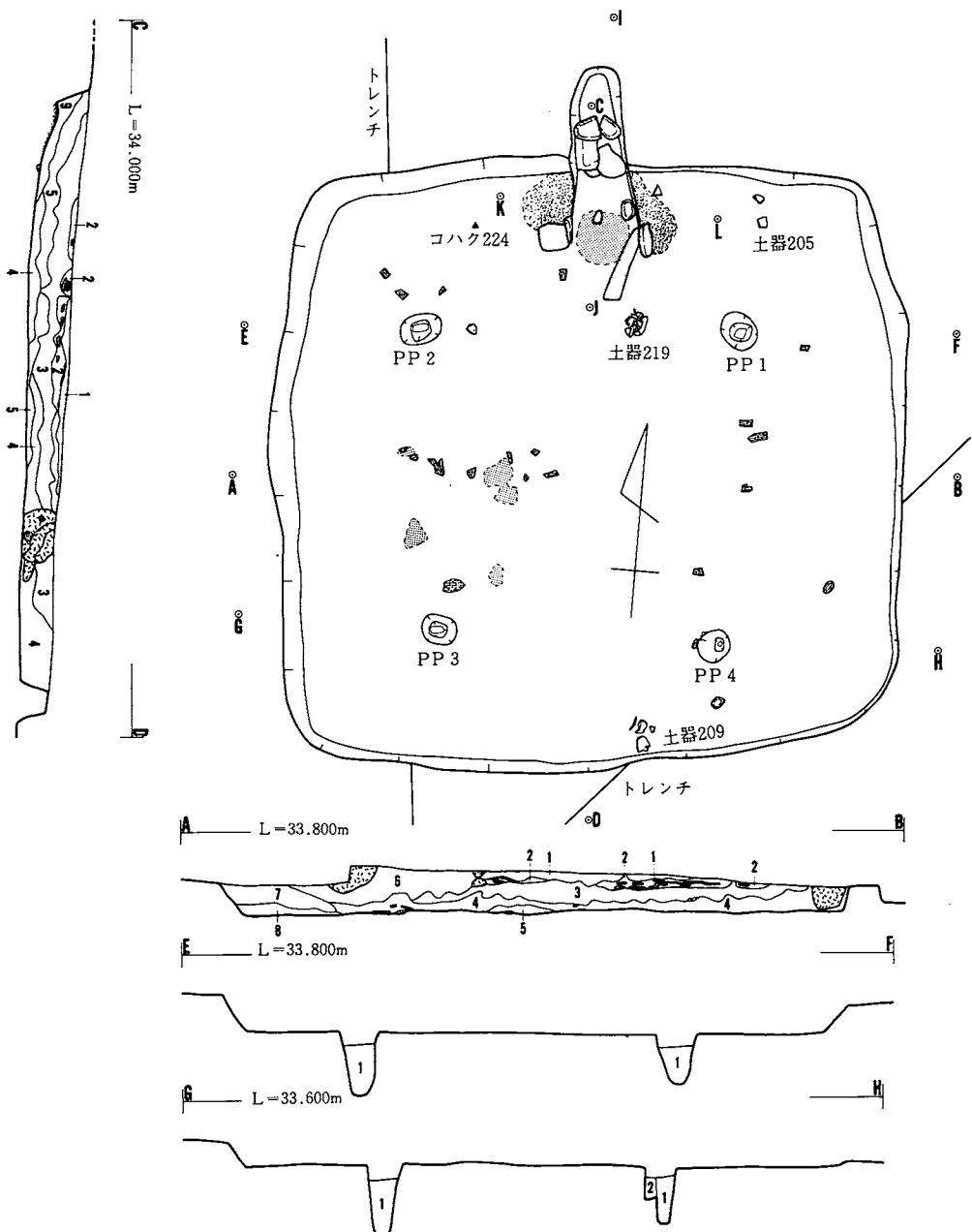
〈埋土〉埋土は9層に細分される。2・4・5層は黒色土であり、それ以外は黒褐色である。2層には上位に白頭山火山灰が、下位に十和田a降下火山灰が薄いブロック状に堆積している。中位から床直にかけての黒褐色土中には焼土粒や炭化物が少量含まれている。

〈壁〉全体的に黒褐色の再堆積層(IV層起源)を掘り込んでいるため壁は崩れやすく、壁の立ち上がりは外傾する。壁高は北壁最大40cm、東壁最大28cm、南壁最大25cm、西壁最大30cmである。

〈炭化材・焼土〉床上に炭化材や焼土が散在していることから焼失住居跡と思われる。炭化材の残存状況は不良のため断面実測は省略している。焼土は厚さ3～5cmで良く焼けている。

〈床〉床面はV層起源の再堆積層中にあり、全体的に平坦である。貼り床はみられないが、北壁際以外は比較的堅くしまっており、特に中央付近は一段と堅くなっている。周溝はない。

〈柱穴〉柱穴は4個検出されており、柱穴配置は四角形である。柱穴の平面形は楕円形気味であり、規模はPP<sub>1</sub>が $32 \times 27$ cmで深さ42cm、PP<sub>2</sub>が $34 \times 25$ cmで深さ53cm、PP<sub>3</sub>が $30 \times 24$ cmで深さ57cm、PP<sub>4</sub>が $26 \times 24$ cmで深さ47cmである。このうち、PP<sub>4</sub>以外は長方形気味の柱痕跡がある。PP<sub>4</sub>の柱痕跡は先細りであることから打ち込まれたものと思われる。柱穴の芯芯間距離はPP<sub>1</sub>—PP<sub>2</sub>が2.64m、PP<sub>2</sub>—PP<sub>3</sub>が2.52m、PP<sub>3</sub>—PP<sub>4</sub>が2.36m、PP<sub>4</sub>—PP<sub>1</sub>が2.58mである。



J9住居跡 A-B C-D

1. 10YR 2/2 黒褐色 シルト質、植生根多い。
2. 10YR 2/1 黒 色 白頭山と十和田火山灰含む。
3. 10YR 2/2 黒褐色 堅くしまる、焼土・炭majiru。
4. 10YR 2/1 黒 色 堅くしまる、3より炭が多い
5. 10YR 2/1 黒 色 堅くしまる、4に類似する。
6. 10YR 2/2 黒褐色 しまりなし、植生根多い。
7. 10YR 2/3 黒褐色 堅くしまる、褐色土1%。
8. 10YR 3/2 黒褐色 堅くしまる、7より褐色土多い。
9. 10YR 3/2 黒褐色 堅くしまる、黄褐色シルト混入。

J9住居跡 E-F G-H

1. 10YR 2/1 黒 色 軟らかい(柱痕)
2. 10YR 2/2 黒褐色 堅くしまる、粘性あり(堀り方)

第70図 J9住居跡 (遺構1)

〈カマド〉 北壁中央に構築されており、総長約1.6m、壁外約0.9mである。カマドの長軸方向はN—6°—Wである。

本体部は崩落しているが使用した礫や黒褐色土が残っている。袖部の幅は芯材の外側で70cmほどである。両袖は地山の黒色土を掘り込み、内側に芯材の扁平な凝灰岩を10～15cm埋設して作られている。また、近くには長さ65cmの天井に使用した凝灰岩の角礫がある。

燃焼部の焼土は、直径43cmの円形で厚さは最大13cmほどあり、良く焼けている。中央付近には支脚と思われる粒径10cmの亜円礫がある。

掘り込み式の煙道は20°位の上り勾配であり、壁面は焼けている。煙道部天井は板状の凝灰岩と褐色土（VI層起源）で構築されている。煙出口は削平され消失している。

〈時期〉 埋土の特徴や出土遺物から奈良時代である。

遺物（第71～73図、写真図版69～71）

出土遺物は土師器、鉄器、石器、琥珀で構成される。土師器はロクロ不使用の壺、甌、甕である。

204は壺の口縁部破片である。器面調整は内外面ともヘラミガキで内面は黒色処理されている。外面には煤が付着している。

205は内外有段の壺で3分の2を欠く。体部外面の中央やや下位付近に1本の沈線が巡り、口縁部は外傾する。底部はヘラケズリで平底気味である。器面調整は、内外面ともヘラミガキで内面は黒色処理されている。

206は壺の口縁部と体部の破片を接合したものである。丸底で体部は内彎気味に直立する。器面調整は内外面とも雑なヘラミガキであり、内面は黒色処理されている。

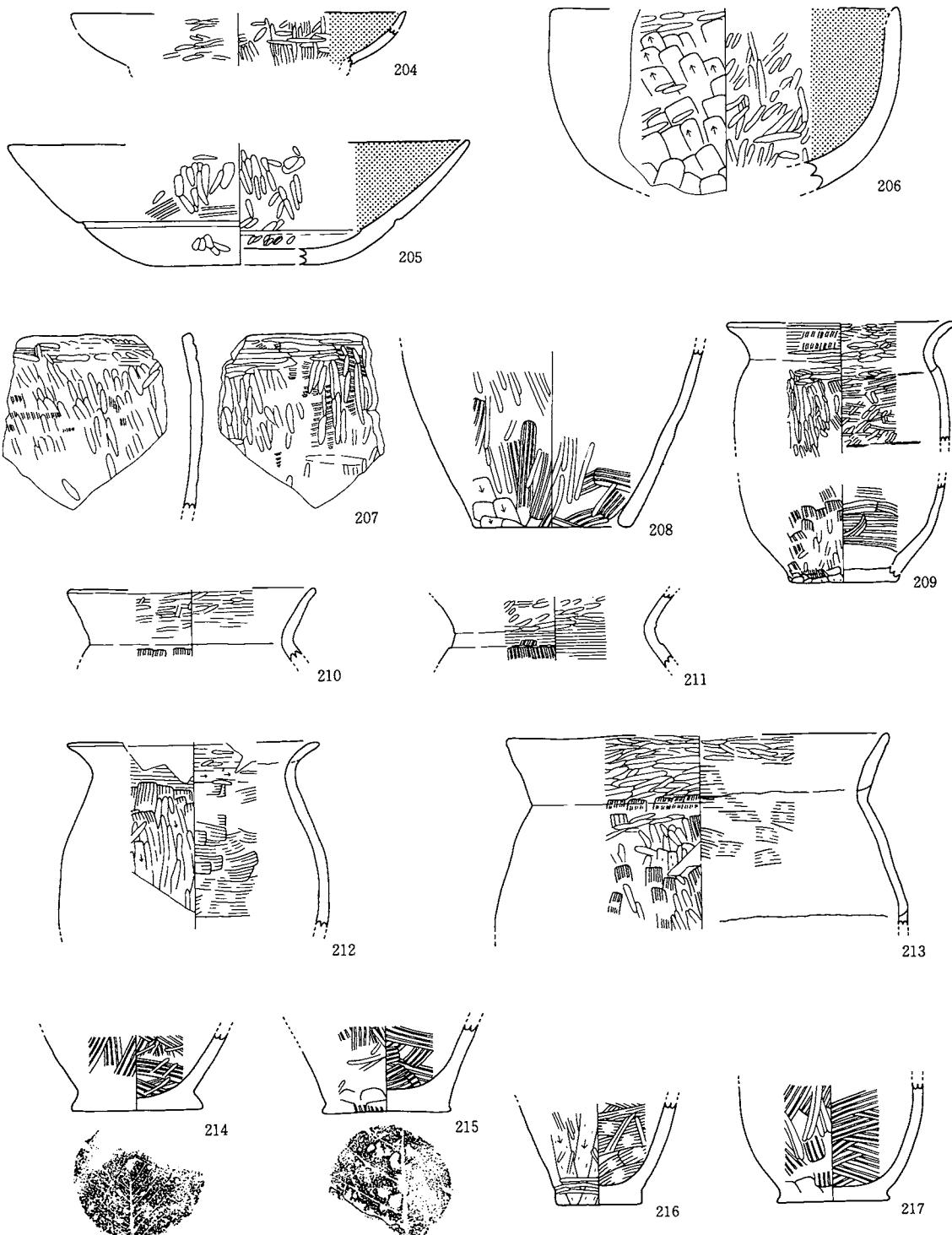
207・208は無底式の甌であり、接合しないが同一個体と思われる。口縁部外面には強いヨコナデによる段がある。器面調整は内外面とも刷毛目後ヘラミガキである。

209は接合しないが同一個体の甕である。頸部が括れ、口縁部は外反する。体部最大径を中心やや上に持ち、全体的に丸味をおびている。底部は下端が窄む。器面調整は、外面は口縁部は刷毛目を僅かに残しヨコナデ後ヘラミガキ、体部は刷毛目後ヘラミガキ、内面は口縁部はヘラミガキ体部は粗い刷毛目で一部ヘラミガキである。

210は甕の口縁部破片である。頸部は括れ、口縁部は外反気味である。口縁部の器面調整は、外面は刷毛目後ヘラミガキ、内面はヘラミガキであり、外面のミガキは強く刷毛目は微かに残っている。

211は体部の脹らむ甕の頸部付近の破片である。器面調整は内外面ともヘラミガキ主体であり、外面には刷毛目が残る。

212は甕の上半部で下半を欠く。頸部に括れを持ち、口縁部は外反する。最大径を体部中央付



第71図 J9住居跡（遺物1）

近に持ち、体部は脹らむ。器面調整は、口縁部は内外面ともヨコナデ主体、体部は外面はヘラナデ後ヘラミガキ、内面はヘラナデである。

213は口径の大きい甕の口縁部付近である。頸部に括れを持ち、口縁部は外傾する。最大径を体部中央付近に持つものと思われる。器面調整は、口縁部は内外面とも強いヘラミガキ、体部は外面は細い刷毛目後ヘラミガキ、内面はヘラナデである。外面には一部煤が付着している。

214は甕の底部付近である。底部下端は外側に強く張り出し、外面に木葉痕がある。器面調整は刷毛目後内面はヘラミガキ、外面はヘラナデである。

215は甕の底部付近である。底部下端の張り出しあは殆どなく、外面に木葉痕がある。器面調整は外面は刷毛目後ヘラナデ、内面は弱い刷毛目である。

216は甕の底部付近である。底部下端の張り出しあはなくほぼ底部は直立する。器面調整は、外面はヘラケズリ、内面はヘラナデである。

217は甕の底部付近である。底部下端は外側に僅かに張り出し、体部下半は丸く脹らむ。器面調整は、外面は刷毛目後部分的ヘラミガキ、内面は粗い刷毛目である。

218は甕の下半である。体部中央付近が脹らみ、底部下端まで緩やかに窄む。器面調整は、外面は体部は刷毛目後ヘラミガキ、底部付近はヘラケズリ、内面は刷毛目である。外面のミガキは剥落している部分が多い。

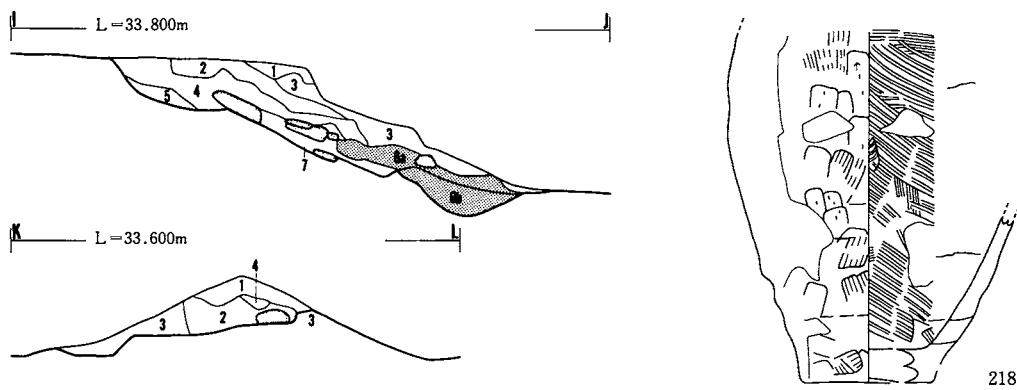
219は甕である。頸部は括れ外面に僅かに段を持ち、口縁部は外反する。体部最大径を肩部上位に持ち底部へ緩やかに窄む。底部下端は外側に僅かに張り出す。器面調整は、外面は口縁部は刷毛目後ヨコナデ後ヘラミガキ、体部は刷毛後ヘラミガキ、内面は口縁部ヘラミガキ体部刷毛目後ヘラミガキである。内面では胎土の剥落が多い。

土師器の出土状況は204・205が北壁際から、209が南壁際から、その他はカマド付近～中央部の埋土下位～床面から出土している。

220・221は鉄製品である。220は器種不明である。茎が欠損し、身の3分の2は扁平であり、先端は丸みをおびる。計測値は、全長(7.7cm)、身中央部の幅2cm、身中央部の厚さ3.1mmである。221は刀子で茎を欠く。両面平造りで関は明瞭である。全長(6.5cm)、身中央部の幅1.2cm、棟の厚さ3.2mmである。2点とも埋土上位から出土している。

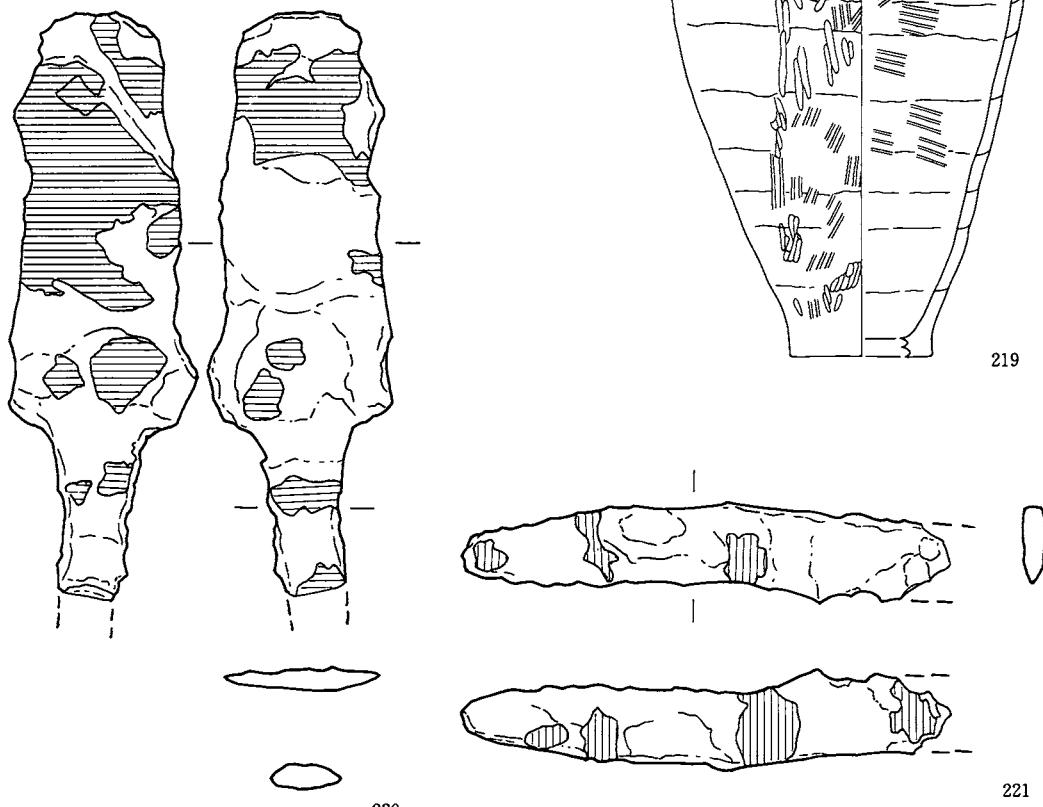
222・223は石器である。2点とも平砥石であり、222は両面を、223は片面を使用している。砥面はほぼ平坦で砥粒は荒砥的である。石質は222は硬砂岩、223はアルコース砂岩である。2点とも埋土から出土している。

224～226は琥珀である。224は丸い原石であり、大きさは33.3×30.8×22.2mm、重量は13.14gである。北西隅床面から出土している。225は平面形が長方形に近い未製器であり、粗削り成形面が5面である。大きさは29.8×21.8×18.5mm、欠損破片を含めた重量は8.26gである。中

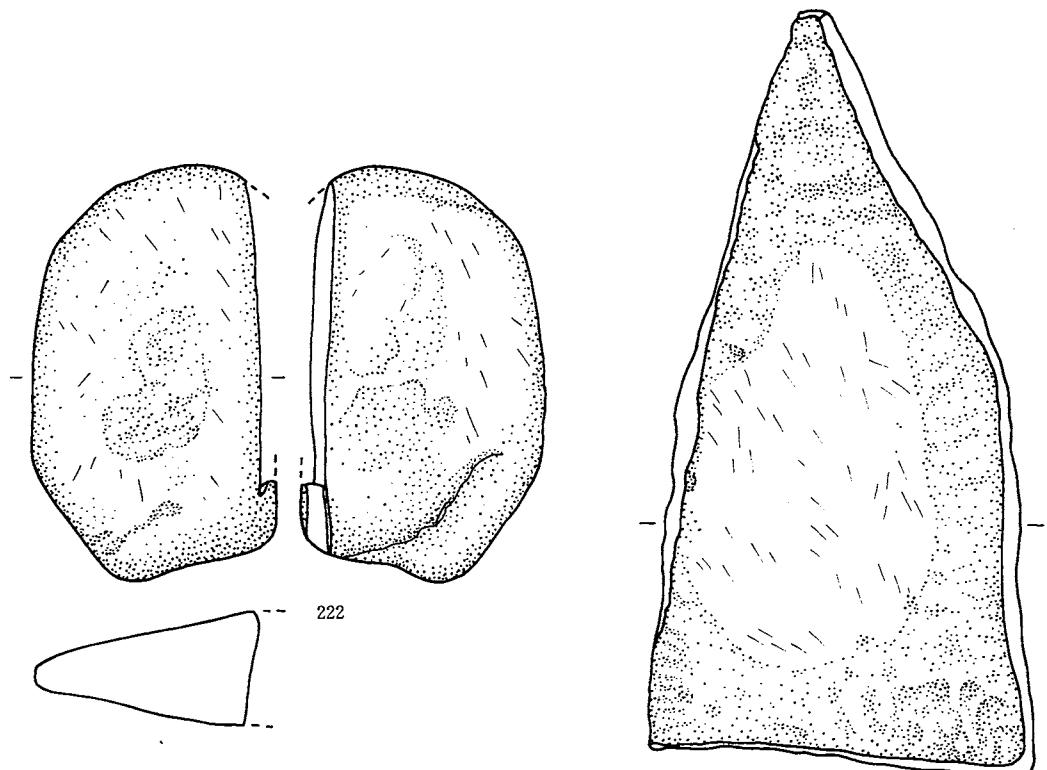


J9 住居跡 I-J K-L  
 1. 10YR 3/3 暗褐色 ややしまる、粘土起源。  
 2. 10YR 4/4 褐 色 堅くしまる、粘土質。  
 3. 10YR 3/2 黒褐色 ややしまる、粘性あり。  
 4. 10YR 2/3 黒褐色 ややしまる。  
 5. 10YR 2/1 黒 色 堅くしまる。  
 6. 5 YR 4/6 赤褐色 焼土、66良く焼けてる  
 7. 5 YR 2/2 黒褐色 しまりなし。

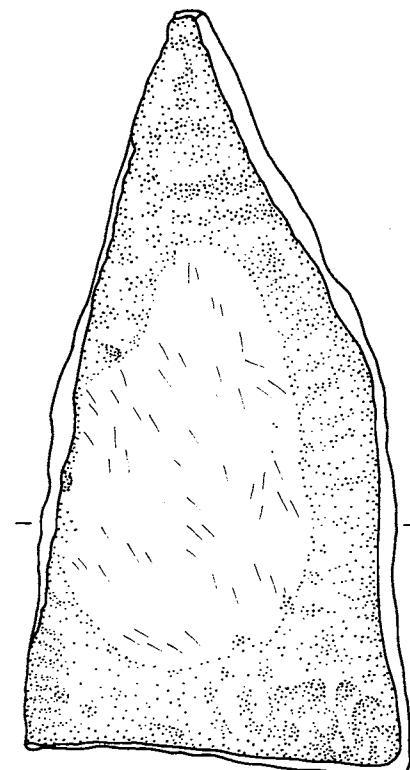
218



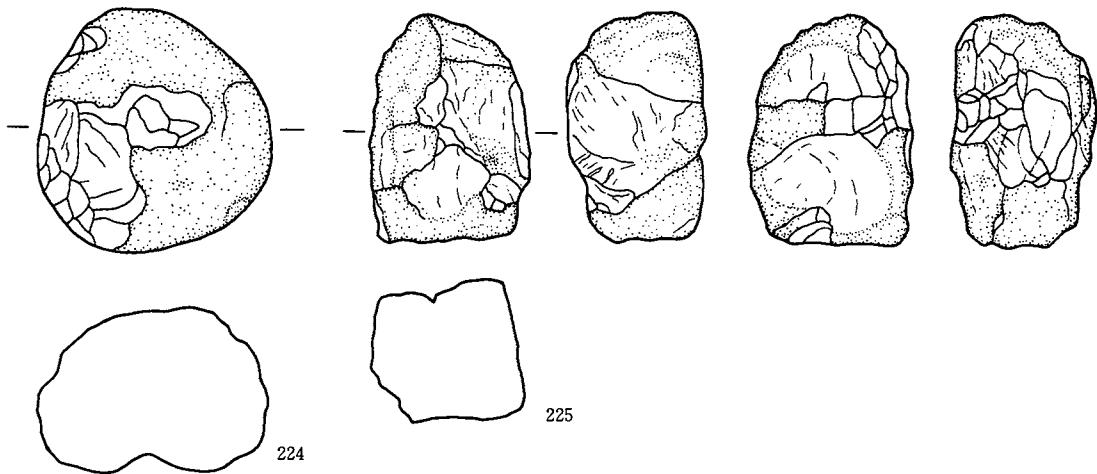
第72図 J9 住居跡(遺構 2・遺物 2)



222



223



224

225

第73図 J9住居跡（遺物3）

央部床面から出土している。226は欠損破片であり、全重量は0.78gである。カマド付近埋土上位から出土している。

#### L 9 住居跡（第74図、写真図版31）

調査区の北東部に位置しM10住居跡の北東1.5m付近にある。南東側の試掘トレンチで北東カマドの燃焼部焼土と煙道下底部が検出された。さらに、表土を除去したところ南西カマドの燃焼部や煙道を伴う黒色の方形基調の輪郭として検出された。中央付近はM 9 土坑に切られている。

〈占地〉僅かに南東に下る緩斜面を占地している。

〈平面形・規模〉南東壁を欠くが隅丸方形と推定される。規模は北東～南西方向が4.3mであり、残存する床面積は推定13.5m<sup>2</sup>である。

〈埋土〉黒色土の単層に近く、僅かに壁際に黒褐色土や褐色土を含む。

〈壁〉遺構上位は削平されており、壁は床面から緩やかに立ち上がっている。壁高は西壁で最大21cm、南壁で最小6cmである。

〈炭化材・焼土〉みられない。

〈床〉床面はVI層面にあり堅くしまっているが、木根の攪乱による凹凸があり、地山に沿つて北西から南東に僅かに傾く。比高差は最大10cm位である。柱穴はない。

〈周溝〉北西壁で確認されたが木根や耕作による攪乱が著しく一部不詳である。上幅12～20cm、深さ2～3cm前後である。

〈土坑〉土坑は1基検出された。南西カマド左側に位置し、平面形は円形基調である。規模は上場の直径75cm、中場の直径48cm、下場の直径34cm、深さ20cmである。埋土は住居跡と同じであり、住居跡に付属するものである。

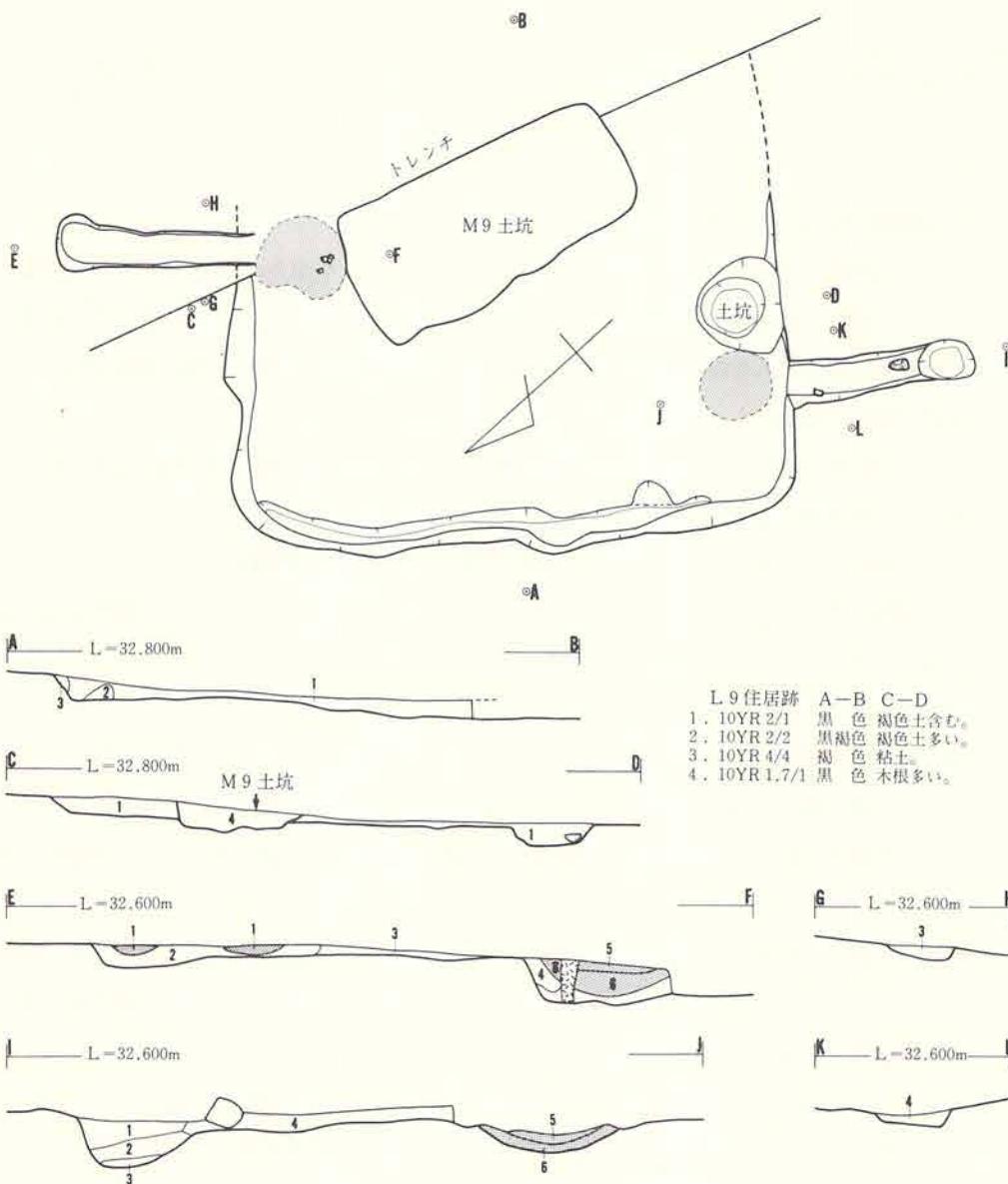
〈カマド〉北東壁と南西壁で2基検出された。いずれも本体は削平されて残存しない。残存状況から南西カマド（1号）が古く、北東カマド（2号）は新しく作り変えたものと思われる。

1号カマドは南西壁の西隅寄りに構築されており、総長2.22m、壁外1.52mである。カマドの長軸方向はS-33°-Wである。

本体部は削平されており燃焼部の焼土が残っている。焼土は60×54cmの円形状を呈し厚さは最大8cmあり、浅皿状に形成され良く焼けている。煙道は壁外ではほぼ水平であり、煙出部はやや下る。煙出部には径46×32cmの橢円形ピットが掘りこまれている。埋土には焼土や炭が少量混じる。

2号カマドは北東壁に構築されている。位置はほぼ中央付近と推定され、総長約2.3m、壁外約1.6mである。長軸方向はN-43°-Eである。

本体部は削平されており燃焼部の焼土が残っている。焼土は70×60cmの範囲に形成され厚さ



第74図 L9 住居跡 (遺構)

は最大14cmであり、良く焼けてしまっている。煙道は壁外ではほぼ水平である。煙道や煙出部の底は良く焼けている。

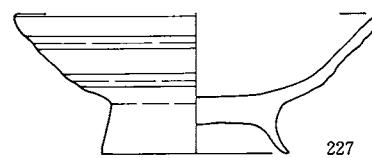
〈時期〉出土遺物などから平安時代である。

遺物（第75図、写真図版72）

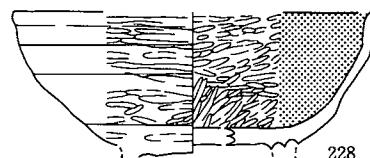
ロクロ使用の壺と不使用の甕が出土している。

227は赤焼き土器の高台付壺である。高台部は下端がハの字状を呈し、壺部は口縁部の開きが大きい。内外面ともロクロ調整痕以外に再調整はなく、黒色処理も施されていない。内面に煤が付着している。高台部は土坑から、壺部はカマド付近から出土している。

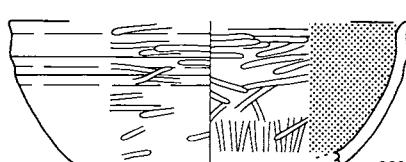
228は高台付壺で高台部を欠く。壺部は内彎して立ち上がる。内外面とも再調整はヘラミガキ



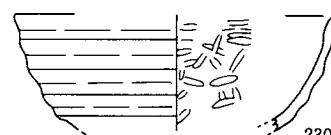
227



228



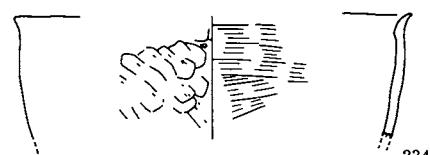
229



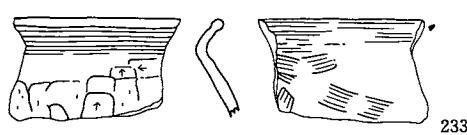
230



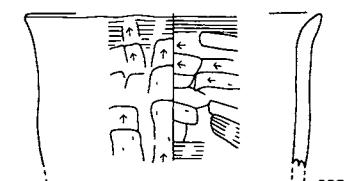
231



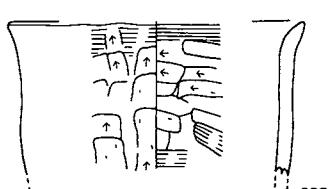
232



233



234



235

第75図 L9住居跡（遺物）

で内面は黒色処理されている。

229は壺の破片である。内外面とも再調整はヘラミガキで内面は黒色処理されている。

230は壺の破片である。外面にはロクロ調整痕以外に再調整はなく、内面にはミガキが施されているが黒色処理はみられない。

231は赤焼き土器の壺の口縁部破片である。内外面とも再調整はなく、黒色処理も施されていない。

232は壺の底部である。底部切り離しは回転糸切りである。内面に再調整はなく、黒色処理はみられない。

233は甕の口縁部破片である。頸部が括れ、口縁部は外反し、口唇部が肥厚する。頸部外面や内面の調整はヨコナデである。

234は甕の体部上位の破片で口縁部が僅かに残る。極端に短い口縁部は外傾し、口唇部ほど薄くなる。器面調整は外面はヘラケズリ、内面はヘラナデである。

235は甕の口縁部付近である。短い口縁部は僅かに外傾する。調整は内外面とも軽いヘラケズリであり、内面にはヘラナデもみられる。

出土状況は、228～230は南西カマド付近から、231・232は北東カマド付近から、233～235は床面から出土している。

#### M10住居跡（第76図、写真図版32・33）

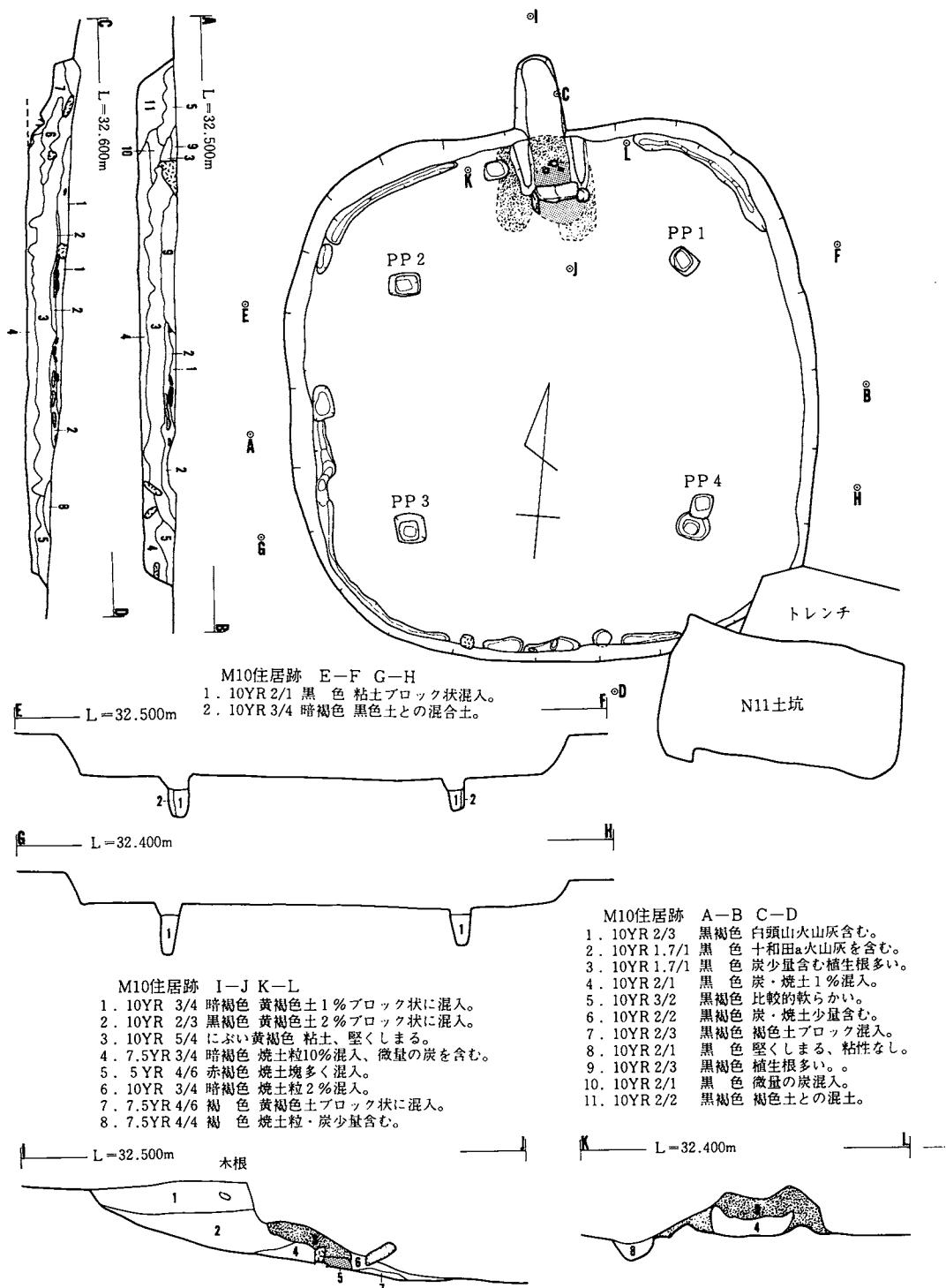
調査区の北東部に位置しL9住居跡の南西1.5m付近にある。また、南東にはN10住居跡が近接する。この住居跡は、表土を除去した段階で白頭山火山灰と十和田a降下火山灰を含む隅丸方形に近い輪郭として検出された。南東隅付近は試掘トレンチで欠き、一部N11土坑によって切られている。また、床面下位からM11陥し穴状遺構が検出されている。

〈占地〉 僅かに南に下る緩斜面を占地している。

〈平面形・規模〉 平面形は隅丸正方形である。規模は東西、南北方向とも4.8mである。床面積は18.1m<sup>2</sup>である。

〈埋土〉 埋土は11層に細分される。最上位と壁際が黒褐色土であるほかは全体的に黒色土が多く、上位には白頭山火山灰と十和田a降下火山灰がブロック状に混入し、下位では焼土や炭がみられる。

〈壁〉 北半はVI層の褐色土を掘り込んでおり崩落も少ないが、南半は再堆積のため流出が著しい。全体的に床面から急勾配で立ち上がる。壁高は東壁24cm、西壁34cm、南壁16cm、北壁40cmである。



第76図 M10住居跡（遺構）

〈炭化材・焼土〉 埋土下位から床面にかけて炭化材や焼土が散布しており、焼失住居跡である。全体的に炭化材の残存状況は不良であり、細いものが多く、材質や配列は不詳である。焼土は南西側で比較的多くみられ、床直～10cmの間に形成され、厚さは1～3cmである。

〈床〉 床面はVI層の褐色土中にあり、全体的に平坦で堅くしまる。地山に沿って南に傾き、比高差は10cmほどである。西側の一部は褐色土と黒色土からなる貼り床である。

〈柱穴〉 柱穴は4個検出されており、柱穴配置は四角形である。掘り方、据え方とも平面形は方形に近く、規模はPP<sub>1</sub>が25×20cmで深さは30cm、PP<sub>2</sub>が28×22cmで深さ38cm、PP<sub>3</sub>が27×27cmで深さ54cm、PP<sub>4</sub>が22×18cmで深さ34cmである。柱穴の芯芯間距離はPP<sub>1</sub>～PP<sub>2</sub>が2.58m、PP<sub>2</sub>～PP<sub>3</sub>が2.73m、PP<sub>3</sub>～PP<sub>4</sub>が2.68m、PP<sub>4</sub>～PP<sub>1</sub>が2.71mである。

〈周溝〉 北東隅、北西隅、西壁～南壁直下に断続的に巡っている。幅は6～10cm、深さは3～9cmである。西壁や南壁の周溝は木根で攪乱されている所もある。

〈カマド〉 北壁中央付近に構築されており、総長約1.7m、壁外約0.8mである。カマドの長軸方向はN-14°-Wである。

本体部は崩落しており、褐色シルトが幅90cmの範囲に散布している。袖部は地山の褐色シルトを削って作られ、焚口の両側には角礫を埋設し、長方形(42×16cm)の凝灰岩を天井に使用している。袖部の幅は約70cmである。

燃焼部の焼土は直径50cm前後の円形状に形成され、厚さは15cmである。粒径7～9cmの角礫3個を三角形に配置して支脚としている。このうち両端の2個は埋設されている。

掘り込み式と思われる煙道は、壁付近では10°位の上り勾配であり、次第に急勾配となる。埋土には煙道に使用された黄褐色土が混じる。

〈時期〉 埋土の特徴や出土遺物から奈良時代である。

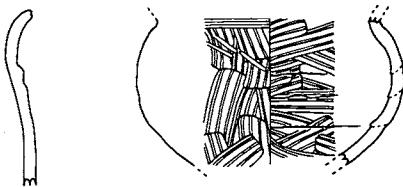
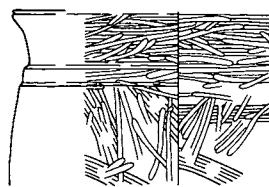
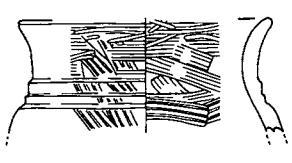
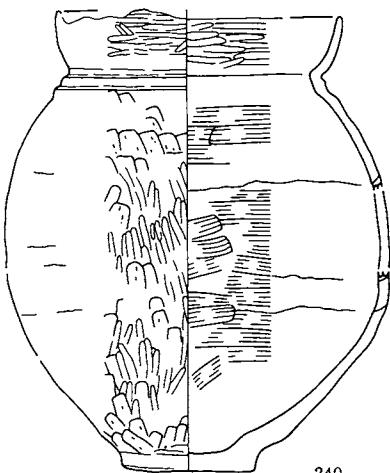
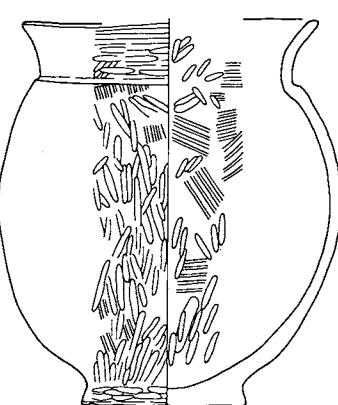
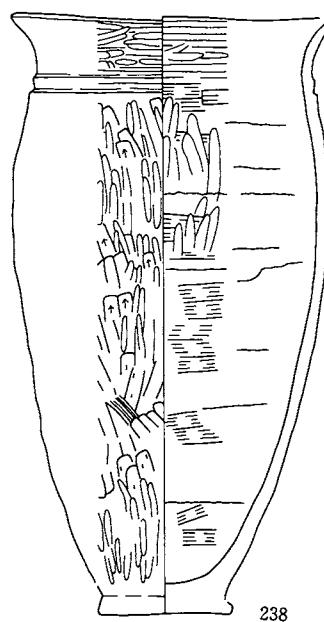
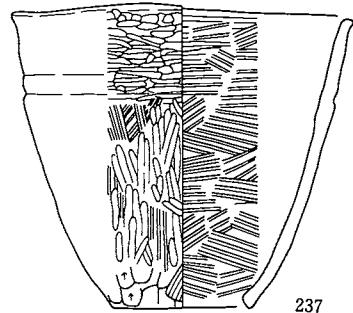
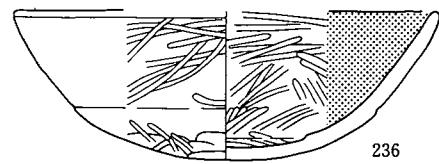
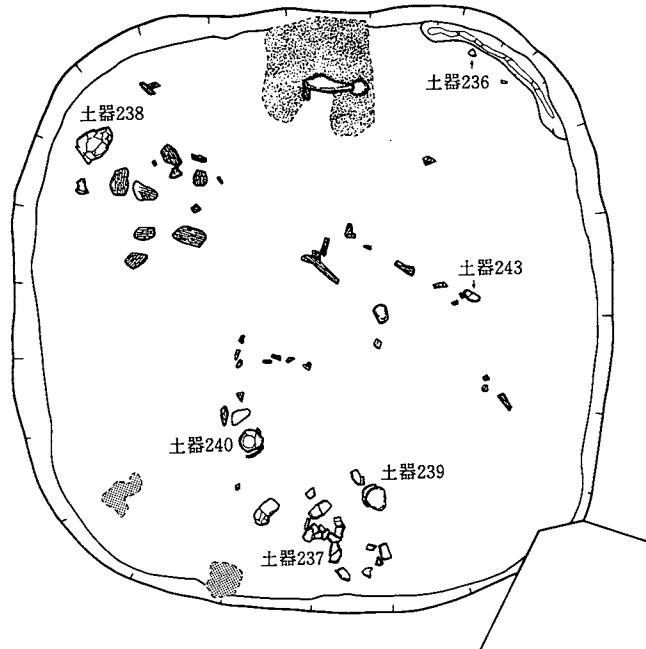
遺物(第77・78図、写真図版72・73)

出土遺物は土師器、鉄製品、石器、琥珀で構成される。土師器はすべてロクロ不使用のものである。

236は内外有段の壺で3分の2を欠く。内外の段は弱く、底部は平底風の丸底である。器面調整は内外面ともヘラミガキで内面は黒色処理されている。

237は無底式の甌である。口径部に最大径を持ち、底部にかけて僅かに彎曲しながら窄む。頸部に横位方向の調整による2つの段を持つが、ヘラミガキが加わり段は不鮮明である。器面調整は、外面は口縁部はヘラミガキ、体部は刷毛目後ヘラミガキ、内面は刷毛目状である。外面のミガキは丁寧である。

238は長胴の甌である。頸部に2つの段を持ち、口縁部は外反し、口唇部は丸い。体部最大径を肩部付近に持ち、底部にかけて僅かに彎曲しながら窄む。底部下端は外側に張り出し、内面



第77図 M10住居跡（遺物1）

は尖底氣味である。器面調整は、口縁部は内外面ともヨコナデ後ヘラミガキ、体部は外面はヘラケズリ後ヘラミガキ、内面はヘラナデ後部分的ヘラミガキである。

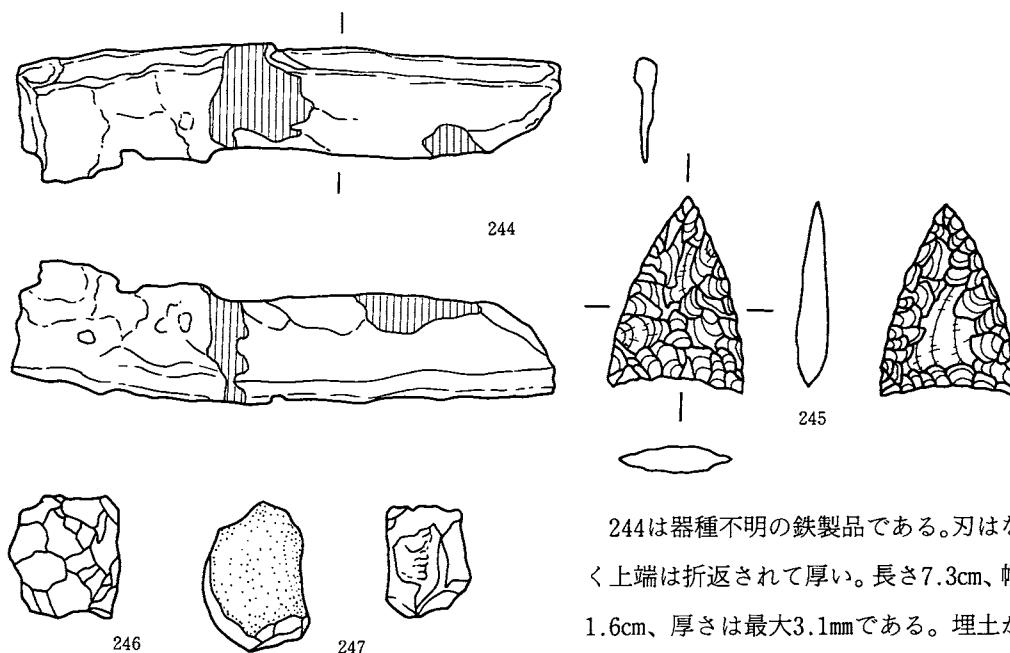
239は球胴の甕である。頸部に僅かに段を持ち、口縁部は外反する。体部中央に最大径を持ち、体部は球胴に脹らむ。底部下端は外側に張り出し、内面は丸底である。器面調整は内外面とも口縁部はヨコナデ後ヘラミガキ、体部は刷毛目後ヘラミガキである。

240は球胴の甕である。頸部に2つの段を持ち、口縁部は内彎氣味に立ち上がる。体部中央に最大径を持ち、体部は球状に脹らむ。底部下端は僅かに窄み、内面は丸底である。器面調整は口縁部は内外面ともヨコナデ後ヘラミガキ、体部は外面はヘラケズリ後ヘラミガキ、内面はヘラナデである。

241は甕の口縁部の破片である。頸部に3つの段を持ち、口縁部は外反氣味である。器面調整は外面は刷毛目後ヨコナデ、内面はヨコナデ後部分的ヘラミガキである。

242は甕の口縁部付近である。頸部に段を持ち、口縁部は外反氣味で、口唇部下端に細い沈線が巡る。器面調整は内外面ともヘラミガキ主体である。

243は小型の甕の体部付近である。体部中央に最大径を持ち、上下が急に窄む。器面調整は内外面とも刷毛目であり、外面のミガキは剝落している所が多い。これらの土師器は床面から出土している。



244は器種不明の鉄製品である。刃はなく上端は折返されて厚い。長さ7.3cm、幅1.6cm、厚さは最大3.1mmである。埋土か

第78図 M10住居跡（遺物2）

ら出土している。

245は凹基無茎の石鏃である。長さは25.9mm、重量は1.12gである。石質は珪質細粒凝灰岩である。埋土上位から出土している。

246・247は琥珀である。いずれも壊れているが未製品と思われる。総重量は246は1.56g、247は3.71gである。埋土上位から出土している。

#### N10住居跡（第79図、写真図版33）

調査区の北東部に位置しM10住居跡の南東2.2m付近にある。また、東にはQ11住居跡が近接する。この住居跡は、表土を除去した段階で北西壁のラインを手掛けかりに隅丸方形に近い輪郭が検出された。南西壁はQ11円形周溝を切っている。また北隅はN10土坑に切られている。

〈占地〉僅かに南に下る緩斜面を占地している。

〈平面形・規模〉平面形は不整ながら隅丸正方形に近い。規模は北東一南西方向が4.12m、北西一南東方向が3.92mである。床面積は13.4m<sup>2</sup>である。

〈埋土〉埋土は9層に細分される。上位は黒色土、中位は黒褐色土、下位は黒色～黒褐色土である。中位と下位の境目付近に焼土が混入する所がある。

〈壁〉壁は床面から急勾配で立ち上がるが、斜面下位の南東側半分は黒色土中にあるため崩れやすい。壁高は北東壁30cm、南東壁21cm、南西壁24cm、北西壁33cmである。

〈床〉北西側半分は褐色土（地山）であり、ほぼ平坦で堅くしまる。南東側半分は黒色土中にあり、貼り床もなく軟質であるため一部掘り過ぎが考えられる。柱穴や周溝は検出されない。

〈カマド〉北東壁の中央東寄りに土師器と角礫が散布しており、床面には厚さ0.5～3cmの焼土が64×44cmの楕円形の範囲に分布している。この付近にカマドが構築されていた可能性があるが本体部や煙道など崩壊しており不明である。

〈時期〉埋土の特徴や出土遺物から平安時代である。

#### 遺物（第80図、写真図版74）

ロクロ使用の壺と甕の他にロクロ不使用の甕がある。壺は赤焼き主体である。

248は赤焼き土器の壺で3分の1を欠く。内外面ともロクロ調整痕だけであり、黒色処理されていない。底部切り離しは回転糸切りである。

249は壺で3分の2を欠く。体部は内彎して立ち上がる。内面にはミガキが施され、黒色処理されている。外面の体部下端や底部に手持ちヘラケズリによる再調整がみられる。

250は高台付壺で大部分欠損している。壺部は内彎し、高台部はハの字状に開く。内外面ともミガキが施され、内面から口縁部外面まで黒色処理されている。

251・252は赤焼き土器の壺の口縁部破片である。ともに内外面はロクロ調整痕だけであり、

黒色処理されていない。

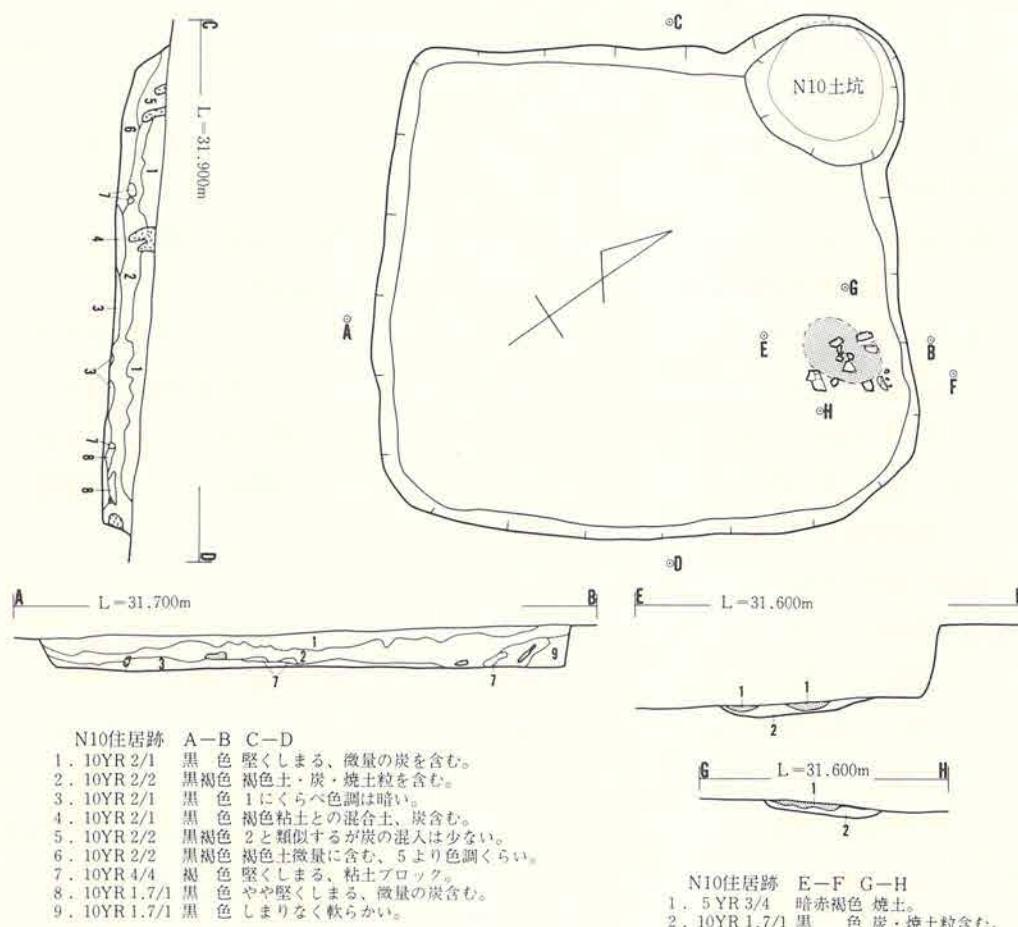
253は壺の口縁部破片である。内面にはミガキが施され、黒色処理されている。外面には炭化物が付着している。

254・255は赤焼き土器の壺の底部破片である。底部切り離しは回転糸切りであり、内面はロクロ調整痕だけであり、黒色処理は認められない。

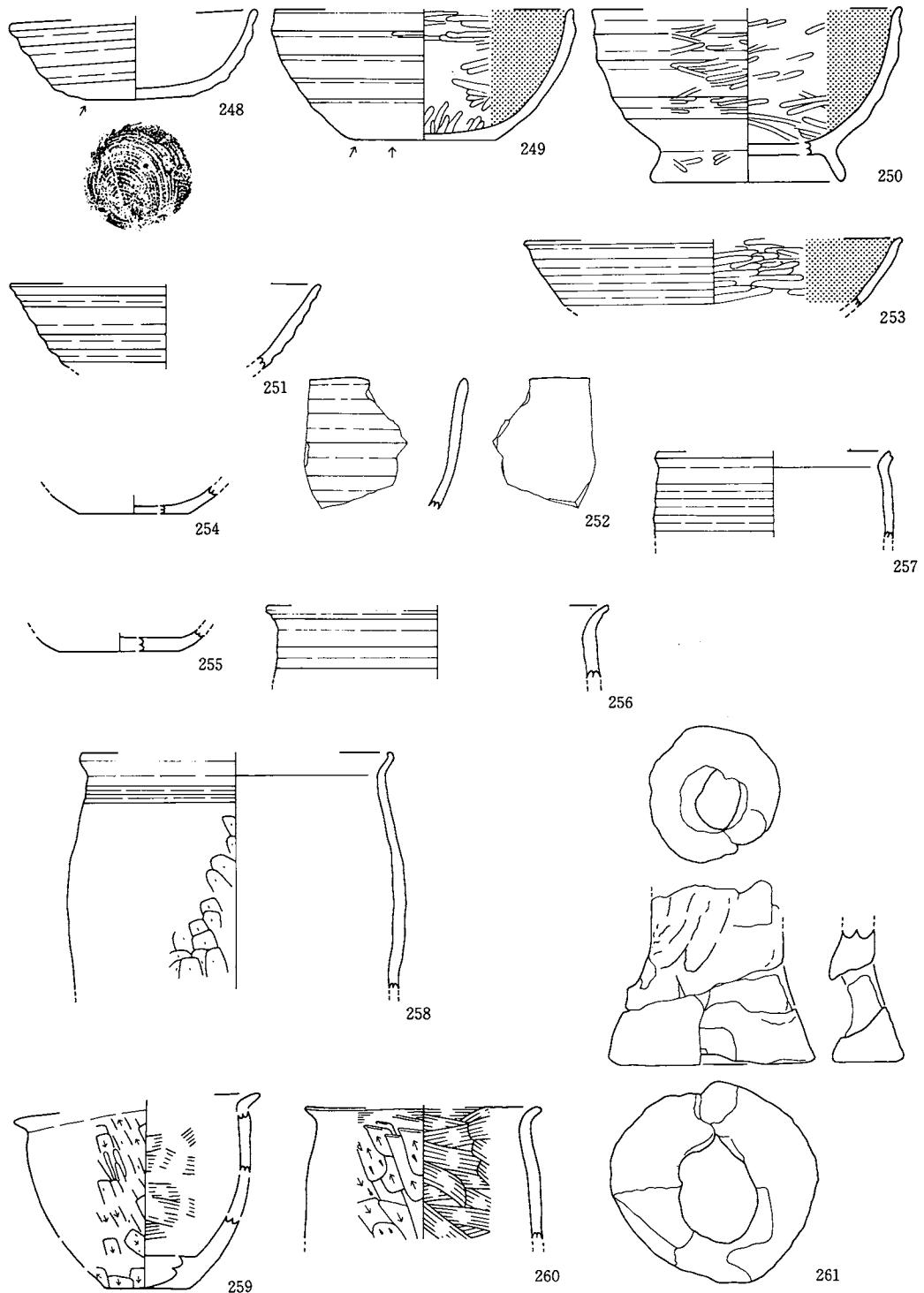
256はロクロ使用の甕の口縁部破片である。短い口縁部は外反し、口唇部は丸味を持つ。

257はロクロ使用の甕の口縁部付近である。口縁部は極端に短く外傾し、口唇部は上方に僅かにつまみ出されている。

258はロクロ使用の甕の上半である。短い口縁部は外傾し、口唇部は上方に挽き出されている。



第79図 N10住居跡（遺構）



第80図 N10住居跡（遺物）

体部は脹らみ、外面は軽いヘラケズリで調整される。

259はロクロ不使用の甕で一部欠損している。頸部は括れ、短い口縁部は外反する。口縁部に最大径を持ち、体部は彎曲しながら底部下端が窄む。器面調整は、体部外面はヘラケズリ、内面は指ナデである。内面には黒斑がある。

260はロクロ不使用の甕の上半である。短い口縁部は外反する。器面調整は、体部外面はナタ状のヘラケズリ、内面はヘラナデである。

261は円筒状の支脚である。欠けているので全体形状は不詳であるが、粘土を巻き上げただけの粗雑な作りである。底径9.4cm、残存高8.3cm、上端の径5.9cmである。

これらの遺物は埋土下位からの出土である。

#### Q11住居跡（第81・82図、写真図版34）

調査区の北東部に位置しN10住居跡の東1.7m付近にある。この住居跡は試掘トレンチで検出されたものである。平面形は全くわからなかったが、埋土にみられる火山灰や焼土などを手掛かりに調査した。他遺構との重複関係はない。

〈占地〉僅かに南に下る緩斜面を占地している。斜面中位に位置するため雨後には湧水があるなど、他の住居跡より条件は良くない。

〈平面形・規模〉南壁の一部を掘り過ぎたが平面形は隅丸正方形である。規模は東西方向が6.56m、南北方向が推定6.4mである。床面積は推定35.1m<sup>2</sup>である。

〈埋土〉埋土は5層に細分され、最上位の耕作土以外は黒色土である。中位に白頭山火山灰と十和田a降下火山灰がブロック状に混じる。また、下位では焼土や炭が多く混入している。

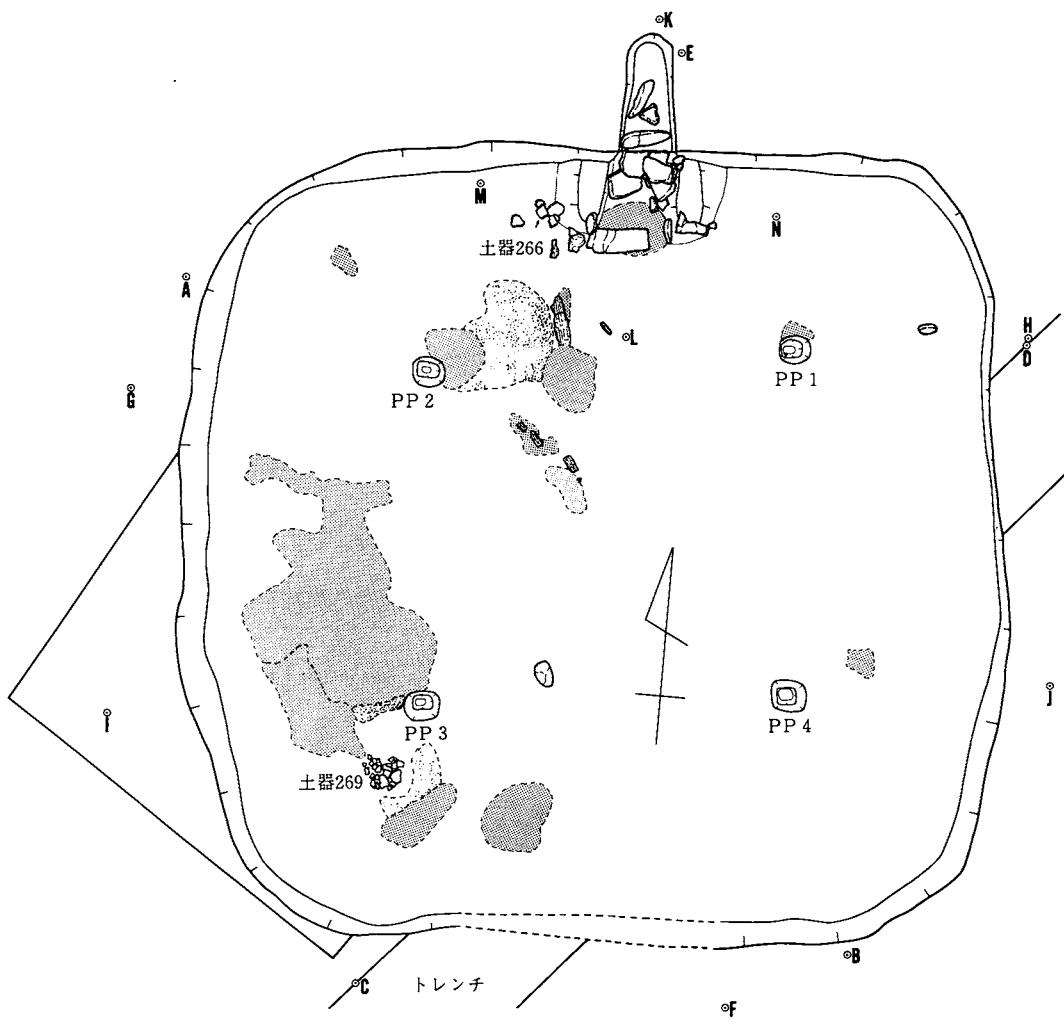
〈壁〉黒色土中にあるため埋土との区別はしにくいが、北壁や東壁では黄褐色浮石の薄い層の下位まで掘り込んでいる。全体的に壁は急勾配で立ち上がる。壁高は北壁72cm、東壁49cm、南壁32cm、西壁80cmである。

〈炭化材・焼土〉住居跡の西半に多く分布しており、焼失住居跡と思われる。

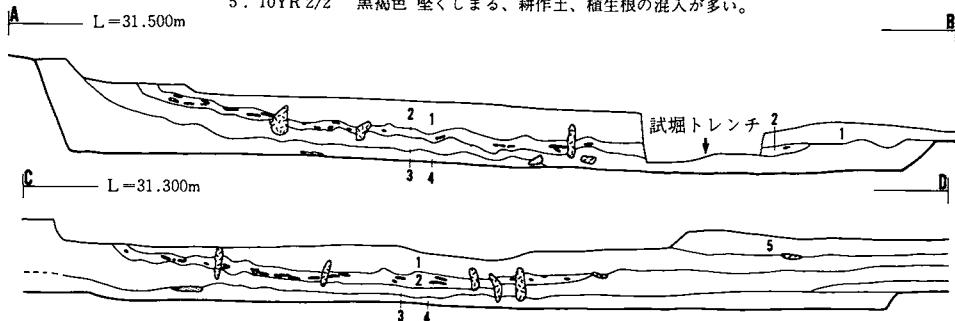
焼土は床上10cm内に形成されており、厚さは3～10cmである。特に西壁寄りでは長さ2.3m、幅1.2mの範囲に厚さ10cmの焼土がみられる。炭化材は中央付近を中心に分布しているが、残存状況が不良のため実測を省略したものが多い。

〈床〉全体的に平坦に近いが地山に沿って北から南に僅かに傾く。比高差は最大12cmである。所々に淡黄色シルトの貼り床がみられる。中央付近がやや堅くしまるが、壁際や南側は軟質である。周溝は検出されていない。

〈柱穴〉柱穴は4個検出されており、柱穴配置は四角形である。柱穴の平面形は隅丸方形気味であり、規模はPP<sub>1</sub>が26×22cmで深さ54cm、PP<sub>2</sub>が26×24cmで深さ42cm、PP<sub>3</sub>が28×24cmで



- Q11住居跡 A-B C-D
1. 10YR 1.7/1 黒 色 ややしまる、下位に微量の炭を含む。
  2. 10YR 2/1 黒 色 ややしまる、白頭山火山灰・十和田a火山灰を含む。
  3. 10YR 1.7/1 黒 色 ややしまる、炭・焼土粒を微量に含む。
  4. 10YR 1.7/1 黒 色 堅くしまる、炭・焼土粒を1%含む。
  5. 10YR 2/2 黒褐色 堅くしまる、耕作土、植生根の混入が多い。

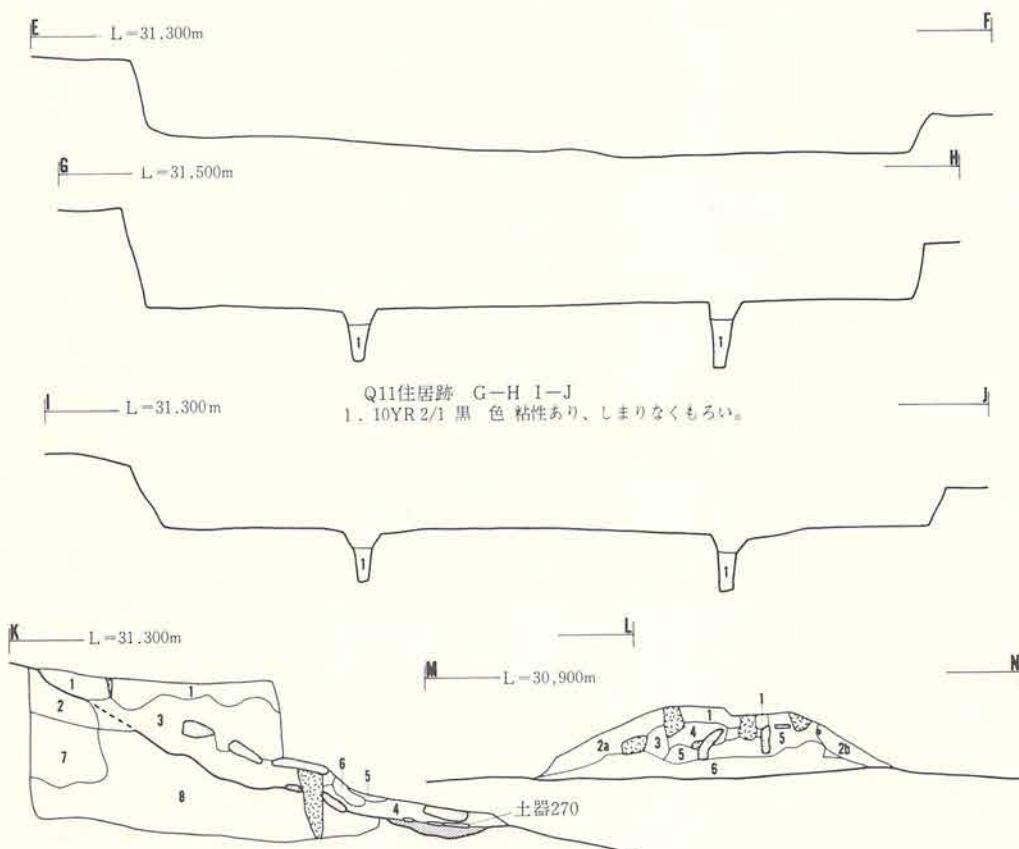


第81図 Q11住居跡（遺構 1）

深さ43cm、PP<sub>4</sub>が28×26cmで深さ50cmである。PP<sub>4</sub>の底部に石が1個埋められている。柱穴の芯芯間距離は PP<sub>1</sub>—PP<sub>2</sub> が2.9m、PP<sub>2</sub>—PP<sub>3</sub> が2.68m、PP<sub>3</sub>—PP<sub>4</sub> が2.92m、PP<sub>4</sub>—PP<sub>1</sub> が2.76mである。

〈カマド〉 北壁中央付近に構築されており、総長約1.8m、壁外約0.9mである。カマドの長軸方向はN—2°—Wである。

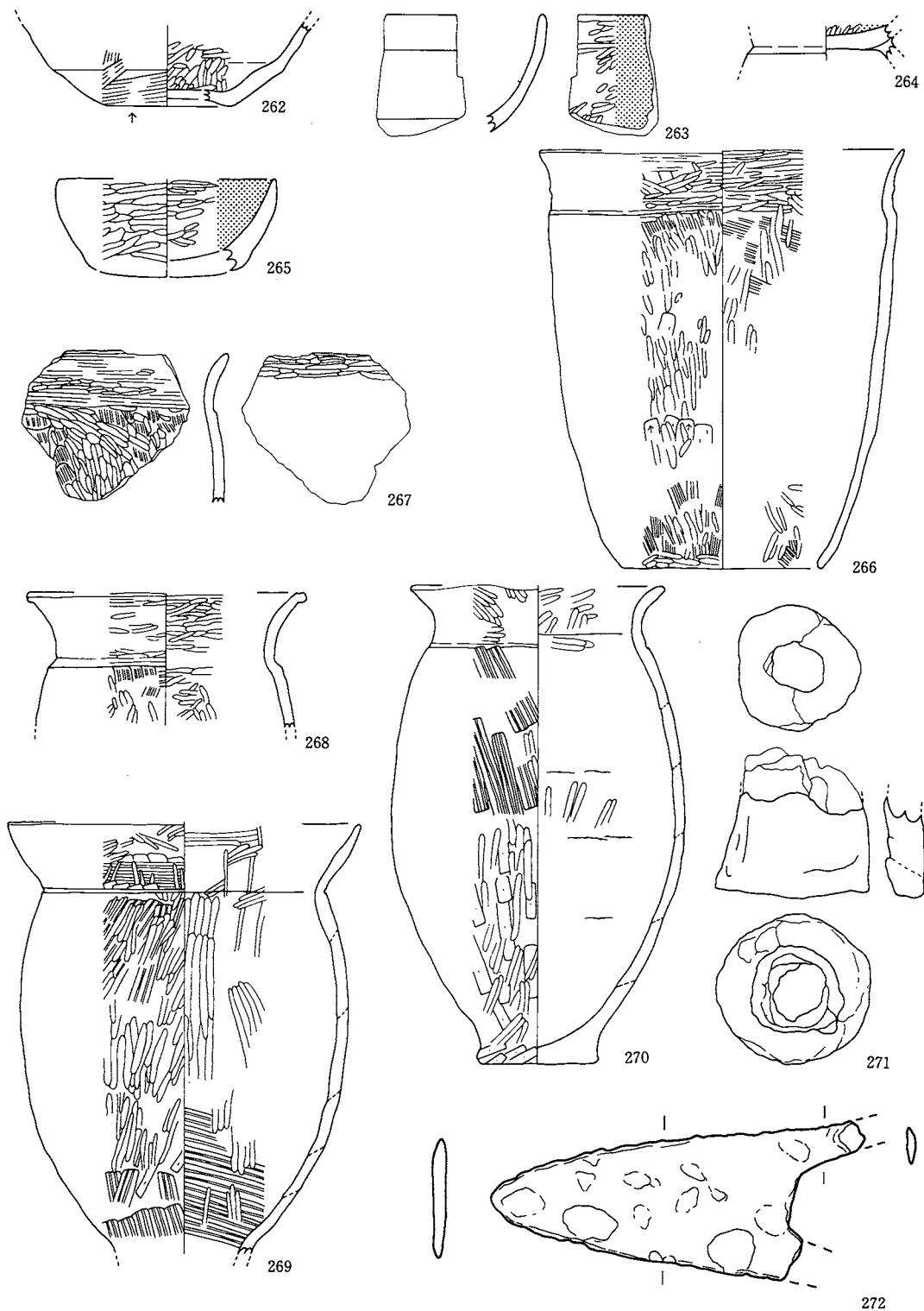
本体部は壊れているが残っている。袖部は地山の黒色土を削って作られ、焚口の両側には粒径30cmの扁平な礫を使用している。近くには天井に使用した長方形（50×20cm）の凝灰岩があ



- Q11住居跡 K—L
1. 10YR 2/2 黒褐色 堅くしまる、粘性なし。
  2. 10YR 2/1 黒 色 ややしまる、粘性なし。
  3. 7.5YR 2/1 黒 色 しまりなし、凝灰岩の風化物まじる。
  4. 5YR 3/2 黒褐色 燃土、炭まじる。
  5. 10YR 1.7/1 黒 色 しまり、粘性なし、燃土少量含む。
  6. 10YR 5/6 黄褐色 燃まじりの粘性土、層層起源
  7. 10YR 2/1 黒 色 黑色土少量まじる、貝層起源。
  8. 10YR 1.7/1 黒 色 ややしまる。

- Q11住居跡 M—N
1. 5 YR 1.7/1 黒 色 しまり・粘性なし、焼土少量含む。
  2. 10YR 1.7/1 黒 色 にぶい黄橙色シルトまじる。
  3. 5 YR 1.7/1 黒 色 しまり・粘性なし、焼土少量含む。
  4. 7.5YR 3/2 黑褐色 ややしまる、焼土多い。
  5. 7.5YR 2/2 黑褐色 ややしまる、火然うけている。
  6. 10YR 1.7/1 黑 色 堅くしまる、地山。

第82図 Q11住居跡（遺構2）



第83図 Q11住居跡（遺物）

る。袖部の幅は芯材の外側で70cmである。

燃焼部の焼土は50×42cmの橢円形状に形成され、厚さは6cmである。長さ12cmと14cmの板状の礫を埋設して支脚にしている。

掘り込み式の煙道は平均23°の上り勾配であり、天井には長方形の凝灰岩を主に使用しており、埋土には風化した凝灰岩の細片が混じる。

〈時期〉 埋土の特徴や出土遺物から奈良時代である。

#### 遺物（第83図、写真図版75）

出土遺物は土師器、鉄器、琥珀で構成される。土師器はロクロ使用のものは埋土上位から、ロクロ不使用のものは埋土下位から出土している。

262はロクロ使用の壺の底部を含む破片である。器面の再調整は、外面はヘラナデ、内面は入念なヘラミガキである。内面の黒色処理は不明である。

263はロクロ使用の壺の口縁部を含む破片である。外面には再調整はなく、内面はヘラミガキが施され黒色処理されている。

264はロクロ使用の高台付壺の高台部であり、欠損しているが高台部はハの字状に開く。内面にはヘラミガキが施され黒色処理されている。

265はロクロ不使用の壺で底部を欠く。体部外面下位に緩やかな段を持つ。器面調整は内外面ともヘラミガキであり、内面は黒色処理されている。全体的に厚い。

266はロクロ不使用の無底式の甌で大半を欠くが口縁部から底部まで接合したものである。口縁部に最大径を持ち、底部にかけて僅かに彎曲しながら窄む。頸部にヨコナデによる凹部を持ち、口縁部は僅かに外反する。器面調整は、口縁部は外面ともヨコナデ後ヘラミガキ、体部は内外面とも刷毛目後ヘラミガキ主体である。外面の一部に黒斑や黒い付着物がある。

267はロクロ不使用の甌の口縁部破片である。頸部に僅かに段を持ち、口縁部は外反気味である。器面調整は、外面は口縁部はヨコナデ後ヘラミガキ体部は刷毛目後ヘラミガキ、内面は口縁部はヘラミガキである。

268はロクロ不使用の甌の口縁部付近である。頸部に括れを持ち、口縁部は外反し、口唇部が凹む。器面調整は内外面ともヘラミガキ主体であり、外面には部分的に刷毛目が残る。

269はロクロ不使用の甌で底部を欠く。頸部に沈線による僅かな段を持ち、口縁部は外傾する。体部最大径を中央やや上に持つ。器面調整は刷毛目後ヘラミガキ主体である。

270はロクロ不使用の甌である。頸部に僅かな段を持ち、口縁部は外反し、口唇部に細い沈線がある。最大径を体部中央付近に持つ。底部下端は外側に張り出し気味で、内面は丸底である。器面調整は、口縁部は内外面ともヘラミガキ主体、体部は外面は刷毛目後ヘラミガキ主体である。内面は風化しているがミガキ主体である。

271は土製支脚の欠損品である。粘土紐を巻き上げて筒状に作っている。埋土から出土している。底径7.1cm、残存高7cm、上端の径5.7cmである。

272は鉄製品である。器種は特定できないが、鉄鏃や鈴などの刺突具と思われる。長さは8.6cm、最大幅3.6cm、厚さ2.1mm、重量16.2gである。埋土から出土している。

273・274は琥珀である。小さく壊れているので実測を省略し、写真だけを掲載している。重量は、273は0.69g、274は0.44gである。埋土から出土している。

#### J 12住居跡（第84図、写真図版35）

調査区の北東部に位置しJ 9住居跡の南西3.7m付近にある。近くにはJ 13、M13住居跡などがある。表土除去の段階で焼土や土師器、焼け石などが散布するものの平面形は全くわからなかつたので、順次掘り下げ最終的に北東壁を手掛けかりに平面形を確定した。西側は林道で削平されている。他遺構との重複関係はない。

〈占地〉 南に下る緩斜面を占地している。

〈平面形・規模〉 西壁や南壁が不明であるが、平面形は隅丸方形と推定される。規模は北西—南東方向が推定3.12mである。床面積は8.9m<sup>2</sup>である。

〈埋土〉 埋土は4層に細分される。黒褐色～暗褐色土が多く、焼土や炭を含む。

〈壁〉 浮石混じりの再堆積層（IV～V層）を掘り込んでおり、北東壁を除くと壁の立ち上がりは不明瞭である。壁高は北東壁で最大30cmである。

〈焼土〉 北東壁から東隅にかけて厚さ30cmほどの焼土を含む層があり、一部遺構外まで広がっている。これらの焼土は床面より浮いていることから投げ込まれた可能性がある。

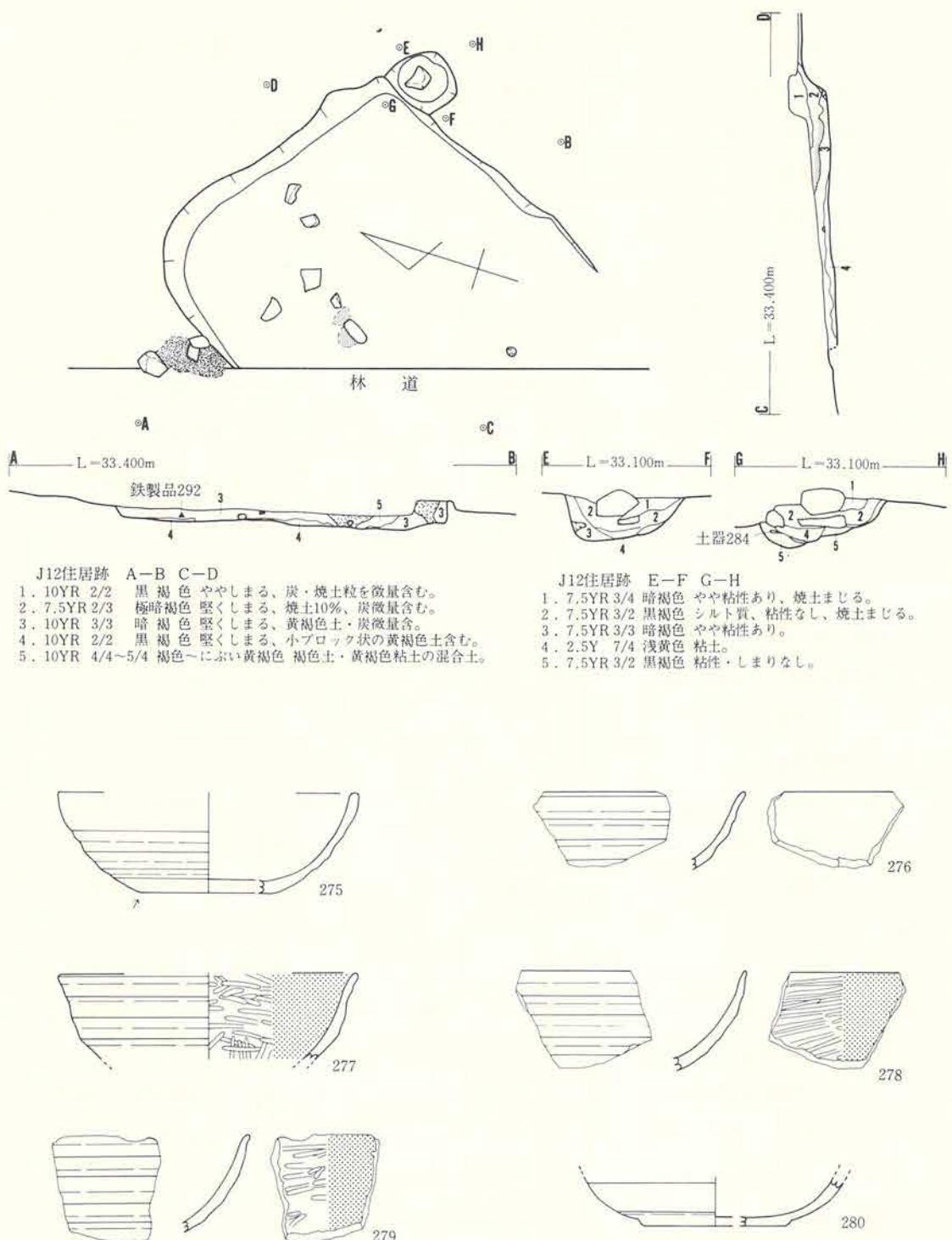
〈床〉 北隅が攪乱され軟質である以外は堅くしまる。南半は小さな凹凸のある床面であり、掘り過ぎがみられる。柱穴や周溝は検出されていない。

〈カマド〉 当初は北西壁付近の角礫と黄褐色シルトをカマドの一部と考えたが、林道などで削平されており、焼土は検出されなかった。また、東隅の焼土もカマドに伴うものという結論は得られなかった。

〈土坑〉 東隅の壁際に位置する。平面形は円形、断面形は擂鉢形に近い。規模は開口部径55cm、底部径45cm、深さ40cmである。埋土上位から中位に角礫が、下位には浅黄色粘土と土師器（284）が入っている。遺物の時期は住居跡と同じである。

#### 遺物（第84・85図、写真図版76・77）

出土遺物は土師器、土製支脚、鉄製品で構成される。土師器はロクロ使用の壺と甕、不使用の甕とがある。



第84図 J12住居跡（遺構・遺物）

遺構の輪郭がわからなかつたので、検出時の遺物も含めて掲載している。

275は壊で3分の2を欠く。底部切り離しは回転糸切りで部分的に再調整がみられる。底部以外に再調整はなく、内面の黒色処理はみられない。体部内面に種子状の痕跡が1個あるが鑑定はしていない。内面の一部に黒斑がある。

276は壊の口縁部破片である。内外面ともロクロ調整痕以外に再調整はなく、黒色処理もみられない。

277は壊の口縁部付近である。器面調整は外面はロクロナデ、内面はロクロナデ後ヘラミガキで黒色処理されている。

278・279は壊の口縁部破片である。器面調整は外面はロクロナデ、内面はロクロナデ後ヘラミガキで黒色処理されている。外面に煤が付着している。279の内面には種子状の痕跡が1個あるが、鑑定はしていない。

280は壊の底部付近である。底部切り離しは回転糸切りである。内外面にはロクロ調整痕以外に再調整はなく、黒色処理もみられない。

281は壊の底部である。底部切り離しは回転糸切りである。底部内面は放射状のヘラミガキが加わり、黒色処理されている。

282はロクロ調整の甕で2分の1を欠く。頸部が僅かに括れ、口縁部は外傾気味である。口唇部は僅かに凹み、上端と下端は角張る。体部上半は円筒状で下半は丸味を持って窄む。内外面には雑で不規則なナデ調整がみられる。

283はロクロ不使用の甕の口縁部破片である。頸部に括れを持ち、短い口縁部は外傾する。口縁部の器面調整はヨコナデ主体である。

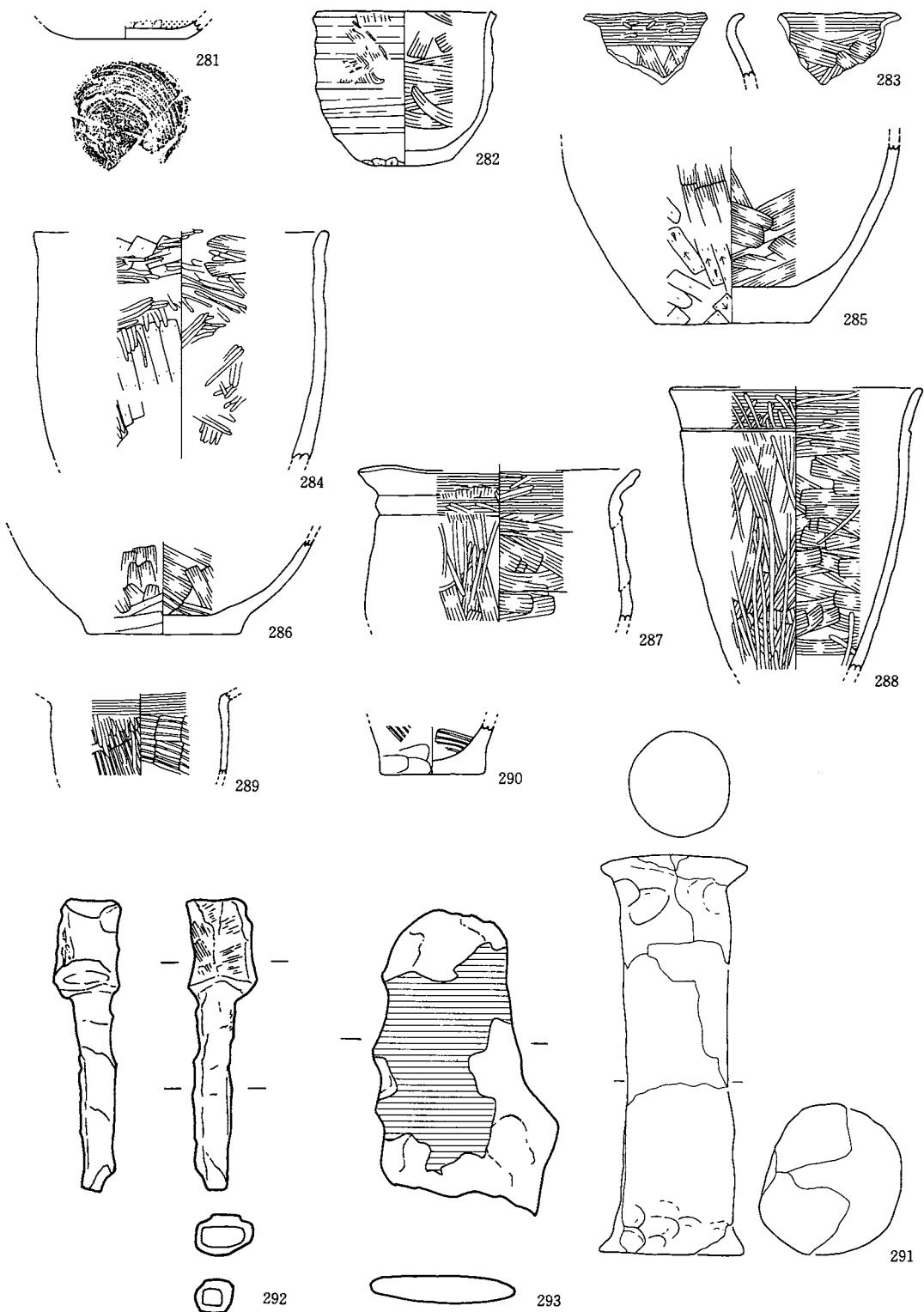
284はロクロ不使用の甕の体部上半付近である。口縁部は短く僅かに外傾する。最大径は口縁部にあり、体部下半は緩やかに窄む。器面調整は外面はヘラケズリ後ヘラミガキ、内面はヘラナデ後ヘラミガキである。内面のミガキは丁寧である。

285はロクロ不使用の甕の底部付近であり、底部は厚く下端が窄む。器面調整は外面はヘラナデとヘラケズリ、内面はヘラナデである。

286はロクロ不使用の甕の底部付近であり、下端が窄む。器面調整は外面はヘラナデとヘラケズリ、内面はヘラナデ主体である。底部外面に木葉痕がある。282～286は甕は平安時代に属する。

287はロクロ不使用の甕の口縁部付近である。頸部に僅かに段を持ち、口縁部は外傾する。器面調整は、外面は口縁部はヨコナデ体部はヘラミガキ、内面はナデである。外面に炭化物が付着している。

288はロクロ不使用の甕で底部を欠く。頸部に僅かに段を持ち、口縁部は外傾する。最大径を



第85図 J12住居跡（遺物）

口縁部に持ち、体部は緩やかに窄む。器面調整は、外面は口縁部はヨコナデ、体部はヘラミガキ、内面はヘラナデ主体である。内外面に炭化物が付着している。

289はロクロ不使用の甕の体部上半で口縁部を欠く。内外面の器面調整は刷毛目主体であり外面上にはミガキもみられる。

290はロクロ不使用の甕の底部である。下端の張り出しが弱く、内面は丸底である。287～290の甕は奈良時代に属する。このうち、287・288は南隅下位から出土しており遺構外の可能性がある。

291は円柱状の土製支脚である。粗掘と埋土からのものが接合しており、直径5cm前後で高さは18.7cmである。器面には指頭圧痕が残る。

292・293は鉄製品である。292は鉄鎌の頸～茎付近である。293は器種不明である。292はベルト埋土、293はQ<sub>3</sub>埋土から出土している。

#### P 12住居跡（第86図、写真図版36）

調査区の北東部に位置し、N10住居跡の南3.8m付近にある。近くにはN13、Q14住居跡などがある。検出時に十和田a降下火山灰が僅かに散布していたことから住居跡の存在が考えられたが、平面形は全くわからなかった。試掘トレーナーを入れながら、遺物や焼土の分布を手掛かりに2回調査した。2回目の調査で遺構は西側に60～70cmほど拡大し、床面も15cmほど下った。また、西側に拡大した部分の上位にみられる暗褐色土はN13—2住居跡の埋土であることが判明した。従って、N13—2住居跡の一部は本住居跡の上に構築されていたことになる。

〈占地〉 ほぼ平坦に近い地形面を占地している。

〈平面形・規模〉 平面形は隅丸長方形で、規模は東西方向が4.08m、南北方向が3.62mである。床面積は12.6m<sup>2</sup>である。

〈埋土〉 埋土は7層に細分される。5～7層は2回目の調査による拡大部分であり、7層はN13—2住居跡の埋土である。全体的に黒色土主体で中位～下位には微量の炭や焼土が混じる。

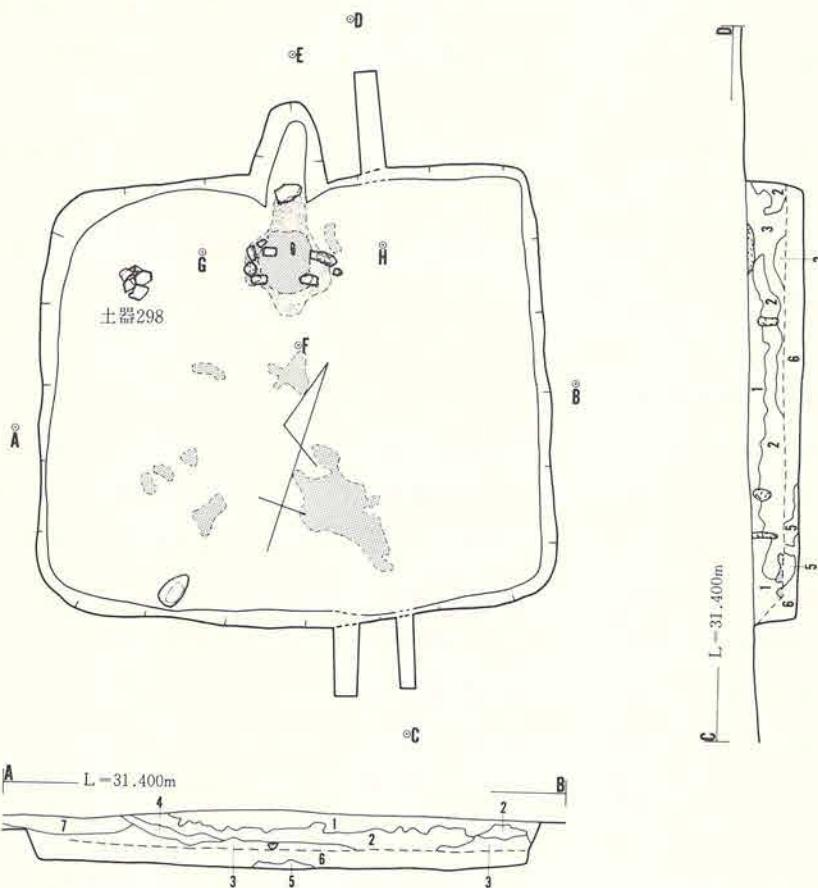
〈壁〉 浮石混じりの黒色土中にあり、全体的に急傾斜で立ち上がる。壁高は北壁48cm、東壁42cm、南壁31cm、西壁41cmである。

〈炭化材・焼土〉 炭化材は中央付近に僅かに散布していたが、細片のため実測図に示していない。焼土は北西隅付近と中央から南側に散布している。北西隅の焼土は、約120×80cmの範囲に形成され、厚さ2～3cmで床面から18～25cmほど浮いている。中央から南側の焼土は、厚さ2～4cmで床面から2～4cm位の所に形成されている。本住居跡は焼失住居跡と思われる。

〈床〉 床面はV層起源の黒色土中にあり、やや堅くしまる。全体的に平坦であり、比高差は5cm位である。貼り床はみられない。柱穴や周溝は検出されていない。

〈カマド〉北壁中央に構築されており、総長約1.7m壁外約0.8mである。カマドの長軸方向はN-16°-Wである。

本体部は崩壊しており、構成礫や黄褐色シルトが残っている。礫は長さ10~25cmの四角形や

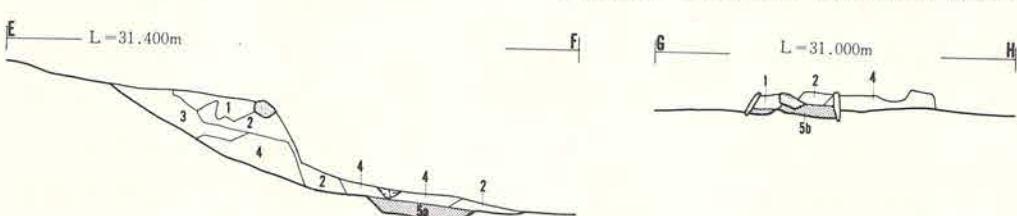


P12住居跡 E-F G-H

1. 10YR 2/2 黒褐色 ややしまる、粘性なし。
2. 10YR 3/3 暗褐色 ややしまる、褐色土・風化礫まじる。
3. 10YR 3/2 黒褐色 しまりなし、褐色土まじる。
4. 7.5YR 2/2 黒褐色 烧土の大きいブロックまじる。
- 5a. 5YR 4/4 にぶい赤褐色 木根はいりもろい。
- 5b. 5YR 4/6 赤褐色 烧土、堅くしまる。

P12住居跡 A-B C-D

1. 10YR 2/1 黒 色 堅くしまる、植生根の混入が多い。
2. 10YR 1.7/1 黒 色 堅くしまる、1より暗色である。
3. 10YR 2/1 黒 色 しまりなし、1より暗色である。
4. 10YR 2/2 黑褐色 ややしまる、炭を微量に含む。
5. 10YR 2/2 黑褐色 しまりなし、焼土ブロック含む。
6. 10YR 2/1~1.7/1 黑色 粘性なし、ややしまる。
7. 10YR 3/3 暗褐色 褐色土・にぶい黄褐色土・焼土まじる。



第86図 P12住居跡（遺構）

五角形の薄い凝灰岩や砂岩であり、両袖の礫は僅かに埋設されている。両袖の幅は芯材の外側で40cmである。また、黄褐色シルトは礫を囲むように、長さ80cm、最大幅70cmの範囲に分布し、厚さは2～5cmである。燃焼部の焼土は径50～42cmの楕円形の範囲に形成され、厚さは最大8cmである。

掘り込み式の煙道は平均21°位の上り勾配であり、天井部には褐色土が使用されている。埋土には焼土のブロックが混じる。

〈時期〉 出土遺物から奈良時代である。

遺物（第87図、写真図版77・78）

ロクロ不使用の土師器が埋土下位中心に出土している。

294は壊で一部を欠く。内外面に段はなく、口縁部は内彎して立ち上がる。底部外面は丸底、内面は平底風である。器面調整は、外面は底部を除きヘラケズリとヘラミガキ、内面はヘラミガキで黒色処理されている。全体的に調整は雑であり、底部外面は未調整である。

295は体部下半を欠くが甌と思われる。口縁部に最大径を持ち、全体的に内彎気味に外傾する。器面調整は、外面は刷毛目後ヘラミガキ、内面は刷毛目である。

296は甌で底部付近を欠く。頸部に一条の沈線が巡り、僅かに段がある。口縁部は外反気味である。体部は歪んでいるが中央付近が僅かに脹らむ。器面調整は、口縁部は内外面ともヨコナデ後ヘラミガキ、体部は外面はヘラケズリ後ヘラミガキ内面はヘラミガキである。輪積痕に沿って欠けており、外面には煤が付着している。

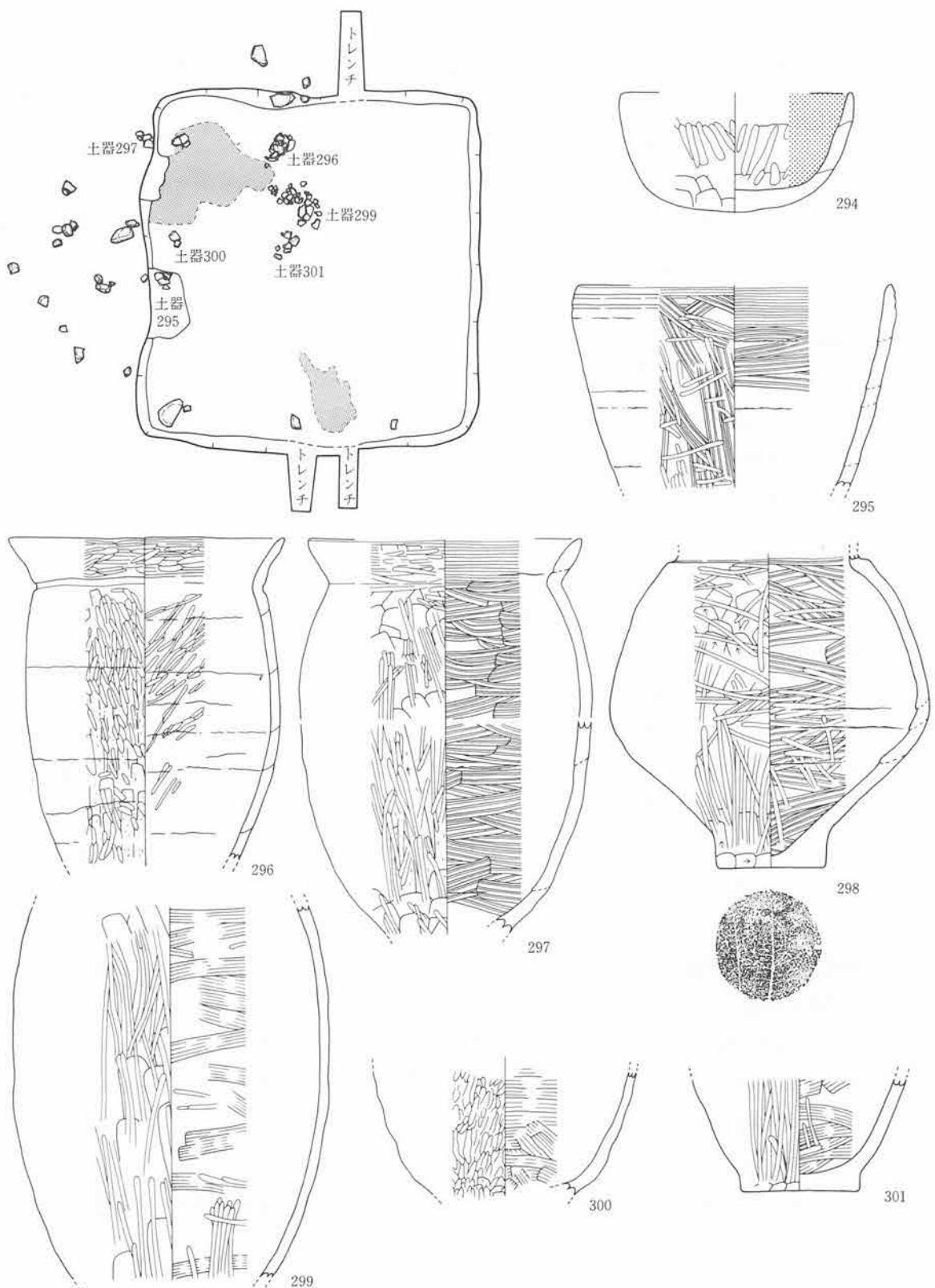
297は接合しないが同一個体の甌で底部を欠く。頸部に括れを持ち、口縁部は外傾する。体部中央付近に最大径を持ち、体部が脹らむ。器面調整は、外面は口縁部はヨコナデ後ヘラミガキ、体部はヘラケズリ後ヘラミガキ、内面は刷毛目である。内面に黒い付着物が部分的にみられる。

298は甌で口縁部を欠く。頸部に沈線による段を持つ。中央やや下位に体部最大径をもち、体部はソロバン玉のように脹らむ。底部は下端の張り出しがなく直立し、外面に木葉痕がある。内面は小さな丸底である。器面調整は、外面はヘラケズリ後ヘラミガキで一部に刷毛目が残る。内面は刷毛目後ヘラミガキである。

299は口縁部と底部を欠くが甌と思われる。体部最大径を中央付近に持ち、全体的に内彎する。器面調整は、外面はヘラケズリ後ヘラミガキ、内面はヘラナデであるが剥落している所が多い。

300は甌の体部下位で底部を欠く。器面調整は、外面はヘラケズリ後ヘラミガキ、内面は粗いヘラナデである。

301は甌の底部付近である。底部は下端の張り出しがなく直立する。器面調整は外面は粗なヘラミガキ、内面はヘラナデで煤が付着している。



第87図 P12住居跡（遺物）

### M13住居跡（第88・89図、写真図版37・38）

調査区の北東部に位置しM10住居跡の西4.6m付近にある。また、北にはJ12住居跡、南にはN13住居跡が近接する。この住居跡は表土除去の段階でカマド付近が検出されたが、平面形がわかりにくく、焼土や炭化材の分布状況を手掛かりに調査した。両側は林道のため調査していない。重複する遺構はない。

〈占地〉 南に下る緩斜面を占地している。

〈平面形・規模〉 調査したのは東半だけであるが、平面形は隅丸方形と推定される。規模は南北方向が6.6mである。調査範囲内の床面積は24.6m<sup>2</sup>であり、全体の推定地は38.7m<sup>2</sup>である。

〈埋土〉 埋土は5層に細分され、上位は黒褐色土、中位は黒色土、下位は褐色土が多い。中位～下位には炭化材や焼土が多く含まれる。なお、断面図にはみられないが、北東側の検出面付近では白頭山火山灰や十和田a降下山灰の散布がみられる。

〈壁〉 全体的にIV・V層起源の再堆積層を掘り込んでいる。また、北壁一帯は木根により搅乱がある。北壁は急傾斜で直壁に近いが、南壁の立ち上がりは不鮮明である。壁高は北壁で最大50cm、南壁5～10cmである。

〈炭化材・焼土〉 北壁際を除き全体に多く分布しており、焼失住居跡である。

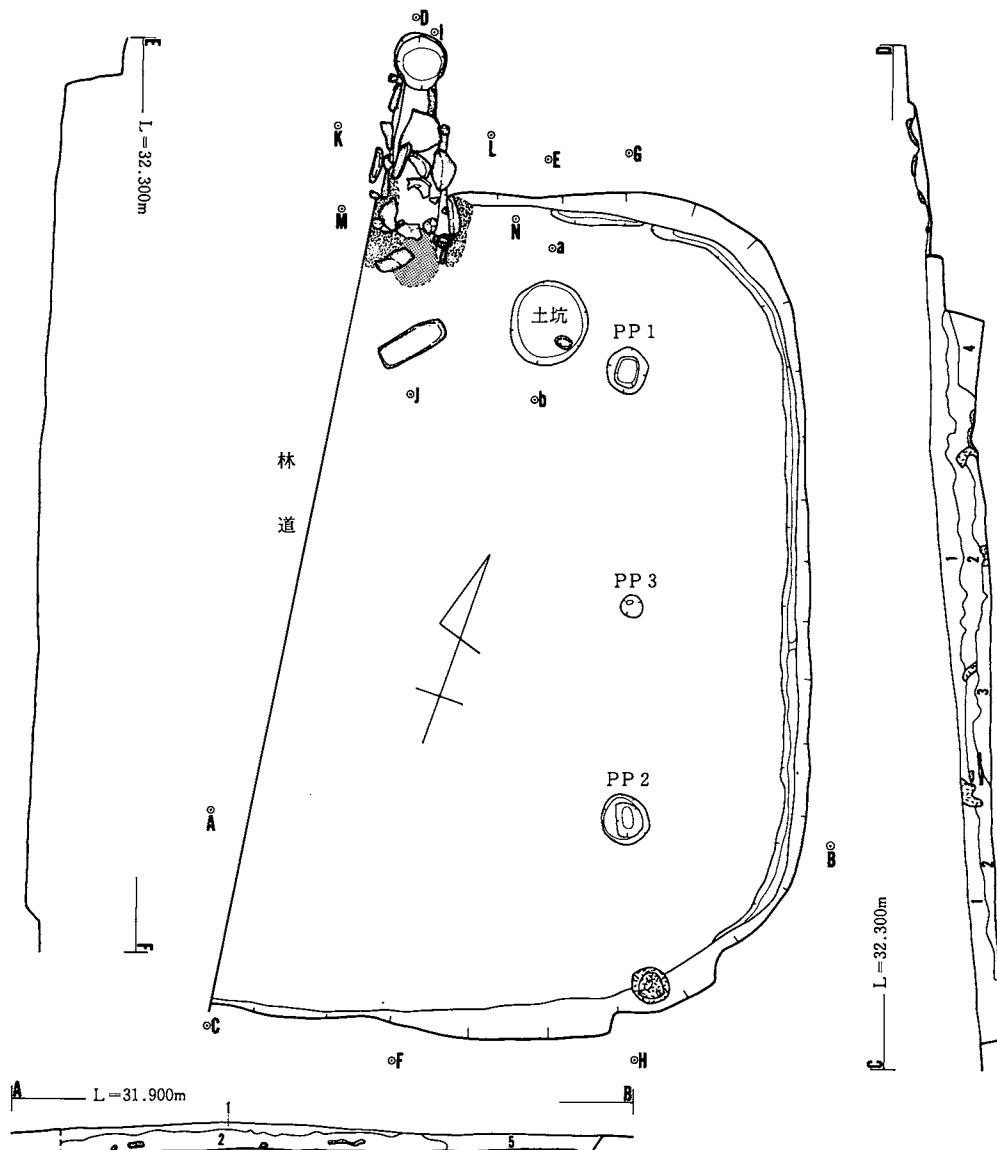
炭化材は床面から5cm以内のものを主体に、7～15cmほど浮いているものもみられる。炭化材の配列は東西方向が主で南北方向が従であり、ほぼ直角に交わる。炭化材の断面は板状のものと角材状のものがあり、幅は10～15cm、厚さは2～8cmであり、板状の炭化材は東西方向に分布するものに多い傾向がみられる。樹種鑑定の結果は11～13・15・16は栗であり、14が栗とナラである。焼土は床上に形成され、厚さは6～10cmで炭化材を被っている部分が多い。実測図に示した焼土範囲は炭化材を優先したため、実際より狭い。

〈床〉 床面は北半はVI層上面、南半はV層面であり、南壁付近を除くと比較的堅くしまる。地山に沿って北から南に傾き、比高差は最大20cmである。貼り床はみられない。

〈柱穴〉 柱穴は3個検出されている。柱穴配置は西半を調査していないが四角形と推定される。柱穴の平面形は円形であり、規模はPP<sub>1</sub>が36×32cmで深さは34cm、PP<sub>2</sub>が40×37cmで深さは57cm、PP<sub>3</sub>が18×16cmで深さは48cmである。このうちPP<sub>1</sub>とPP<sub>2</sub>が主柱穴であり、長方形気味の柱痕跡がある。PP<sub>3</sub>の柱痕跡は先細りであることからPP<sub>1</sub>とPP<sub>2</sub>の中間に補助的に打ち込まれたものと思われる。PP<sub>1</sub>とPP<sub>2</sub>の芯芯間距離は3.6cmである。

〈周溝〉 北壁から東壁の直下に1条の周溝が巡る。上場の幅は10cm前後、深さは2～5cmである。

〈土坑〉 カマド右袖の東60cm付近で1基検出された。平面形は円形、断面形はビーカー状である。規模は、開口部径67×61cm、底部径56×50cm、深さ26cmである。埋土は暗褐色～黄褐色

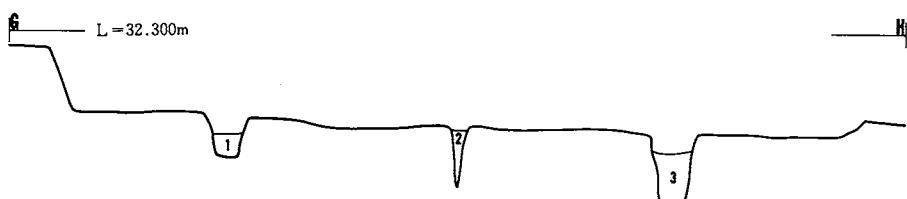


M13住居跡 A-B C-D

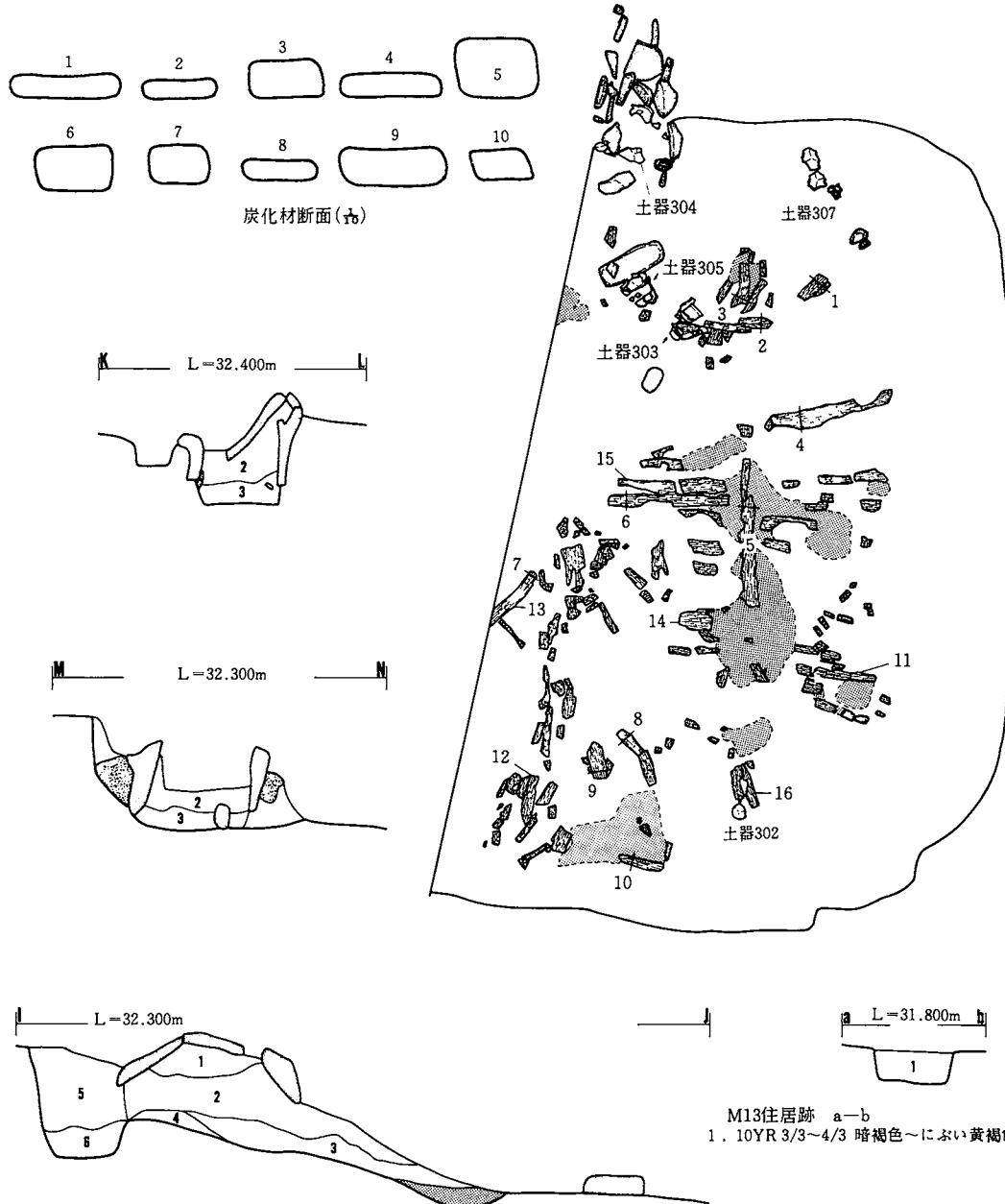
1. 10YR 2/2 黒褐色 堅くしまる、炭を微量に含む。
2. 10YR 2/1 黒色 1より軟らかい、炭・焼土粒を微量に含む。
3. 10YR 3/4 褐色 やや堅くしまる、焼土塊・炭化材を多く含む。
4. 10YR 2/3 黒褐色 シルト質土、焼土・炭を1%含む。
5. 10YR 3/2 黒褐色 やや堅くしまる、炭を微量に含む。

M13住居跡 G-H

1. 10YR 3/2 黒褐色 炭・黄褐色土を含む。
2. 10YR 2/2 黒褐色 軟らかく炭を含む。
3. 10YR 3/2 黒褐色 軟らかく炭を含む。



第88図 M13住居跡（遺構1）



- M13住居跡 I-J K-L M-N
1. 10YR 3/3 黒褐色 しまっている、シルト質土・焼土粒を含む。
  2. 10YR 3/4 暗褐色 ややしまる、黄褐色土を少量含む。
  3. 10YR 2/3 黒褐色 厳くしまる、焼土粒・炭を含む。
  4. 10YR 2/2 黒褐色 しまっている、シルト質土・焼土粒を含む。
  5. 10YR 2/2 黒褐色 しまっている、砂質シルト・植生根が多い。
  6. 10YR 2/1 黒 色 しまっている、焼土粒を少量含む。

第89図 M13住居跡（遺構 2）

のシルト質土であり微量の炭と焼土粒を含む。この土坑は埋土が住居跡下位に類似することから、住居跡に付属するものと推定される。

〈カマド〉北壁中央付近に構築され、総長2m、壁外約1.4mである。カマドの長軸方向はN-15°-Wである。

本体部や煙道の残存状況は比較的良好である。袖部や煙道は長さ15~54cmの角礫や亜円礫を組んで作られている。両袖は芯材の礫と褐色土で作られており、幅は内側で42cmである。

燃焼部焼土は、径46×36cmの楕円形で厚さは最大7cmあり、良く焼けている。燃焼部の奥には粒径9.5cmと11cmの亜角礫2個を東西に配置して支脚としている。

煙道は煙出部まで平均14°の上り勾配であり。側壁と天井は主として凝灰岩で作られている。煙道の幅は25~35cmであり、埋土下位には焼土層が形成されている。

煙出部には円筒状のピットが掘り込まれている。規模は開口部径43×38cm、底部径30×25cm、深さ45cmである。

〈時期〉 埋土の特徴や出土遺物から奈良時代である。

#### 遺物（第90図、写真図版78.79）

クロ不使用の土師器と鉄製品で構成される。

302は壺で半分以上を欠く。内外面に段はなく、体部は外傾する。器面調整は、口縁部は内外面ともヨコナデ後ヘラミガキ、体部は内外面ともヘラミガキ主体である。内面は黒色処理されている。底部は平底で外面は雑なケズリで凹凸がある。

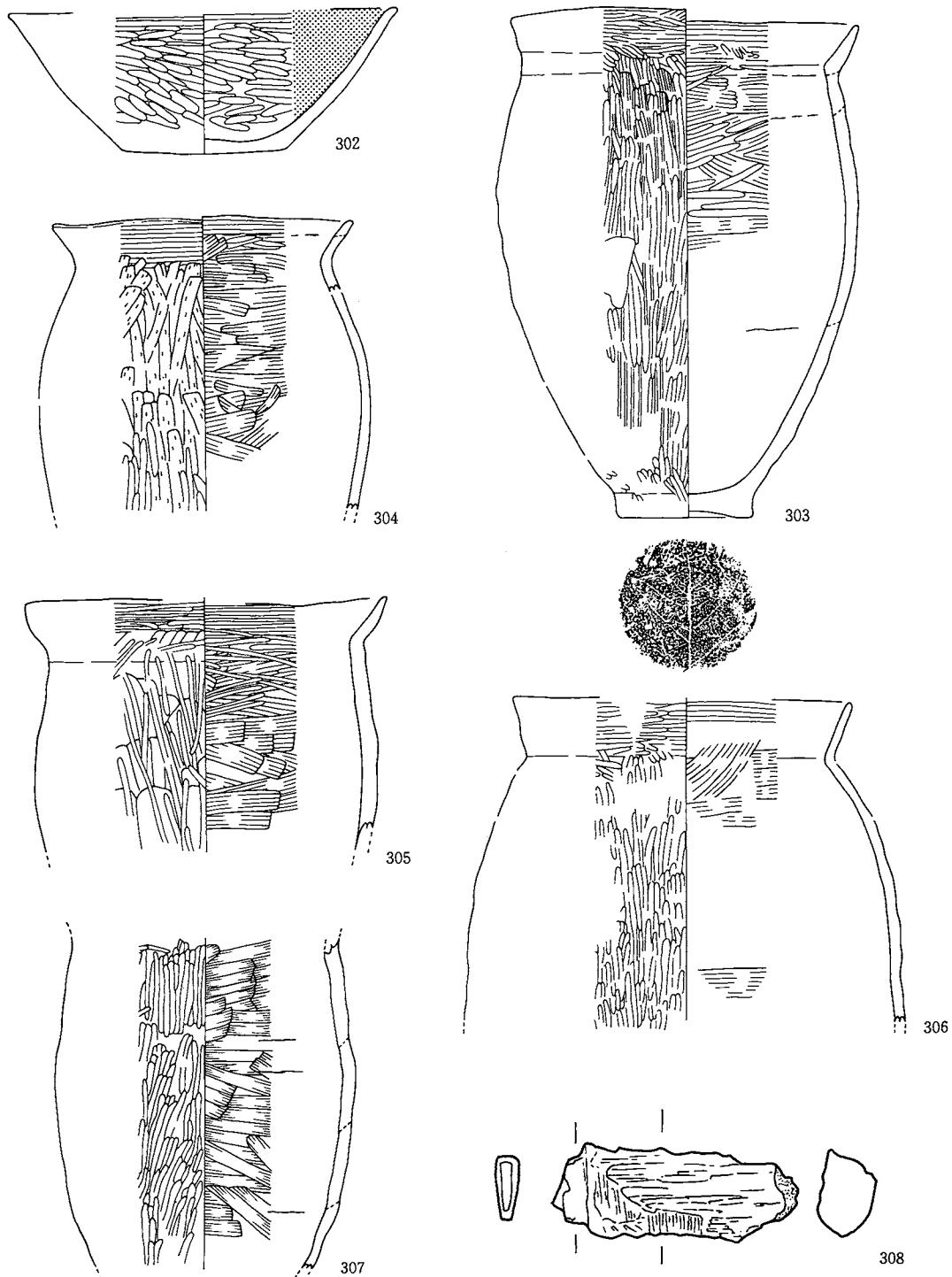
303は壺である。頸部に括れを持ち、口縁部は外傾する。最大径は肩部付近にあり底部にかけて窄む。底部下端は外側に少し張り出す。器面調整は、口縁部は内外面ともヨコナデ後一部ヘラミガキ、体部は外面は刷毛目後ヘラミガキ、内面はヘラナデであるが剥落が著しい。底部外面には木葉痕がある。外面には煤が付着している。

304は壺で体部下半を欠く。頸部に括れを持ち、口縁部は外反気味である。体部中央より上に最大径を持つものと思われる。器面調整は、口縁部は内外面ともヨコナデ主体、体部は外面はヘラケズリ後ヘラミガキ、内面はヘラナデである。

305は壺で体部下半を欠く。頸部に僅かな括れを持ち、口縁部は内彎する。体部は肩部付近が僅かに脹らむ。器面調整は、口縁部は内外面ともヨコナデ主体、体部は外面はヘラケズリ後弱いヘラミガキ、内面はヘラナデ後ヘラミガキである。

306は壺で体部下半を欠く。頸部に括れを持ち、口縁部は外傾する。体部中央付近に最大径を持つと思われる。器面調整は、外面はヘラミガキ、内面は口縁部はヨコナデ、体部はナデである。内面には炭化物が付着している。胎土は303・304と同じである。

307は壺の体部で口縁部や底部を欠く。体部中央付近が僅かに脹らむ。器面調整は、外面はヘ



第90図 M13住居跡（遺物）

ラミガキ、内面はヘラナデである。内外面に黒い付着物がみられる。304・306はカマド付近から、それ以外は床面から出土している。

308は鉄製品で刀子の柄であり、木質部が残っている。長さ（3.7cm）である。

### N 13住居跡

調査区の北東部に位置しM13住居跡の南3.2m付近にある。また、近くにはP12、P14、Q14住居跡がある。この住居跡は表土除去の段階で平面形は不詳ながら、煙出口と思われる箇所があること、南東部の試掘トレンチで焼土が散布することなどから存在が予想された。当初は1棟の住居跡を想定していたが、調査の過程で床面が2段あり、最終的に2棟の住居跡であることが判明した。新旧関係は下位が古く、上位が新しい。遺構名は調査順序に従い下位をN 13—1、上位をN 13—2住居跡としている。

重複関係は、N 13陥し穴、P 12住居跡の上位を切り、P 13・P 14土坑に切られている。

#### N 13—1住居跡（第91・92図、写真図版39）

〈占地〉 南東に下る緩斜面を占地しているが、比高差は20cmと少ない。

〈平面形・規模〉 平面形は隅丸正方形でやや歪んでいる。規模は北東—南西、北西—南東方向とも約5.2mである。床面積は24.9m<sup>2</sup>である。

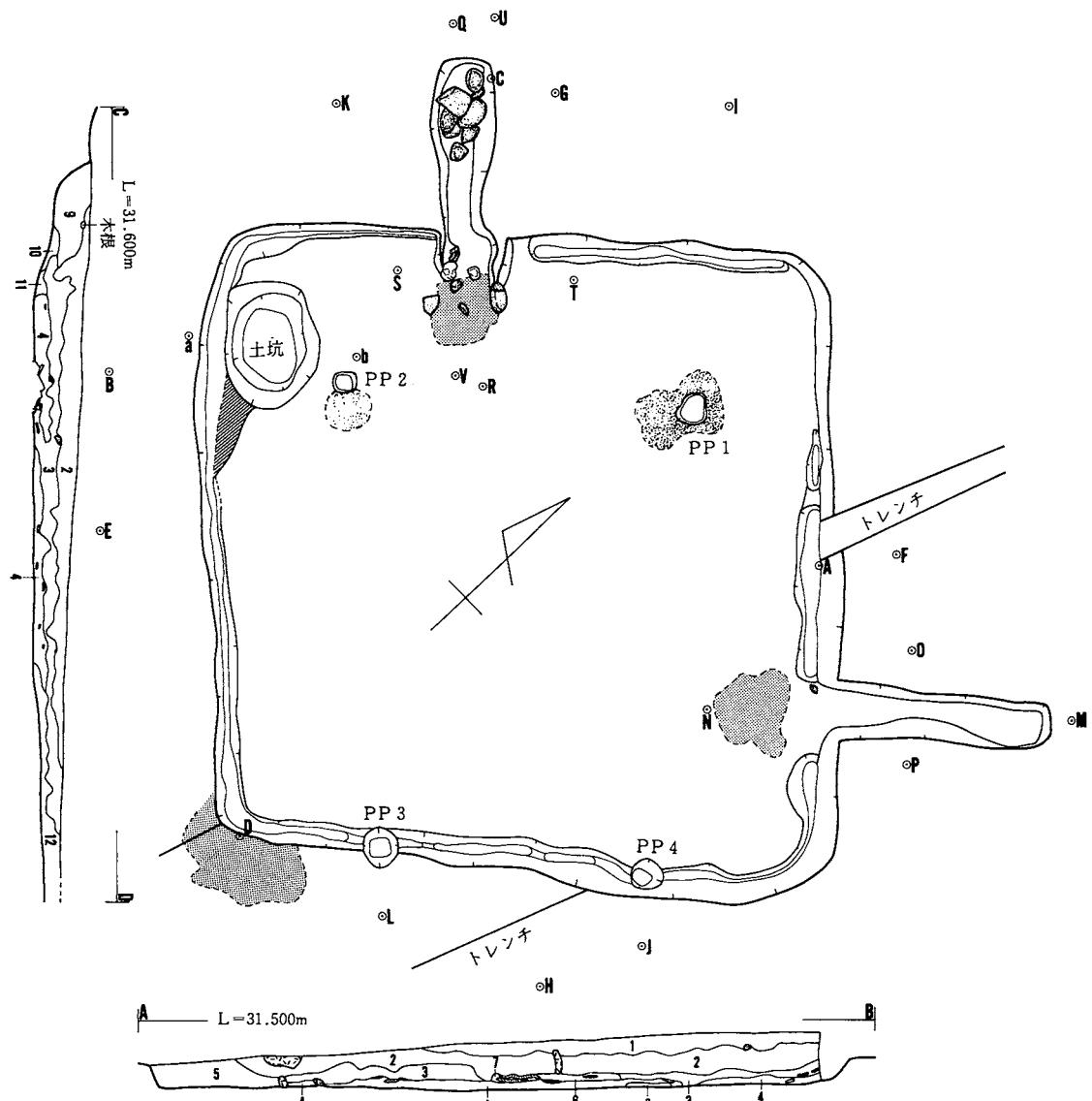
〈埋土〉 本住居跡の埋土は図中4層の黒褐色土であり、白頭山火山灰と十和田a降下火山灰を含む。また、少量の炭化材がみられる。

〈壁〉 上位をN 13—2住居跡に削平されており、残存する壁高は6～15cmである。

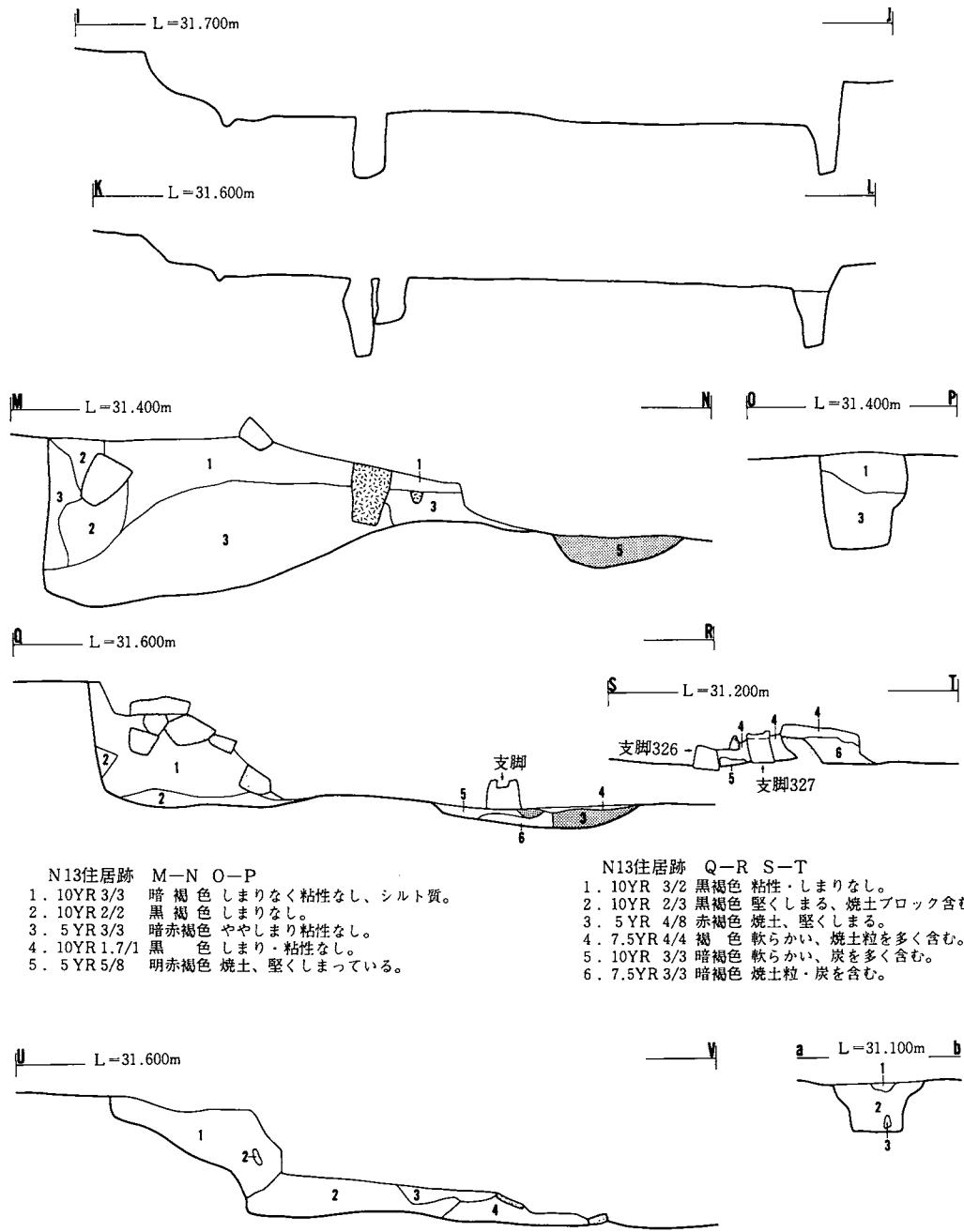
〈炭化材・焼土〉 焼土は全体的に多く分布し、炭化材を伴うことから焼失住居跡と思われる。炭化材は床上4cm以内に形成され、厚さは1～2cmで板状のものが多い。炭化材の配列は南東壁際に沿って断続的に分布する以外は不詳である。なお、南隅付近の焼土は新期住居跡に伴うものと思われる。

〈床〉 床面はV～VI層面であり、比較的堅くしまる。中央から東隅にかけてやや凹凸があり、比高差は最大10cmである。貼り床はみられない。

〈柱穴〉 柱穴は4個検出されている。いずれも柱穴痕と掘り方が識別できる。掘り方部分はVI層起源の明褐色土で固められている。平面形は円形～隅丸方形気味であり、規模はPP<sub>1</sub>が29×28cmで深さは51cm、PP<sub>2</sub>が25×24cmで深さは68cm、PP<sub>3</sub>が41×41cmで深さは50cm、PP<sub>4</sub>が58×48cmで深さは42cmである。柱穴痕はPP<sub>1</sub>以外は隅丸方形であり、長径13～16cmである。PP<sub>1</sub>とPP<sub>2</sub>は北西壁より約1.3m内側に、PP<sub>3</sub>とPP<sub>4</sub>は南東壁際に位置し、台形気味の長方形の柱穴配置である。柱穴の芯芯間距離は、PP<sub>1</sub>～PP<sub>2</sub>が2.9m、PP<sub>2</sub>～PP<sub>3</sub>が3.85m、PP<sub>3</sub>～PP<sub>4</sub>が



第91図 N13-1 住居跡 (遺構 1)



#### N13住居跡 U-V

- 10YR 2/2 黒褐色 ややしまる、粘性なし。
- 10YR 3/3 暗褐色 堅くしまる、焼土ブロックまじる。
- 10YR 2/2 黒褐色 しまり・粘性なし。
- 10YR 2/1 黒 色 しまり・粘性なし、焼けている。

#### N13住居跡 a-b

- 7.5YR 2/2 黒褐色 シルト質、炭・焼土含む。
- 7.5YR 3/3 暗褐色 焼土ブロックに黒褐色土まじる。
- 10YR 6/4 にぶい黄橙色 粘土質、しまりなし。

第92図 N13-1 住居跡 (遺構 2)

2.2m、PP<sub>4</sub>—PP<sub>1</sub>が3.9mである。

〈周溝〉カマド部分を除き全周に巡る。幅は7~20cm位、深さは5~10cm位の所が多い。

〈土坑〉西隅付近で1基検出された。平面形は楕円形、断面形は下半がビーカー状で上半は開口部が開く。規模は開口部径104×78cm、底部径58×44cm、深さは42cmである。埋土は焼土ブロックを含む暗褐色土主体であり、上位には黒褐色土が部分的にみられる。住居跡に付属するものと思われる。

〈カマド〉北東壁と北西壁で2基検出された。残存状況から北東カマド（1号）が古く、北西カマド（2号）は新しく作り変えたものと思われる。

1号カマドは北東壁の東隅寄りに構築されており、総長約2.8m、壁外約1.9mである。カマドの長軸方向はN—46°—Eである。

本体部は削平され、燃焼部焼土と煙道が残っている。焼土は直径60cm、深さ15cmの浅皿状の凹地に形成され、良く焼けている。厚さは最大9cmである。

煙道は壁外30cm付近から20°位の勾配で下った後煙出口下底部までほぼ水平となり、煙出口へ垂直に立ち上がる。埋土は焼土主体の暗赤褐色土である。煙出口上位には2個の角礫が残っている。煙道上部を被うシルト質の暗褐色土は、燃焼部焼土の上位にみられた貼り床の一部と思われる。

2号カマドは北西壁の中央西寄りに構築されており、総長約2.4m、壁外約1.5mである。カマドの長軸方向はN—41°—Wである。

本体部下位が僅かに残っている。両袖に薄い凝灰岩を芯材としVI層起源の粘性土で固めている。左袖の側壁際には壊れた土製支脚（326）も再利用されている。中央には円筒状の土製支脚（327）がほぼ直立状態で残っている。袖部の幅は芯材の内側で43cmである。

燃焼部焼土は、径53×43cmの不整隅丸方形で厚さは最大7cmであり、良く焼けている。

煙道は煙出口下底部までほぼ水平であり、煙出口へ垂直に立ち上がる。煙出口は石を組んで作られており粒径15~30cmの礫が10個残っている。埋土下位には焼土がみられる。

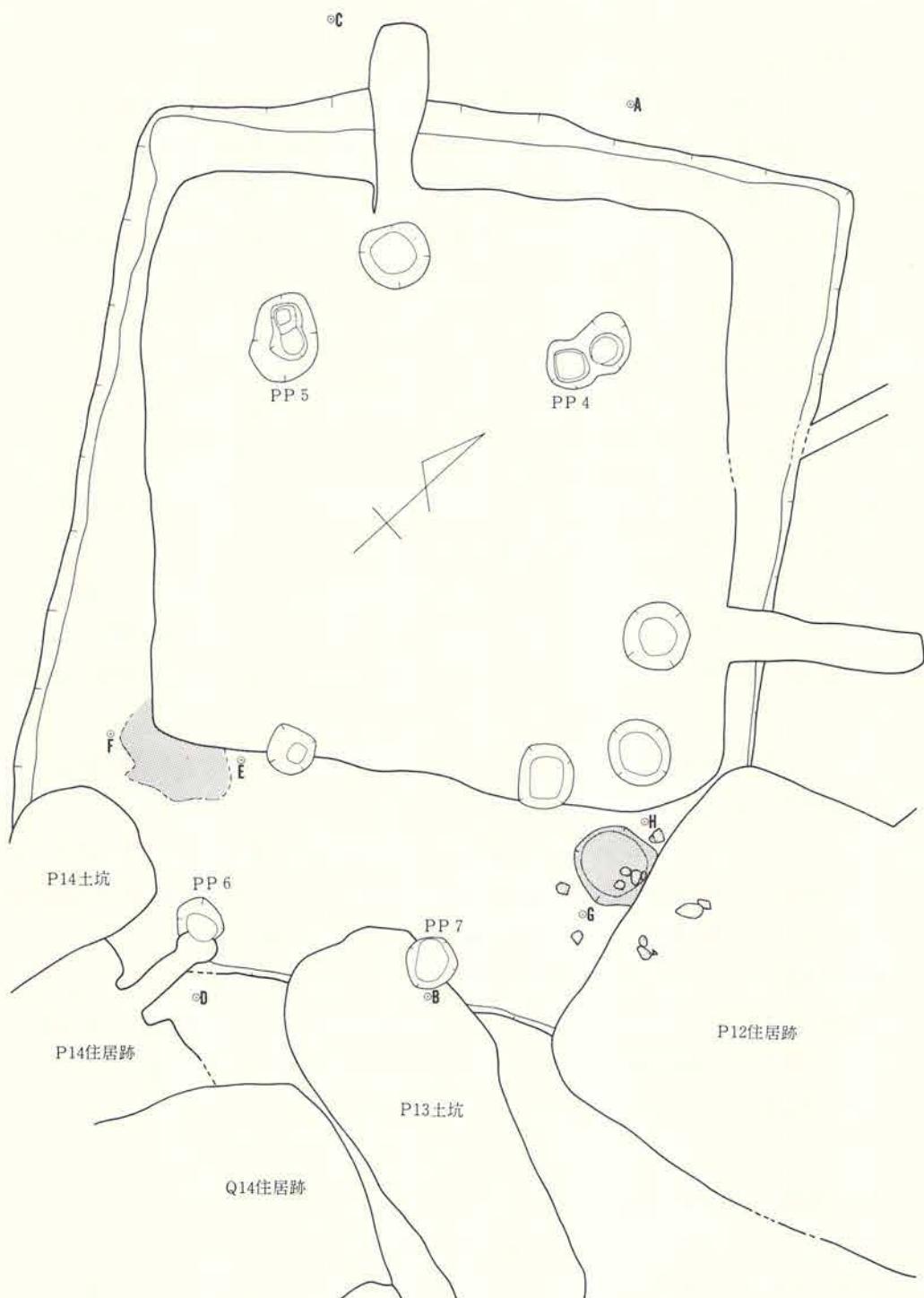
〈時期〉出土遺物から平安時代である。

#### N13—2 住居跡（第93・94図、写真図版40）

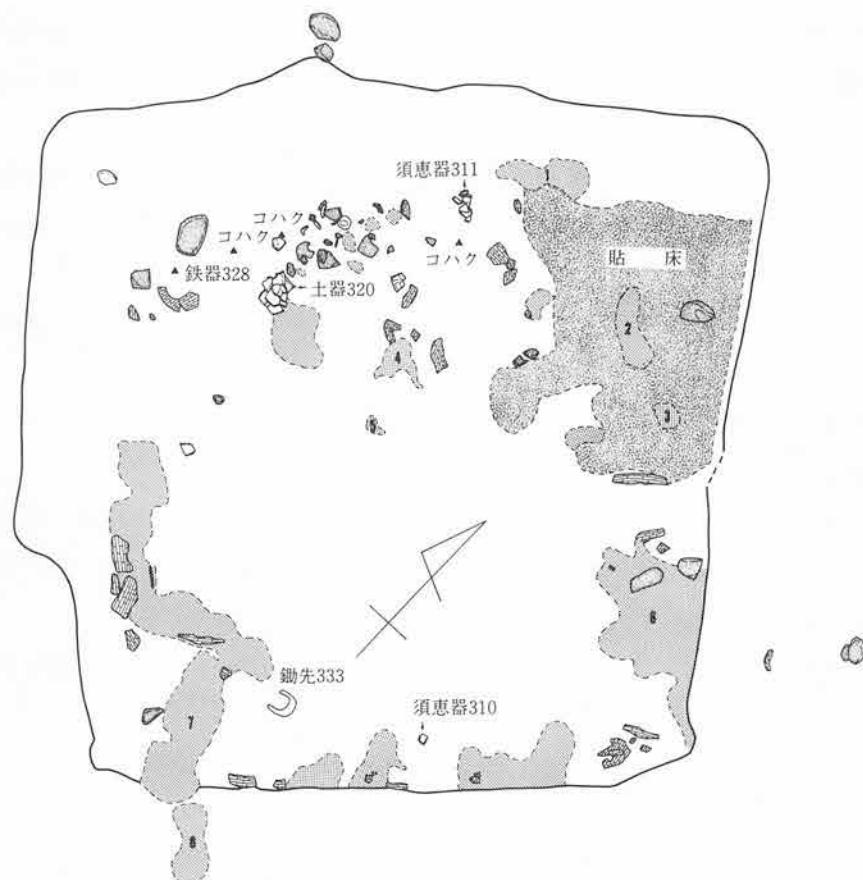
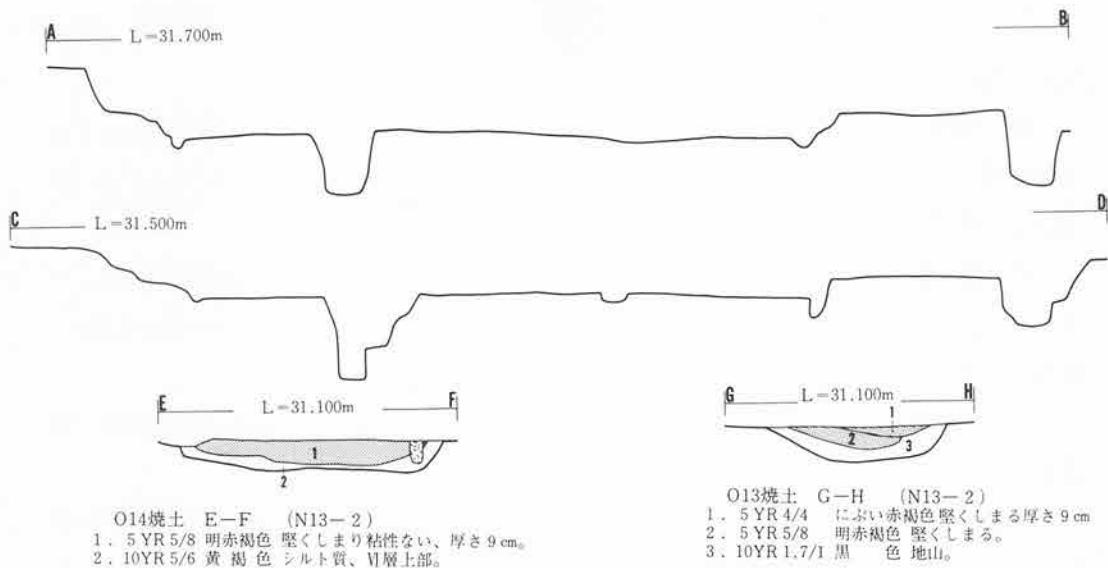
〈占地〉前記住居跡と同じであるが、南側はほぼ平坦である。

〈平面形・規模〉他遺構との重複のため南東壁は断続的に残っているが、平面形は長方形と推定される。規模は北東—南西方向が6.34m、北西—南東方向が推定7.96mである。床面積は推定46.9m<sup>2</sup>である。

〈埋土〉本住居跡の埋土は図中の1・2・3層が主である。下位住居跡の埋土との境には断



第93図 N13-2 住居跡（遺構 1）



第94図 N13-2 住居跡（遺構 2）

続的に堅い所がある。

〈壁〉 東隅と南隅を欠き、南東壁はP12住居跡とP13土坑の間で長さ75cm、P13土坑とP14土坑の間で長さ80cm位残っている。壁はIV～V層中にあり、全体的に緩やかに立ち上がる。壁高は北西壁で最大36cm、南東壁10～15cmである。

〈炭化材・焼土〉 図中の1～8の焼土が本住居跡に伴うものである。下位住居跡の焼土より5～10cmほど高く北東側の貼り床の上にも散布している。特に6～8の焼土は10～15cmと厚い。焼失住居跡と思われる。

〈床〉 中央部はN13—1住居跡の精査で欠く。残っている床面は平坦で北から南に傾き、比高差は最大10cmである。

〈柱穴〉 柱穴は4個検出されている。柱穴の平面形は円形～橢円形気味であり、規模はPP<sub>5</sub>が26×21cmで深さは48cm、PP<sub>6</sub>が32×30cmで深さは40cm、PP<sub>7</sub>が43×40cmで深さは40cm、PP<sub>8</sub>が46×45cmで深さは60cmである。PP<sub>5</sub>とPP<sub>6</sub>はN13—1住居跡の柱穴と接する位置にあり、掘り方部分は明褐色土で固められている。PP<sub>7</sub>とPP<sub>8</sub>は南東壁付近に位置し、台形気味の長方形の柱穴配置である。柱穴の芯芯間距離はPP<sub>5</sub>—PP<sub>6</sub>が2.6m、PP<sub>6</sub>—PP<sub>7</sub>が5.3m、PP<sub>7</sub>—PP<sub>8</sub>が2.1m、PP<sub>8</sub>—PP<sub>5</sub>が5.45mである。

〈カマド〉 北東壁の東隅寄りに構築されている。表土除去の段階で礫や焼土粒が散布することから、当初はP12住居跡のカマドを想定して一部調査した。カマドの長軸方向はN—60°—E前後と推定される。

本体部や煙道は削平されており、燃焼部焼土が残っている。焼土は直径70cm、深さ10cmの浅皿状の凹地に形成され、良く焼けている。

〈時期〉 出土遺物から平安時代である。

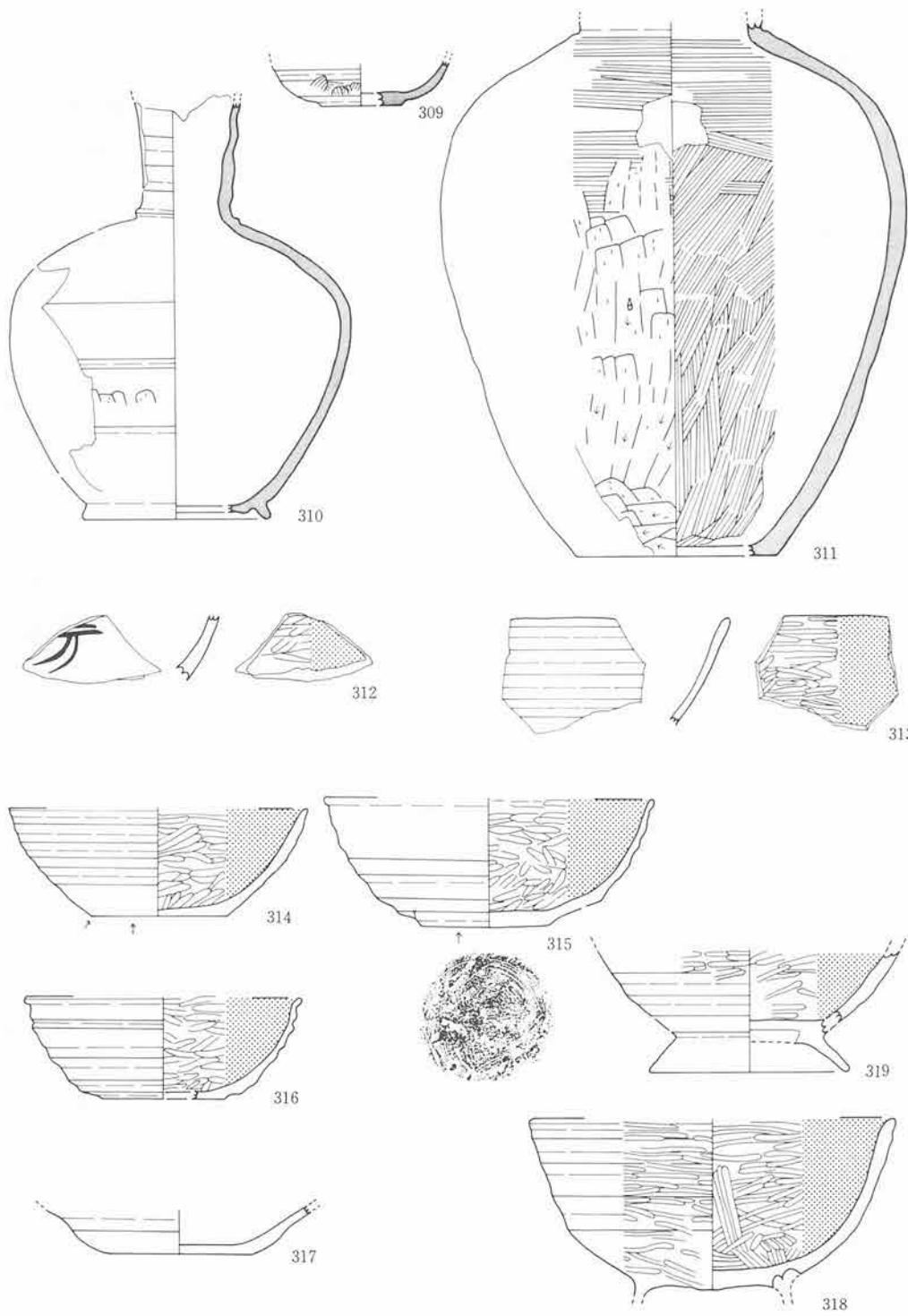
遺物（第95～98図、写真図版79～83）

遺物は須恵器、土師器、鉄製品、石製品、琥珀で構成される。新旧2棟分を一括して掲載している。また、P12住居跡の検出面や埋土最上位出土遺物はN13—2住居跡に伴う可能性があるので図示している。

309～311は須恵器である。一部遺構外のものと接合しているがN13—1住居跡に共伴する遺物と考えられる。

309は壺の底部付近である。底部切り離しは回転糸切りである。2号カマド内出土である。

310は長頸壺で2分の1を欠く。口頸部と体部境外面に突帯を持つ。口唇部は欠損しているが口縁部は外反する。肩部付近に最大径を持ち、体部は丸く脹らむ。底面外縁にはハの字状に開く短い高台が付されている。器面調整は、外面は回転ナデ・ヘラケズリ主体、内面は回転ナデである。底部切り離し技法は不明である。口頸部には自然釉がみられる。主として南東壁中央



第95図 N13住居跡（遺物1）

付近の埋土下位から出土している。

311は広口壺の体部で4分の3を欠く。肩部付近に最大径を持ち、底部下端まで緩く窄む。器面調整は外面は肩部より上位はカキ目、下位はヘラケズリ、内面はカキ目である。底部を殆ど欠くため切り離し技法は不明である。

312～319はロクロ使用土師器の壺と高台付壺である。このうち、312・315～319は新期のN13—2住居跡に共伴するものと考えられる。313・314はN13—1住居跡埋土から出土しているが層位が不明である。

312は壺の体部破片で外面に墨書を伴う。文字は「万」である。遺構外出土の壺（408）と同じく正位に「九万」と書かれたものと思われる。墨書の大きさや書体も同一である。内面は黒色処理されている。

313は壺の口縁部破片である。器面調整は外面はロクロナデ、内面はヘラミガキ後黒色処理されている。

314は壺で口縁部や底部を部分的に欠く。全体的に歪んでいるが、口縁部は内彎気味である。器面調整は外面はロクロナデ、内面はロクロナデ後ヘラミガキで黒色処理されている。底部には手持ヘラケズリによる再調整がみられる。底部切り離し技法は不明である。

315は壺で3分の2を欠く。体部から口縁部は内彎気味である。器面調整は外面はロクロナデ、内面はロクロナデ後ヘラミガキで黒色処理されている。底部切り離しは回転糸切りで再調整がみられる。

316は壺で3分の2を欠く。体部から口縁部は内彎気味である。器面調整は外面はロクロナデ、内面はロクロナデ後ヘラミガキで黒色処理されている。底部切り離しは回転糸切りである。

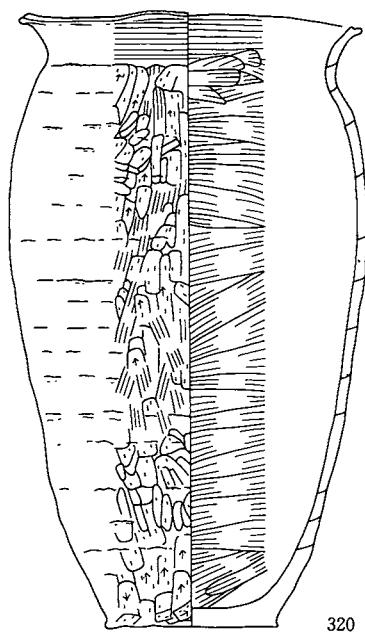
317は壺の底部付近である。内外面ともロクロナデ以外の再調整はなく、黒色処理も施されていない。底部切り離しは回転糸切りである。

318は高台付壺の壺部で4分の3以上を欠く。器面調整は内外面ともロクロナデ後ヘラミガキである。内面から口縁部外面まで黒色処理されている。底部切り離し技法は不明である。

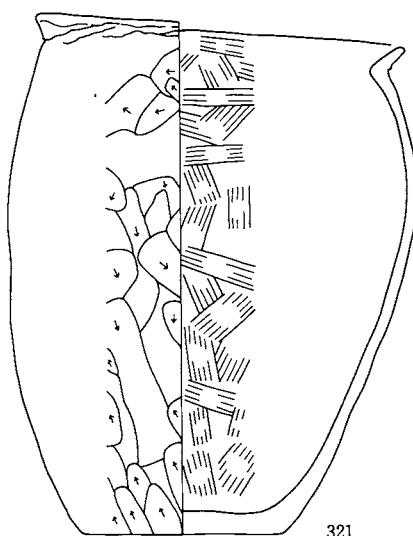
319は接合しないが同一個体の高台付壺である。P12住居跡埋土上位とN13—1住居跡埋土から出土したものが接合している。壺部は内彎気味で高台部はハの字状に開く。器面調整は内外面ともロクロナデ後ヘラミガキであり、内面は黒色処理されている。

320～325は土師器の甕である。320・322・325はN13—1住居跡に、321・323・324はN13—2住居跡に共伴するものと考えられる。

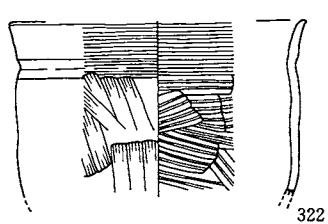
320はロクロ不使用の甕である。頸部に括れを持ち、口縁部は外反し、口唇部が僅かに凹む。最大径は体部中央より上にあり、肩部が緩く脹らむ。底部下端は外側に張り出す。器面調整は、口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は外面がヘラケズリ後ヘラナデ、内面はヘラナデである。



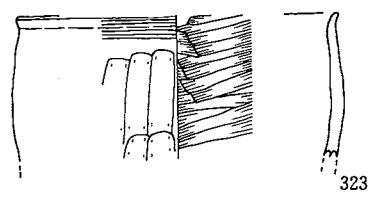
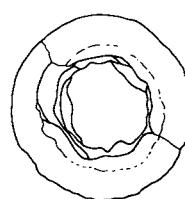
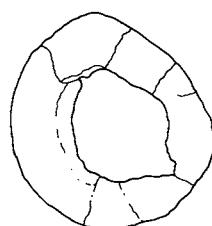
320



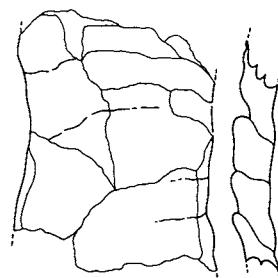
321



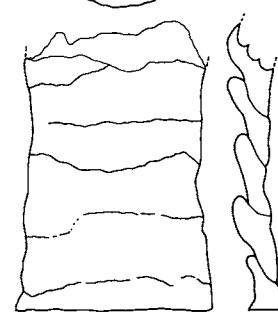
322



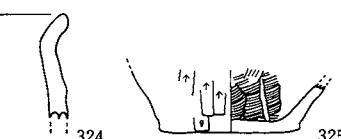
323



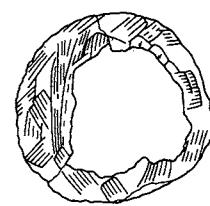
326



327



324 325



第96図 N13住居跡（遺物 2）

外面のナデは押圧が強く、ミガキ状の光沢をもつ。外面には輪積痕が多く残る。

321はロクロ不使用の甕である。頸部に括れを持ち、短い口縁部は外傾する。最大径を肩部付近に持ち、底部下端まで緩く窄む。口縁部は指頭で押圧されただけの雑な作りである。体部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデによって調整され、胎土に小礫を含む。体部外面上半には煤が付着している。底部内面は凹凸がある。

322はロクロ不使用の甕の上半である。頸部には強いヨコナデによる括れがあり、口縁部は外反気味である。口唇部は両端が角張る。器面調整は、口縁部は内外面ともヨコナデ、内面は刷毛目状である。

323はロクロ不使用の甕の上半である。極端に短い口縁部は僅かに外傾する。器面調整は外面は軽いヘラケズリ、内面はヘラナデである。外面には無調整部分も残る。

324は甕の口縁部付近である。頸部に括れを持ち、口縁部は外傾し、口唇部は丸味を持つ。器面調整はロクロ調整であり、外面に煤が付着している。

325はロクロ不使用の甕の底部破片である。底部下端は外側に張り出し気味である。器面調整は外面はヘラケズリ、内面は刷毛目状である。

326・327は土製支脚である。N13—1住居跡の2号（北面）カマド内で、326は側壁寄りに、327は中央に位置し、直立状態で出土している。2点とも筒状に輪積みされ、内外面を指頭で押圧しただけの雑な作りである。326は上下が欠けている。最大径10.9cm、残存高は13.8cmである。327は上端が欠けている。最大径10.5cm、残存高15.2cmである。

328～333は鉄製品である。328～330、332・333はN13—1住居跡、331はN13—2住居跡に伴うものと考えられる。

328は刀子の柄であり、木質部が残る。残存する長さは5.8cmである。

329は刀子の身の破片である。身の幅1.8cm、棟の厚さ5.4mmである。

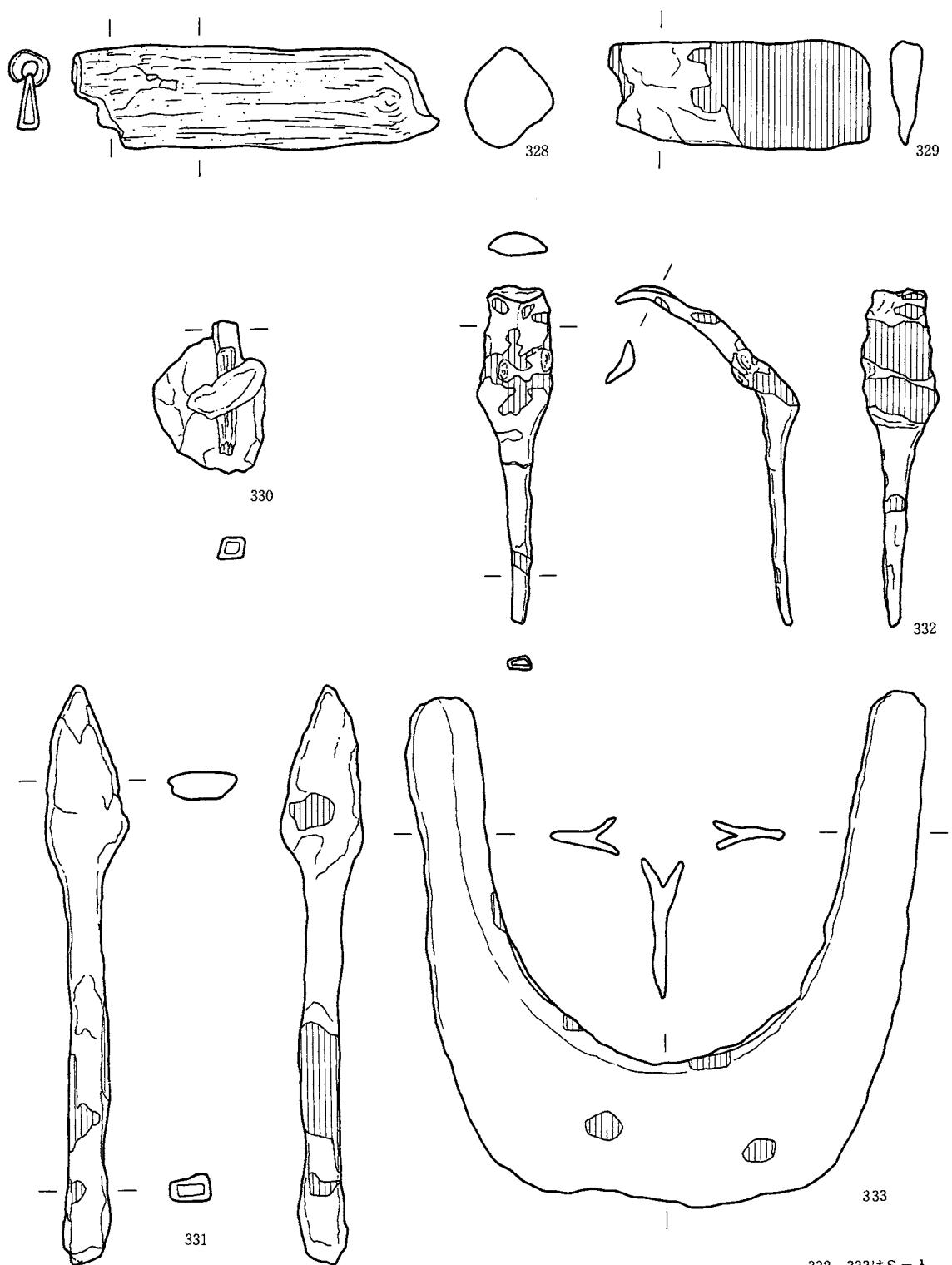
330はクギと思われる。断面形は $4 \times 5$ mmの正方形気味であり、残存長は2.1cmである。

331は長頸尖根式鉄鎌である。根先は三角形で長さ2.2cm、茎の長さ7cmである。

332はほぼ完形の鎌である。身は彎曲し、鎌と裏面の溝はあるものの不鮮明である。断面形は身で三角形、茎で長方形である。長さ14.5cm、身の最大幅2.4cm、身の厚さ7mm、茎の長さ7cm、重量19.1gである。

333は完形の鋤先である。刃部の幅は耳部の幅より狭く、刃部は曲線を描く。刃の先端は一部欠けているが、刃部の長さは推定5.7cmであり、断面は10°位の銳角を示し風呂受け部は約50°位の角度で開く。風呂受けの幅は1.3cmである。長さ16.8cm、耳部の幅16.8cm、刃部中央の厚さ3.5mm、重量160gである。

334～336は石器、石製品である。334・335はN13—1住居跡の北東壁上位付近（N13—2住

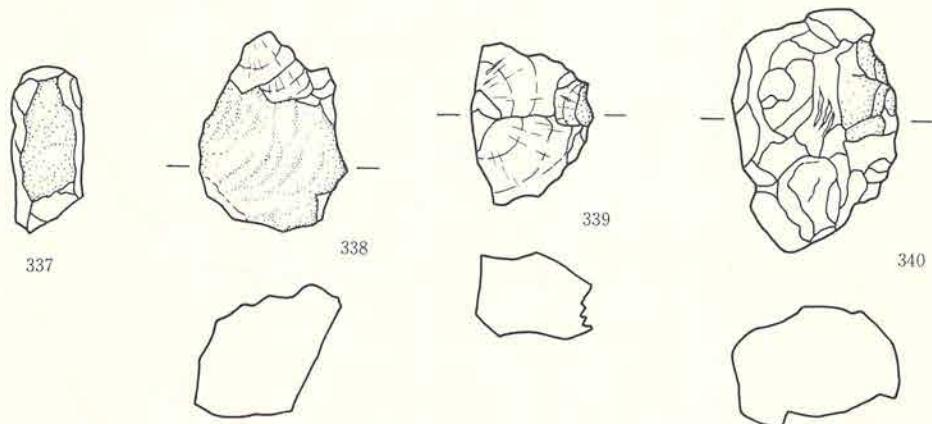
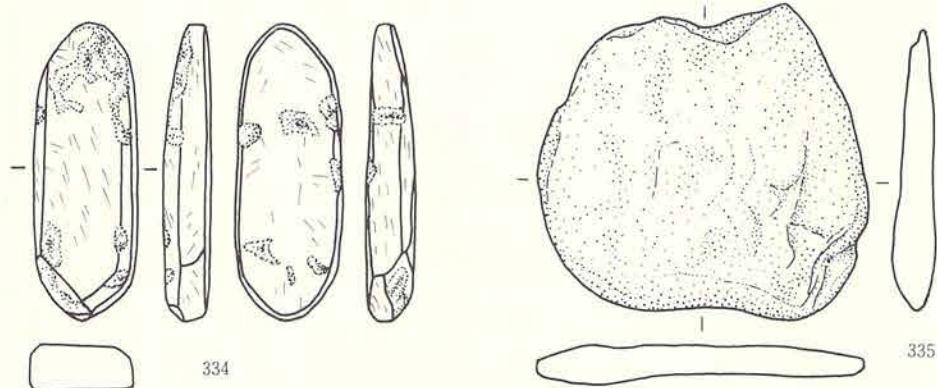
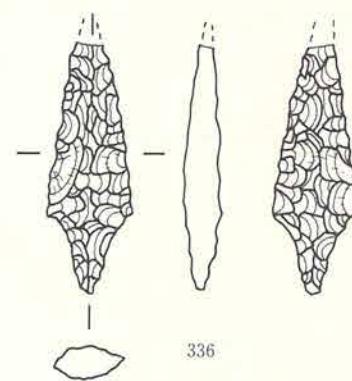


第97図 N13住居跡（遺物 3）

居跡埋土に相当)から出土している。336はN13—1住居跡床面出土である。

334は器種不明の磨製石製品である。平面形は細長い六角形、断面形は長方形基調で、表面は両角は研磨されており、大部分は六角形気味である。上下両端は焼けて黒色である。石質は粘板岩である。長さ7.9cm、幅2.8cm、厚さ1.2cm、重量48gである。

335は礫石錘と思われる。扁平な粘板岩の一端を打ち欠いている。長さ8.4cm、幅8.9cm、厚さ1.2cm、重量118gである。



第98図 N13住居跡(遺物4)

336は凸基有茎の石鏃である。長さ3.3cm、重量1.3gである。石質は粘板岩である。

337～342は琥珀である。341・342は写真だけ掲載している。

337は欠損しているが粗削り成形面が残る。実測図に示したものは大きさは $22 \times 10 \times 7.7$ mm、重量は0.99gである。全出土量の合計は2.68gである。N13—1住居跡の2号カマド東側埋土出土である。

338は表面が粗削り成形面である。その他は欠損している。大きさは $25.8 \times 20 \times 15.2$ mmである。全重量は3.7gである。N13—1住居跡Q<sub>3</sub>埋土中位出土である。

339は全面が欠損面である。大きさは $20.9 \times 16 \times 10.9$ mmである。重量は1.59gである。N13—1住居跡埋土出土である。

340は崩れているが、実測図に示したものは大きさは $32.5 \times 21.5 \times 19.8$ mmである。重量は0.75gである。全出土量は17.37gである。N13—2住居跡の北壁埋土下位出土である。

341は質の悪い原石の表面付近である。浅黄色～黄褐色部分が多く、赤褐色部分は少ない。重量は1.71gである。N13—1住居跡Q<sub>2</sub>埋土下位出土である。

342は細かく崩れている。全出土量は2.68gである。N13—2住居跡東壁埋土出土である。

#### P 14住居跡（第99図、写真図版42）

調査区の北東部に位置し、N13住居跡とQ14住居跡の間にある。東側はQ14住居跡に西側はP14土坑に切られている。Q14住居跡調査中に検出された。

〈占地〉 ほぼ平坦な地形面を占地している。

〈平面形・規模〉 他遺構と重複しているため壁の2分の1を欠くが、平面形は隅丸方形と推定される。規模は南北方向が2.42mである。床面積は推定4.8m<sup>2</sup>である。

〈埋土〉 埋土は3層に細分される。上位は黒褐色土、中位は礫まじりの黄褐色土、下位は暗褐色土である。上位～中位はP14土坑埋土に類似する。

〈壁〉 北壁と南壁の半分が残る。壁高は北壁10～30cm、南壁14～18cmである。

〈焼土〉 カマド付近を中心に厚さ1cm以下の薄い焼土が断続的に散布しているが、少ないので実測図には示していない。

〈床〉 床面は地山面（VI層）であり、比較的堅くしまる。全体的に平坦であるが、南半が5cmほど高い。貼り床はみられない。柱穴や周溝はない。

〈土坑〉 カマド付近の東側で1基検出している。平面形は円形、断面形は擂鉢形である。規模は開口部径40×36cm、底部径25×23cm、深さ20cmである。埋土は黒褐色のシルト質土であり、微量の炭を含む。埋土下位からロクロ不使用の坏片が出土している。

〈カマド〉 北壁中央付近に構築されており、総長約1.2m、壁外約0.9mである。カマドの長

軸方向はN—1°—Eである。

本体部は削平を受け残っていない。燃焼部焼土は径30×26cmの円形で厚さは5cmである。焼土の西側には、芯材の礫抜き取り痕跡と思われる小凹地が2箇所ある。規模は、1が17×16cmで深さ7cm、2が12×8cmで深さ9cmである。

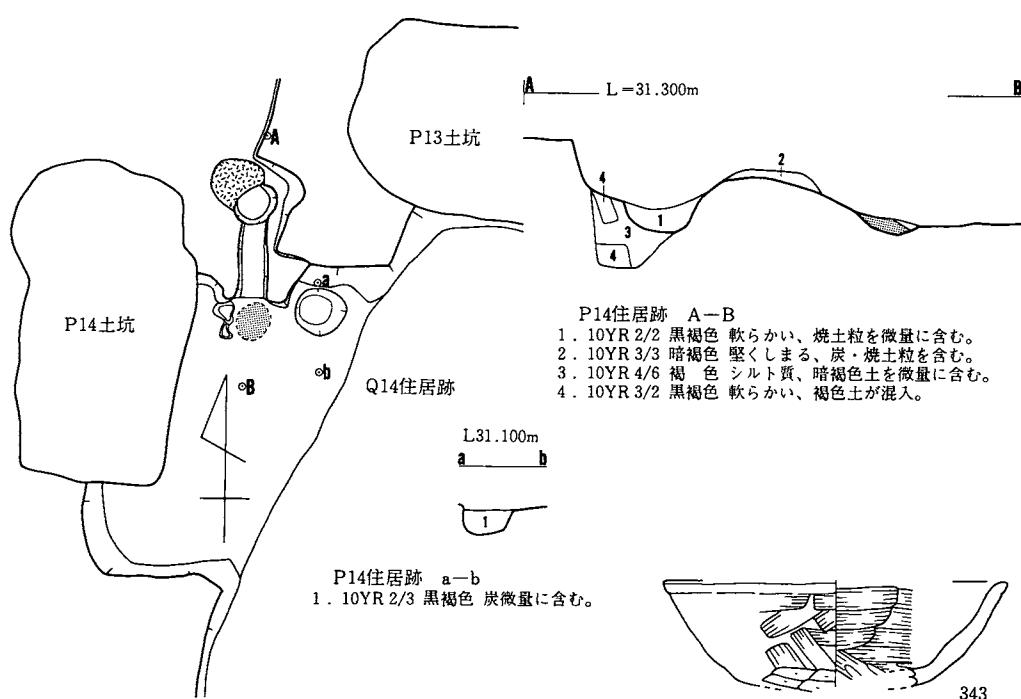
煙道部は殆ど削平されているが、焼けた面が残っている。煙出口も新しい土坑で切られている。煙道は平均20°の上り勾配である。

〈時期〉出土遺物から奈良時代である。

遺物（第99図、写真図版84）

343はロクロ不使用の壺で、3分の2を欠く。口唇部は丸味が強い。

器面調整は内外面ともヘラナデ主体であり、底部外面はヘラケズリである。黒色処理は施されていない。カマド脇の土坑から出土している。



第99図 P14住居跡（遺構・遺物）

Q14住居跡（第100図、写真図版41）

調査区の北東部に位置し、P12住居跡やN13住居跡の南に近接する。表土除去の段階で炭化

材や焼土が散布し、隅丸方形に近い輪郭として検出された。P14住居跡の東側を切り、Q14—1・2、Q13—4 土坑に切られている。

〈占地〉 ほぼ平坦な地形面を占地している。南東壁付近から緩斜面になる。

〈平面形〉 南隅は調査区域外のため未調査であるが、平面形は隅丸長方形である。規模は北東—南西方向が5.1m、北西—南東方向が5.62mである。床面積は推定26.4m<sup>2</sup>である。

〈埋土〉 P14住居跡や土坑の埋土を含めて5層に細分される。上位では黒褐色土、下位で黄褐色～暗褐色土が主体であり、全体的に焼土や炭が混じる。また、耕作地化された際に削平されており、Ⅶ層起源の礫混じりの堅い黄橙色粘土の分布もみられる。

〈壁〉 北～東壁が部分的に残っている。壁高は最大20cmである。

〈炭化材・焼土〉 新期の土坑部分を除き全体的に分布しており、典型的な焼失住居跡である。焼土は床上に形成されており、厚さは5～7cmである。炭化材は、北東壁～北西壁～南西壁に沿ってコの字状に分布するものが多く、断面形をみると主体は板状の割材である。これらの材は床上から5cm以内に形成され、幅は25～40cm、厚さは2～5cmである。樹種鑑定の結果は1～5は栗、6はナラ、7・8はケヤキである。

〈床〉 北半はV～VI層相当面でしまりがなく、南半は礫の混じる地山VII層で堅く凹凸のある床面である。特に南東部4分の1は堅く、10～15cm高くなっている。貼り床はみられない。

〈柱穴〉 柱穴状ピットが数基あるが、柱穴と推定されるものは3個である。平面形は円形～楕円形であり、規模は、PP<sub>1</sub>が37×38cmで深さは10cm、PP<sub>2</sub>が28×25cmで深さは20cm、PP<sub>3</sub>が30×28cmで深さは15cmである。柱穴配置は長方形と思われる。柱穴の芯芯間距離はPP<sub>1</sub>～PP<sub>2</sub>が4.5m、PP<sub>2</sub>～PP<sub>3</sub>が1.95mである。

〈周溝〉 北東壁～北西壁直下にみられる。幅は10～20cm、深さは最大6cmである。

〈カマド〉 北東壁の東隅寄りに構築されているが、削平を受けている。煙道部を欠くがカマドの長軸方向はN—35°—Eと推定される。

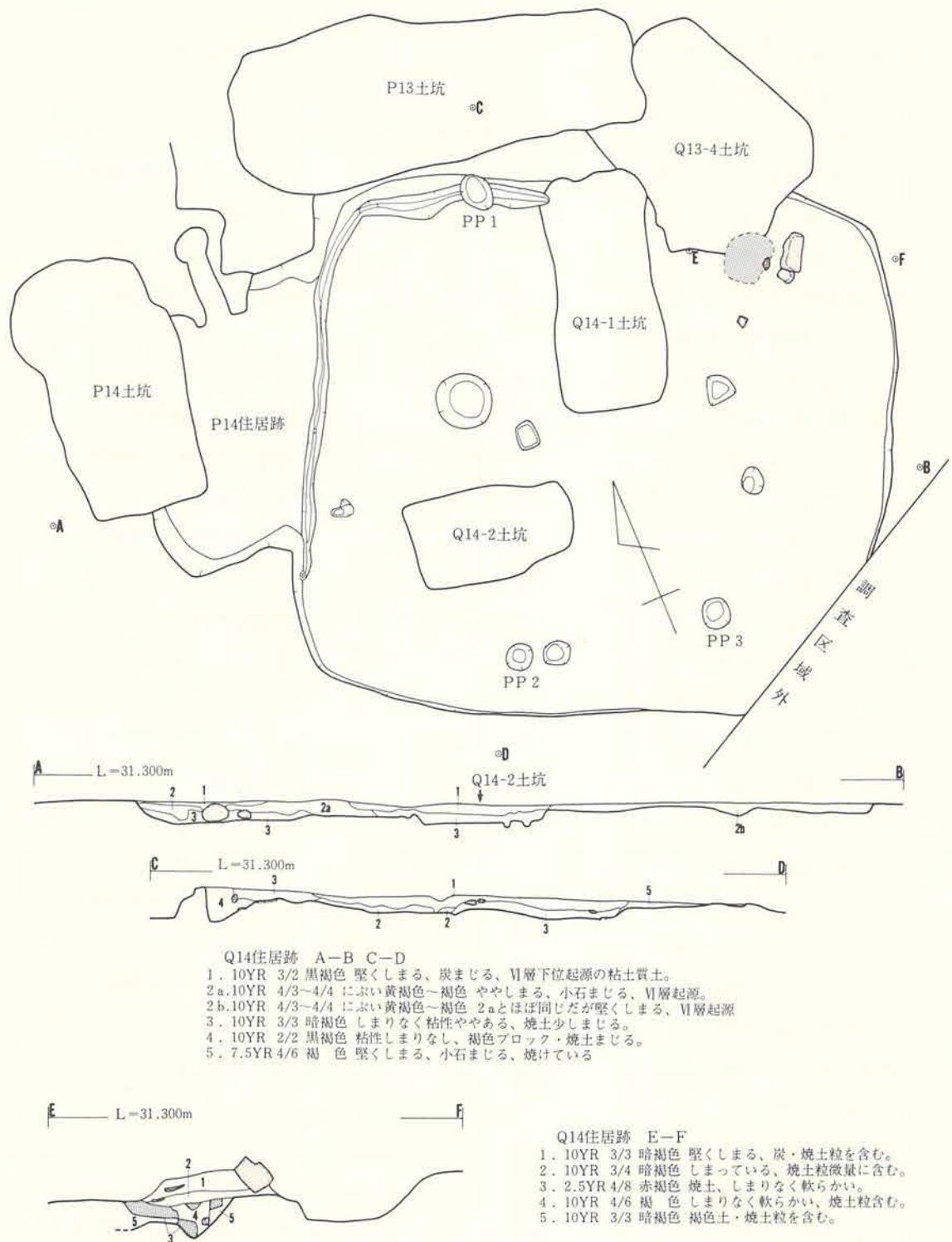
右袖部には長さ32cmと13cmの亜角礫2個を利用している。また焼土付近と南側には支脚と思われる粒径9cmの礫が2個みられる。

燃焼部焼土は、径48×40cmの不整円形で厚さは最大6cmほどあり、良く焼けている。

〈時期〉 遺構の切り合い関係などから平安時代である。

#### 遺物（第101図、写真図版84）

344は須恵器の長頸壺である。頸部外面に突帯があり、体部外面上位にヘラ書きがある。中央は+記号で、左右には逆L字状のヘラ書きがある。沈線は細く鋭い。北隅の壁際で倒立状態で出土している。内外面に黒い付着物がみられる。

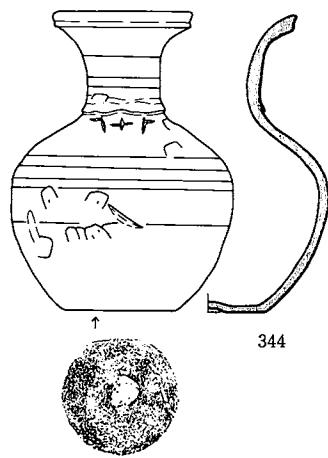


第100図 Q14住居跡（遺構）



7+5

炭化材観察表



番号	断面形状	厚さcm	位 置	番号	断面形状	厚さcm	位 置
1		3.0	床上 9cm	20		3.5	床上 5cm
2	板	3.5	床上 3cm	21	板	6.0	床上
3	板	5.0	床上 8cm	22	板	3.5	床上 7cm
4		3.0	床上 2cm	23	板	4.0	床上
5	板	5.5	床上	24	丸木	4.0	床上
6			床上 4cm	25	板	1.5	床上
7		8.5	床上 4cm	26	板	4.5	床上
8	板	3.0	床上	27	板	2.5	床上
9		5.5	床上	28		3.5	床上
10		6.0	床上 8cm	29	板	5.5	床上
11		4.0	床上 24cm	30	板	2.5	床上
12	板	4.0	床上 10cm	31	角材	4.5	床上
13		3.0	床上 7cm	32	板	2.5	床上
14		4.5	床上	33	角材	4.5	床上
15		2.0	床上 4cm	34	板	2.0	床上 11cm
16		4.0	床上 3.5cm	35	板	2.0	床上 2.5cm
17	板	4.0	床上 2cm	36		2.0	床上 6cm
18	板	4.0	床上	37	板	1.5	床上
19		4.0	床上 7cm				

第101図 Q14住居跡（遺物）

### N22住居跡（第102図、写真図版43）

調査区の中央部に位置しM23住居跡の東2m付近にある。表土を除去した段階でカマドが検出され、火山灰を含む黒褐色の隅丸方形に近い輪郭として検出された。

〈占地〉 ほぼ平坦な地形面を占地している。比高差は15cmである。

〈平面形・規模〉 平面形は隅丸長方形であり、規模は東西方向が3.74m、南北方向が3.28mである。床面積は10.8m<sup>2</sup>である。

〈埋土〉 埋土は9層に細分される。上位は黒褐色土、下位は褐色土主体であり、中位には十和田a降下火山灰が入る。白頭山火山灰は微量である。

〈壁〉 再堆積層を掘り込んでおり、壁面は崩落している。壁の立ち上がりは外傾する。壁高は北壁最大18cm、東壁15cm、南壁最大14cm、西壁20cmである。

〈炭化材・焼土〉 炭化材はカマド付近や南壁付近に散布する。断面形をみると厚さが1～2cm前後のものが多い。樹種の鑑定結果は1・4は栗、2はナラ、3はナラと栗である。焼土は厚さ2cmであり、壁外にも分布している。また、焼土とともに遺物も壁外に分布している。

〈床〉 ほぼ平坦な床面であるが、僅かに北東から南西に傾く。比高差は最大10cmである。貼り床はなく、床面はやや堅い、柱穴や周溝はない。

〈カマド〉 北壁中央付近に構築されている。煙道部を欠くがカマドの長軸方向はN-10°-Eである。

袖部の前面は削平されているが、両袖や天井には長さ30～40cmの長方形の凝灰岩を使用している。燃焼部焼土は直径30cmの円形で厚さは最大4cmである。近くには支脚と思われる粒径6cmと9cmの角礫がある。

〈時期〉 遺物や埋土から奈良時代である。

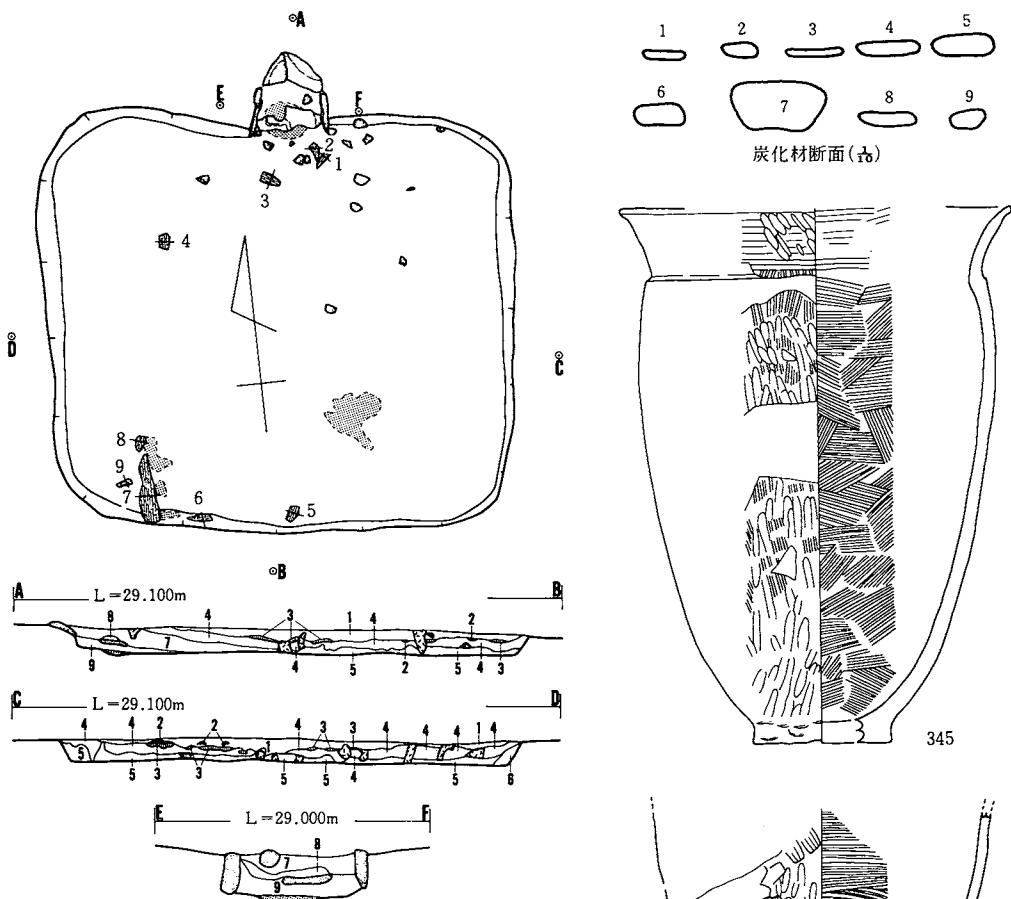
### 遺物（第102図、写真図版84）

出土遺物は土師器、鉄器、琥珀で構成される。

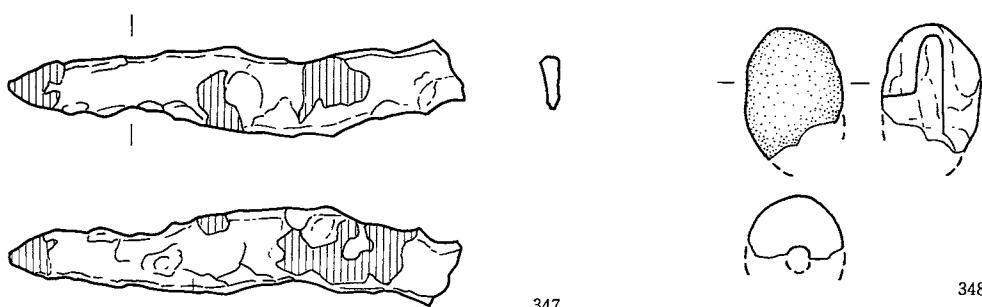
345・346は土師器の甕である。大半は南東隅から1m以内の遺構外出土であるが、埋土出土の破片が接合しており、本住居跡に伴う可憗性があるので掲載している。345は頸部付近にヨコナデによる僅かな段を持ち、口縁部は外反する。口縁部に最大径を持ち、体部下半が窄む。底部下端は外側に張り出す。器面調整は、口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は外面は刷毛目後ヘラミガキ、内面は刷毛目である。内面には黒い付着物がある。346は体部下半であるが、器形、器面調整とも345と同じである。

347は刀子の身の破片である。長さ6cm、身の幅1.1cm、棟の厚さ2.2mmである。

348は琥珀玉の欠損品である。断面形は円形と推定され、穿孔されている。長さ17.5mm、幅13mm、重量0.75gである。北西側床面出土である。



- N22住居跡
1. 10YR 3/2 黒褐色 堅くしまる、植生根の混入が多い。
  2. 10YR 5/6 黄褐色 白頭山火山灰をブロックで堆積する。
  3. 10YR 5/2 灰黄褐色 十和田山火山灰をブロックで堆積。
  4. 10YR 2/2 黒褐色 やや粘性あり、褐色土を含む、1より黒い。
  5. 10YR 4/4 褐色 シルト質、堅くしまる、IV層との混合土。
  6. 10YR 4/4-4/6 褐色 シルト質、堅くしまる、炭・炭化物が堆積する。
  7. 10YR 3/4 褐色 シルト質、ややしまる、焼土粒を2%含む。
  8. 10YR 4/6 褐色 シルト質、ややしまる、焼土粒・炭を微量に含む。
  9. 10YR 3/3 暗褐色 堅くしまる、焼土粒・炭を微量に含む。



347

348

第102図 N22住居跡（遺構・遺物）

### M23住居跡（第103図、写真図版44・45）

調査区の中央部に位置し、N22住居跡とM24住居跡の間にある。表土除去の段階で平面形は不鮮明であったが、カマドの一部が検出された。他遺構との重複はない。

〈占地〉 ほぼ平坦な地形面を占地しているが、検出面は西側より東側が高く、比高差は20cmである。

〈平面形・規模〉 北西隅や南西隅が攪乱されているが、平面形は正方形である。規模は東西方向が4.04m、南北方向が3.92mである。床面積は13.6m<sup>2</sup>である。

〈埋土〉 埋土は5層に細分される。上位は黒褐色土、下位は暗褐色土、壁際は褐色土である。全体的にシルト質でしまっており、火山灰は含まれない。

〈壁〉 東壁の残りが比較的良好く、西壁は耕作によって崩れている所が多い。壁高は北壁18cm、東壁43cm、南壁20cm、西壁22cmである。

〈炭化材・焼土〉 散布はみられない。

〈床〉 少多少凸はあるものの平坦であり、比高差は最大8cmである。地山の黄褐色シルトに粒径2～5cm大の小礫を含む床面は、全体的に堅くしまっている。柱穴や周溝はない。

〈土坑〉 住居跡に伴う土坑は3基検出された。

土坑1は北東隅に位置する。開口部の平面形は直径34cmの円形であり、斜めに壁外まで掘られている。埋土は暗褐色シルト質土の単層であり、住居跡下位と同じである。土師器(350～352)と刀子(368)が出土している。

土坑2は南東隅に位置し、カマド脇にある。平面形は不整な橢円形であり、規模は開口部径60×40cm、深さ27cmである。埋土は褐色～暗褐色シルト質土で炭や焼土粒を含む。甕(362)・ミニチュア土器(365)・耳栓(366)が出土している。他に粒径2～5cm大の小礫が60個程出土している。

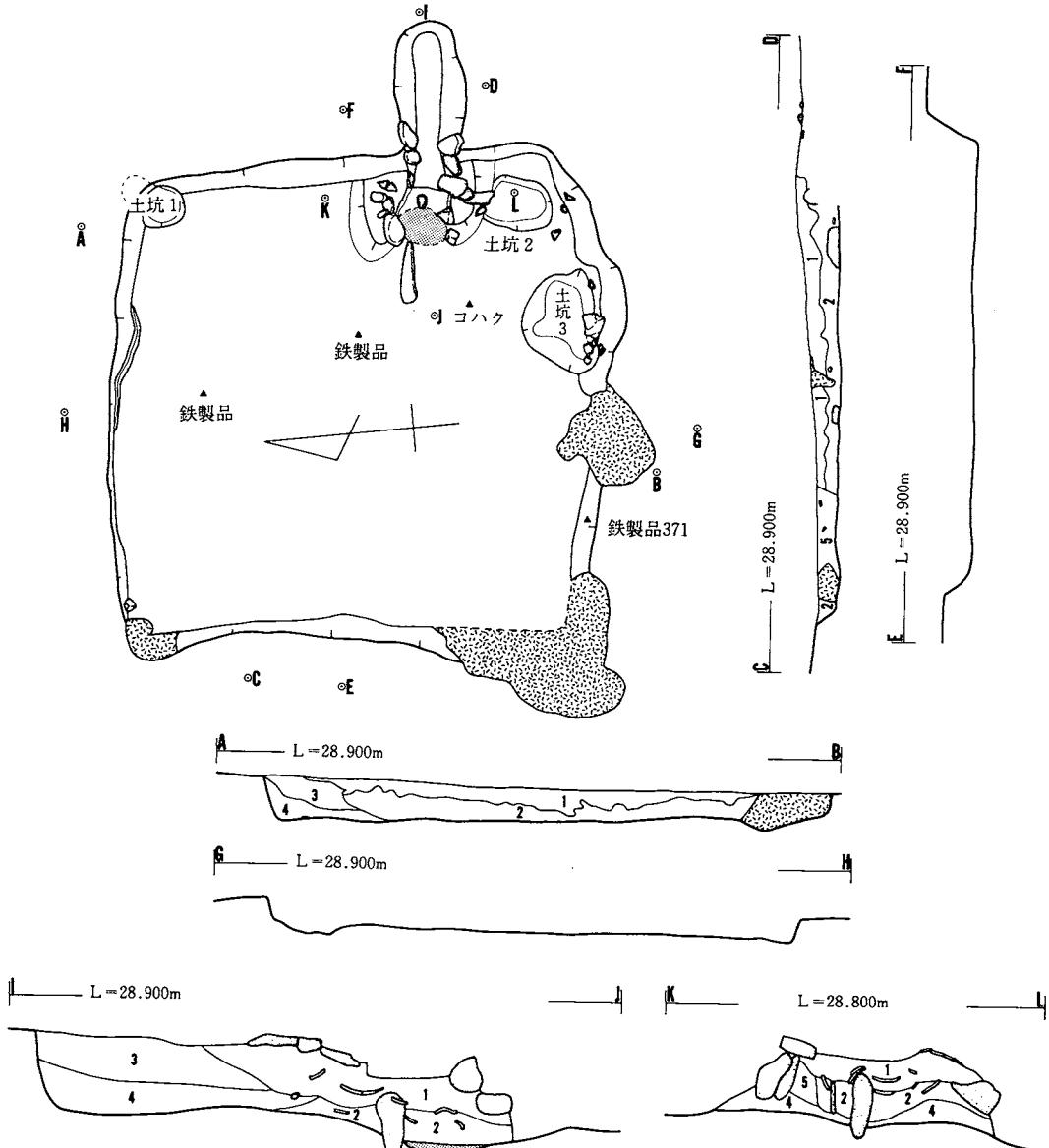
土坑3は南壁東寄りに位置する。平面形は不整形であり、規模は開口部径82×58cm、深さ20cmである。埋土は黒褐色～暗褐色土で炭や焼土粒を含む。甕(358)が出土している。

〈カマド〉 東壁中央から南寄りに構築されており、総長約2m、壁外1.2mである。カマドの長軸方向はE-5°-Sである。

本体部の残存状況は良好であり、粒径10～30cm大の亜角礫を多用している。燃焼部焼土は径34×29cmの範囲に形成され、厚さ4cmである。25×11×5cmの亜角礫を柱状に埋設して支脚にしている。

煙道は壁付近が20°位の上り勾配であるほかは、ほぼ水平である。煙出口は垂直に立ち上がる。埋土には焼土粒や炭が含まれる。

〈時期〉 出土遺物から平安時代である。



M23住居跡 A-B C-D

1. 10YR 2/2 黒褐色 シルト質、堅くしまる、褐色土含む。
2. 10YR 3/3~3/4 暗褐色 シルト質、1よりしまりない
3. 10YR 4/6 褐色 シルト質、堅くしまる、1が混入。
4. 10YR 4/4~4/6 褐色 シルト質、堅くしまる。
5. 10YR 3/3 暗褐色 堅くしまる、炭を微量に含む。

M23住居跡 I-J K-L

1. 10YR 3/4 暗褐色 シルト質、黒色土を含む。
2. 10YR 4/3 暗褐色 シルト質、焼土粒・土器片を含む。
3. 10YR 4/6 褐色 堅くしまる、焼土粒・炭を含む。
4. 10YR 2/3 黒褐色 堅くしまる、炭・黄褐色土を含む。
5. 7.5YR 3/4 暗褐色 粘性しまりなし、焼けている。

第103図 M23住居跡（遺構）

遺物（第104～107図、写真図版84～87）

出土遺物は土師器、土製品、鉄器、石器で構成される。

349・350はロクロ使用の壺である。349は床面、350は土坑1から出土している。349はほぼ完形である。器面調整は外面はロクロナデ、内面はロクロナデ後雑なヘラミガキで黒色処理されている。底部切り離しは回転糸切りである。胎土に粒径7mmと14mmの小礫2個がみられる。350は底部付近である。底部切り離しは回転糸切りである。内面は放射状のヘラミガキ調整で黒色処理されている。底部外面全体には黒い付着物がみられる。

351・352は高台付壺の口縁部と底部の破片である。ともに内面は黒色処理されており、土坑1から出土している。

353～365は甕である。353はロクロ調整、その他はロクロ不使用である。

353は甕で体部下位を欠く。頸部に括れを持ち、短い口縁部は外傾し、口唇部は上方に挽き出されている。体部中央付近が緩く脹らむ。中央やや下位に直径9mmの小円孔がある。この小円孔は焼成後内外両面からあけられており、二次的に注口部を作り出して使用していたことが考えられる。また、餌の可能性もある。外面の器面調整は、頸部付近は回転ヘラケズリ、その他は縦方向の手持ヘラケズリである。

354は甕で3分の1を欠く。頸部が僅かに括れ、短い口縁部は外反する。口縁部に最大径を持ち、肩部付近から緩やかに窄む。底部径は大きく、下端は外側に張り出し、外面に木葉痕がある。器面調整は外面はヘラケズリ、内面はヘラナデである。

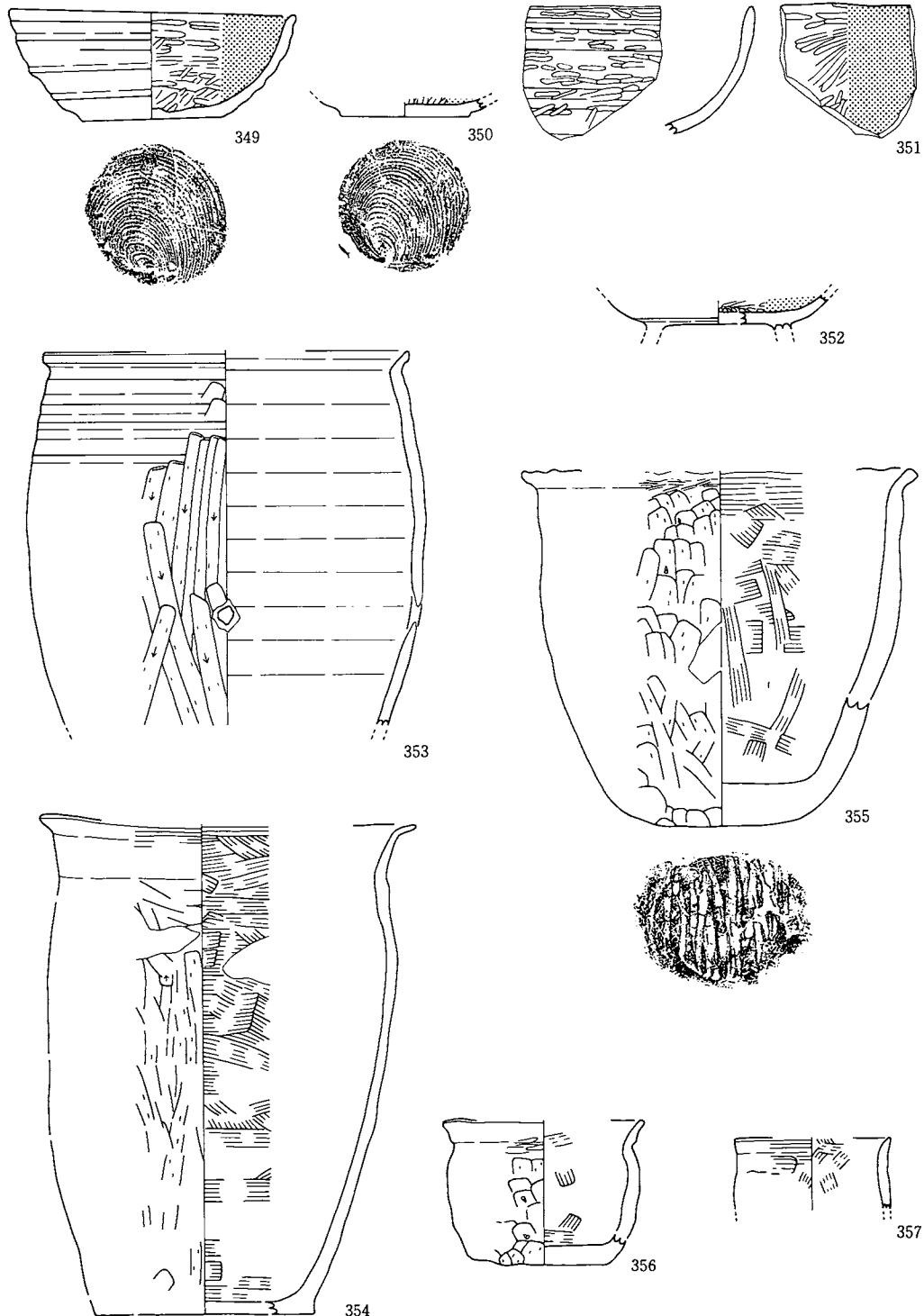
355は甕で3分の1を欠く。短い口縁部は外傾し、口唇部は指頭押圧により小波状を呈する。体部の脹らみは弱く、底部は丸底気味であり、外面には丸味のあるケズリがみられる。体部の器面調整は外面はヘラケズリ、内面はナデである。胎土には1cm前後の小礫を含み、厚手の土師器である。

356は小型の甕で2分の1を欠く。頸部が僅かに括れ、短い口縁部は外傾する。底径が大きく、体部の脹らみは弱い。体部外面がヘラケズリ調整である以外は指頭押圧主体である。胎土には5mm前後の小礫を含み、厚手の土師器である。

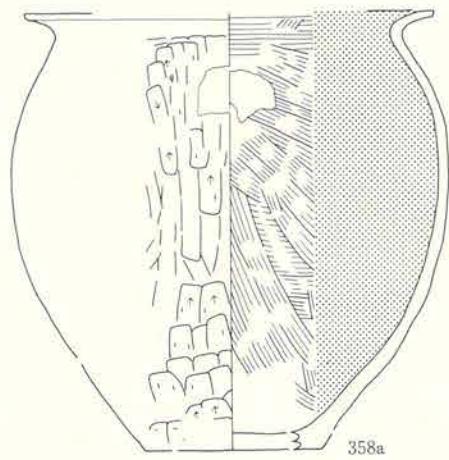
357は小型の甕の口縁部破片である。短い口縁部は直立気味であり、内外面に煤が付着している。

358は球胴甕で体部上半の2分の1を欠く。頸部は括れ、口縁部は強く外反し、口唇部は両端が角張る。体部中央やや上に最大径を持ち、底部下端まで窄む。器面調整は外面はヘラケズリ、内面は雑なヘラナデである。内面は黒色処理されている。体部中央より上に補修孔が8個ある。大きさは外面が2.7～3.6mm、内面が1.6～2.4mmであり、外面から穿孔されている。

359は球胴甕の上半である。頸部が括れ、口縁部は外反し、口唇部は両端が角張る。器面調整



第104図 M23住居跡（遺物 1）



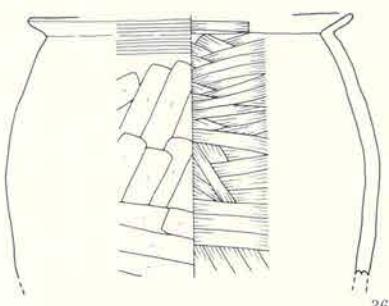
358a



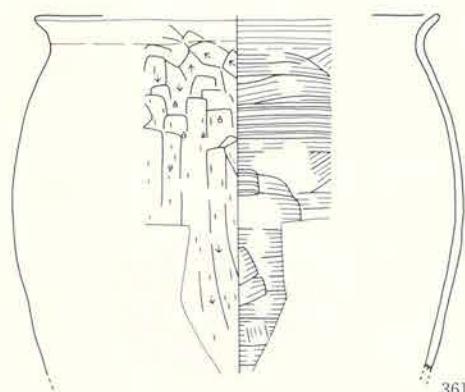
358b



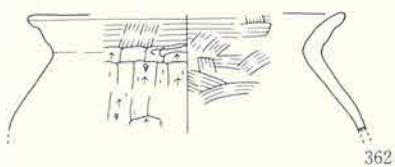
359



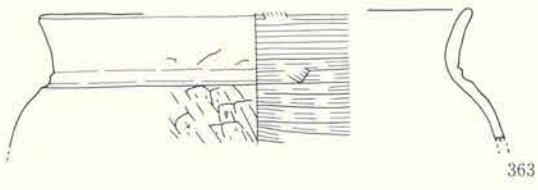
360



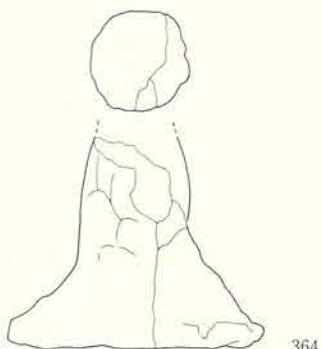
361



362

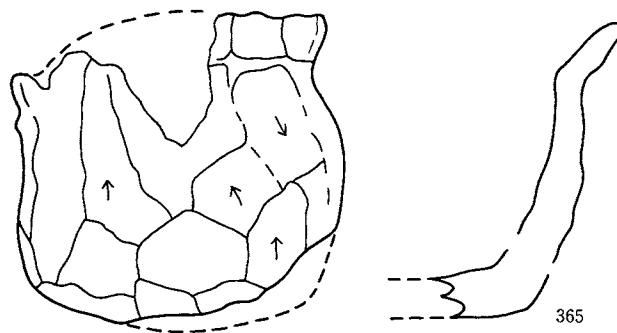


363

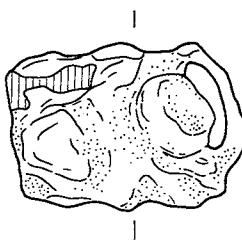
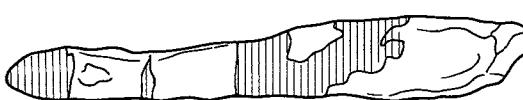
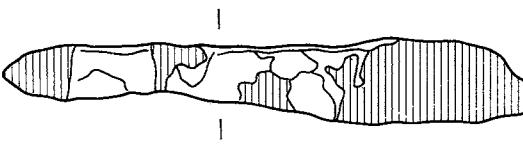
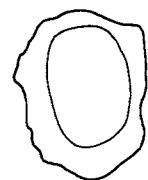
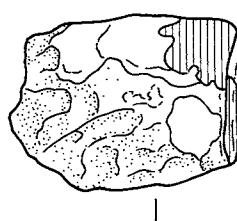
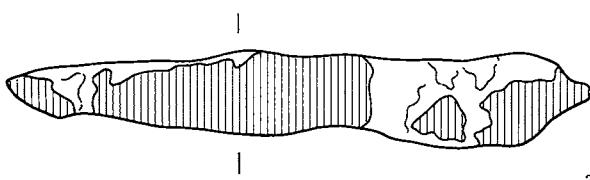


364

第105図 M23住居跡（遺物2）



366



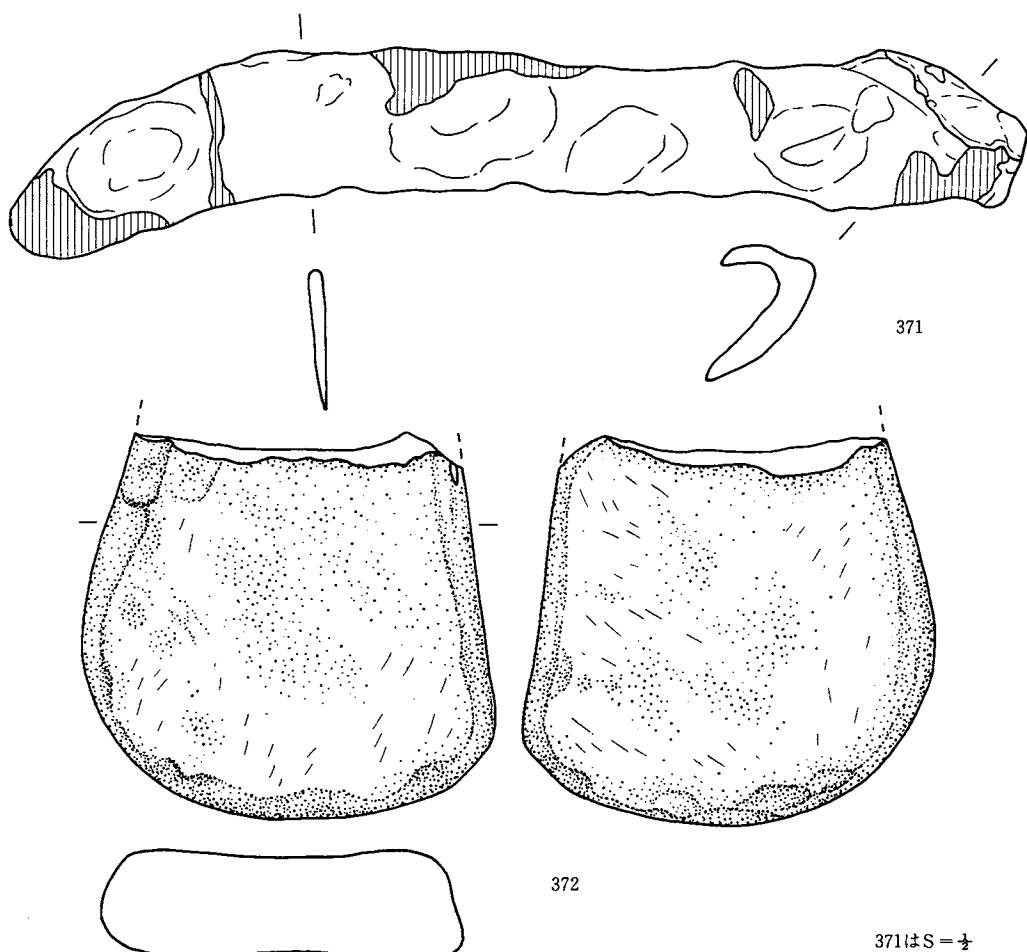
第106図 M23住居跡（遺物 3）

は、口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は外面はヘラケズリ、内面はヘラナデである。胎土に2～5mmの小礫を含む。

360は球胴甕の上半付近である。頸部が括れ、短い口縁部は外反する。最大径を体部中央付近に持つ。器面調整は、外面はナデ状のヘラケズリで未調整部分を残し、内面は強いヘラナデである。胎土に2～5mmの小礫を含む。

361は球胴甕の体部上半付近である。頸部が括れ、短い口縁部は外反気味である。最大径を体部中央付近に持つ。器面調整は外面はヘラケズリ、内面はヘラナデである。胎土に砂や小礫を含み、薄手の土師器である。

362は球胴甕の口縁部付近である。頸部が括れ、口縁部は外反する。器面調整は外面はヘラケズリ、内面はヘラナデである。胎土に砂と小礫を含む。



第107図 M23住居跡（遺物4）

363は球胴甕の口縁部付近である。頸部が括れ、口縁部は外傾する。器面調整は、口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は外面ヘラケズリ、内面はヘラナデである。胎土に2～4mmの小礫を含む。

364は土製支脚の下半である。床面から出土したものが、M25土坑埋土下位から出土したものと接合している。棒状で底部は広がる。指頭押圧痕が残る。底部径は10.3×9.8cm、残存する器高は8.5cmである。

365は甕のミニチュアで2分の1を欠く。器高は4.2cmである。外面はヘラケズリ調整である。土坑2の埋土から出土している。

366は土製の耳栓である。全体的に筒状であり、中央部が括れている。長さは14.6mm、直径は中央部で7.6mmである。土坑2の埋土から出土している。

367～371は鉄製品である。

367は刀子の身である。長さ7.7cm、身幅1.2cm、棟の厚さ3mmである。床面出土である。

368は刀子の身である。長さ7cm、身幅1.1cm、棟の厚さ2.5mmである。土坑1出土である。

369・370は環状鉄製品であり、刀子の柄の縁金と思われる。断面形は橢円形であり、内径は369が1.6×1.1cm、370が1.4×0.8cmである。ともに床面出土である。

371は鎌である。全長27.6cm、最大刃部幅3.8cm、背の厚さ4.5mm、重量152gである。真直に伸びた身が先端部で刃部に向って緩く屈曲している。背を上、刃を下、先端を左に向けて身を置くと、基部は手前に大きく折り曲げられている。関は明瞭であり、直刃に近い。南壁中位に接する状態で出土している。

372は砥石である。石質は硬砂岩であり、両面を砥面として使用しており、凹んでいる。砥粒の粗い置砥石である。埋土からの出土である。

#### M24住居跡（第108図、写真図版45）

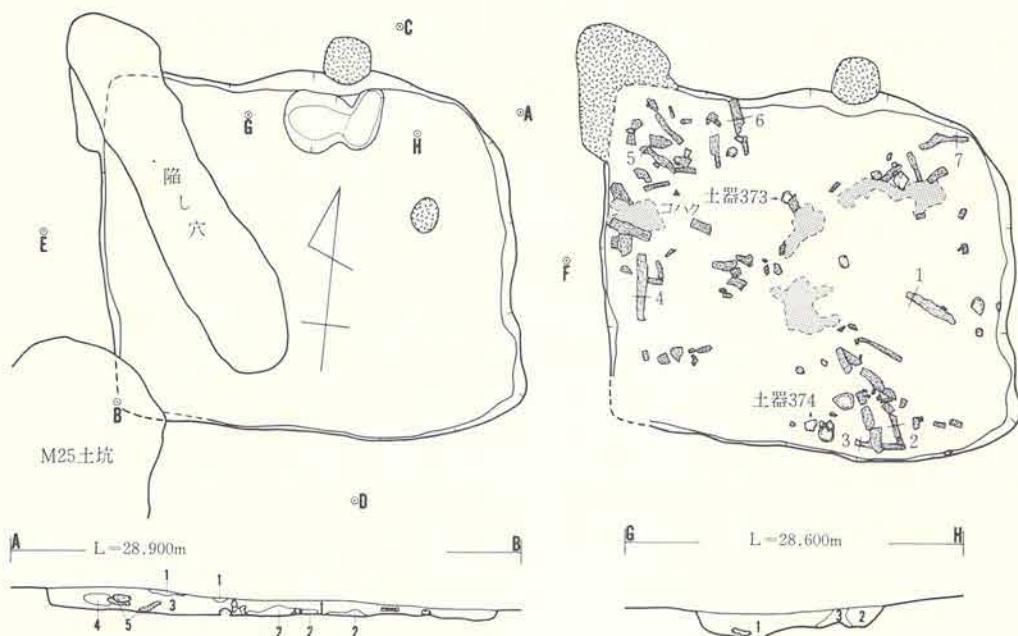
調査区の中央部に位置し、M23住居跡とL25住居跡の間にある。M23住居跡との間は最小60cmである。表土除去の段階で焼土粒が散布していたが、平面形は全く不明であった。調査中に多くの炭化材や焼土が出土し、焼失住居跡であることが判明した。南西隅はM25土坑に切られている。また西側の床面でM24陥し穴状遺構を検出している。

〈占地〉ほぼ平坦な地形面を占地しているが、東から西に僅かに傾く。比高差は20cmである。

〈平面形・規模〉 平面形は隅丸長方形である。規模は東西方向が3.34m、南北方向が2.88mである。床面積は8.3m<sup>2</sup>である。

〈埋土〉 埋土は5層に細分される。上位は黒褐色土、下位は褐色土主体である。

〈壁〉上部が削平されているため残存状況は不良である。北壁～東壁は比較的急傾斜である。

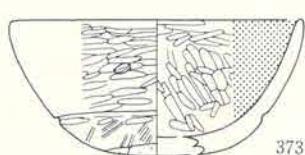
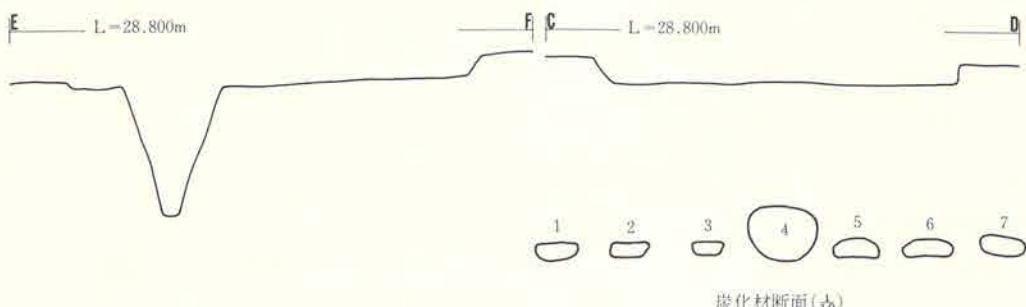


M24住居跡 A-B

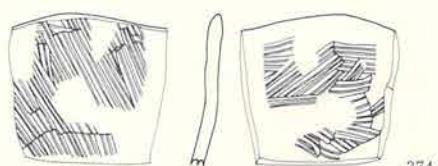
1. 10YR 2/2 黒褐色 堅くしまる、焼土粒・炭を含む。
2. 10YR 4/6 褐 色 堅くしまる、焼土粒・炭を含む。
3. 10YR 3/3 暗褐色 やや堅くしまる、焼土粒・炭を含む。
4. 10YR 4/4 褐 色 やや堅くしまる、焼土粒を含む。
5. 5YR 4/8 赤褐色 焼土、軟らかい、褐色土との混合。

M24住居跡 G-H

1. 10YR 3/3 暗褐色 焼土粒・炭を含む。
2. 10YR 5/6 黄褐色 黒褐色土混入。
3. 10YR 4/6 褐 色 シルト質。



373



374

第108図 M24住居跡 (遺構・遺物)

壁高は北壁18cm、東壁17cm、南壁14cm、西壁7cmである。

〈炭化材・焼土〉 中央部以外の焼土は炭化材に伴うもので埋土下位～床上に形成され、厚さは3～7cmで炭化材を被う部分が多い。図示した範囲は炭化材を優先しているので実際より狭い。

炭化材は床面全体に分布し、中央部に向って放射状に散布するものが多い。断面形をみると割材主体で幅が10～14cm、厚さ4～6cmのものが多い。樹種鑑定の結果は7点とも栗であるが、7にはナラも含まれている。

〈床〉 床面は、地山VI層上面で比較的堅くしまっているが、中央付近を中心に耕作で攪乱され、凹凸がある。貼り床はみられない。柱穴は検出していない。

〈カマド〉 検出されていないが、北壁中央付近に焼土粒を含む攪乱箇所があることから、削平された可能性がある。

〈時期〉 出土遺物から奈良時代である。

#### 遺物（第108図、写真図版87）

373はロクロ不使用の壺で底部付近を欠く。内外面とも丸底氣味で口縁部まで内彎氣味に立ち上がる。体部外面下位に僅かな段がある。器面調整は内外面ともヘラミガキ主体であり、底部外面はヘラケズリである。内面は黒色処理されている。体部外面に種子痕（鑑定はしていない）が1個みられる。

374はロクロ不使用の甕の口縁部破片である。頸部に括れはなく、体部上半から直立する。器面調整は内外面とも刷毛目である。2点とも埋土出土である。

#### （3）焼土遺構（第109図、写真図版42）

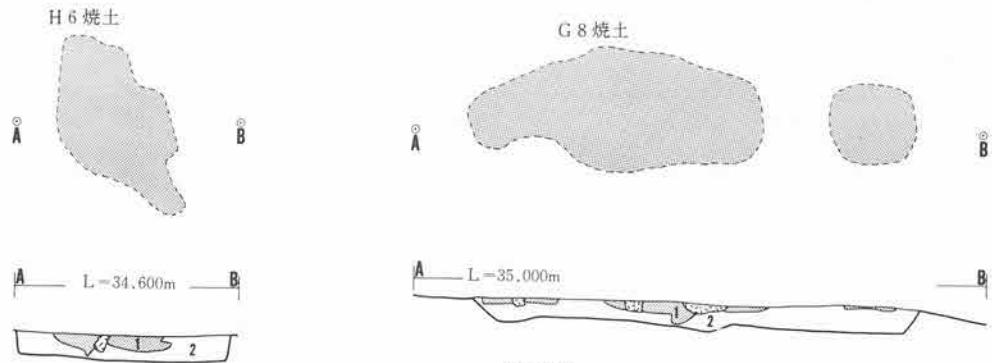
地形区別にみると、A区で4箇所、B区で2箇所、合計6箇所で検出された。検出面が住居跡と同じであり、遺構の時期は奈良～平安時代である。

#### H 6 焼土遺構

調査区の北東部に位置し、J 9住居跡の北1m付近にある。焼土は83×53cmの範囲に形成されている。厚さは5cm前後で良く焼けている。出土遺物はないが、周辺の遺物から奈良時代と推定される。

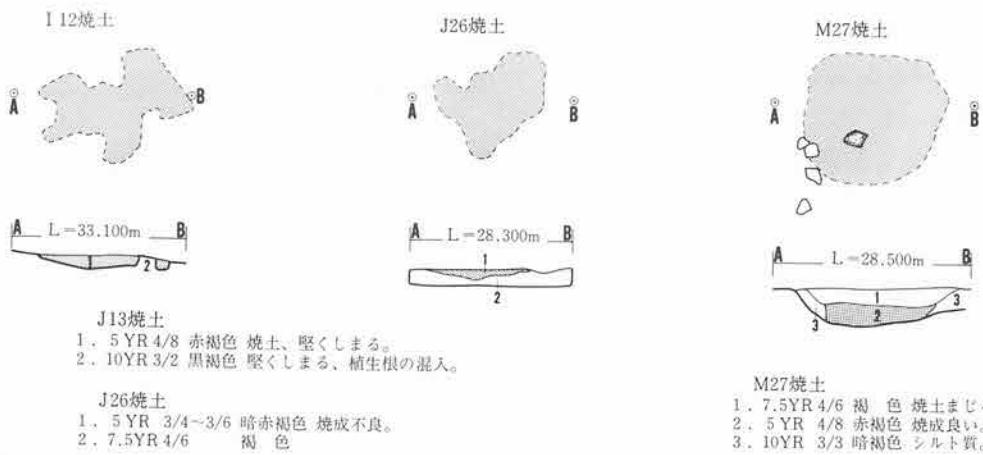
#### G 8 焼土遺構

調査区の北東部に位置し、H 9住居跡の北6m付近にある。焼土は118×49cmと34×31cmの範囲に形成されている。厚さは中央付近で5cm前後である。住居跡に伴う可能性を考えて周辺を

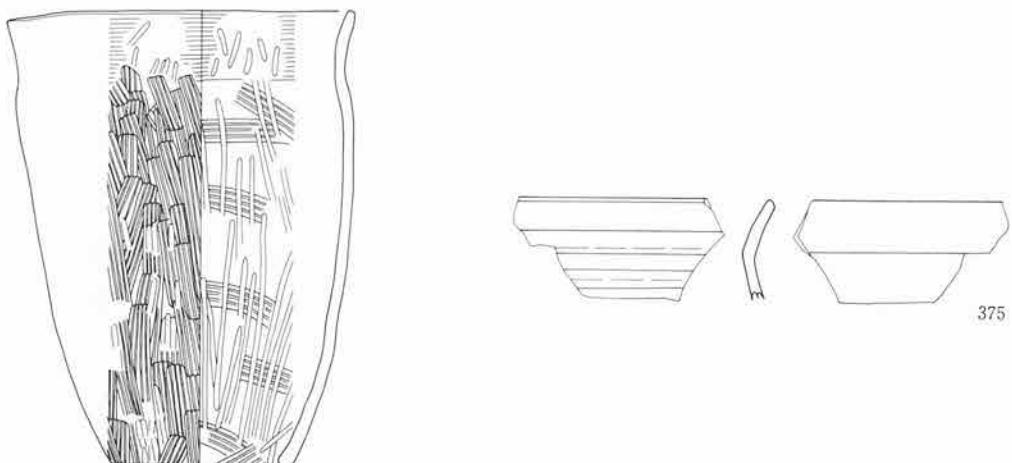


H 6 焼土  
1. 5 YR 4/6 赤褐色 焼土、厚さ最大 6 cm。  
2. 10YR 2/2 黒褐色 ややしまる。火山灰微量混じる。

G 8 焼土  
1. 5 YR 4/8 赤褐色 焼土。  
2. 10YR 5/4 にぶい黄褐色 M層、よごれている。



参考資料 (410)



375

第109図 焼土遺構（遺構・遺物）

精査したが住居跡の手掛かりは得られなかった。出土遺物はないが、近くから奈良時代の甕（410）や甕（412）が出土していることから奈良時代と推定される。

#### I 12焼土遺構

調査区の北東部に位置し、J 12住居跡の西に近接するが、J 12住居跡に伴うものとは思われない。焼土は最大径60cmの範囲に形成され、厚さは5cmである。出土遺物はないが南方1m付近には平安時代の甕の破片が多いことから平安時代と推定される。

#### K 14焼土遺構

調査区の北東部に位置し、J 13住居跡のカマドの南3.4m付近にある。焼土は径25×13cmと14×8cmの範囲に形成されているが、厚さは1cmと薄く、断面実測と写真撮影を省略した。J 13住居跡の床面より50cmほど低いことから住居跡に伴うものとは考えられない。

#### J 26焼土遺構

調査区の中央部に位置し、J 24住居跡の南西3.5m付近にある。焼土は径42×36cmの範囲に形成されているが、焼成は不良である。出土遺物はなく時期は特定できないが、周辺では奈良時代の遺物がみられる。

#### M27焼土遺構（第109図、写真図版67）

調査区の中央部に位置し、L 25住居跡の南1m付近にある。焼土は径56×52cmの範囲で厚さは7cmあり、浅皿状の凹地に形成され良く焼けている。出土遺物はロクロ使用の土師器の甕の口縁部付近である。頸部に括れを持ち、口縁部は外傾する。（第109図—375、写真図版67—375）遺構の時期は平安時代である。

#### (4) 円形周溝

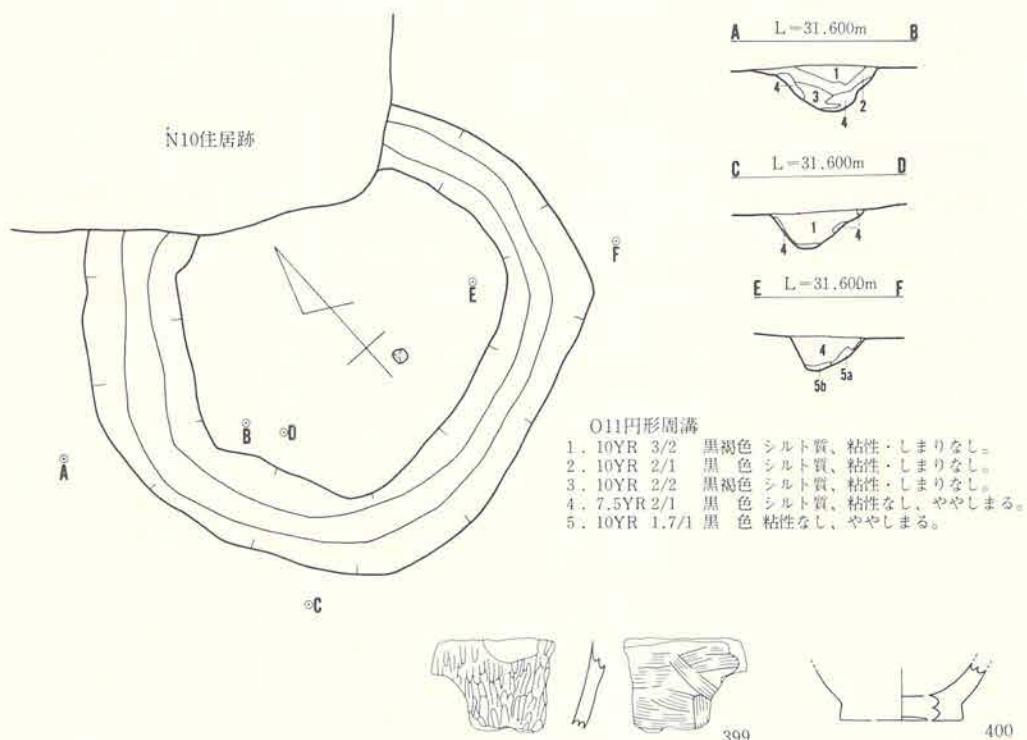
##### O 11円形周溝 (第110図、写真図版46)

調査区の北東部に位置し、N10・Q11・P12の住居跡の間にある。北側はN10住居跡に切られている。ほぼ平坦な地形面に掘り込まれており、平面形は円形を呈し、外径は東西方向396cm、南北方向が370cm(推定)である。断面形は底面が丸底気味で壁は40°～70°の勾配で立ち上がる。壁や底面は黒色土中にあり、幅は開口部で50～80cm、底部で15～30cmである。深さは25～45cmであり、全体的に東側が深い。

埋土は5層に細分される。全体的に黒色～黒褐色土で構成され、中位に部分的に焼土・炭・小礫が少量混じる。また、北側のN10住居跡近くではVI層起源の褐色土がみられる。出土遺物はロクロ不使用の土師器である。(第110図—399・400、写真図版88—399・400)

399は甕の体部破片である。外面のミガキ調整は強くM13住居跡出土の甕(307)の破片である。400は甕の底部である。下端の張り出しが弱く、外面に種子痕跡が3個ある。

遺構の時期は切り合い関係や出土遺物から奈良時代である。同じような遺構が南方2kmにある中長内遺跡で2基検出されており、R F502円形周溝状遺構は外径483×444cm、幅44～66cm、深さ26～36cmであり、平安時代の住居跡に切られている。



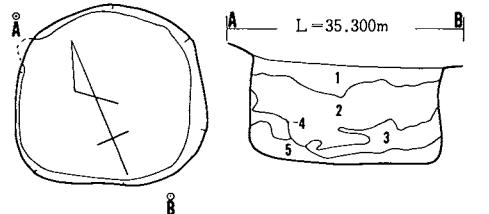
第110図 円形周溝 (遺構・遺物)

## (5) 土坑

地形区別にみると、A区で21基、B区で3基、合計24基検出された。時期は奈良～平安時代のものと平安時代以降であるが特定できないものとがある。

### E 10土坑（第111図、写真図版47）

調査区の北東部に位置し、E 10住居跡の床面の下で検出された。平面形は隅丸長方形に近い。規模は、開口部径152×142cm、底部径136×134cm、深さは中心部で82cmである。断面形はビーカー状を呈し、壁は直立気味で崩落は少ない。底面はVII層上面に達し、南西半が5～10cmほど低い。埋土は5層に細別され、全体的にしまりのない暗褐色土が多い。出土遺物はないが、時期は奈良時代であり、E 10住居跡よりは古いものと思われる。



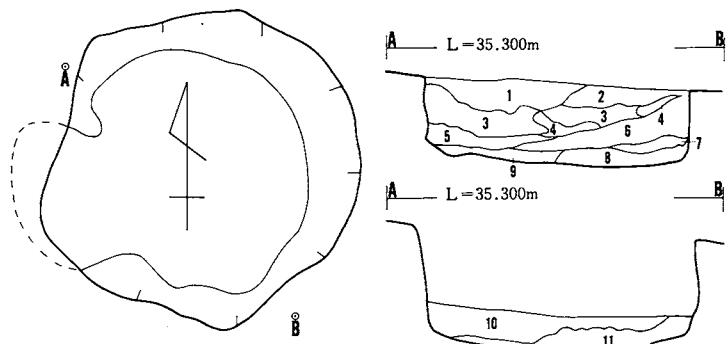
1. 10YR 3/3 暗褐色 粘りともない。
2. 10YR 3/3 暗褐色 1に黒褐色と黄褐色ブロック少量まじる。
3. 10YR 3/2 黒褐色しまりなくくずれやすい、粘性ややある。
4. 7.5YR 3/3 暗褐色 2より黄褐色ブロック多い。
5. 10YR 3/4 暗褐色しまりなくもろい、粘性ややある。

第111図 E10土坑

### F 10-1 土坑（第112図、写真図版47）

調査区の北東部に位置し、E 10住居跡とG 12住居跡の間で検出された。当初はフラスコ形土坑との重複遺構と考えられたが、調査の結果は底部西隅に副穴のある単一土坑である。また、南壁付近を精査中にF 11陥し穴状遺構が検出された。

平面形は不整形な円形である。規模は、開口部径256×246cm、底部径186×180cm、深さは中心部で94cmである。断面形は



1. 10YR 3/4 暗褐色 白頭山と十和田a火山灰が少量点在する。
2. 10YR 4/4 褐色 火山灰は1より少ない。
3. 10YR 4/4 褐色 2に近いが黒褐色少量まじる。
4. 10YR 3/4 暗褐色 十和田a火山灰のブロック入いる。
5. 7.5YR 3/4 暗褐色 炭化物・焼土少量まじる。
6. 10YR 3/4 暗褐色 褐色のブロックがまじる。
7. 10YR 3/4 暗褐色
8. 10YR 4/4 褐色 VI層上部起源の大きいブロックでややしまる。
9. 10YR 4/4 褐色 8の汚れたもの。
10. 10YR 5/6 黄褐色 大きいブロックからなる人為的埋めもどし層。
11. 10YR 4/4 褐色 暗褐色とのブロックからなる混土。

第112図 F10-1 土坑

ビーカー状を呈し、西壁以外は下半は直立し、上半で僅かに外反気味になる。底面は全体的に平坦で堅くしまり、西隅には橢円形(120×80cm)の副穴があり、20~30cmほど深くなっている。埋土は11層に細分され、中位で暗褐色土が多いほかは全体的に褐色土が多い。特に、下位はVI層起源の人為的埋め戻し層であり、貼り床をして再利用された可能性がある。また、上位~中位の埋土には白頭山火山灰や十和田a降下火山灰と思われる小ブロックが僅かにみられるほか、北壁直下の埋土中位では焼土が多く投げ込まれている。

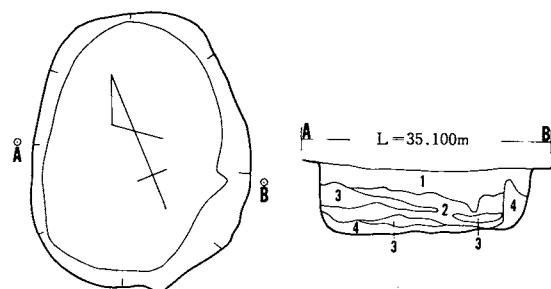
出土遺物は土師器の破片(写真図版87-376a~c)がある。胎土に小石を含む明赤褐色の同一個体の破片であり、埋土上位からの出土である。器面調整は極めて雑である。

遺構の時期は、埋土の特徴から奈良時代と思われる。

#### F 10-2 土坑 (第113図、写真図版47)

調査区の北東部に位置し、E 10住居跡の床面の下からE 10土坑とともに検出された。E 10土坑の東にあり、70cm離れている。平面形は橢円形である。規模は、開口部径220×174cm、底部径198×136cm、深さは中心部で54cmである。断面形はビーカー状を呈し、壁は直立~やや外傾気味である。

底面はVI層とVII層の境界付近であり、礫が多くなるため小さな凹凸があり、やや軟質である。埋土は4層に細分され、上位から暗褐色、黒褐色、褐色、黄褐色の土層である。褐色土は人為的な埋め戻し層である。出土遺物はないが、時期はE 10住居跡より古く、奈良時代であろう。



- 1. 10YR 3/4 暗褐色 しまりないが粘性ややある。
- 2. 10YR 3/2 黒褐色 1に黒色土まじる。
- 3. 10YR 4/4 褐色 やや粘性のある黄褐色ブロック。
- 4. 10YR 5/6 黄褐色 粘性ある、壁下位の土。

第113図 F 10-2 土坑

#### F 11土坑 (第114図、写真図版47)

調査区の北東部に位置し、G 12住居跡の北壁付近の北側で検出され、住居跡との間は最小40cmである。また、この土坑の東壁付近は住居跡のカマドの煙道部と重複していることが予想された。調査の結果、土坑の底部が煙道下底部を切っているが、平面形は煙道完掘後に実測した。

平面形は円形である。規模は、開口部径148×(170)cm、底部径130×130cm、深さは中心部で64cmである。断面形は鉢状を呈し、壁は外傾する。底面は平坦であり、比較的堅い。また、東壁直下の底面が、F 11陥し穴状遺構の西端に約40cmほど切っている。

埋土は2層に大別されるが、上層の褐色土の中央部には十和田a降下火山灰又は白頭山火山灰を含む小ブロックがみられる。出土遺物はなく時期の特定はできないが、G12住居跡より新しく奈良時代～平安時代であろう。

#### F13土坑（第115図、写真図版48）

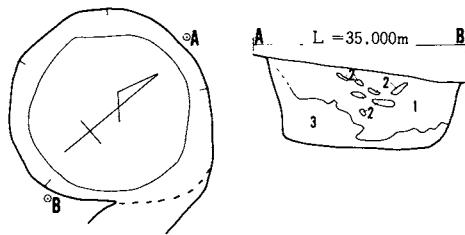
調査区の北東部に位置し、G12住居跡とE13住居跡の間で検出された。この遺構はE13住居跡を精査した際に、南東隅付近で壁の立ち上がりが分かりにくく掘り過ぎた部分にあたり、開口部の西側は一部住居跡に切られていたものと思われる。平面形は不整形な楕円形である。規模は開口部径148×132cm、底部径124×98cm、検出面からの深さは98cmである。断面形はビーカー状を呈し開口部がやや開き、壁は直立気味である。底面はVI層最下位面にあり、比較的堅く平坦である。

埋土は6層に細分される。上位は褐色と暗褐色の混土で白頭山火山灰と思われるブロックが混じる。中位はVI層起源の堅くしまる明黄褐色土で埋め戻し層である。下位は壁崩落土とVI層の混土である。

出土遺物は埋土上位から出土した縄文時代早期の土器片（写真図版87—377）と土師器のロクロ不使用の甕の破片（写真版87—378a～l）である。

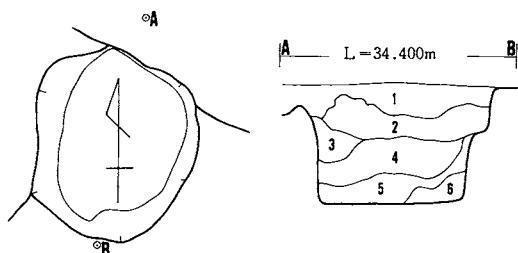
377は深鉢の口縁部片であり、貝殻腹縁押し引き文と刺穴文が施文されており、口唇部には絡条体圧痕がみられる。

378a～cは同一個体の破片である。器面調整は、外面はヘラケズリ、内面はヘラナデである。胎土に小石を含む。d～kは同一個体の破片である。外面の器面調整はヘラミガキである。lは小形の甕の破片であり、外面の器面調整はヘラミ

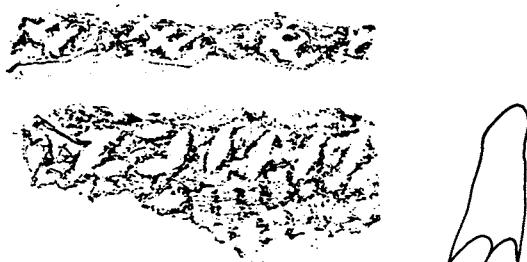


1. 2.5YR 4/4 褐色 下位はやや黒味が強い
2. 10YR 3/2～3/3 黒褐色～暗褐色十和田a火山灰主体の  
小ブロックがはいる。
3. 7.5YR 5/6 明褐色 1よりも汚れが少ない。

第114図 F11土坑



1. 10YR 4/4 褐色 IV層、粘性しまりともない。
2. 10YR 4/4～3/4 褐色～暗褐色 褐色と暗褐色の混土。  
白頭山火山灰？のブロック少量みられる。
3. 2よりも褐色の割合が少ない。
4. 10YR 6/6 明黄褐色 がたくしまる、人為的埋めもどし層。
5. 10YR 3/4 暗褐色 IV層とVI層の混土、しまりなくもろい。
6. 10YR 4/4 VI層の壁崩落土、しまりなくもろい。



第115図 F13土坑

ガキで、内面は黒色処理されている。

遺構の時期は、住居跡との重複関係や埋土の特徴から奈良時代と思われる。

#### H13土坑（第116図、写真図版48）

調査区の北東部に位置し、G12、G15、J13住居跡の間にある。平面形は楕円形である。規模は、開口部径182×132cm、底部径152×108cm、深さは中心部で40cmである。断面形は鉢状を呈し、壁は外傾する。底面はVI層上面であり、地山に沿って北から南に傾き、比高差は最大16cmである。

埋土は上位は暗褐色土、下位は褐色土である。検出面近くには白頭山火山灰の小ブロックが混じる。

出土遺物は土師器のロクロ不使用の甕の破片（写真図版87-379a～g）である。いずれも胎土に小石をあまり含まず、外面調整はヘラミガキ主体である。遺構の時期は、埋土や出土遺物から奈良時代である。

#### M26土坑（第117図、写真図版48）

調査区の中央部に位置し、L25住居跡の南60cm付近にある。平面形は円形である。規模は、開口部径136×126cm、底部径114×112cm、深さは中心部で26cmである。断面形は浅いがビーカー状を呈し、壁の立ち上がりは直立気味である。底面はIV層下位面で凹凸が若干ある。

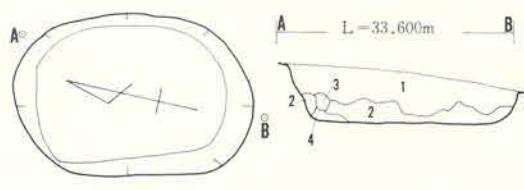
埋土は5層に細分され、上位と下位は暗褐色土、中位は黒褐色土、壁際は褐色土である。

出土遺物は埋土から出土したロクロ不使用の土師器の破片（写真図版87-380

a・b）である。

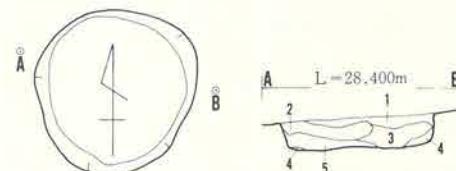
aは壺の体部破片で外面に段がある。内外面ともヘラミガキ調整であり、内面は黒色処理されている。

bは甕の体部破片である。胎土に粗い



1. 10YR 3/4 暗褐色 IV層とV層の混土、火山灰少量まじる。
2. 10YR 4/4 褐色 壁崩落土に1がまじる、ややしまる。
3. 10YR 3/4 暗褐色 1と2の混土。
4. 10YR 4/6 褐色 壁崩落土、粘性ややある。

第116図 H13土坑



1. 10YR 3/3 暗褐色 黒褐色ブロックはある。
2. 10YR 3/2 黒褐色 黒褐色ブロックはある。
3. 10YR 3/4 黒褐色 ややしまりシルト質。
4. 10YR 4/4 褐色 IV層の混土、シルト質。
5. 10YR 3/3-3/4 暗褐色 IV層起源、シルト質。

第117図 M26土坑

砂を含み、外面はヘラケズリ調整である。遺構の時期は出土遺物から奈良～平安時代である。

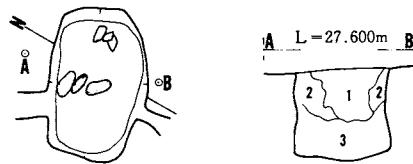
#### L 28土坑（第118図、写真図版48）

調査区の中央部に位置し、L 28住居跡の東壁際で検出された。平面形は隅丸長方形である。規模は、開口部径 $120 \times 82\text{cm}$ 、底部径 $106 \times 66\text{cm}$ 、深さは中心部で $72\text{cm}$ である。断面形はビーカー状を呈し、壁はIV層～VII層まで掘り込まれ、直立して立ち上がる。底面はVII層上面であり、礫混じりで堅く、中央部が僅かに窪む。中央部と東側に亜角礫が3個ずつある。

埋土は3層に細分される。上位は暗褐色土（IV層）、下位は黄褐色浮石混じりの黒褐色土である。

出土遺物は埋土から出土したロクロ不使用の土器の破片（写真図版87-381a～c）である。

aは甕の体部破片で胎土に小石を含み、内外ともヘラナデ調整である。cは外面はヘラミガキ調整である。遺構の時期は平安時代の住居跡に切られていることから奈良時代である。

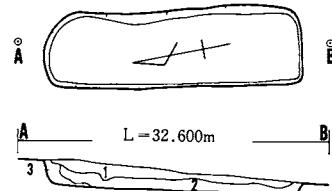


1. 10YR 3/4 暗褐色 粘性しまりともない。
2. 10YR 3/3 暗褐色 1に類似。
3. 10YR 3/2 黒褐色 IV～VI層の混土。

第118図 L 28土坑

#### N 6 土坑（第119図、写真図版49）

調査区の北東部に位置し、N 7住居跡の北2m付近にある。平面形は長方形であり、長軸方向はN-9°-Eである。規模は、開口部径 $306 \times 98\text{cm}$ 、底部径 $286 \times 84\text{cm}$ 、深さは中心部で $18\text{cm}$ である。断面形は皿状を呈し、壁は40°位の勾配で立ち上がる。底面は暗褐色土中にあり、凹凸が多く西から東に傾く。比高差は $25\text{cm}$ である。壁際に木根による攪乱がある。埋土は3層に細分され、上位はやや粘性のある黒色土、下位は暗褐色のシルト質土である。出土遺物はなく、時期の特定はできない。



1. 10YR 2/1 黒色 粘性あり。
2. 10YR 3/4 暗褐色 シルト質。
3. 10YR 1.7/1 黒色 やや堅い。

第119図 N 6 土坑

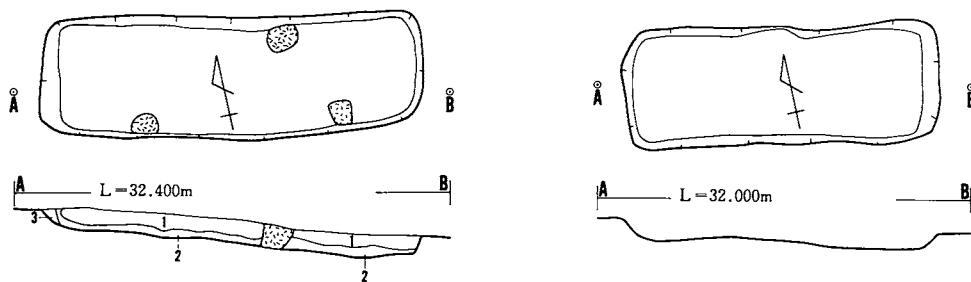
#### M 7 土坑（第120図、写真図版49）

調査区の北東部に位置し、N 7住居跡の北隅の西1.2m付近にある。平面形は長方形基調で北東隅は丸い。長軸方向はN-81°-Wである。規模は、開口部径 $206 \times 63\text{cm}$ 、底部径 $200 \times 54\text{cm}$ 、深さは中心部で $17\text{cm}$ である。断面形は皿状を呈し、壁は60°前後の勾配で立ち上がる。底面は黒色土中にあり、平坦である。

埋土は3層に細分され、上位はやや粘性のある黒色土、下位は暗褐色のシルト質土である。出土遺物はなく、時期の特定はできないが、埋土はN 6・O 7 土坑と同じである。

#### O 7 土坑（第121図、写真図版49）

調査区の北東部に位置し、N 7 住居跡の西壁を切っている。平面形は長方形であり、長軸方向はN-82°-Wである。規模は開口部径254×94cm、底部径232×92cm、深さは10~17cmである。断面形は皿状を呈し、壁は50~70°の勾配で立ち上がる。底面はVI層起源の黒色土中にあり、東半は10cmほど低い。埋土は暗褐色土を含む黒色土の単層（第66図—埋土断面C-D）であり、住居跡埋土との区別は明瞭である。出土遺物はなく時期の特定はできないが、切り合い関係から住居跡より新しい遺構である。



1. 10YR 2/1 黒色 やや粘性あり。
2. 10YR 3/2 暗褐色 シルト質。
3. 10YR 1.7/1 黒色 やや堅く粘性あり。

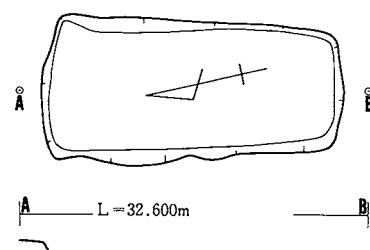
第121図 O 7 土坑

#### M 7 土坑（第120図、写真図版49）

#### M 9 土坑（第122図、写真図版49）

調査区の北東部に位置し、L 9 住居跡の中央付近で住居跡を切っている。平面形は長方形であり、長軸方向はN-12°-Eである。規模は、開口部径240×114cm、底部径230×94cm、深さは最大18cmである。断面形は皿状を呈し、壁の立ち上がりは僅かに認められる。底面はVI層の褐色土で、木根による小凹凸がある。

埋土は黒色土の単層（第74図—埋土断面C-D）であり、堅くしまる。出土遺物はなく時期の特定はできないが、切り合い関係から住居跡より新しい遺構である。

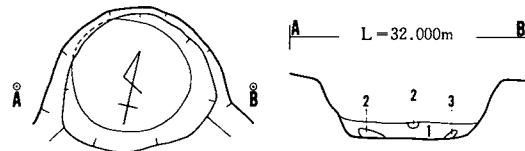


第122図 M 9 土坑

### N10土坑（第123図、写真図版49）

調査区の北東部に位置し、N10住居跡の北隅を切っている。平面形は円形に近い。規模は開口部径推定140cm、底部径 $96 \times 88$ cm、深さは中心部で47cmである。断面形は東西方向では鉢状を呈し、壁は60°位の勾配で立ち上がるが、西壁付近は内彎している。

埋土は焼土粒を含む黒色土が多く、部分的に褐色土が混じる。出土遺物はなく、時期の特定はできないが切り合い関係から住居跡より新しい遺構である。



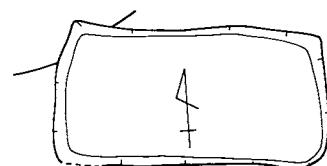
- 1. 10YR 2/1 黒 色 堅くしまる、焼土微量混入。
- 2. 10YR 4/4 褐 色 壁崩落土。
- 3. 10YR 4/6 褐 色 焼土粒50%混入。

第123図 N10土坑

### N11土坑（第124図）

調査区の北東部に位置し、M10住居跡の南壁の一部を切っている。遺構上位を試掘トレンチで欠く。平面形は長方形であり、長軸方向はN-84°-Wである。規模は、開口部径 $218 \times 110$ cm、底部径 $204 \times 98$ cm、深さは最大44cmである。壁は急傾斜で立ち上がる。底面はVI層の褐色土中にあり平坦で堅い。

埋土は褐色土ブロックの混じる黒褐色土の単層である。出土遺物はなく、時期の特定はできないが、切り合い関係から住居跡よりは新しい遺構である。

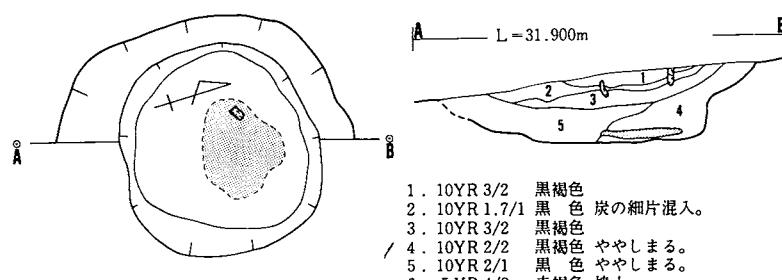


第124図 N11土坑

### N12土坑（第125図、写真図版50）

調査区の北東部に位置し、N10住居跡とN13住居跡の間にあら。東半は底部を僅かに残し、試掘トレンチで

上位を欠く。平面形は不整な円形である。規模は開口部は南北方向が216cm、底部径 $146 \times$



- 1. 10YR 3/2 黒褐色
- 2. 10YR 1.7/1 黒 色 炭の細片混入。
- 3. 10YR 3/2 黒褐色
- 4. 10YR 2/2 黒褐色 ややしまる。
- 5. 10YR 2/1 黒 色 ややしまる。
- 6. 5 YR 4/8 赤褐色 焼土。

第125図 N12土坑

138cm、深さは北壁際で57cmである。断面形は底部はビーカー状であるが、上位は開口部が大きく外反する。底面はVI層中にあり、平坦で堅くしまり、中央から北に焼土が径80×65cmの楕円形の範囲に分布する。埋土は6層に細分され、黒色土と黒褐色土が交互に堆積している。黒色土には炭の細片が混じる。床面付近には厚さ6cmの現地性焼土がみられる。

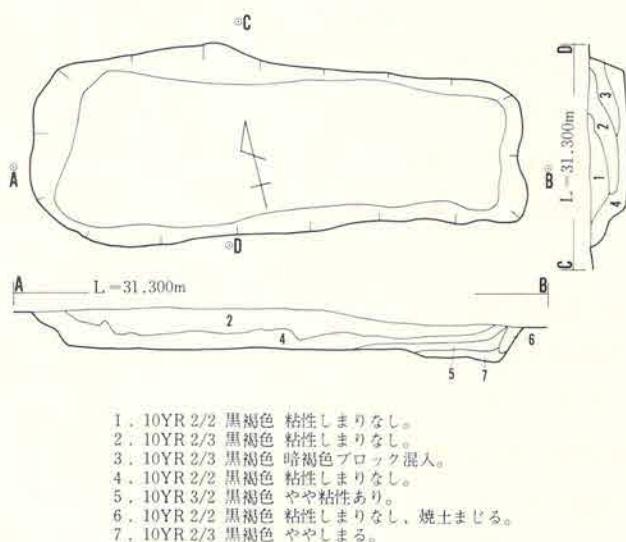
出土遺物はロクロ不使用の土師器の甕の破片（写真図版88—382）である。破片は頸部付近であり、器面調整は外面は刷毛目後ヘラミガキ、内面は刷毛目である。埋土から出土している。遺構の時期は出土遺物から奈良時代である。

#### P 13土坑（第126図、写真図版50）

調査区の北東部に位置し、Q14住居跡の北5～40cm付近にある。東西の壁はQ13—4土坑とN13—2住居跡を切っている。平面形は長方形に近く、長軸方向はN—79°—Wである。規模は、開口部径390×136cm、底部径342×102cm、深さは中央部で32cmである。断面形は鉢状を呈し、壁は45～70°の勾配で立ち上がる。底面はVI層上部の褐色土で堅く、ほぼ平坦である。

埋土は7層に細分される。全体的に黒褐色土が多く、下位ではシルト質の暗褐色土が混じる。東壁付近では一部焼土が混じる。

出土遺物はロクロ不使用の土師器の甕の破片である。（第135図—383、写真図版88—383・384）383は口縁部、384は底部である。383は頸部に括れではなく、口縁部は外傾し、口唇部は丸い。器面調整は外面はナタ状のヘラケズリ、内面はヘラナデである。Q13—4土坑との境界付近の埋土から出土している。遺構の時期は特定できないが、Q13—4土坑より新しい。



第126図 P13土坑

#### Q 13—1 土坑（第127図、写真図版50）

調査区の北東部に位置し、Q14住居跡の東1.4m付近にある。平面形は長方形であり、長軸方

向はN—11°—Eである。規模は、開口部径170×76cm、底部径138×51cm、深さは中心部15cmである。断面形は皿状を呈し、壁は30°位の勾配で立ち上がる。底面はV層起源の褐色土中にあり丸底気味である。埋土は褐色土ブロックが混じる黒褐色土の单層であり、人為的に埋め戻されたものである。出土遺物はなく、時期の特定はできない。

#### Q13—2 土坑（第128図、写真図版50）

調査区の北東部に位置し、Q14住居跡の北東2.2m付近にある。南にQ13—1、西にQ13—3 土坑が1m以内で近接する。平面形は台形気味の長方形であり、長軸方向はN—75°—Wである。規模は、開口部径169×96cm、底部径150×82cm、深さは5cmである。断面形は浅皿状であり、壁の立ち上がりは僅かに認められる。底面はV層起源の黒褐色土中にあり、西から東に傾く。比高差は10cmである。埋土はVI層起源のにぶい黄橙色土を含む黒褐色土の单層であり、人為的に埋め戻されたものである。

出土遺物はなく、時期の特定はできない。

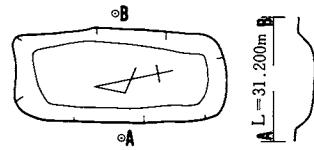
#### Q13—3 土坑（第129図、写真図版50）

調査区の北東部に位置し、Q14住居跡の東隅の北1.6m付近にある。西壁付近はQ13—4 土坑と接する。平面形は不整ながら隅丸長方形に近い。長軸方向はN—87°—Wである。規模は、開口部径197×88cm、底部径179×68cm、深さは最大10cmである。断面形は皿状を呈し、壁の立ち上がりは僅かに認められる。底面はV層起源の黒褐色土中にあり、凹凸が少しある。埋土は黒褐色土の单層であり、地山とは少し異なる。

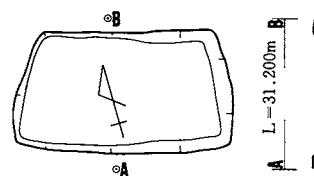
出土遺物はなく、時期は特定できない。

#### Q13—4 土坑（第130図、写真図版51）

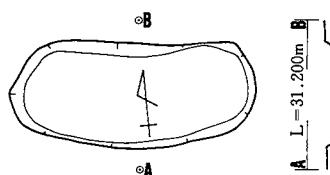
調査区の北東部に位置し、Q14住居跡の北壁の一部を切っている。平面形は隅丸長方形であり、長軸方向はN—31°—Wである。規模は、開口部径204×160cm、底部径166×116cm、深さは中心部は36cmである。断面形は鉢状を呈し、壁は60°前後の勾配で立ち上がる。底面はVI層の褐



第127図 Q13-1 土坑



第128図 Q13-2 土坑



第129図 Q13-3 土坑

色土中にあり、丸底気味で小凹凸があり、しまりはない。埋土は4層に細分される。上から黒褐色、黒色、黒褐色の土層で構成される。1・2層には炭や焼土、遺物が混じる。

出土遺物は土師器の破片である。(第135図—385～391、写真図版88—385～391)

385～387はロクロ使用の高台付壺の口縁部片である。内面にはヘラミガキ調整が加わり、黒色処理されている。387はN13—2住居跡出土の319と同一個体である。

388はロクロ使用の壺の底部片である。底部切り離しは回転糸切りであり、再調整はみられない。内面には部分的にミガキがみられるが、黒色処理はみられない。

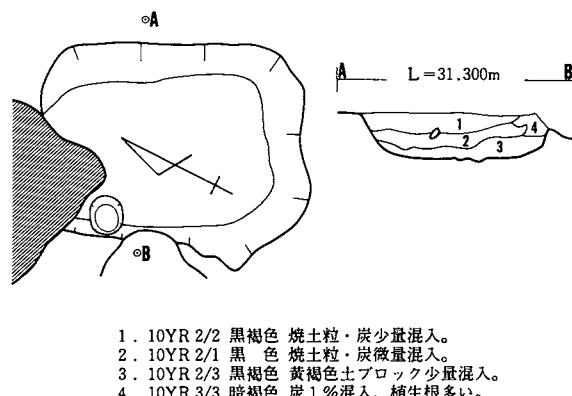
389・390はロクロ不使用の壺の口縁部付近である。2点とも口縁部は外反気味であり、器面調整は内外面とも口縁部はヨコナデ、体部はヘラケズリである。特に389はナタ状のケズリである。

391は刀子の身の先端である。長さ(4.1cm)、幅1.1cm、棟の厚さ3.5mmである。

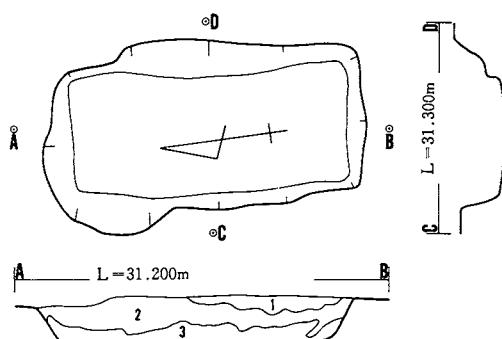
遺構の時期は出土遺物から平安時代であり、切り合い関係からQ14住居跡に後続する。

#### P14土坑(第131図、写真図版51)

調査区の北東部に位置し、N13—2住居跡とP14住居跡を切っている。平面形は長方形であり、長軸方向はN—5°—Eである。規模は、開口部径256×136cm、底部径220×83cm、深さは中心部で36cmである。断面形は鉢状を呈し、壁は60°位の勾配で立ち上がる。底面はVII層上面であり、平坦で堅い。埋土は3層に細分される。上位～中位は粘土のブロックが混じり堅くしまる人為的な埋め戻し層である。下位はしまりのない黒褐色土である。



第130図 Q13-4 土坑



1. 10YR 3/3 暗褐色 にぶい黄橙色～明黄褐色粘土のブロック混入。堅くしまる、小石少量まじる。
2. 10YR 3/2 黒褐色 明黄褐色の大きいブロック混入、ややしまる。
3. 10YR 2/3 黒褐色 粘性しまりともなし、シルト質。

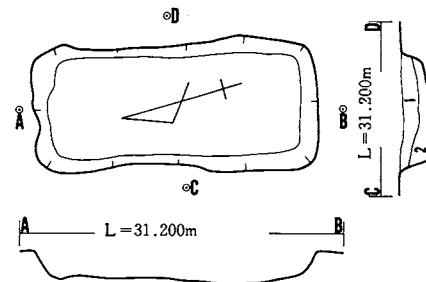
第131図 P14土坑

出土遺物はロクロ使用の土師器の壺の破片である。(第135図—392、写真図版88—392) 内面はヘラミガキ後黒色処理されている。埋土中位から出土している。遺構の時期は切り合い関係などから平安時代以降である。

#### Q14-1 土坑 (第132図、写真図版51)

調査区の北東部に位置し、Q14住居跡の北半中央を切っている。平面形は長方形であり、長軸方向はN—13°—Eである。規模は、開口部径226×94cm、底部径202×80cm、深さは中央部で24cmである。断面形は鉢状を呈し、壁は50~70°の勾配で立ち上がる。底面はVI層の褐色土中にあり、僅かに凹凸がある。比高差は6cm以内である。埋土は黒褐色土であるが、上位には焼土粒と黄褐色土が混じり、人為的な埋め戻し層と思われる。

出土遺物はなく、時期の特定はできない。

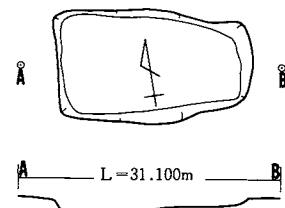


1. 10YR 2/3 黒褐色 黄褐色土・焼土が混入。
2. 10YR 2/2 黒褐色 粘性しまりなし

第132図 Q14-1 土坑

#### Q14-2 土坑 (第133図、写真図版50)

調査区の北東部に位置し、Q14住居跡の南西床面を切っている。平面形は長方形に近く、長軸方向はN—80°—Wである。規模は、開口部径156×92cm、底部径142×74cm、深さは中央部で18cmである。断面形は皿状を呈し、壁の立ち上がりは僅かに認められる。床面はVII層上面であり、礫を含むため堅く小凹凸がある。埋土は2層に大別され、上位は黒褐色土、下位は暗褐色土(第100図—埋土断面A—B)である。上位には焼土、炭、黄橙色粘土が混じり、人為的な埋め戻し層と思われる。出土遺物はなく、時期の特定はできないが、切り合い関係から住居跡よりは新しい遺構である。



第133図 Q14-2 土坑

#### M25 土坑 (第134図、写真図版51)

調査区の中央部に位置し、M24住居跡の南西隅を切っている。平面形は不整形で隅丸五角形に近い。規模は、開口部径234×180cm、底部径212×158cm、深さは中央部で48cmである。断面形はピーカー状を呈し、南壁～東壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はVI層の褐色土でほぼ平坦

である。埋土は5層に細分される。全体的に黒褐色土と褐色土からなり、中位～下位は軟らかく現地性の焼土、炭、灰を含む。埋土、底面、平面形などからこの土坑は新旧2期からなり、南半が古く、北半が新しいものと思われる。

出土遺物は土師器の破片・砥石（第135図—393～398、写真図版88—393～398）、土製支脚（第105図—364、写真図版86—364）である。支脚はM23住居跡のものと接合している。

393はロクロ使用の壺の口縁部破片である。内面はロクロナデ後部分的ヘラミガキで黒色処理されている。外面も黒味をおびる。

394はロクロ使用の高台付壺の底部付近で高台部を欠く。内面のヘラミガキは入念であり、黒色処理されている。外面も黒味をおびる。393と似ているが接合はしない。

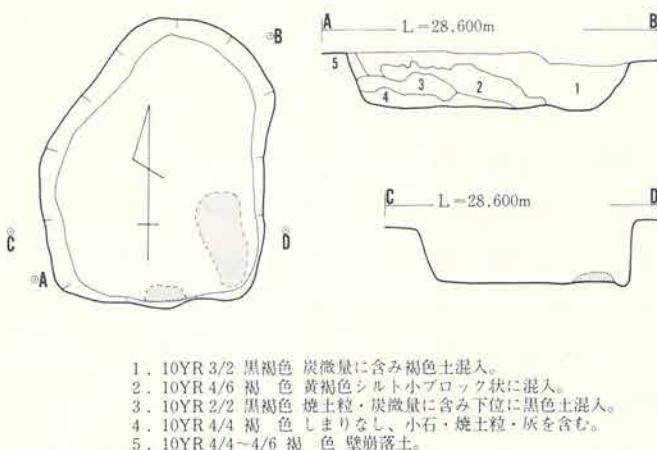
395はロクロ不使用の甕または甌の口縁部破片である。頸部に括れはなく体部上半から直立する。器面調整は内外面とも刷毛目である。同一の破片がM24住居跡埋土から出土している。

396はロクロ不使用の甕の口縁部付近である。頸部に括れを持ち、口縁部は外反気味である。器面調整は口縁部は内外面ともヨコナデ主体、体部は外面はヘラケズリ、内面はヘラナデである。胎土に砂や粒径3mm位の小礫を含む。

397はロクロ不使用の甕の口縁部破片である。短い口縁部は僅かに外傾する。器面調整は口縁部は内外面ともヨコナデ主体、体部は外面はヘラケズリ、内面はヘラナデである。

398は流紋岩質細粒凝灰岩の砥石であり、使用面が4面ある。砥粒の細かい仕上げ砥である。

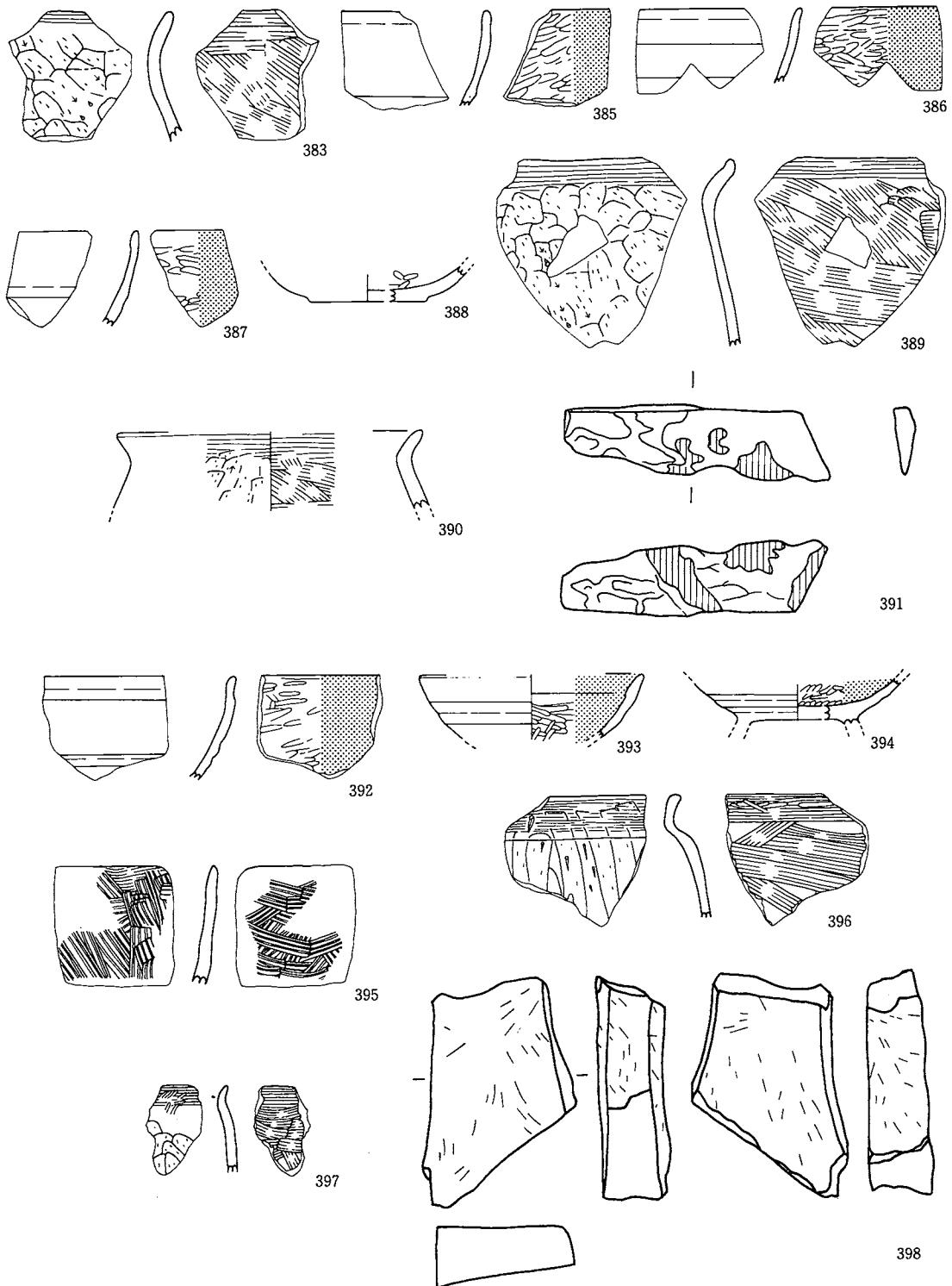
遺構の時期は出土遺物から平安時代である。



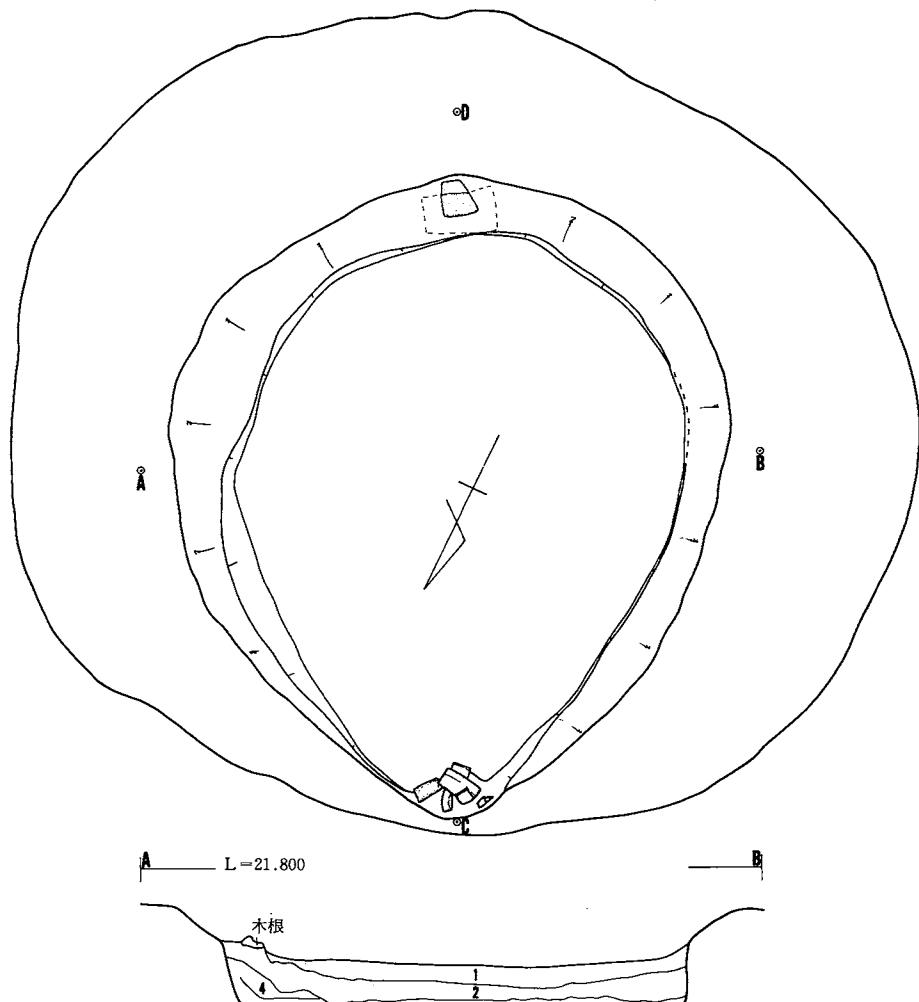
第134図 M25土坑

#### (6)炭窯（第136図、写真図版52）

F36炭窯は調査区の南西部に位置し、地形区C区のJ37住居跡の北13m付近にある。鉢は落ちて窪んでいたが、窯床と窯壁が残っており、壁の周りは30cmほど高くなっている。平面形は卵形を呈している。規模は、開口部径5.18×4.42m、底部径4.5×3.5mである。床面積は11.1m<sup>2</sup>である。壁はほぼ直立、壁高は70cm以上である。窯口は緩斜面の下方にあり、レンガで塞が



第135図 土坑（遺物）



#### F36炭焼窯

1. 7.5YR 5/4~5/6 にぶい黄褐色～明褐色 砂質で黒褐色や焼土がまじる。
2. 2.5YR 4/8~5YR 4/8 赤褐色主体 天井部で良くやけている、全体的に砂質。
3. N 1.5/0 黒色 粉状の炭の堆積層。
4. 10Y 6/1~3/1 オリーブ黒色 砂礫を含みもろくくずれやすい。
5. 5Y 6/1~5/2 灰～灰オリーブ 比較的良くしまるがあまりやけていない。
6. 10BG 2/1 青黒色 灰まじる。
7. 10YR 3/1 黒褐色 やわらかく粘性あり。

第136図 F36炭窯

れている。煙突は四角形ではほぼ直立し、底部は広く上部は窄み、高さは91cmあり、鉄板でつくられている。埋土は9層に細分される。上位は鉢の崩落土主体で焼けて堅くしまり、下位は粉炭を多く含む軟質な黒色土である。窯床は灰黄色の粘性土であり、ほぼ平坦で地山に沿って南から北に僅かに傾き、比高差は最大10cmである。

地元の人々の話では昭和10年代に使用されていたとのことである。

### 3. 遺構外の出土遺物

遺構外の出土遺物は少なく、土師器の小破片が主体である。縄文時代の遺物は、土器片3点、石鎌9点、石匙1点、楔形石器1点、磨石1点である。

#### (1) 縄文土器 (第137図、写真図版89)

401は早期の土器片である。貝殻腹縁押し引き文が横位に施文され、間に横位2列の刺穴文がある。型式名は吹切沢式に相当するものと思われる。

402・403は晩期の長頸壺の口縁～肩部付近の破片である。工字文がみられることから型式名は大洞A式に相当する。

#### (2) 土師器 (第137図、写真図版89)

404～408は壊であり、408はロクロ使用、その他はロクロ不使用である。

404は器高の低い壊である。内面に僅かに稜を持ち、丸底である。器面調整は内外面ともヘラミガキである。内面の黒色処理は殆ど消失している。

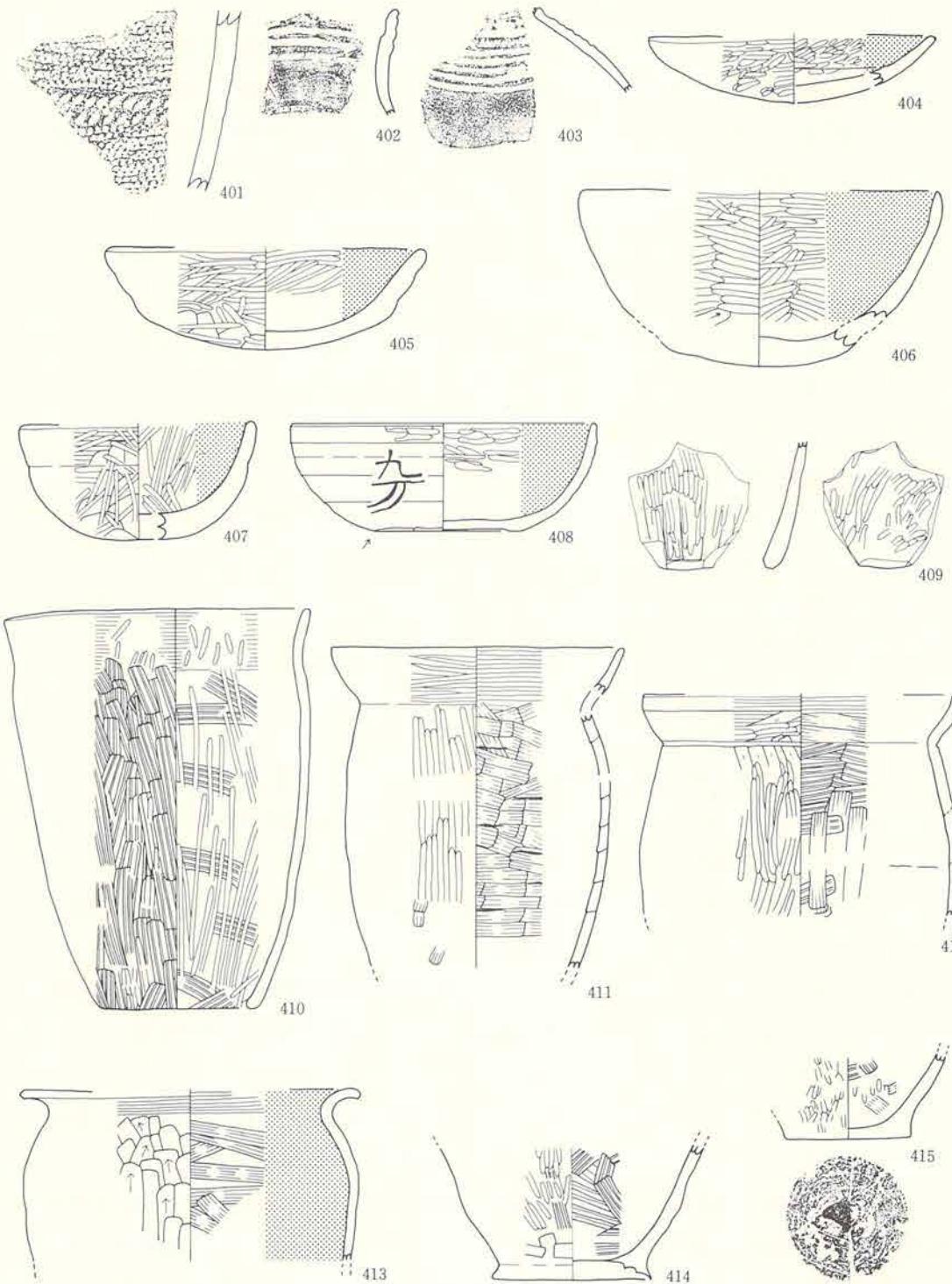
405は壊で2分の1を欠くが丸底で外面に段を持ち、口縁部は外反気味である。器面調整は内外面ともヘラミガキであり、内面は黒色処理されている。

406は壊で3分の2を欠くが丸底で口縁部は直立気味に内彎する。外面にはヨコナデによる僅かな段が認められる。器面調整は、外面は口縁部はヨコナデ体部下位はヘラケズリ後ともにヘラミガキ、内面はヘラミガキで黒色処理されている。

407は壊である。内外面に識別できる段はなく、体部から口縁部は内彎気味に外傾する。器面調整は内外面ともヘラミガキで黒く焼けている。底部は接合できなかったが丸底である。

408は壊で口縁部の一部を欠く。内面から口縁部外面にはミガキ調整が施され、内面は黒色処理されている。底部切り離しは回転糸切りであり、下端は再調整されている。体部外面中央附近に墨書を伴う。文字は正位に「九万」と書かれている。墨書の大きさや書体はN13住居跡出土の壊片(312)と同じである。

409はロクロ不使用の無底式甌の底部破片である。



第137図 遺構外出土遺物(1)

410はロクロ不使用の無底式甌である。頸部は僅かに括れ、肩部付近から底部まで窄む。器面調整は内外面とも刷毛目後ヘラミガキ主体である。

411～415はロクロ不使用の甌である。

411は甌で底部を欠く。頸部に括れを持ち、口縁部は内彎気味に外傾する。体部最大径を中央付近に持つ。器面調整は、外面は口縁部はヘラミガキ体部はヘラナデ後ヘラミガキ、内面は口縁部はヨコナデ体部はヘラナデである。外面に炭化物が付着する。

412は甌で大半を欠く。頸部が括れ、口縁部は外傾した後上端が直立する。器面調整は、外面はヘラケズリ後ヘラミガキ、内面は刷毛目後部分的ヘラナデである。

413は甌の口縁部付近である。頸部に括れを持ち、口縁部は強く外反し、口唇部は角張る。器面調整は、外面は口縁部はヨコナデ体部はヘラケズリ、内面は口縁部はヨコナデ体部はヘラナデで黒色処理されている。

414は甌の底部付近である。底部下端は外側に張り出し、外面に木葉痕がある。体部の器面調整は、外面は刷毛目後ヘラミガキ、内面はヘラミガキである。

415は甌の底部である。底部はほぼ直立する。内面は丸底で外面に木葉痕がある。

### (3) 石器 (第138・139図、写真図版90)

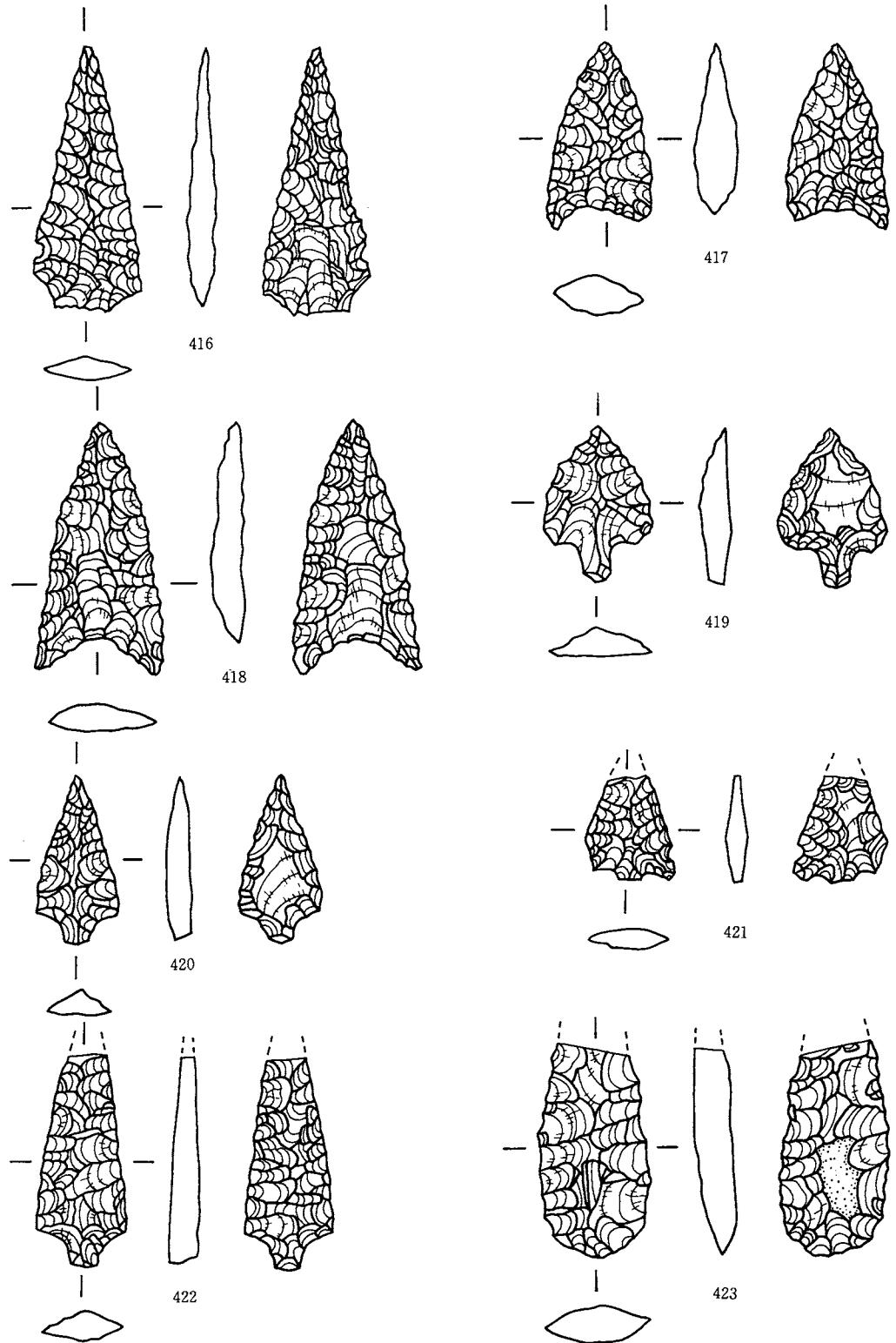
416～424は石鎌である。416は平基鎌、417・418は凹基鎌、419～422・424は有茎鎌、423は円基鎌である。

416は石質は珪質粘板岩である。基部の両端を欠く、両面調整は入念である。長さ4cm、重量1.9gである。417は石質は輝緑凝灰岩である。両面調整は入念である。長さ2.8cm、重量2.3gである。418は石質は粘板岩である。両面調整は入念である。長さ3.8cm、重量3.3gである。419は石質はチャートである。裏面に1次剝離面が残る。長さ2.35cm、重量1.6gである。420は石質は粘板岩である。鎌身は二等辺三角形である。長さ2.6cm、重量1.5gである。421は石質は輝緑凝灰岩である。先端を欠く。422は石質はチャートである。先端を欠く。現存長3.2cm、重量2.2gである。423は石質は輝緑凝灰岩である。先端を欠く。現存長3.3cm、重量3.95gである。424は石質は珪質細粒凝灰岩である。両面調整は入念である。長さ5.8cm、重量3.25gである。

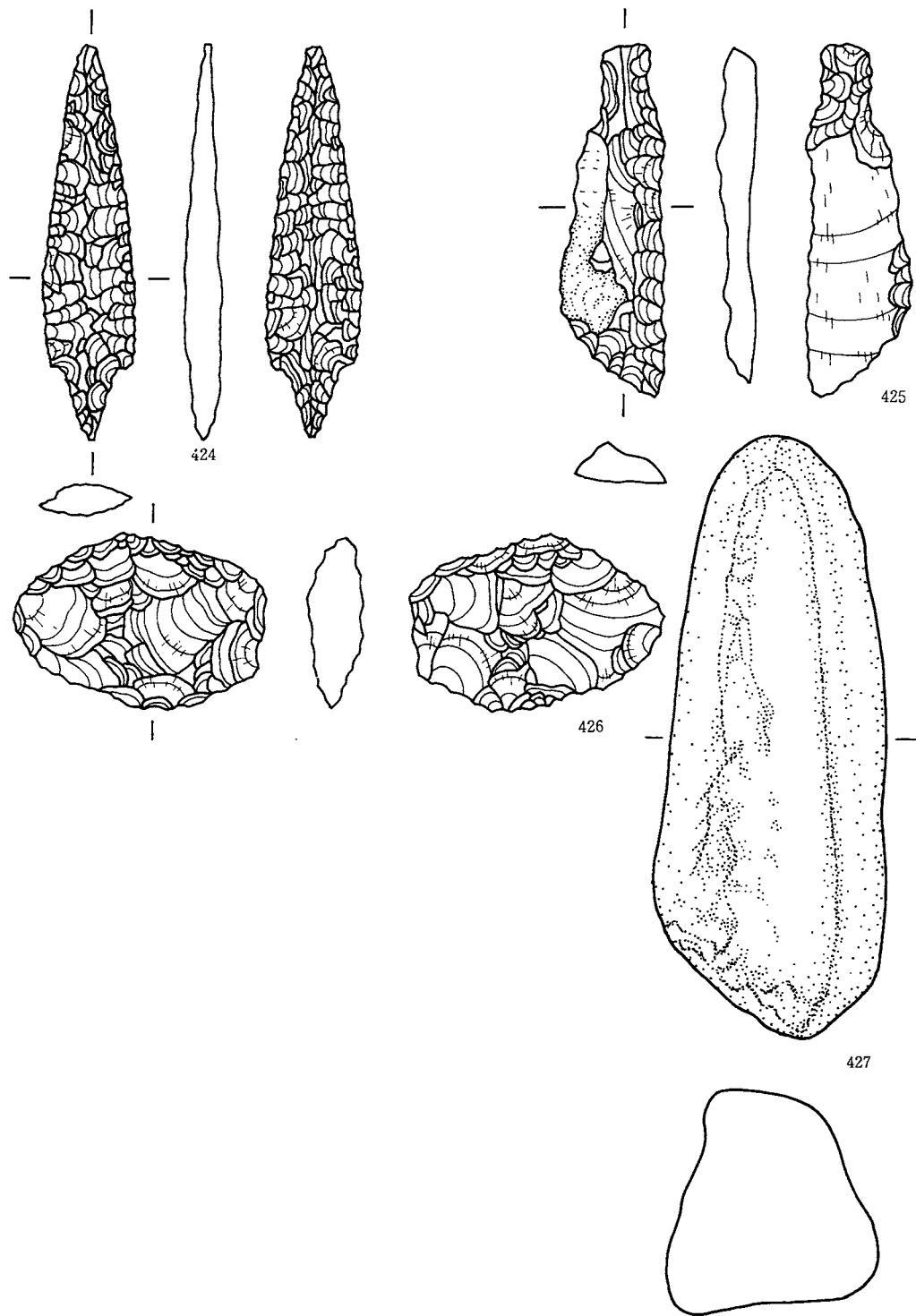
425は縦型石匙である。石質は粘板岩であり、刃部は片面からの側縁調整である。長さ5.2cm、重量5.1gである。

426は楔形石器である。石質はチャートである。

427は横断面形の磨石である。石質は両輝石安山岩であり、狭い面を使用している。



第138図 遺構外出土遺物(2)



第139図 遺構外出土遺物(3)

## V. まとめ

### 1. 陥し穴状遺構

本遺跡で発見された陥し穴状遺構は、平面形が溝状を呈するタイプである。長さは3m未満3基、3~4m13基、4m以上1基である。検出面からの深さは50cm未満1基、50~100cm6基、100cm以上の10基である。

長さの分布領域では3m未満の中型、3m以上の大型に分類できる。深さは検出面の問題もあるが1m前後に集中する傾向がある。

断面形を概念図のように模式化してみると、縦断面形はA型2基、B型6基、C型2基、D型5基、E型1基、F型1基であり、B型とそれに近いD型が65%を占める。横断面形はI型1基、II型13基、III型3基である。細別するとA II型はK40・K43の2基、B I型はF12の1基、B II型はN13・M11・F11・M24の4基、B III型はP13の1基、C II型はD9の1基、C III型はD10の1基、D II型はG10・E12・I40・H41の4基、D III型はL26の1基、E II型はN9の1基、F II型はL11の1基であり、B II型とD II型が多い。

分布を地形区分にみると、A区が11基、B区が2基、C区が4基である。長軸方向が等高線に沿うものが多く、A区では緩斜面を縦断するように、C区では尾根を横断するように並んでいる。また、B区の2基は比較的平坦な地形面の縁近くに位置する。個々の配列をみると、N9が単独で分布する以外は、長軸方向を同じくする2基一対の細分が可能になる。2基の間隔はD9-D10が3.2m、F11-G10が1.2m、E12-F12が5.4m、L11-M11が2.6m、N13-P13が6.9m、M24-L26が7.2m、I40-K43が5.6m、H41-K43が11mである。陥し穴は獣道に沿って作られているため、その配列状況は地形と密接な関係があると言える。

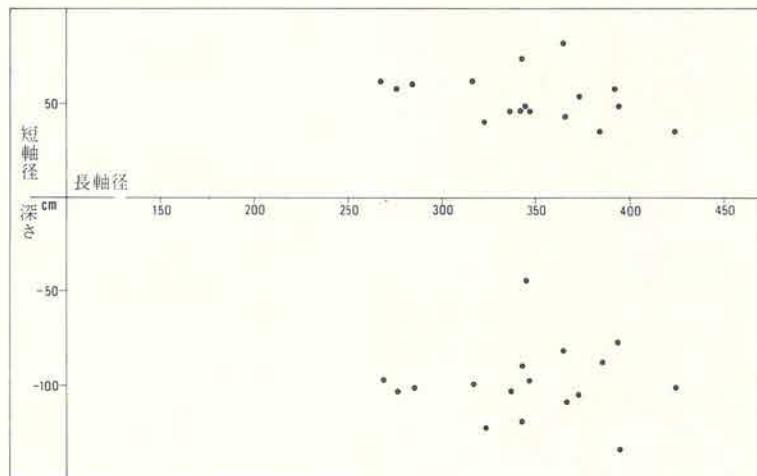


図6 陥し穴状遺構の長軸径・短軸径・深さの分布

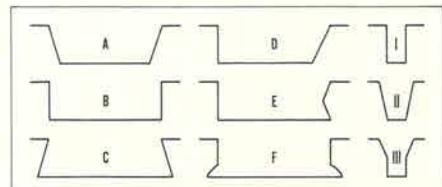


図7 陥し穴状遺構概念図

## 2. 古代の竪穴居跡について

### 〈検出棟数と重複〉

43棟のうち重複関係にあるものは7棟である。この中でL17とM17住居跡の場合は床面が2段になっていることから2棟として報告しているが、カマドが1基だけであることや出土遺物の時期差がないことから、同一の住居跡の可能性がある。N13住居跡の場合は床面が異なるほか貼り床の下に白頭山火山灰や十和田a降下火山灰のブロックがみられることから、2棟の間に時間差があると考えられる。

P12とN13-2、P14とQ14住居跡の場合は部分重複である。先行する奈良時代の住居跡の一部を壊して平安時代の住居跡が構築されている。本遺跡の場合は重複する例が少なく、先行する住居跡との重複をさけながら狭い地形面を利用してきたことが理解される。

### 〈平面形・規模〉

調査区域外に広がったり、削平されている住居跡を除くと、平面形は隅丸正方形10棟、隅丸長方形11棟、隅丸台形4棟、その他2棟であり、正方形あるいは長方形が主になり、隅が丸味をおびたものが多く奈良時代と平安時代による違いはあまりない。隅丸の基準はなく主観的な表現であるが、奈良時代の方が丸味がやや強い。正方形と長方形の区別は、便宜的に短辺に対する長辺の比が1.1未満を正方形、1.1以上を長方形とした。長辺の比が最も大きいのはN13-2住居跡の1.27であり、平均は1.11である。短辺に対する長辺の比が1~1.2の範囲内の住居跡が18棟で85.7%を占める。この他に少数ながら台形気味や不整形な住居跡などもみられる。

長辺の規模別分布は、奈良時代は2~3m1棟、3~4m6棟、4~5m6棟、5~6m1棟、6~7m3棟、不明5棟である。平安時代は3m未満2棟、3~4m2棟、4~5m9棟、5~6m2棟、8m1棟、不明5棟である。平安時代に長辺が4~5mの住居跡が多い点が注目される。長辺の規模は上端での計測値であり、壁の崩落などを考慮しなければならない。

床面積は、壁面の下端をプラニ・メーターで計測したものであり、カマドや周溝を無視しているが、住居跡の規模をつかむには有効な方法である。図8に推定値を含めた床面積別の分布を示した。図化にあたりH9、J13、L17、I41の各住居跡は除いている。

図をみると、7m<sup>2</sup>、20m<sup>2</sup>、30m<sup>2</sup>付近に分布の空白があることから、35m<sup>2</sup>以上を大型、22~26m<sup>2</sup>を中型、8~18m<sup>2</sup>を小型、2~4m<sup>2</sup>を極小型に区分した。平面形を正方形とすれば、床の1辺が3m未満、3~4.5m、5m前後、6m以上が規模別区分の目安となる。

結果は大型4棟、中型4棟、小型28棟、極小型3棟である。奈良時代は大型と小型の住居跡からなり、さらに小型の住居跡は細分されそうである。一方、平安時代は中型と小型の住居跡からなり、全体的に規模別格差が小さくなる傾向がみられ、集落構造の変化が考えられる。床面積の合計は推定680m<sup>2</sup>であり、1棟平均は奈良時代16.6m<sup>2</sup>、平安時代は15.7m<sup>2</sup>位と推定され、

その差は殆どない。

地形区別にみるとA区では大型～極小型まで分布しているが、B区・C区は小型と極小型だけであり、大型・中型住居跡はA区にのみ分布することが注目される。これは住居構築が可能な土地の広さ(地形条件)に関係するものと思われる。A区は南北方向の比高差はあるものの、東西方向の比高差は小さく最も広い地形面である。

最後に規模の異なる住居跡の相互関係についてI27とK27住居跡の関係を述べる。両住居跡は最小80cmの距離にあり、出土した高台付壙が接合したことから同時存在と考えられる。K27は極端に小さいがカマドを持つ。一方、I27はカマドは破壊されて焼土だけが残っている。壁高が50cmと深いことから後世の削剥は考えられない。以上のことから、I27住居跡のカマドが崩壊した後、住居跡内にカマドを再構築せず、住居跡外にカマドだけの機能を持つK27住居跡を構築したことが考えられる。

#### 〈埋土〉

遺構検出の重要な手掛かりとなった2種類の火山灰について述べる。白頭山火山灰と十和田a降下火山灰の識別は比較的容易であり、検出面付近で両者は一定の範囲にブロック状に点在する例が多くた。埋土に2種類の火山灰を含む住居跡は12棟あり、H47住居跡で僅かに層状に含む以外は、不連続ながら埋土中位にかけて落ち込むように堆積している例が多い。こうした中で、N13-1住居跡では床面付近に大小の塊として分布し、M13住居跡では斜面上位の検出面付近に僅かにみられた。時期はN13-1住居跡は平安時代、他の住居跡は奈良時代である。

次に十和田a降下火灰を含む住居跡は5棟あり、I19住居跡では層状に含み、他は部分的に塊としてみられた。白頭山火山灰の塊を含む住居跡はJ28の1棟である。これらの住居跡の時期は奈良時代である。

平安時代の住居跡で火山灰を含むのは本遺跡ではN13-1住居跡1棟だけであるが、南方2.7kmにある平沢I遺跡では14棟総てに含まれており、単純な比較はできないが時間的な差異が考えられる。

なお、D9・G15・I19・K22・L25・J28・J37・

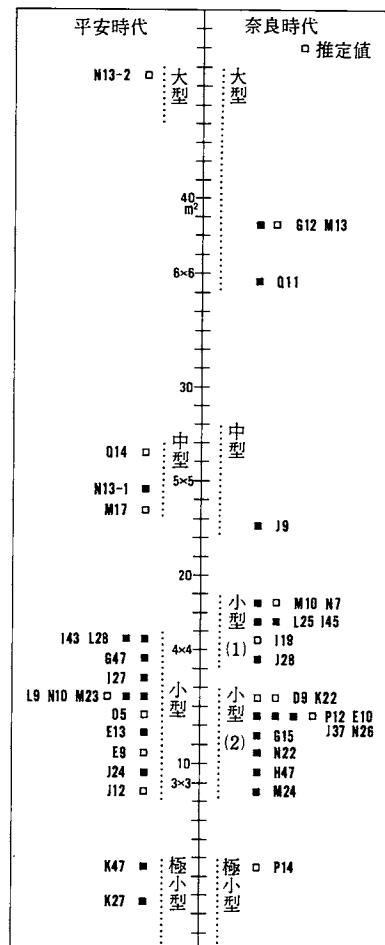


図8 住居跡床面積分布

表2. 奈良・平安時代住居跡一覧表(1)

1—25は62年調査分、26—43は63年調査分

No	住居跡名	平面形	規 模 (m)	床面積 (m <sup>2</sup> )	壁高(cm)	柱穴数	カマドの位置	煙 道 部	埋土中の火山灰		主な出土遺物	焼失	地形区	時 代
									十和田a	白頭山				
1	D-9	(隅丸方形)	4.0×(-)	残存部 6.2	20~30		不明		○	○	石鏹		A	奈良
2	E-9	(隅丸長方形)	(-)×(-)	残存部 6.8	最大 60		西壁中央				須恵器の甕細片		A	平安
3	E-10	隅丸正方形	3.9×3.8	12.0	30		南壁中央				甕・坏	○	A	奈良
4	G-12	隅丸正方形	6.8×6.5	38.7	10~70	4本柱	北壁中央	I型	○	○	甕・坏・琥珀	◎	A	奈良
5	E-13	隅丸正方形	4.1×3.8	11.1	30~50		北壁中央やや東寄り	IV型			甕・磨製石斧・砥石		A	平安
6	J-13	(隅丸方形)	(-)×4.4	残存部 4.8	10		北壁中央やや東寄り				甕・坏・鉄製品(楔)		A	平安
7	G-15	隅丸台形	3.8×3.9	11.0	50~90		北壁中央		○		甕・坏・砥石	○	A	奈良
8	L-17	不 明	不 明				不明				坏・高台付坏		A	平安
9	M-17	隅丸長方形	4.6×(4.8)	残存部 21.1			北壁中央やや東寄り	II型			甕	○	A	平安
10	I-19	(隅丸方形)	(-)×4.3	残存部 10.0	最大 40		北壁中央		○		坏	○	A	奈良
11	K-22	(隅丸方形)	3.7×(-)	残存部 6.9 (13.0)	20		北壁中央		○		甕・坏・鉄製品(刀子)	○	B	奈良
12	J-24	隅丸長方形	3.6×3.1	9.0	5~10		北隅(1)、東隅(2)	①②はII型			甕・坏・砥石・琥珀		B	平安
13	L-25	隅丸長方形	5.2×4.6	17.6	35~45	2	北壁中央やや東寄り	I型	○	○	甕・坏・剥片	○	B	奈良
14	N-26	(隅丸方形)	4.3×(-)	残存部 10.5	15~30		北東壁中央				甕・壺・坏	◎	B	奈良
15	K-27	不整円形	2.1×2.0	2.2	45~50		東壁中央	II型			甕・坏・高台付坏・刀子		B	平安
16	I-27	隅丸台形	4.4×4.5	14.1	45~50		南壁中央やや西寄り	III型			甕・坏・高台付坏	○	B	平安
17	J-28	隅丸台形	4.6×3.9	15.1	20~30		北壁中央		○		甕・甌・琥珀	○	B	奈良
18	L-28	隅丸長方形	4.2×4.7	16.0	35~40		南壁中央やや東寄り	II型			甕・坏・高台付坏・刀子	○	B	平安
19	J-37	隅丸正方形	3.7×3.7	12.1	最大 15		不明		○		甕・甌	○	C	奈良
20	I-41	(隅丸方形)	(3.7)×(-)	残存部 3.4	最大 18		不明		○		甕		C	奈良
21	I-43	隅丸長方形	4.1×4.7	16.8	20~50		北東壁中央	III型			甕・坏・高台付坏	○	C	平安
22	I-45	隅丸長方形	4.7×(3.8)	17.1	20~45		北壁中央		○	○	甕		C	奈良

◎炭化材○焼土

表2. 奈良・平安時代住居跡一覧表(2)

1—25は62年調査分、26—43は63年調査分

No	住居跡名	平面形	規模(m)	床面積(m <sup>2</sup> )	壁高(cm)	柱穴数	カマドの位置	煙道部	埋土中の火山灰		主な出土遺物	焼失	地形区	時代
									十和田a	白頭山				
23	G-47	隅丸台形	4.4×4.6	15.8	27~58		南壁中央東寄り(2)	II型			甕・壺・土製支脚		C	平安
24	H-47	隅丸長方形	3.0×3.7	9.0	7~38		不明		○	○	甕・壺	○	C	奈良
25	K-47	不整隅丸台形	2.2×2.6	4.2	8~28		南隅	II型			甕・壺・貝(アワビ等)		C	平安
26	O-5	隅丸長方形	3.4×(3.9)	(12.2)	最大30		西壁				壺	◎	A	平安
27	N-7	(正方形)	4.5×(—)	(18.9)	5~30		北壁中央	I型	○	○	甕・壺・琥珀		A	奈良
28	H-9	不明	43×(—)	残存部12.5	2~15		北壁	IV型			甕・壺・琥珀	○	A	平安
29	J-9	隅丸正方形	5.0×5.2	22.5	最大40	4本柱	北壁中央	I型	○	○	甕・壺・刀子・琥珀	○	A	奈良
30	L-9	隅丸正方形	4.3×(4.0)	残存部13.5	6~21		南西壁やや北寄り 北東壁中央	II型			甕・壺		A	平安
31	M-10	隅丸正方形	4.8×4.8	18.1	16~40	4本柱	北壁中央	I型	○	○	甕・壺・壺・刀子・琥珀	◎	A	奈良
32	N-10	隅丸正方形	3.9×4.1	13.4	21~33		不明				甕・壺		A	平安
33	Q-11	隅丸正方形	6.4×6.6	35.1	32~72	4本柱	北壁中央	I型	○	○	甕・鉄製品・琥珀	○	A	奈良
34	J-12	(隅丸方形)	(3.1)×(—)	8.9	最大30		不明				甕・壺・支脚	○	A	平安
35	P-12	隅丸長方形	3.6×4.1	12.6	31~48		北壁中央	I型			甕	○	A	奈良
36	M-13	(隅丸方形)	6.7×(—)	残存部24.6 (38.7)	5~50	3	北壁中央	I型	○	○	甕・壺	◎	A	奈良
37	N-13-1	隅丸正方形	5.2×5.2	24.9	6~15	4本柱	北西壁やや南寄り 北東壁の東隅近く	①III型 ②II型	○	○	甕・鏡先・琥珀・須恵器・支脚	○	A	平安
38	N-13-2	隅丸長方形	6.3×(8.0)	(46.9)	10~36	4本柱	北東壁寄り				甕	○	A	平安
39	P-14	不明	2.4×(—)	(4.8)	14~30		北壁中央	I型			壺		A	奈良
40	Q-14	隅丸長方形	(5.1)×(5.6)	(26.4)	最大20	3	北壁東寄り				須恵器	◎	A	平安
41	N-22	隅丸長方形	3.3×3.7	10.8	14~20		北壁中央		○	○	甕・琥珀(加工品)	○	B	奈良
42	M-23	隅丸正方形	3.9×4.0	13.6	18~43		東壁中央やや南寄り	IV型			甕・壺・鎌先・支脚		B	平安
43	M-24	隅丸長方形	2.9×3.3	8.3	7~18		不明				甕・壺	◎	B	奈良

◎炭化材○焼土

I 41・I 45の9棟から出土した13点の火山灰について奈良教育大学三辻利一氏に分析・同定を依頼している。その結果は、白頭山火山灰4点、十和田a降下火山灰9点である。

#### 〈壁〉

壁高の最大値の分布は、M・L 17住居跡を除き10～19cm 7棟、20～29cm 5棟、30～39cm 11棟、40～49cm 8棟、50～59cm 6棟、60～69cm 1棟、70～79cm 2棟、90～99cm 1棟である。平均は36.5cmであり、地形区別にみるとA区38.7cm、B区30.9cm、C区27.8cmである。A区の林道沿いや、B区、C区では削平されたり、流出している住居跡が多い。時代別では奈良時代38.6cm、平安時代34.2cmであり差異は認められない。

#### 〈炭化材・焼土〉

炭化材や焼土は、量的な差異はあるものの多くの住居跡でみられ、量的に多い場合は一般的に焼失住居跡と考えられている。炭化材が散布するO 5、M10、G12、M13、N13-1・2、Q14、N22、M24、N26の10棟の住居跡と、焼土が多いQ11、M17の2棟の住居跡は、典型的な焼失住居跡である。その他にも焼土の散布する住居跡は焼失の可能性があるが断定はできない。

炭化材の配列ではM13・Q14の2棟の住居跡は直交するものが多く、N26住居跡は放射状のものが多い。M24住居跡は中間タイプである。断面形をみるとQ11住居跡は板状の割材が多く、敷板と思われる。

炭化材の樹種鑑定の結果は、40例のうち、栗が33点、ナラが5点、ケヤキが2点であり、栗が82.5%を占める。他の遺跡についてみると、五庵 I 遺跡（浄法寺町）では栗が70%（203点のうち142点）、上の山VII遺跡（安代町）では栗が67.7%（282点のうち191点）、親久保II遺跡（一戸町）では杉が63.4%（101点のうち64点）、平沢 I 遺跡（久慈市）のD III-3、F III-3・4、G II-1の4棟の住居跡分ではナラが78.6%（56点のうち44点）であり、樹種別構成率は遺跡によって差異がみられる。

焼失住居率の高い遺跡には、五庵 I 遺跡、駒板遺跡（軽米町）、長瀬B遺跡（二戸市）、上の山VII遺跡、桂平遺跡（浄法寺町）などがある。焼失住居率は五庵 I 遺跡100%（15棟）、駒板遺跡66.7%（15棟のうち10棟）、長瀬B遺跡56.3%（32棟のうち18棟）、上の山VII遺跡53.8%（39棟のうち21棟）、桂平遺跡50%（14棟のうち7棟）である。

県北地方に焼失住居が多いことについては、蝦夷征討との関連も指摘されているが、住居の廃棄行動の結果も考えられる。

#### 〈床・周溝〉

変化に富む地形面に構築されているため、床面はIV～VIII層まであるが、VI層が最も多い。IV～V層中に床面がある場合傾斜地ではJ 13住居跡などのように床面が流出している例がみられ

る。斜面に構築されたM17住居跡や古い住居跡上に構築されたF13—2住居跡では広い範囲で貼り床がみられる。それ以外は部分的に掘り方や貼り床が認められる程度であり、殆どの住居跡では地山面を床面としている。従って床面は地山に沿って若干傾く例が多い。

壁際の周溝はL9、M10、M13の3棟の住居跡で認められる。また、G12住居跡のカマド付近には間仕切りに伴うと思われる溝がみられる。

#### 〈柱穴と柱穴配置〉

柱穴が検出された住居跡はJ9、M10、Q11、G12、M13、N13—1・2、Q14、L25の9棟の住居跡である。このうち柱穴配置の確認できたものはM13、Q14、L25を除く6棟の住居跡である。

柱穴配置は四本柱（四主柱）で奈良時代の住居跡は4個の柱穴が四隅から内側に入った位置にあり正方形に近い配置を示す。平安時代の住居跡は2個は隅から内側に入った位置にあり、残る2個はカマドが設置された壁の反対側の壁際にあり、長方形に近い配置を示す。

柱穴と床面積の関係をみると、床面積が20m<sup>2</sup>以上の中・大型住居跡ではM17住居跡以外は柱穴を持つ。また、小型の住居跡でも20m<sup>2</sup>に近いM10とL25住居跡は柱穴を持っている。以上の例は四本柱を持つ住居と柱を持たない住居は、大体床面積20m<sup>2</sup>（一辺約4.5m）前後を境にしているとする他遺跡の多くの報告例と矛盾しない。

#### 〈カマド〉

43棟の住居跡を調査したが、カマドの痕跡が残っていたものは35棟である。残る8棟は削平されていることや調査区域外にまたがることなどの理由でカマドの有無が不明である。現存するカマドの数別の住居跡の棟数は、1基が31棟、2基がL9、N13—1、G47の3棟、3基がJ24住居跡の1棟である。

複数のカマドを持つ住居跡は4棟とも平安時代である。これらのカマドは作り変えられており、時間的な新旧関係がある。カマド設置位置の動きをみるとL9住居跡では南西から北東へ、N13—1住居跡では北東から北西へ、J24住居跡では東北東と南南東から北へと移動しており、反対側の壁や隣接する壁に再構築される例が多い。これに対してG47住居跡の場合は同一壁面で設置位置が僅かに中央寄りに移動している。

次に検出されたカマド39基の長軸方向の分布（E9住居跡を除く）を推定値も含めて図10に示した。奈良時代のカマドは17基あるが、そのうち13基はN—18°—WとN—1°—Eの19°の間に集中している。さらにN26住居跡を含めると北を中心に50°の範囲内に16棟があり、例外はE10住居跡の1棟だけである。これに対して、平安時代のカマド22基の分布はバラツキが大きくなり、10°～90°の間に10棟、95°～213°の間に9棟、278°～354°の間に3棟である。平安時代のカマドは、奈良時代に比べて北東、東、南カマドの増加が目立つ。その中でN13—1住居跡2

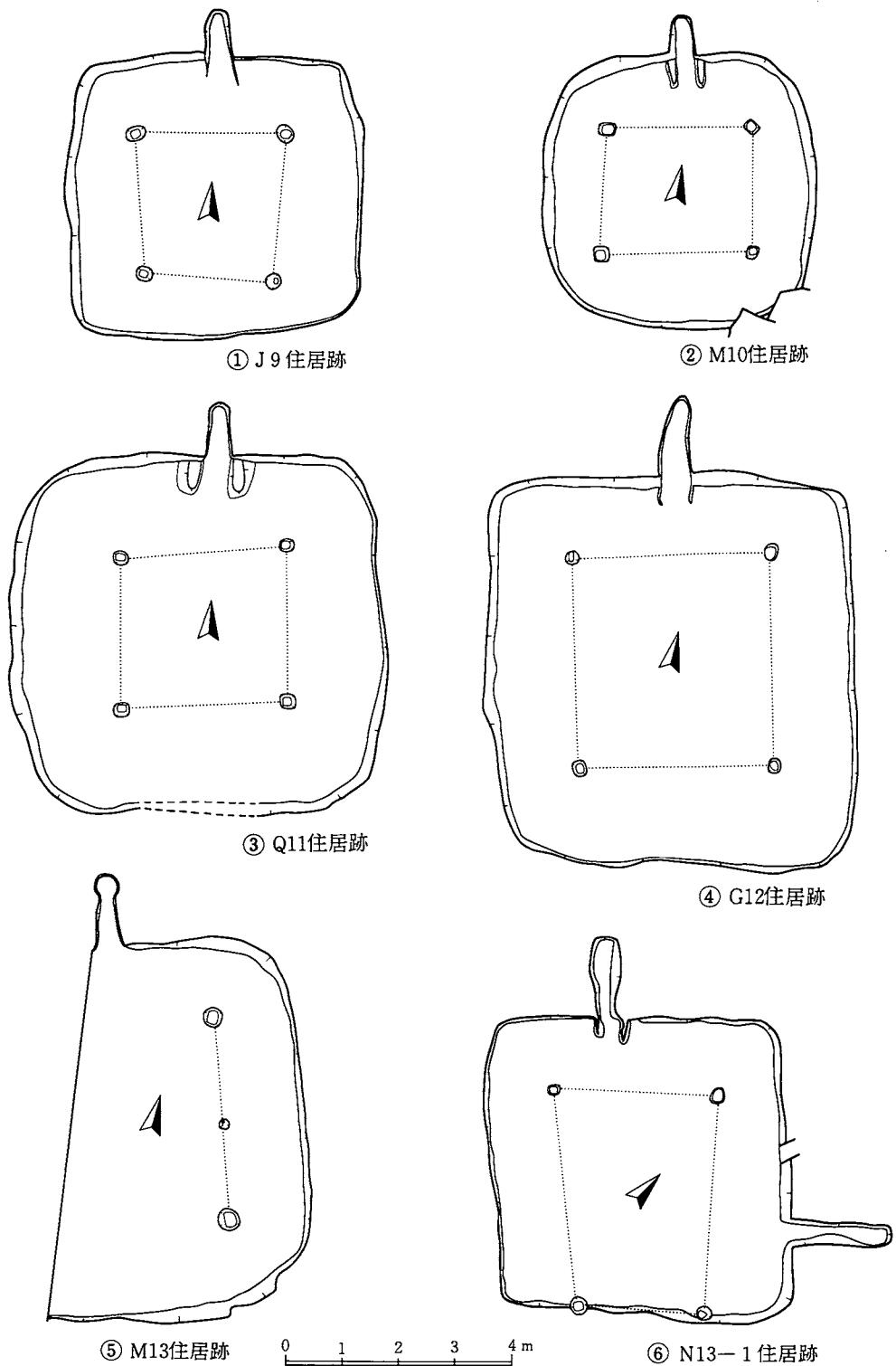


図9 住居跡の柱穴配置

号カマドとJ24住居跡3号カマドは作り変えられたものであることを考慮すると、O5住居跡の例外はあるが西側を避けている傾向が指摘できる。

次にカマド設置位置を図11に模式的に示した。この図はカマドが付設される壁を正面からみて、左隅を0、右隅を1として、カマドの中軸線の位置を小数点第二位まで求めて図化したものである。奈良時代のカマドは0.45~0.58の間に集中しており、壁中央に構築されていることがわかる。これに対し、平安時代のカマドは右側に寄るもののが最も多く、次いで左側に寄るものが多い。奈良時代の範囲を中央部とすれば、その範囲に分布するカマドは3基にすぎない。G47住居2号カマドが作り変えられたものであることやK27住居跡の特殊性(196ページ参照)を考えれば中央を避けて左右に寄る傾向が指摘できる。

カマド本体部が原形を保っている例は少数であり、多くの場合は使用礫が崩壊したり、破壊(削平を含めて)されて散在している。その中で原形に近いカマドが残っているのは、奈良時代ではM10、Q11、M13、平安時代ではE13、M23、K27、K47の各住居跡である。

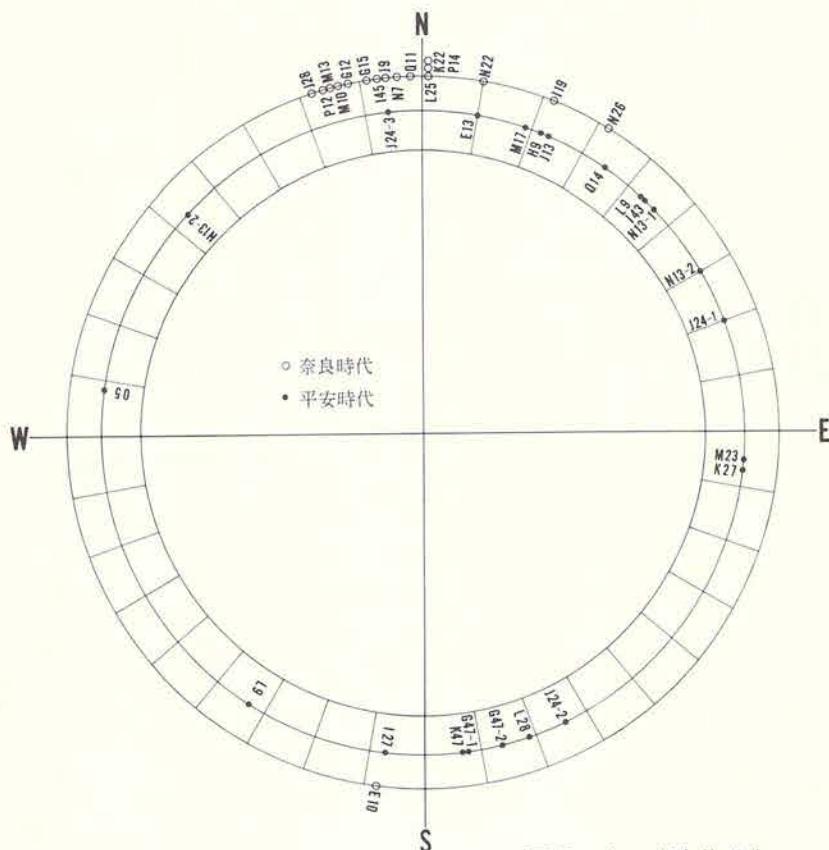


図10 カマド方位分布

奈良時代はD 9、P 14、J 37、I 41の4棟を除く18棟の住居跡では長方形の凝灰岩や砂岩を使用している。特に天井石には長さ50~60cm、幅20cm前後に加工した凝灰岩を使用している例が多い。平安時代は角礫や亜円礫を使用する例が多く、礫を伴う住居跡はL 17、K 47の2棟を除く19棟であり、煙出部に礫を使用する例もみられる。本遺跡では芯材として礫を使用しているが、加工礫から自然礫へと変化している。燃焼部に支脚を伴うのは10例である。円柱状土製支脚のG 47住居跡2号カマド、円筒状土製支脚のN 13-1住居跡2号カマド、土師器甕の底部を倒立させるN 26住居跡、土師器甕の胴部と礫を併用するJ 13住居跡、長い円礫を直立させるK 27とM 23住居跡、板状の礫を埋置したQ 11とP 12住居跡、2~3個の角礫を埋設するM 10とM 13住居跡がある。この他にも支脚と思われる礫が残っている例はH 9、J 9、E 13、Q 14、N 22の5棟の住居跡である。

煙道部を確認できるのは25基である。削平されて下底部だけが残るものがあるため、煙道部縦断面形を図12のように模式化して分類した。I型は上り勾配型であり、N 7、J 9、M 10、Q 11、G 12、P 12、M 13、P 14、L 25の9基である。すべて奈良時代に属し掘り込み式である。このうちG 12、M 13は煙出部にピットを持つ。II型はほぼ水平型であり、L 9の1・2号、N 13-2の2号、M 17、J 24の1・2号、K 27、L 28、G 47-2号、K 47の10基である。すべて平安時代に属する。III型は下り勾配型であり、

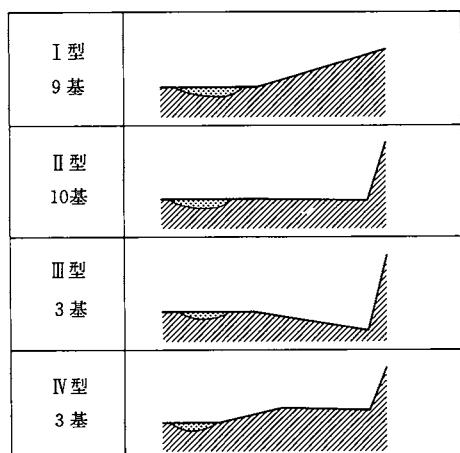


図12 煙道部縦断面模式図

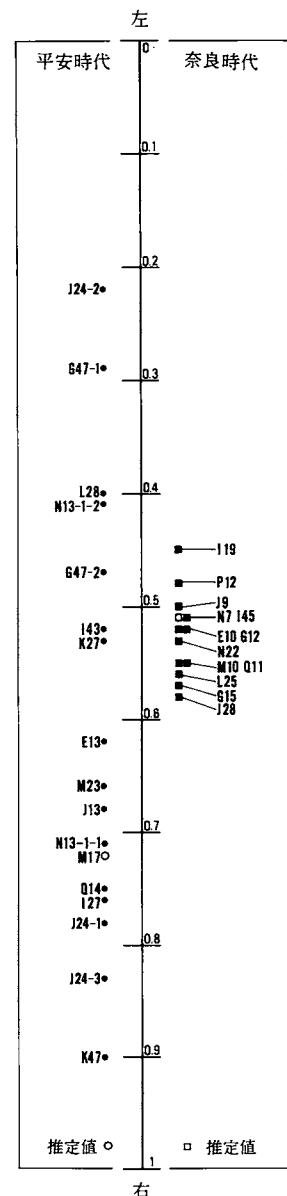


図11 カマド位置分布

N13-1の1号、I27、I43の3基である。すべて平安時代に属し、割り貫き式と思われる。IV型は上り勾配後水平型であり、H9、E13、M23の3基である。すべて平安時代に属し、E13は割り貫き式と思われる。奈良時代のI型、平安時代のII・III・IV型に分かれるのが特徴的である。

最後に奈良時代と平安時代の住居跡を比較すると、カマドの方位や設置位置、本体部や煙道部の作り方、柱穴位置や配置などに変化がみられる。このような竪穴住居の構造の変化の原因はわからないが、平安時代が変化の大きい時代であったことを反映しているものと思われる。

### 3. 土坑

土坑は24基検出されている。平面形は、円形・隅丸正方形7基、楕円形・隅丸長方形4基、不整形1基、長方形12基である。長径が1.5m以上で、短径が長径の70%未満は長方形に区分している。深さは20cm未満8基、20~39cm5基、

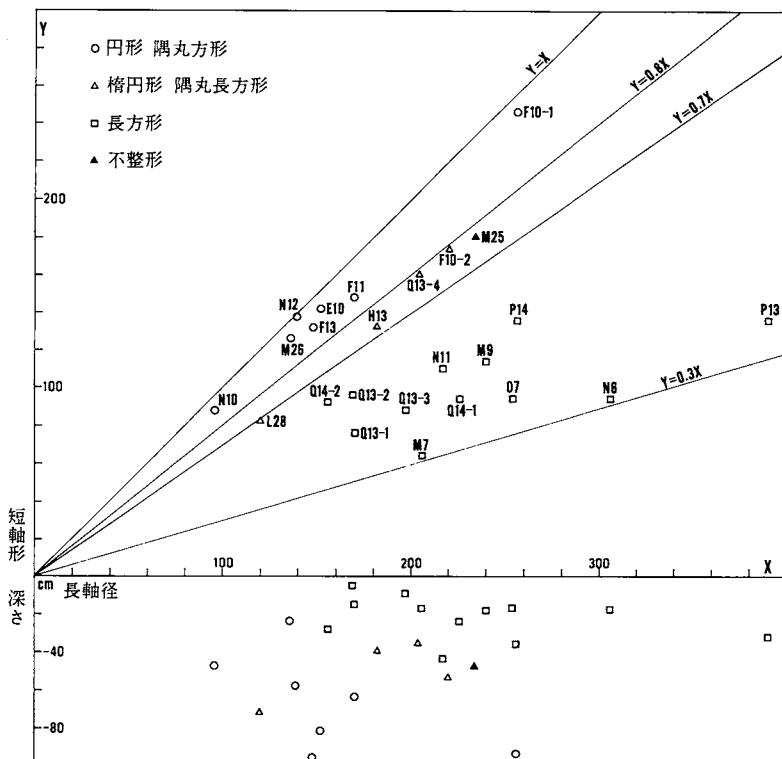


図13 土坑の長軸径・短軸径・深さの分布

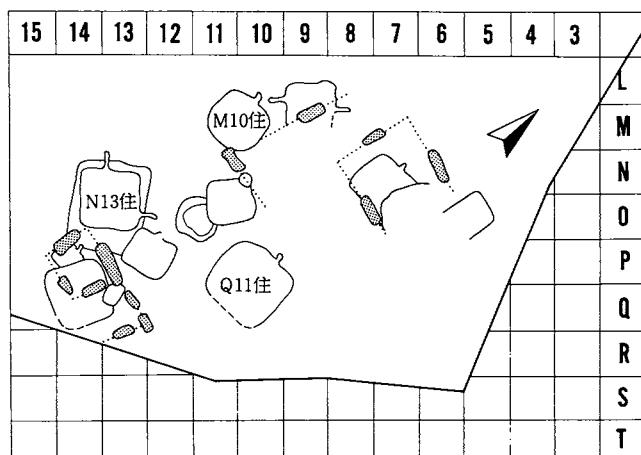


図14 長方形土坑の分布

40～59cm 6 基、60～79cm 2 基、80～99cm 3 基である。

特に長方形の土坑群は深さは平均 21cm と浅く、短径：長径の比が 1：2 前後に集中している。長さは最小 156cm、最大 390cm で 2.5 倍の開きがあるが、長軸方向や配置、埋土などに共通した特徴がみられる。長軸方向が南北方向 5 基、東西方向 7 基であり、それぞれ、平均 N—10°—E と N—81°—E に長軸方向を持ち、コの字状や四角形の配置を示す。また、これらの土坑の 7 基までが住居跡を切っており、埋土に下位起源の土をブロック状に含む例が多い。時期を特定できる資料が少ないが、住居跡との切り合い関係から上限は平安時代までであり、下限は不明である。

その他の土坑の時期は、E 10、F 10—1、F 10—2、F 13、N 12、H 13、L 28 は奈良時代、N 10、Q 13—4、M 25 は平安時代と推定しておく。F 11、M 26 は奈良～平安時代である。

遺物からみると、Q 13—4 土坑は J 13 住居跡と、M 25 土坑は M 23 住居跡と、N 12 土坑は M 13 住居跡と共伴関係がある。

#### 4 出土遺物

##### (1) 奈良時代の土器

ロクロ不使用土師器について図 15 に口径と器高の分布を示した。出土点数の割に完形品が少ないので分類方法としての有効性に疑問が残るが、図をもとに口径に対する器高の比が 0.6 未満を壺類、0.6 以上を甕類に大別した。なお、形態や機能の異なる甕や頸部径が体部最大径の 2 分の 1 以下を壺とし甕と区別した。

##### 土師器壺

壺は図 15 のように、口径の大きさによって S S (極小型)、S (小型)、M (中型)、ML (中大型)、L (大型) の 5 段階に区分した。その結果は S S 4 点、S 10 点、M 8 点、ML 5 点、L 3 点であり、さらに口径に対する器高の比 I ~ IV 型を組み合わせると 14 類に細分される。大きさによる分類以外にも特徴から、

1 類 無段丸底で口径に対する比が 0.2 ~ 0.5 のもの 12 点

2 類 無段丸底で口径に対する比が 0.5 ~ 0.6 のもの 5 点

3 類 無段平底のもの 2 点

4 類 沈線または段のあるもの 12 点 に分類した。4 類はさらに沈線のあるもの、内外面に段があるもの、外面だけに段があるものなどに細分できる。

壺の共伴例は少ないが、J 9 住居跡では 2 類と 4 類、G 12 住居跡では 1 類と 2 類、I 19 住居跡では 1 類と 4 類、L 25 住居跡では 3 類と 4 類、N 26 住居跡では 1 類と 4 類が共伴する。4 類を中心とした各種の共伴関係がみられることから、壺だけでの時期区分は困難である。

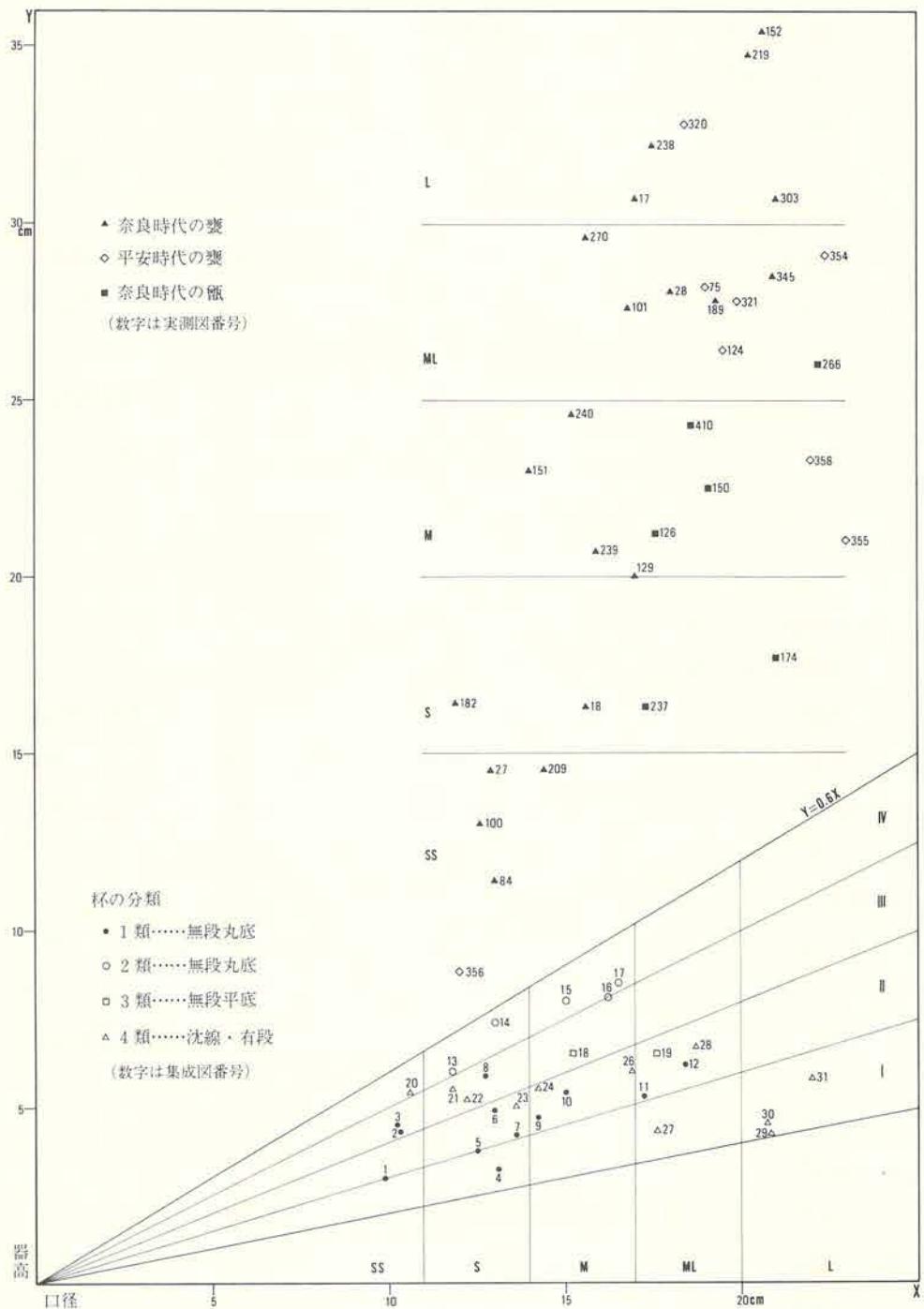


図15 口クロ不使用土師器口径・器高分布と分類

## 土師器甕

器高の大きさによって図15のように S S (極小型)、S (小型)、M (中型)、ML (中大型)、L (大型) の 5 段階に区分した。さらに特徴によって下記のように 3 類に大別した。

1 類 最大径が口縁部にあるもの。

2 類 頸部が括れ、口縁部径と体部最大径が同じくらいのもの。2 類はさらに体部最大径が上位にあるもの (2 a 類) と中央付近にあるもの (2 b 類) に細分される。

3 類 最大径が体部にあるもの。3 類はさらに最大径が中央にあり、体部が球体状のもの (3 a 類)、ソロバン玉状のもの (3 b 類)、胴長で楕円体状のもの (3 c 類) に細分される。また、最大径が体部下位にあるもの (3 d 類) もみられる。

住居跡出土分の分類結果は、1 類 4 点、2 a 類 19 点、2 b 類 7 点、3 a 類 6 点、3 b 類 2 点、3 c 類 2 点、3 d 類 1 点、分類不能としたもの 36 点である。2 類が最も多く、70.3% を占める。頸部に明瞭な段を持つものと持たないものは 50% ずつであり、口縁部が外反～外傾するものが 44 点で 88% を占める。内彎するものは 6 点と少ない。底部は下端が張り出すものが 25 点で 62.5% を占め最も多い。次いで直立するもの 9 点、下端が窄むもの 6 点である。

住居跡ごとにみると、M10 住居跡の 3 a 類、L25・J37 住居跡の 3 b 類、G12 住居跡の 3 c 類、P12 住居跡の 3 d 類などが特徴的である。M10 住居跡は頸部に段を持つもので構成され、G12・M13・E10 住居跡は段を持たないもので構成される。N7 住居跡は底部下端が張り出すものだけで構成され、J9 住居跡では各種タイプがみられる。J28 住居跡は口縁部の内彎するものが多い。全体的に住居跡ごとの個性がみられる。

## 土師器甕

遺構外を含めて 10 点出土しているが器高が計測できたのは 7 点である。総て無底式である。口径が器高より大きいもの (1 類) と小さいもの (2 類) があり、さらに口縁部に横方向の調整による僅かな段や括れがあるもの (a 類) とないもの (b 類) があり、2 a 類が過半数を占める。中長内遺跡では無底式甕は 3 点、二戸市上田面遺跡では 1 点出土しており、本遺跡は他の遺跡より出土率が高いように思われる。

## 土師器の構成と年代

奈良時代と推定される住居跡について土師器の器種別分類を一覧表 (表 3) に示した。出土点数が少なく共伴関係が不明瞭な上に、住居跡間の切り合い関係がみられないことが年代の前後関係の位置づけを困難にしているが、周辺の遺跡と比較して年代を検討してみたい。

本遺跡出土の甕の中には内外面有段丸底のものが含まれるが、口縁部が直立～内彎するものはみられない。また、平沢 I 遺跡の古墳～奈良時代に位置づけられている器高の一段と大きい長胴甕はみられないことから、本遺跡のロクロ不使用土師器は、久慈市内では上野山遺跡や平沢

遺跡より新しく奈良時代と考えられる。

本遺跡の壺と甕をみると、壺は無段のものと沈線や段を持つものに分かれる。甕は頸部に段を持つものと持たないものに分かれ、さらに底部は下端の張出しの強いものと張出しがなく直立～窄むものとに分かれる。これらの土師器は混在しながらも組み合わせには一定の傾向が認められる。

表3. 奈良時代住居跡土師器器種別分類表

住居	壺				甕										甕 頸 部			甕 底 部			甕	壺
	1	2	3	4	1	2 a	2 b	3 a	3 b	3 c	3 d	不明	無段	有段	直立	張出	窄む					
N 7				1		2		1					5	2	2		6					
D 9																						
J 9	1		2		1	3							7	3	3	2	3	2	1 a ..... 1			
E 10				1	2		1						3	5				1				
M 10			1		2		3						1		5	1	2		2 a ..... 1			
Q 11	1					1							1		2		4		1		2 a ..... 1	
G 12	4	1			1	2							1	5	4			1	2	1		
P 12		1			1	1							1	2	1	1	2			a ..... 1 2 b ..... 1		
M 13			1		3	2								4			1	1				
P 14	1																					
G 15														2		2	1					
I 19	1		2																			
K 22			1	1									1	1	1		1					
N 22					1								1			1		2				
M 24			1																			
L 25		1	2	1					1				1	2				2				
N 26	1		1										2	1					1		1	
J 28					2								4	3	2		2			2 b ..... 1		
J 37					1			1					1	1			1	1	2 a ..... 1			
I 41					1								1									
I 45					1										1							
H 47								1							1				1 b ..... 1			
計	8	3	2	11	4	19	7	6	2	2	1	36	28	24	8	24	5		8	1		

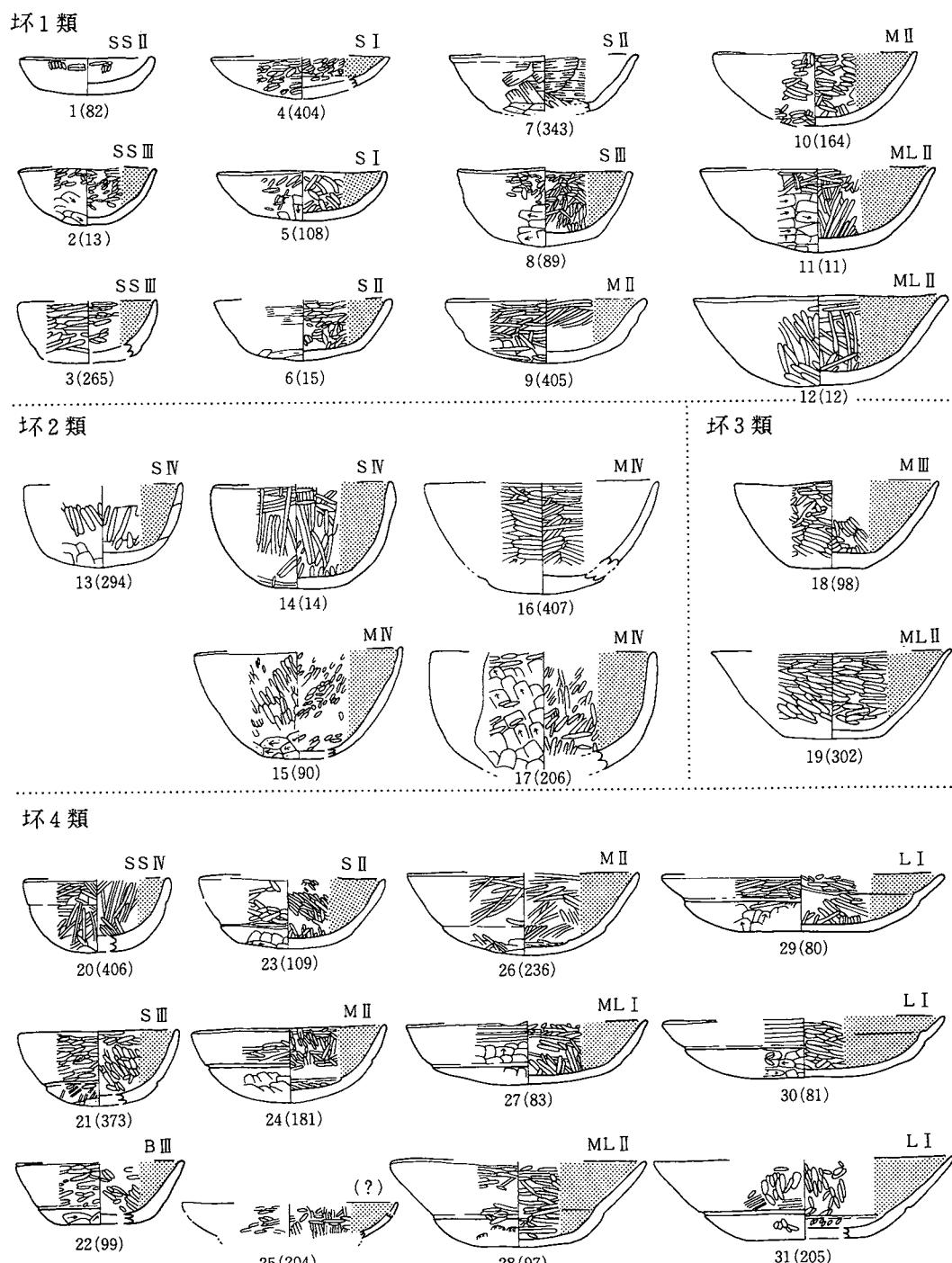


図16 奈良時代土師器集成図(1)

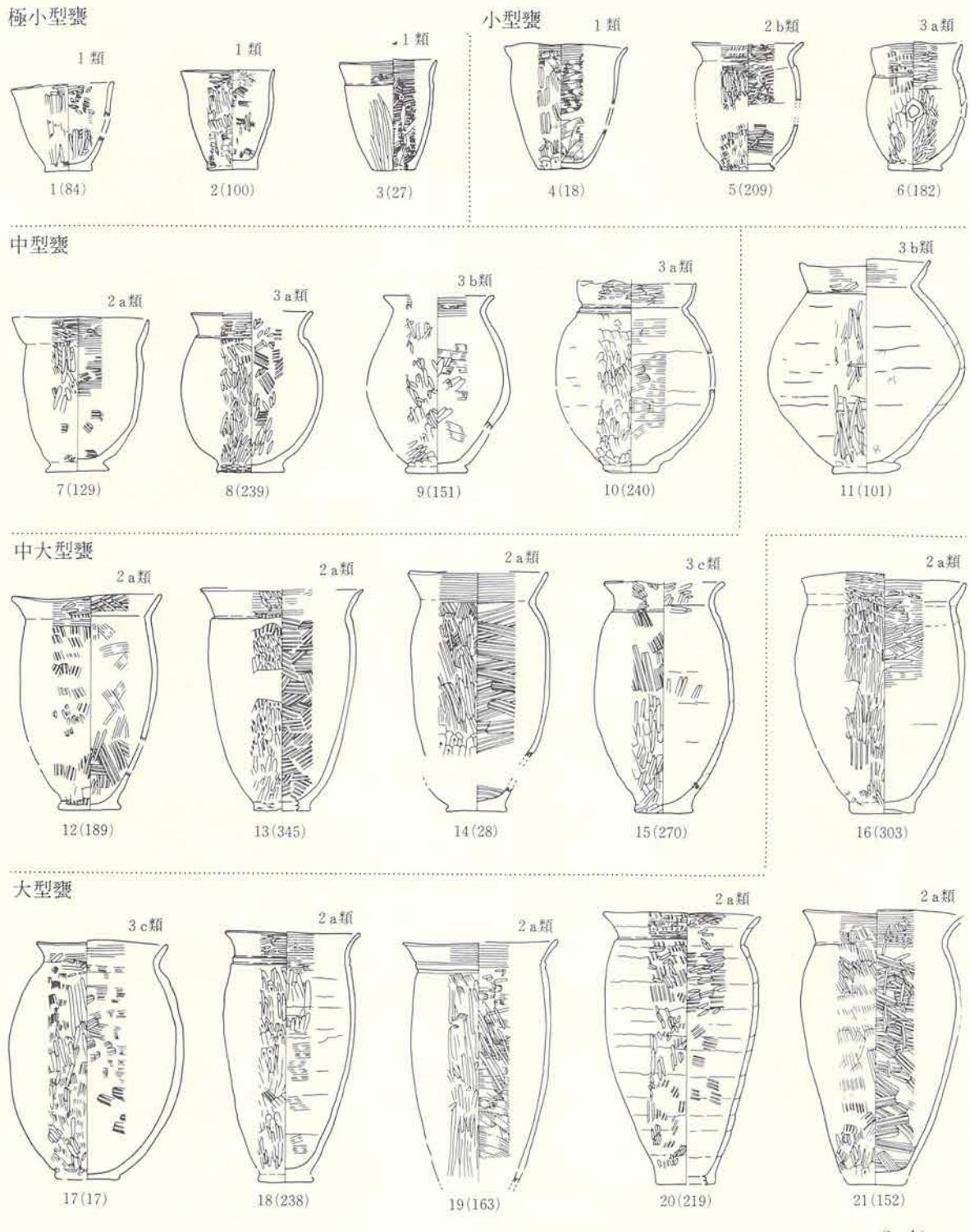


図17 奈良時代土師器集成図(2)

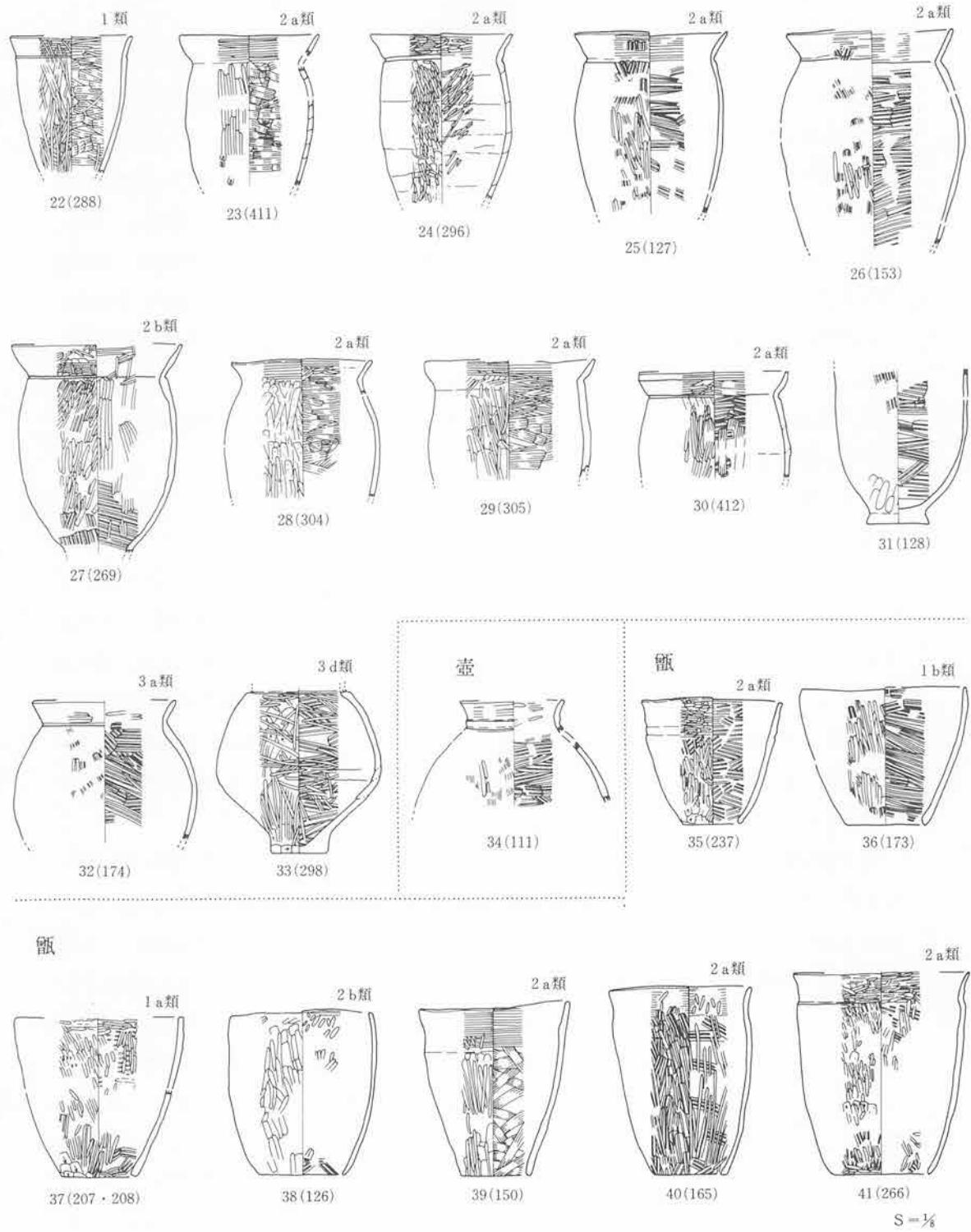


図18 奈良時代土師器集成図(3)

主な住居跡をみるとM10住居跡は壺4類、甕2a類、3a類、甌2a類からなり、頸部の段や底部の張出しなど二戸市堀野遺跡の特徴に極めて類似する。一方G12住居跡は壺1類を主とし、甕1類・2a類・3c類で構成され、無段丸底の壺と頸部に段を持たない甕からなる軽米町駒板遺跡の特徴に類似する。全体的には二戸市内の堀野・上田面遺跡、長瀬C・中曾根遺跡に類似するものと駒板遺跡に類似するものからなり、両者の特徴を併せ持つ住居跡もみられる。以上のことから、本遺跡のロクロ不使用の土師器については、堀野遺跡→上田面遺跡→長瀬遺跡→中曾根遺跡の順とする二戸地方の編年〔関（1981）・高橋（1982）・相原（1983）〕を参考にし、堀野・上田面遺跡に類似するI群と、駒板・長瀬・中曾根遺跡に類似するII群に分類した。I群は主として壺4類、甌a類、頸部に段を持つ甕からなり、II群は主として壺1類、甌b類、頸部に段を持たない甕からなる。時期は前者をI期、後者をII期とした。I期は8世紀前葉～前半期、II期は8世紀中葉～後半期を推定しておく。

## （2）平安時代の土器

### 土師器壺

ロクロ使用の壺は破片を含めて95点掲載している。内訳は、内面黒色処理されているもの（I類）53点、ロクロ調整痕以外に再調整がなく内面黒色処理されていないもの（2類、いわゆる赤焼き土器）15点、内面にミガキが施されているが黒色処理不明のもの（3類）6点、高台のあるもの（4類）21点である。I類のうち、底部が残っている24点は底部全面が再調整されているもの（1a類）8点、底部周辺が再調整されているもの（1b類）6点、再調整のみられないもの（1c類）10点である。1a類の底部再調整は手持ちヘラケズリが7点、回転ヘラケズリが1点である。回転ヘラケズリ再調整は3類にも1点ある。

次に集成図中の1・2・3・4・8・9・12・14・15・16・17・19・21・22・23・25・33・34・35・37・38・42・43の23点の法量をみると、口径の分布は13cm大が最も多く、12cm以上～15cm未満が18点で82.6%を占める。口径の平均値は1a類が13.3cm、1b類が13.6cm、1c類が13.4cm、2類が12.6cm、4類が14.6cmである。個体数は少ないが、1類に比べて2類はやや小さく、4類は大きい傾向がある。また4類は個体差があり、分布にバラツキがある。

次に口径に対する器高と底径の指数（器高÷口径×100、底径÷口径×100）の分布を図19に示した。4類の指数は高台部を除く壺部の値である。器高指数平均は1a類が39.4、1b類が36.2、1c類が39.1、2類が32.3、4類が39.7である。2類が小さく、4類は大きいものと小さいものに2分される傾向がある。4類の壺部と高台部の関係をみると、器高指数の大きいものは高台部が底く、下端の開きは小さい。これに対して器高指数の小さい37と38は高台部が高く、下端の開きは大きい。底部指数平均は1a類が49.5、1b類が45.3、1c類が44.6、2類が44.6、4類が50.8である。1類に比べて2類が小さく、4類が大きい傾向がみられる。1類

の中では器高・底径指数とも 1 c 類のバラツキが小さい傾向がみられる。

住居跡ごとの構成では、全体的に 1 類が多いが、1 類と 4 a 類だけの住居跡と 2 類や 4 b 類の含まれる住居跡とに分かれる。

### 土師器甕

住居跡から出土した平安時代の甕は83点掲載している。内訳はロクロ使用のもの（1 類）が9点で10.8%を占める。ロクロ不使用のものは74点で89.2%である。完形品が少ないので形態分類はしていないが、ロクロ不使用のものについて口縁部をみると、口縁部が短く直立気味のものが（2 a 類）が6点、外傾・外反するもの（2 b 類）が38点、口縁部が外傾・外反するもので口唇部が外側に張り出すもの（2 c 類）が16点である。全体的に口縁部が短く、外反する傾向がみられる。また、2 c 類では口縁部に強いヨコナデがみられる。胎土に砂礫が含まれるのが特徴的であり、厚手のものと薄手のものに分かれるが両者は共伴する。器形は体部の脹らむものが多い。厚手の甕の中にはナタ状のヘラケズリ調整が施されるものがある。反面、器面調整が簡略化されているものも多い。

### 須恵器

破片を含めて住居跡 3 棟から 5 個体分出土している。器種別内訳は壺 1 点、長頸壺 3 点、甕（破片）1 点である。

### 土器の構成と年代

平安時代と推定される住居跡について土器の器種別分類を一覧表（表 4）に示した。本遺跡の特徴としての 4 類（高台付壺）の比率が高いことや 2 類がみられることが指摘できる。必ずしも明確ではないが、壺 2 類、壺 4 b 類、甕 1 類、甕 2 a 類の共伴関係が指摘できる。そこで前述の 4 項目を指標にして、該当項目がない住居跡を IV 群、2 つ以上の住居跡を V 群とした。該当項目が 1 つだけの住居跡については、L17 住居跡は切り合い関係から、L28 住居跡は壺 2 類が検出面からの出土であることから、K47 住居跡は位置やカマド方位などの特徴から IV 群とした。一方、J13 住居跡は甕 1 類が 2 点であることから、O5 住居跡は位置から V 群とした。

これらに先立ち、ロクロ使用と不使用の壺が共伴する J24 住居跡、V 群と重複し埋土に十和田 a 降下火山灰と白頭山火山灰が混じる N13—1 住居跡、須恵器を出土する E9 住居跡・Q14 住居跡の 4 棟を III 群として分類している。時期はそれぞれ III 期

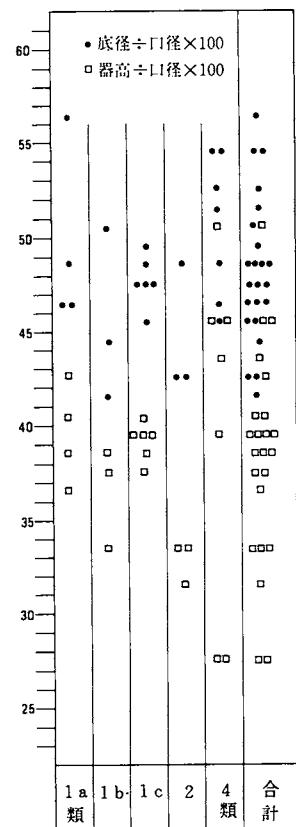


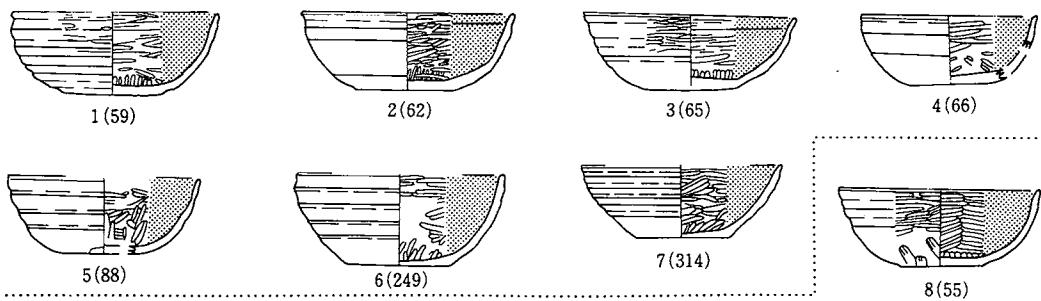
図19 器高・底径の指數

IV期、V期とした。III期は9世紀、IV期は10世紀、V期は10世紀後半から11世紀と推定しておく。IV期がV期に先行するものと思われるがその時間差は少ないかもしれない。

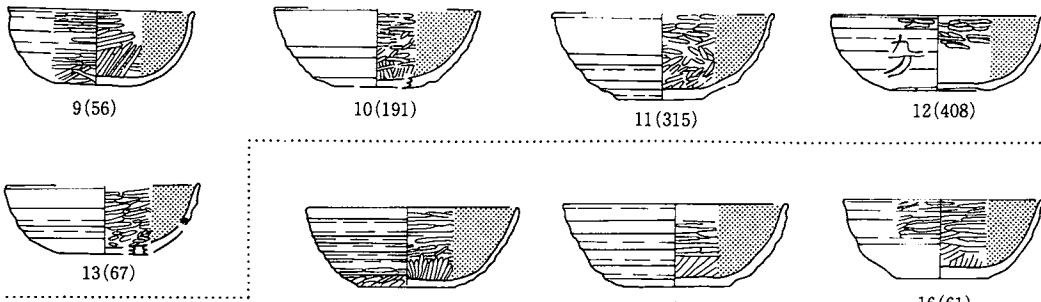
表4. 平安時代住居跡土師器器種別分類表

住居	环								甕					須恵器	支脚	
	1 a	1 b	1 c	1	2	3	4 a	4 b	1	2 a	2 b	2 c	不明		a	b
O 5					1			1								
E 9															1	
H 9	1	1		2								4	1	2		
L 9				1	2	1	1	1		1	1	1				
N 10	1			1	5		1		2		2					1
J 12			1	3	3				1	1	1		2		1	
E 13									1	1		1		2		
J 13				2		2			2		3					
N 13	1	1	1	2	1		2		1	2	1	1	1	3		2
Q 14															1	
L 17	4	3	6		1		3				2					
M 17									1	1	1	2	2			
M 23			2				2		1	1	7	2			1	
J 24	1										3		1			
I 27				3			1				2	2				
K 27				1			(1)				3					
L 28			1	2	1		3				4	1	3			
I 43				4		1	2				1	1				
G 47											1	5	1		1	
K 47					1								2			
計	8	5	11	21	15	4	16	3	9	6	38	16	14	5	3	3

坏 1 a類



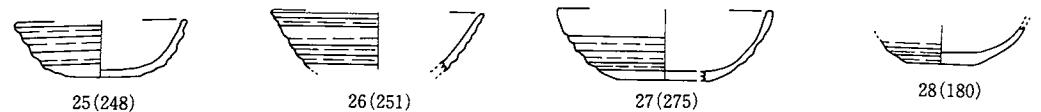
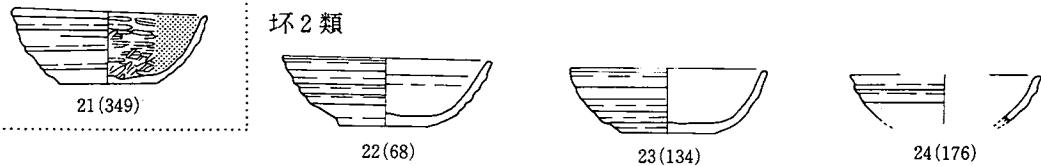
坏 1 b類



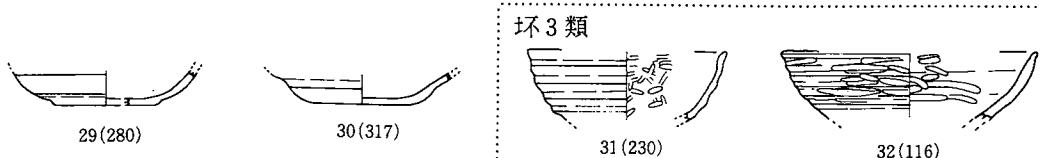
坏 1 c類



坏 2 類



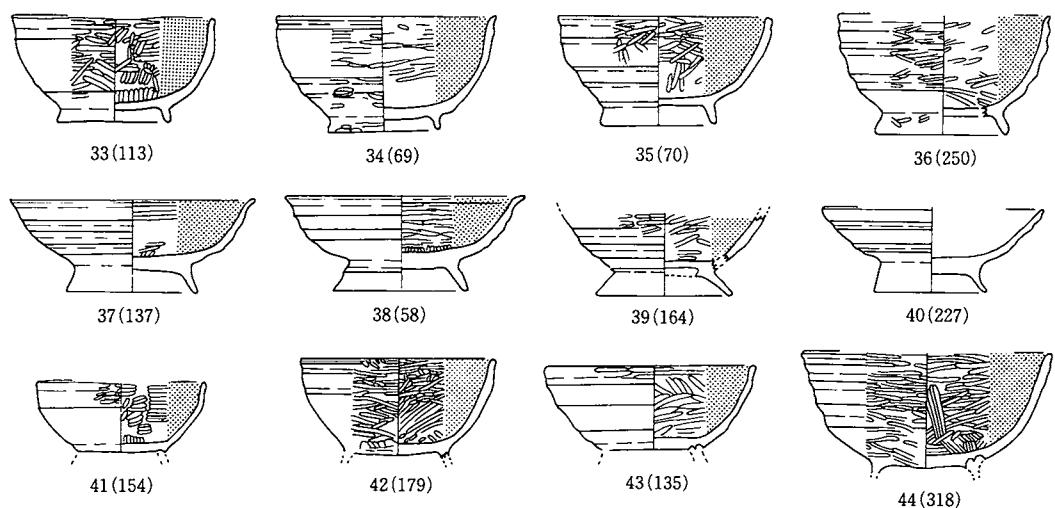
坏 3 類



$S = \frac{1}{6}$

図20 平安時代土器集成図(1)

环 4 類



土製支脚

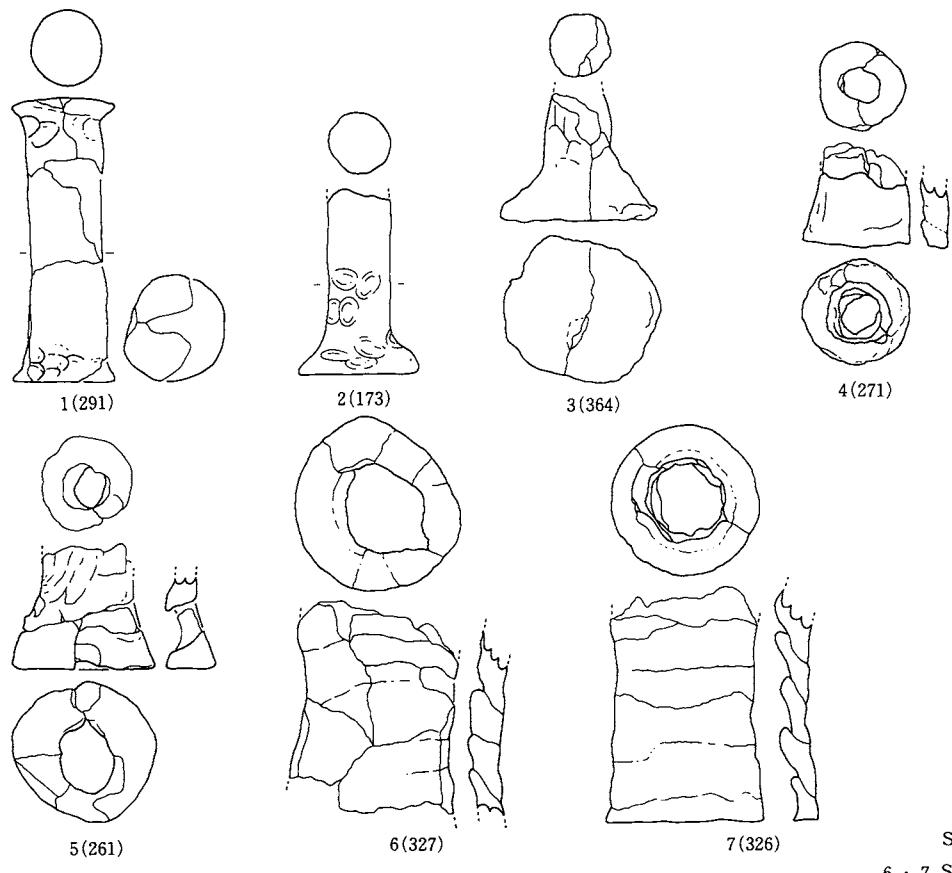
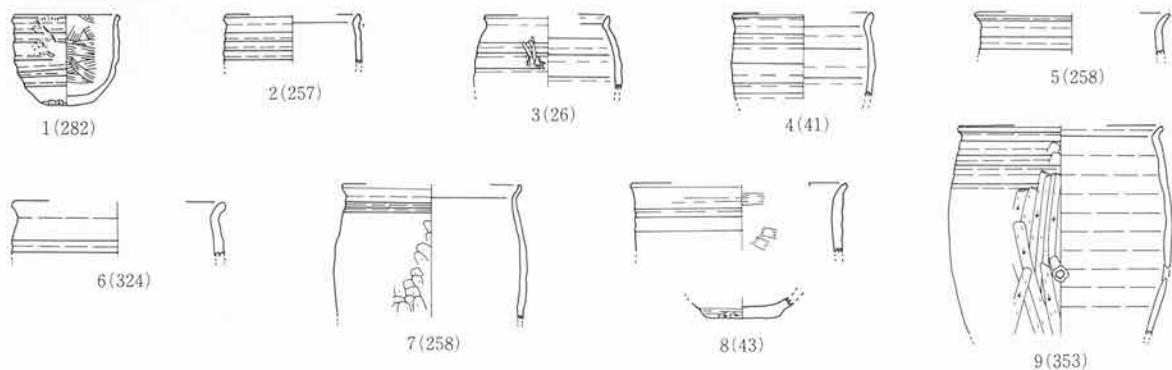
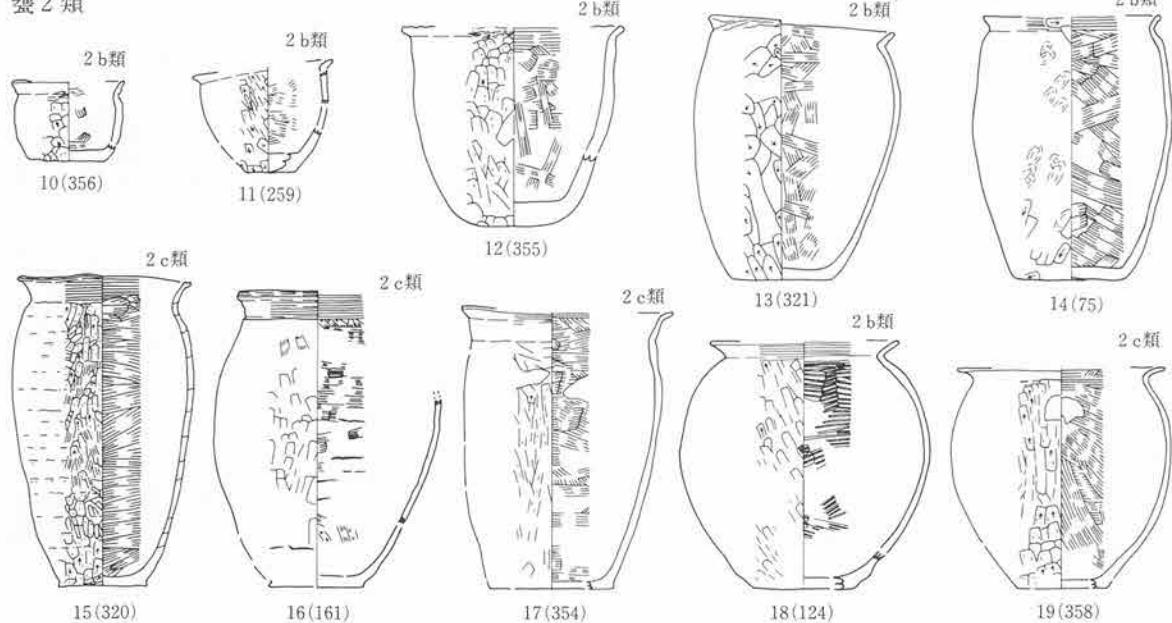


図21 平安時代土器集成図(2)

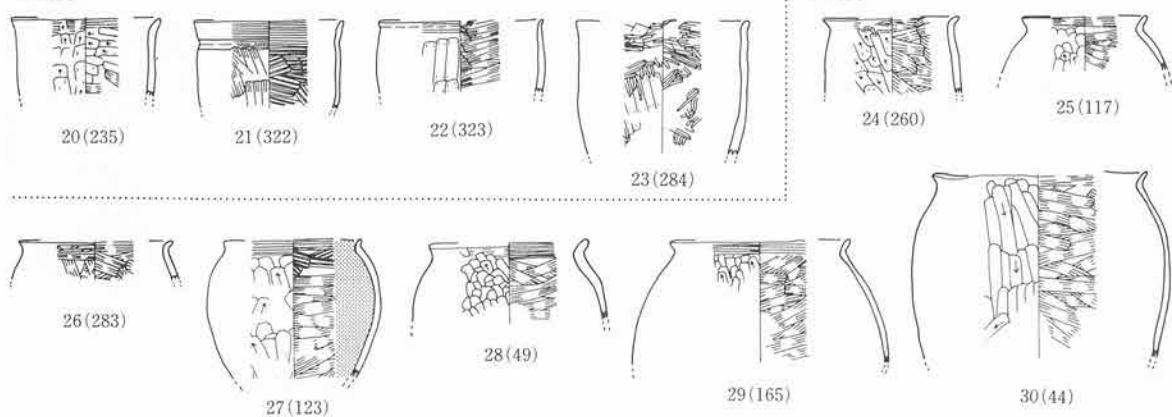
甕 I 類



甕 2 類



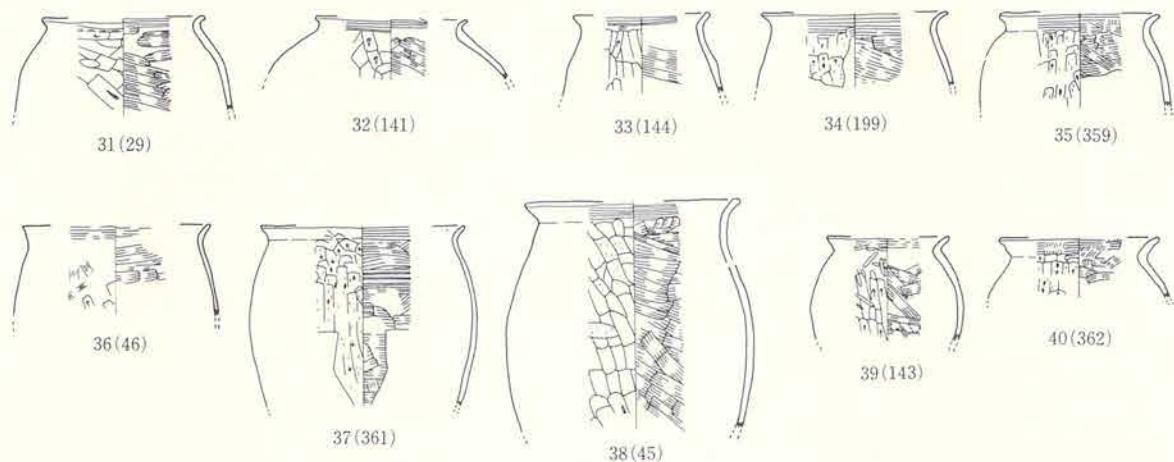
甕 2a 類



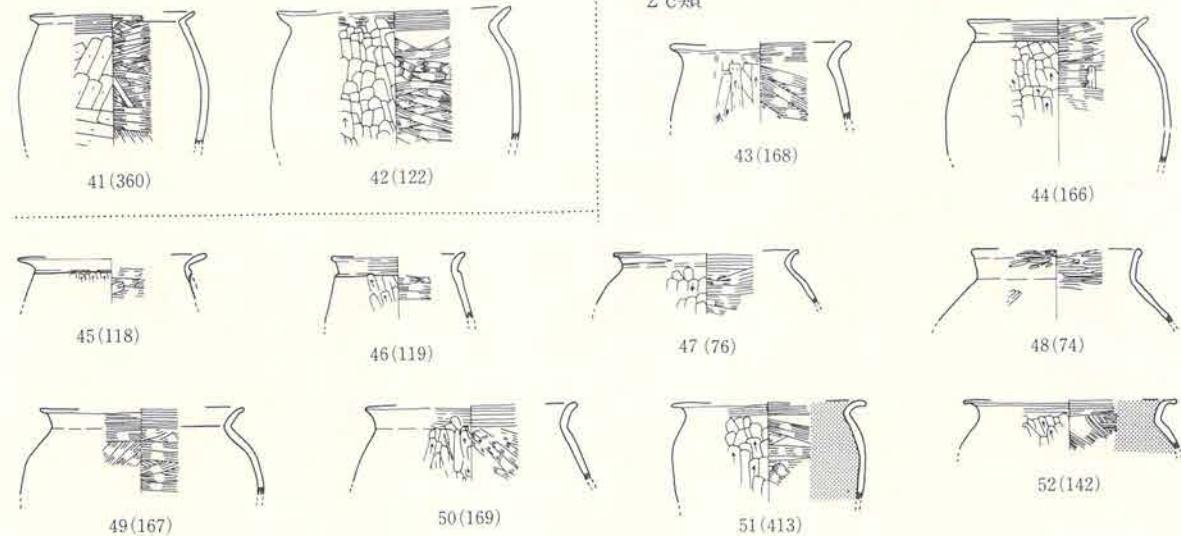
S = 1/4

図22 平安時代土器集成図(3)

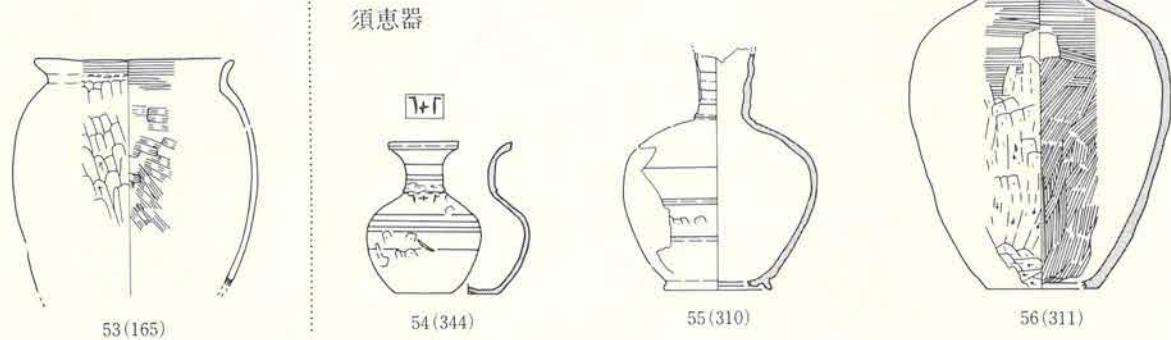
2 b類



2 c類



須恵器



S = 1/8

図23 平安時代土器集成図(4)

### (3) その他の遺物

#### 土製支脚

円柱状のもの（a類）が3点、円筒状のもの（b類）が4点出土している。使用状態で出土したのは、G47住居跡2号カマドのa類1点、N13—1住居跡2号カマドのb類2点である。a類は中長内遺跡や九戸村江刺家遺跡でも出土している。

#### 鉄器

鉄器は22点出土している。器種は刀子の身部6点、刀子の柄部3点、刀子の縁金具？2点、鎧・楔・釘・鎌・鋤が各1点、不明5点である。時期別には奈良時代6点、平安時代16点である。特に大型鉄製品は平安時代の住居跡から出土している。

主な器種をみると、鎧は浄法寺町飛鳥台地I遺跡のものと形状・大きさなどが類似する。鎌は中長内遺跡、軽米町駒板遺跡、二戸市長瀬C遺跡、飛鳥台地I遺跡などで出土しているが、本遺跡のものが最も大きい。鋤先は江刺家遺跡、長瀬C遺跡、飛鳥台地I遺跡などで出土している。いずれもU字形鋤先であるが、本遺跡以外のものは耳部の開きが大きい。

本遺跡では鍛冶工房を兼ねた住居跡は検出されていない。

#### 琥珀

10棟の住居跡から合計154.2g出土している。製品はN22住居跡出土の1点であり、原石が多い。20g以上出土した住居跡は、奈良時代のJ9・G12、平安時代のN13・J24の4棟の住居跡であるが、いずれも工房跡とは言えない。

#### 墨書土器

正位に「九万」と墨書された坏が遺構外から1点（第137図-408）出土し、さらに、同様と思われる坏片がN13住居跡から1片（第95図-312）出土した。2点とも書体は同じであり、同一人物によって墨書されたものと思われる。

墨書文字は、人名、官職名、地名、器物名、方位、自然、信仰、数量を表すものなど様々みられる。数字や大きさを表す墨書土器の出土例を表5に示したが「九万」という墨書土器例は少ないようである。中長内遺跡では一部欠損しているが「大万」と判読できる土器が1点出土している。なお、本遺跡では

表5. 数字・大きさを表わす墨書土器

墨書	県名	遺跡名	土器
二万	宮城	明神脇	土師器
三万	福島	金坂C	〃
五万	〃	御山千軒	〃
六万	岩手	杉ノ上III	〃
八万	秋田	一本杉	〃
〃	岩手	落合II	須恵器
十万	秋田	秋田城跡	赤焼き系
〃	福島	七斗蒔	土師器
廿万	岩手	下谷地B	須恵系
千萬	福島	御山千軒	須恵、土師
〃	〃	達中久保	土師器
〃	秋田	城神廻り	須恵器
上万	岩手	林崎	〃
大万	福島	郡山五番	土師器
中万	〃	赤坂裏	〃

+印のヘラガキを伴う須恵器の長頸壺（第101図-344）が1点出土している。

(注) 表5は下記の文献から作成したものである。

吉沢幹夫 1984 「宮城県の墨書き土器について」『研究紀要』10 39~57頁

伊藤博幸他1986 「岩手県内の墨書き土器」『胆沢城』昭和60年度発掘調査概報 40~46頁

### 種子痕の付着する土師器

L17住居跡の土師器3点に種子痕が付着していた。付着部位を図24に、写真を写真図版91・92に示した。鑑定結果は付編4に示している。

### 灰層の植物珪酸体分析・灰像分析

M25土坑から出土した灰層から、イネ起源と推定される珪化組織片が検出された。結果は付編5に示した。

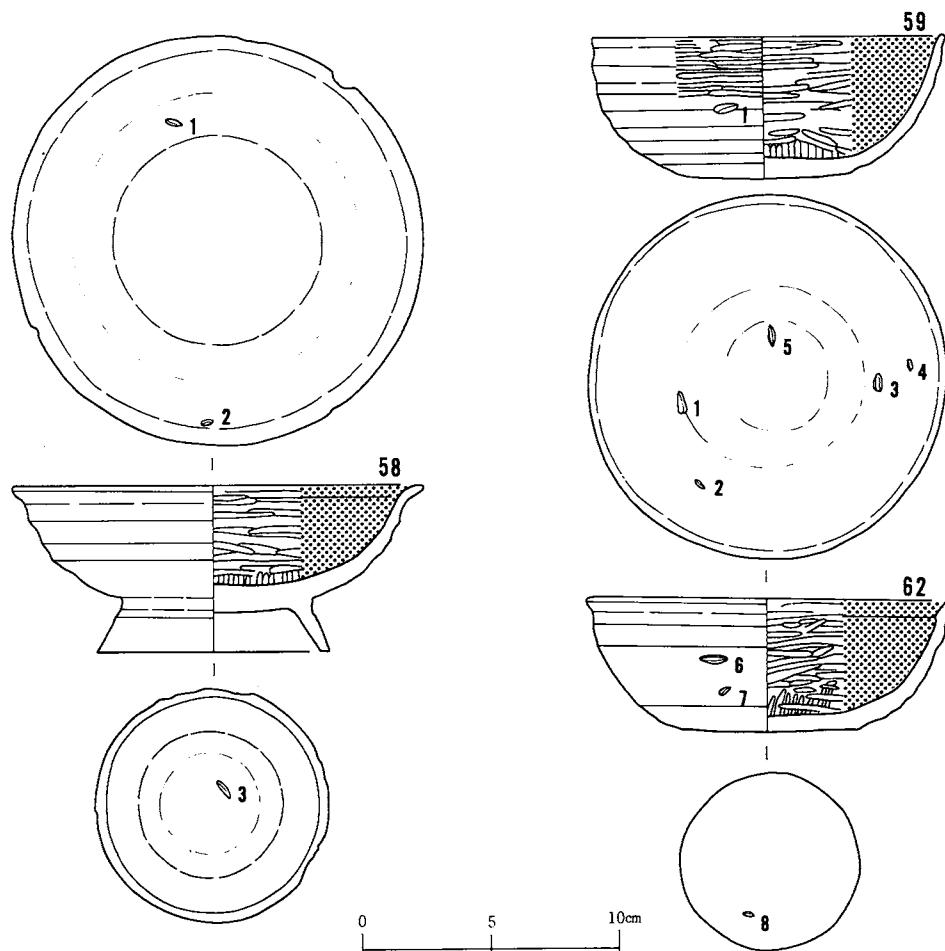


図24 種子痕の付着する土師器

## 5 源道遺跡のあゆみと集落の変遷

源道遺跡に縄文人が最初に往来したのは、今から7000年以上も前の縄文時代早期中頃であり、貝殻の腹縁を利用した貝殻文の土器片を残している。縄文時代の遺物は少なく、狩猟に用いた石鏃や粉碎具としての磨石がみられる程度である。遺構としては陥し穴状遺構が検出されており、狩り場として利用された時期があるが、調査区域内に集落は営まれていなかつたものと思われる。今から約2300年前の晩期末葉の土器片を最後に残し、縄文人の足跡は消える。

久慈地方では古墳は発見されていないが、古墳時代末期から奈良時代初期にかけて上野山遺跡や平沢I遺跡に規模は不明ながら集落が営まれるようになり、やや遅れて源道遺跡にも集落が営まれるようになる。本遺跡の奈良～平安時代の集落をI～V期に区分した。

I期はN7・J9・M10・Q11・I19・K22・N22・M24・L25・N26・J37・I45の12棟の住居跡からなり、時期は8世紀前葉～前半期と推定した。地形区別にはA区が5棟、B区が5棟、C区が2棟であり、C区の2棟がやや離れている以外は比較的まとまって分布しており、遺跡内では最も平坦に近い地形面を占地している。規模別には大型と中型が各1棟、小型(1)と小型(2)が各5棟である。個々の住居跡をみると、頸部に強い段を持つ長胴甕に共通点がみられるM10・I45の住居跡、内外有段で平底風丸底の壺に共通点がみられるI19・K22の住居跡、沈線による段を持つ平底気味の壺に共通点がみられるL25・N26の住居跡、底部下端が窄む同じ長胴甕が出土したJ9・J37の住居跡などに分かれる。このことは古い要素と新しい要素という時間的系列のほかに、集落起源の多様性が考えられる。個々の住居跡の時期決定はできないが、起源の異なる複数の集団からなる小規模な集落が継続して営まれてきたものと理解される。

II期はE10・G12・P12・M13・P14・J28・I41・H47の8棟の住居跡からなり、時期は8世紀中葉～後半期と推定した。地形区別にはA区が5棟、B区が1棟、C区が2棟であり、A区ではまとまっているが、B区・C区ではやや分散している。I期との重複を避けているためA区ではやや勾配のある稜線に沿って構築されるなど占地条件が悪くなっている。規模別には、大型が2棟、小型(1)が1棟、小型(2)が3棟、極小型が1棟、不明が1棟であり、I期よりも規模格差が拡大している。I期・II期の生産基盤の手掛かりは得られなかったが、他遺跡に比べて甕が多いことや織物に関係する土製紡錘車が出土していないことが特徴である。

III期はE9・N13-1・Q14・J24の4棟の住居跡からなる。J24住居跡はロクロ技術の普及期、N13-1住居跡は須恵器の普及期の住居跡と推定され、IV期・V期に先行する。両住居跡の間には時間差があると思われるが、一応9世紀とした。地形区別にはA区が3棟、B区が1棟である。I期・II期の住居跡を避けているがQ14住居跡だけはP12住居跡と一部重複している。N13-1住居跡とQ14住居跡の須恵器長頸壺は岩手県外からの搬入品である可能性があり、

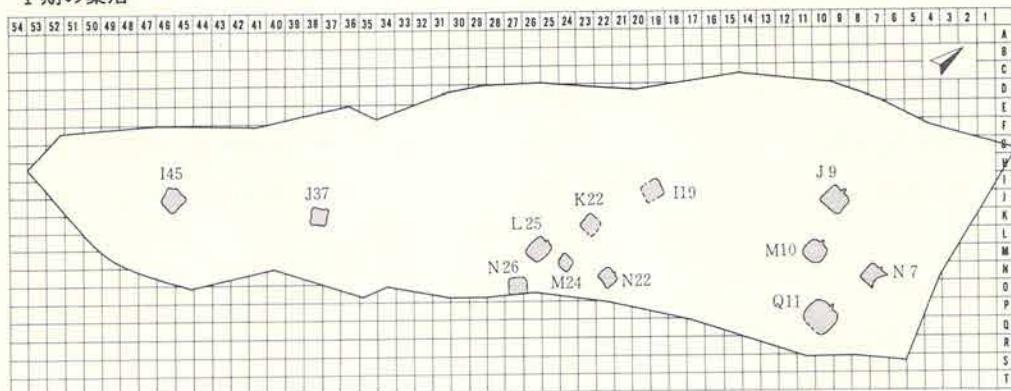
律令政府の北進との関係が強まつたことが理解できる。

IV期はH 9・L17・I 27・K27・L28・I 43・G47・K47の8棟の住居跡からなる。時期は埋土に火山灰がみられないことなどから、10世紀と推定した。地形区別にはA区が2棟、B区が3棟、C区が3棟であり、A区の2棟がやや離れているが、B区とC区では各3棟がまとまっている。規模別には、極小型の2棟以外は総て小型の住居跡であり、作り変えられたカマドを除くと南カマドを持つ住居跡は総てIV期のB区・C区の住居跡に限られていることから、B区・C区の6棟は同一集団と考えられる。K27住居跡などの極小型の住居跡の性格については、一般的の住居跡と同一機能を持つかどうか再検討する必要がある。

該期の生業についてみると、K47住居跡からは貝類が出土しており、沿岸での漁撈が行われていたものと思われる。また、L17住居跡では大麦痕の付着した土師器がみられることから、土師器生産地付近では畑地で穀物の作付が行われていたと推定される。

V期はO 5・L 9・N 10・J 12・E 13・J 13・N 13-2・M 17・M 23の9棟からなり、壊2類（赤焼き土器）の出現期である。時期は10世紀後半～11世紀と推定した。地形区別にはA区が8棟、B区が1棟であり、大型のN13-2住居跡を中心に小型の住居跡がA区にまとまっている。

#### I期の集落



#### II期の集落

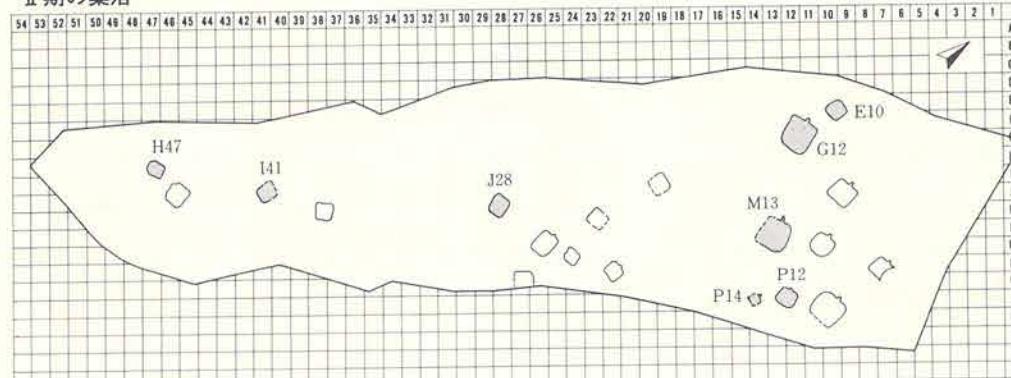
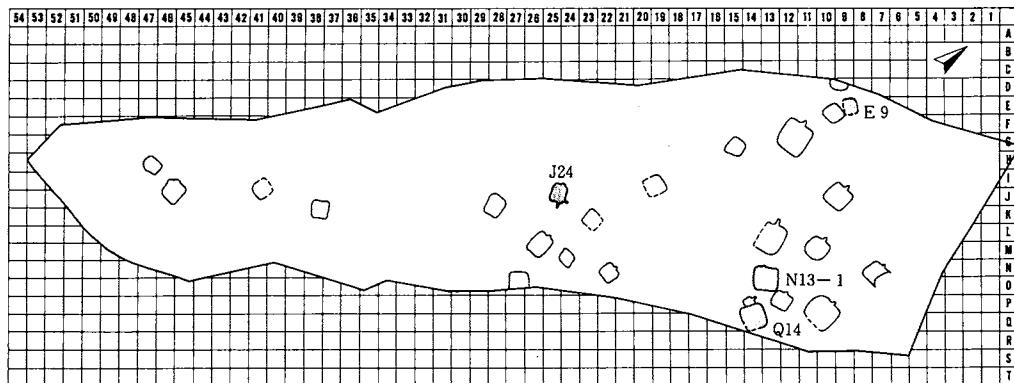


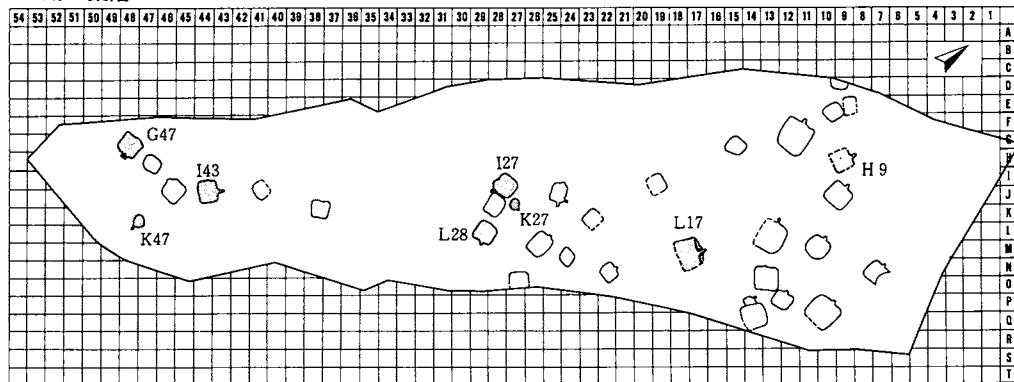
図25 奈良時代の集落の変遷

おり、カマドの方位は北～東の間にある。小型の住居跡は前期の住居跡との重複を避けているが占地条件の悪化がみられ、大型のN13-2住居跡は前期の住居跡に一部貼り床をして構築されており、重複がみられるようになる。I～IV期に比べV期は集落立地に変化があり、従来までの分散傾向がみられなくなり、標高の最も高いA区への集中がみられるようになる。その背

### III期の集落



### IV期の集落



### V期の集落

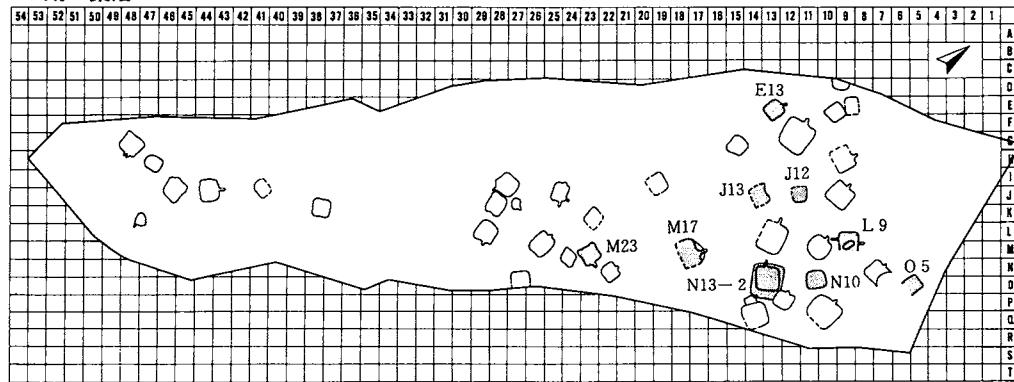


図26 平安時代の集落の変遷

景として生産基盤の変化や集落構成集団の変化などが考えられる。

V期の生産基盤の一つは稻作であったと思われる。平安時代遺跡の炭化米の出土例をみると、野田村中平遺跡では焼失住居跡内の箱状木製用器からまとまって出土している。また、九戸村江刺家遺跡では焼失住居跡から炭化した米、粟、小豆、麦が出土している。さらに、一戸町田中3遺跡では住居跡から炭化した米が茎についた稻穀の状態で出土し、稻束も出土している。特に田中3遺跡の出土状況は、米がほかの地域から運ばれてきたのではなく、周辺で作付されていたものであることを示している。源道遺跡では米は出土していないが、V期に属するM23住居跡と共にM25土坑の灰層から多量の稻起源と推定される珪化組織片が検出されており、稻の藁・穀を焼いた跡であることが判明した。この稻藁は搬入品とは考えにくく、稻作が当地方で行われていたとみるのが自然である。

次にV期に区分される住居跡から2点だけであるが鉄鏃が出土していること、高い地形面を占地している背景と併せて考えると、防衛(御)的思想を持った集団とみることもできる。また墨書き器が2点出土していることから、一般集落と思われる本遺跡でも有力者が識字層と交流を持っていたことがわかる。V期の集落を新しい移民団とみるよりは、IV・V期の土師器の胎土に大きな変化がみられないことから、IV期から継続する集団の階層変化を伴う集落の変化として理解される。

以上源道遺跡の奈良～平安時代の集落の変遷をI～V期に大別してみてきた。平面的には遺跡内に残された住居跡から、III期が4棟と減少する以外は10棟前後からなる集落が継続してきたとみられる。しかし、実態は集落の起源を含めて多様と思われ、律令政府の東北経営と密接な関係を持ちながら変遷してきたものと思われる。

土器分類・時期区分や年代設定など再考すべき点が多いと思われるが、近年増加してきた当地方の発掘調査の成果と比較検討してほしい。

#### 引用文献・報告書

- 米倉信之（1966）：陸中北部沿岸地域の地形発達史。『地理学評論』、第39巻、第9号、311—323。
- 照井一明（1982）：陸中海岸北部地域の海岸段丘と古流系。岩手県高等学校教育研究会地理部会誌、1—34。
- 草間俊一（1967）：野田村中平遺跡。Artes Liberales（岩手大学教養部報告）No2、36—48。
- 〃（1970）：『中平・上明内調査概要』。野田村教育委員会
- 〃（1971）：岩手県野田村広内遺跡。日本考古学年報19、85—86。
- 〃（1972）：岩手県野田村中平遺跡第二次調査概要。岩手史学研究No58、30—38。
- 鈴木恵治（1985）：弘仁年間における蝦夷征討と岩手県北地方の状況。『紀要V』。岩手県埋蔵文化財センター
- 高橋信雄（1982）：古代。『岩手の土器』。岩手県立博物館。
- 相原康二（1983）：岩手県南部（北上川中流域）における所謂第I型式の土師器前期土師器の内容について。『孝古学論叢①』。芹沢長介先生還暦記念論文集刊行委員会。

岩手県埋蔵文化財センター (1985)。『岩手の遺跡』。

久慈市教育委員会 (1976) : 『山屋敷遺跡発掘調査報告書』。久慈市文化財調査報告書第1集。

〃 (1978) : 『三崎(III) 遺跡発掘調査報告書』。久慈市文化財調査報告書第2集。

〃 (1979) : 『上新山遺跡発掘調査報告書』。久慈市文化財調査報告書第3集。

〃 (1984) : 『上野山(II) 遺跡発掘調査報告書』。久慈市文化財調査報告書第4集。

〃 (1985) : 『大芦遺跡発掘調査報告書』。久慈市文化財調査報告書第5集。

〃 (1985) : 『兼田農場遺跡』。現地説明会資料

〃 (1987) : 『小袖II遺跡発掘調査報告書』。久慈市文化財調査報告書第6集。

〃 (1987) : 『大尻遺跡発掘調査報告書』。久慈市文化財調査報告書第7集。

〃 (1988) : 『中長内遺跡』。久慈市文化財調査報告書第8集。

野田村教育委員会 (1987) : 『古館山』。野田村文化財調査報告書。

岩手県立博物館 (1987) : 『岩手県野田村根井貝塚発掘調査報告書』。岩手県立博物館調査研究報告書第3冊。

岩手県埋蔵文化財センター (1981) : 『長瀬C遺跡』。岩手県埋蔵文化財調査報告書第22集

〃 (1981) : 『上田面遺跡』。岩手県埋蔵文化財調査報告書第23集。

〃 (1982) : 『長瀬B遺跡』。岩手県埋蔵文化財調査報告書第36集

〃 (1983) : 『上の山VII遺跡発掘調査報告書』。岩手県埋蔵文化財調査報告書第60集

〃 (1983) : 『上野山遺跡発掘調査報告書』。岩手県埋蔵文化財調査報告書第67集。

〃 (1984) : 『江刺家遺跡発掘調査報告書』。岩手県埋蔵文化財調査報告書第70集。

〃 (1984) : 『小屋畠遺跡発掘調査報告書』。岩手県埋蔵文化財調査報告書第80集。

岩手県文化振興事業団 (1986) : 『五庵I遺跡発掘調査報告書』。岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第97集。

〃 (1986) : 『駒板遺跡発掘調査報告書』。岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第98集。

〃 (1986) : 『桂平遺跡発掘調査報告書』。岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第110集。

〃 (1987) : 『親久保II遺跡発掘調査報告書』。岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第116集。

〃 (1987) : 『田中IV遺跡発掘調査報告書』。岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第117集。

〃 (1987) : 『飛鳥台地I遺跡発掘調査報告書』。岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第120集。

〃 (1988) : 『平沢I遺跡発掘調査報告書』。岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第125集。

二戸市教育委員会 (1981) : 『中曾根II遺跡発掘調査報告書』。

一戸町教育委員会 (1981) : 『一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書I』。

表6. 掲載遺物一覧表(1)

(土器器……Y=ヨコナデ、N=ヘラナデ、K=ヘラケズリ、M=ヘラミガキ、H=糊目、R=ロクロナデ)

遺物番号	図版番号	器種	出土状況	外面調整		内面調整		法量			口クロ 有無	備考	縮尺 図写真	
				口縁部	体部	口縁部	体部	口径	底径	器高				
1 第18図	石鉄	D 9住居	埋土	長さ2.2cm	幅1.1cm	厚さ3.8cm							平基鐵 流紋岩	1/1 1/1
2 第21図	須恵器	E 9住居	カマド埋土										2片が接合	1/3 1/2
3 #	壺	E 10住居	カマド付近	N・M	—	N・M	—	—	—	—		○ 内黒	1/3 1/2	
4 #	甕	#	#	Y・M	M	Y・M	M	(19.4)	—	(14.8)		○	1/4 1/3	
5 #	甕	#	#	—	H・M	—	H・M	(20.8)	—	(17.3)		○ 輪積痕(内面)	1/4 1/3	
6 #	甕	#	#	Y・M	M	N・M	N	15.7	—	(6.5)		○	1/4 1/3	
7 #	甕	#	#	—	—	(N)	—	—	—	—		○	1/4 1/3	
8 #	甕	#	#	Y・M	N・M	Y	N・M	(16.0)	—	(10.6)		○ 輪積痕(内面)	1/4 1/3	
9 #	甕	#	#	—	M	—	N	—	—	—		○	1/4 1/3	
10 #	甕	#	#	—	—	—	—	—	7.2	(4.8)		○ 木葉痕	1/4 1/3	
11 第24図	壺	G12住居	Q3埋土	M	K	M	M	17.2	—	5.3		○ 内黒・丸底	1/3 1/3	
12 #	壺	#	土坑3	M	K・M	M	M	18.4	—	6.2		○ 内黒 平底丸底	1/3 1/3	
13 #	壺	#	#	M	K	M	M	(10.3)	—	4.3		○ 内黒 丸底	1/3 1/3	
14 #	壺	#	Q2埋土	M	M	M	M	(13.0)	—	7.4		○ 丸底 内黒	1/3 1/3	
15 #	壺	#	北西床	N	K	M	M	(13.0)	—	4.9		○ 丸底 内黒	1/3 1/3	
16 #	壺	#	Q3埋土	M	H・M	M	H・M	—	—	—		○ 内黒	1/4 1/4	
17 #	甕	#	南西床	Y	H・M	Y	H	17.0	8.2	30.7		○ 木葉痕	1/4 1/4	
18 #	甕	#	#	Y	M	Y	H	15.6	5.7	16.3		○	1/3 1/3	
19 #	甕	#	Q3埋土	M	H・M	M	H・M	—	—	—		○	1/4 1/3	
20 #	甕	#	土坑3	M	N・M	Y	N	(11.3)	—	(15.7)		○	1/4 1/4	
21 #	甕	#	南西床	—	H・M	H	H・M	(20.6)	—	(15.8)		○	1/4 1/4	
22 第25図	甕	#	Q1埋土	—	M	—	H	—	—	(11.2)		○	1/4 1/3	
23 #	甕	#	土坑3	—	M	—	—	—	8.7	(3.5)		○ 木葉痕	1/4 1/3	
24 #	甕	#	埋道	—	M	—	—	—	9.5	(11.8)		○ 底部にX印ヘラガキ	1/4 1/3	
25 #	琥珀	#	カマド付近	47×33×34mm 23.88g 全重量45.36g									1/1 1/1	
26 第27図	甕	E 13住居	床・土坑1	N	R・M	R	R	(12.6)	—	(8.5)	○		1/4 1/3	
27 #	甕	#	北壁上位	Y	H・M	Y	H・M	12.9	5.5	14.5		○ 木葉痕	1/4 1/3	
28 #	甕	#	埋土中位	Y	H・M	Y	H	18.0	7.8	(28.0)		○ 木葉痕	1/4 1/4	
29 #	甕	#	埋土	N	K	Y	N	(16.8)	—	(10.0)		○	1/4 1/3	
30 #	甕	#	埋土	N・M	—	N	—	—	—	—		○	1/4 1/3	
31 #	甕	#	土坑4	—	K	—	N	—	—	—		○	1/4 1/2	
32 #	甕	#	土坑4	—	K	—	N	—	—	—		○	1/4 1/3	
33 #	甕	#	北壁上位	—	H・M	—	H	—	—	—		○ 輪積痕	1/4 1/3	
34 #	壺	#	土坑2	—	—	—	—	—	8.3	(2.2)	○	高台部	1/3 1/3	
35 第28図	石斧	#	埋土下位	長さ9.2cm 最大幅4.5cm 最大厚2.9cm 重量218g								重文ト質淡緑色 凝灰岩	1/2 1/2	
36 #	砥石	#	床面	長さ7.1cm 最大幅4.3cm 最大厚2.6cm 重量142g								流紋岩	1/2 1/2	
37 第29図	壺	J 13住居カマド・土坑	—	R	—	M	—	—	(2.5)	○	底部再調整 (回転ヘラケズリ)	1/3 1/3		
38 #	壺	#	土坑	R・M	—	R・M	—	—	—	—	○	内黒	1/3 1/2	
39 #	壺	#	土坑	R	—	R・M	—	—	—	—	○	内黒	1/3 1/2	
40 #	壺	#	カマド・土坑	R・M	R・M	R・M	R・M	(16.9)	—	(4.5)	○		1/3 1/3	
41 #	甕	#	カマド	R	R	R	R	(14.6)	—	(9.3)	○		1/4 1/3	
42 #	甕	#	土坑	M	M	Y	N	—	—	—	○		1/4 1/3	
43 第30図	甕	#	カマド・土坑	R	R	R	R・N	(22.0)	7.0	(9.3)	○	回転糸切り	1/4 1/3	
44 #	甕	#	カマド・土坑	—	K	Y	N	(22.6)	10.5	(22.5)	○		1/4 1/4	
45 #	甕	#	検出・土坑	Y	K	Y	N	(22.5)	—	(26)	○		1/4 1/4	
46 #	甕	#	土坑	Y	—	Y	N	(20.0)	—	(9.6)	○		1/4 1/3	
47 第31図	鉄製品	#	検出面	長さ7.3cm 最大幅2.6cm 最大厚1.5cm 重量56.7g								模	1/1 1/1	
48 第32図	壺	G15住居	埋土	R・M	R・M	R・M	R・M	(14.7)	—	(3.0)	○	内黒	1/3 1/3	
49 #	甕	#	検出面	Y	K	Y	N	(16.6)	—	(8.7)	○		1/4 1/3	
50 #	甕	#	Q1埋土	Y	K	Y	N	—	—	—	○		1/4 1/2	
51 第32図	甕	G15住居	検出面	—	—	—	—	—	6.2	(4.7)	○		1/3 1/3	
52 #	甕	#	埋土	—	—	—	—	—	(7.0)	(3.0)	○	木葉痕	1/4 1/3	
53 第33図	砥石	#	床面	長さ8cm 最大幅5.9cm 最大厚2.7cm 重量170g								流紋岩、使用面3面	1/2 1/2	
54 第35図	壺	L17住居	床面①	R・M	R	R・M	R・M	13.4	6.6	5.3	○	内黒、回転糸切り	1/3 1/3	

表6. 掲載遺物一覧表(2)

遺物番号	図版番号	器種	出土状況	外面調整		内面調整		法量			ロクロ有無	備考	縮尺	
				口縁部	体部	口縁部	体部	口径	底径	器高			図	写真
55	第35図	坏	L17住居 ②	R・M	R	R・M	R・M	13.6	5.6	5.2	○	内黒 回転糸切り	1/3	1/3
56	"	坏	" ③	R・M	R・M	R・M	R・M	12.5	6.3	4.6 5.6	○	内黒 回転糸切り	1/3	1/3
57	"	坏	" ④	R	R	R・M	R・M	13.7	6.5	5.6	○	内黒 回転糸切り	1/3	1/3
58	"	坏	" ⑤	R	R	R・M	R・M	15.9	9.1	6.5	○	高台付坏 内黒 回転糸切り モミ痕3	1/3	1/3
59	"	坏	" 床面⑥	R・M	R	R・M	R・M	13.8	6.7	5.8	○	内黒 手持ヘラケズ リモミ痕1	1/3	1/3
60	"	坏	" ⑦	R	R	R・M	R・M	14.6	7.0	5.6	○	内黒 回転糸切り	1/3	1/3
61	"	坏	" ⑧	R・M	R	R・M	R・M	13.3	6.0	5.3	○	内黒 回転糸切り	1/3	1/3
62	"	坏	" ⑨	R	R	R・M	R・M	13.8	7.8	4.8 5.8	○	内黒 手持ヘラケズ リモミ痕8	1/3	1/3
63	"	坏	" 埋土	R	R	R・M	R・M	(12.8)	5.5	4.6	○	内黒 回転糸切り	1/3	1/3
64	"	坏	" 木根攢乱部	R	R	R・M	R・M	(12.5)	5.9	4.9	○	内黒 回転糸切り	1/3	1/3
65	"	坏	" 木根攢乱部	R・M	R	R・M	R・M	13.6	6.3	5.0	○	内黒 手持ヘラケズ リ	1/3	1/3
66	第36図	坏	" 木根攢乱部	R	R	R・M	R・M	11.8	5.5	4.8	○	内黒 回転糸切り ヘラケズ	1/3	1/3
67	"	坏	" 木根攢乱部	R	R	R・M	R・M	(12.5)	(5.9)	(4.9)	○	内黒 回転糸切り	1/3	1/3
68	"	坏	" 木根攢乱部	R	R	R	R	13.7	5.8	4.6	○	赤焼き 回転糸切り	1/3	1/3
69	"	坏	" 木根攢乱部	R・M	R・M	R・M	R・M	14.2	7.3	7.8	○	高台付坏 内外黒色	1/3	1/3
70	"	坏	" 木根攢乱部	R・M	R・M	R・M	R・M	14.0	7.8	7.3	○	高台付坏 内黒	1/3	1/3
71	"	甕	" 埋土	Y	K	Y	N	—	—	—	○		1/4	1/2
72	"	甕	" 埋土	Y	K	Y	N	—	—	—	○		1/4	1/3
73	第38図	坏	M17住居 Q1床面	—	—	—	—	—	4.8	(1.7)	○	高台付坏	1/3	1/3
74	"	甕	" カマド脇	M	—	M	—	(17.8)	—	(7.6)	○		1/4	1/3
75	"	甕	" 埋土	Y	指頭	Y	N	19.0	11.5	28.2	○	外面に指頭押圧	1/4	1/4
76	第38図	甕	" 埋土	Y	(K)	Y	N	(19.5)	—	(6.5)	○		1/4	1/3
77	"	甕	" カマド脇	Y	K	Y	N	(18.0)	—	(7.2)	○		1/4	1/3
78	"	甕	" カマド脇	Y	K	Y	N	—	—	—	○		1/4	1/3
79	"	甕	" Q1埋土	R	N	R	R	—	—	—	○		1/4	1/3
80	第39図	坏	I19住居 埋土	M	K	M	M	(20.8)	—	4.2	○	内外黒色・丸底	1/3	1/3
81	"	坏	" 埋土	Y	K	M	M	(20.7)	—	4.5	○	内黒 丸底	1/3	1/3
82	"	坏	" 埋土	M	M	M	M	9.9	—	3.0	○	丸底	1/3	1/3
83	第40図	坏	K22住居 カマド西側	Y	K	M	M	(17.6)	—	4.3	○	内黒 丸底	1/3	1/3
84	"	甕	" カマド北側	M	M	M	H・M	(13.0)	6.3	11.4	○		1/3	1/3
85	"	甕	" 檜出面	H・Y	—	M	—	—	—	—	○		1/4	1/3
86	第41図	鉄製品	" 南西壁	長さ9.5cm 幅1.4cm 最大厚6.1mm 重量7.0g								刀子(柄)	1/1	1/1
87	"	磨石	" 檜出面	長さ5.8cm 幅6.0cm 最大厚4.4cm 重量161g								極粗粒砂岩	1/2	1/2
88	第43図	坏	J24住居 カマド付近	R	R	R・M	R・M	(12.7)	—	5.4	○	内黒	1/3	1/3
89	"	坏	" 床面	M	K	M	M	12.7	—	5.9	○	内黒 丸底	1/3	1/3
90	"	坏	" 埋土下位	M	M	M	M	(15.0)	—	(8.0)	○	内黒	1/3	1/3
91	"	甕	" 埋土下位	Y	(K)	Y	N	—	—	—	○		1/3	1/3
92	"	甕	" 埋土下位	Y	K	Y	N	—	—	—	○		1/4	1/3
93	"	甕	" 埋土下位	Y	K	Y	N	—	—	—	○		1/4	1/3
94	"	甕	" カマド付近	—	K	—	N	—	—	—	○	91・92の体部	1/4	1/3
95	第44図	砥石	" 檜出面	長さ3cm 幅2.8cm 厚7mm 重量6.8g								凝灰質砂岩	1/1	1/1
96	"	琥珀	" カマド付近	35×26×27mm 16.0g 全重137.2g									1/1	1/1
97	第46図	坏	L25住居 床面	M	(H・M)	M	M	(18.7)	—	6.7	○	内黒 丸底	1/3	1/3
98	"	坏	" 床面	M	M	M	M	15.2	5.3	6.5	○	平底	1/3	1/3
99	"	坏	" 床面	M	K	M	M	(12.2)	(7.6)	5.2	○	内黒 平底風丸底	1/3	1/3
100	"	甕	" 埋土・床面	Y・M	H・M	Y・M	H・M	12.6	5.2	13.0	○		1/3	1/3
101	第46図	甕	L25住居 埋土	Y・M	M	Y	N	16.7	8.2	27.6	○	輪積痕	1/4	1/4
102	"	甕	" 埋土下位	—	H・M	—	H・M	—	—	—	○		1/4	1/3
103	"	剝片	" 埋土上位	長さ2.5cm 幅2.5cm 厚さ5.0mm 重量2.6g								チャート質粘板岩	1/1	1/1
104	"	剝片	" 埋土上位	長さ3.8cm 幅2.2cm 厚さ— 重量10.2g								チャート	1/1	1/1
105	"	剝片	" 埋土上位	長さ2.7cm 幅2.7cm 厚さ6.0mm 重量3.0g								粘板岩	1/1	1/1
106	"	剝片	" 埋土上位	長さ2.7cm 幅2.4cm 厚さ9.5mm 重量4.6g								チャート質粘板岩	1/1	1/1
107	"	剝片	" 埋土上位	長さ4.0cm 幅2.4cm 厚さ5.1mm 重量4.0g								チャート質粘板岩	1/1	1/1
108	第47図	坏	N26住居 カマド	M	M	M	M	12.5	—	3.7	○	丸底 内黒?	1/3	1/3

表6. 掲載遺物一覧表(3)

遺物番号	図版番号	器種	出土状況	外面調整		内面調整		法量			ロクロ 有無	備考	縮尺 図写真
				口縁部	体部	口縁部	体部	口径	底径	器高			
109	第47図	壺	N26住居 カマド	M	M	M	M	(13.6)	(8.0)	5.0	○	丸底 内黒?	1/3 1/3
110	"	甕	" カマド	—	M	—	H	—	7.5	(5.4)	○	木葉痕	1/4 1/3
111	"	壺	" 床面	Y	H・M	M	H	(13.0)	—	(13.5)	○		1/4 1/3
112	"	甕	" カマド付近	Y	M	Y	N	—	—	—	○		1/4 1/3
113	第48図	壺	I 27住居 床面	R・M	R・M	R・M	R・M	13.3	7.4	7.3	○	高台付壺 内黒 K27住居と接合	1/3 1/3
114	"	壺	" Q 2 埋土	R	—	R・M	—	—	—	—	○	内黒	1/3 1/2
115	"	壺	" 床	R・M	—	R・M	—	—	—	—	○	内黒	1/3 1/2
116	"	壺	" ベルト埋土	R	—	R・M	—	—	—	—	○	内黒	1/3 1/2
117	"	甕	" Q 4 埋土	Y	K	Y	N	(13.0)	—	(6.0)	○		1/4 1/3
118	"	甕	" カマド付近	Y	K	Y	N	(20.0)	—	(5.0)	○		1/4 1/3
119	"	甕	" カマド付近	Y	K	Y	N	(14.2)	—	(7.0)	○		1/3 1/3
120	"	甕	" カマド脇	Y	K	Y	N	(16.9)	—	(9.0)	○		1/4 1/3
121	第49図	壺	K27住居 埋土	R	R	R・M	R・M	—	—	—	○	内黒	1/3 約1/2
122	"	甕	" カマド付近	Y	K	Y	N	(24.6)	—	(14.5)	○		1/4 約1/3
123	"	甕	" カマド付近	Y	K	Y	N	(14.4)	—	(15.0)	○	内黒	1/4 約1/4
124	"	甕	" カマド脇	Y	K	Y	N	(19.5)	(9.8)	26.4	○	木葉痕	1/4 約1/4
125	第50図	鉄製品	" 埋土	長さ7.5cm 幅1.5cm 棟厚4.3mm 重量6.6g									1/1 約1/1
126	第52図	瓶	J 28住居 カマド付近	M	H・M	Y	M	17.6	10.6	21.2	○		1/4 約1/4
127	"	甕	" カマド付近	H・Y	H・M	Y	H	19.7	—	(23.6)	○		1/4 約1/4
128	"	甕	" カマド付近	—	H(M)	—	H	—	7.8	(20.0)	○	木葉痕	1/4 約1/4
129	"	甕	" カマド付近	M	H・M	Y・M	H	17.0	(8.0)	20.0	○		1/4 約1/4
130	"	甕	" カマド付近	Y	(K)	Y	N	(18.0)	—	(5.0)	○		1/4 約1/3
131	"	甕	" カマド付近	Y(M)	H(M)	(Y・M)	H	(18.5)	—	(5.7)	○	同一個体	1/4 約1/3
132	"	甕	" Q 2 埋土	Y・M	—	H・M	—	(18.0)	—	(4.7)	○		1/4 約1/3
133	写63図	琥珀	" 埋土	重量1.0g									— 約1/1
134	第54図	壺	L 28住居 横出面	R	R	R	R	12.9	6.3	4.3	○	赤焼き 回転糸切り	1/3 1/3
135	"	壺	" ベルト埋土	R・M	R	R・M	R・M	13.9	—	(5.5)	○	高台付壺 内黒 高台脚欠損	1/3 1/3
136	"	壺	" Q 4 埋土	R	R	R・M	R・M	(14.2)	—	(5.4)	○	内黒	1/3 1/3
137	"	壺	" Q 4 埋土	R	R	R・M	R・M	16.2	8.7	6.2	○	高台付壺 内黒 モミ痕	1/3 1/3
138	"	壺	" Q 3 埋下床	—	M	—	M	—	—	—	○	内黒	1/3 1/2
139	"	壺	" Q 1 埋下床	—	—	—	—	—	5.8	(2.0)	○	内黒 回転糸切り	1/3 1/4
140	"	壺	" Q 1 埋下床	—	—	—	—	—	7.8	(2.1)	○	高台付壺 内黒	1/4 1/3
141	"	甕	" カマド	Y	K	Y	N	(15.9)	—	(6.5)	○	147と同一?	1/4 1/3
142	"	甕	" カマド	Y	K	Y	H	(22.4)	—	5.2	○	内黒 146と同一?	1/4 1/3
143	"	甕	" Q 2 埋下床	Y	K	Y	N	(12.7)	—	(11.0)	○		1/4 1/3
144	"	甕	" Q 1 埋土	Y	K	Y	N	(15.5)	—	(8.2)	○		1/4 1/3
145	"	甕	" カマド	Y	K	Y	N	—	—	—	○		1/4 1/3
146	"	甕	" カマド	—	K	—	H	—	—	(15.5)	○	内黒(142と同一?)	1/4 1/3
147	"	甕	" 床面	—	K	—	N	—	—	—	○	(141と同一?)	1/4 1/3
148	"	甕	" 床面	—	K	—	N	—	9.8	(8.5)	○	木葉痕→ヘラケズリ	1/4 1/3
149	第55図	鉄製品	" Q 4 埋土	長さ7.2cm 幅2cm 棟厚3.2mm 重量14.5g								刀子(柄)	1/1 1/1
150	第56図	瓶	J 37住居	Y	M	Y	N	19.1	9.0	22.5	○		1/4 1/4
151	第56図	甕	J 37住居	Y	M	Y・M	N・M	14.0	(8.0)	23.0	○	輪積痕	1/4 1/4
152	"	甕	"	H・Y	H・M	Y・M	H・M	20.6	(7.2)	35.5	○		1/4 1/4
153	第57図	甕	I 41住居	Y	H・M	Y	H	21.5	—	(27.8)	○		1/4 1/4
154	第59図	壺	I 43住居 床面	R・M	R	R・M	R・M	(10.8)	(5.8)	(4.7)	○	高台付壺 内黒	1/3 1/3
155	"	壺	" 埋土下位	R	—	R・M	—	—	—	—	○		1/3 1/2
156	"	壺	" 埋土下位	R	—	R・M	—	—	—	—	○	内黒	1/3 1/2
157	"	壺	" 埋土下位	R	—	R・M	—	—	—	—	○	内黒	1/3 1/2
158	"	壺	" 埋土下位	R	R	R・(M)	R・(M)	—	—	—	○	内黒	1/3 1/2
159	"	壺	" 埋土下位	R	R・M	R・(M)	R・(M)	—	—	—	○	内黒	1/3 1/2
160	"	壺	" 床面	—	—	—	—	—	7.2	(2.3)	○	高台付壺 内黒	1/3 1/3
161	"	甕	" 床面	Y	(K)・N	Y	N	—	10.0	31.4	○	輪積痕	1/4 1/4
162	"	甕	" Q 2 床直	指N	K	指N	N	—	—	—	○		1/4 1/3

表6. 掲載遺物一覧表(4)

遺物番号	図版番号	器種	出土状況	外面調整		内面調整		法量			ロクロ有無	備考	縮尺	
				口縁部	体部	口縁部	体部	口径	底径	器高			図	写真
163	第60図	甕	I 45住居	Y	K・M	Y	N	19.8	—	(31.1)	○		1/4	1/4
164	第62図	坏	G 47住居 植出面・床	M	M	M	M	15.0	—	5.4	○	内黒、平底氣味	1/3	1/3
165	〃	甕	〃 Q 4床	Y	K	Y	N	(18.8)	—	(13.5)	○		1/4	1/3
166	〃	甕	〃 カマド脇	Y	K	Y	N	20.4	—	(24.3)	○		1/4	1/4
167	〃	甕	〃 カマド脇	Y	K	Y・N	N	(19.0)	—	(16.0)	○		1/4	1/4
168	〃	甕	〃 カマド脇	Y	(N)	Y	N	(21.2)	—	(9.2)	○		1/4	1/3
169	〃	甕	〃 カマド脇	Y	(K)	Y	N	(21.7)	—	(8.4)	○		1/4	1/3
170	〃	甕	〃 カマド内	Y	(K)	Y	N	(21.7)	—	(8.0)	○	169と同一?	1/4	1/3
171	〃	甕	〃 カマド内	—	K	—	N	—	—	—	○	165と同一?	1/4	1/3
172	〃	甕	〃 Q 3床	—	K	—	N	—	8.6	(3.2)	○	木葉痕	1/4	1/4
173	〃	支脚	〃 カマド内						7.5	(12.3)	○	土製、欠損品	1/3	1/3
174	第63図	瓶	H 47住居 床(北)	H・M	H・M	H	H	21.0	10.0	17.7	○		1/4	1/4
175	〃	甕	〃 床(北)	M	H	M	H	(18.3)	—	(18.0)	○		1/4	1/4
176	第64図	坏	K 47住居 埋土	R	R	R	R	(12.6)	—	(3.0)	○	赤焼	1/3	1/3
177	〃	甕	〃 〃	—	K	—	N	—	7.6	(4.8)	○	木葉痕	1/4	1/3
178	〃	甕	〃 〃	—	K	—	N	—	—	—	○		1/4	1/2
179	第65図	坏	O 5住居 カマド付近	R・M	R・M	R・M	R・M	12.8	(7.0)	(6.5)	○	商右付坏 内外面黒色 回転系切り 非内窓(赤焼)	1/3	1/3
180	〃	坏	〃 〃	—	R	—	R	—	4.7	—	○	内外有段、丸底 内窓	1/3	1/3
181	第67図	坏	N 7住居 北壁	M	K	M	M	14.2	—	5.5	○	小円孔あり	1/4	1/4
182	〃	甕	〃 床面北西隅①	H・Y・M	H・K・M	Y・M	N・M	11.9	7.0	16.4	○		1/4	1/4
183	〃	甕	〃 北壁③	M	—	M	—	—	—	—	○		1/4	1/4
184	〃	甕	〃 〃	—	K・M	—	K・M	—	—	(15.0)	○	外面 タール状付着	1/4	1/4
185	〃	甕	〃 〃	—	M	—	M	—	7.2	—	○		1/4	1/4
186	〃	甕	〃 Q 4埋土	—	M・K	—	H	—	—	—	○	内面 炭化物付着	1/4	1/4
187	〃	甕	〃 床面②	—	H・M	—	H	—	5.0	(10.0)	○		1/4	1/3
188	〃	甕	〃 Q 3埋土	—	K	—	M	—	—	(8.1)	○		1/4	1/4
189	〃	甕	〃 北壁下位	H・M	H・M	H・M	H・M	19.3	7.7	27.8	○		1/4	1/1
190	〃	琥珀	〃 Q 3埋土下位	26.6×17.4×13.8mm 3.0g 全重量3.6g						原石	○		1/1	1/4
191	第69図	坏	H 9住居 焼土上	N	N	R・M	R・M	—	—	(5.3)	○	同軸系切り 底部縁一部再調整 内窓	1/3	1/3
192	〃	坏	〃 〃	R・M	—	R・M	—	—	—	—	○	内黒	1/3	1/3
193	〃	坏	〃 床	R	—	削落	—	—	—	—	○	内黒	1/3	1/3
194	〃	坏	〃 〃	—	—	—	M	—	(7.0)	—	○	底部回転ヘラケズリ 再調整 内窓	1/3	1/3
195	〃	甕	〃 焼土上	K	Y	N	—	—	—	—	○		1/4	1/3
196	〃	甕	〃 〃	Y	K	Y	N	—	—	—	○	ナタ状ケズリ	1/4	1/3
197	〃	甕	〃 〃	Y	—	Y	—	—	—	—	○		1/4	1/3
198	〃	甕	〃 〃	Y	K	Y	N	—	—	—	○		1/4	1/4
199	〃	甕	〃 〃	Y	K	Y	N	<24.5>	—	—	○		1/4	1/4
200	〃	甕	〃 〃	—	K	—	N	—	—	—	○		1/4	1/4
201	第69図	甕	H 9住居 焼土上	—	K	—	N	—	<9.5>	—	○		1/4	1/4
202	〃	琥珀	〃 カマド付近	12×11.5×7.3mm 0.63g						未製品	○		1/1	1/1
203	〃	琥珀	〃 埋土下位	16.7×13.6×10.6mm 1.3g 全重量1.4g						〃	○		1/1	1/1
204	第71図	坏	J 9住居 北壁際	M	—	M	—	<21.2>	—	(3.4)	○	内黒	1/3	1/3
205	〃	坏	〃 埋土	H・M	—	M	M	<22>	<8.0>	(5.8)	○	内外有段 内黒	1/3	1/3
206	〃	坏	〃 北壁際	M	M	M	M	<16.5>	—	(8.5)	○	内黒 丸底	1/3	1/3
207	〃	瓶	〃 埋土	Y・M	H・M	H・M	H・M	—	—	—	○	同一個体	1/4	1/4
208	〃	瓶	〃 〃	—	H・M	—	H・M	<21.8>	<19.8>	<21.0>	○		1/4	1/4
209	〃	甕	〃 南壁際床上	H・M	H・M	H・M	H・M	<14.4>	6.8	<14.5>	○		1/4	1/4
210	〃	甕	〃 Q1埋土	H・M	—	M	—	<15.6>	—	(4.2)	○		1/4	1/4
211	〃	甕	〃 〃	—	H・M	—	N・M	—	—	(4.1)	○		1/4	1/4
212	〃	甕	〃 Q 1埋土下位	Y	N・M	Y・M	N	<16.0>	—	(11.7)	○		1/4	1/4
213	〃	甕	〃 Q 3埋土	M	H・M	H	N	<24.2>	—	(12.2)	○		1/4	1/4
214	〃	甕	〃 埋土	—	H・N	—	H・M	—	8.1	(4.8)	○	木葉痕	1/4	1/4
215	〃	甕	〃 〃	—	H・N	—	H	—	8.0	—	○	木葉痕	1/4	1/4
216	〃	甕	〃 カマド付近	—	H・K	—	N	—	5.2	(6.5)	○		1/4	1/3

表6. 掲載遺物一覧表(5)

遺物 番号	図版 番号	器種	出土状況	外面調整		内面調整		法 量			口部 有無	備 考	縮 尺 図 写真	
				口縁部	体部	口縁部	体部	口径	底径	器高				
217	第71図	甕	J 9 住居 埋土	—	H・M	—	H	—	6.9	(7.4)	○		1/4 1/4	
218	第72図	甕	〃 Q 4 埋土	—	K・N	—	H	—	7.0	(18.7)	○		1/4 1/4	
219	〃	甕	〃 床面②	H・Y・ M	H・M	M	H・M	20.2	× 7.6	34.8	○		1/4 1/4	
220	〃	鉄製品	埋土上位	長さ7.7cm 幅2.0cm 厚さ3.1mm 重量8.4g								不明	1/1 1/1	
221	〃	鉄製品	埋土上位	長さ6.5cm 幅1.2cm 棚厚3.2mm 重量4.5g								刀子	1/1 1/1	
222	第73図	石器	Q 2 埋土	長さ11.2cm 幅6.5cm 厚さ3cm 重量282g								平砥石 硬砂岩	1/2 1/2	
223	〃	石器	〃	長さ20.3cm 幅10.4cm 厚さ3.1cm 重量913g								平砥石 アルゴース 砂岩	1/2 1/2	
224	〃	琥珀	北西隅床	33.3×30.8×22.2mm 13.1g								原石	1/1 1/1	
225	〃	琥珀	中央床面	29.8×21.8×18.5mm 7.5g 全重量8.3g								未製品	1/1 1/1	
226	第71図	琥珀	〃 カマド付近										細片	1/1 1/1
227	第75図	环	L 9 住居 南西カマド	R	R	R	R	(14.5)	—	5.6	○	高台付环、内面模花 物付着、赤焼？	1/3 1/3	
228	〃	环	〃 〃	R・N	R・M	R・M	R・M	(14.5)	—	(5.3)	○	高台付环、内黒	1/3 1/3	
229	〃	环	〃 〃	R・M	R・M	R・M	R・M	(15.9)	—	(5.9)	○	内黒	1/3 1/3	
230	〃	环	〃 〃	R	R	R・M	R・M	(13.0)	—	(4.6)	○		1/3 1/3	
231	〃	环	〃 北東カマド	R	R	R	R	—	—	—	○	赤焼土器	1/3 1/3	
232	〃	环	〃 〃	—	—	—	—	(5.0)	—	—	○	回転糸切り、赤焼？	1/3 1/3	
233	〃	甕	〃 床	Y	K	Y	N	—	—	—	○		1/4 1/3	
234	〃	甕	〃 〃	Y	K	Y	N	(21.2)	—	—	○		1/4 1/4	
235	〃	甕	〃 〃	Y	K	Y	K・N (15.6)	—	(8.4)	—	○		1/4 1/4	
236	第77図	环	M10住居 床面①	M	M	M	M	(16.9)	—	6.0	○	平底丸底、内黒。 外面有段風。	1/3 1/3	
237	〃	瓶	〃 床面⑤	M	H・M	Y	(H)	18.3	7.6	16.3	○		1/4 1/4	
238	〃	甕	〃 床面②	Y・M	K・M	Y・M	N・M	17.5	7.0	32.2	○	輪積痕	1/4 1/4	
239	〃	甕	〃 床面⑥	Y・M	H・M	Y・M	H・M	15.9	8.8	20.7	○	木葉痕	1/4 1/4	
240	〃	甕	〃 床面③	Y・M	K・M	Y・M	N	15.2	7.0	24.6	○	輪積痕	1/4 1/4	
241	〃	甕	〃 床面	H・Y	—	Y・M	—	(13.4)	—	(6.2)	○		1/4 1/3	
242	〃	甕	〃 〃	Y・M	M	Y・M	M	(17.4)	—	(9.5)	○		1/4 1/4	
243	〃	甕	〃 床面⑦	—	H・M	—	H	—	—	—	○	輪積痕	1/4 1/4	
244	第78図	鉄製品	〃 Q 3 埋土下位	長さ7.3cm 幅1.6cm 厚さ3.1mm 重量5.9g								不明	1/1 1/1	
245	〃	石鎚	〃 Q 4 埋土下位	長さ2.6cm 最大幅1.8cm 最大厚4.1mm 重量1.1g								石鎚、珪質細粒凝灰岩	1/1 1/1	
246	〃	琥珀	〃 Q 3 埋土上位	15.6×14.8×8.6mm 1.2g 全重量1.6g									1/1 1/1	
247	〃	琥珀	〃 ベルト埋土	a 19.6×14.3×11.1mm b 13.9×12.3×9.6mm 全重量3.7g									1/1 1/1	
248	第80図	环	N10住居 埋土	R	R	R	R	11.2	4.8	3.8	○	回転糸切、底部下端 再調整	1/3 1/3	
249	〃	环	〃	R	R	R・M	R・M	13.6	(6.4)	6.0	○	内黒、手持ヘラタヌ リ再調整	1/3 1/3	
250	〃	环	〃 埋土①	R・M	R・M	R・M	R・M	(13.9)	—	(7.9)	○	高台付环、内黒	1/3 1/3	
251	〃	环	〃 埋土	R	R	R	R	—	—	—	○	赤焼	1/3 1/3	
252	〃	环	〃	R	R	R	R	—	—	—	○	赤焼	1/3 1/3	
253	〃	环	〃	R	R	R・M	R・M	(17.0)	—	(3.2)	○	内黒	1/3 1/3	
254	〃	环	〃	—	—	—	—	(5.0)	—	—	○	回転糸切、赤焼	1/3 1/3	
255	〃	环	〃	—	—	—	—	(5.4)	—	—	○	回転糸切、赤焼	1/3 1/3	
256	〃	甕	〃 埋土	R	—	R	—	(20.6)	—	(4.4)	○		1/4 1/3	
257	〃	甕	〃 〃	R	R	R	R	(14.2)	—	(5.2)	○		1/4 1/4	
258	〃	甕	〃 〃	R	K	R	R	(18.9)	—	(14.3)	○		1/4 1/4	
259	〃	甕	〃 〃	—	K	—	指N	(14.4)	5.2	(11.5)	○		1/4 1/4	
260	〃	甕	〃 〃	Y	K	N	N	(14.1)	—	(8.0)	○	ナタ状ケズリ	1/4 1/4	
261	〃	支脚	〃 埋土	指頭 押正	—	—	—	9.4	(8.3)	—	○	円筒状、巻上げ、指 頭圧痕	1/4 1/4	
262	第83図	环	Q11住居Q 2 埋土上位	—	R・N	—	R・M	—	(6.0)	(3.7)	○	ヘラグゼリによる再 調整	1/3 1/3	
263	〃	环	〃 Q 3 〃	R	R	N・M	R・M	—	—	—	○	内黒	1/3 1/3	
264	〃	环	〃 Q 2 〃	—	—	—	—	(6.5)	—	—	○	高台付环、高台部、 内黒	1/3 1/3	
265	〃	环	〃 Q 3 埋土下位	M	M	M	M	(10.2)	—	(4.5)	○	外面有段、内黒	1/3 1/3	
266	〃	甕	〃 カマド付近	Y・M	H・M	Y・M	H・M	(22.6)	(12.4)	(26.0)	○		1/4 1/4	
267	〃	甕	〃 埋土下位	Y・M	H・M	M	風化	—	—	—	○		1/4 1/4	
268	〃	甕	〃 カマド付近	H・Y・ M	H・M	M	M	(17.0)	—	(8.2)	○		1/4 1/4	
269	〃	甕	〃 Q 3 埋土下位	Y・M	H・K・ M	N・M	H・N・ M	(21.6)	—	(26.7)	○	輪積痕	1/4 1/4	
270	〃	甕	〃 カマド内	M	H・K・ M	M	N・M	(15.6)	7.0	29.6	○	風化	1/4 1/4	

表6. 掲載遺物一覧表(6)

遺物番号	図版番号	器種	出土状況	外面調整		内面調整		法量			ロクロ有無	備考	縮尺 図写真		
				口縁部	体部	口縁部	体部	口径	底径	器高					
271	第83図	支脚	Q11住居 埋土	指頭	押圧			—	7.1	7	○	円筒状、巻上げ、指頭圧痕？	1/3	1/3	
272	"	鉄製品	" Q 3 埋土上位	長さ8.6cm 幅3.6cm 厚さ2.1mm 重量16.2g							○	鉄？	1/1	1/1	
273	写75図	琥珀	" 埋土			重量0.7g								1/1	1/1
274	"	琥珀	" Q 3 埋土中位			重量0.4g								1/1	1/1
275	第84図	壺	J 12住居 検出	R	R	R	R	<14.2>	—	(4.7)	○	回転糸切再調整、非内黒、細子痕	1/3	1/3	
276	"	壺	" 検出	R	—	R	—	—	—	—	○	非内黒	1/3	1/3	
277	"	壺	" 土坑内	R	R	R・M	R・M	<14.0>		(4.0)	○	内黒	1/3	1/3	
278	"	壺	" 埋土	R	—	R・M	—	—	—	—	○	内黒	1/3	1/3	
279	"	壺	" R	—	R・M	—	—	—	—	—	○	内黒、縫子痕？	1/3	1/3	
280	"	壺	" 検出	—	R	—	R	—	<8.7> (2.3)	○	回転糸切、赤焼	1/3	1/3		
281	第85図	壺	" " 検出	—	—	—	—	—	5.0	—	○	回転糸切、内黒	1/3	1/3	
282	"	甕	" 粗掘	R	R	R	R・N	<10.8>	5.6	9.7	○		1/4	1/4	
283	"	甕	" " Y・M	N	Y	N	—	—	—	—	○		1/4	1/3	
284	"	甕	" 土坑埋土	K・M	K・M	N・M	N・M	<18.4>	—	(14.2)	○		1/4	1/3	
285	"	甕	" 埋土	—	N・K	—	N	—	9.4	(11.0)	○	炭化物付着	1/4	1/4	
286	"	甕	" 粗掘	—	N	—	N	—	9.4	(5.8)	○	木葉痕	1/4	1/4	
287	"	甕	" 南隅	Y	M	Y・M	N	<16.5>	—	(8.7)	○	炭化物付着、輪積痕	1/4	1/4	
288	"	甕	" " Y・M	N・M	Y・M	N	<15.5>	—	(17.7)	○	炭化物付着	1/4	1/4		
289	"	甕	" " 検出	—	H・M	—	H	—	—	(5.0)	○		1/4	1/4	
290	"	甕	" " 検出	—	(H)	—	(H)	—	6.4	—	○		1/4	1/3	
291	"	支脚	" 埋土	指頭	押圧			—	6.6	18.7	○	円柱状、指頭痕	1/3	1/3	
292	"	鉄製品	" セクション	長さ4.5cm 幅1.1cm 厚さ9.3mm 重量3.7g							○	鉄鐵	1/1	1/1	
293	"	鉄製品	" Q 3 埋土	長さ4.7cm 幅2.8cm 厚さ4.4mm 重量6.8g							○	不明	1/1	1/1	
294	第87図	壺	P 12住居 Q 3 埋土	—	K・M	—	M	11.8	—	6.0	○	丸底、内黒、輪積痕	1/3	1/3	
295	"	甕	" 埋土⑦	Y	H・M	Y	H	<20.8>	—	(13.5)	○	輪積痕	1/4	1/4	
296	"	甕	" 埋土③	Y・M	K・M	Y・M	M	18.6	—	(21.5)	○	炭化物付着、輪積痕	1/4	1/4	
297	"	甕	" 埋土④⑤	Y・M	K・M	Y・M	H	<18.2>	—	—	○		1/4	1/4	
298	"	甕	" 床⑧	—	K・M	—	H・M	—	7.2	(21.0)	○	木葉痕、輪積痕	1/4	1/4	
299	"	甕	" 埋土②	—	K・M	—	N	<18.4>	—	(25.0)	○		1/4	1/4	
300	"	甕	" 埋土⑥	—	K・M	—	N	—	—	(8.3)	○		1/4	1/4	
301	"	甕	" 埋土①	—	M	—	N	—	7.8	(7.5)	○	炭化物付着	1/4	1/4	
302	第90図	壺	M 13住居 床面⑤	Y・M	M	Y・M	N・M	<17.6> <7.4>	6.5	—	○	底部へラケズリ、内黒	1/3	1/3	
303	"	甕	" 床面③	Y・M	H・M	Y・M	N	21.0	8.1	30.7	○	木葉痕、内外面炭化	1/3	1/4	
304	"	甕	" カマド付近①	Y	K・M	Y・M	N	18.3	—	(17.6)	○	外部一部炭化物付着	1/4	1/4	
305	"	甕	" 床面②	Y・M	K・M	Y	N・M	21.8	—	(15.4)	○		1/4	1/4	
306	"	甕	" カマド付近①	Y・M	M	Y	N	<20.5>	—	(19.5)	○	内面炭化物付着	1/4	1/4	
307	"	甕	" 床面④	—	M	—	N	—	—	(20.0)	○	輪積痕	1/4	1/4	
308	"	鉄製品	" 埋土	長さ3.7cm 柄幅1.3cm 柄厚8.6mm 重量3.3g							○	刀子(柄)	1/1	1/1	
309	第95図	須恵器	N 13住居 北西カマド	—	R・N	—	R	—	<4.9>	(2.5)	○	壺、回転糸切	1/3	1/4	
310	"	須恵器	N 13-1住居 埋土下位④	R	R	R	R	—	11.0	(25.0)	○	長頸壺	1/4	1/4	
311	"	須恵器	" " ②	—	カキメ	—	カキメ	—	<12.0>	(31.8)	○	広口壺	1/4	1/4	
312	"	壺	" 北東壁	—	—	—	M	—	—	—	○	内黒、「万」の墨書	1/3	1/2	
313	"	壺	" Q 3 埋土	R	—	R・M	—	—	—	—	○	内黒	1/3	1/3	
314	"	壺	" 埋土	R	R	R・M	R・M	<13.4>	6.0	4.8	○	底部手持へラケズリ 青調整、内黒	1/3	1/3	
315	"	壺	N 13-2住居 南東壁	R	R	R・M	R・M	<15.8>	5.7	5.7	○	回転糸切再調整、内黒	1/3	1/3	
316	"	壺	" (P 12住)	R	R	R・M	R・M	<12.2> <5.5>	(4.5)	○	回転糸切、内黒	1/3	1/3		
317	"	壺	" (P 12住検)	R	R	R	R	—	6.0	(1.9)	○	回転糸切、赤焼	1/3	1/3	
318	"	壺	" ( " )	R・M	R・M	R・M	R・M	<16.3>	—	(8.0)	○	高台付壺、内黒	1/3	1/3	
319	"	壺	" " R	R	R	R・M	R・M	—	<8.8>	(5.5)	○	高台付壺、内黒	1/3	1/3	
320	第96図	甕	N 13-1住居 埋土下位①	Y	K・N	Y	N	18.4	9.4	32.8	○	輪積痕多い	1/4	1/4	
321	"	甕	N 13-2住居 カマド付近	指押圧	K	指ナデ	N	19.9	10.6	27.8	○		1/4	1/4	
322	"	甕	N 13-1住居埋土下位	Y	N	Y	H	<15.8>	—	—	○		1/4	1/4	
323	"	甕	N 13-2住居埋土上位	Y	K	Y	N	<17.2>	—	—	○		1/4	1/4	
324	"	甕	N 13-2住居 " R	R	R	R	R	<22.2>	—	—	○	上半ロクロ調整	1/4	1/4	

表6. 掲載遺物一覧表(7)

遺物番号	図版番号	器種	出土状況	外面調整		内面調整		法 品		ロクロ 有無	備 考	縮 尺 図 写真
				口縁部	体 部	口縁部	体 部	口 径	底 径			
325 第96図	壺	N13-1住居 北東カマド	—	K	—	H	—	7.5	—	○		1/4 1/4
326〃	支脚	N13住居 北西カマド(2号)内	指頭 押圧			—	—	10.9	(13.8)	○	筒状、輪積痕	1/4 1/3
327〃	支脚	〃	指頭 押圧			—	—	10.5	(15.3)	○	筒状、輪積痕	1/4 1/3
328 第97図	鉄製品	N13-1住居 Q3床	長さ5.8cm 幅1.6cm 厚さ14mm 重量9.7g								刀子(柄)	1/1 1/1
329〃	鉄製品	〃 Q3埋土	長さ4.2cm 幅1.8cm 厚さ5.4mm 重量4.9g								刀子(小刀)	1/1 1/1
330〃	鉄製品	〃	長さ2.1cm 幅5cm 厚さ4mm 重量6.4g								釘	1/1 1/1
331〃	鉄製品	N13-2住居 床	長さ9.2cm 幅1.4cm 厚さ4.7mm 重量5.4g								鉄錠	1/1 1/1
332〃	鉄製品	N13-1住居埋土下位	茎長さ7cm 長さ14.5cm 幅2.4cm 厚さ7mm 重量19.1g								鉈	1/2 1/1
333〃	鉄製品	〃 Q3埋土	刃部長さ5.7cm 刃部幅11cm 長さ16.8cm 耳幅16.8cm 厚さ3.5mm 160g								動先、風呂受け幅1.3cm	1/2 1/2
334 第98図	石製品	N13-2埋土 北東壁付近	長さ7.9cm 幅2.8cm 厚さ1.2cm 重量48g								石製品、粘板岩	1/2 1/2
335〃	石製品	〃	長さ8.4cm 幅8.9cm 厚さ1.2cm 重量118g								石錐、粘板岩	1/2 1/2
336〃	石錐	N13-1住居 床	長さ3.3cm 幅1.1cm 厚さ4.8mm 重量1.3g								石錐、粘板岩	1/1 1/1
337〃	琥珀	N13-1住居 北西カマド付近	22.6×9.6×7.7mm 1.0g 全重量2.7g									1/1 1/1
338〃	琥珀	〃 Q3埋土中位	25.8×20×15.2mm 3.4g 全重量3.7g									1/1 1/1
339〃	琥珀	〃 埋土	20.9×16×10.9mm 1.6g									1/1 1/1
340〃	琥珀	N13-2住居 北隅	32.5×21.5×19.8mm 6.6g 全重量17.4g									1/1 1/1
341 写83図	琥珀	N13住居Q2埋土下位	26×38×8.5mm 1.7g									1/1 1/1
342〃	琥珀	N13-2住居東壁埋土	全重量2.7g									1/1 1/1
343 第99図	坏	P14住居 土坑内	Y N Y N <13.6> — <4.2>							○	非内黒	1/3 1/3
344 第100図	須恵器	Q14住居 北隅	R R・K R R 7.4 6.0 16.1							○	長頸瓶、ヘラ壺、底部再調整	1/4 1/4
345 第101図	壺	N22住居+遺構外	Y H・M Y H <20.9> <7.5> 28.5							○		1/4 1/4
346〃	壺	〃 + 〃	Y H・M Y H — <7.0> (18.0)							○		1/4 1/4
347〃	鉄製品	〃 北西隅埋土	長さ6cm 幅1.1cm 棱厚2.2mm 重量3.5g								刀子(身)	1/1 1/1
348〃	琥珀	〃 床面	長さ17.5mm 幅13mm 0.75g								加工、穿孔あり	1/1 1/1
349 第104図	坏	M23住居 Q4床	R R R・M R・M 12.7 6.2 4.8							○	回転糸切、内黒	1/3 1/3
350〃	坏	〃 P1埋土	— — — — — — —							○	回転糸切、内黒、底面タール状付着物	1/3 1/3
351〃	坏	〃 〃	R・M R・M R・M R・M — — —							○	高台付坏、内黒	1/3 1/3
352〃	坏	〃 〃	— — — M — — —							○	高台付坏、内黒	1/3 1/3
353〃	壺	〃 カマド付近	R K R R 21.7 — (22.1)							○	小円孔あり	1/4 1/4
354〃	壺	〃 カマド埋土	Y K Y N <22.4> <13.0> 29.1							○	木葉痕	1/4 1/4
355〃	壺	〃 カマド煙道	指頭 K Y N 23.0 11.0 21.0							○	丸底、小波状口縁、厚手	1/4 1/4
356〃	壺	〃 カマド付近	指頭 K 指頭 指頭 12.0 7.8 8.8							○	厚手	1/4 1/3
357〃	壺	〃 Q3埋土	Y (H.N) Y (H.N) <9.2> — (4.2)							○	炭化物付着	1/4 1/4
358 第105図	壺	〃 P2埋土	Y 弱いK Y あらいN <22> <7.4> 23.3							○	内黒、補修孔8個	1/4 1/4
359〃	壺	〃 煙道	Y K Y N <16.6> — (10.0)							○		1/4 1/4
360〃	壺	〃 〃	Y K N 強いN <17.2> — (14.0)							○		1/4 1/4
361〃	壺	〃 〃	Y 弱いK Y (H.N) <21.6> — (19.0)							○		1/4 1/4
362〃	壺	〃 P2埋土	Y 弱いK Y N <17.0> — (6.3)							○		1/4 1/4
363〃	壺	〃 カマド付近	Y 弱いK Y N <23.0> — —							○	ナデ状ケズリ	1/4 1/4
364〃	支脚	〃 (M25土坑)	指頭 押圧 — 10.3 8.5							○	円柱状、指頭圧痕	1/3 1/3
365 第106図	ミニチュア	〃 P2埋土	— K — K <4.2> — <4.2>								手づくね	1/1 1/2
366〃	土製品	〃 〃	— — — — 1.5 0.7 1.6								耳栓	1/1 1/1
367〃	鉄製品	〃 床	長さ7.7cm 幅1.2cm 棱厚3mm 重量4.2g								刀子(身)	1/1 1/1
368〃	鉄製品	〃 P1埋土	長さ7cm 幅1.1cm 棱厚2.5mm 重量4g								刀子(身)	1/1 1/1
369〃	鉄製品	〃 床	長さ3.1cm 重量9.4g								環状鉄製品(緑金)	1/1 1/1
370〃	鉄製品	〃 〃	長さ3.2cm 重量11.3g								環状鉄製品(緑金)	1/1 1/1
371 第107図	鉄製品	〃 南壁際	長さ27.6cm 幅3.8cm 厚さ4.5mm 重量152g								鎌(右)	1/2 1/2
372〃	砥石	〃 埋土	長さ10.5cm 幅11cm 厚さ2.9cm 重量468g								砥石、硬砂岩	1/2 1/2
373 第108図	坏	M24住居 埋土	M K M M 11.8 — 5.5							○	内黒、丸底、モミ痕(1)	1/3 1/3
374〃	壺	〃 〃	H H H H							○	遺物番号395と同一	1/4 1/3
375 第109図	壺	M27-1 焼土	R R R R — — —									1/4 1/4
376 写87図	土師器	F10-1土坑 埋土								○		— 1/2
377 第110図	土師器	F13土坑 〃										1/1 1/1
378 写87図	繩文土器	〃 埋土								○		— 1/2

表6. 掲載遺物一覧表(8)

遺物番号	図版番号	器種	出土状況	外面調整		内面調整		法量			□クロ 有 無	備考	縮尺 図 写真
				口縁部	体部	口縁部	体部	口径	底径	器高			
379	写87図	土師器	H13土坑 埋土					—	—	—	○		— 1/2
380	〃	土師器	M26土坑 〃					—	—	—	○		— 1/2
381	〃	土師器	L28土坑 〃					—	—	—	○		— 1/2
382	写88図	甕	N12土坑 埋土	—	H・M	—	H	—	—	—	○		— 1/3
383	第135図	甕	P13土坑 〃	Y	K	Y	N	—	—	—	○	ナタ状ヘラケズリ	1/4 1/3
384	写88図	甕	〃 〃	—	—	—	—	—	—	—	○	底部破片	— 1/3
385	第135図	壺	Q13-14土坑 〃	R	—	R・M	—	—	—	—	○	内黒、高台付壺	1/3 1/3
386	〃	壺	〃 〃	R	—	R・M	—	—	—	—	○	内黒、高台付壺	1/3 1/3
387	〃	壺	〃 〃	R	—	R・M	—	—	—	—	○	内黒、遺物番号319と 同一、高台付壺	1/3 1/3
388	〃	壺	〃 〃	—	—	—	M	—	< 5.3	—	○	回転糸切	1/3 1/3
389	〃	甕	〃 〃	Y	K	Y	N	—	—	—	○	ナタ状ケズリ	1/4 1/4
390	〃	甕	〃 〃	Y	K	Y	N	<19.0	—	—	○		1/4 1/4
391	〃	鉄製品	〃 〃	長さ4.1cm 幅1.1cm 棟厚3.5mm 重量2.1g								刀子(身)	1/1 1/1
392	〃	壺	M25土坑 〃	R	R	R・M	R・M	—	—	—	○	内黒	1/3 1/3
393	〃	壺	〃 〃	R	R	R	R	R・M	<10.4	— (3.0)	○	内外黒色	1/3 1/3
394	〃	壺	〃 〃	—	—	—	—	—	—	—	○	高台付壺、内外黒色	1/3 1/3
395	〃	甕	〃 〃	H	H	H	H	—	—	—	○		1/3 1/3
396	〃	甕	〃 〃	Y	K	Y	N	—	—	—	○		1/3 1/3
397	〃	甕	〃 〃	Y	K	Y	N	—	—	—	○		1/3 1/3
398	〃	砥石	〃 〃	長さ7cm 幅4.8cm 厚さ1.9cm 重量80g								砥石、流紋岩質極細 粒凝灰岩	1/2 1/2
399	第110図	甕	O11円形周溝 〃	—	M	—	N	—	—	—	○	体部破片	1/4 1/3
400	〃	甕	〃 〃	—	—	—	M	—	< 6.5	(3.1)	○	底部破片、種子痕3	1/4 1/3
401	第137図	縄文土器	E12検出	—	—	—	—	—	—	—	○	早期	1/3 1/2
402	〃	縄文土器	F～G 8 粗掘	—	—	—	—	—	—	—	—	晚期(A)	1/3 1/3
403	〃	縄文土器	〃	—	—	—	—	—	—	—	—	〃(A)	1/3 1/3
404	〃	壺	J 26粗掘	M	M	M	M	13.1	—	3.2	○	内黒	1/3 1/3
405	〃	壺	I 11粗掘	Y・M	M	M	M	<14.3	—	4.7	○	外有段、内黒、丸底	1/3 1/3
406	〃	壺	I 11粗掘	Y	K・M	M	M	<10.6	—	(5.4)	○	外有段、内黒、丸底	1/3 1/3
407	〃	壺	K 15粗掘	M	M	M	M	(16.2)	—	(8.1)	○	丸底、内黒	1/3 1/3
408	〃	壺	I 4 粗掘	R・M	R	R・M	R・M	14.8	6.6	5.0	○	墨青「九万」、内黒、 圓底糸切再調整	1/3 1/3
409	〃	甕	H～I 9 粗掘	—	K・M	—	M	—	—	—	○	無底式	1/3 1/3
410	〃	甕	F 8 検出	Y	H・M	Y・M	H・M	18.6	9.5	24.3	○	無底式	1/4 1/4
411	〃	甕	J 26粗掘	M	N・M	Y	N	17.6	—	(20.3)	○	炭化物付着	1/4 1/4
412	〃	甕	F 8 粗掘	Y・M	K・M	Y・N	H・N	<19.0	—	(13.5)	○	輪模痕	1/4 1/4
413	〃	甕	M25粗掘	Y	K	Y	N	(20.2)	—	(10.5)	○	内黒	1/4 1/3
414	〃	甕	L～N 47～48粗掘	—	H・M	—	H	—	< 9.5	(8.0)	○	木葉痕	1/4 1/3
415	〃	甕	F 8 粗掘	—	M	—	H・N M	—	7.4	(5.0)	○	木葉痕	1/4 1/4
416	第138図	石鎌	O12検出面	長さ4.0cm 幅1.6cm 厚さ3.9mm 重量1.9g								珪質粘板岩	1/1 1/1
417	〃	石鎌	F 48 〃	長さ2.8cm 幅1.5cm 厚さ6.0mm 重量2.3g								輝緑凝灰岩	1/1 1/1
418	〃	石鎌	F 23 〃	長さ3.8cm 幅1.9cm 厚さ4.6mm 重量3.3g								粘板岩	1/1 1/1
419	〃	石鎌	M20粗掘	長さ2.4cm 幅1.6cm 厚さ4.6mm 重量1.6g								チャート	1/1 1/1
420	〃	石鎌	K 40精査	長さ2.6cm 幅1.2cm 厚さ3.7mm 重量1.5g								粘板岩	1/1 1/1
421	〃	石鎌	〃 〃	長さ1.6cm 幅1.4cm 厚さ3.2mm 重量1.0g								輝緑凝灰岩	1/1 1/1
422	〃	石鎌	H 45粗掘	長さ3.2cm 幅1.3cm 厚さ4.0mm 重量2.2g								チャート	1/1 1/1
423	〃	石鎌	L 25 〃	長さ3.3cm 幅1.7cm 厚さ5.6mm 重量4.0g								輝緑凝灰岩	1/1 1/1
424	第139図	石鎌	E 7 〃	長さ5.8cm 幅1.4cm 厚さ3.3mm 重量3.3g								珪質細粒凝灰岩	1/1 1/1
425	〃	石匙	K 45検出	長さ5.2cm 幅1.5cm 厚さ6.1mm 重量5.1g								粘板岩	1/1 1/1
426	〃	剝片	M 23検出	長さ2.6cm 幅3.8cm 厚さ8.5mm 重量7.8g								チャート	1/1 1/1
427	〃	磨石	J 39粗掘	長さ17.5cm 幅6.7cm 厚さ6.6cm 重量950g								両輝石安山岩	1/2 1/2

## 付編 3

### 源道遺跡K47住居跡出土の動物遺存体について

陸前高田市立博物館学芸員 佐 藤 正 彦  
東 北 学 院 大 学 熊 谷 賢

#### I. 軟体動物 MOLLUSCA

##### i. 腹足綱 GASTROPODA

1. エゾアワビ *Haliotis (Nordotis) discus hannai* Ino

5点出土している。破碎が著しい。

2. チヂミボラ *Nucella heyseana* (DUNKER)

破片が1点出土している。

3. エゾバイ科の一種 *Buccinidae* gen. et sp. indect.

破片が1点出土している。

##### ii. 二枚貝綱 BIVALVIA

1. ムラサキインコガイ *Septifer (Mytilisepta) virgatus* (WIEGMANN)

右殻が1点出土している。殻頂部が残存する。

2. イガイ *Mytilus edulis* LINNÉ

右殻6点、左殻5点が出土している。破碎が著しい。

3. エゾイガイ *Crenomytilus grayanus* (DUNKER)

右殻1点、左殻3点が出土している。破碎が著しい。

#### II. 節足動物 ARTHROPODA

##### i. 蓼脚亜綱 CIRRIPEDIA

1. チシマフジツボ *Balanus cariosus* (PALLAS)

殻板41点が出土している。最小個体数は7個体程度と思われる。小型のものが多く、食用とは思われない。

## 源道遺跡出土試料種子同定報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

貴、財団法人岩手県文化振興事業団殿より御依頼のありました、源道遺跡出土試料の種子同定が終了致しましたので、その結果をご報告申し上げます。

## 1 試料

試料は、G D-87 L 17住居跡から検出された土師器 8点（58・59・62）についていた種実とみられる圧痕で、59が 1点、58が 3点、62が 3点の計12点である。

## 2 方法

歯科材料の Rubber Jel (Regular) と硬化材を適量ずつ混ぜ、圧痕内に充填・放置する。充填材の固化を確認してから（30～60分）器面からはずし、このレプリカを実体顕微鏡で確察し同定した。

## 3 結果

土師器62のNo.4・7は同定できなかったが、その他の10点はすべてオオムギ類種(cf. Hordeum sp.)と同定された（表1）。

表1. 源道遺跡出土試料種子圧痕の同定結果

土師器No.	試料No. (圧痕No.)	種名
59	外側 1	cf. <u>Hordeum sp.</u> オオムギ類似種
58	内側 1	cf. <u>Hordeum sp.</u>
	内側 2	cf. <u>Hordeum sp.</u>
	外側底 3	cf. <u>Hordeum sp.</u>
62	内側 1	cf. <u>Hordeum sp.</u>
	内側 2	cf. <u>Hordeum sp.</u>
	内側 3	cf. <u>Hordeum sp.</u>
	内側 4	同定不能
	内側 5	cf. <u>Hordeum sp.</u>
	外側 6	cf. <u>Hordeum sp.</u>
	外側 7	同定不能
	外側 8	cf. <u>Hordeum sp.</u>

# 写 真 図 版



遺跡遠景(西から)



調査風景

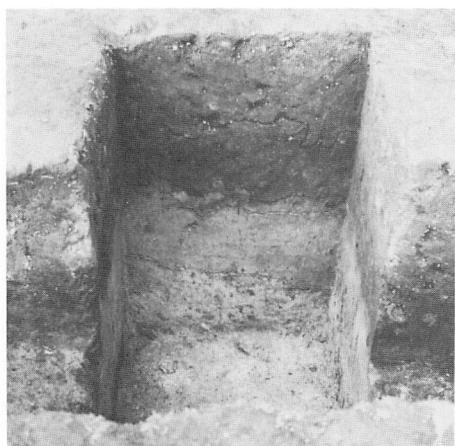


調査風景

写真図版 I 遺跡遠景ほか



遺跡全景(南から)

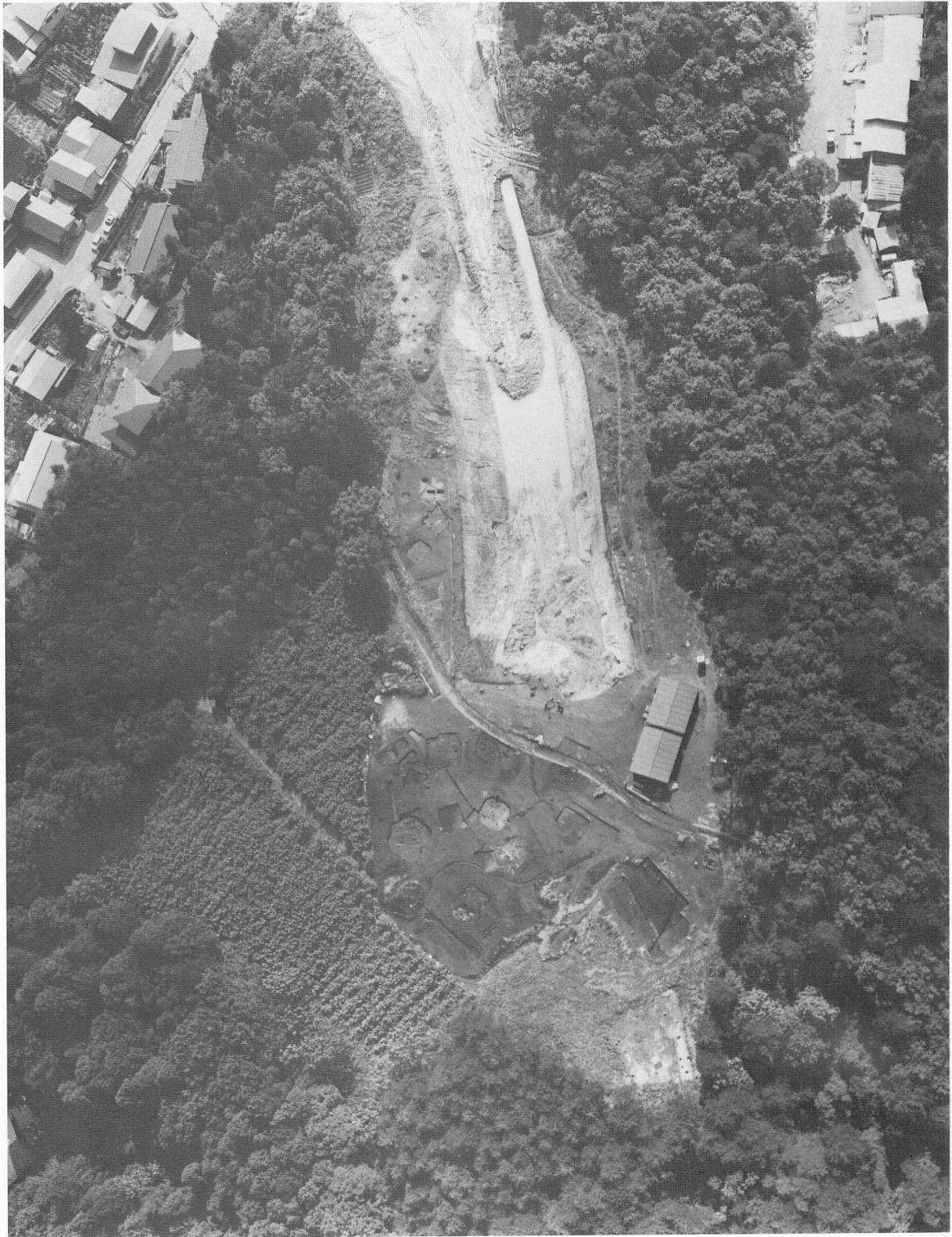


I-12土層断面



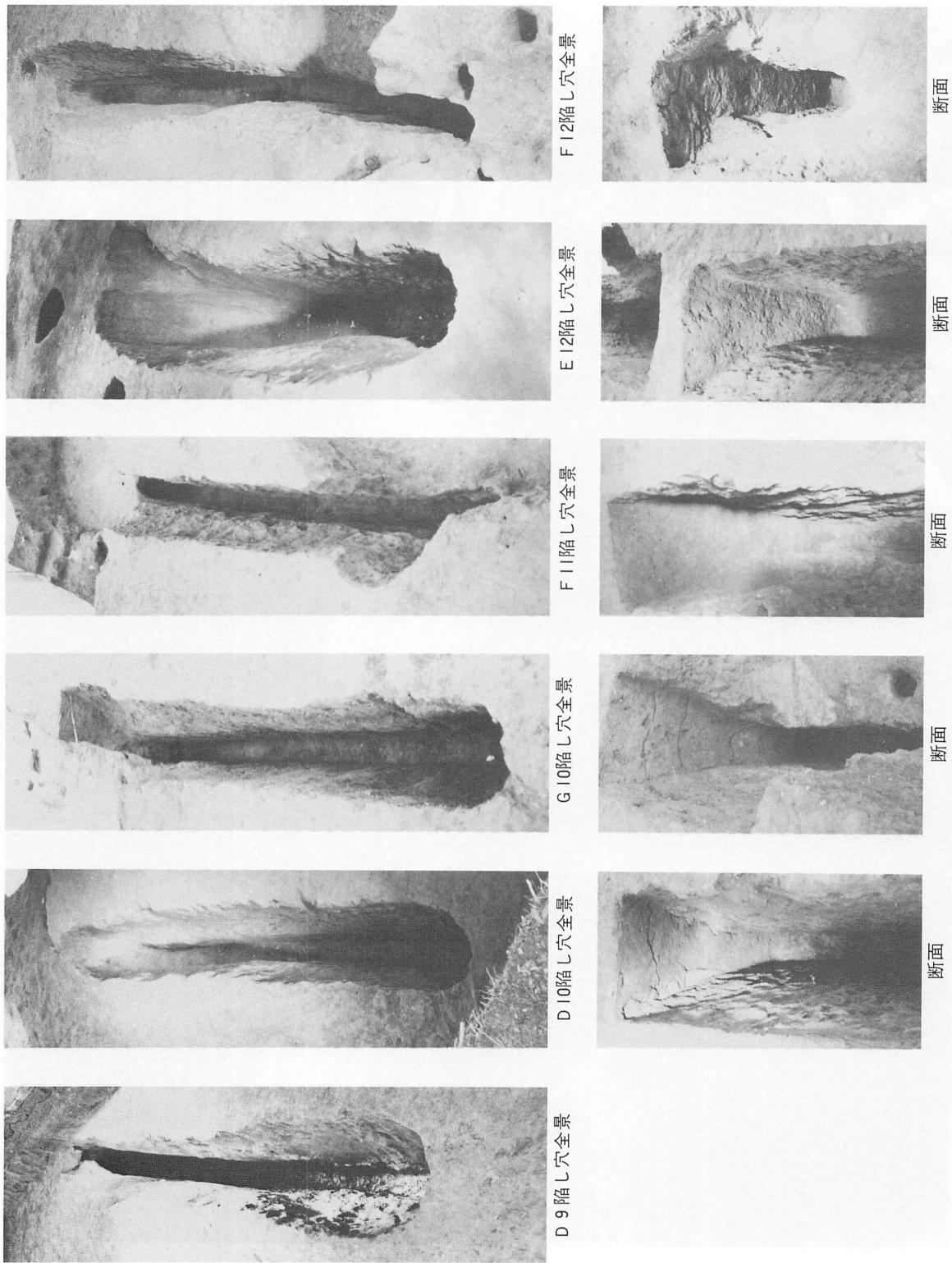
J-48土層断面

写真図版2 遺跡全景(第1次)ほか

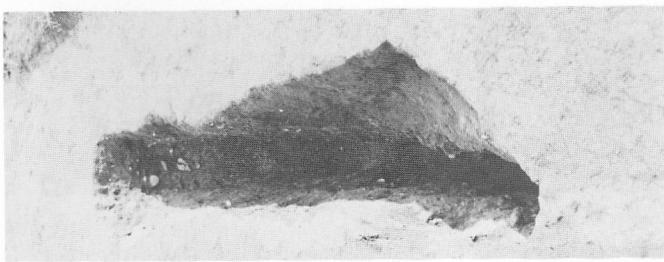


(北東から)

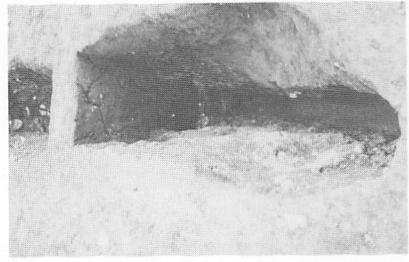
写真図版3　遺跡全景(第2次)



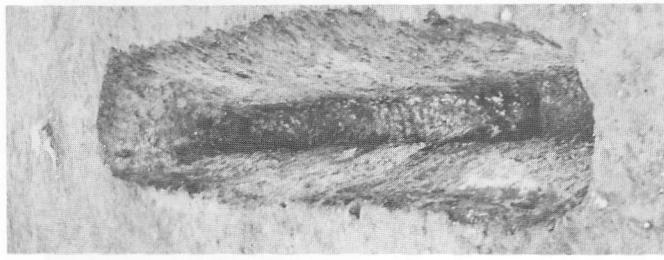
写真図版4　陥し穴状遺構(Ⅰ)



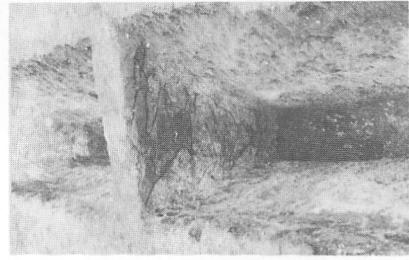
K 43 埋し穴全景



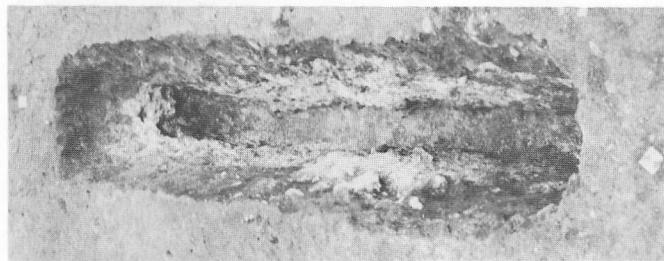
断面



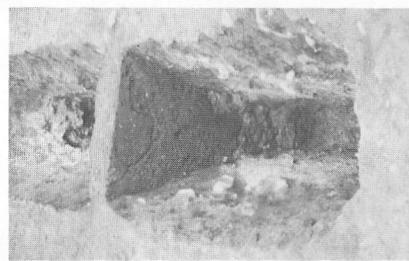
H 41 埋し穴全景



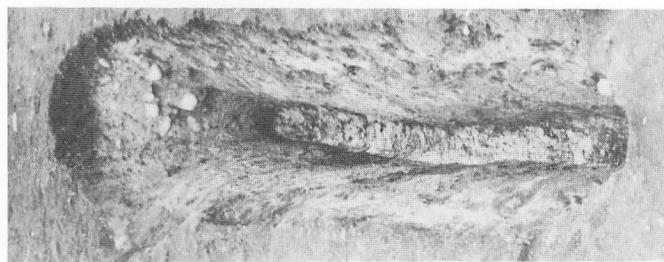
断面



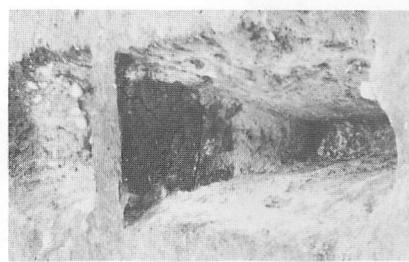
K 40 埋し穴全景



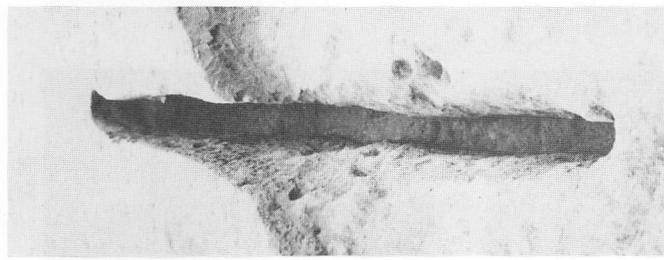
断面



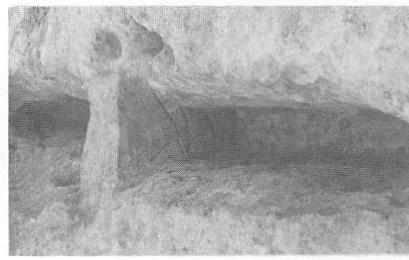
L 26 埋し穴全景



断面

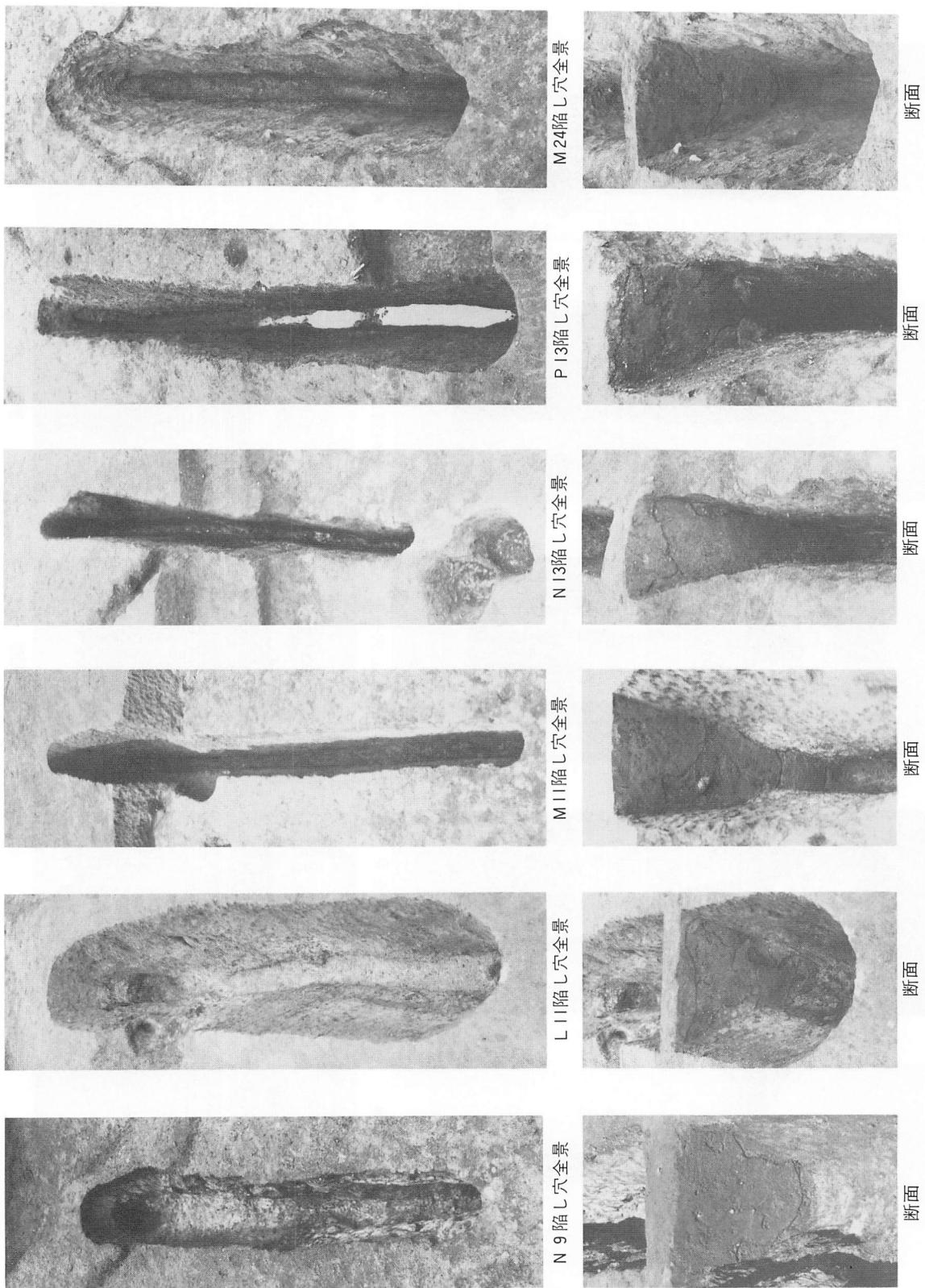


L 26 埋し穴全景

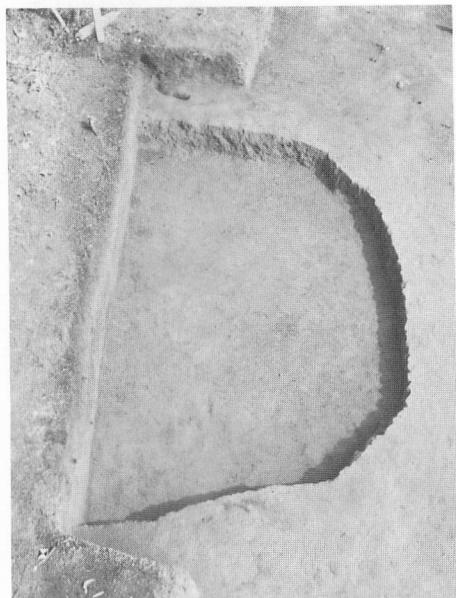


断面

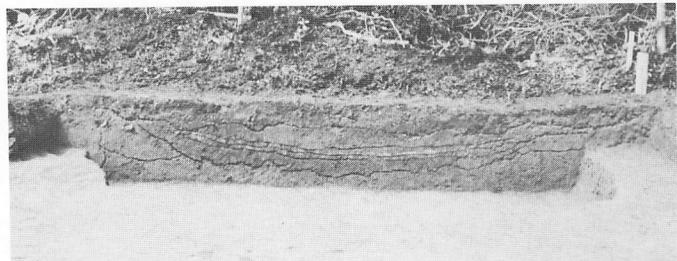
写真図版5 埋し穴状遺構(2)



写真図版 6 陥し穴状遺構(3)



D 9 住居跡全景



断面



断面(拡大)



E 9 住居跡全景



E 9 住居跡カマド断面 1



カマド断面 2



断面

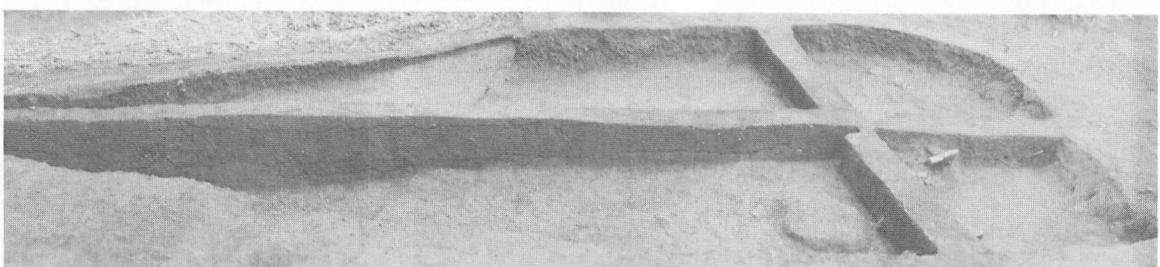
写真図版 7 D 9 · E 9 住居跡



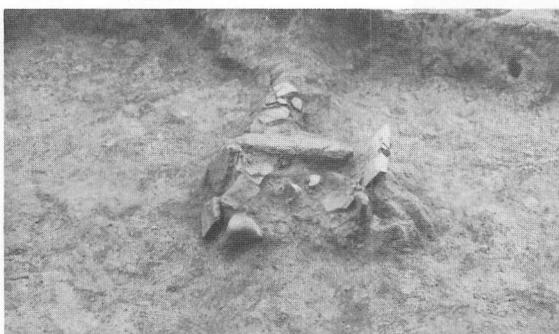
断面 1



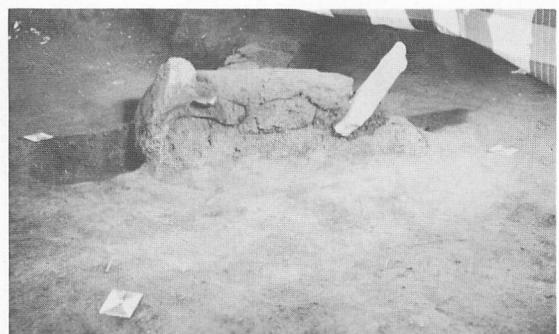
全景



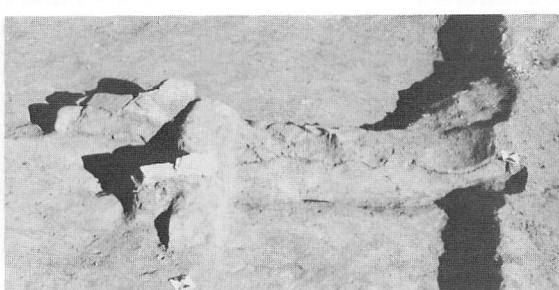
断面 2



カマド全景



カマド断面 1

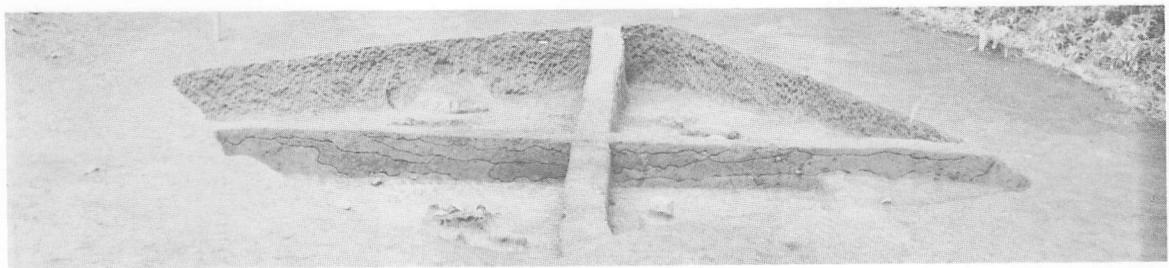


カマド断面 2

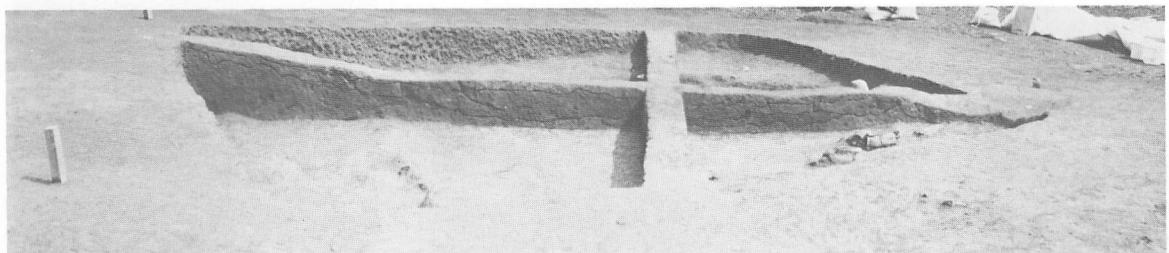


焼土断面

写真図版 8 E 10住居跡



断面 1



断面 2



全景



カマド検出状況



煙道入口

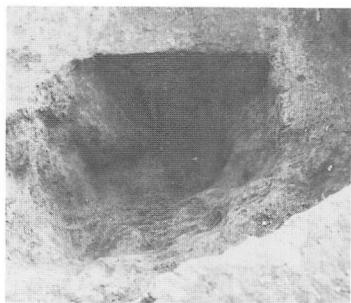


煙道断面



カマド完掘

写真図版 9 G 12住居跡



G 12住居跡土坑 2 断面



遺物出土状況



炭化材分布状況



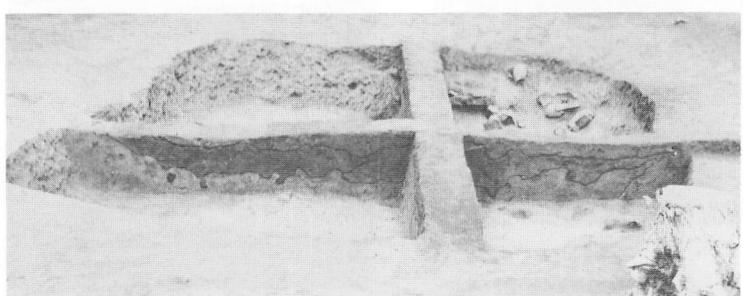
E 13住居跡全景



E 13住居跡カマド検出状況



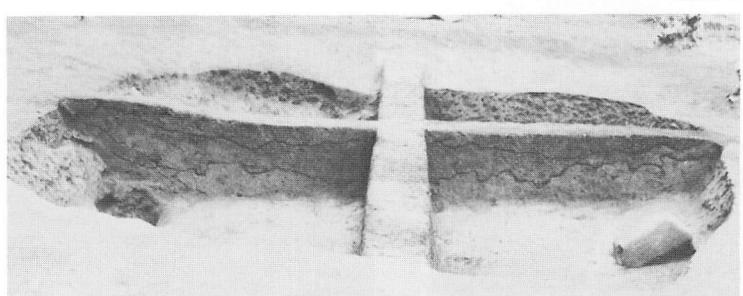
カマド断面 1



断面 1



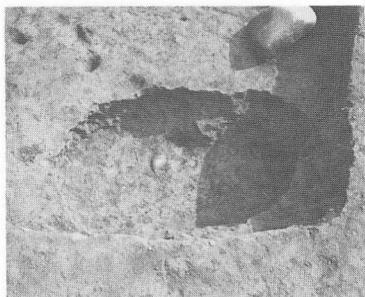
カマド断面 2



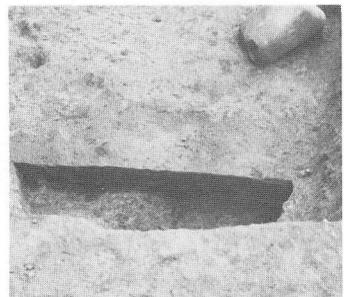
断面 2



煙道完掘



E13住居跡土坑2全景



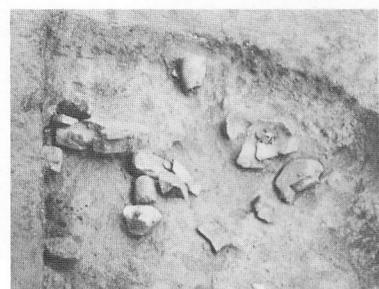
断面



土坑1全景



焼土断面



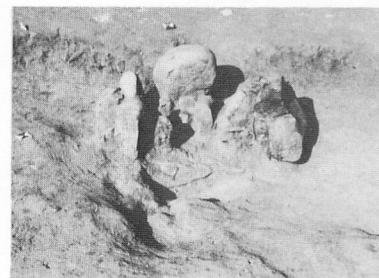
遺物出土状況



J13住居跡全景



J13住居跡カマド全景



カマド断面1



断面



カマド断面2



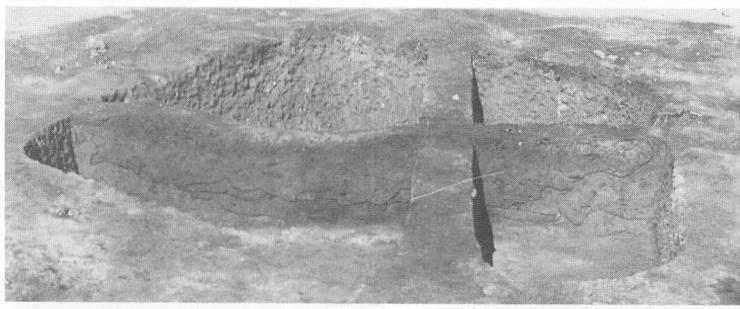
G 15住居跡全景



カマド検出状況



カマド断面 1



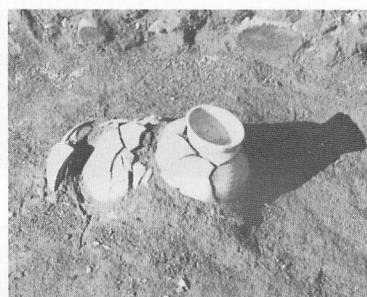
断面



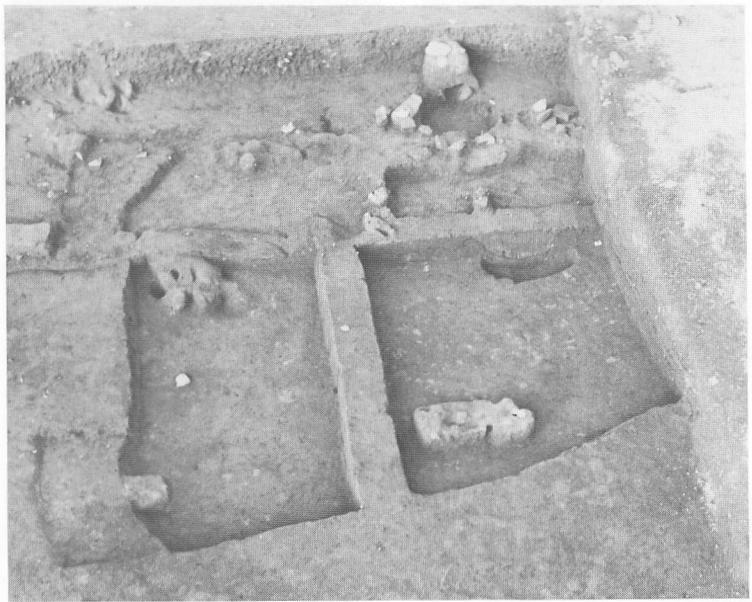
カマド断面 2



L 17住居跡全景



L 17住居跡遺物出土状況



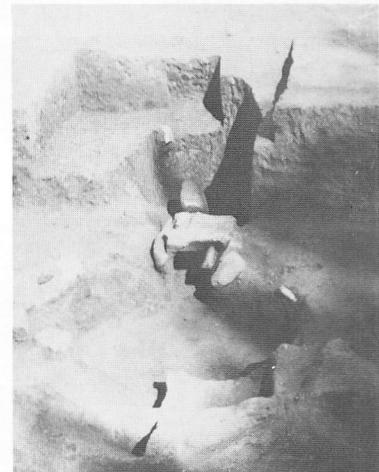
全景



カマド検出状況



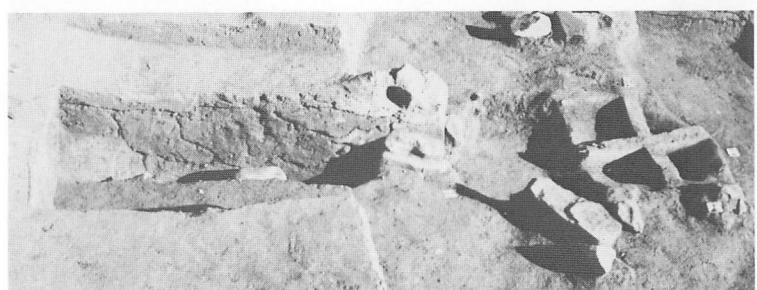
燃焼部焼土断面



カマド完掘



土坑全景



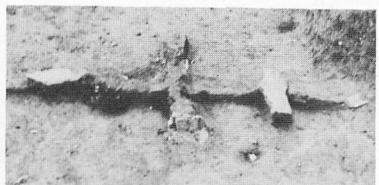
焼道断面



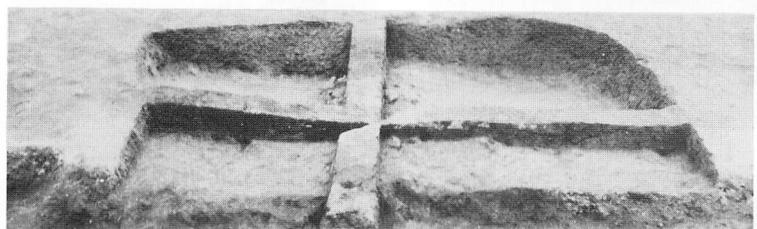
I19住居跡全景



カマド断面 1



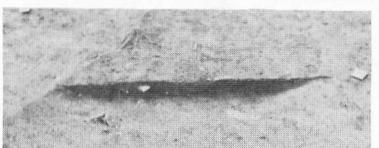
カマド断面 2



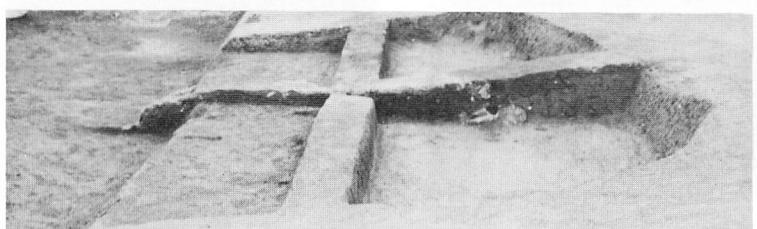
断面 1



焼土全景



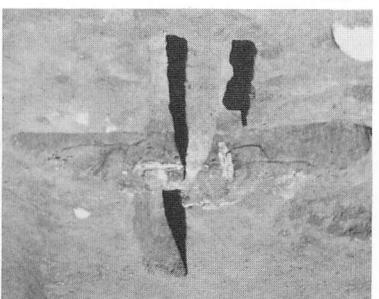
焼土断面



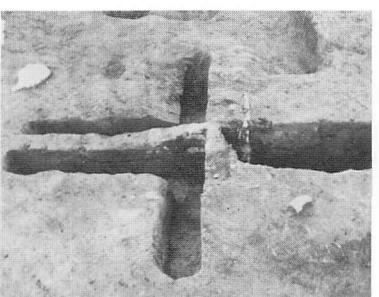
断面 2



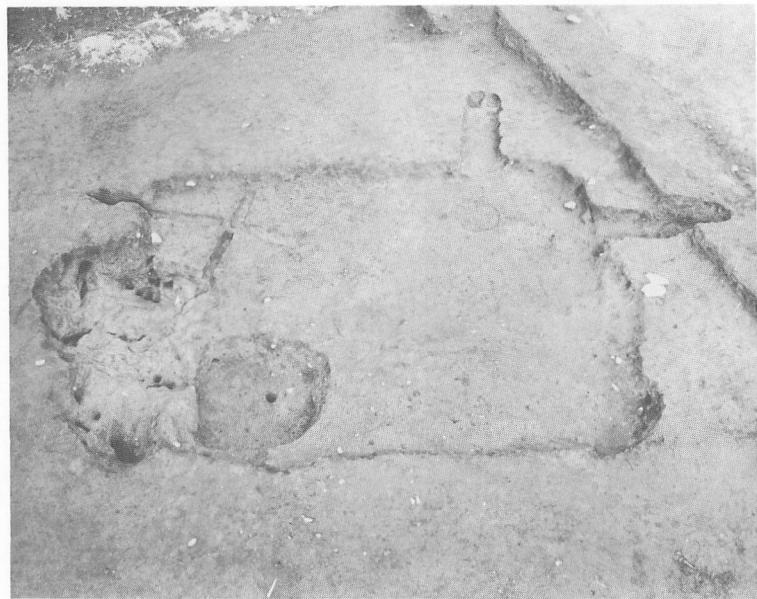
K22住居跡全景



K22住居跡カマド断面 1



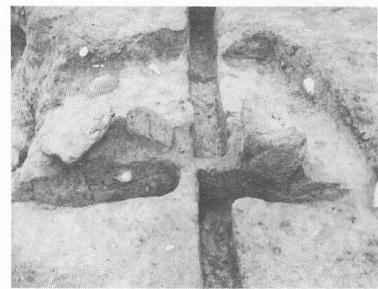
カマド断面 2



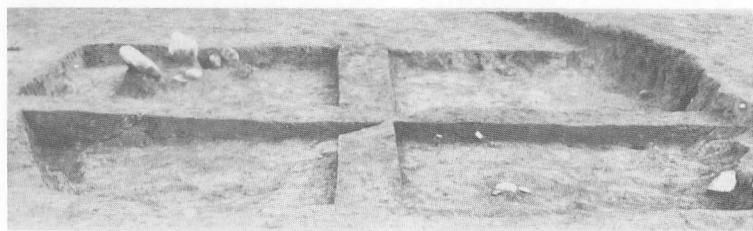
全景



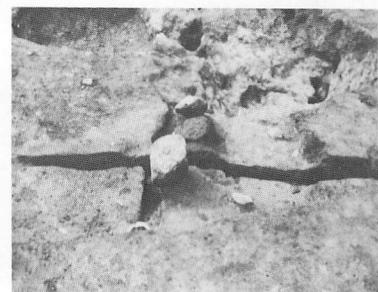
3号カマド全景



断面1



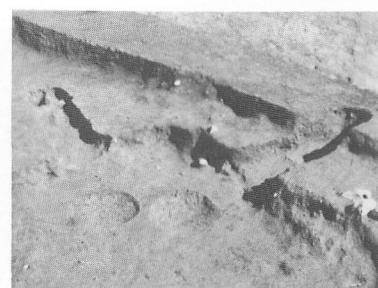
断面



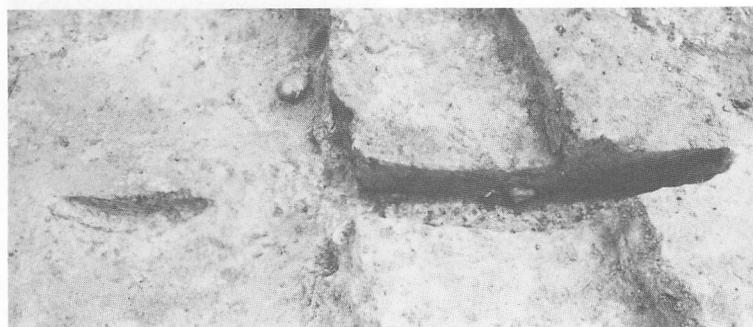
断面2



1号カマド断面



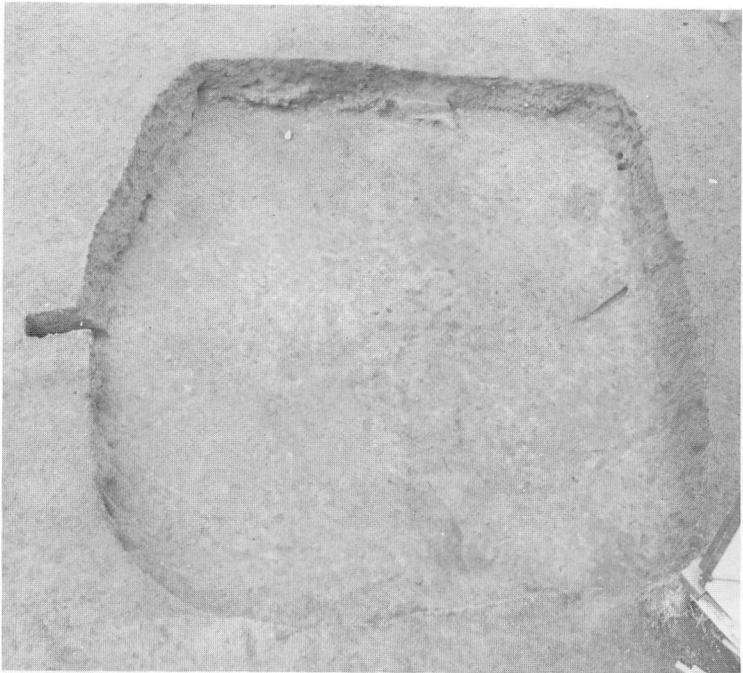
1・2号カマド完掘



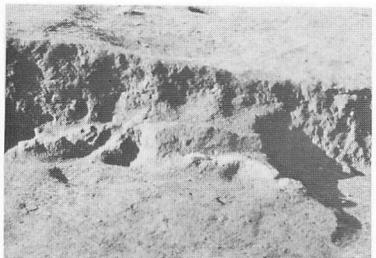
2号カマド断面

写真図版15 J 24住居跡

土坑断面



全景



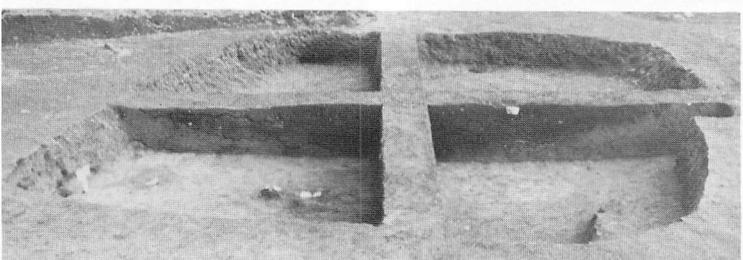
カマド検出状況



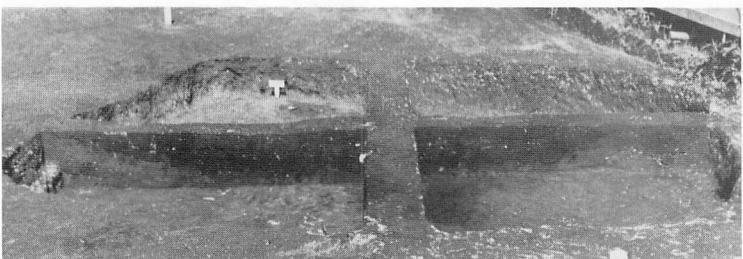
カマド断面 2



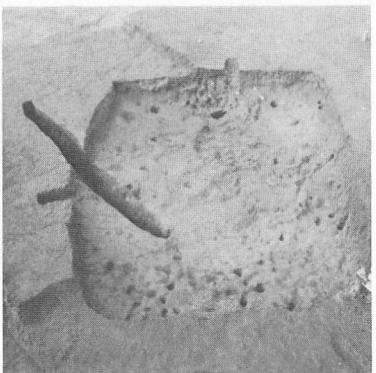
カマド完掘



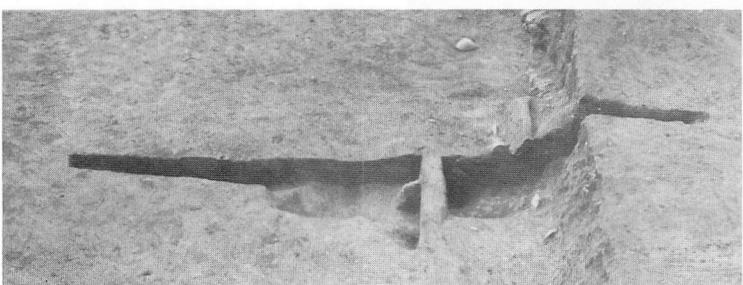
断面 1



断面 2



掘り方



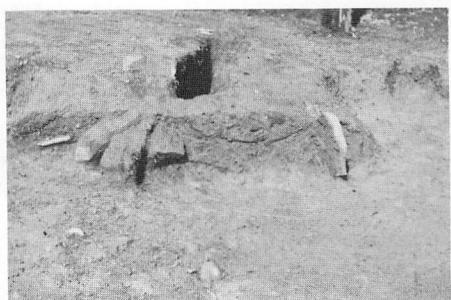
カマド断面 1

写真図版16 L25住居跡

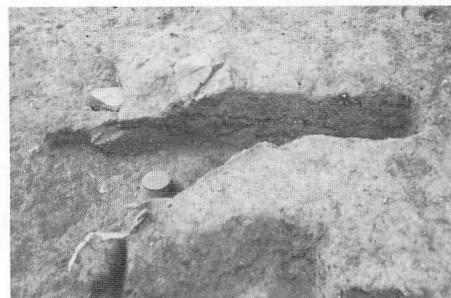
遺物出土状況



N 26住居跡全景



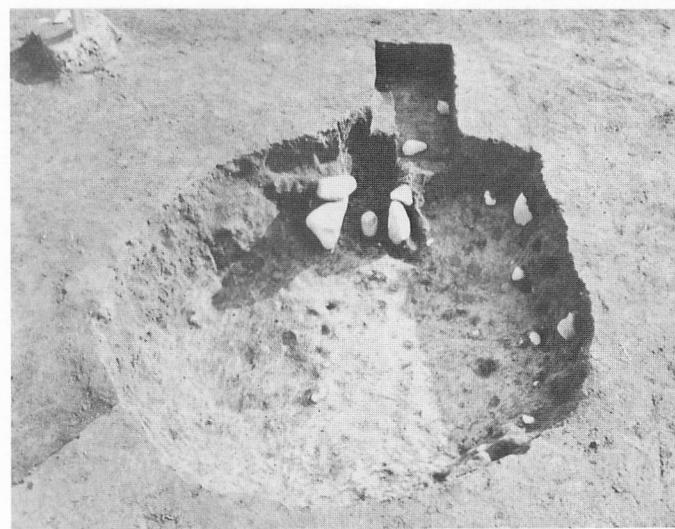
カマド断面 1



断面 2



カマド完掘



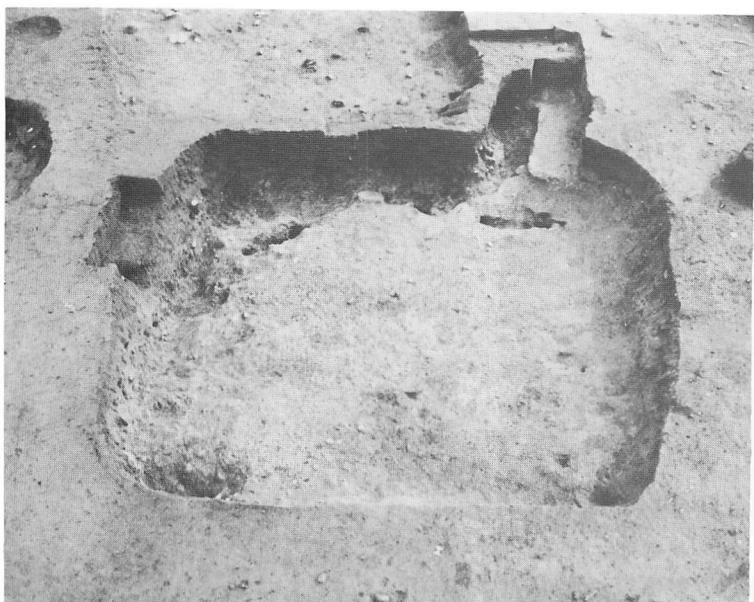
K 27住居跡全景



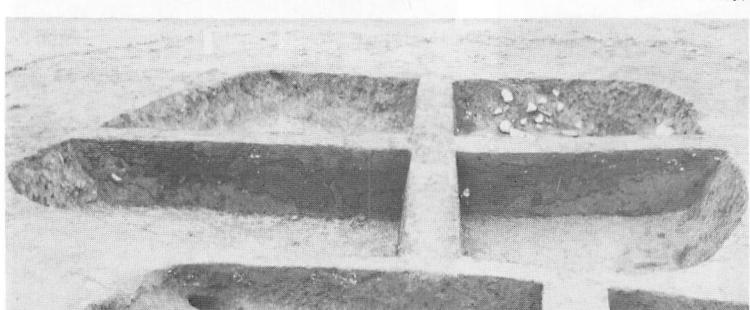
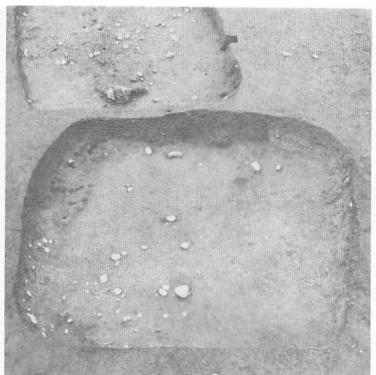
K 27住居跡カマド断面 1



カマド断面 2



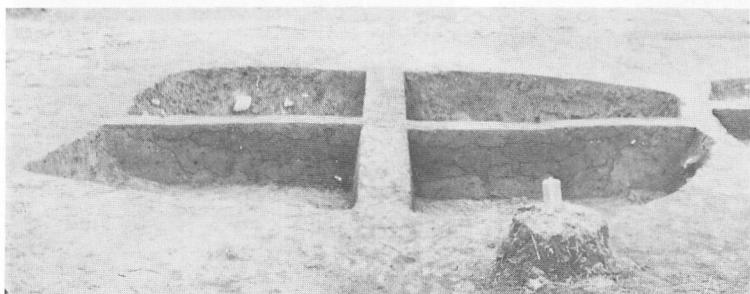
全景



断面 1



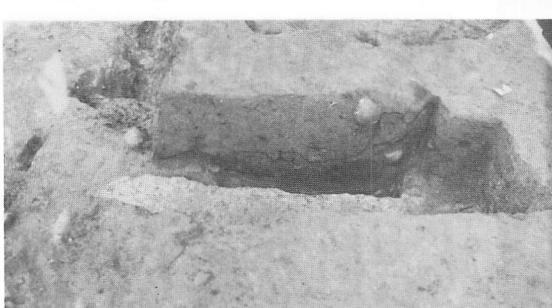
燃焼部焼土断面



断面 2



カマド完掘



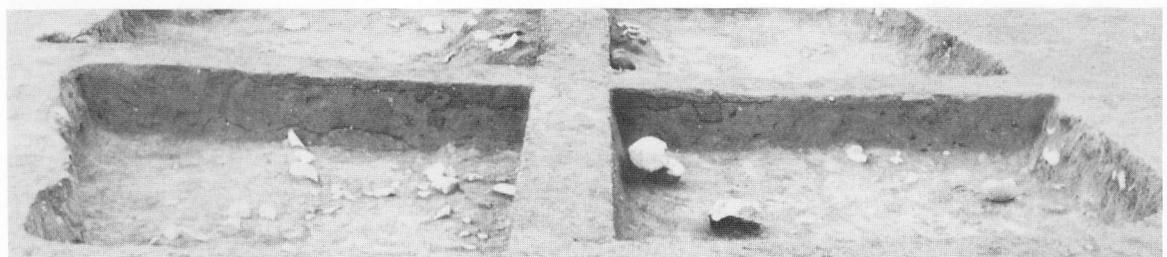
煙道断面



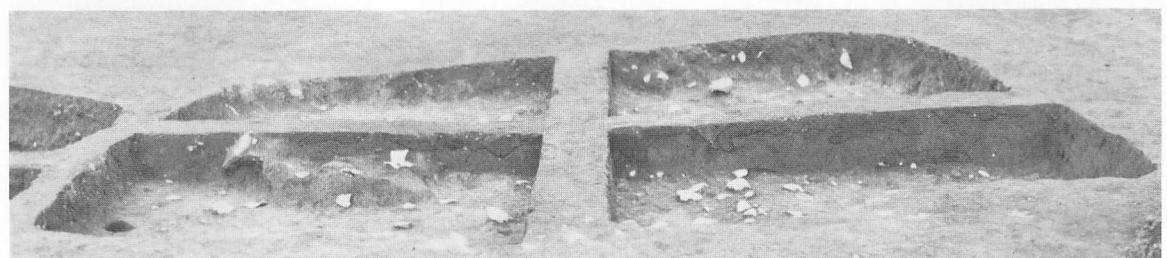
煙道完掘



全景



断面 1



断面 2

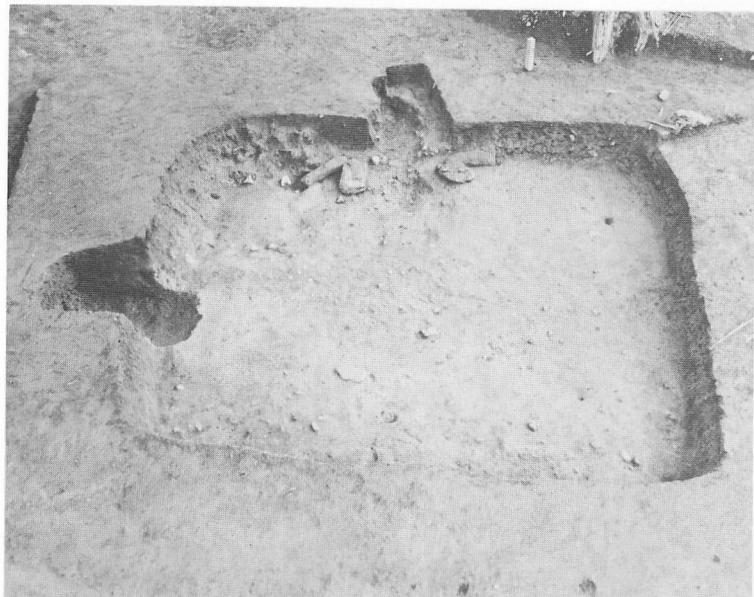


カマド検出状況



カマド断面

写真図版19 J28住居跡



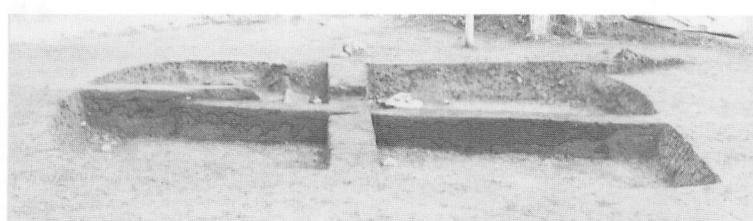
全景



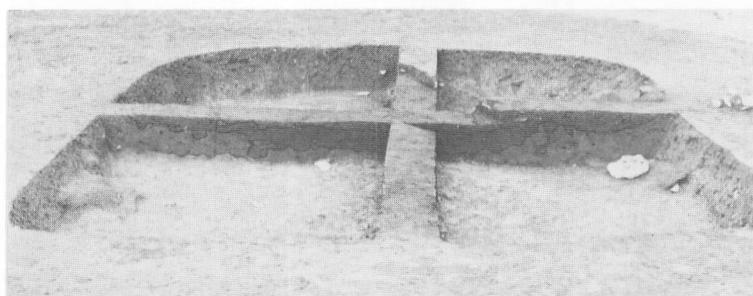
燃焼部断面



煙道断面



断面 1



断面 2



煙道完掘



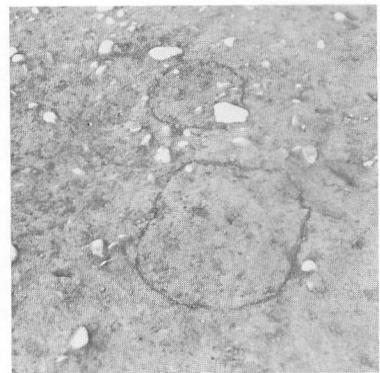
カマド検出状況



カマド完掘



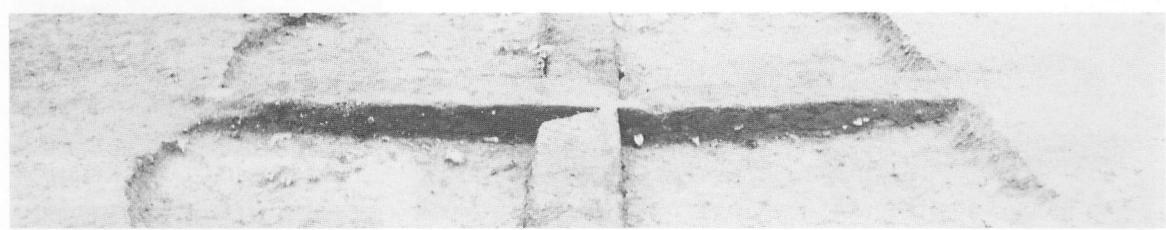
J 37住居跡全景



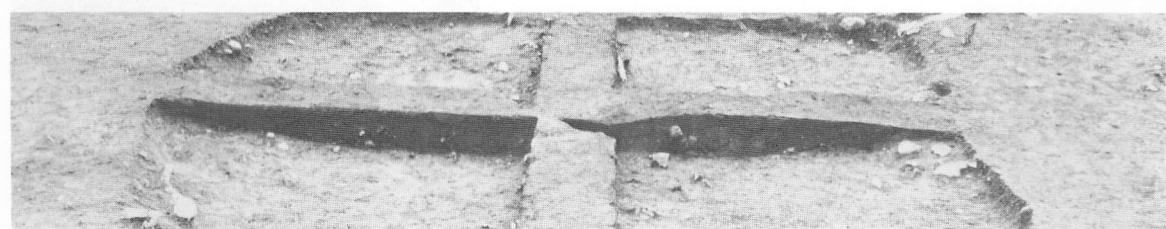
焼土検出状況



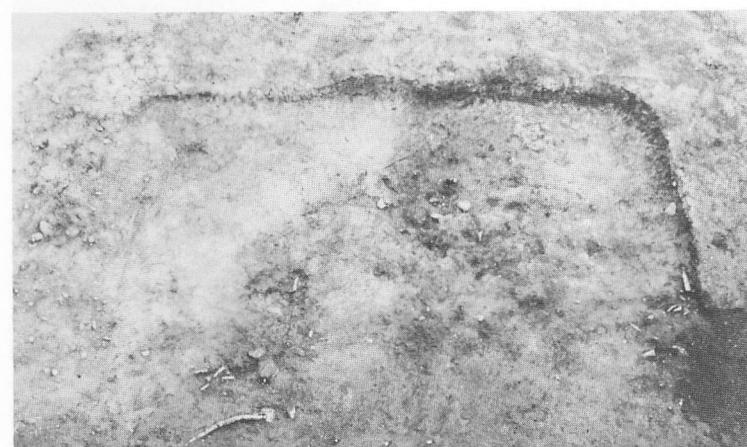
焼土断面



断面 1



断面 2

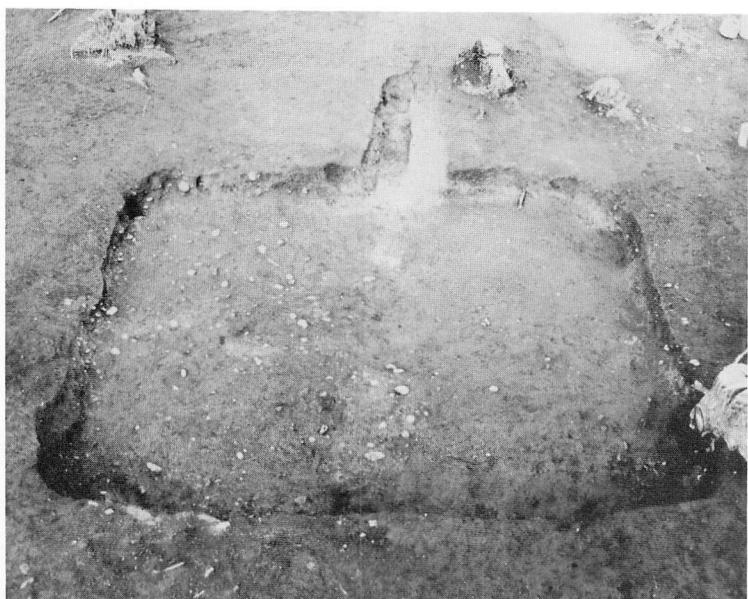


I 41住居跡全景



断面

写真図版21 J 37・I 41住居跡



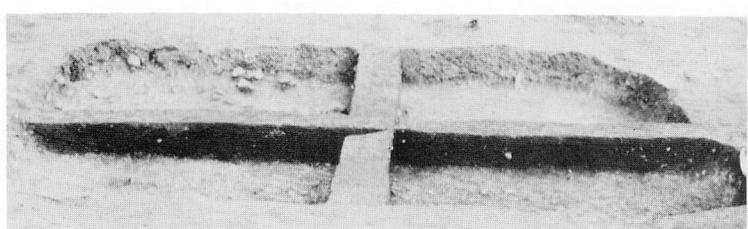
全景



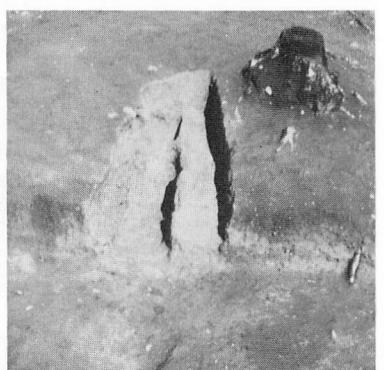
全景



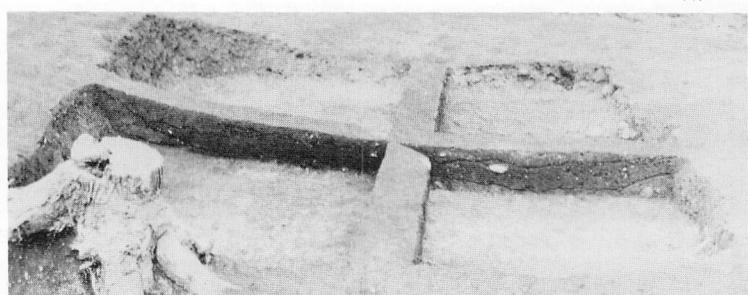
カマド検出状況



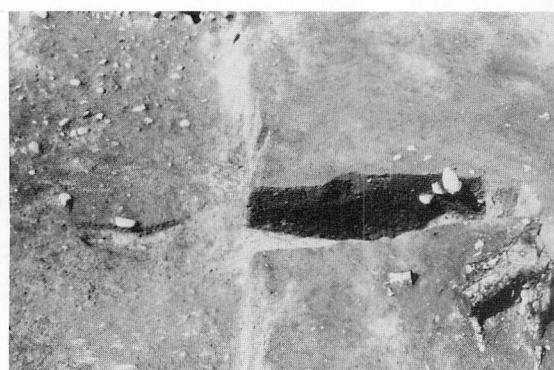
断面 1



カマド完掘



断面 2



煙道断面

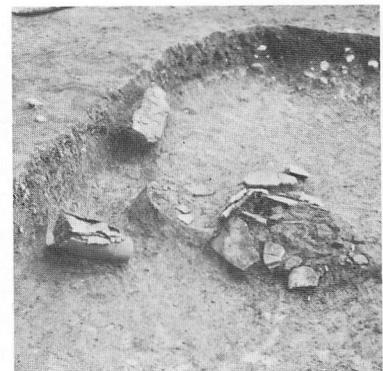


煙道完掘

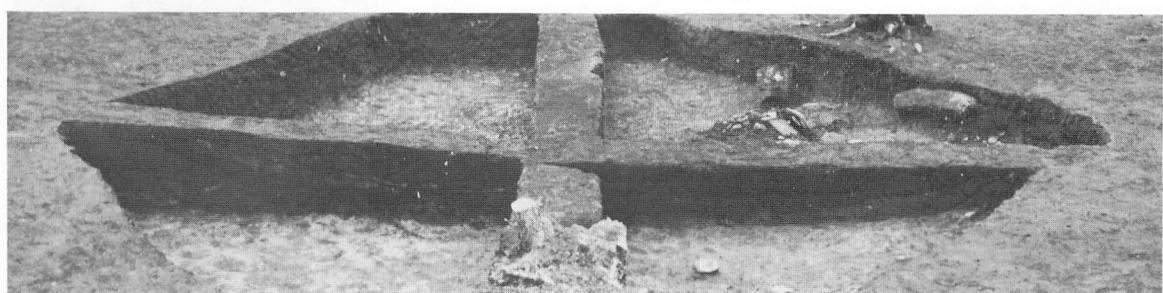
写真図版22 143住居跡



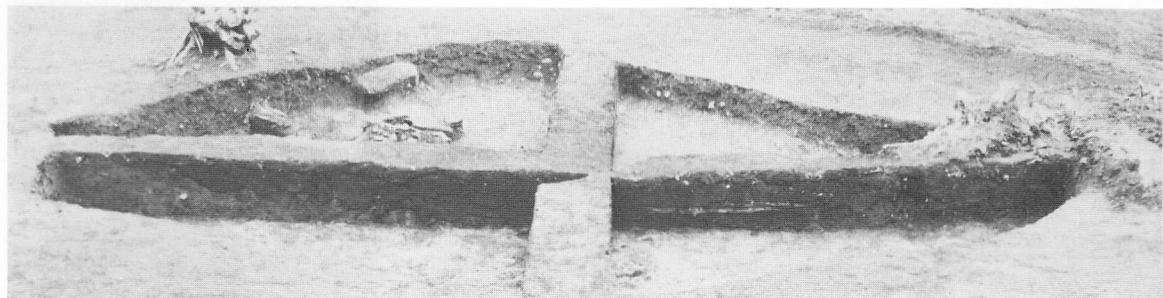
全景



遺物出土状況



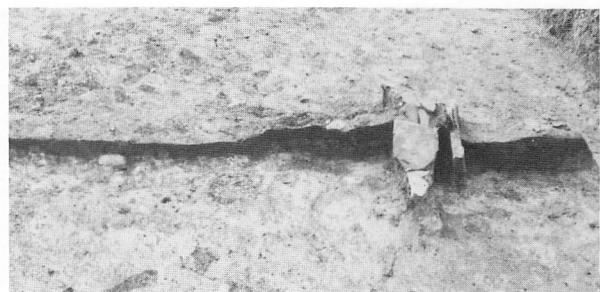
断面 1



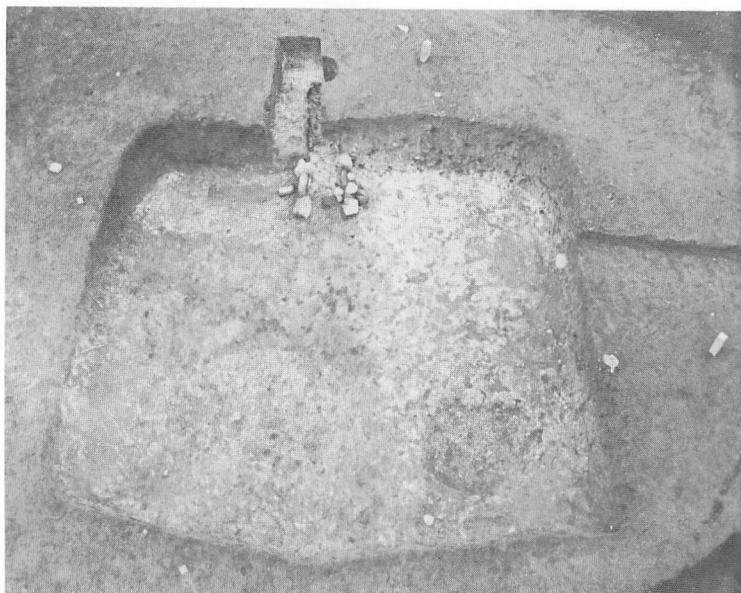
断面 2



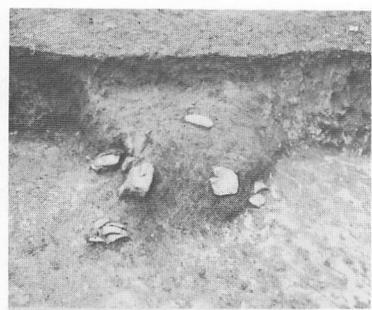
カマド断面 1



カマド断面 2



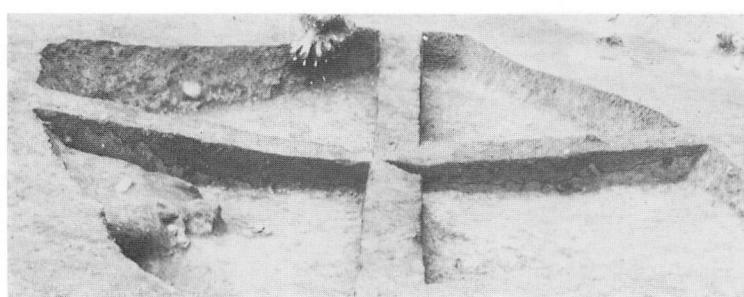
全景



2号カマド検出状況



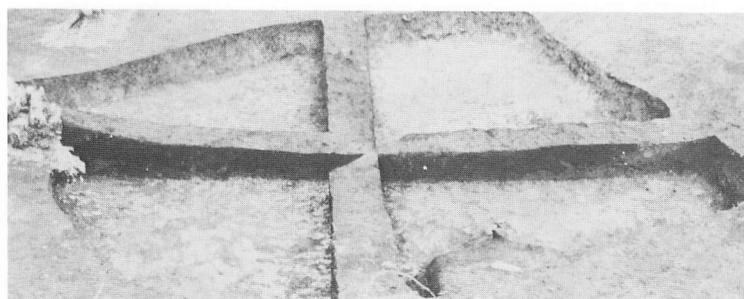
カマド断面



断面 1



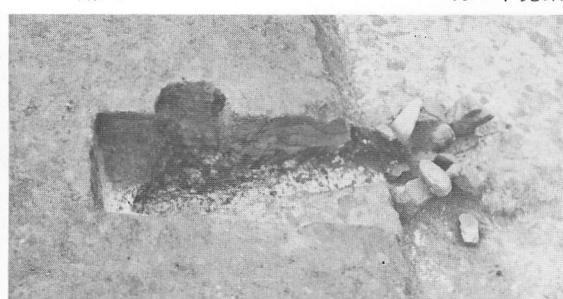
カマド完掘



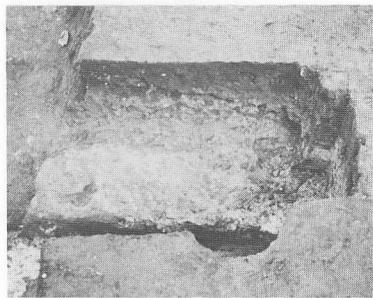
断面 2



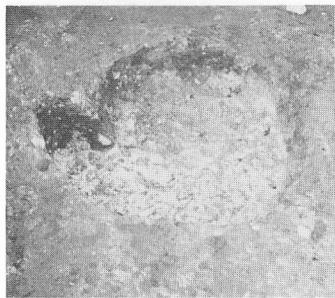
煙道断面



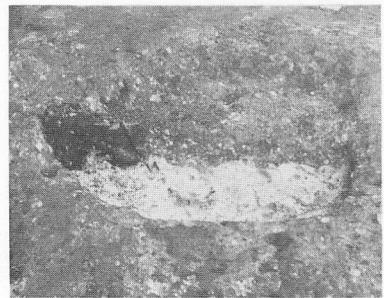
煙道完掘



G 47住居跡 I号カマド煙道完掘



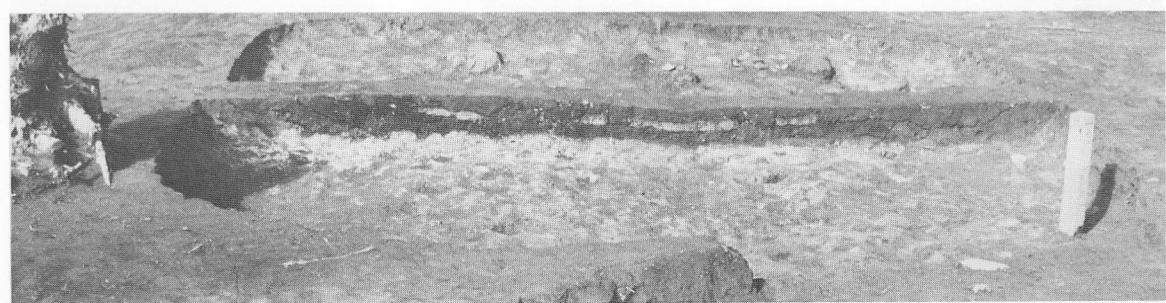
土坑全景



断面



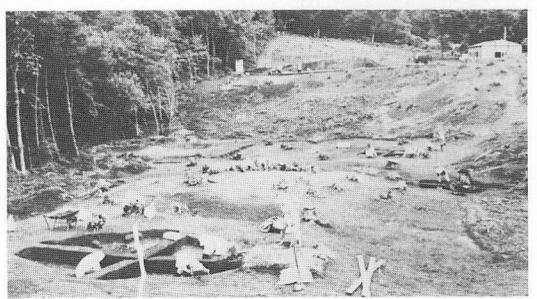
H 47住居跡全景



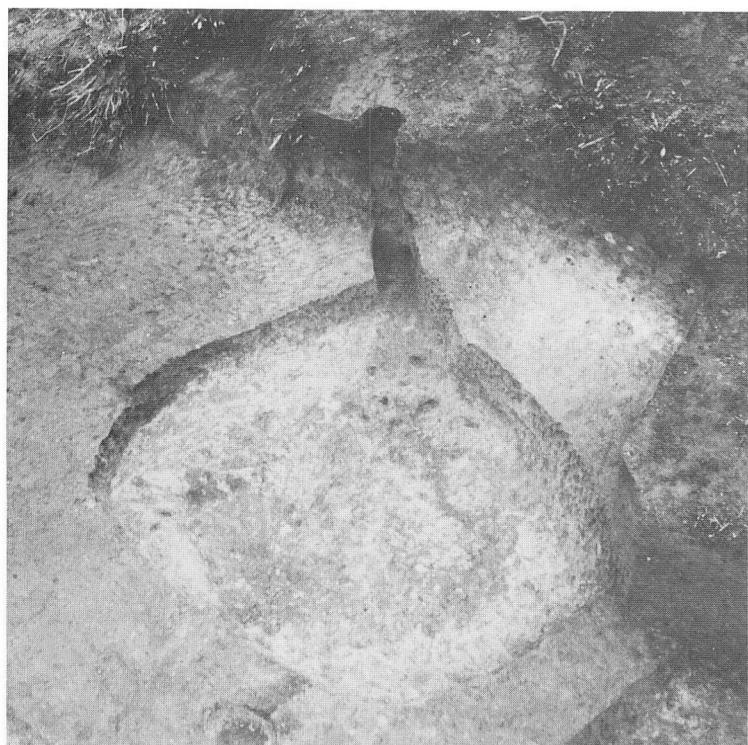
断面



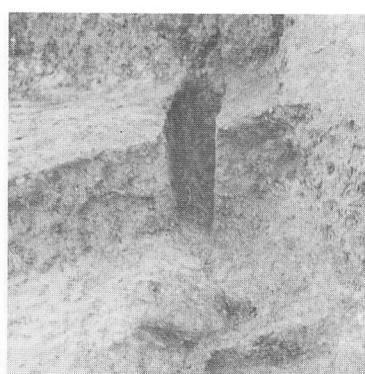
焼土断面



調査風景



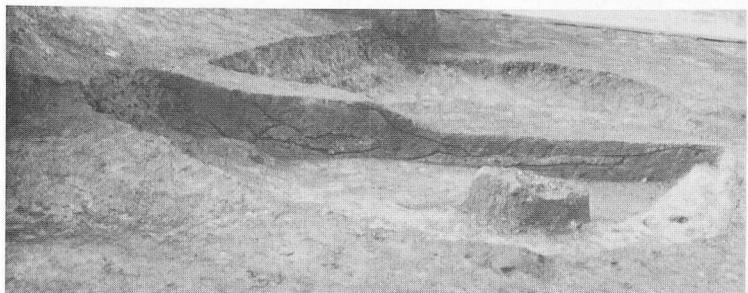
全景



焼土断面



煙道完掘



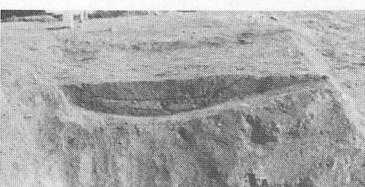
断面



J 26焼土



煙道断面

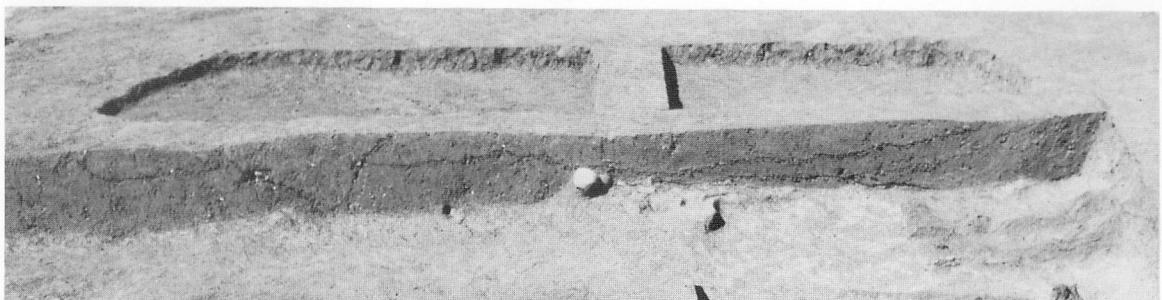


断面

写真図版26 K 47住居跡・焼土遺構



全景



断面

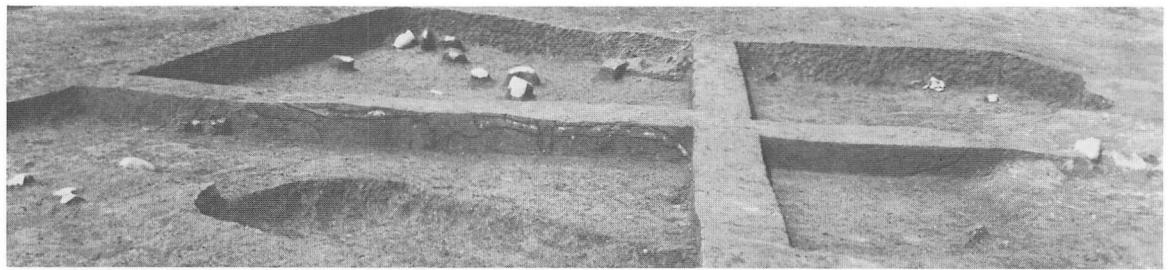


遺物出土状況

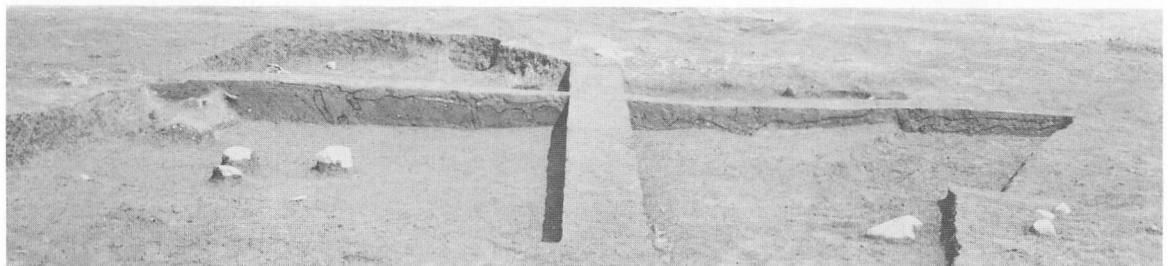


カマド焼土断面

写真図版27 05住居跡



断面 1



断面 2



全景



カマド完掘



カマド断面 1



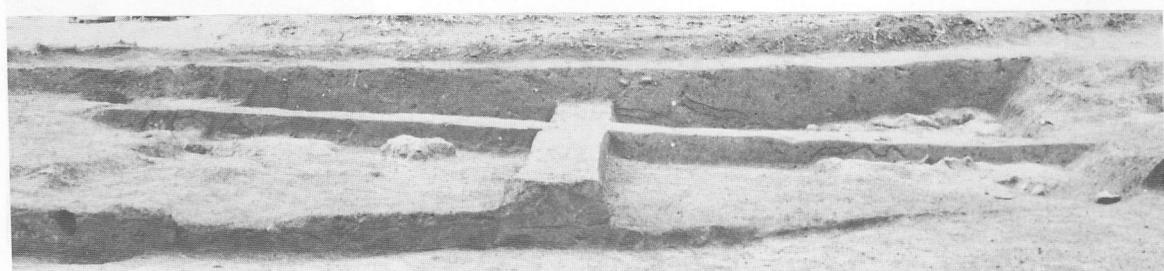
カマド断面 2



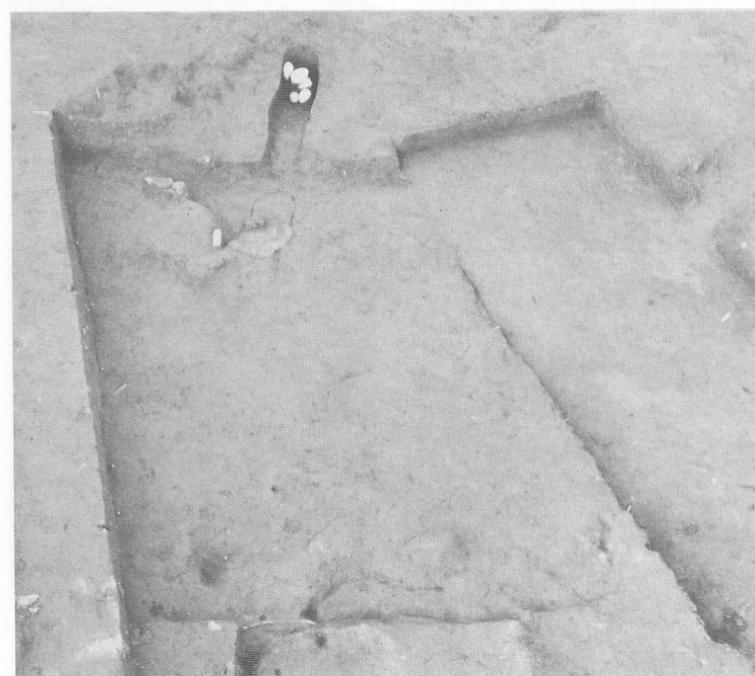
燃焼部焼土断面



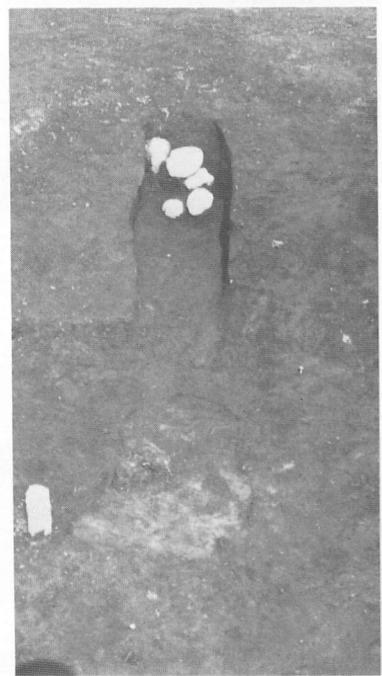
断面 1



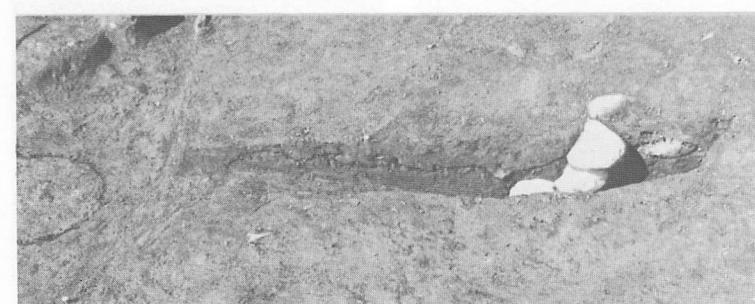
断面 2



全景



カマド完掘



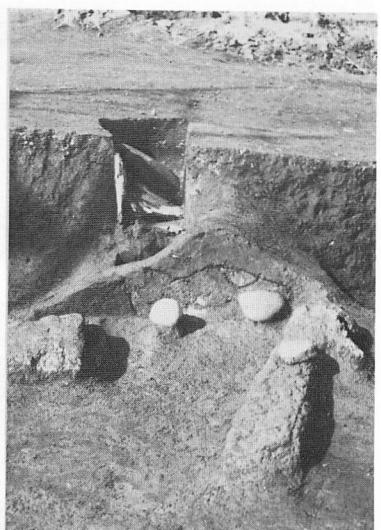
煙道断面



燃焼部焼土断面



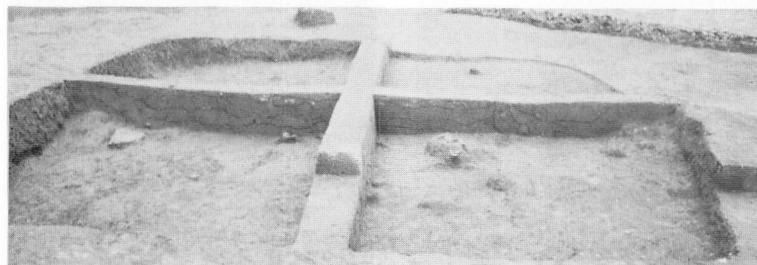
全景



カマド断面2



断面1



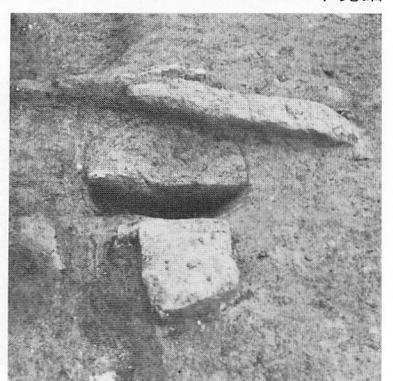
断面2



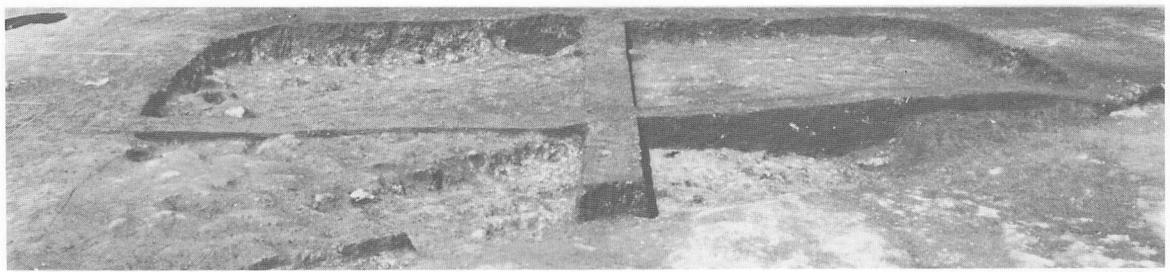
カマド完掘



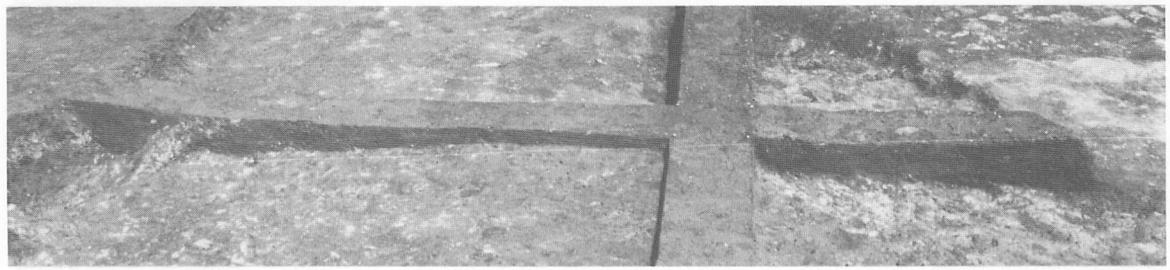
カマド断面1



燃焼部焼土断面



断面 1



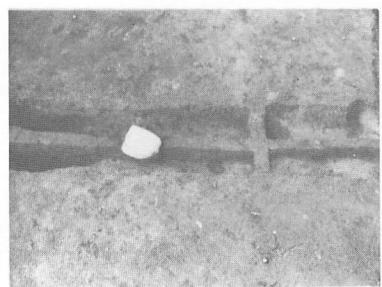
断面 2



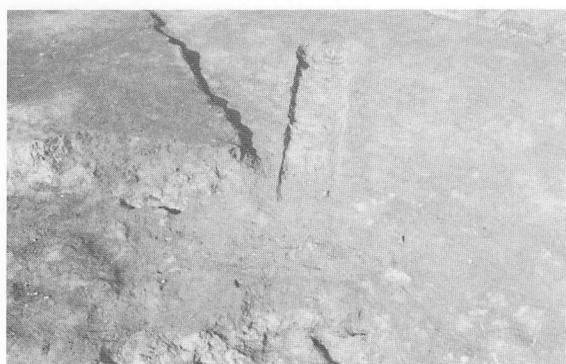
全景



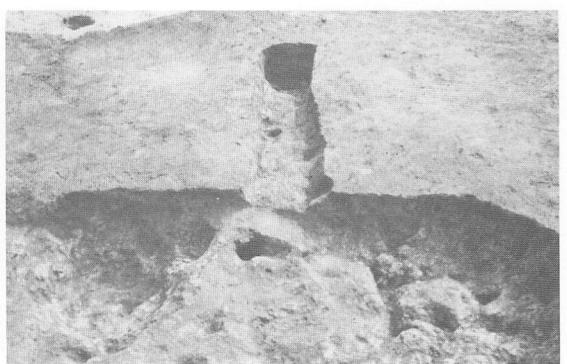
北カマド煙道



南カマド煙道



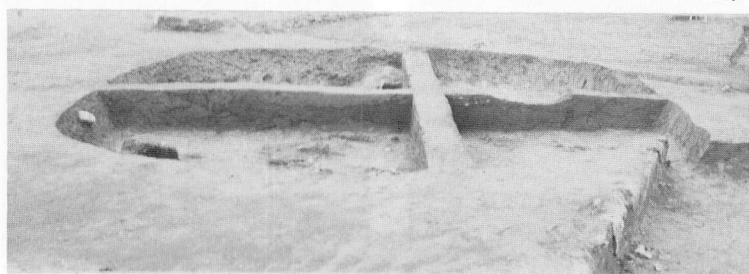
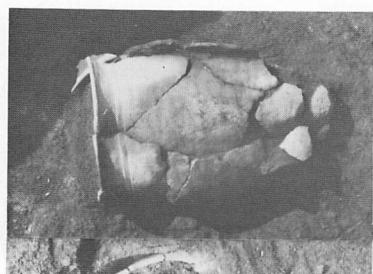
北カマド完掘



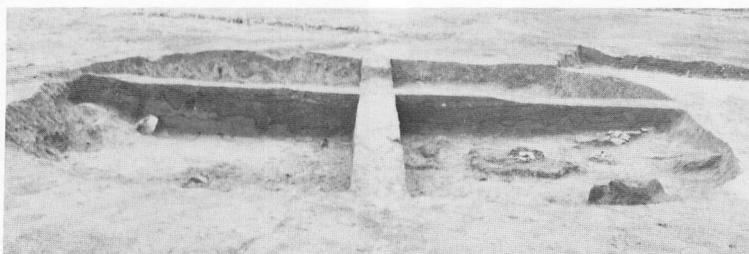
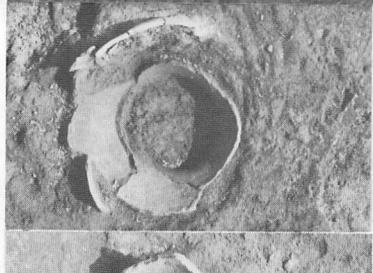
南カマド完掘



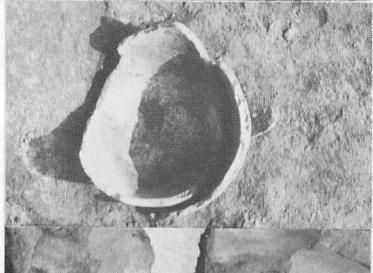
全景



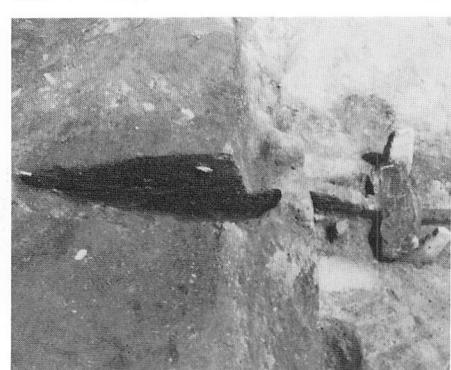
断面 1



断面 2



遺物出土状況



カマド断面 1

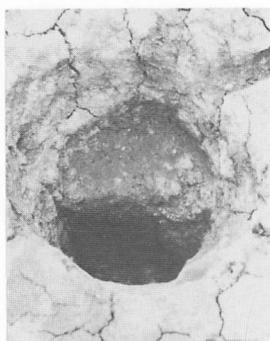


断面 2

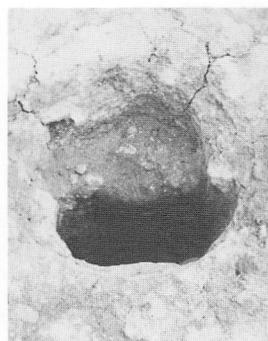


完掘

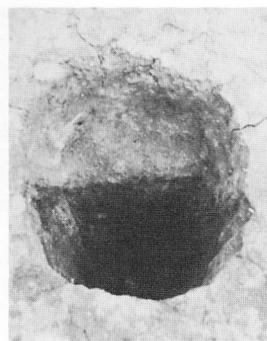
写真図版32 M10住居跡



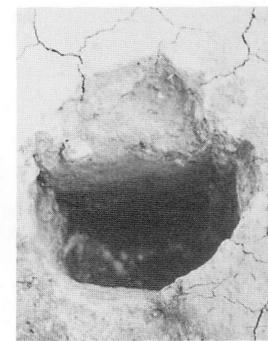
M10住居跡柱穴 1



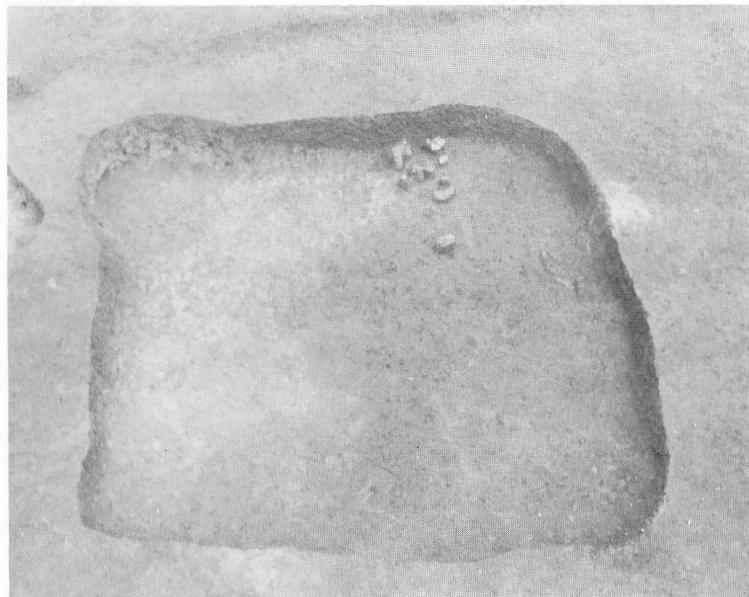
柱穴 2



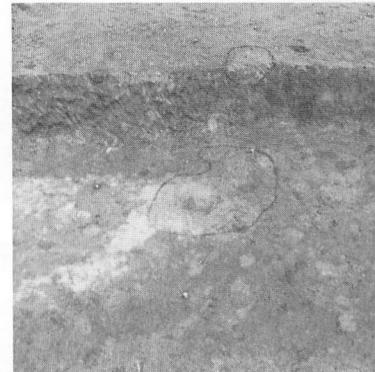
柱穴 3



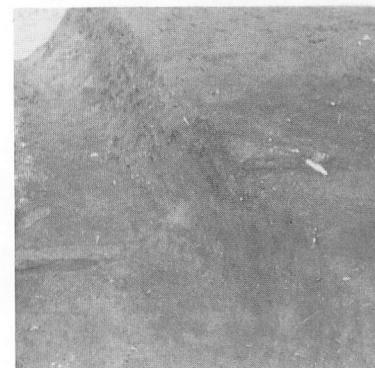
柱穴 4



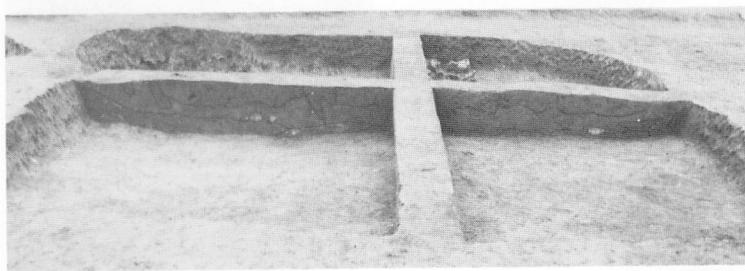
N10住居跡全景



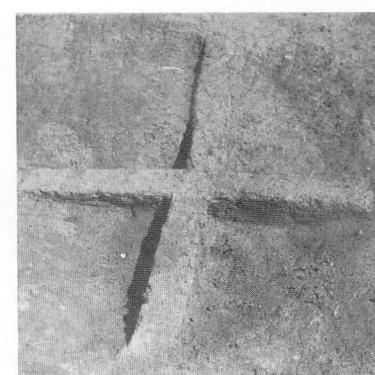
カマド全景



カマド断面 1



断面 1

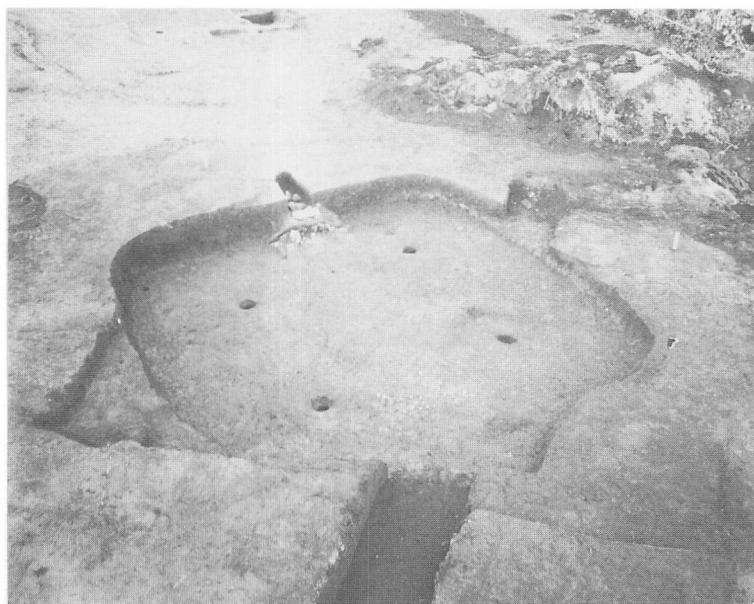


カマド断面 2



断面 2

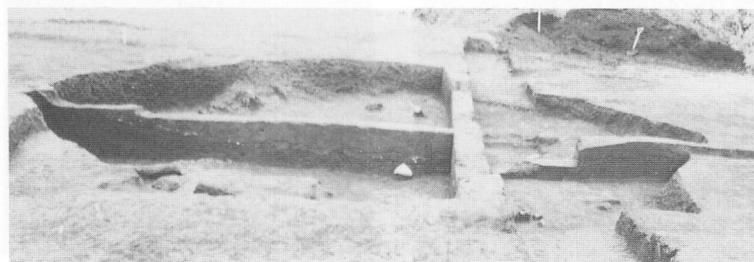
写真図版33 M10・N10住居跡



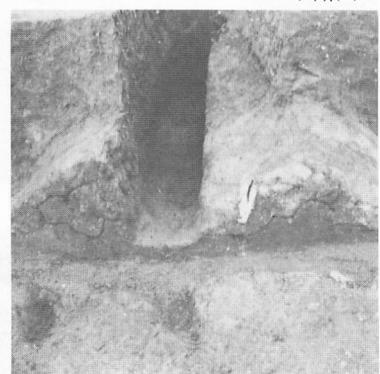
断面 1



カマド断面 1



断面 2



カマド断面 2



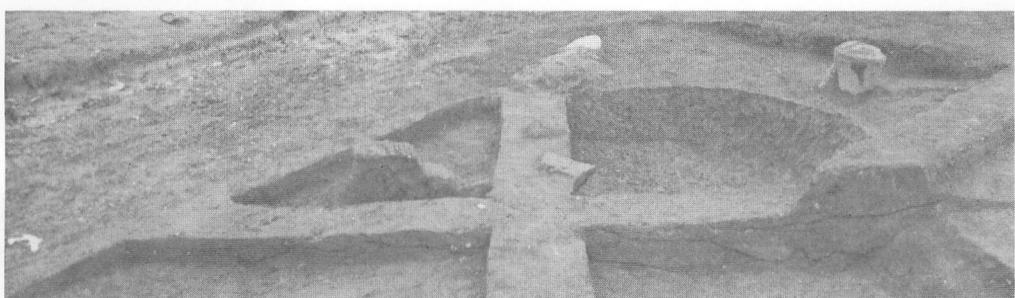
煙道断面



カマド内土器



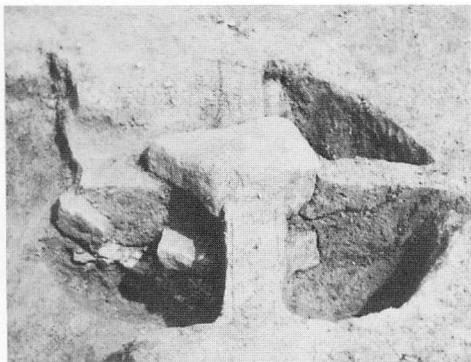
全景



断面 1



断面 2



土坑断面 1

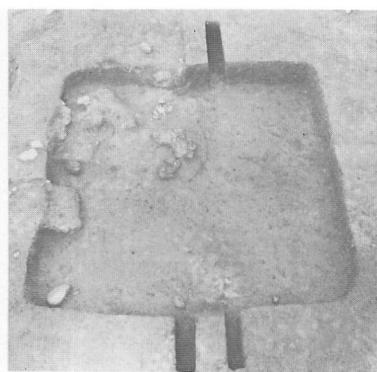


断面 2

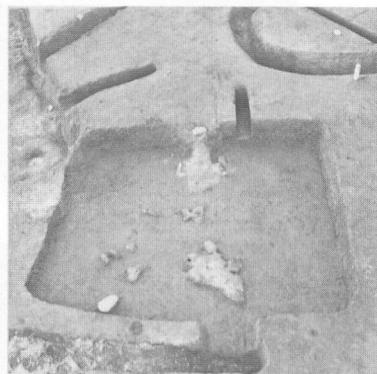
写真図版35 J12住居跡



全景



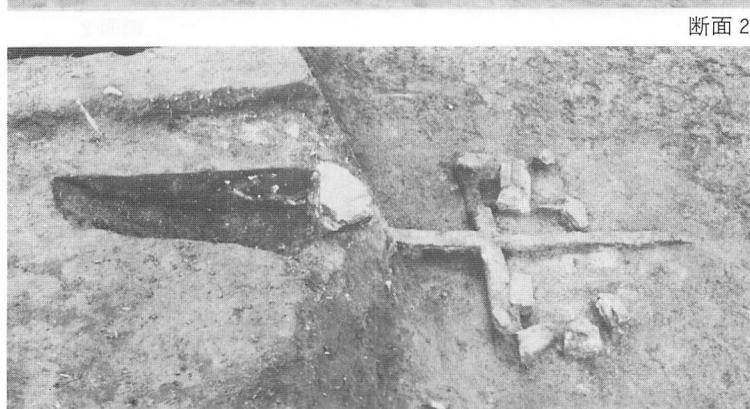
第1次



第2次



カマド断面2

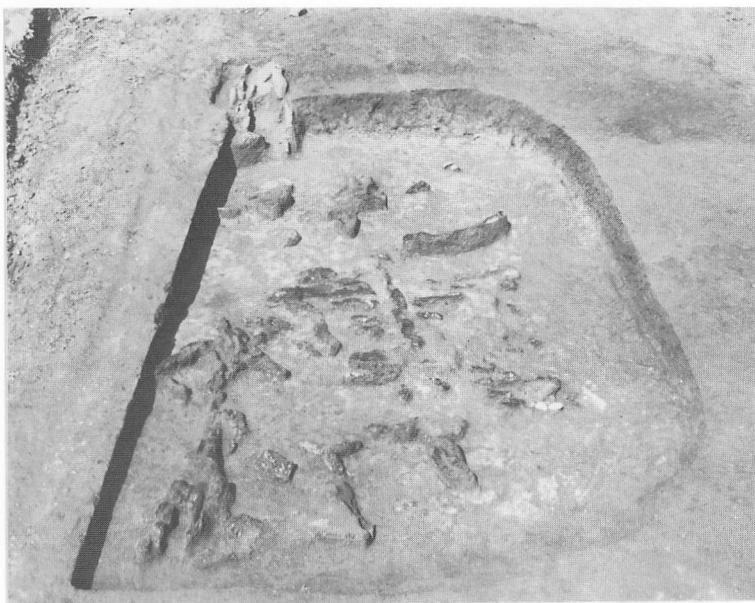


カマド断面1

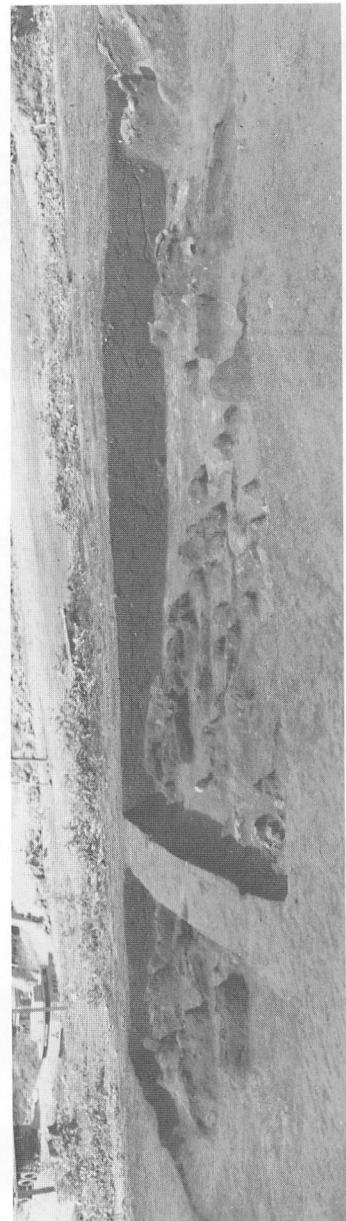
写真図版36 P12住居跡

燃焼部焼土断面

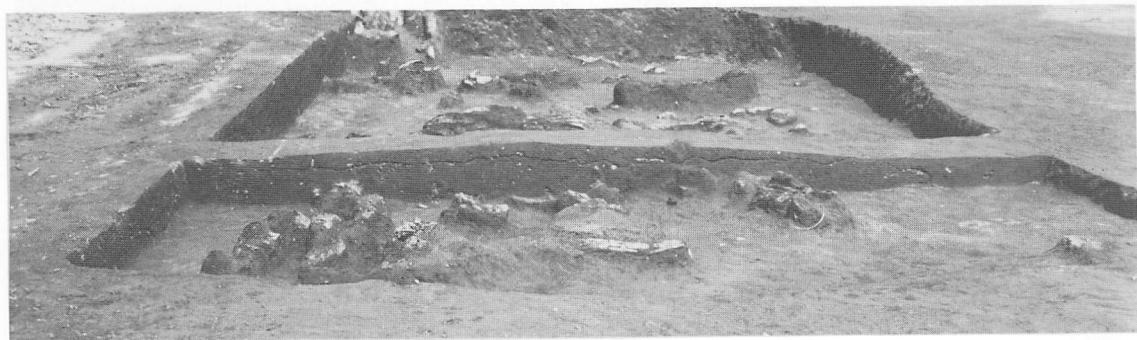
断面2



炭化材分布状况



全景



断面1



カマド断面 1



断面 2



断面 3



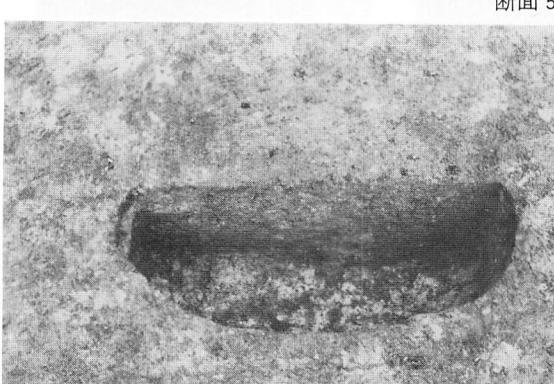
断面 4



断面 5



カマド完掘



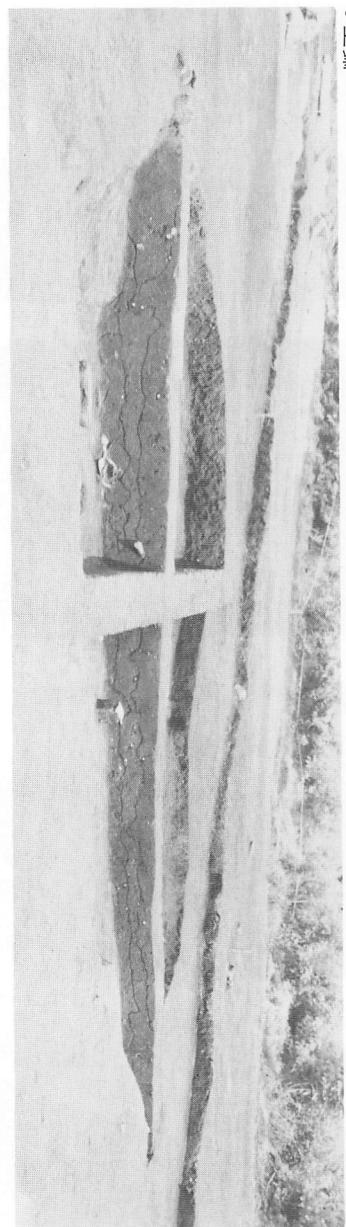
土坑断面



全景

写真図版38 M13住居跡(2)

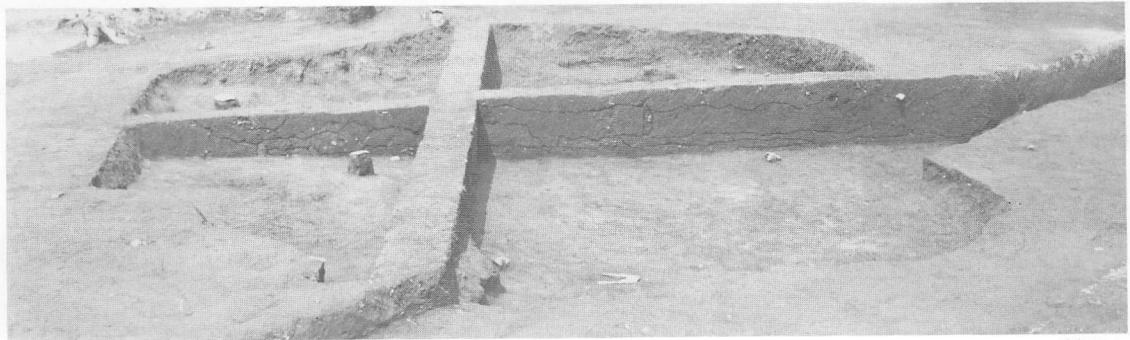
断面2



炭化材焼土分布状況

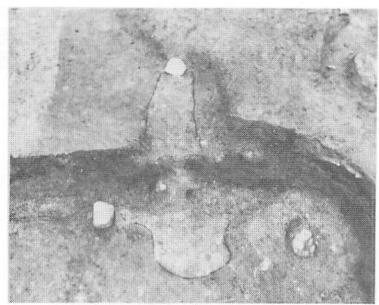


N13—1住全景



断面1

写真図版39 N13住居跡(1)



東カマド全景



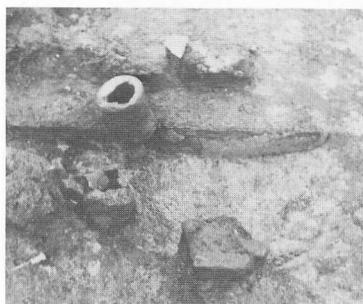
煙道断面



燃焼部焼土断面



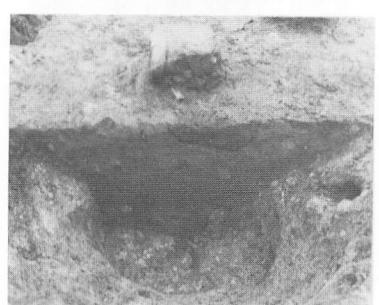
西カマド断面Ⅰ



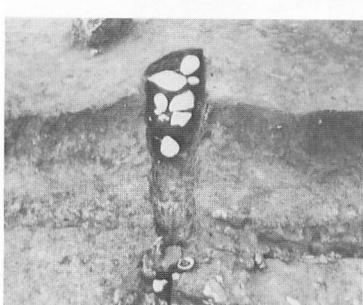
断面2



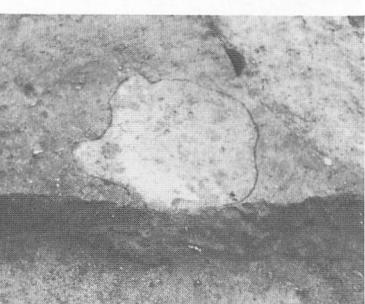
西カマド完掘



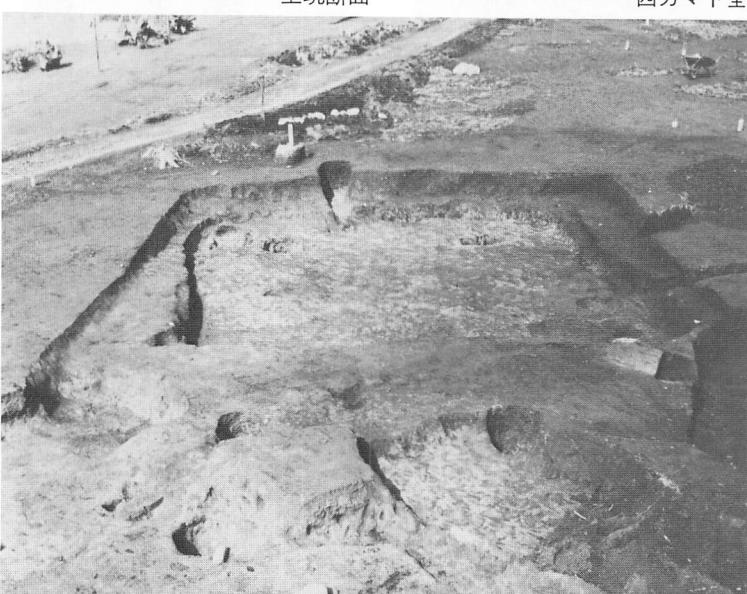
土坑断面



西カマド全景



燃焼部焼土



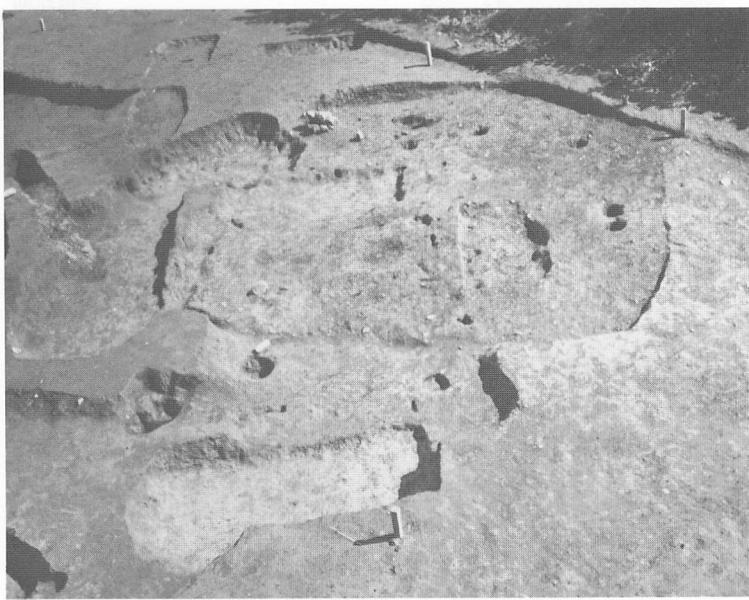
N13-2住全景



燃焼部焼土断面



炭化材分布状況



全景

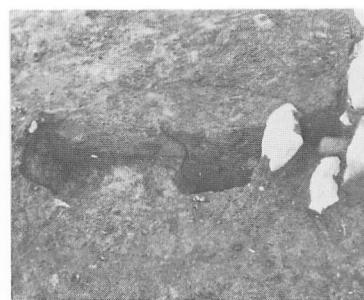


写真図版41 Q14住居跡

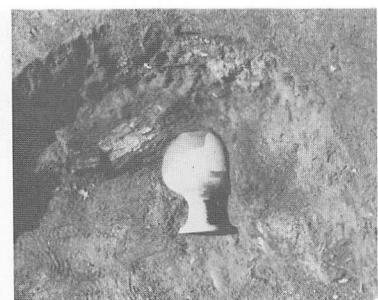
断面 1



Q 14住居跡カマド断面 1



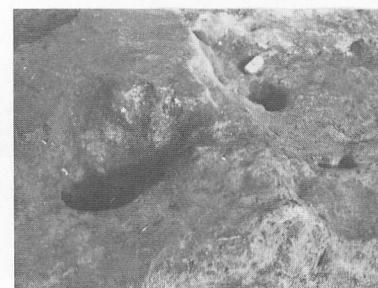
断面 2



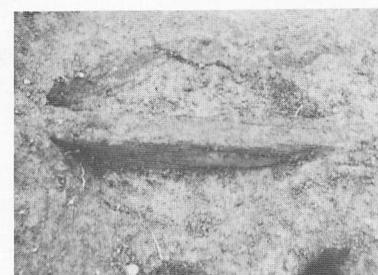
須恵器出土状況



P 14住居跡全景



煙道断面



燃焼部焼土断面



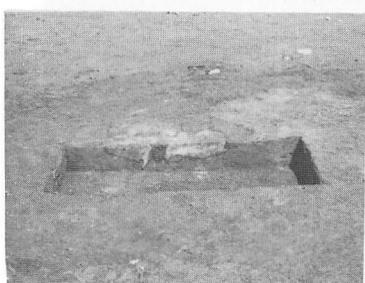
H 6 焼土



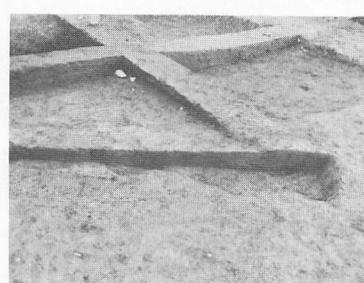
G 8 焼土



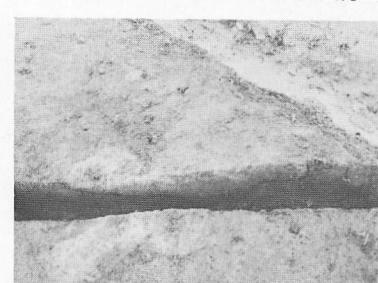
I 12焼土



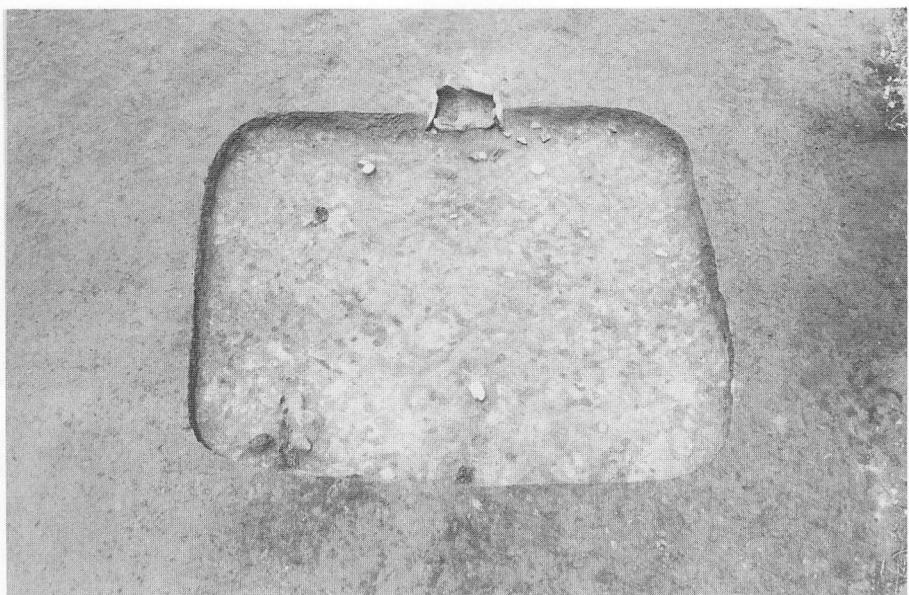
断面



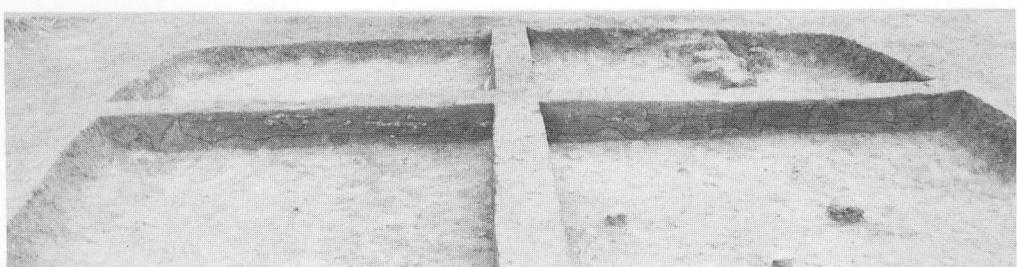
断面



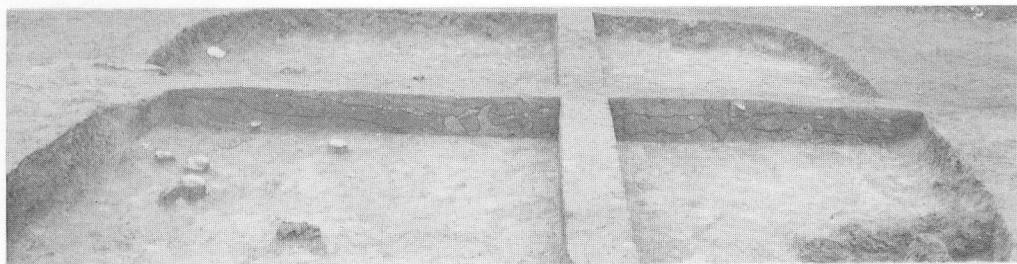
断面



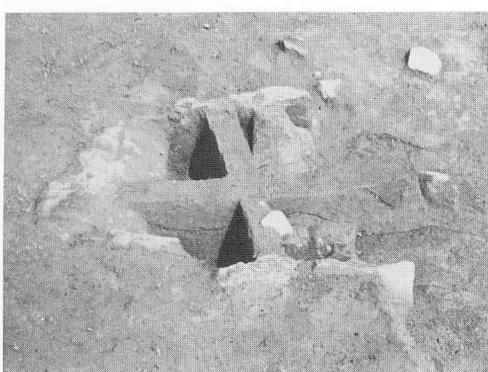
全景



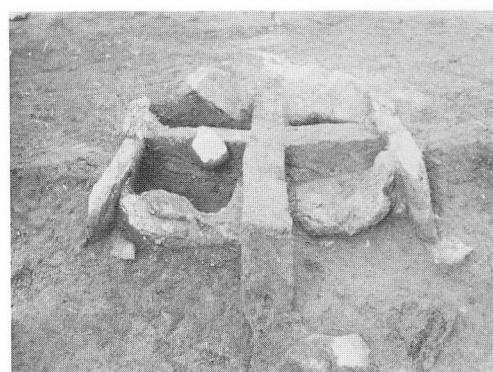
断面 1



断面 2

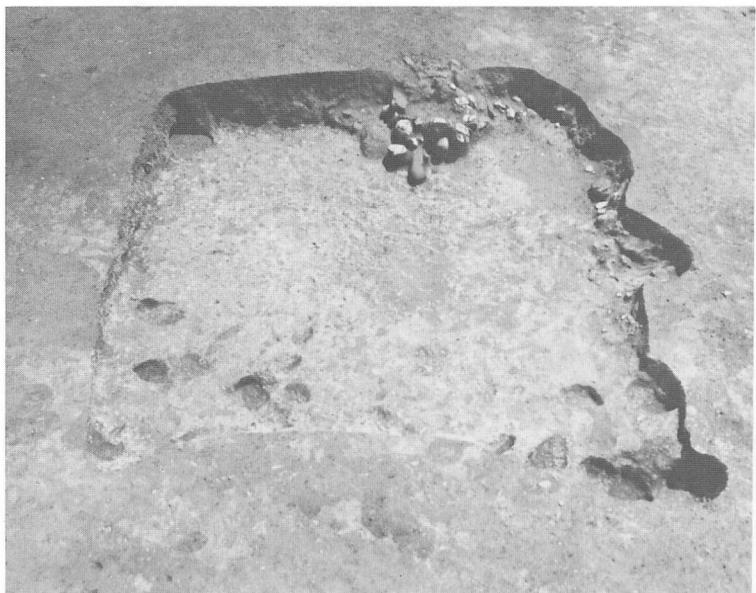


カマド断面 1

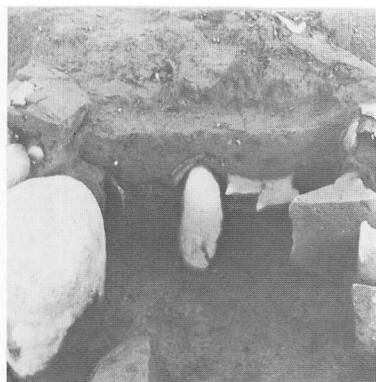


断面 2

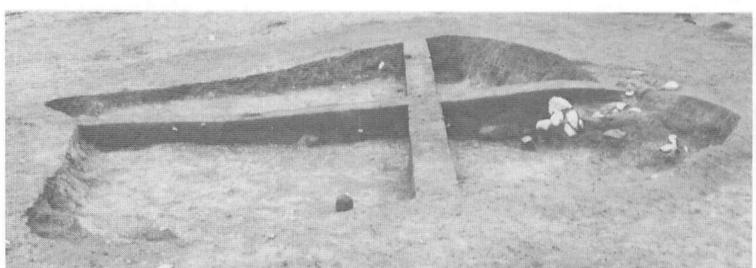
写真図版43 N 22住居跡



全景



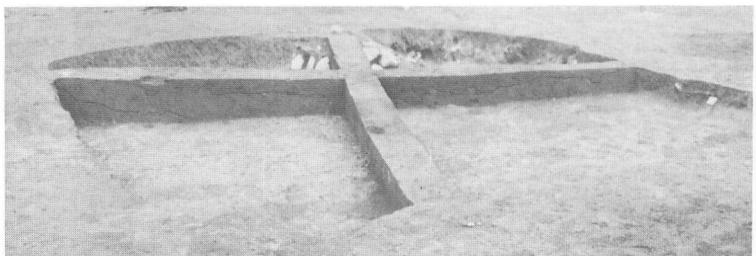
燃焼部断面



断面 1



カマド完掘



断面 2



煙道断面



燃焼部断面

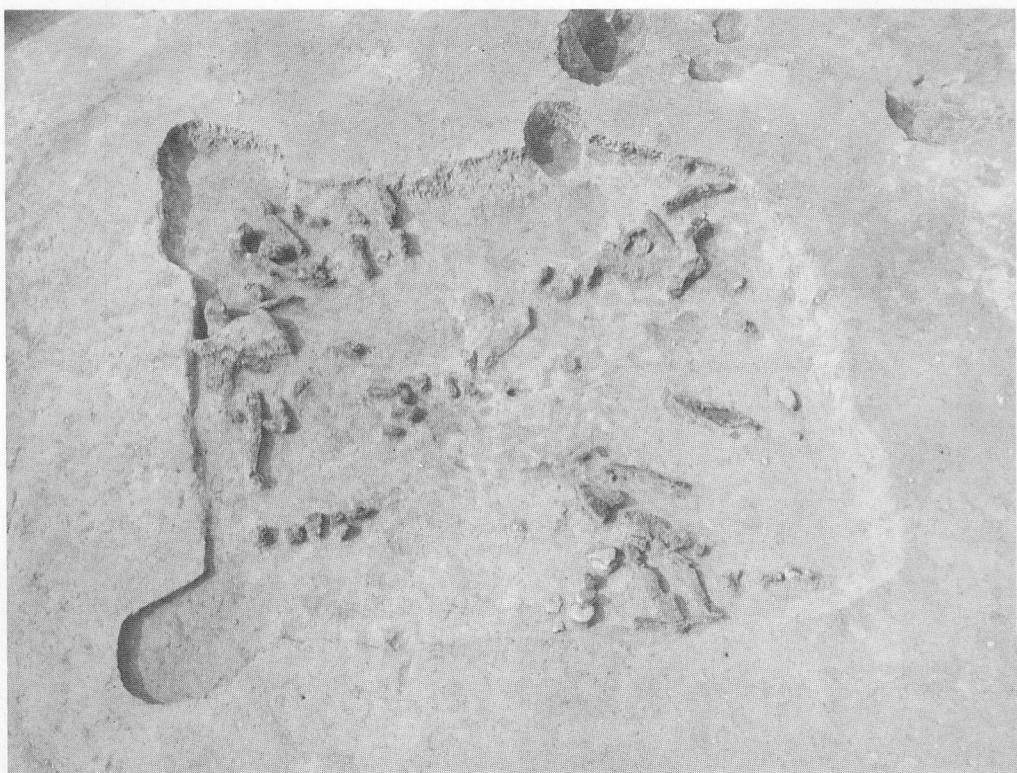
写真図版44 M 23住居跡



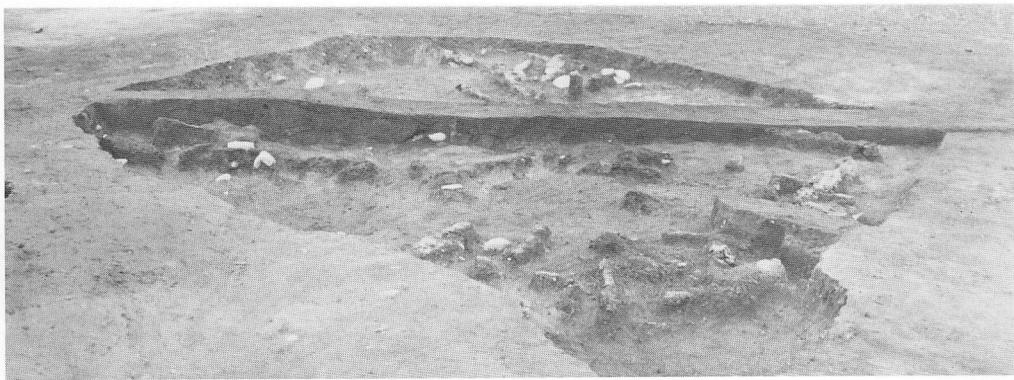
M 23住居跡カマド断面



鉄器出土状況

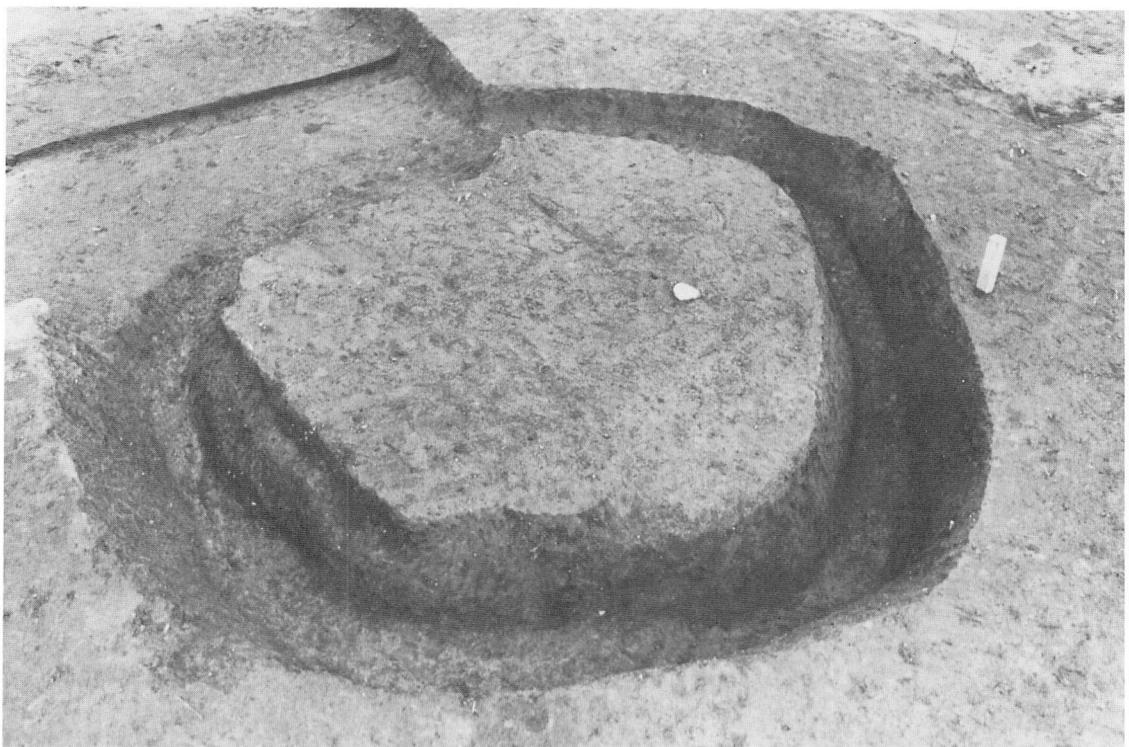


M 24住居跡炭化材分布状況



断面

写真図版45 M 23・M 24住居跡



全景



付近の遺構



断面 1



断面 2

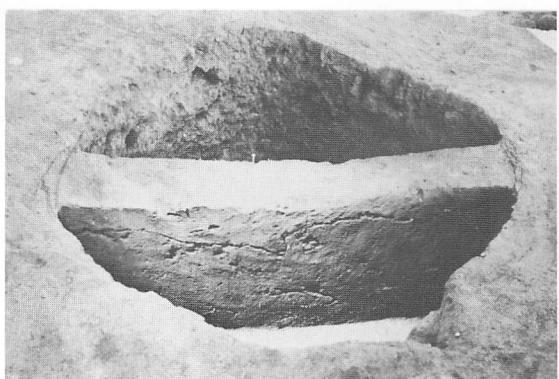


断面 3

写真図版46 OII円形周溝



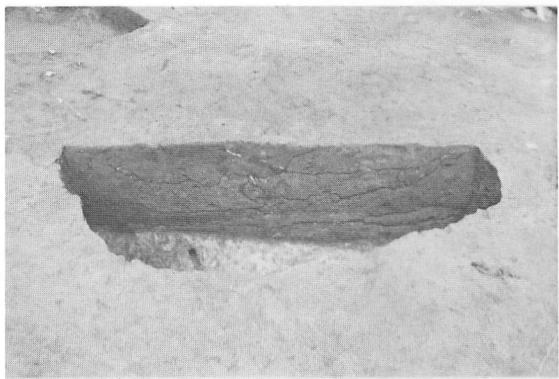
E 10



断面



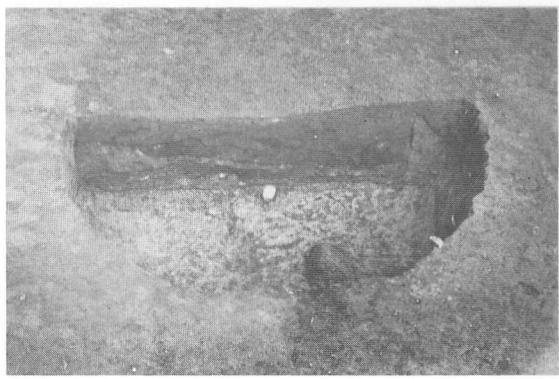
F 10-1



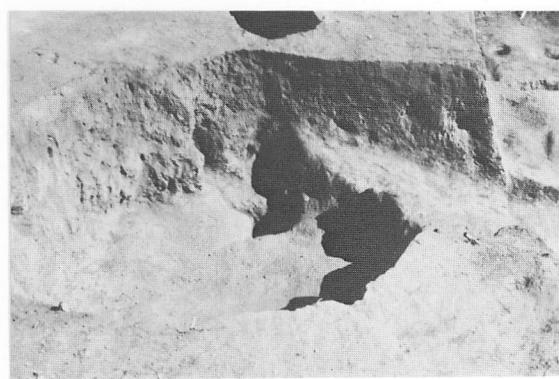
断面



F 10-2



断面

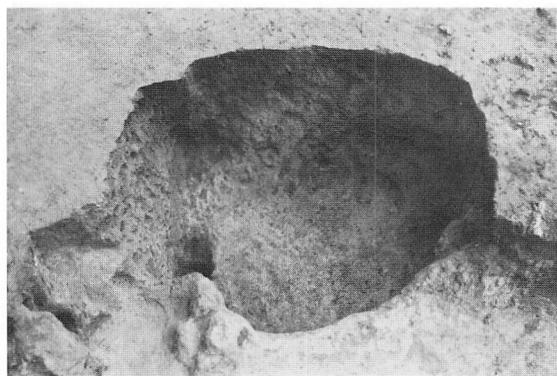


F II

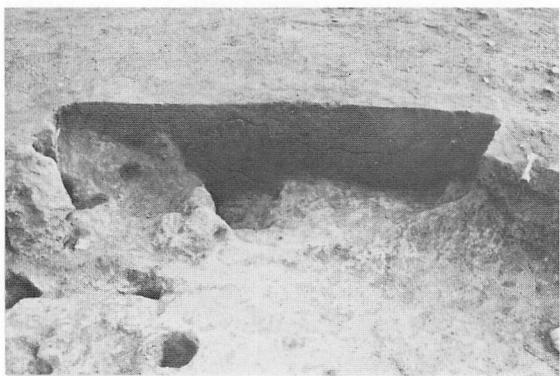


断面

写真図版47 土坑(Ⅰ)



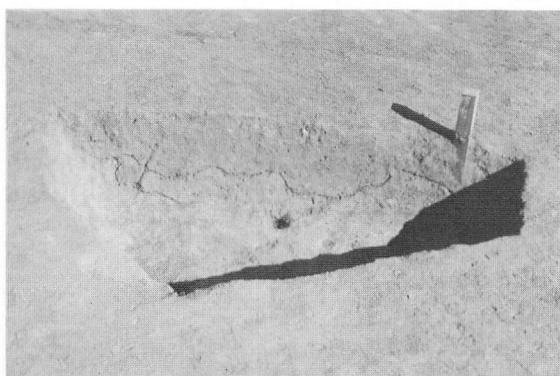
F 13



断面



H 13



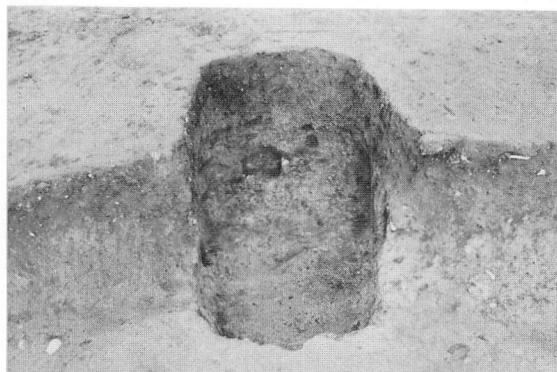
断面



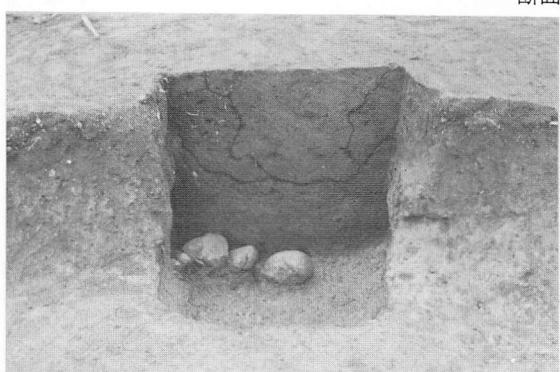
M 26



断面



L 28

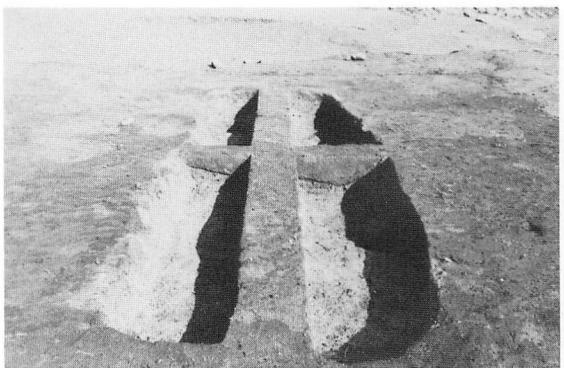


断面

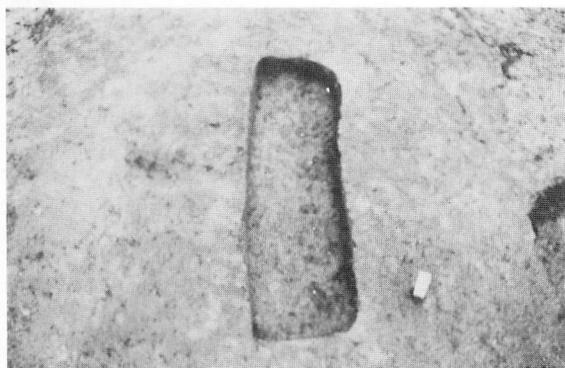
写真図版48 土坑(2)



N 6



断面



M 7



断面



O 7



M 9



N 10



断面

写真図版49 土坑(3)



N 12



断面



P 13



断面



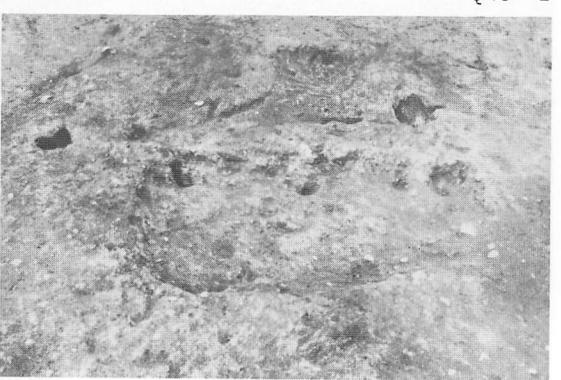
Q 13-1



Q 13-2



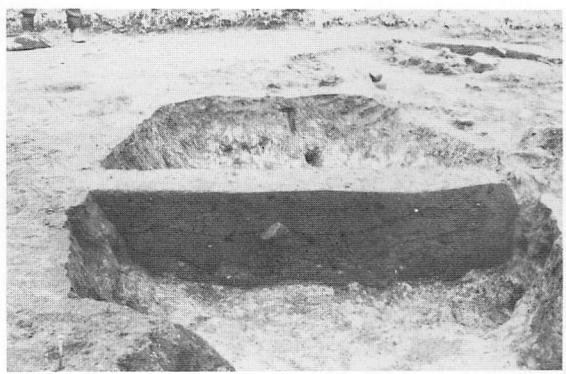
Q 13-3



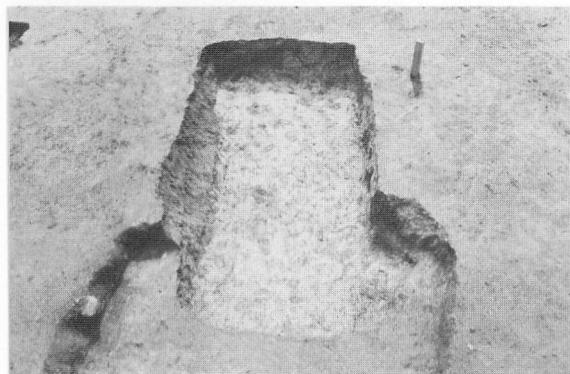
Q 14-2



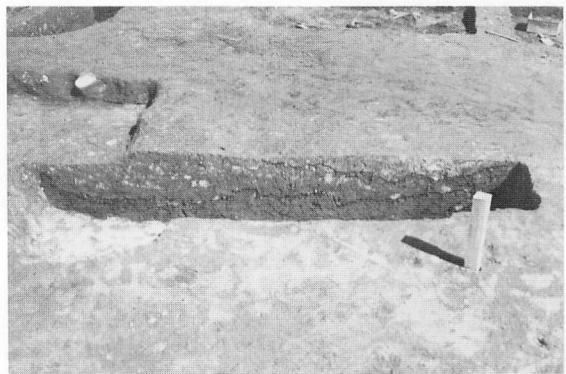
Q 13—4



断面



P 14



断面



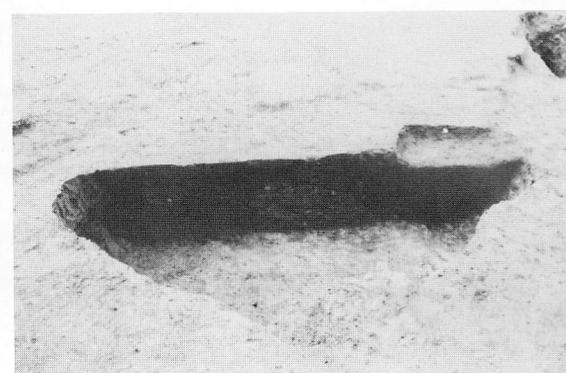
Q 14—1



断面



M 25

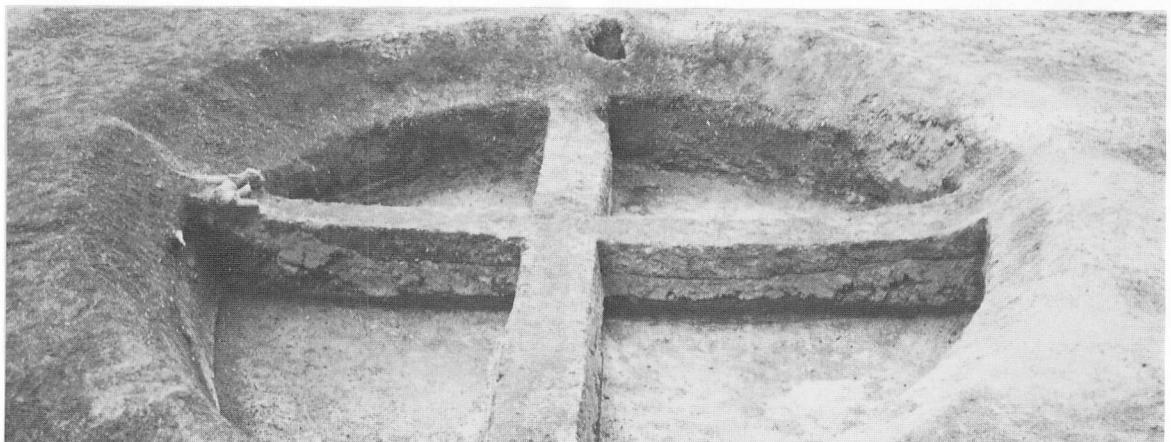


断面

写真図版51 土坑(5)



F36炭窯全景

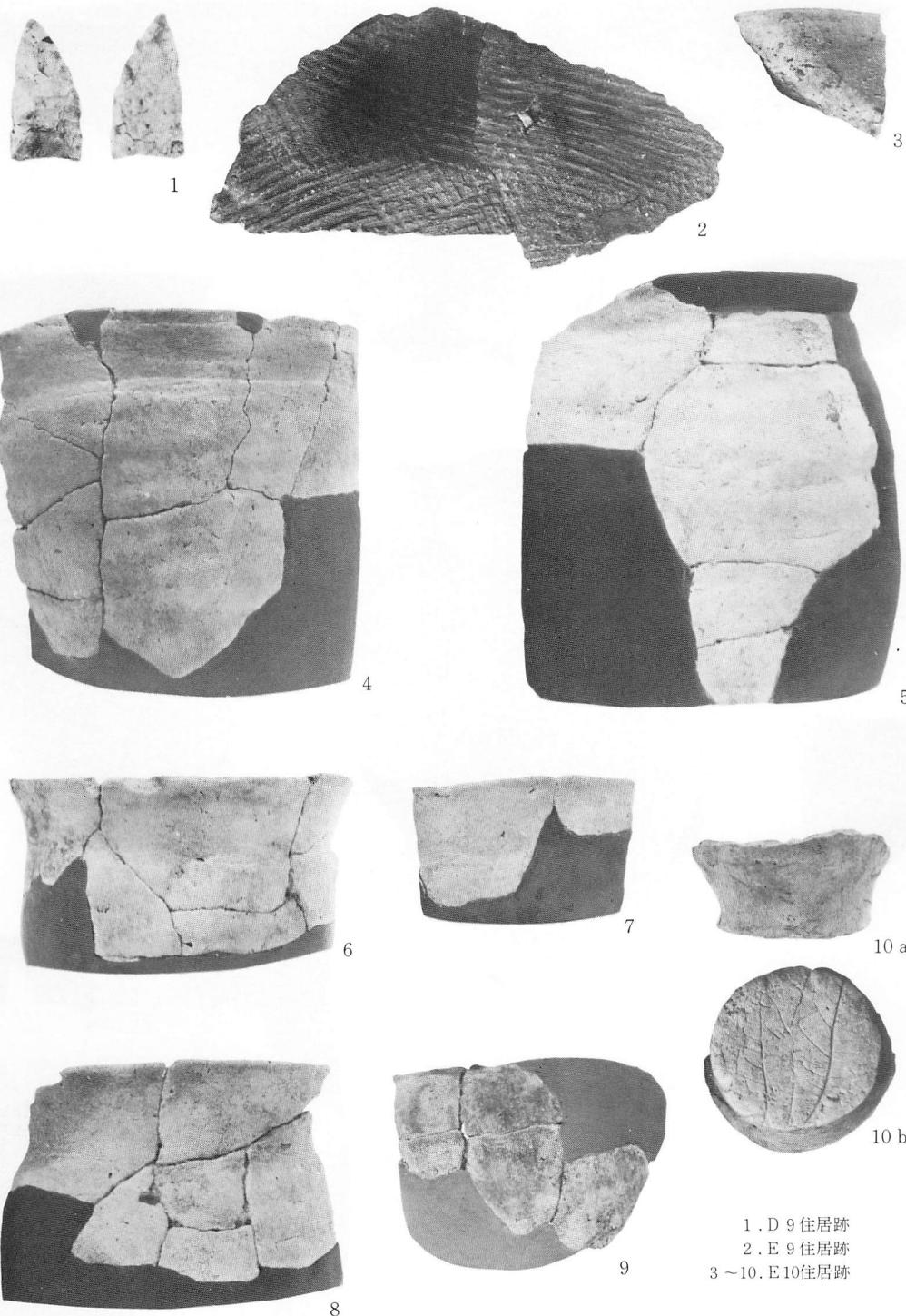


断面 1

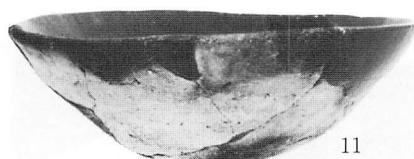


断面 2

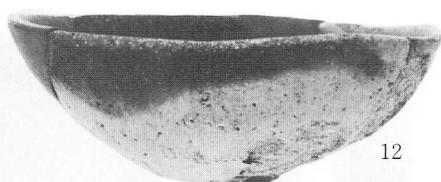
写真図版52 F36炭窯



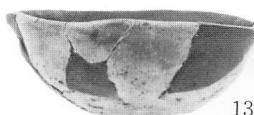
写真図版53 D 9 · E 9 · E 10住居跡(遺物)



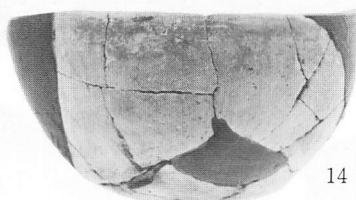
11



12



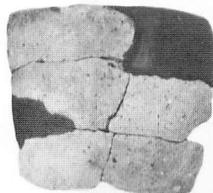
13



14



15



16



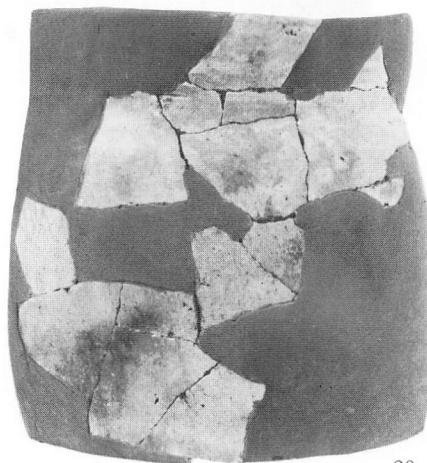
17



18



19



20

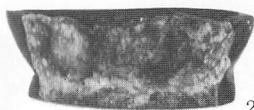
写真図版54 G 12住居跡(遺物)



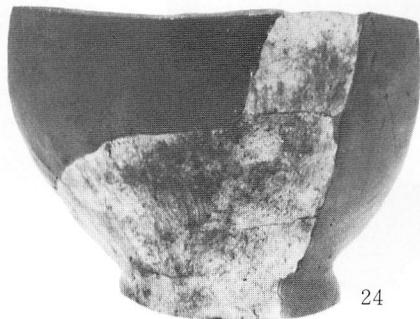
21



22



23

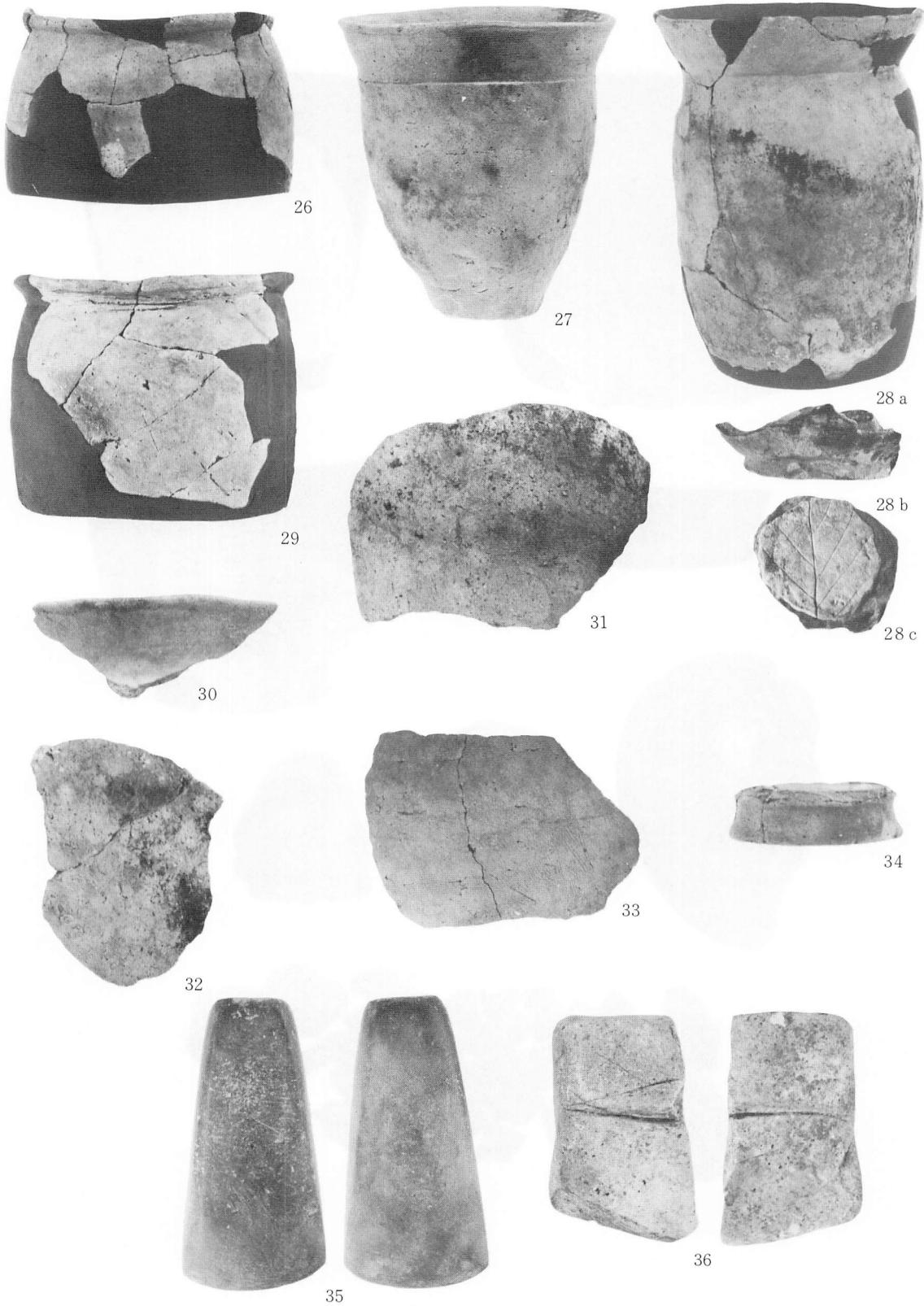


24

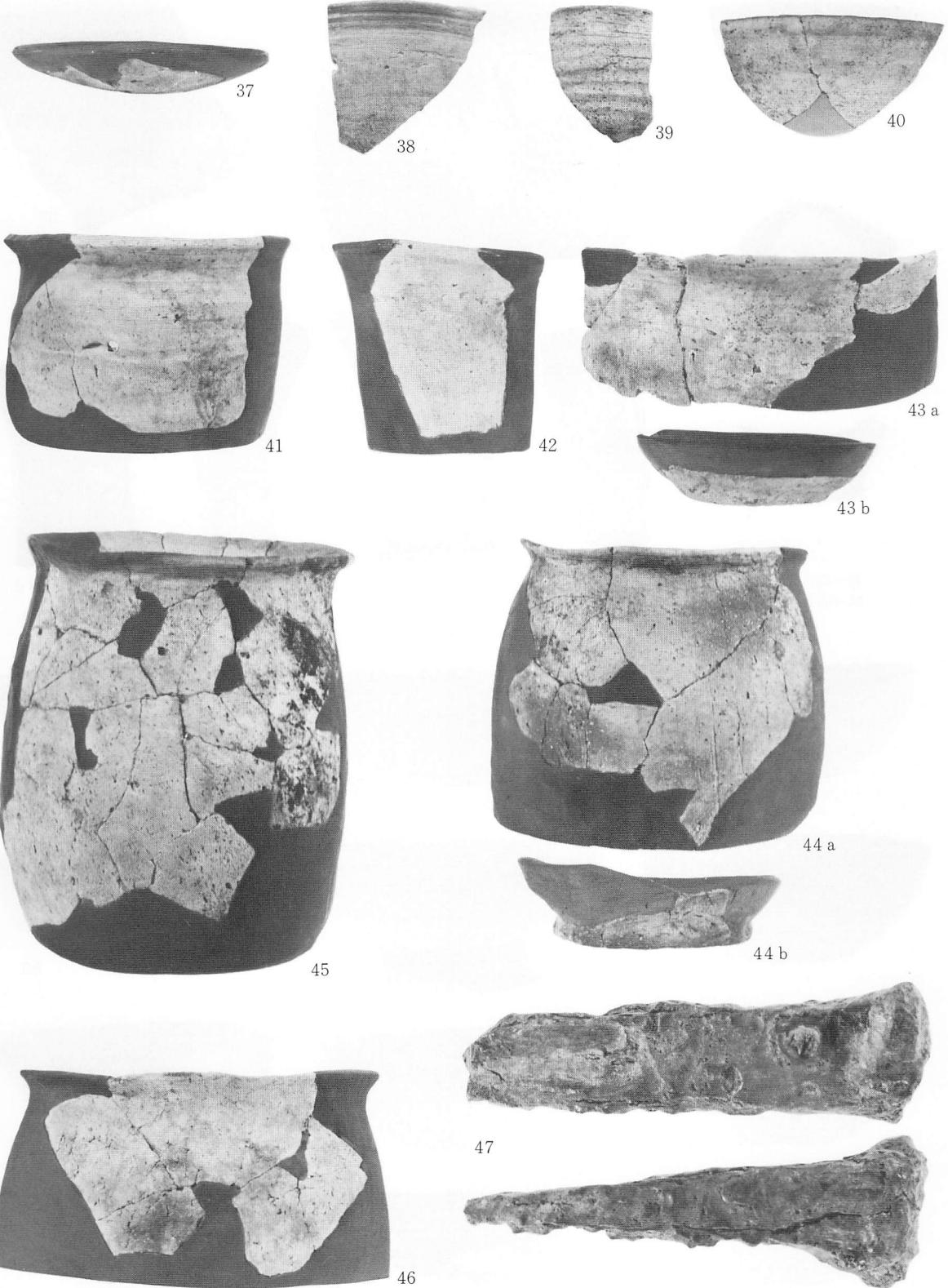


25

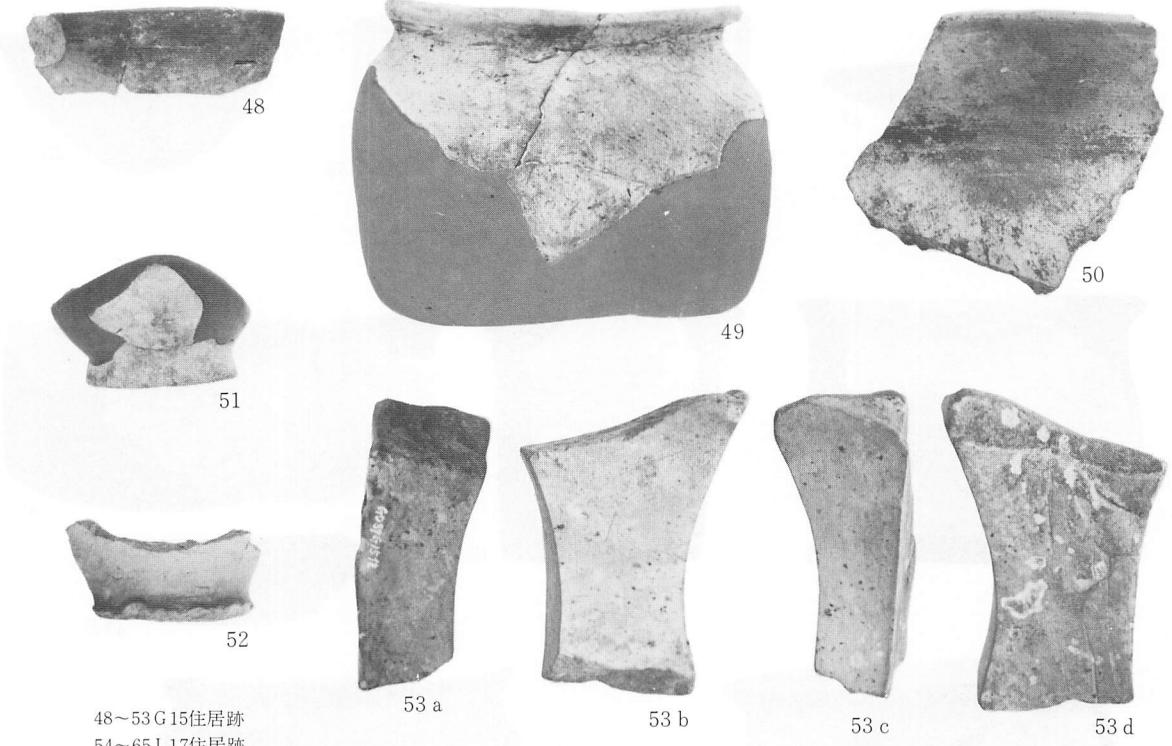
写真図版55 G 12住居跡(遺物)



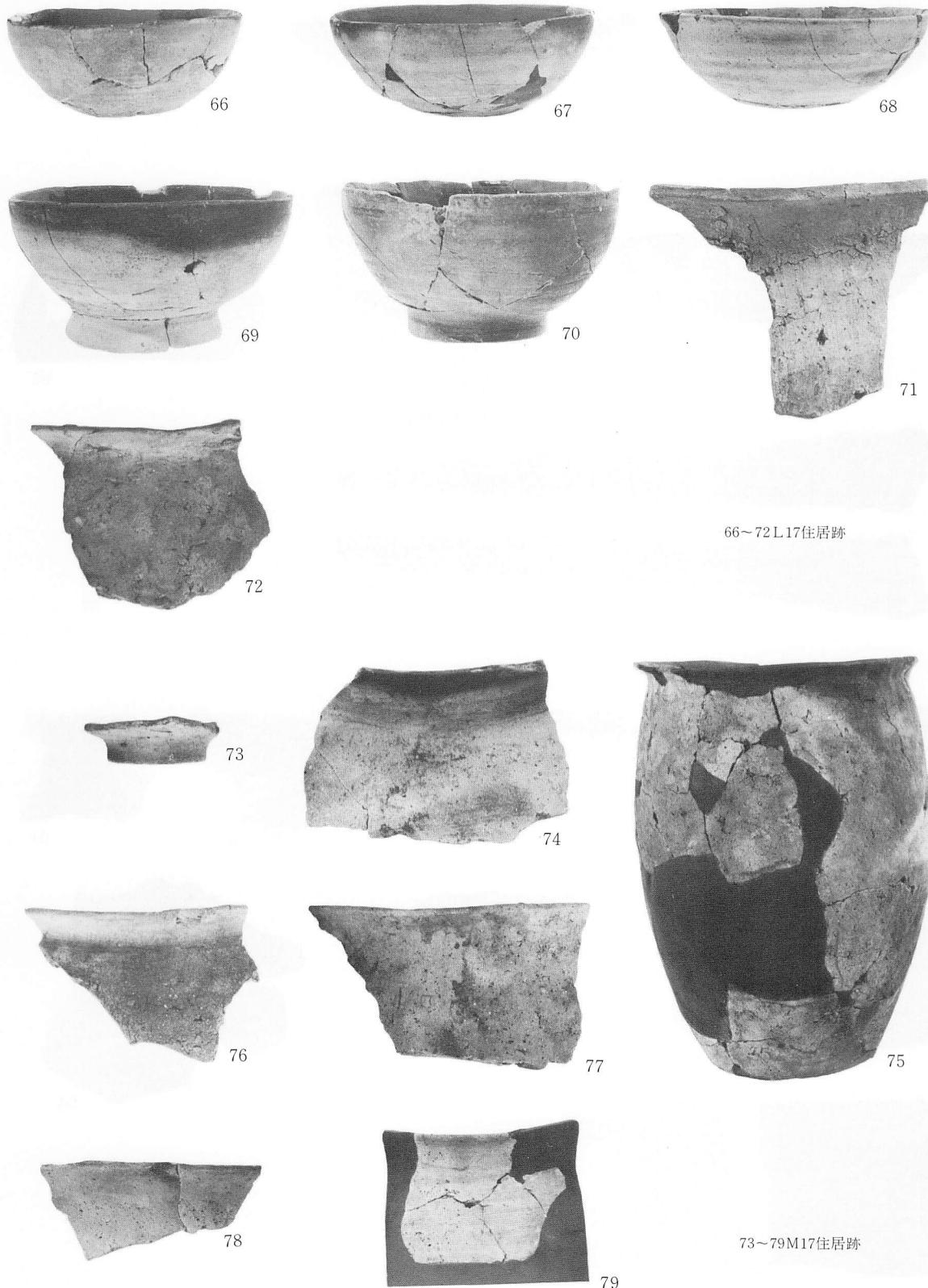
写真図版56 E 13住居跡(遺物)



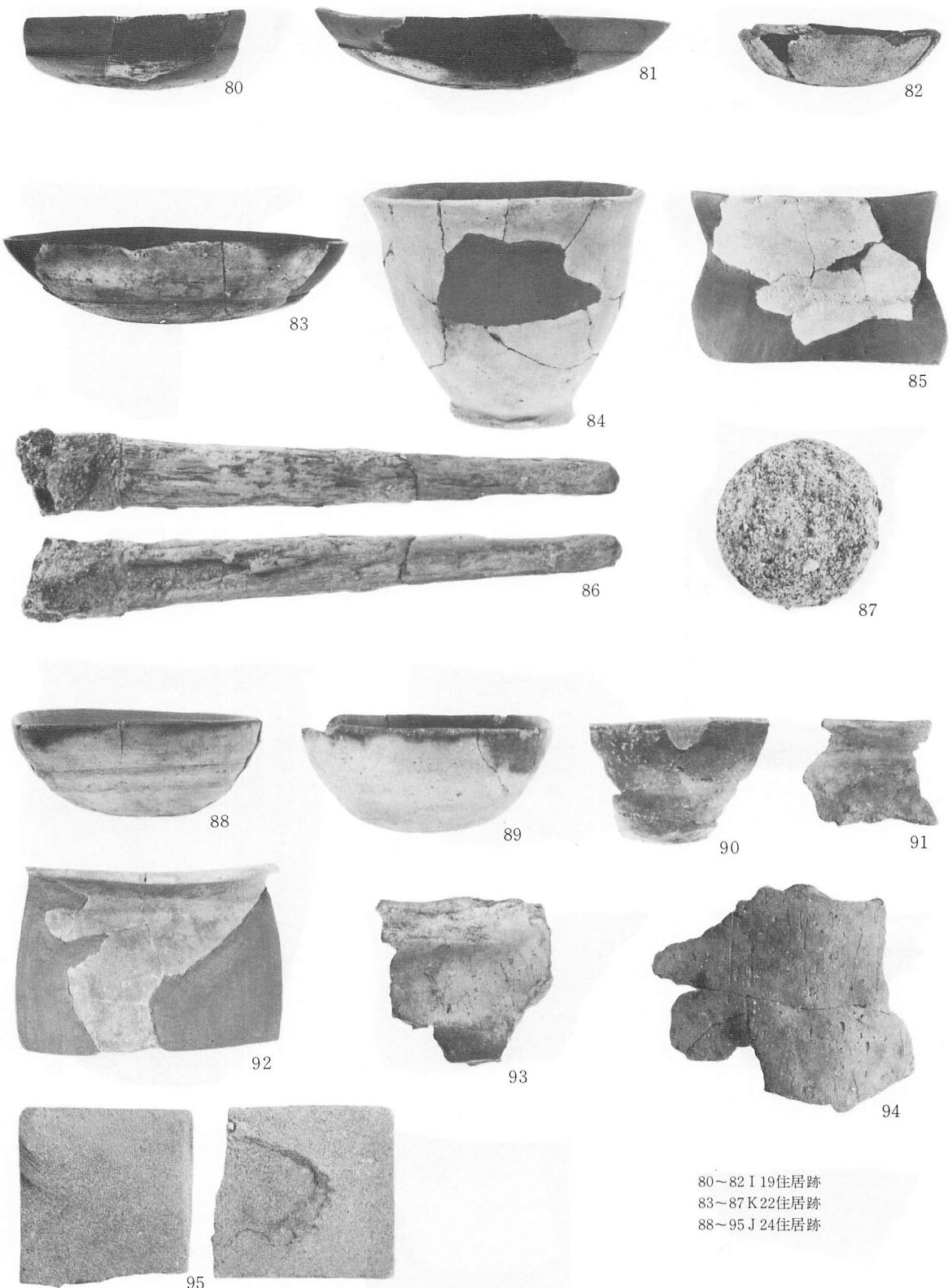
写真図版57 J13住居跡(遺物)



写真図版58 G15・L17住居跡(遺物)



写真図版59 L17・M17住居跡(遺物)

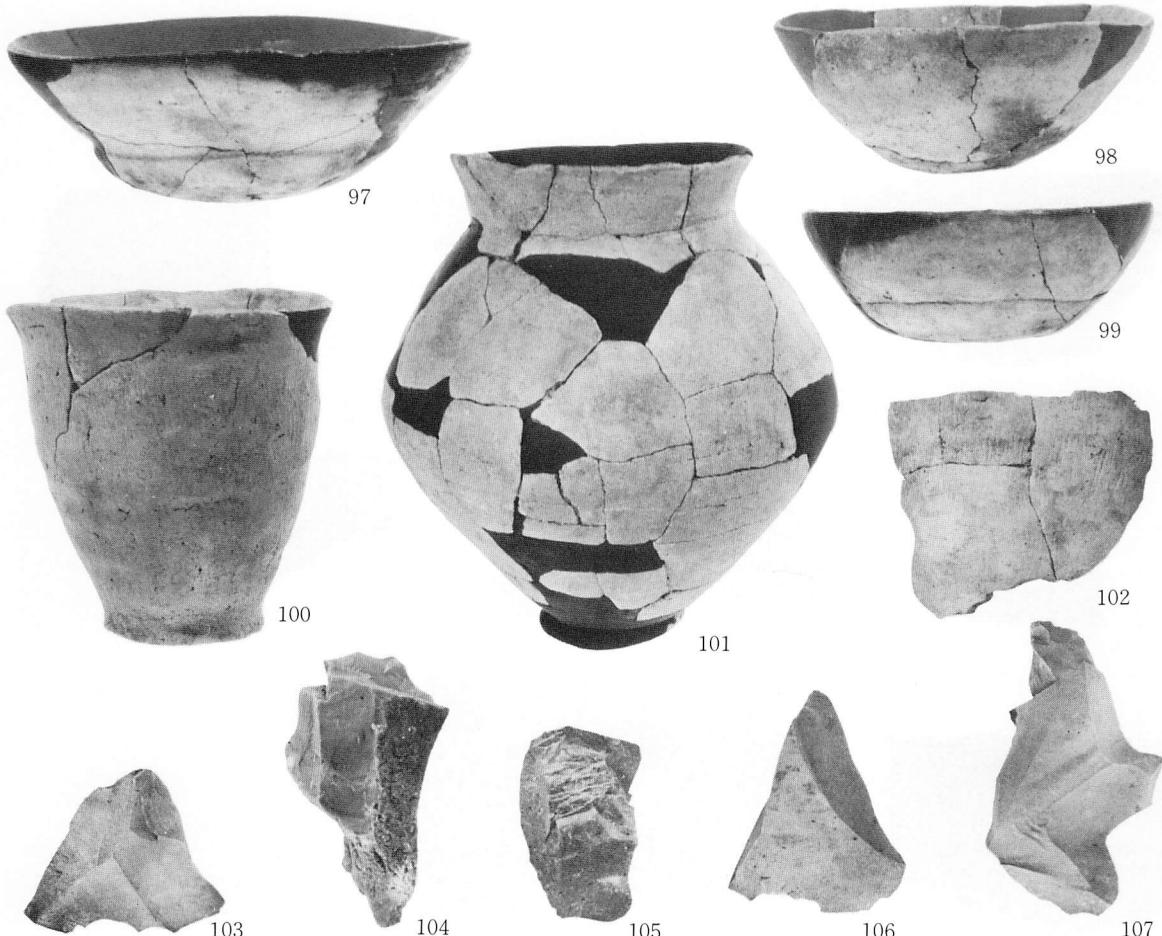


80~82 I 19住居跡  
83~87 K 22住居跡  
88~95 J 24住居跡



96 J 24住居跡  
97~107 L 25住居跡

96



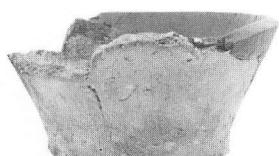
写真図版61 J 24・L 25住居跡(遺物)



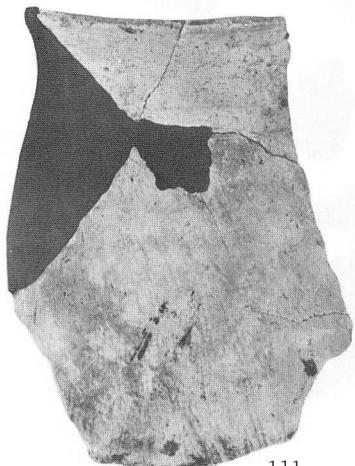
108



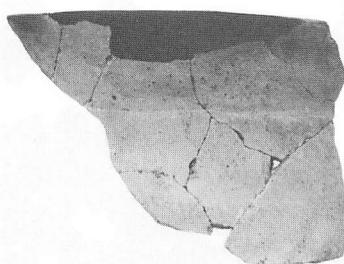
109



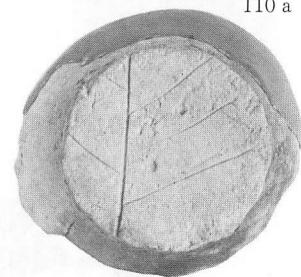
110 a



111

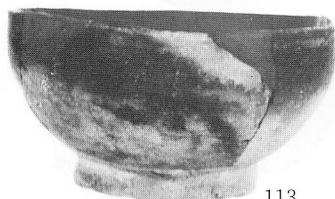


112

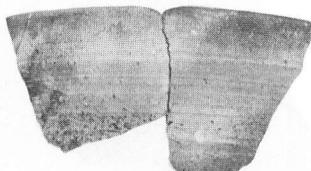


110 b

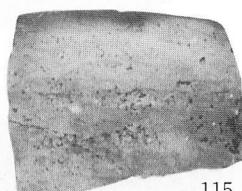
108~112 N26住居跡



113



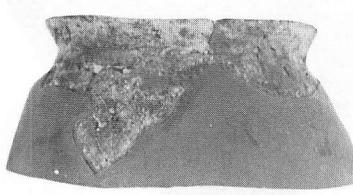
114



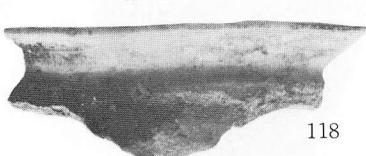
115



116



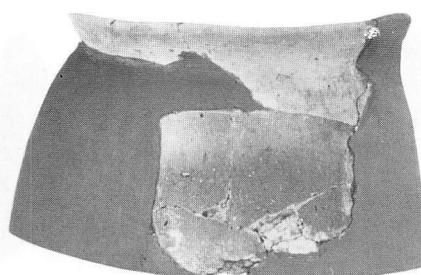
117



118



119



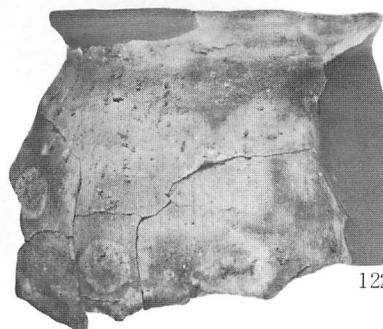
120

113~120 I 27住居跡

写真図版62 N 26・I 27住居跡(遺物)



121



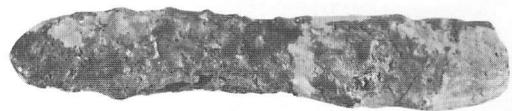
122



123



124



125

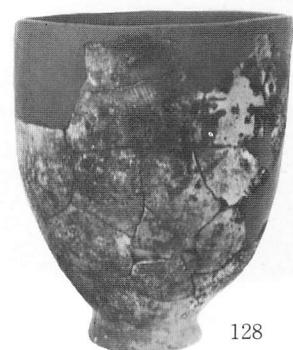
121~125 K 27住居跡



126



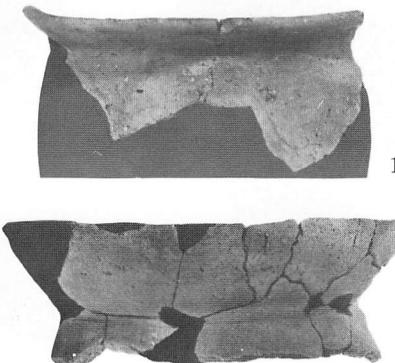
127



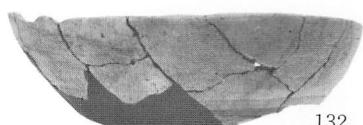
128



129



130



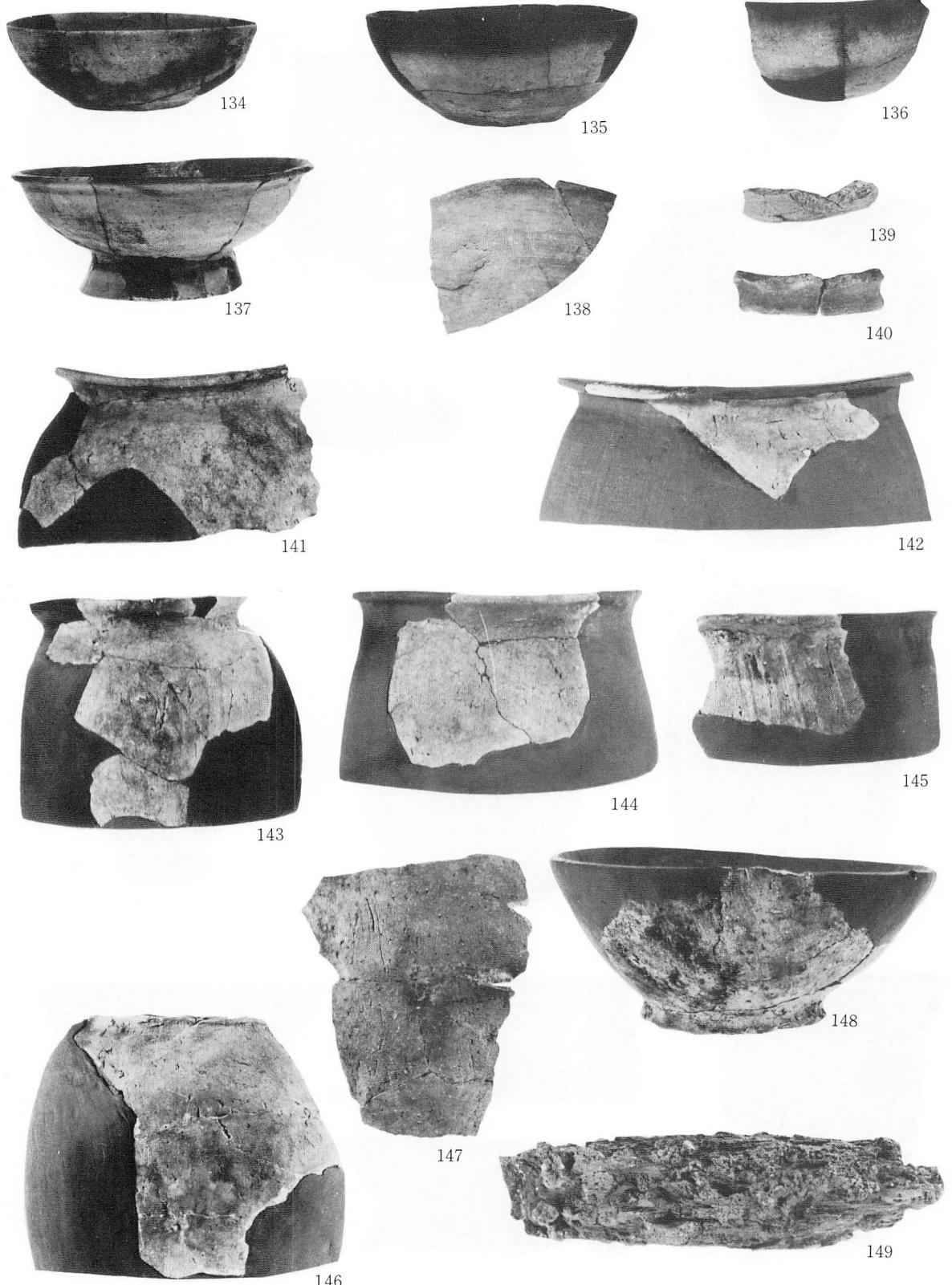
132



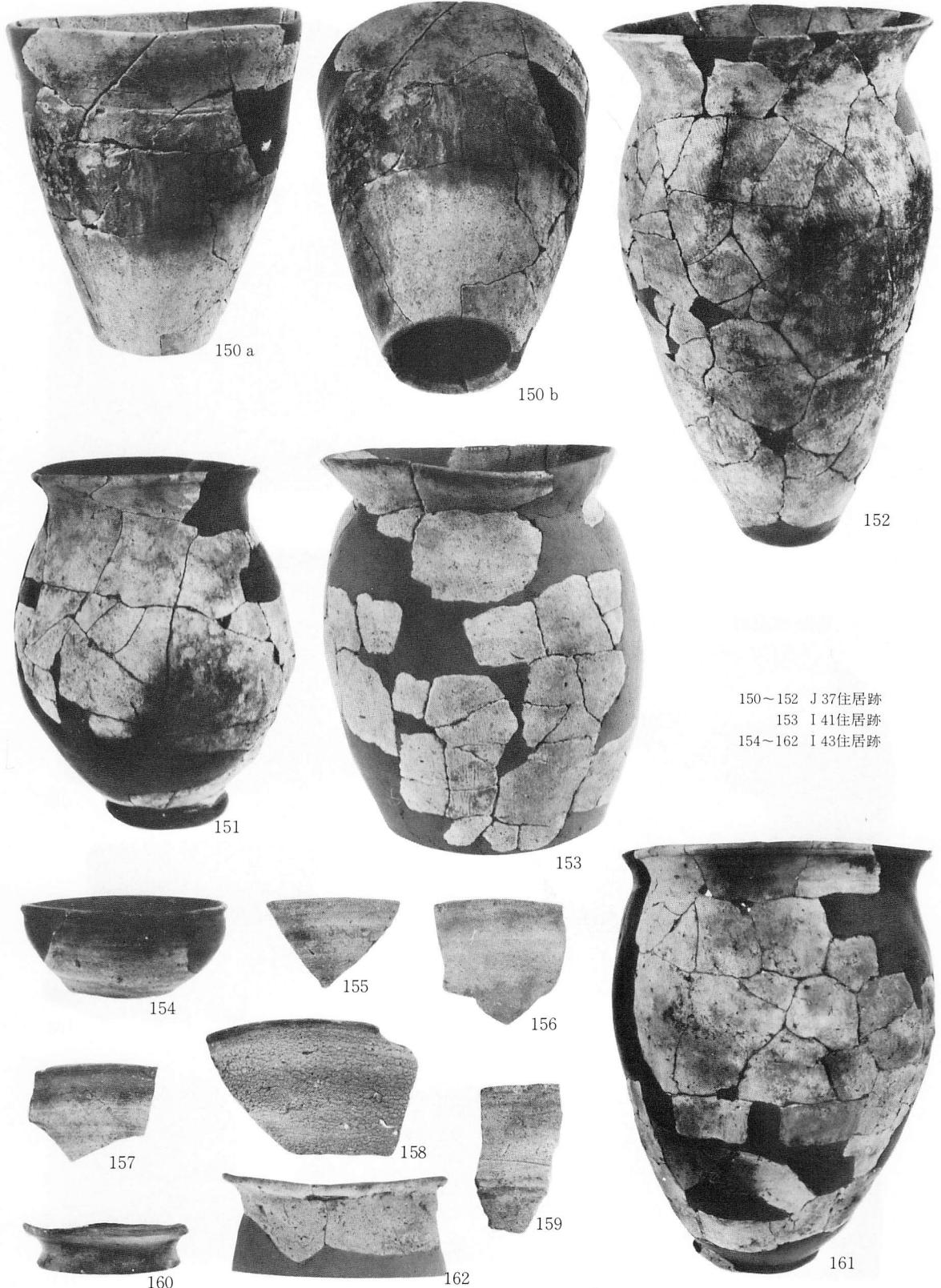
133

126~133 J 28住居跡

写真図版63 K 27・J 28住居跡(遺物)



写真図版64 L 28住居跡(遺物)



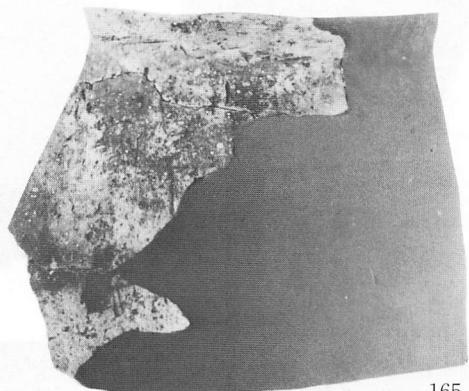
写真図版65 J 37・I 41・I 43住居跡(遺物)



163



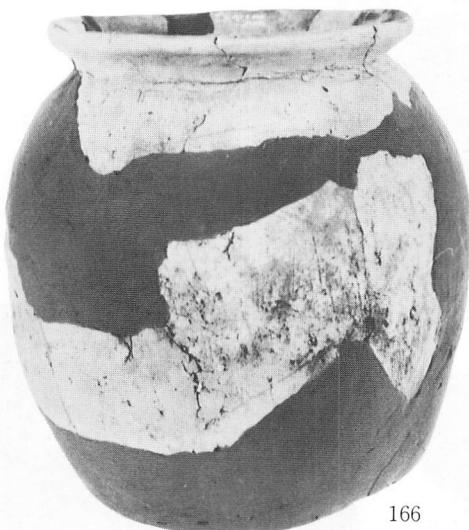
164



165

163 I 45住居跡

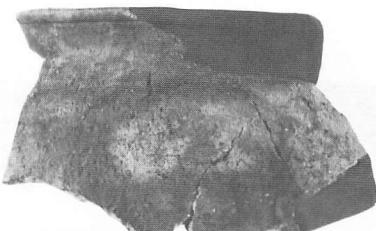
164~171 G 47住居跡



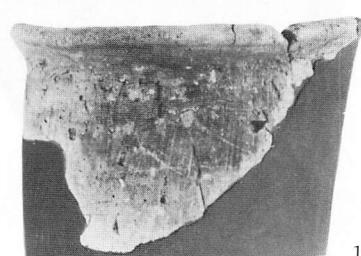
166



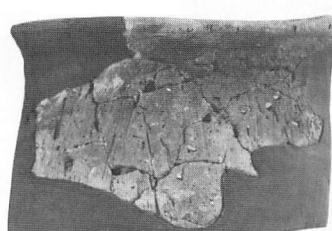
167



168



169

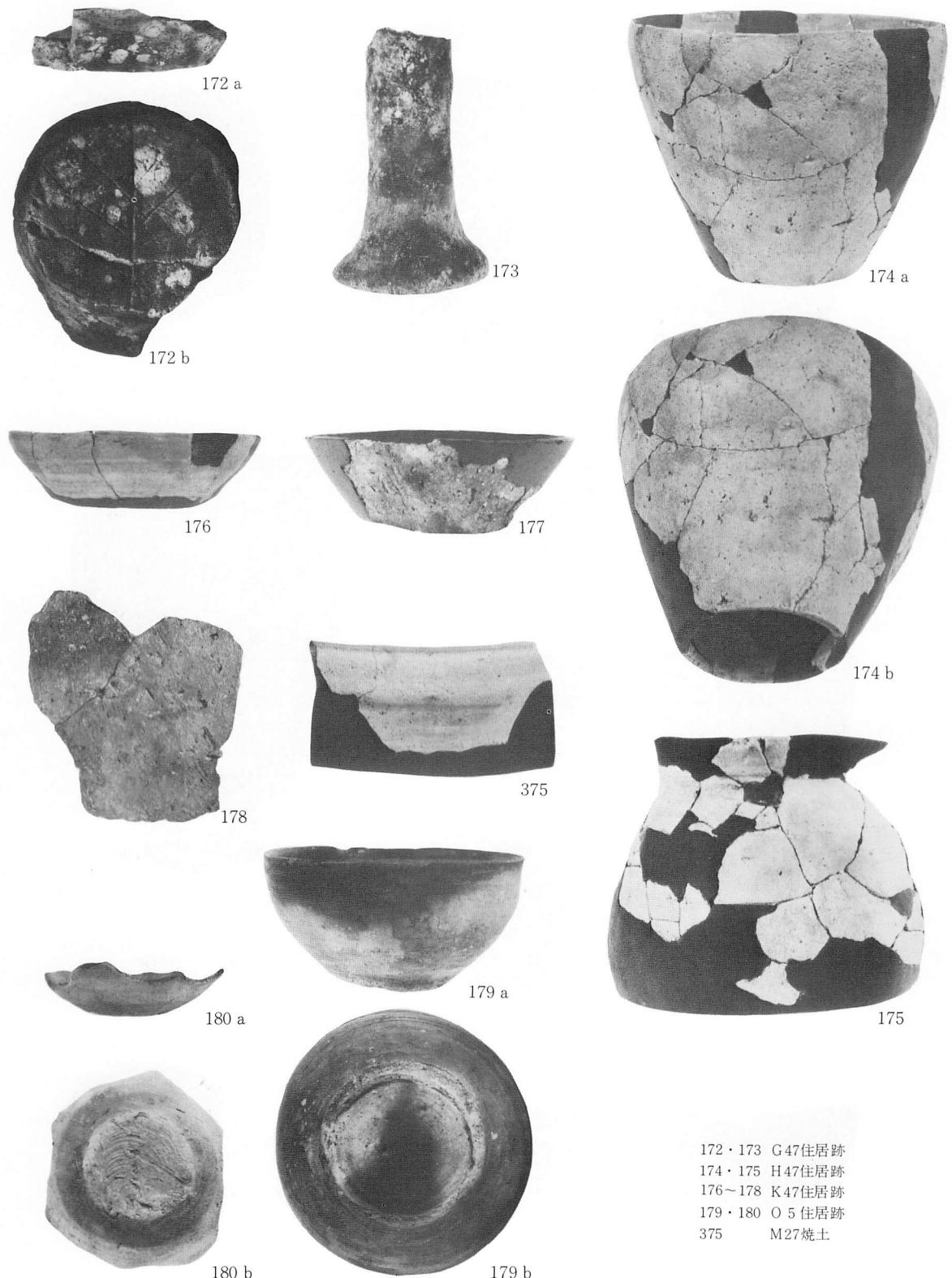


170



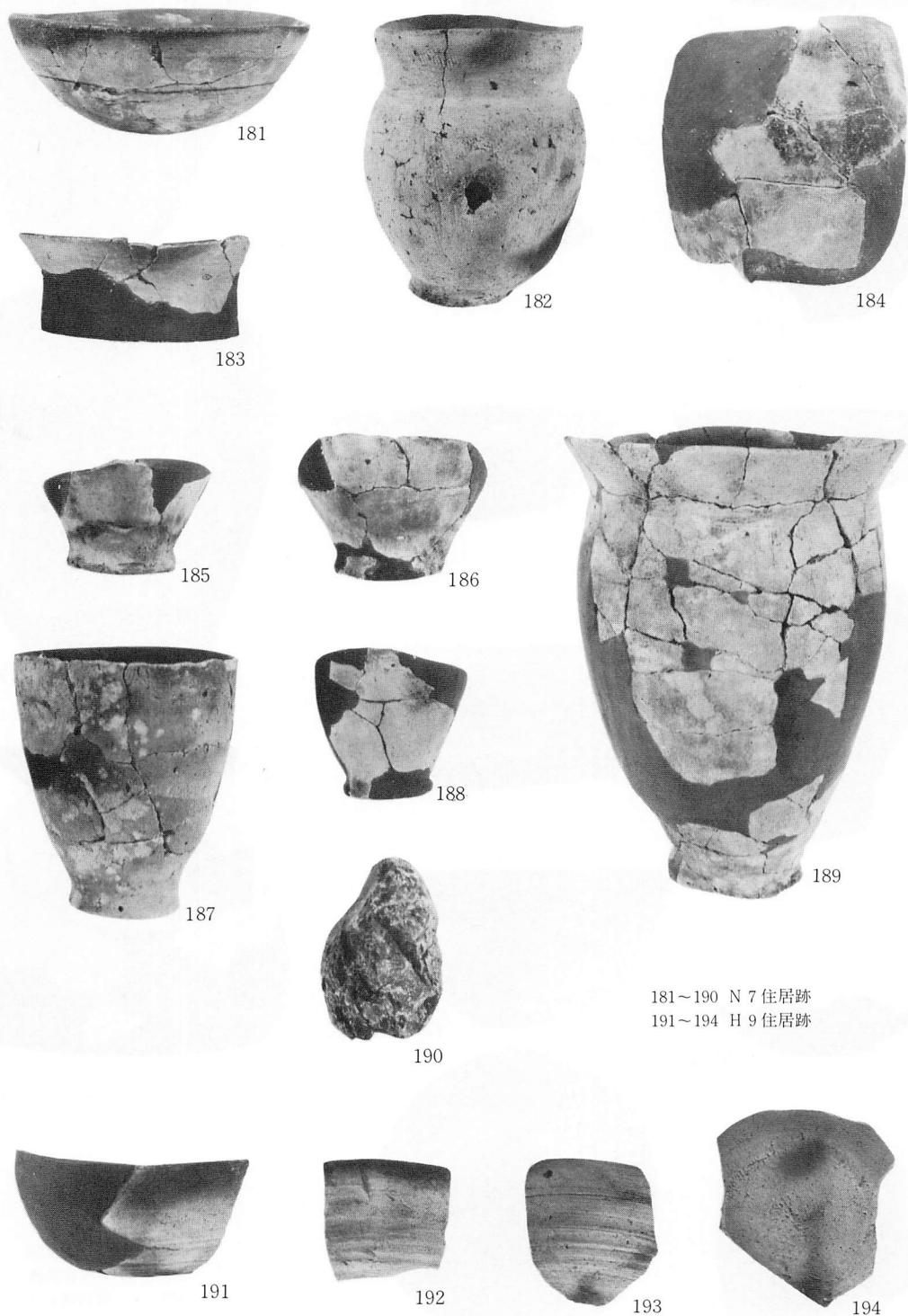
171

写真図版66 I 45・G 47住居跡(遺物)

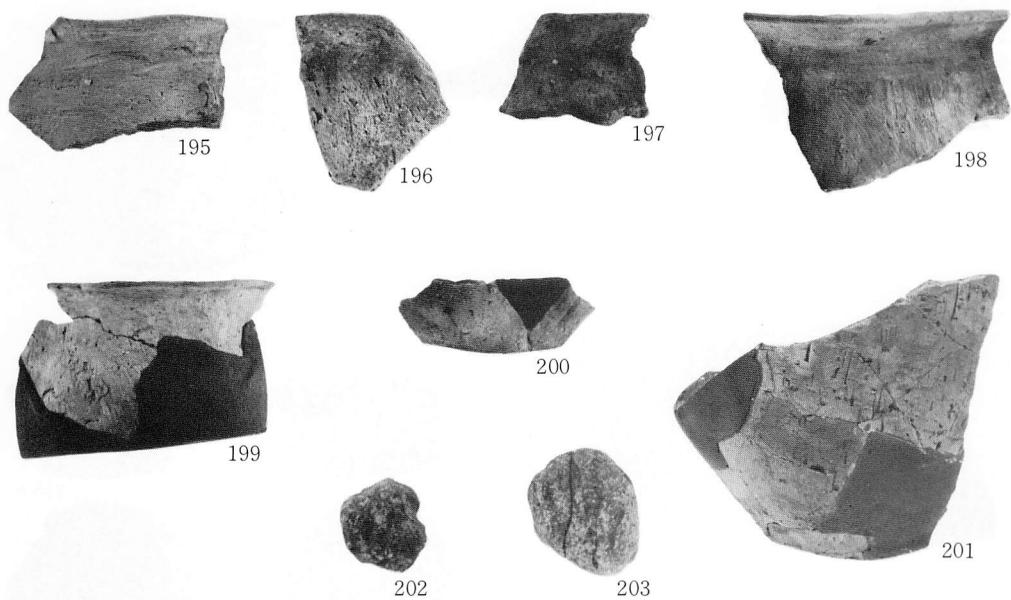


172・173 G 47住居跡  
 174・175 H 47住居跡  
 176～178 K 47住居跡  
 179・180 O 5住居跡  
 375 M 27焼土

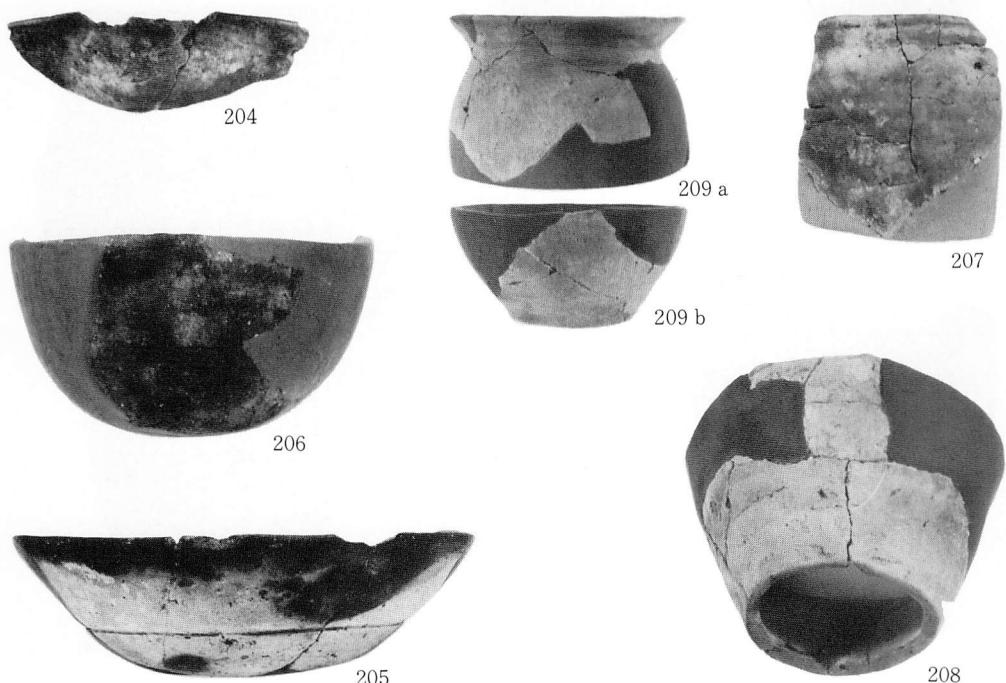
写真図版67 G 47・H 47・K 47・O 5住居跡他(遺物)



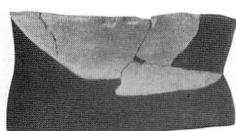
写真図版68 N 7・H 9 住居跡(遺物)



195~203 H 9 住居跡  
204~209 J 9 住居跡



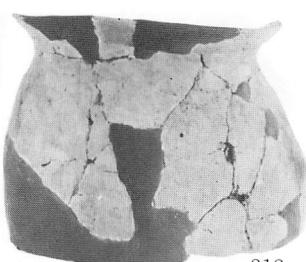
写真図版69 H 9・J 9 住居跡(遺物)



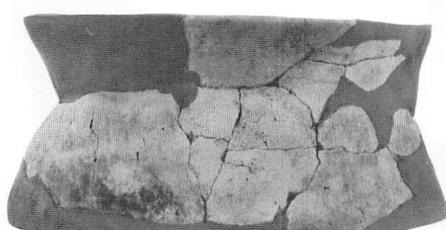
210



211



212



213



214 a



215 a



214 b



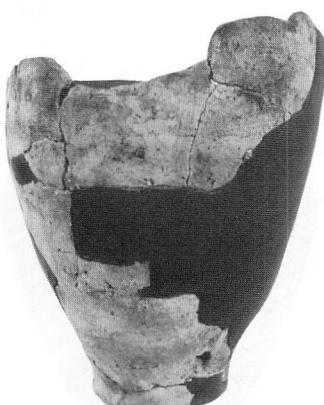
215 b



216



217

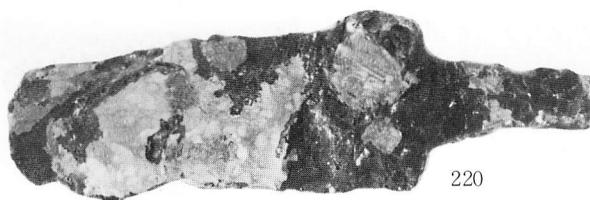


218



219

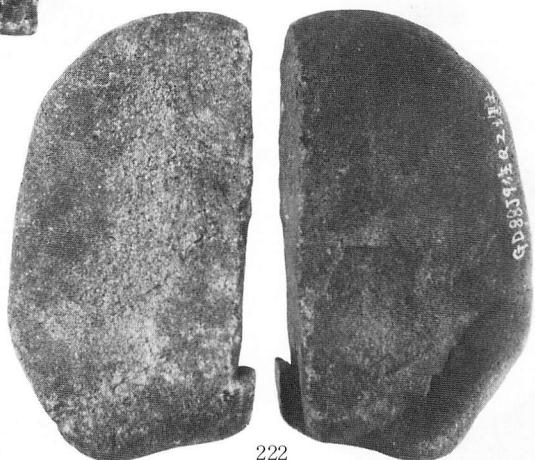
写真図版70 J 9 住居跡(遺物)



220



221



222



224



225



226



223

写真図版71 J 9 住居跡(遺物)



227



228



229



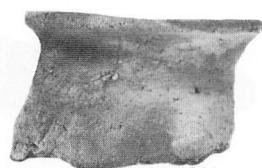
230



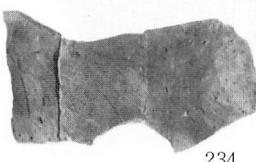
231



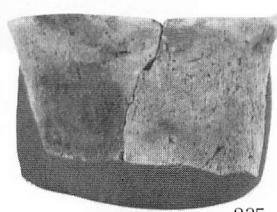
232



233



234



235

227～235 L 9 住居跡

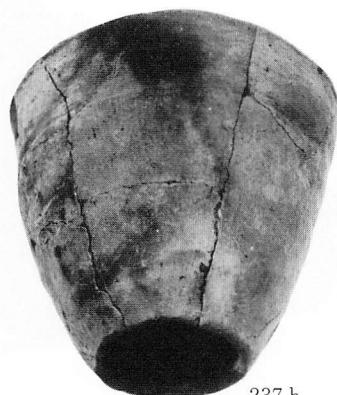
236～238 M 10 住居跡



236



237 a



237 b

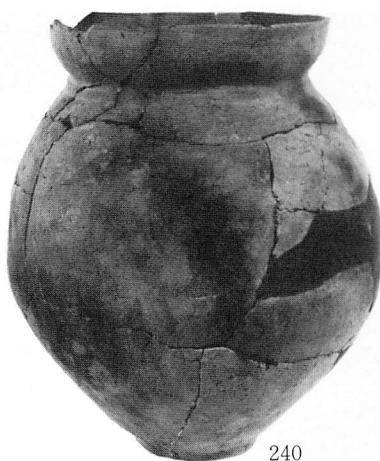


238

写真図版72 L 9・M 10 住居跡(遺物)



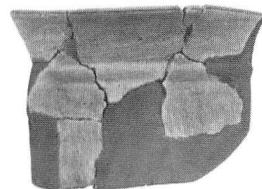
239



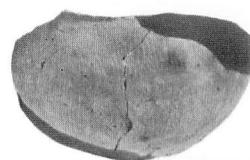
240



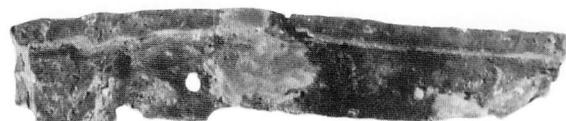
241



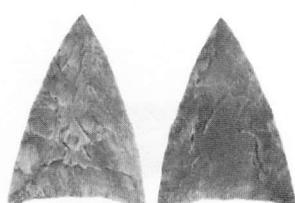
242



243



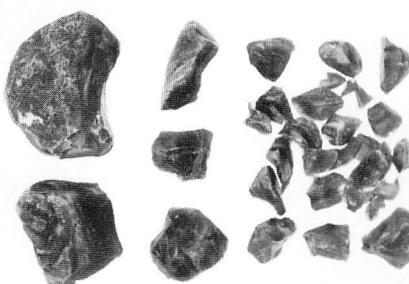
244



245



246



247

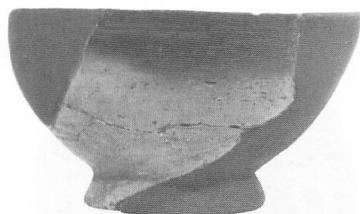
写真図版73 M10住居跡(遺物)



248 a



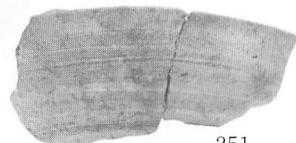
249



250



248 b



251



252



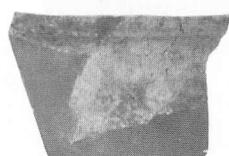
253



254



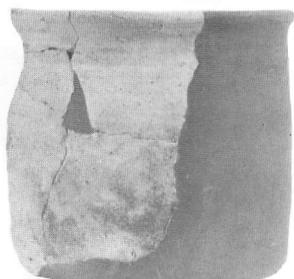
255



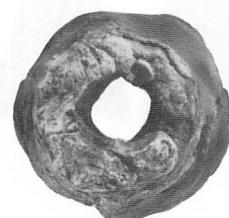
256



257



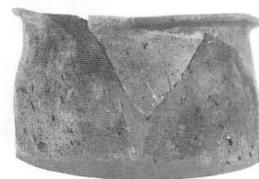
258



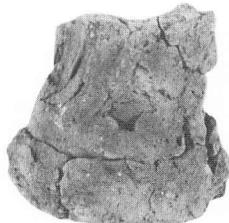
261 a



259

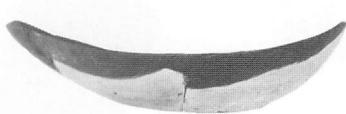


260



261 b

写真図版74 N10住居跡(遺物)



262



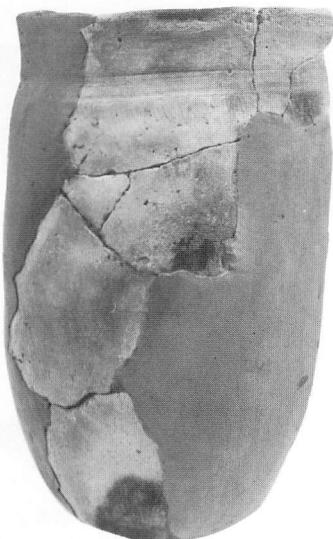
263



264



265



266



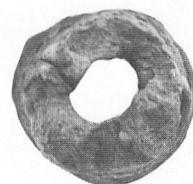
267



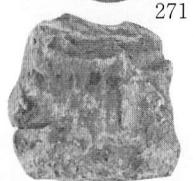
268



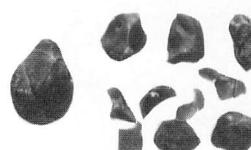
269



271 a



271 b



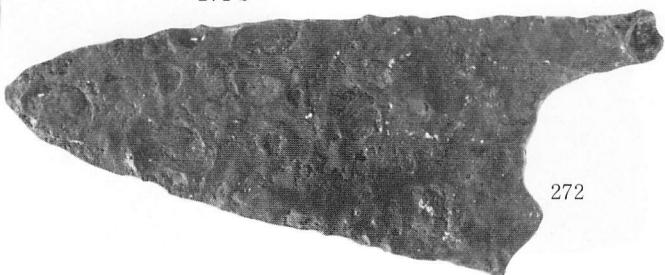
273



274

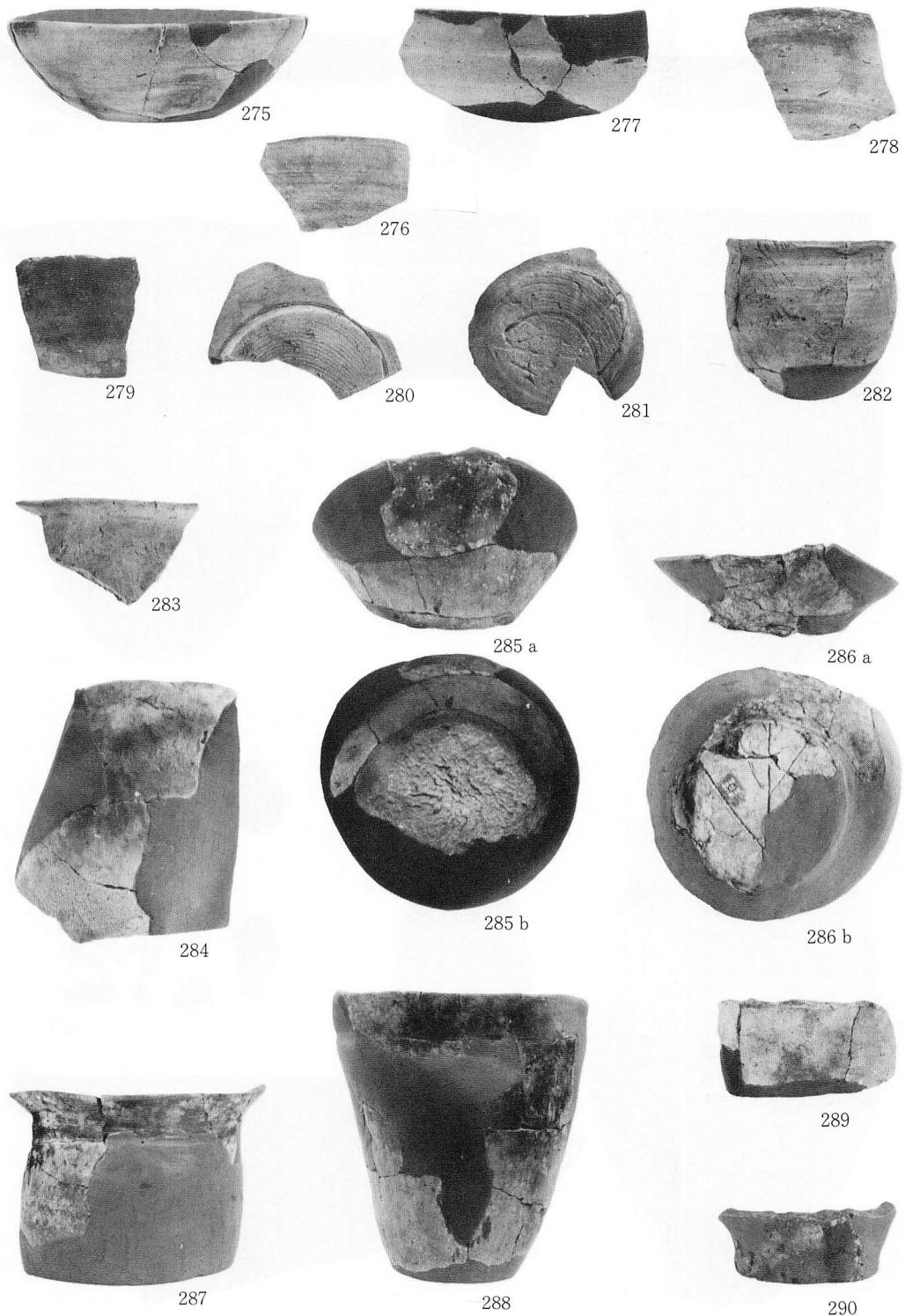


270

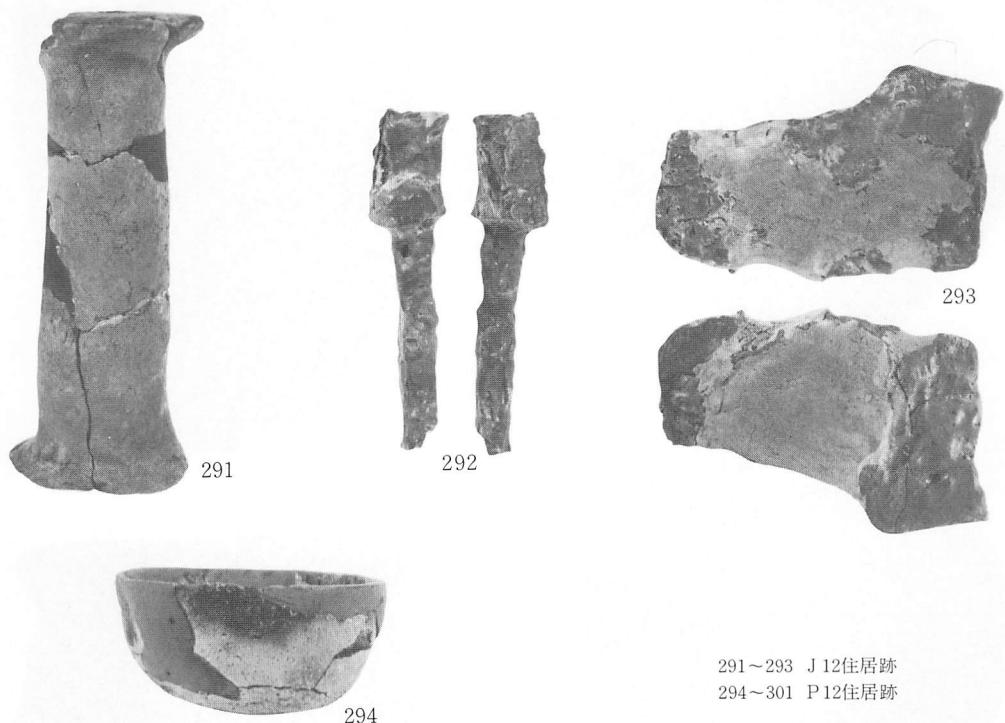


272

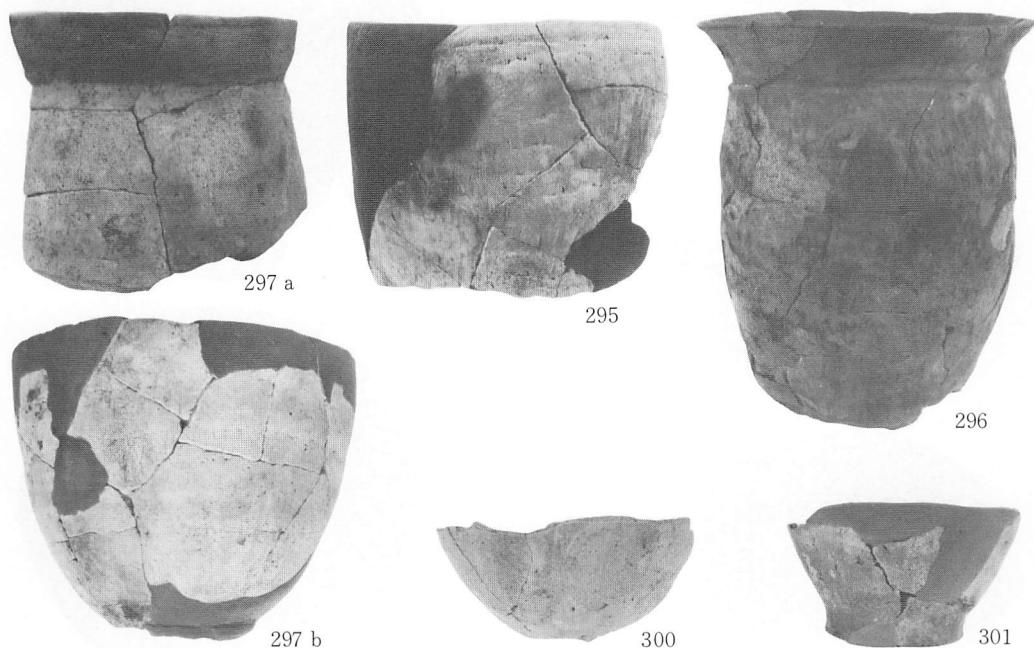
写真図版75 QII住居跡(遺物)



写真図版76 J12住居跡(遺物)



291～293 J 12住居跡  
 294～301 P 12住居跡



写真図版77 J 12・P 12住居跡(遺物)



298 a



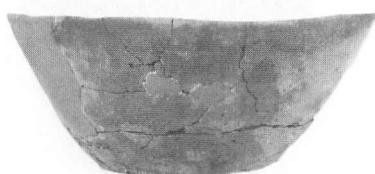
299



298 b



303 a



302 a



302 b

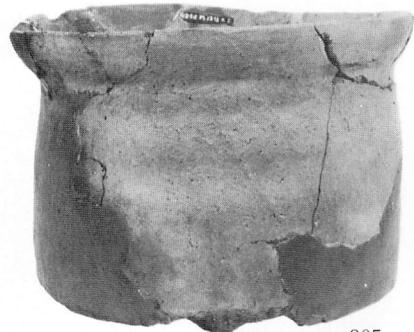


303 b

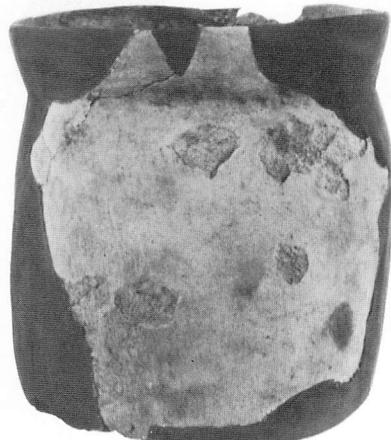
写真図版78 P12・M13住居跡(遺物)



304



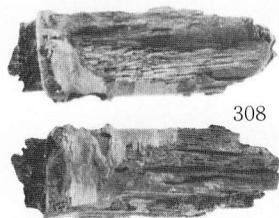
305



306



307



308



309 a



309 b



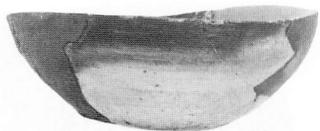
310

304～308 M13住居跡  
309・310 N13住居跡

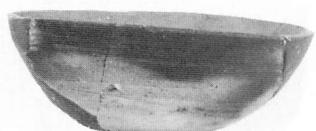
写真図版79 M13・N13住居跡(遺物)



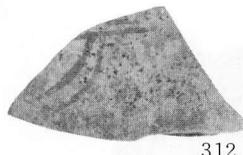
311



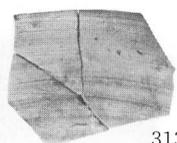
314



316



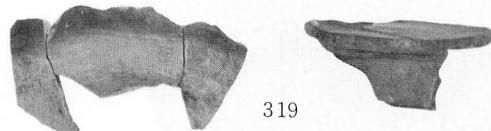
312



313



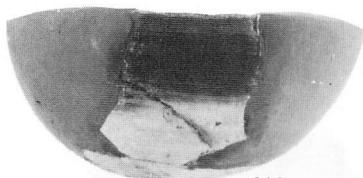
317



319



315 a



318 a



315 b



318 b

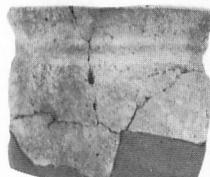
写真図版80 N 13住居跡(遺物)



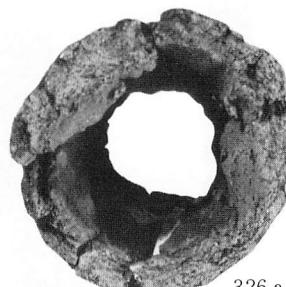
320



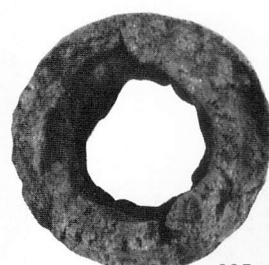
321



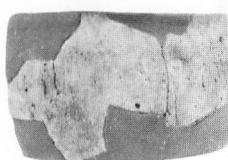
322



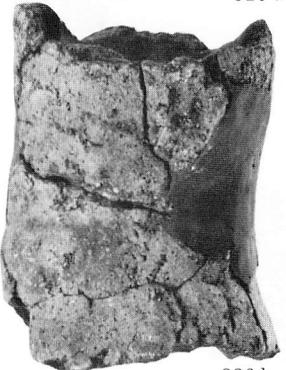
326 a



327 a



323



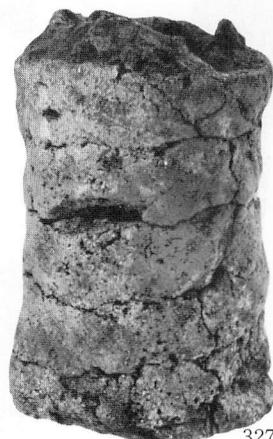
326 b



324



325



327 b

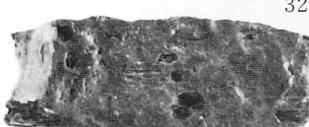
写真図版81 N13住居跡(遺物)



328



329



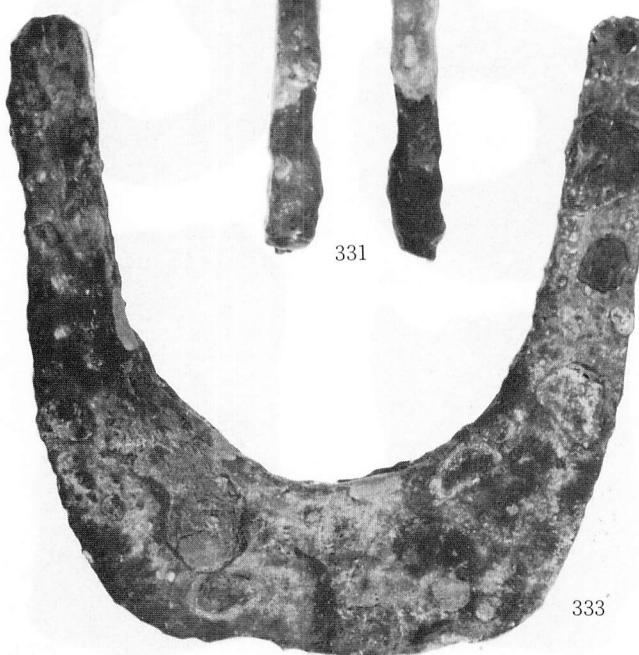
330



331

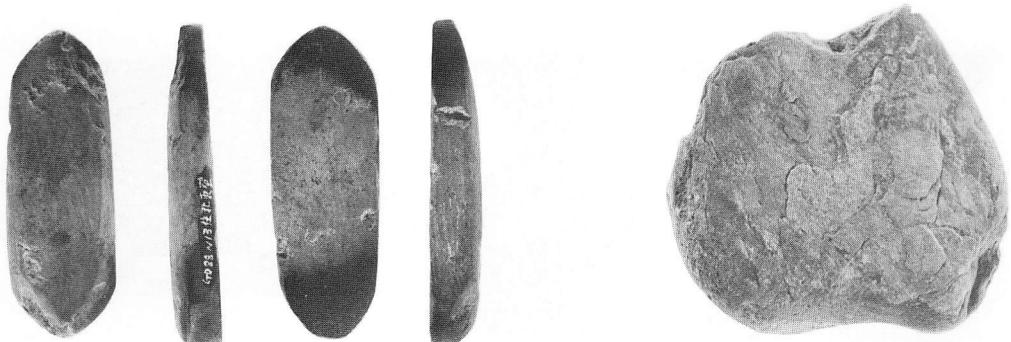


332



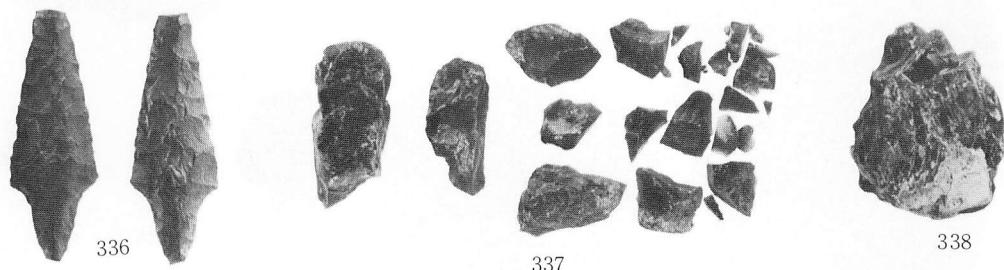
333

写真図版82 N13住居跡(遺物)



334

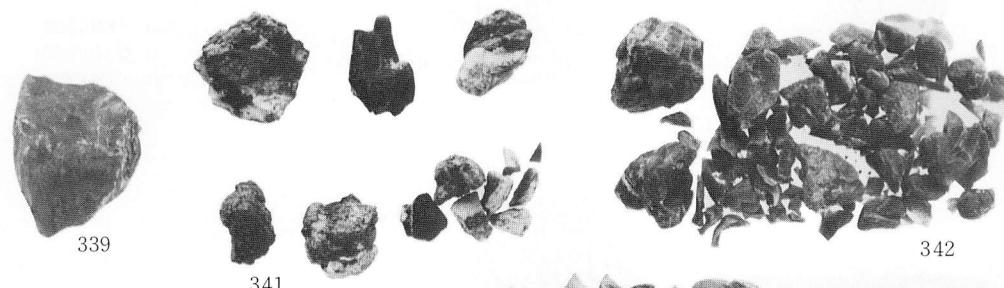
335



336

337

338



339

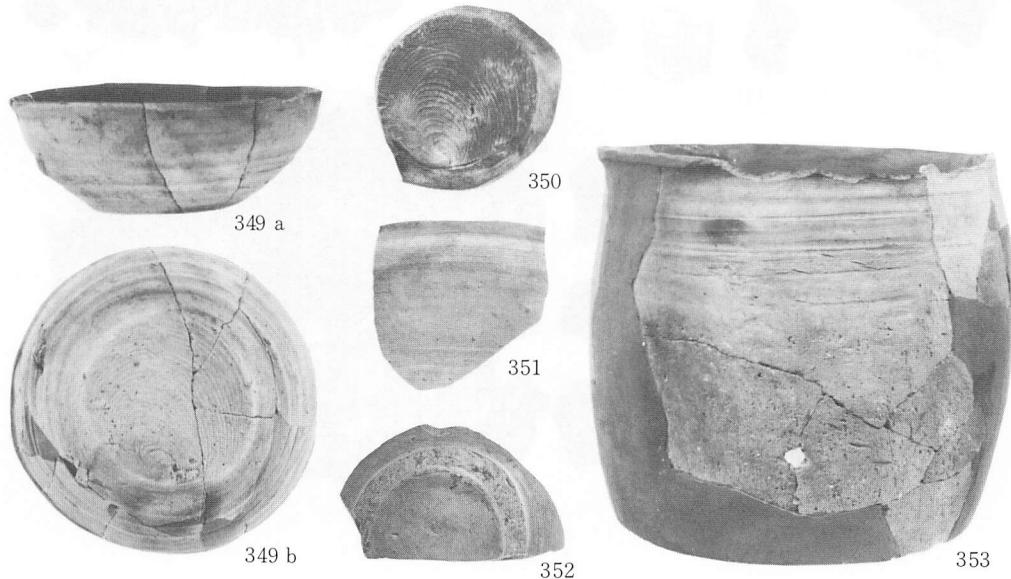
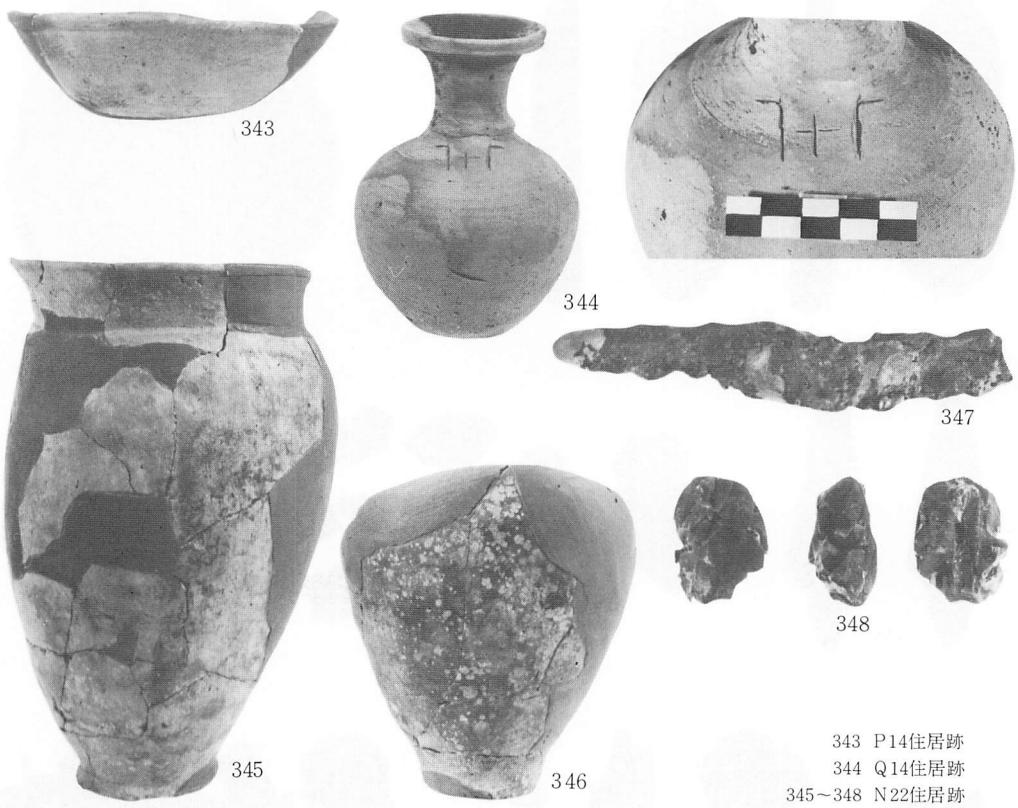
341

342



340

写真図版83 N13住居跡(遺物)



写真図版84 P14・Q14・N22・M23住居跡(遺物)



354



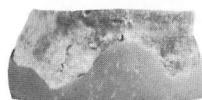
355 a



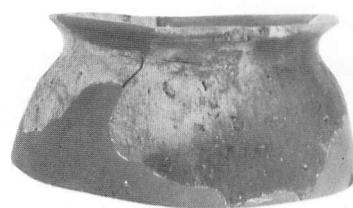
355 b



356



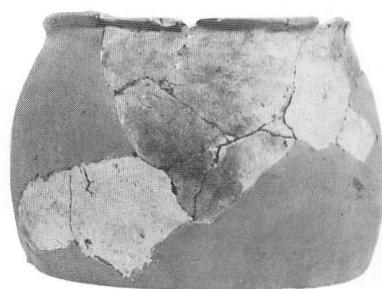
357



359

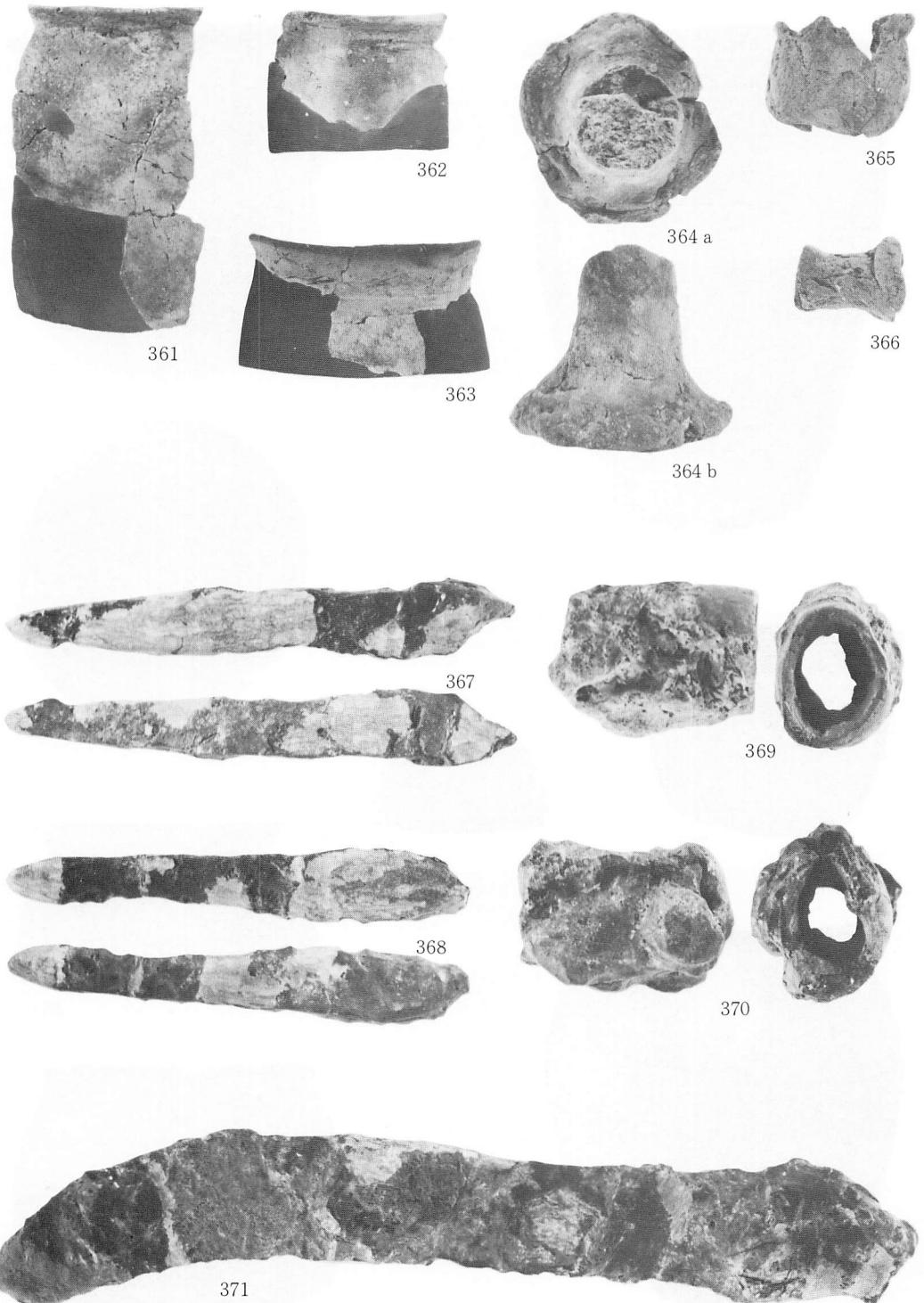


358

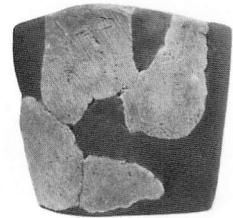


360

写真図版85 M23住居跡(遺物)



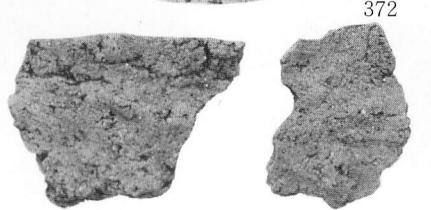
写真図版86 M23住居跡(遺物)



373

374

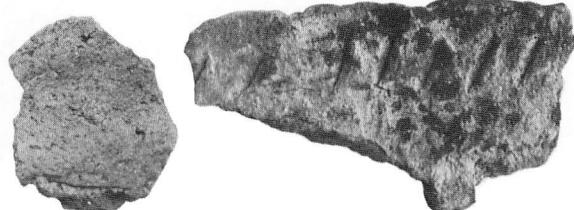
372 M23住居跡  
373・374 M24住居跡



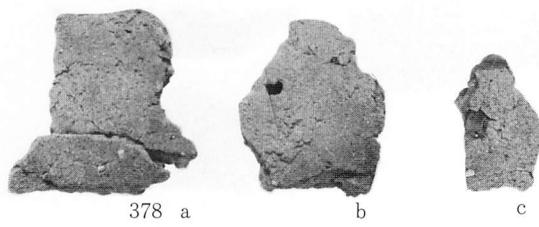
376 a

b

c



377



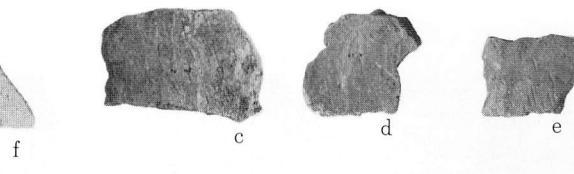
378 a

b

c

379 a

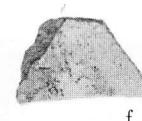
b



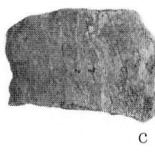
d



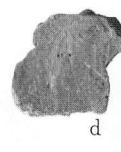
e



f



c



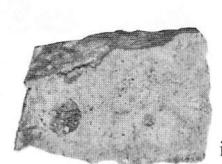
d



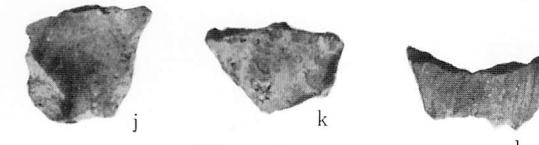
e



g



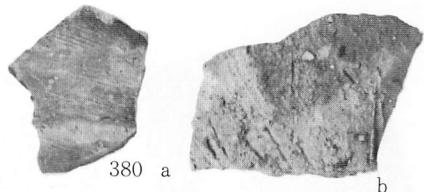
i



j

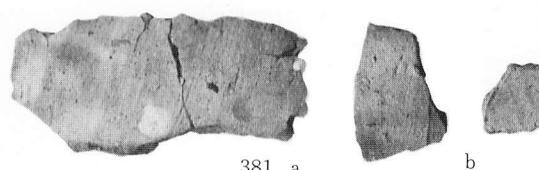
k

l



380 a

b



381 a

b



c

376 F10—1 土坑

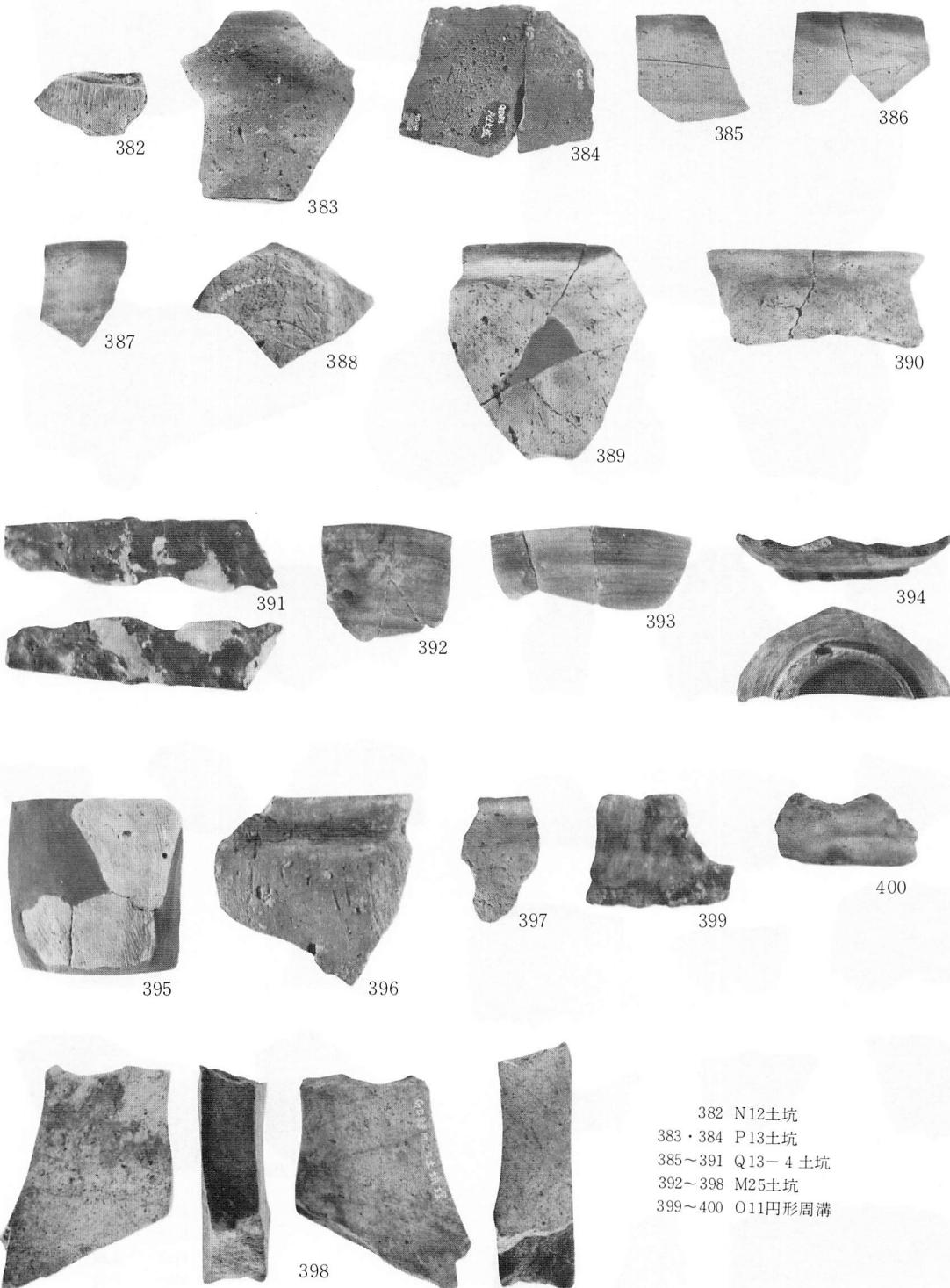
377・378 F13 土坑

379 H13 土坑

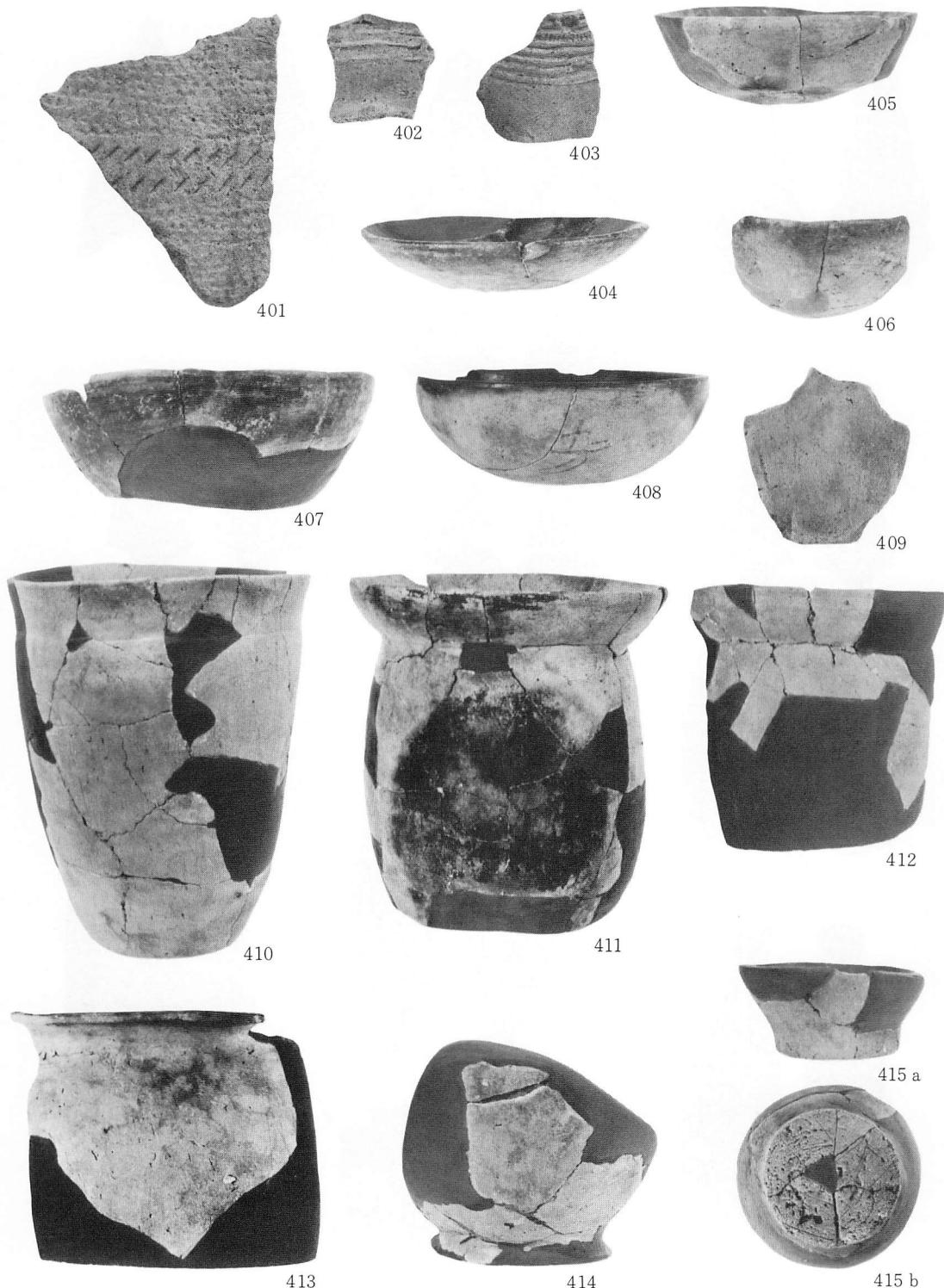
380 M26 土坑

381 L28 土坑

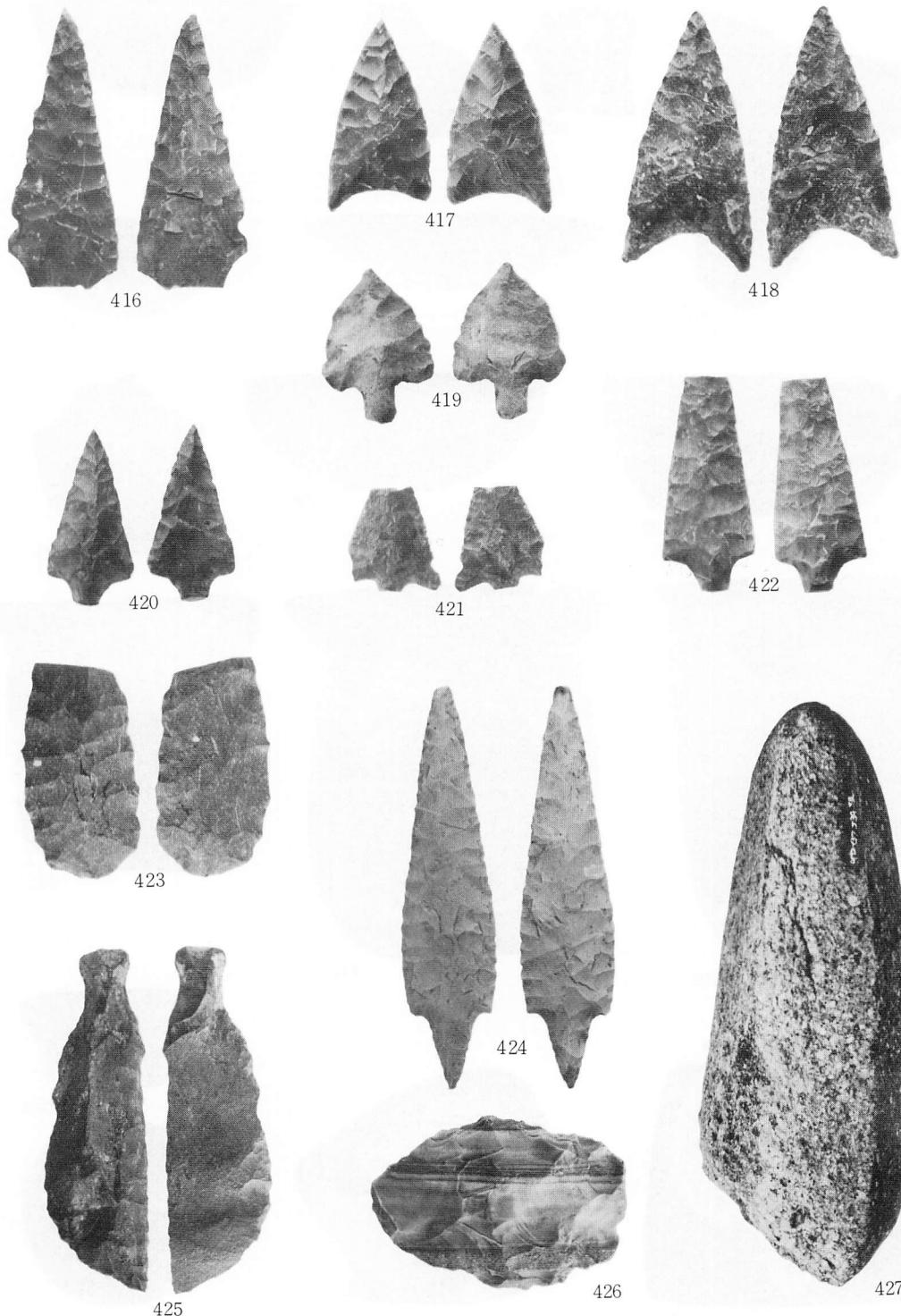
写真図版87 M23・M24住居跡・土坑(遺物)



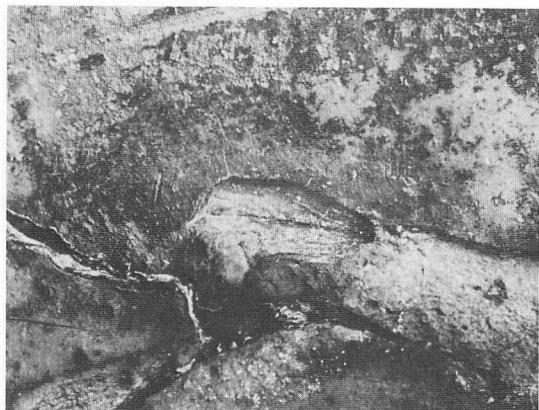
写真図版88 土坑・円形周溝(遺物)



写真図版89 遺構外出土遺物



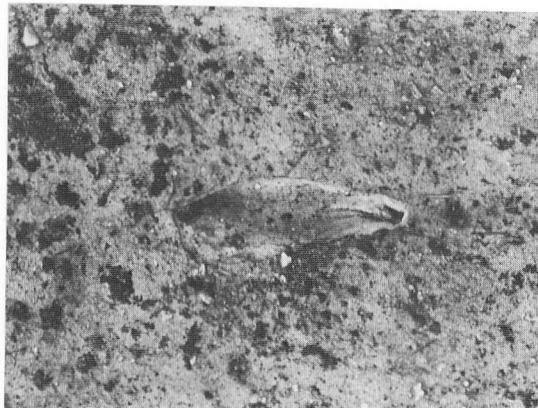
写真図版90 遺構外出土遺物



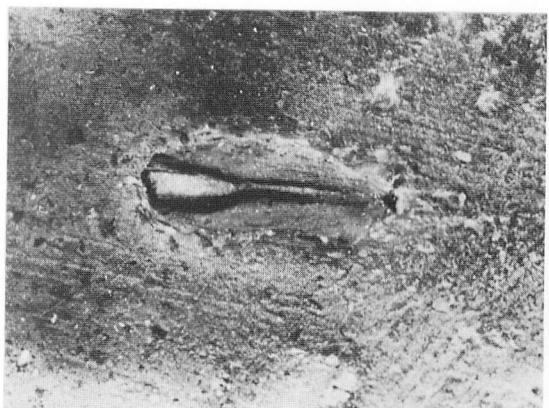
58—1



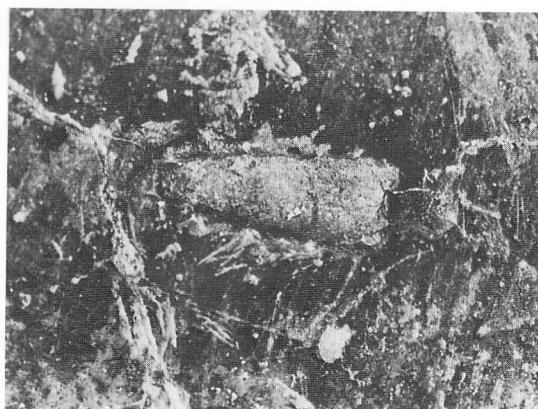
58—2



58—3



59—1



62—1



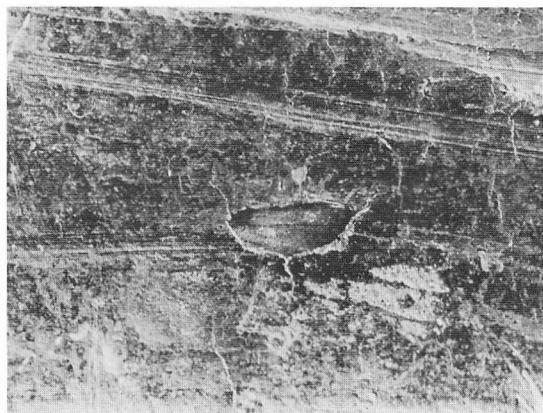
62—2

写真図版91 土師器の種子痕(1)

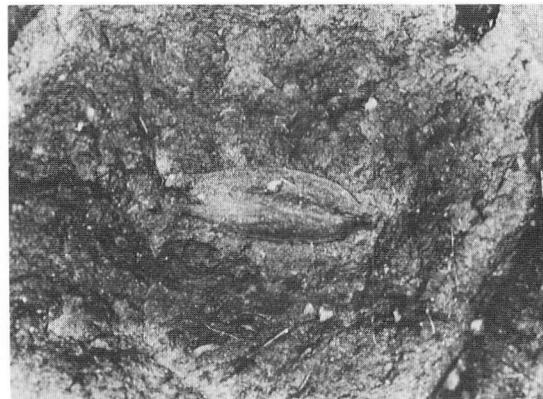
写真は4倍



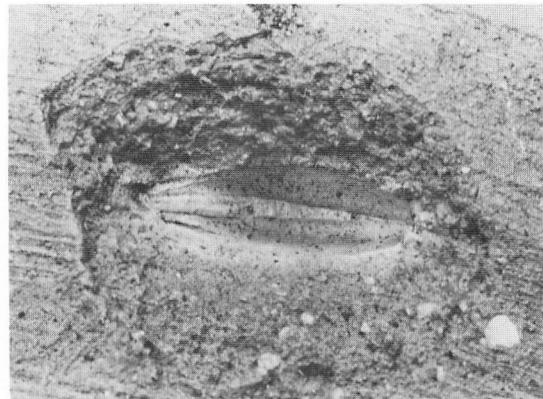
62—3



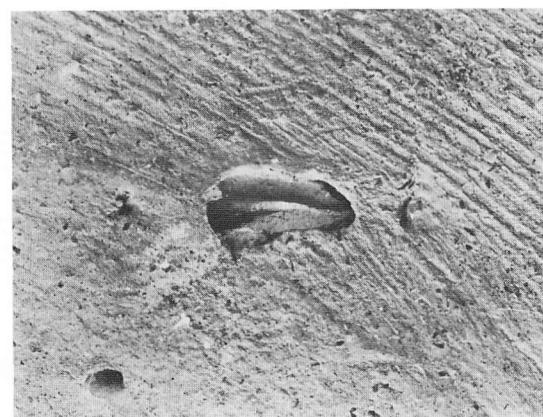
62—4



62—5



62—6



62—7



62—8

写真図版92 土師器の種子痕(2)

写真は4倍

# 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所長 及川昌二

副所長 鎌田良悦

## 〔管理課〕

管理課長(兼) 鎌田良悦

課長補佐 伊藤吉郎

主事 阿部隆広

嘱託 吉田一男

運転技能士 佐藤春男

## 〔調査課〕

調査課長 昆野靖

課長補佐 佐々木嘉直

主任文化財専門調査員 小田野哲憲

〃 三浦謙一

〃 工藤利幸

〃 高橋与右エ門

〃 平井進

〃 中村良一

〃 中川重紀

文化財専門調査員 藤村敏男

〃 斎藤實

〃 光井文行

〃 佐瀬隆

〃 斎藤博司

〃 東海林隆幹

〃 佐々木弘

〃 川村均

〃 鈴木貞行

文化財専門調査員 遠藤修

斎藤邦雄

高橋義介

佐々木信一

小原真一

村上修

酒井宗孝

菊地哉裕

相原伸世

及川靖世

女鹿文雄

濱田宏涉

及川雅之

星下宏堅

森高橋

## 〔資料課〕

資料課長 高橋薰

主任文化財専門調査員 田鎖寿夫

---

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第138集  
源道遺跡発掘調査報告書

国道45号久慈バイパス関連遺跡発掘調査

印刷 平成元年 8月25日

発行 平成元年 8月30日

発行 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡11字高屋敷185

TEL (0196) 38-9001

印刷 株式会社 杜陵印刷  
〒020-01 盛岡市厨川四丁目2-6  
TEL (0196) 41-8000